岩波講座

日本語 12

日本語の系統と歴史

岩波書店

岩波講座
日本語
月報
12
1978年1月
第12巻付録

目次

岩波書店
東京都千代田区
一ツ橋2-5-5

たのしいかな 語源

亀井孝

一　アレクサンダ・フォン・フンボルトが当時においても稀少であったにちがいないオヤングーレンの日本文法をその出版地メキシコで手に入れて兄ヴィルヘルムへの土産にもちかえったことは、この書にまつわるひとつの逸話としてつとにわれわれの興味をそそるところであった。ただし、フンボルトの遠征はもとより学術調査をめざすものであったから、それとても、かれがいろいろと故国へもたらした資料の、じつは、その一つにすぎまい。ドイツローマン派の驍将フリートリヒ・シュレーゲルの『インド人の言語と智慧とについて』(一八〇八年刊)は比較文法ということばを初めて使ったことからもその名を言語学史にとどめる古典であるが、著者はそこに言語の類型論に一章をささげ、そのなかでアメリカの土語にふでをおよぼし、そのくだり(p.46)で資料をフンボルトからいろいろと借りえたことに謝辞をしたためている。それによると、フンボルトはオトミ族のことばの本をも持ちかえっていることがわかる。

頃はいまだ四月の半ばすぎであったが、みわたすかぎりの砂漠に点々ちらばって聚落をいとなまぬならいのオトミをたずねたとき、もえつくようにそこでわたくしの膚にふれたものは白く乾ききった自然のきびしさのみではなかった。オトミたちの生活はまずしさのきわみであった。かつて言語年代学について「可能性としては、それは、なにもアメリカ・インディアンの諸言語の研究を背景としなければ生れえないようなものではないとおもう。」(『日本語系統論のみち』p. 415)と書いたわたくしであるが、スウォデシュがこの方法をあみださざるをえなかったそのゆえんは、〃平沙万里 人煙を絶つ〃非情な環境をまのあたりにしてはじめて身にしみてわかったような気もする。

とはいうものの、A言語とB言語とのあいだに系統の関係がはたしてあるのかどうなのかいまだまったくその不明のばあいに、機能形態と音韻との対応をあずかって、もっぱらまず語彙そのものがわからことに迫ってゆくならば、たとい比較の俎上にのぼされる言語々々のその性格にかんがみていきおいそういう途をえらばざるをえないときにも、これがことの本質にとりどこまで有効か、これは、やはりそれとして質されなければならない。どのみち系統論のタームズにおける語形の同一(identity)の、この可能性をあらかじめ下敷きにすえないかぎ

り、AとBとの双方からそれぞれに一対の単語をたがいにひきあててみても、これは言語年代学にとってもいたずらである。言語年代学が語源をひとつにしないついにまなこをそそぐこの逆説はあからさまである。要するに系統論にとってなにより大切なのは〃語源〃である。そして、このことは〃語源の研究〃が言語間の系統をただちに解明へみちびくの謂いではない。借用例をはじめ系統の解明に直接には無効とおぼしき材料を語源の探究を通じて洗っておくことは、まことに系統論にとって *sine qua non* である。

二-一　いったい、日本語の、その、あるかたち(語形)について、これのみなもと——所与のかたちがそこにおちつくにいたる径路から逆にさかのぼってたどりうるその原形——がすでに日本語のなかで明らかになって、思わぬ起源への還元さえもがここにまことしやかになるならば、それの系統論への資料としての価値は、またおのずからに明らかであろう。いな、そういうばあいの、その、まさに極端な例に、これからわたくしの弄ばんとする語源はそのまま妥当しうるものであるとおもう。

二-二　いわゆる四段活用では〃未然形〃が他の〃連用形〃〃終止形〃などの〃なになに形〃から音相のうえで分明である。たとえば、ユク・ユケにたいし、これらとくいちがうかたちで四段活用はユカの形をもつ。しかしながら、この未然形がその機能において他の〃なになに形〃と、ひとつ、まったく異るところは、これがそれだけ独立で、はだかでもちいられることの、そのゆるされないところにある。それは、仮定条件、否定、意志——なかんずく、これらの表現のための、たんにそのささえ(基底)として、四段活用においてのみ、ある特異なすがたをとるにすぎない。これは構造の歴史にとってきわめて注目すべきことである。ユカとだけで独立にこれのもちいられた、そういう段階というものがかつて遡ってなかったものであろうか。

まず、ユカバならユカバのばあい、ここからバをきりはなしてユカをぬきだすこと、これだけは容易にゆるされうる。もと、ユカとは、《はたしてゆくかゆかないか》について、事態のいまだちゅうぶらりんのままなことを、とくにそれとしてあらわすための形ではなかったであろうか。じつはバなしで《もしゆくならば》の意を未然形そのものがそれだけであらわしえていたそういう段階もあったのではなかろうか。いいかえれば、もともと未然形そのものに荷わされたその機能の意味は不確定や疑問や《かどうか》という判断の保留やだったものとわたくしは仮定する。さすれば「ユカヌ」は、《ゆくかゆかぬか、いや、ゆかない》というふくみから否定となるのである。「ユカム」の方は《ゆくかゆかぬか、いや、ゆこう》というこころで、ゆくことへの積極の意志の表示となる。

いま、問題は、未然形そのものにではなく、それをきりはなしてのこるところのムとヌとにかかわる。さて、「うのみ」ということばがある。これは、とりの鵜とはなんの係りもないかたちであった。文献からの徴証はぼくが、「うんのみ」がもとなのである。「うんのみ」とは、なんでもウム、ウムとうけいれてしまうことにほかならない。そして、いまここにかなでウムと写しはしたけれど、これの、その、じっさいのなまの発音として、それはムー([m:])であって、いっこうにさしつかえな

い。いな、これこそまことに自然なこえの表情である。ゆくかゆかぬかのユカ(未然形)に、いやゆこうのこころでムー([mː])を——いわば、自問自答のかたちで——つけたそれを〝こえの表情〟から〝完全な言語〟へしたてあげたのがユカムのかたちであったのだと考えるしだいである。あとは〝類推〟で「ユカマ(ク)」とか「(…コソ…)ユカメ」とかいう活用のしくみをつくりだした——。必要な変更をくわえるだけで「ヌ」についてもおなじ論法があてはまるであろう。そして、ヘルマン・パウルのことばを借りていうならば、「む」と「ぬ」との成立は日本語としていずれもUrschöpfung(原創造)に帰せられる。

ただし、いわば無(「記号言語以前の表現」)から有(「分節された言語記号」)をうみだすいとなみは、既存の体系(すでに未然形がかかる〝形〟として確立されているその体系)のなかへこれをくみこむという手順のもとにおこるのであるから、とうぜんながら、ながい歴史のうえでは、それはあたらしい事件である。

三　もし誤解があってはならないから最後に言いそえておく。比較言語学のタームズにおいてA言語とB言語とがたがいに祖語X——もとより、この統一自体、虚構——の方言であると仮定しうるためには、たとえただの一例ではあろうとも絶対のきめてさえそこに得られるならば、すでにそれでいいはずである。ただ、印欧語のように高度に複雑な屈折をもち、なかんずくたくさんの変格が文法のあやをいやがうえにも多彩にくりひろげている言語でないと、絶対のきめてになる例がどっこいおいそれとは得がたい。ことは比較言語学の方法の限界にかかわる。

語源の探索についていえば、フーゴ・シュハートは、語源研究の領域ほどに個人のおもいおもいの解釈がうちだされるところも、またここほどに学者のその個性がいちじるしく反映するところもないむねを述べて、レスキーンやブルークマンのような人物がさして語源のことにたずさわっていないのは、かれらがそれをあえてこのまなかったためとみているが、橋本進吉や服部四郎のような学者が容易には語源いじりに手をそめていないことも、まことに偶然ではないとおもう。

注　パウルの〝原創造〟についてはHermann Paul: Prinzipien der Sprachgeschichte[5]. Kap. IX. またシュハートの原文についてのその詳細はHugo Schuchardt-Brevier[2], 426 f. を参照のこと。

(かめい　たかし　成城大学教授)

言語生活の核心

土居敏雄

明治の初頭までよく使われていた英文法の教科書に『問答式初等英文典』(*Elementary Catechisms, English Grammar*, London 1850)というのがあった。六〇頁そこそこの小冊子であるが、本文は次のように始まっている。

問、言語とは何ぞや。
答、言語とは思想を表わす発声、即ち音声よりなるものなり。
問、然らばその語は何処より来れるや。
答、言語なる語はラテンのリングワ、即ち舌の意なり。依っ

て母の舌・母語という。……

この小冊が後の国語・国文法にも多大の影響を及ぼしたことはよく知られている。右の数行を前にして色々な感想が浮かんでくるが、いまふっとわたしの注意をひくのは「母の舌、即ち母語」ということばである。母語といえば現代英語のすぐれた辞書編纂家でもあったオックスフォード大学のH・C・ワイルド教授が一九〇六年に『母語の史的研究』(*Historical Study of the Mother Tongue*)という四〇〇頁に余る大冊を世におくった。これは名著といってよく現在わが国でも復刻されている。本講座では日本語に関するあらゆる事項が扱われ、教えられることばかりでほんとうにありがたい。しかし母(国)語という項目は見当らないようである。

周知のことであるが、ツルゲーネフの散文詩に「ロシア語」という一文がある。短いから引用してみよう。

疑い惑う日にも、祖国の運命を思い悩む日にも、御身のみがわが杖であり柱であった。ああ、偉大にして、力強き、真実にして自由なる露西亜語よ！　御身がなかったならば、今、わが国に行わるるあらゆる事どもに面して、どうして絶望に陥らずに居られようか？　然しながら、かかる言葉が偉大なる国民に与えられたものでないとは、到底信じえられぬことである。(中山省三郎訳)

これはいわゆる愛国者流の行文ではない。魂が不安にさらされるとき人の胸中にわき上る抑えがたい郷愁の詩である。ここまで書いてきて私はしばらくペンを措いた。今宵(一九七七年一一月二〇日)エルサレムよりテレビ中継されるエジプトのサダト大統領の声が聞きたかったからである。

言々火を吐くアラビア語の心が、まだるっこしい二重通訳をこえて伝わってくるようだ。大統領の演説の後、イスラエルのベギン首相が受けて立った。そこにアラビア・ヘブライの両語がはげしく相搏つ姿を私はみた。壇上の一句一句にみえざる幾百万の聴衆が一上一下ゆれ動くのをみる思いがした。

私の文脈は大きく狂ってしまった。さて母語とは何であったか。他国語に対峙する自国語の謂であろうか。日本で他国語といえば誰しも思い浮かべるのが学校で学ぶ英語やフランス語のような外国語であろう。とすれば外国語の教師や学習者に母語の意識があるであろうか。そこでは各種の言語が日本語で教えられ、日本語で理解されているというのが先ずは実状であろう。日本語にすっぽり浸りつつ学ぶ外国語は注意深く扱われても、日本語に対峙するということは考えられない。大多数の日本人にとって日本語は当り前のことでど*だい*母国語意識以前の存在なのだ。幸か不幸か、この状態は今も昔もあまり変ってはいまい。さすれば生きた外国語に習熟することは至難であり、習得したはずの外国語もいわば根無し草、それを使用するにしても座標の定まらぬ心もとない情態となろう。母語とはある定置された座標に安住し、文体の奥にひそむ文体、いわば不動の核をその中に感じとっている言葉とでも言えようか。それなら、日本語の中でわれわれは本当に安住できているであろうか。

私は高等小学校を終えてはじめて村を離れ、広島に近いある中学に入った。三年間の寮生活を過ごしたが、はじめの頃は上級生である室長から始終〝気合〟の入れられっ放しであった。

どうかすると舎外に整列、説教、そのあと〃びんた〃の一つも喰らわされ、挙句には、「標準語を使え」とどなりつけられることもあった。郷里の土佐では「どういたしまして」という意味で通常「なんちゃー」(なんでもございません)という。二度重ねると一層恐縮した丁寧な表現となる。「こりゃ、ほたえな」(騒がしいぞ　静かにしろ)、これは最近よく放映される坂本竜馬の最後のことば。あの京都の旅寓で、血刀さげてかけ上ってくる刺客に、そうとは知らぬ竜馬がいつもの調子で気軽にかけた言葉である。恐らくは、田舎からぽっと出の少年も何気なくこのような言葉を使ったことであろう。それにしても上級生に聞き咎められ怒鳴られたことは、この初年生にとって大きな驚きというよりショックだったに違いない。その後は阪神と東京にそれぞれ一〇年と三年、名古屋に来てからはもう二〇年をこした。以前には「あんたのツは変や、舌が短いのと違うか」とからかわれたこともしばしば。しかしこのツの音は中国語や英語を習うときにはかえって具合のいいこともある。大学へ入って後はあれこれの外国語を追っかけ追われつしながらつい時間が経ってしまった。

今にして思えば、かの熱心な上級生のアクセントにしてからが怪しげなしろものだった。その上級生に今日どこかで再会したら、何はともあれ、あの方言矯正という滑稽さを二人して大笑いすることであろう。三年間仕込まれた広島弁はおろか、大阪弁も、東京弁はいわずもがな、この地のことばすら私は未だに使えないでいる。要するにあちこちのことばを何となくつきまぜて使っているのが私のことばなのである。まるで座標の定まらぬ根無し草みたいなもの。東と西にはさまれて、この頃は語のアクセントすら時にあやしくなる。その点では、最も身を入れて来たはずの英語を使うときの心もとなさと変りがない。

それでは自分のことばにはもう核が無くなってしまったのであろうか。そうではない。母の舌にはジとヂ、ズとヅの明白な区別があった。だから今でも私はこの二組の音をごく自然に聞き分け使いわけている。音素論が何と言おうと、構造文法が生成文法に早変りしようと、私の舌は変っていない。この四つ仮名の弁別的使用は鎌倉時代以来の由緒ある日本語の後裔だときいている。だから現代文を旧かなの文語体に改めるとき極めて有効に働く。それに音声学の説明にも便利だし、ヨーロッパ語の発音にも応用できる。とはいえこんな功徳が何になろう。[dʒi]と[ʒi]の区別をどんなに教えても、教室を出るなり学生はもうすっかり分らなくなっているのだ。

それにしても別個のものを一つに強いられてはたまらない。日常四つ仮名音を区別している方言使用者には、ローマ字であれ、仮名づかいであれ、押しつけがましい訓令には絶えず一種の居心地のわるさ、――違和感がある。違和感の集積は時にいらだちに連なる。それは理論や解釈の問題ではない。生活の実感である。

いま述べたことは些々たる個人の経験と感想にすぎない。しかしこのことは、裏がえせばどうなるか、――今日多数の日本人が経験しつつある言語生活のさまざまな実態の一面を表わしているのだ、と言えないであろうか。いかにも四つ仮名音の問題は現代日本語における些細な一現象に過ぎない。だが、この

一つをとってみても不安定ないらだちを感じる方言人は日本の各地に意外に多いのかも知れないのだ。（これは勝手な想像ではあるまい。本講座第五巻一三五頁の方言地図はそのことを示してくれる。）心ある読者は音韻・語法の各種調査資料の表示や統計や地図のうらにこそ、かえって微妙にゆきかう言語生活の実態を読みとることであろう。

　このような問題については、控え目ながらも、すでに本講座にもいくつかの項目で関説されてはいる――方言と標準語、標準語の問題、沖縄語の歴史や方言札の話など。沖縄のそれにもまして露骨かつ苛酷であったウェールズの罰札制度や数世紀にわたったアイルランド語の弾圧――すべては母語の問題である。一見些細な方言の問題も究極においてはやはり母語の問題に帰着する。言語生活の核心には常に母語があるからである。この問題を切りはなしては、国語学も言語学も、それがいかに堅固な論理的構築をみせる論考であっても、味わいのある生きた研究とはなりにくいのではあるまいか。

（どい　としお　愛知県立大学教授）

スローガン

高橋　三郎

　ある頬笑みにそれこそ一生を賭けてしまったり、ある眼差しに生涯消えぬ心の傷を負ってしまうということはよくあることである。他人の表情や身ぶりがどんなにわれわれの行為を大きく左右するかは、べつに最近盛んになっている non-verbal コミュニケーション研究の成果を借りるまでもなく、だれもが体験的に熟知しているところであろう。だがはたして眼が口ほどに、あるいはそれ以上に物を言うかは疑問である。それにもかかわらずある表情や身ぶりにつき動かされるのは、そうしたしぐさや表情が行為者の主観的な解釈を許し、どう行動すべきか迷っている行為者を力づけたり、あるいはあきらめさせたりするからにほかならない。

　こうした表情や身ぶりと同じように、形式は単純でありながら、しかも行為者の願望や期待をさまざまに投影できるが故に人の心を搏つのが「人を動かすことば」である。ことばが人を動かすことはことばの本来的な機能からいってあたりまえのことで、その意味ではすべてのことばが人を動かすといってもよい。ここで「人を動かすことば」というのは、ドイツ語の Schlagworte(schlagen 搏つ)にあたるものといったら一番ぴったりするであろう。標語、スローガン、格言、合言葉などであり、指令的言語(directive language)のカテゴリーに属するものであるといってもよい。

　あることばを生涯の指針としたり、あるスローガンに命を賭けたりという大げさなものでなくても、これらの短いことばはわれわれの生活のなかに根強くしみこんでおり、われわれは折りにふれ心の中に思いおこしたり、時には口にだしてつぶやくことすらあるはずである。極端ないい方をすれば日常の行動のかなりの部分がこうしたことばによって支えられているかもしれないのである。だがそのわりにはこうした合言葉や標語やス

ローガンなどについての研究はすくないように思われる。その理由のひとつとしてたぶんこうしたことばにたいする感情的な反撥があるように思われる。人間がそう簡単にことばに動かされるはずはない、あるいは動かされていいはずがないという感情は案外強く存在する。「禁煙」と張り紙をしても本人自身はもとより周囲のだれも信じないというおなじみの漫画のテーマを思いおこしても、「地球をきれいに」とか「親をたいせつに」というテレビ・コマーシャルをみるたびに感じるあのいらだたしさを思いおこしてもいい。

だが「人を動かすことば」には、それがスローガンや標語にすぎないと思いながら、そしてその影響力を軽視しているつもりなのに、いつのまにかそうしたことばに動かされるようになってしまう、あるいは「お守り言葉」として使うようになってしまうという面があることは否定できないであろう。ナチス時代の社会と言語について鋭い分析をしたV・クレンペラーは次のように述べている。

> 言葉は極くわずかな砒素の一服のようなものかもしれない。無意識に呑みこまれ、何の利き目も現わさないように見えはするが、しばらく時間がたつと、やはりその毒性は現われる。

「人を動かすことば」のなかでも特に「毒性」が強いと考えられているのがスローガン(slogan)であろう。ゲール語のSL-UAGH-GHAIRMを語源にもつこの語は、一九世紀以降もっぱら政治的プロパガンダや商業広告の分野で用いられてきたこともあって、多くの場合貶下的なイメージがつきまとっている。

スローガンの影響力は科学的客観的に測定できない場合が多いから、その評価は極端にわかれ、かつ感情的になりやすい。日本近代史のなかでスローガンの代表的なものといえば、すぐ思いうかべるのが三国干渉後の「臥薪嘗胆」であろうが、その効果についても議論があるところである。(国民全体に大きな影響力をもったという通説にたいして、たとえば飛鳥井雅道氏は強い疑問をなげかけている。)

スローガン研究が少ないのは、こうした貶下的イメージのせいもあろうが、スローガンの概念規定や、また実際に使われている語句を「同定」することが困難なこともある。スローガン、標語、合言葉など、似たような「人を動かすことば」があり、どのように分類整理していいかとまどうであろう。

ここではM・シェリフやO・ルブールの研究を参考にして、スローガンの特徴を考えてみよう。まずスローガンはまとまった意味をもった語句である。この点でキャッチフレーズと概念的に区別される。キャッチフレーズは注意をひいて本文に誘導するためのことばであって、まとまった意味をもたなくてもいい(スローガンが冒頭にくればそれがキャッチフレーズになる)。簡潔で短いということもスローガンの重要な特徴で、英語の場合ほぼ四語からなるとか、三語から六語が最適という説もある。スローガンは行為を方向づける明確な指令を含んでおり、それがスローガンを一般的抽象的な指令である標語から区別する。標語は運動や団体や個人の理想をシンボリックに示したもので、「自由・平等・友愛」といったたぐいのものである。このことはスローガンが暗黙のうちに「未来」について触れている

ことを意味している。つまり「臥薪嘗胆」には「そして復讐せよ」という意味が含まれていると解釈されるということである。スローガンの特徴としてそれが韻とか省略、故事成語のいいかえなどさまざまなレトリックが用いられていることはだれでも気がつくであろう。「真珠湾を忘れるな」(Remember Pearl Harbor)は米西戦争当時の「メイン号を忘れるな」(Remember the Maine)のいいかえである。スローガンには作者がいても、そのスローガンが繰りかえし使われているうちに匿名性をおびてくるのが普通である。

スローガンの機能を考えると、スローガンの対象である集団や大衆になにかをやらせようとし、そのことを正当化することである。スローガンが正当化を含んでいることは、結果として真偽の判断にさらされることを意味している。ルブールはこのことを重視して合言葉との相違点としている。たとえば「われわれは勝つぞ!」というのは合言葉であり、「われわれは強いから勝つぞ!」というのはスローガンだというのである。

スローガンの効果を高めるために用いられる方法が繰り返しである。だが反復以外にもさまざまな要因がある。スローガン自体が機知にとみ興味や関心をひくとか、論理的説得的に作られていることも必要であるが、それ以上に重要なのが、スローガンが人々の欲求を満足させること、つまり行為の指針となることである。一般的にいえば社会的に不安定な状況においてスローガンの影響力が強くなるが、それは混乱した現実をスローガンが整序することによって、行為の指針となるからである。その際個人はこの短い語句に自分の欲求や願望を投影し同一化する。

スローガンをこのように抽象的に定義することはたやすいが現実に用いられている語句を「同定」することはきわめて困難である。スローガンにせよ、あるいは標語にせよ、それらはいわばことばの指令的用法にすぎないのであって、ある文化、ある時代、ある状況を離れて解釈することはできないからである。たとえば次のようなスローガンが戦時中の五万あまりのスローガンのなかで最もすぐれたもののひとつであるといわれても、われわれ日本人には理解できないであろう。The Axis we will sever――Old Glory forever. スローガンは「戦いの鬨の声」という語源どおり、短期的なものであり、ことわざや標語が時間とともに定着していくのと対称的である。だがそれぞれの文化には言語や価値観などの限定によってスローガンのひとつのパターンができあがっているはずである。そうしたスローガンの構造を明らかにすることによって文化の相互比較も可能になるが、なによりもある状況ある時代の予兆として役立つのではないだろうか。スローガンにかぎらず「人を動かすことば」は、言語学者のみならず心理学者や社会学者、歴史学者が協力してもっと研究されてもいいテーマだと思われるがどうであろうか。

(たかはし　さぶろう　京都大学助教授)

編集室より

▽第12巻「日本語の系統と歴史」をお届けします。最終配本、別巻「日本語研究の周辺」は三月刊行の予定です。

岩波講座 日本語

12

日本語の系統と歴史

岩波書店

〈編集委員〉
大野　晋
柴田　武

まえがき

日本語の親戚はどこに求めることができるか、日本語は歴史的にどのように発展して来たかという問いは、日本が明治時代にヨーロッパの言語学を輸入して以来の宿題であるといえよう。

日本語の親戚は、はじめアルタイ語、また朝鮮語に求められるとヨーロッパ人によって唱えられて、案外簡単に片付くかのように見えた。しかし学問が進み、吟味がこまかくなってくると、堅実な証明は意外に困難であることが判明した。そして今日に至るまで確かな結論に到達できないでいる。しかし日本語の系統を確定したいという知的欲求が絶えることはなく、その欲求は学者たちを駆り立て、種々さまざまの論議をかわさせている。

それの研究の困難の第一は、言語の系統の証明に要する学問的手続が、言語学特有の仕組みを持ち、決して簡単でないことにある。いわゆる比較言語学について、素人には近づきがたい点があるのはやむを得ないが、本巻はそれを正しく理解しうるようにしたいと願って編集した。

日本語の系統の研究の困難の第二は、研究者が日本語についてだけでなく、比較すべき相手の言語にも精通していることが当然要求されることである。一言語に通じることすら困難なのに、他の言語の時代的な変化の隅々までを知ることは、極めて困難なのである。本書ではその困難な課題について、従来日本語と比較され、かつ重要とされて来た諸言語を取りあげ、それぞれ得難い専門家を配して、具体的に、学問の今日の状況を語ってもらったつもりである。

一方、日本語の歴史的な発展については、すでに「言語生活」「音韻」「文法」「文字」「文体」等の諸巻において、それぞれの分野に関してかなり詳細な記述を試みている。それゆえ本巻ではそれを再びせず、これまで取り扱わなか

った語源の研究、地名の研究等についての論考を収めて、関心の深い読者に役立てようとした。

「言語の系統と形成」では比較言語学の基本的諸問題について明らかにし、「アルタイ語系統論」では最も古くから提唱されているアルタイ語と日本語との関係を論じるに先立ち、アルタイ語族なる概念について考察を加えている。以下、「南方諸語との系統的関係」「朝鮮語と日本語」「アイヌ語と日本語」「チベット・ビルマ語と日本語」においては、日本の近隣の諸言語それぞれの言語の特質を記述し、日本語との関係を論じる場合の基本的知識とし、多くの論考を批判する資料たらしめようとした。各言語の第一線の専門家の、詳しい今日的な議論を、これほどに集め得たことを喜んでいる。また「日本語の系統論史」は明治以降の学説の歩みを概観し、今後の進展に役立てようとするものである。

なお、「日本語の語源」「地名の起源」は、日本語の内部の溯行を試みようとする場合に直面する、語源の問題についてその正しい研究法を探索するための論考といえよう。

一九七七年一二月

編集委員

岩波講座　日本語 12

目　次

1 言語の系統と形成

風間喜代三

一　言語の分類 ―― 類型論と系統論 ――

二　比較文法における対応の扱い

三　比較文法における資料上の限界と印欧語の特性

四　比較対応と語彙の借用の問題

五　比較に有効なもの

むすび

一　言語の分類 ── 類型論と系統論 ──

世界にはいくつぐらい言語があり、またそれらが互いにどのような関係にあるかということは、言語に関心のあるすべての人にとって大いに興味ある問題である。したがって言語を分類するということは、言語学にとっても重要な課題の一つとなっている。そのために、従来二つの方法が認められてきた。一つは類型論的な分類であり、もう一つは系統論的な分類である。いうまでもなくこの二つの方法の研究は、近代の言語学の発足とともに始められたといってよいだろう。その後今日に至るまで、さまざまの説が提唱され、また検討されてきた。

一九世紀の初めには、どのくらいの数の言語が世界に知られていたのだろうか。一八〇六年にアーデルング(J. Chr. Adelung)というザクセンの王室につとめる学者が、『ミトリダーテス(Mithridates)』という古代の有名なポリグロットの王の名を表題にした書物をベルリンで公けにした。彼はその直後に死んだので、その後をファーター(J. S. Vater)という人が引き継いで、一八一七年にこれを完成した。その記述は、今日からみれば非常に不正確なものであるが、いわば『世界の諸言語』の初版のようなものである。その第一巻アジア篇は、一音節語と多音節語の二部に大別され、日本語は後者にふくまれている。当時比較文法の上でようやく注目を浴びるようになったサンスクリットも同じ部に入れられ、かなりくわしく述べられている。以下ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、そして補遺篇と続き、全四巻、二〇〇〇頁をこえるこの書物には、その副題が示す通り、「主への祈り」(パテル・ノステル)を言語見本として約五〇〇の言語が収められている。

そしてその分類の方法は地域別である。単なる地域別の分類は、隣接する諸言語を順次並べて論じるだけで、それ

ら相互の関係については、説明があたえられない。ところがどんなに地理的にはなれていても、ある規準によって二つの言語が関係づけられることがある。インドのサンスクリットとアイルランドのアイルランド語の関係はその一例である。アイヌ語は印欧語だという主張は、われわれにとってはなにか心情的にも受け入れ難いものがあるけれども、戦後もヨーロッパの一部の学者によってまともにとりあげられた課題であった。またこれとは逆に、どんなに隣接していても系統的には互いに無関係という例もある。イベリア半島のスペイン語とバスク語の関係はその一例である。どんな言語にもこうした結びつきが可能であるところに、分類の興味がある。その点で単なる地域別の説明は、学問的にもあまり用いられない。とくに今日のように約三〇〇〇と推定される言語数を考えると、『ミトリダーテース』の比ではないから、一定の規準による分類に一層の関心がよせられるのも当然であり、またそれが必要である。しかしその方法は、どうしても上述の二つの方法に依らざるをえない。これらにまさる新しい分類の規準が、今までのところみ当らないからである。

類型論的な方法は、一九世紀の初めにシュレーゲル (F. von Schlegel) によって最初に試みられたといわれている。それは各言語のもつ形態論的な主たる特徴を基礎にしている。まず中国語をみると、それを構成している要素は単音節からなっていて、他の言語にみられるような名詞とか動詞という品詞の区別がない。これを孤立語とよんでいる。つぎにはトルコ語に代表される膠着語がある。日本語もその一例とされている。トルコ語では、例えば動詞の人称変化にしても、語幹部と人称接辞の膠着が非常にはっきりしている。これにたいしてギリシア語やラテン語のような古い印欧語の場合には、語幹部と接辞・語尾とが融合し、語の文法的関係は助詞などによらずに、一語の中にふくまれる語尾変化によってあらわされる。これを屈折語という。さらには抱合語とよばれるグループがある。エスキモーの言語がその典型とされている。この型の言語では、語が独立して用いられるときと、他の語と複合して用いられるときとでは、常に形を異にする。そして一つの文は一語のような形をとる。孤立語・膠着語は、文法的な関係を、切り

はなされた形に担わせる分析的な傾向が強いのにたいして、屈折語・抱合語では逆に一語の中に文法的関係をたたみこもうとする総合的な傾向が目立っている。これら四つのタイプのほかに、アフリカのバントゥー語のような言語を範疇語とよんで区別することがある。この言語では、日本語で人間を「ひとり」、本を「一冊」、紙を「一枚」と数えるのに似て、人間・人間以外の生物・無生物など、すべてのものを二〇近い範疇にわけて、それを接頭辞で明示する習慣があるので、この名がある。

さてこれら四、ないし五の型で世界の言語を分類しようとする試みが、いく度もくり返されてきた。しかし言語の研究が進み、新しい言語が数多く知られてくるにつれ、これだけではあまりに大枠にすぎる嫌いがあり、より細かな分類の規準が求められるようになった。『言語』の中の一章をさいた有名なサピア(E. Sapir)の分類も、そうした苦心のあらわれである。ところがそうなると、一方では規準が複雑になって、明確さが損なわれる。また規準に客観性が失われる恐れがでてくる。多種多様なものを分類しようとするのだから、われわれは初めから複雑でない、簡明なものを目指している。規準の数をふやし、またそれらを組み合わせると、どうしてもこの理想から遠ざかる憾みがある。本来言語はいくつかの大きな枠で割り切れるほど単純なものではない。例えば、よくいわれるように、英語は不規則動詞をみると、現在・過去・過去分詞を母音交替によって区別しているから、屈折語の特徴を示している。しかし、ドイツ語にくらべるとすぐわかるように名詞・形容詞の格変化はまったくなく、その形は孤立語的傾向を示している。日本語は膠着語とされているが、動詞の活用形などは一種の屈折形態とみられないこともない。印欧語やセム語は屈折語であり、アルタイ語は膠着語であるといわれるが、これもごく概括的な説明である。

いろいろの面をもつ言語のどこをおさえて分類していくかについて、最近では音韻組織・統語論的特徴もその規準にとりあげられているが、旧来の形態論的分類にまさるものではない。この方法はたしかに多くの言語を分類する一応の目安を立てることには成功した。また資料的に系統を明らかにしえない言語について、まずこうした類型論的な

構造上の類似を求めてグループわけをすることは有効である。ただその場合、設定される規準によって分類に動揺がみられることもやむをえない。系統の不明な多くのアフリカの言語の分類が、その一例である。この方法の完成は、今後の研究にゆだねられているといってよいだろう。

それでは一方の系統論的な分類はどうであろうか。この方法は、いうまでもなく初め印欧語系の言語の場で修得され、それから他の領域に適用され、より確実なものとされてきた。これは、上述の類型論的な方法とは規準を異にする。したがってその結果も一致しない。類型論的な方法は、ふつうある時点でのある言語の組織を問題にするのだから、一つの言語でも、英語のように古代と近代では形態論的にみてかなり違っている場合もあり、その各々について別個の考慮が必要となってくる。これにたいして系統論的な方法は、発生的にある言語がどういう系統の語族に属するかを究明しようとする。つまり、一方は共時的な意識に基づいているのに、他方は通時的にさかのぼることのできる終着点の時期にどうであったかを問題にしている。だから、ある時期でとらえたある言語の形態論上の特徴を束ねてみても、これは系統論とは本来関係がないといわざるをえない。

ここでプラーグ学派の創設者の一人であるトルベツコイ(N. S. Trubetzkoy)の試みについてふれておこう。彼は一九三六年一二月一四日、プラーグの言語学者サークルで講演し、印欧語をいくつかの類型論的な規準で規定しようとした。これは少しおくれて一九三九年にコペンハーゲンの言語学雑誌"Acta Linguistica"の創刊号の八一—九頁にわたって、「印欧語族問題についての考察」(Gedanken über das Indogermanenproblem)と題して発表された。もちろん彼は、伝統的な系統論における語族設定の方法を無意味なものとみて、こうした提案を行ったわけではない。ただ後で述べるような印欧語の比較文法にふくまれる疑問から、ある言語が印欧語族に属するか否かをきめるのに、音や形態上の一致にあまり大きな意味をあたえる必要はない、と彼は考えた。純粋に理論的にいって、「ある言語の印欧語の性格を保証するために、こうした一致がいくつなければならないか、をあたえることはできない」。そこである

言語が印欧語であるという証明のために「こうした素材の一致の存在以外に」，なおつぎの六つの構造上の目安を有効なものとみて，彼は提案したのである。それを簡単に要約すると，つぎのようなものである。

㈠　母音調和がない。母音調和とは，第一音節の母音の性質に，後続音節の母音の性質が規定されることである。

㈡　語頭の子音組織が語中・語末のそれにくらべて貧弱でない。この特徴は，ウラル語，アルタイ語，ドラヴィダ語との比較によって証明される。

㈢　語は必ず語根で始まらなければならないという必要はない。接頭辞のない印欧語はない。最古の印欧語でも，真の接頭辞，つまり独立の語としては用いられない形態素があらわれている。比較的新しい印欧語では，こうした接頭辞の数は急激にふえている。

㈣　形の形成は接頭辞のみならず，語幹形態素内部の母音交替によっても行われる。母音交替の痕跡のない印欧語はない。

㈤　母音交替のほか，自由な子音交替も形態論的な役割を演じている。この特徴は，例えばセム語，アルタイ語など他の言語タイプとの比較によって明らかである。

㈥　他動詞の主語は自動詞の主語と同じ扱いをうける。主格と対格という格の対立が語尾によってあらわされる印欧語では，動詞が他・自動詞のいずれでも，その主語は主格に立つ。また文中の関係が語順であらわされる印欧語では，他動詞の主語は自動詞のそれと同じ位置をとる。

これらの特徴のいくつかは，非印欧語にもあらわれる。例えば，コーカサスの言語とかセム語は，㈠㈡㈢㈣の点で印欧語と共通している。㈤㈥はウラル語，アルタイ語と通じるものがある。しかし，これら六つの特徴をすべて揃えているのは，印欧語しかない。どれほど語彙に印欧語以外の要素が借用されようとも，この六つの特徴をもっていれば，それは印欧語である。この特徴を揃えれば，どの言語も印欧語となる。従来の比較文法が指摘するような語彙や

形態素の一致以外に、ある言語にこれらの条件が揃ったときが、印欧語の誕生のときである。したがってそこには、旧来の印欧基語のように単一な言語を考える必要はない。

これがトルベツコイの主張である。彼はさらにこの観点から、印欧語の故土問題にも言及している。それはともかくとして、この六項目は比較的簡潔に説明されているために、多少理解しにくいところもあり、また項目自体にも疑問がないわけではない。例えば㈢の接頭辞であるが、印欧語の共通基語において、彼のあげるいくつかの形をふくめて、その存在はむしろ否定さるべきであろう。[1] また㈤の子音交替にしても、母音交替と並んで自由な子音交替が形態論的な役割を演じているといえるだろうか。これは「ある連続による音変化の結果」だと説明されている。つまり、サンスクリットの連声(れんじょう)にみる yugá-: yuktá-: yuñjáte のような交替とか、あるいはグラースマン (H. Grassmann) の法則にあらわれるサンスクリットの閉鎖音とその帯気音 bódhati: (Aor.) ábhutsi の交替のような現象を考慮しているのであろう。しかし子音の交替というならまた、ギリシア・ラテン語の stégos: toga のような同じ語根の語頭の st と t の交替、すなわち「動くs」とよばれる現象、あるいは異語幹曲用 (Heteroclitica) とよばれる、サンスクリット yákr̥-t: (gen.) yakn-áḥ のように一つの名詞の格変化の中での r 語幹と n 語幹の交替、さらには一・二・三人称の動詞語尾にあらわれる m s t なども問題になるであろう。にもかかわらず、その範囲を拡げても、多くの印欧語の示す母音交替と、子音のこれらの交替の現象とを機能的に同列に考えることはできない。母音交替は同じ語根をもつ名詞と動詞の語幹、あるいは一つの動詞のいくつかの異なる時制の語幹を互いに区別する働きをもつ。また語根と接辞、語尾から成る一つの形は、そのいずれかの部分の母音交替によって有機的に統一されている。これにたいして上述の子音交替は、基本的にそうした形態論的な区別に結びつかない。したがって㈤の項目は、それ自体疑問である。また㈥の項目も、バスク語などのいわゆる能格に関係してくる問題と思われるが、これもマルティネ (A. Martinet) がいうように、印欧基語がこの㈥の特徴をそのままもっていたと考える必要はない。[2]

トルベツコイは、それまでの比較方法に欠陥を感じて、この仮説を提唱した。だからといって、彼が比較文法の示す語彙や文法的要素の一致をどうでもよいものとみていたわけではない。これはその不足を補う意味での提案であった。しかしこの仮説を極端に押し進めると、これら六つの特徴を備えた言語があらわれたら、それだけでみな印欧語だということになるだろうか。トルベツコイ自身は、そういう言語の存在を予想してはいなかったように思われる。ところが戦後フランスのバンヴェニスト(E. Benveniste)によって、サピアの記述するオレゴン州南西部のアメリカインディアンのタケルマ(Takelma)語が、この六つの条件をすべて充たすことが証明された。[3] ということは、こうした特徴を歴史をぬきにして束ねてみても、それがある言語を印欧語だと規定するに充分な証明にはならないということである。また、今までは系統的に他の語族に属していた言語が、ある時期にこの六つの特徴を揃えたとき、それまでの歴史を無視して印欧語になるということは考えられない。

系統論的・発生的な分類は、類型論的な分類に移しかえることはできないし、またその逆も不可能である。バンヴェニストはいう。

構造の親密な関係は共通の起源の結果でもあるだろう。だがそれはまた、発生的なすべての関係を別にしても、独立にいくつかの言語が実現した共通の発展からもえられるのである。

このように、ある言語のもついくつかの構造上の特徴は、その言語の発生的な親縁関係をさぐる手懸りをあたえるかもしれないが、決定の条件とはならない。それはつぎにあげるような例によっても明らかである。

例えば語順の問題がある。現在のヨーロッパの諸言語は、英語に代表されるように、肯定文においては動詞が文の第二の位置を占める、いわゆるSVO型がふつうである。イタリア語やスペイン語では、動詞の人称変化を利用して、主語となる代名詞を必ずしも必要としない。このとき動詞は文頭に立つが、VOの順序はかわらない。現在のドイツ語にみるように、主語でなくて副詞とか名詞句などが意味の強調のために文頭にきても、つぎには必ず動詞がくる、

という非常に固定的な傾向もみられる。こうした語順が各言語によっていつ頃から始まったにせよ、現在ではこの語順は固定して、一種のリズムをなしている。

しかしこれと同じ事実が、古代の印欧語はもとより、その共通基語にも想定されるかというと、決してそうではない。また現代の印欧語でも、ヒンディー語のように、むしろ日本語に似て動詞が文末にくる語順をもった言語もある。文献学的には大ざっぱではあるが、アメリカのレーマン(W. P. Lehmann)の最近の研究も、原印欧語の段階では、動詞が文末に立つOV型であったということを論証しようとしている。例えば、ヒッタイト語にはその傾向がなお残されている。これに関連して、形容詞とそれに係る名詞の相互の位置についても、印欧語全体をみると決して一様にどちらが前とはいえない。前置詞か後置詞かについても、ヒッタイト語やサンスクリットのように後置を専らにする言語もあることを忘れてはならない(4)。

冠詞の有無ということも、ときに問題にされている。しかし印欧語の古層でも、これを欠く言語は多い。ヒッタイト、サンスクリット、ラテン、古代教会スラヴ語などがそれである。ギリシア語や近代ヨーロッパの諸言語の歴史とそれらの言語のもつ冠詞の形そのものが示す通り、定冠詞は本来指示代名詞である。だから冠詞の有無ということは、その言語の系統とは無関係のことである。もちろん原印欧語にも、これはなかったと考えるべきであろう。また名詞・形容詞の性にしても、アルメニア語や現在の英語のように、その範疇をもたない言語も多い。印欧基語の時代に文法性の組織がどのようなものであったか、男女中三性の対立か、男女を一つにした生物と中性に代表される無生物との二性の対立であったのか、比較対応からはどちらにも可能性がある。

日本語の特徴の一つにもとりあげられたことのある、語頭にrの調音を嫌う傾向はどうであろうか。印欧語の中でも、この傾向はギリシア、アルメニア、ヒッタイトの諸言語に共通してあらわれている。ヒッタイト語では文献の初めから、この子音を語頭にもった語彙がない。ギリシア語、アルメニア語では、この子音の前にしばしば前置母音と

よばれる母音をそえて、ちょうどかつての日本人がロシアをオロシアといったような工夫がみられる。例えば、英語の red に語源的に関係するギリシア語とラテン語、サンスクリットの形をあげると eruthrós : ruber : rudhirá- である。またrとlの区別についても、インド・イラン語の古層は日本語と同じように、rしかもたない。

けっきょく、こうした特徴は言語により、またその時期によってさまざまに変化しうるものである。したがって、そうした特徴をおさえて言語間の関係を論じようとするならば、接触の問題を除くと、積極的にそれらの言語間の相互関係を解明する手懸りをつかむことはむずかしい。母音調和の有無を日本語の帰属をきめる手段に使おうとしても、もしこの現象がアフリカやインドネシアという非アルタイ語の領域に指摘されるとしたら、無効である。その場合には、同じ現象でもさらにその中での独自の特徴をとらえなければ、なんらかの関係を想定する証拠とはならない。共時的な規準でとらえられた一般的な類型論的特徴を、そのまま歴史的な事実の判断の基礎にすることはできない。

二　比較文法における対応の扱い

類型論的な分類の方法に続いて、系統論的な分類のそれについて、ここでもう一度ふり返って考えてみよう。われわれは今日印欧語、セム語、フィン・ウゴール語、マライ・ポリネシア語など、いくつもの比較文法の成立している領域をもっている。しかし同じ語族の名でよばれながらも、アルタイ語のように、その語族設定になお疑問があるとされているものもあり、またバントゥー語のように、多分に類型論的な規準に依って語族としてまとめられているものもある。筆者には、印欧語と他の語族との設定条件の明確さの違いについて論じる能力がないので、印欧語族の領域に話を限って考えてみたいと思う。

周知の通り、この系統論的な分類の方法は一八世紀の末近くにおこったもので、イギリスの法律家でインド学者で

あったジョーンズ(W. Jones)の発言が基になっている。彼はそれまでにヨーロッパ人によく知られていた古代ギリシア語やラテン語、ゲルマン語、ケルト語などと、東洋の一言語であるサンスクリットを比較した結果、そこに著しい類似があることを知った。そこで、これらの言語はもと一つの源からわかれでたものに違いないと述べた。それほどサンスクリットという言語は、比較にたいしてある種の見通しをあたえることのできる組織をもっている。このジョーンズの言葉がきっかけとなって、その証明のための研究が始められた。つまり、結論が直観的にあたえられ、証明が後から従ったわけである。ジョーンズの推定は、実証によらず直観によって導き出されたものであったのだろうが、その直観は彼自身の印欧諸言語にたいする知識、とりわけサンスクリットのそれによって培われたものといえよう。ただ、この直観と、それがどういう事実に基づいているのかを証明して、これを一つの学問とすることとは別の問題である。その実証のためには、印欧諸語の文献学的研究と、言語一般に関する共時的、通時的な観点からの認識が必要であったから、ジョーンズの言葉から比較文法の確立するまでに約一〇〇年が費やされている。しかしこうして比較方法が獲得された以上、われわれはこれに依るべきことはいうまでもない。ただもしわれわれが、ジョーンズに「源は一つ」という直観を促し、またそれを支えた具体的な知識を欠いたとき、その方法の成立と内容についての充分な理解がどこまで可能か、なお疑問なしとしない。

さて印欧語族に属する歴史上の諸言語と、その源にあったと思われる基語との関係は、しばしばフランス語、イタリア語、スペイン語、ルーマニア語などのロマンス諸語とラテン語との関係に比較されてきた。下位諸言語と、それらの比較によって理論的に要請され再建される基語とを結びつけるものは、比較対応の事実しかない。とすれば、比較対応によっていわばその言語学的な最大公約数ともいうべき共通基語、つまりロマンス諸語からみてのラテン語にあたる形を再建し、その虚構をもってもう一度現実の歴史上の諸言語の資料に立ち帰り、これをより合理的に理解し説明する、という操作のくり返しが比較文法だということができる。だから比較再建の目的は、それによって下位諸

言語の対応形、およびそれらの相違をよりよく理解するためであり、基語と歴史時代の間隙を埋める手段にほかならない。例えば、比較文法がなかったならば、ゲルマン語が先史時代に経験したと思われる有名なグリムの法則とよばれる子音推移の現象があったことなど、とても想像もつかなかったであろう。またその規則の例外ともいうべきヴェルナー (K. Verner) の法則の名でよばれる事実、すなわちサンスクリット、ラテン語の「父」、「兄弟」をあらわす形 pitár-: bhrā́tar-, pater: frater ではともに接尾辞はみなtであるのに、同じ接尾辞をもつゲルマン語のゴート語、さらにはドイツ語の形 fadar: broþar, Vater: Bruder ではその子音が違っているという現象について、これが共通基語におけるこれらの形のアクセントの位置の違いに起因するものである、という説明も到底思いつかれなかったであろう。

再建形は現実の資料から割り出されるものであり、その範囲内にとどまらざるをえない。したがって、新しい資料の追加によって、従来の再建に変更が加えられることがあっても当然である。例えば、ソシュール (F. de Saussure) が共通基語の長母音の構成要素としてその存在を要請したソナントと同じ機能を果す音は、ヒッタイト語の発見解読によって、純粋に子音的なものと考えられるべき可能性をあたえられた。またそれによって、基語に想定される無声帯気音は、無声閉鎖音とこの子音の結合から生じたと推定されるようになった。さて、対応形の数の多少にかかわらず、そこから帰結される再建形は一様である。音の例でいえば、印欧基語にbが要請される対応は、なぜか非常に少ない。それはその帯気音であるbh dh gh、あるいは同じ閉鎖音d gの対応に比較しても、僅少の、しかも擬音的な特異な語彙によって支えられているにすぎない。しかし、ある言語においてある音の頻度が他の音にくらべて低いとか高いとかいうことは不思議ではないから、bにも他の多くの子音と同じ位置があたえられている。

個々の語彙についても、それを支える対応形の数はさまざまである。しかし、そこから帰結される再建形は一様である。例えば、英語の possible などと語源的に関係のあるラテン語の possum 〈I can〉 という合成形は、本来 potis sum

という表現に基づく。このpotisという、「主、能力のある」といった意味をもつ語の対応形は、インド、イラン、アルメニア、ギリシア、ラテン、ゲルマン、ケルト、バルト、スラヴ、ヒッタイト、トカラと、印欧語のほとんど全域にわたって存在している。だから、これは、基語に属する語彙であったと推定してよいだろう。

これにたいして「手斧」を意味するサンスクリット paraśú- の対応のような場合はどうだろうか。その対応は隣接するイラン系のオセット語、サカ語のほか、一説にはペルシアという名称とも関係があるのではないか、と考えられている。またギリシア語 pélekus は、形も意味も一致する。しかしその他の語派に確実な対応がみられない。この語は、早くからアッカド語 pilakku からの借用語と推定され、シュミット(J. Schmidt)をして印欧語族の故郷をこのセム系の言語に近い位置に想定せしめる根拠となった。しかし現在では、この借用説は後退している。よし借用だとしても、サンスクリットとギリシア語の形にみる ś : k の対応は、印欧基語に予定される k の音の東西群のあらわれ、すなわちサンスクリット、ギリシア語、ラテン語の「犬」をあらわす śván- : kúōn : canis などの対応にみると同じ対立を示している。したがって借用としても、東群がおこしたkからsへの変化以前のことであり、この対応の範囲内ではこれも立派な印欧語の語彙である。ただインド・イラン・ギリシアという連続する三つの語派にしか分布がみられないということは、はたしてこの形が基語のものであったかという疑問を抱かせる。

いったいいくつの語派に、またどの語派に対応が指摘されたら、その語彙は原印欧語のものであったといえるのだろうか。一説に最低三語派に対応があれば、偶然の一致の可能性を免れうるともいう。それにしても、先の疑問にたいする明確な解答はむずかしい。ある語派である対応が欠けていても、それは失われたのだという可能性は常に存在する。その意味で、共通基語の語彙の構成の厳密な限界をわれわれは引くことができない。ちなみに、古アルメニア語の語彙の中で、他の印欧語からの借用と思われる形を除いて本来の印欧語としての対応が成立するものが約四〇〇余、その中確実に共通基語からのものと考えられるものが約九〇、内訳は名詞四三、形容詞六、動詞三四、その他と

なる。一方、ただ一つの語派にしか対応が認められないものが約七〇ある。そしてその中間に、いくつかの語派との対応が指摘される語彙が多数ある。対応の多く成り立つ語派を順にあげると、ギリシア・インド・ゲルマン・バルト・スラヴ・ラテン・イラン・ケルト・アルバニア・トカラ語派となり、もっとも地理的に近いヒッタイト語とは、もっとも関係が薄い。(5)

これらの数字は、われわれが印欧語の比較文法に期待する数字より低いかもしれない。しかしわれわれにとって重要なことは、一つの言語にふくまれるすべての語彙についてのこうした対応の綿密な検討であり、それを可能にするものがあるという事実である。したがって、僅少の対応に支えられた基語形と、多くの対応から推定されたその形とが、結果的に一様であるということへの疑問は当然ではあるが、比較文法にとってさして重要な問題とはならない。理論的に再構される共通基語は、現実にある資料の投影にすぎない。

三　比較文法における資料上の限界と印欧語の特性

そこでもし言語史のどこかに切れ目のようなものがあったとしたら、われわれは比較によってもそれをのりこえることはできない。それは比較文法の雛型とされるロマンス語とラテン語との間においてもおこっている。ロマンス語の比較再建が必ずラテン語に到達するとは限らない。われわれのもつ古典ラテン語は文語であり書き言葉であるのに、ロマンス語へ流れていくラテン語は口語としての卑俗なラテン語であったということが、このくい違いを生む大きな原因であったことはいうまでもない。この二つの層の相違はどこの言語にもあることだが、古典期のラテン語の時代にもすでに存在していたことは、いろいろの資料から明らかである。この口語層のラテン語が、ローマ帝国の拡大とともに兵士や商人とともに早くから広く各地に運ばれ、イベリア半島、ガリア、バルカン半島などそれぞれ

違った言語層の上に重なり、それを吸収していった。そこで極言すれば、統一的な原ロマンス語などというものは空想だという説もきかれるほど、一方では各地でそれぞれ独自の変化が進行していった。しかしその基には共通してやはり古典ラテン語に近い言語があったことは疑いない。したがってわれわれは、ロマンス諸語とラテン語をつけ合わせることで、この間の事情を推測することができる。

一音節の語や同音異義語が避けられるということは、言語が伝達の手段であることを思えば、容易に了解される。そうした理由から古典ラテン語で「行く」の意の eō, īs, it と単数の人称変化をする形、あるいは「食べる」の意味の古い形 edō, ēs, ēst などは口語では避けられ、同じ意味の不定形 vādere, ambulāre, *ambitāre で代表される形を eō の代用に、また「食べる」の意では mandūcare を代用したり、あるいは edō を合成語にして com-edere とした形を人称変化させて edō のそれにかえてしまった。これが、現在のロマンス諸語の形の基となっている。名詞でも同じように、例えば「春」の意味をあらわすラテン語の vēr は、フランス語では printemps<prīm(um) temps「最初の時」というまったく違った合成語で、また他のイタリア・スペイン・ルーマニア語では prīma「最初の」(女性形)をつけた prīma vēra に基づく形によっておきかえられた。このような場合に、完全におきかえられた形はもちろんだが、基の形をふくむ合成形からも直接ラテン語の形を推定することは、もし古典ラテン語がなかったら非常にむずかしいであろう。

もう一つ、数詞の例をみてみよう。「一九」をあらわすラテン語は ūndēvigintī、つまり「vīgintī(二〇)dē(から)un(us)(一)」か、あるいは novendecim「九(と)一〇」という形をもっている。ところがロマンス語のすべての形は、フランス語 dix-neuf「一〇(と)九」にみるようなタイプの合成語になっている。また「九〇」をあらわすラテン語 nōnāgintā という形は、古フランス語ほかわずかの形に名残りをとどめるだけで、大半のロマンス語の形は、イタリア語 novanta にみるように、n を v にかえている。これは「九」をあらわす novem というラテン語の形の v の影響をうけたからである。古典ラテン語なしにロマンス諸語からこれらの形を再建するとしたら、どうなるであろうか。

またいくつかのほぼ同じ意味をあらわす語がラテン語に共存している場合に、どれかがすてられる傾向がある。例えば、magnus と grandis という二つの形容詞は、ともに「大きい」とか「偉大な」という意味をもっていたが、前者がより精神的なニュアンスをもち、後者がより具体的で卑俗な語彙として共存し、年齢など、ある場合には、どちらも差がなく用いられていた。ところがロマンス語では、一般に前者をすてる傾向を示している。「話す」を意味する語にしても、古典ラテン語の loqui という不定形に代表される形は後退し、一般にはフランス語 parler にみるように、ギリシア語からラテン語に入った合成動詞のほうがもっぱら用いられ、好まれていたことがわかる。ロマンス語の形からラテン語の canere「歌う」という形を推定することはむずかしい。なぜなら、ロマンス語の形は cantāre に発する。つまり、口語では -tāre というタイプが拡大し、この動詞もその影響をうけたからである。この動詞の完了形の一人称単数形は、古典ラテン語では cantāv-ī という形で、人称変化にはこの v がすべての形にふくまれ、一つのマークにもなっている。ところが古典期にすでにこの v が弱まって消失する傾向がみられ、ロマンス諸語は v のない形をもっぱら継承している。古典ラテン語の未来形にいたっては、完全に消滅してしまった。ロマンス語のこの時制の形は、すべて cantare＋habeo、つまり英語でそのまま当てれば to sing＋have という合成的な表現に基づくものである。

このようにみてくると、決して古典ラテン語のすべてがロマンス語の形成に参加したのではないということ、語彙はもちろん文法体系の諸要素にも新しい形が選ばれていることがわかる。したがって、比較対応の範囲内での再建は可能であるが、これをこえることはできないから、そうした場合にはわれわれはどうしても真実の共通基語に到達することはできない。

印欧語の場合には、他の語族にくらべて非常に資料的に恵まれている。それは、もっとも古い文献は紀元前一五世紀をさらにさかのぼり、しかも多くの語派が現代にまで生きているからである。たしかに理論的に要請されるような純粋な印欧語というものはどこにもみられない。どの言語も大きな変化をうけ、互いに違った様相を呈している。だ

からこそ、それらは比較の資料として一層興味深いのである。また資料面だけでなく、言語の構造の面でも印欧語は比較に有利であるといえよう。とくにその古層の諸言語は屈折に富む。そして意味をになう語根部と、これをとりまく接辞によって語幹が形成され、それにつけられる語尾とが一つに融合していながら、一方では母音交替によって相互に関係を保ち機能し合っている。そこで各語派の形を一つ一つみる限りでは、それらは各々の言語組織の中におさめられてしまっているが、それらを対応させて総合的に判断すると、基語時代にむかって新しい視野が開かれてくる。

例えば、古代ギリシア語の húdōr「水」その属格 húdat-os は、この言語の名詞変化のタイプとしては多くの中性の名詞と同様に、sôma, sṓmat-os「身体」の -a: -at-os と同型に扱われる。しかし主格形をみると、前者は語末に r をもち、後者は a である。この差の扱いについて、ギリシア語の記述文法はなにも指示しない。しかしこの「水」の語の比較対応をみると、例えばサンスクリット、ヒッタイト語の主・属格の形は udá(n)(ただし実例はない): udn-áḥ, wātar: weten-as である。英・独語 water, Wasser などの形をも参考にすれば、少なくともギリシア語の示す主格の r は実証され、また属格以下の格形の語幹に n がでてくること、したがってサンスクリットの主格形の n は r にかわるこれらの類推形らしいこと、そしてまたギリシア語の hudat- の a は n に関係があるのではないか、などのことも推定されてくる。

これは先にもあげた同じタイプの語彙で「肝臓」をあらわすサンスクリット、ギリシア語 yákṛt: yakn-áḥ, hêpar: hḗpat-os にも一層よくあらわれている。とくにそのラテン語の対応形 iecur の属格形 iecinor-is は、iter: itiner-is などとともに、ラテン文法ではまったく不規則な変化形とせざるをえない。しかしこれらの対応から、*iecin-is とあるべきところを、主格の r 語幹の影響で、本来の n 語幹が拡大をうけて r 語幹になった形であることが初めて了解される。ヒッタイト語の解読は、こうした異語幹曲用が印欧語の最古層に存在したことを確証した。またこうした異常なタイプの文法形態をもっていればこそ、この言語は印欧語だと断定されたのである。(6)

こうして比較文法は、先に述べたように、記述文法の不規則形をより合理的に説明することができる。これは印欧語のもつ豊富な古い資料と、その言語のもつ比較に適した性質に負うところが大きい。しばしばいわれてきたように、もしわれわれが現代のフランス語とブルガリア語とアルメニア語しかもたなかったとしたら、このような比較文法の成立は望むべくもなかったであろう。この点で日本語には、残念ながら比較に有効な決定的な資料がいまだにみいだせないというべきであろうか。

四　比較対応と語彙の借用の問題

比較のための資料に恵まれ、その文献学的研究が進むと、関係する各言語のすべての語彙についての語源研究が可能になる。ある言語の系統が論じられるためには、その言語のもつすべての語彙の歴史の解明と語源研究が試みられなければならない。そしてある言語の系統を確立するためには、まず規則的な音対応の事実を証明することが必要である。

源がどうあろうとも、その形成において純粋な言語というものは存在しない。その意味では、すべての言語は混合語である。多くの言語は、それが歴史に登場するまでにどのような過程を経て形成されてきたかを明らかにしてくれない。だからこそ、それを構成する諸要素を手懸りにして、われわれはその形成の過程を推定しようとする。そのためには、それらの諸要素を分類する規準が必要である。上述のように、ロマンス語の場合その歴史がかなりわかっているにもかかわらず、古典ラテン語にどうしても結びつかないものがある。そして各ロマンス語は、一方ではラテン語のある形をすて、その代りに新しい要素を吸収しながらそれぞれに独自の発展をとげている。歴史時代に入るまでに長い道程を経験したサンスクリットやギリシア語が、多くの異質の要素と混じり合ったとしても不思議ではないし、

むしろ当然である。印欧諸語にみるように、形成の過程がどんなに複雑であっても、またそれがわからなくとも、系統を明らかにすることは不可能ではない。歴史的・資料的にみて、その流れが明らかにとらえられるものに証明は不要である。

またすべての言語は混合語だから、系統を論じることはできないという主張もある。たしかに言語の形成は混合である。混合でない言語はない。だから、その混合している要素をなんらかの形で識別することが、われわれの課題となる。だれが数千年前の先史時代に存在したと思われる言語の状態、分裂の過程をそのままに再現できるだろうか。印欧語研究がヨーロッパのロマンチシズムの波にのって発展し確立したという事実をみてもわかる通り、系統論は一つのロマンである。初めからそれは一つの仮説である。しかし事実のない仮説は成り立たない。事実を欠く仮説は無意味である。系統論という、複雑な形成過程を経て混沌とした状態にある言語の中に一本の筋を通そうという、この仮説の拠りどころとなる唯一の事実が、比較対応である。それは先に述べた言語の諸要素を選り分ける規準である。複雑な混合体を整理して、まず一つの言語の異なる時代の形を、ついで異なる言語間で互いに関連する事項を照合する。その結果おのずからえられるものが、規則的な対応である。

言語によっては、それが成立する範囲はごく限られているかもしれない。しかしそれは確実なものでなければならない。印欧語の文献学的な研究とその比較文法は、語族・系統の設定にこうした事実があることを経験的に実証した。理論的には、仮説を支える事実だから、文献にあたえられた形のままで対応がえられることが望ましい。虚構としての再建形による対応は、証明力をそれだけ弱める危険がある。かつてのインド・ヒッタイト語の仮定がその一例である。これはヒッタイト語をその他の印欧諸語の祖語と同等に古いとみる、アメリカの一部の学者の主張である。その結果は、対応による帰結ではなくて、ヒッタイト語を中心とする再建のための再建、仮定のつみ重ねに終ってしまった。

比較対応がえられれば、それによって借用された語彙を排除することができる。ところがそこにも資料的な制約があるように思われる。例えば、次の表は英・独語の語彙の中から、意味を頼りに英語のpをふくむ語彙にドイツ語のそれをひき当てたものである。これは二つの異なる言語間の対応であるが、事実としては一つの言語のある時期と後の時期との形の間でも同じ操作が行われる。いずれにしても規則的な音対応とできる限りの意味の一致が求められなければならない。

	英	独
(1)	path	Pfad
(2)	penny	Pfennig
(3)	pipe	Pfeife
(4)	pile	Pfeil
(5)	pillow	Pfühl
(6)	plant	Pflanze
(7)	plight	Pflicht
(8)	pluck	pflücken
(9)	pole	Pfahl
(10)	pool	Pfuhl
(11)	pound	Pfund
(12)	post	Pfosten
(13)	cheap	Kauf
(14)	help	helfen
(15)	hope	hoffen
(16)	open	offen
(17)	ripe	reif
(18)	ship	Schiff
(19)	sleep	schlafen
(20)	soap	Seife

これらをみてすぐわかるように、英語の語頭のpにはドイツ語のpfが、語中のpにはfが規則的に対応している。これはいうまでもなく、ゲルマン語の中でドイツ語だけが経験した、いわゆる第二子音推移の結果で、そのために英語との間にこうしたずれが生じたと考えられている。pがfとなる変化は日本語にもかつておこったと想定されているので、容易に了解されよう。

さて、これらの語彙の中で、印欧語の他の語派との対応が指摘される形は少ない。というのは、ゲルマン語のpは、グリムの法則、すなわちゲルマン語全体のうけた子音推移を考慮にいれると、もしその対応が印欧共通基語にさかのぼりうるものとすれば、bが想定される。ところが、先に述べたように、この音をふくむ対応は僅少である。そこでこれらの比較対応を語源辞書で当ってみると、(2)(3)(4)(5)(6)(8)(9)(11)(12)(13)と半数の語彙がなんらかの意味でラテン語から、

あるいはその口語層の形からの借用である。それらには各々歴史的な背景があろう。しかしそれらが一度英語やドイツ語の中にとりこまれ、そしてその歴史の中で他の語彙と同じような音変化をうけると、やがてそれらは借用されたということが忘れられてしまう。もしここでラテン語をわれわれが知らなかったら、これらを原ゲルマン語のもつ語彙として認めざるをえないであろう。またラテン語を通して他の諸派との関係が求められていたのを、直接結びつけるという誤りを犯すことにもなる。ある語彙が規則的な音対応を示すからとして、それだけに系統の証明をゆだねることは危険である。

上記の表の中からラテン語に関係するものを除いた中で、(14)(16)(18)(20)は北、あるいは東ゲルマン語にも本来の対応が認められるが、(7)(15)は英、独語の属する西ゲルマン語にしか対応が認められない。これらは英・独語の flood : Flut, great : gross, king : König, sea : See などと同様に、ゲルマン語に特有の語彙といわれるものである。そうした語彙は他の印欧語に対応が認められないのだから、もちろん共通基語に由来する可能性は少ない。とすれば、これは印欧語族であるゲルマン語族が別系統のある言語の所有者から借用したもの、つまりこれももとは借用語だと考えねばならない。ただラテン語からの借用語と違って文献以前の歴史がわからないので、その由来を完全に解明することはできないが、これらがゲルマン語の語彙ではあっても、ゲルマン語が印欧語族に属するという証明には用いられない。

こうした事実をもう少しつきつめて考えていくと、いく度も指摘されてきたように、借用か本物かはただクロノロジーの差に帰着する。先史時代に各言語は印欧語どうしでも、また他の語族とも接触し、語彙を互いに借用した。しかしそれらは長い歴史の間には本物と区別がつかないような姿をとってしまう。これは日本語に早くに入った外来語の形をみても明らかである。文献以前についてわれわれが明らかにできることは、比較対応の成り立つ範囲に限られている。その限定のためには、先に述べたように、その言語のもつすべての語彙について、語源研究が行われなければならない。これによって初めてわれわれはその言語の混合の実体について語ることができる。任意の語彙について

だけ行われた比較研究は、どうしても恣意的なものととられやすい。これは、ブルーグマン(K. Brugmann)以前の印欧語研究が文献学者たちによって批難をうけた大きな弱点の一つであった。各言語の一語一語についてのそうした綿密な研究が重ねられ、互いに異なる立場から論議された結果、初めて真の比較文法が成立する。どの語源辞書もいくども書きかえられてきた。印欧語でも全体についていえば、その語源のない語彙は非常に少ない。ある有名なウラリストが、「インド・ゲルマニストはみなオプティミストで、ポコルニィ(J. Pokorny)の『印欧語語源辞典』の八〇%は疑わしいか、誤っている」とある席で批難した。ある意味でこの批判は当っているかもしれない。語源研究は完璧を期することはできない。しかしそれは、一つの言語について網羅的でなければならない。そこで初めて二〇%でも確実なものがえられるからである。

五　比較に有効なもの

ヒッタイト語の場合、すべての語彙一五〇〇について検討した結果、その約二割に印欧語としての対応が指摘された。もちろんこの言語の表記は主に楔形音節文字で、これにスメール・アッカド語の象形文字を併用している。そのために語彙の全貌はなかなかとらえにくいことは事実である。例えば、親族名称にしても、これは印欧語の中では比較的安定した語彙に属し、英語でも father, mother, brother, sister, son, daughter, nephew といった語が、なんらかの意味で直接共通基語の姿を伝えていると考えられる。ところがヒッタイト語では祖父・祖母・父・母・孫・いとこ以外は象形文字表記で音価が不明、これらの意味を表す語彙も huhha-, hanna-, atta-, anna-, hašša-, anniniyami- と、他の語派に対応する形はほとんどない。そして母音交替のないa、二重子音、tあるいはnといった子音の使用などから、これらの語は本来子供が使うよびかけの語に基づく形のように思われる。他の語派にも tata-, atta-, nanā と

いった同じ種類の語がいくつもみられるからである。これらは、たとえ形が対応したとしても、シューヒャルト(H. Schuchardt)のいう人間の基本的な語彙に属し、系統の証明にあまり役立たない。ヒッタイト語は、こうした語源不明の語が多く、人名・地名にも印欧語族の痕跡をほとんど示していない。そして対応の成り立つ二割の語彙の中には、「飲む」「洗う」などの動詞のように、トカラ語にしか対応が認められないというものもふくまれている。にもかかわらずヒッタイト語が印欧語だと判断されたのは、この言語全体にわたる研究の結果、対応の確実な語彙の中に、また名詞・動詞の文法体系の中に、真に印欧語的な特徴が他の諸言語と同じように指摘されたからである。もし語彙の割合だけからいえば、非印欧語とみなされる可能性も否定できないであろう。

比較文法にとってもっとも重要なギリシア語でも、その語彙のうち語源的になん割が印欧語系と認められるであろうか。正確な数字はわからないが、より印欧語よりの立場に立って概観するとしても、おそらく五割以下ではないだろうか。その割合はホメーロスの数行を読んで、その語彙の出所を調べれば、すぐに感じられよう。『イーリアス』の冒頭の「歌え、女神よ、ペーレウスの子アキレウスの呪わしき怒りを。それは数知れぬ苦悩をアカイア人にあたえ……」というここまでの詩句の中で、確実に印欧語系と思われる語彙は一つもふくまれていない。紀元前二〇〇〇年頃から、後のギリシア人はギリシアの地に侵入し、多くの地中海民族やセム系の人々と接触した。そして彼らの生活習慣や信仰を、そして語彙や表現までも吸収した。これは地名や神名をみれば明らかである。その結果が詩的に凝結したものがホメーロスだとしたら、そこに印欧語以外のものが満ち満ちていたとしても不思議ではないだろう。ギリシア語の名でよばれる言語は、文献の初めから非印欧語的要素を多量にふくんでいる。そうした要素を吸収して、われわれのいうギリシア語は形成されたのである。

このように語彙は、言語組織の中で比較的不安定な要素である。ヒッタイト語もギリシア語も、語彙の上からは完全な混合語であり、むしろ非印欧語的色彩に富んでいる。一つの語彙がその文化とともにはるかインドから、はるば

るヨーロッパの果てまで人づてに流れこんでくるということもある。例えば、「胡椒」をあらわす英・独語pepper:Pfefferは立派にpとpfの対応を示している。この語彙は全ヨーロッパに同じような形で分布しているが、そのもとはラテン・ギリシア語のpiper, piperiである。プルータルコスや大プリニウスの言葉によって、われわれは胡椒がようやくローマ時代に食卓にのぼるようになったことがわかる。そしてさらに古くギリシアでは、これが医療に用いられていた。そしてさらにさかのぼると、『エリュトラ海航海記』などのギリシア人の記録によって、これがインド産であることを知り、そこで遂にわれわれはサンスクリットのpippaliという形にぶつかる。ただこの形とギリシア・ラテン語の形は、lとrの違いを示している。これはペルシア経由のためにlがrにかえられたか、あるいは中期インド語pippariにみるrをもった口語層の形から直接に借用されたのか、いずれにしても胡椒はその名とともにインドからセム世界へ、そしてヨーロッパへと伝えられ借用されていったのである。そしてこのサンスクリットの形自体も、その形から判断して本来はインド・アーリア系のものではなく、インド土着の言語からの借用語と考えられる。

このように文化語といわれる多くの語彙は、ワインとかオリーヴのように、ものそのものとともに借用され、どこまでも流れていく。その経路を一つ一つつきとめることも、われわれにとって重要な課題の一つである。それらを除いて残る語彙群の対応関係が、系統の判定に有効なものとなる。印欧語ならば、そこに多くの諸派が参加する形、特殊な変化をするタイプの語彙など、いわば印欧語のマークとなるような形が認められることになる。日本語がアルタイ語系というのならば、やはりそこに真にアルタイ語的な語彙の対応が認められるだろう。そのためには、既述のように、語彙の全般的検討と比較に有効なものの選出がまずなされなければならない。そしてその対応は、量もさることながら、質も重要であるといえよう。ある語族に属するある言語の一方言が独立した言語と認められるようになるには、外からの借用、内からの文法組織にたいする類推による水平化など、長い形成の過程が想定されるからである。

ここで対応の質ということについて考えてみよう。どの言語も、名詞や動詞について、一方では不規則な形を保ち

ながら、他方では文法における不規則をなるべく排除して一定の型にまとめようとしている。印欧語の古層の言語についてみれば、名詞にも動詞にも語幹形成母音という、それ自体がeとoに交替する母音があって、これを接辞として伴った語幹は、語幹部での母音交替がなくなり、いわゆる規則変化のタイプを構成する。したがって、この種の型に属する形はヒッタイト語を除くとどの言語にも数多く類型化しているために、類推で成立した形の範囲がとらえにくい。したがって、そうした型の対応形はたしかに一致は著しいが、本当に基語時代からのものか、かえって疑問を感じさせる。例えば、英語の動詞 bear に対応するサンスクリット、ギリシア、ラテン、ゴート、古教会スラヴ、アルメニア語の一人称単数形 bhárā-mi: phérō: ferō: baíra: berǫ: berem は、その典型である。それよりも、英語 is に対応する ás-ti: es-tí: es-t: is-t: jes-ti: eš-zi(ヒッタイト)のほうが、その三人称複数形 s-ánti: s-unt(サンスクリット、ラテン)などにみる語根部の es-: s- という交替によってどの言語でも不規則形として扱われているだけに、それがこのように一致するということで、比較には一層有効とみなされる。名詞ならば、英語 yoke に対応する中性形 yugám: zugón: iugum: juk: yugam(ヒッタイト)のような語幹形成母音をもつタイプよりも、先に述べた異語幹曲用のような特殊な不規則形の対応に注目すべきである。このタイプに属する形は歴史時代に入ると、ある言語では不規則形のゆえに忘れられ、あるいは r か n のいずれか一つの語幹の選択によって固定されていった。その特殊性こそ、このタイプに属する語彙が基語時代の名残りであることを物語っている。その他、例えば、ギリシアの神ゼウス Zeús の対応、あるいは英語 cow の対応などは、長二重母音をふくむ孤立した形であるために、比較には貴重な資料とされている。(7)

　このような対応の処理にあたって印欧語に有利な特徴は、母音交替の形態論的な活躍である。例えば、英語の relinquish はフランス語からの借用形だが、同じ意味の古典ラテン語の動詞・一人称単数形(re-)linquō の対応は、サンスクリット、ギリシア、ゴート語で riṇáj-mi: leípō: leihva である。ギリシア、ゴートの二語派では語根部が ei を示し、ラテン、サンスクリットでは li-n-q-, ri-ṇ-aj- と弱階梯の i をもっている。そして、これは接辞 n の挿入によって形成

されたいわゆる鼻音nをマークとする現在語幹である。ラテン語の場合は、この linq- という語幹は現在形の人称変化で固定的であるが、サンスクリットの形は語幹形成母音を用いないタイプとして、人称変化のさいにaをおとす母音交替をもつタイプを保持している。このように、いくつかの語派について互いに関連する形が同じ範疇に属しながら、少しずつ違った形を示すということは、まったく一致した対応よりもはるかに示唆に富むものであり、基語時代の形の推定にも重要な資料となる。

印欧語の場合には、一つの対応について、こうした多様性がみられることが多い。それは、基語の形を保持しながらも、各語派がそれぞれ独自の発展をとげた結果である。例えば、英語 sister の対応形をサンスクリット、ラテン、ゴート、古教会スラヴ語の順にあげると、svásar- : soror : swistar : sestra である。これをみると、語頭音節のvの音はインドとゲルマン語派に、第二音節のtはゲルマンとスラヴ語派に限られている。このvの音は、sv- を示すもう一つの親族名称の対応で、「姑」を意味するドイツ語 Schwieger (mutter) と直接関係づけられるサンスクリット、ラテン、古教会スラヴ、古高地ドイツ語の形 śvaśrū́- : socrus : svekry : swigar を参考にすると、本来は存在し、ラテン語では消失したと考えられる。ただしスラヴ語の形は「姉妹」にはvがなく、「姑」にはこれがあるという違いを示している。tの要素は、挿入的な子音か、あるいはおそらく「父」や「母」など多くの親族名称の接尾辞にみるこの要素からの類推であろう。このように多くの対応が決して一様でなく、いくつかの点でずれを示すところに、かえって印欧語の比較文法の豊かさがあるといえよう。

このような語彙の比較のみならず、名詞形成の接尾辞や格語尾、動詞の人称語尾にもかなりの一致が認められる。例えば、英語・ドイツ語の other, ander は同じゲルマン語のゴート語 anþar、さらに拡大するとラテン alter (lは本来nと交替したとみる)・サンスクリット ántara-・リトアニア añtras のように対応がみられる。この -ter(-o) という接尾辞は多くの語派で、右と左、内と外、のような対比される二者について用いられている。右と左、内と外をあら

わすラテン語 dexter : sinister, interior : exterior はその典型である。多くの接尾辞について、それを伴った語彙に完全な対応形が認められれば、単なる語根部の一致以上に具体的な語形の再建が可能になる。上にあげた interior というラテン語の形は、super : superior でわかるように、-ter の後にさらに対比の接尾辞 -ior をつけ加えた形である。この接尾辞もまた、英語 junior, senior と同形のラテン語にみられる通り、比較をあらわす機能をもち、インドを初めいくつかの語派に対応をもつ。したがって -ter-ior という形は、ラテン語だけの作った形であった。[8] このようにして、比較対応がこまかくえられれば、逆にそれだけ各語派の独自の形の発展も一層はっきりととらえられてくる。

むすび

われわれはこれまでに、言語の系統を決める条件となる比較方法について、もっぱら印欧語を例として、その資料上の制約、語彙の扱い、対応の量と質などの問題を中心に考察してきた。言語の形成の過程は複雑であり、そのすべてを解明することはできない。にもかかわらず、言語の系統は、もし比較文法が成立するならば、一つにしぼられ、明確に定められよう。比較文法はその語族に属する諸言語の歴史の間隙を埋め、形成の道を明らかにすることができるからである。いくつかの語彙の単なる形の上の一致や、類型論的な特徴によって安易に系統が論じられてはならない。既述のように、そこには多くの危険がひそんでいて、われわれを誤った結論に導いてしまう。そうした誤りを避けるためには、われわれは問題の言語のすべて、文法から語彙に至るあらゆる要素について検討しなければならない。

不幸にして日本語の系統は、いまだに解明されていない。それをはばんでいるものは、日本語という言語そのものの性質であろうか。また比較に有効な資料が欠けているためであろうか。日本語はその形成の過程において、その系統を見失わせるほど大きな独自の変化をうけたのであろうか。さまざまの疑問はあるが、逆にいえば、こうした謎が

ある限り、それは魅力を失わない。印欧語でいえば故土問題と同じで、果てしない夢があるといえよう。多くの日本語、および日本語をとりまく諸言語の専門家の研究によって確実な成果が積み重ねられ、遂にその解明に至る日を期待したい。

補　説

本文中に比較対応の例として、英語pとドイツ語pf・fの場合をあげたが、以下にこれと関連のある形をあげて、もう少し対応の事実を補っておきたい。もちろんこれらの対応のリストは、組織的に集められ選ばれたものではなく、英・独語の中から歴史的背景をかまわず筆者が適当に列挙したものにすぎない。まず英語のtをふくむ語彙をあげると、

英	独
tap	: Zapfen
ten	: zehn
tide	: Zeit
timber	: Zimmer
token	: Zeichen
tongue	: Zunge
tooth	: Zahn
top	: Zopf
twist	: Zwist
two	: zwei
heat	: Hitze
heart	: Herz
net	: Netz
salt	: Salz
better	: besser
bite	: beissen
eat	: essen
foot	: Fuss
great	: gross
hate	: hassen
sit	: sitzen
shoot	: schiessen
sweet	: süss
water	: Wasser

これによってわれわれは、英語のtがドイツ語のz・tz、つまり[ts]に対応し、さらにまた現代ドイツ語ではssと書かれる[s]の音も対応することがわかる。そこでこのssは、かつては単なるsの音ではなくて、[ts]に近い調音をあらわそうとしたものではないか、という推測も可能になる。

つぎは英語のkの対応である。

英	独
can	: können
clean	: klein
cloth	: Kleid
cold	: kalt
comb	: Kamm
come	: kommen
cow	: Kuh
cower	: kauern
keen	: kühn
king	: König
drink	: trinken
think	: denken
work	: Werk
book	: Buch
break	: brechen
brook	: Bruch
cake	: Kuchen
cook	: kochen
(a) like	: gleich
make	: machen
seek	: suchen
stick	: stechen
strike	: streichen
wake	: wachen
weak	: weich
week	: Woche

これでみると、英語のkはドイツ語のkとch[x][ç]に対応し、とくにchは語中、母音間にあらわれている。このようにして英語のp・t・kにドイツ語の対応する音はpf(f)・z(ts・ss)・k(ch)であること、つまりドイツ語のほうがどれも破擦・摩擦音化する傾向にあったのではないか、ということがわかる。

つぎに英語のb・d・gの対応をあげると、

	英	独
	bear	: gebären
	best	: best
	bid	: bieten
	bind	: binden
	blade	: Blatt
	blind	: blind
	blood	: Blut
	bloom	: Blume
	blue	: blau
	bread	: Brot
	break	: brechen
	breast	: Brust
	bride	: Braut
	bring	: bringen
	broad	: breit
	brother	: Bruder
	brown	: braun
	burn	: brennen
	rob	: Raub
cf.	give	: geben
	have	: haben
	live	: leben
	weave	: weben

	英	独
	daughter	: Tochter
	day	: Tag
	dead	: tot
	deaf	: taub
	deed	: Tat
	deep	: tief
	deer	: Tier
	do	: tun
	door	: Tür
	dream	: Traum
	drink	: trinken
	blood	: Blut
	glad	: glatt
	good	: gut
	hard	: hart
	hold	: halten
	red	: rot
	shade	: Schatte
	wed	: Wette
	word	: Wort
cf.	blind	: blind
	find	: finden
	hand	: Hand
	wonder	: Wunder
	wind	: Wind

英	独
garden	: Garten
give	: geben
glide	: gleiten
go	: gehen
god	: Gott
good	: gut
goose	: Gans
great	: gross
green	: grün
grey	: grau
long	: lang
lung	: Lunge
sing	: singen
ring	: Ring

これによって、英語のbとgはドイツ語でもかわらないが、dは一般にドイツ語ではtに対応しているといえよう。

つぎに摩擦音のf・th・hについてみてみよう。

英	独
father	: Vater
feather	: Feder
feel	: fühlen
fever	: Fieber
find	: finden
fire	: Feuer
fish	: Fisch
five	: fünf
flesh	: Fleisch
folk	: Volk
four	: vier
fox	: Fuchs
free	: frei
full	: voll

英	独
thank	: danken
that	: das
thick	: dick
thin	: dünn
thirst	: Durst
thorn	: Dorn
three	: drei
throw	: drehen
thumb	: Daumen
thunder	: Donner
bath	: Bad
brother	: Bruder
cloth	: Kleid
death	: Tod
feather	: Feder
hearth	: Herd
north	: Nord
south	: Süd
father	: Vater
mother	: Mutter
thousand	: tausend
weather	: Wetter

英	独
half	: halb
hand	: Hand
hate	: hassen
have	: haben
hear	: hören
heart	: Herz
help	: helfen
hen	: Henne
high	: hoch
hold	: halten
hope	: hoffen
hot	: heiss
house	: Haus
hundred	: hundert

これらの例から、英語のfとhはドイツ語でも同じ音で対応するが、th[θ][ð]は多くの例でドイツ語dに対応し、ときにtにも対応することがわかる。もちろんこの場合、tを示す各語については、考証が必要であるが、先にあげた英語dに対するドイツ語tの対応が考慮されよう。またthにたいするdの対応は、dがtになった穴を埋めるような結果になっている。以上の結果をまとめてみると、つぎのような英・独語の対応があることになる。それぞれの音に想定される印欧基語の音を加える。

印欧	b	d	g
英	p	t	k
独	pf-	z	ch
	-f(-)	-tz(-)	k
		-ss(-)	

印欧	bh	dh	gh
英	b	d	g
独	b	t	g

印欧	p	t	k
英	f	th	h
独	f	d (t)	h

(1) A. Meillet, Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes[8], Paris, 1937, p. 151.

(2) A. Martinet, A Functional View of Language, Oxford, 1961, pp. 151 ff.

(3) E. Benveniste, "La classification des langues", Conférences de l'Institut de linguistique de l'Université de Paris, XI, 1952–53=Problèmes de linguistique générale, Paris, 1966, pp. 99 ff.

（4）W. P. Lehmann, Proto-Indo-European Syntax, Austin and London, 1974.
松本克己「印欧語における統語構造の変遷——比較・類型論的考察——」（『言語研究』六八号、一九七五年）一五頁以下。

（5）G. R. Solta, Die Stellung des Armenischen im Kreise der indogermanischen Sprachen, Wien, 1960. なお著者はアルメニア語と他のいくつかの語派に対応をもつ形についても分類して扱っている。

（6）高津春繁『印欧語比較文法』岩波書店、一九五四年、一六六頁以下。

（7）同右、一五五頁。

（8）同右、一七五頁。

参考文献

高津春繁『比較言語学』岩波書店、一九五〇年。
服部四郎編『言語の系統と歴史』岩波書店、一九七一年。
『言語史研究入門』（日本語の歴史、別巻）平凡社、一九六六年。
W・B・ロックウッド『比較言語学入門』大修館書店、一九七六年。

2 アルタイ語系統論

池上二良

一 現代および歴史上のアルタイ語

アルタイ語とは、チュルク語、蒙古語、ツングース語の三言語を合せた名称である。チュルク語は広義のトルコ語のことである。またここにいうツングース語は広義のツングース語をさし、ツングース・満州語ともいう。これらの言語は、アジア大陸内陸部からその北にかけ、西はヨーロッパ東端にまでおよぶ広大な地域で、それぞれチュルク人、蒙古人、ツングース・満州人によって、またごく一部では同化した他民族によって使われている。西からほぼ上記の順に隣接していて、その名称はこの地域のおおよそ中央にあるアルタイ山脈の名による。

現代のアルタイ三言語は、それぞれ多くの方言にわかれており、それらの民族の種々の部族によって使われている。三言語のどれにも、その言語のすべての話し手の共通語はない。また今日のこる文献によって歴史上のアルタイ語を知ることができる。文献が豊富にのこる最古の年代は、チュルク語が八世紀、蒙古語が一三世紀である。ツングース語は、一二世紀から遺文があるが、一七世紀になって非常に豊富になる。多くの方言にわかれるアルタイ三言語が、それぞれチュルク・チュワシ祖語、蒙古祖語、ツングース・満州祖語にさかのぼることはあきらかとされている。[1]

アルタイ語の系統論に入るにさきだち、まずそれらの言語の方言と歴史上の言語についてふれる。[2] 各方言はそれぞれ「―方言」とも、「―語」ともよばれる。以下、場合に応じどちらもつかう。なおソ連内人口は一九七〇年の調査による。括弧内は人口のうち、その言語を母語とする人数の比率。中国内人口は、とくに記さぬかぎり一九七二年の概数。

現代のチュルク語にはつぎの方言がある。

(1) ヤクート方言 シベリア東部のソ連ヤクート自治共和国でヤクート人が使う。人口二九万六〇〇〇(九六・三

%)。北部のドルガン人もこの言語をつかう。

(2) トゥワ方言(ソヨト方言、ウリヤンハイ方言ともいう)　サヤン山脈地方のソ連トゥワ自治共和国とモンゴル人民共和国西部でトゥワ人がつかう。人口一三万九〇〇〇(九八・七%)。

(3) トファ方言(カラガス方言)　ソ連クラスノヤルスク地方南部でトファ人が使う。人口六〇〇(五六・三%)。

(4) ハカス方言(サガイ方言とカチャ方言をふくむ)　サヤン山脈地方のソ連ハカス自治州でハカス人が使う。人口六万七〇〇〇(八三・七%)。

(5) ショル方言　ソ連北アルタイ地方のコンドマ、ムラスス、トミの諸川地方のショル人が使う。人口一万六〇〇〇(七三・五%)。

(6) チュルム・タタル方言　オビ川の支流チュルム川地方のチュルク人が使う。

(7) アルタイ(チュルク)方言(オイロト方言)　アルタイ地方のソ連ゴルノ・アルタイ自治州のアルタイ人が使う。人口五万六〇〇〇(八七・二%)。かなり異なる南北二方言群からなり、文語は南方言にもとづく。

(8) 黄ウイグル方言(サルグ・ユグル方言)　中国甘粛省粛南裕固族自治県、酒泉県に居住する裕固(ユグ)族の一部(サルグ(=黄)・ユグル(=ウイグル)人)がつかう。その数は約二〇〇〇(テーニシェフ、Тенишев, 1976 a, p. 4)。他は蒙古語、漢(ハン)語(中国語)またはチベット語をつかう。

(9) サラル方言　中国青海省循化撒拉(サラ)族自治県などのサラル人が使う。人口三万。かれらの口承によれば、サマルカンドから一三七〇年にここへ移住したという(Тенишев, 1976 b, p. 26)。

(10) 新ウイグル方言　中国新疆維吾爾(ウイウル)自治区とソ連カザフ共和国など中央アジアのウイグル人が使う。人口中国三九〇万、ソ連一七万三〇〇〇(八八・五%)。

(11) ウズベク方言　中央アジアのソ連ウズベク共和国、アフガニスタン、中国新疆のウズベク人が使う。人口ソ

連九一九万五〇〇〇(九八・六%)、アフガニスタン一二〇万、中国一万。

(12) キルギズ方言　中央アジアのソ連キルギズ共和国、中国新疆の克孜勒蘇柯爾克孜(キルキャズ)自治州、アフガニスタンでキルギズ人が使う。人口ソ連一四五万二〇〇〇(九八・八%)、中国六万、アフガニスタン二万五〇〇〇。

(13) カザク方言　中央アジアのソ連カザフ共和国、中国新疆の伊犁哈薩克(イリハサク)自治州など、モンゴル人民共和国西部でカザク人が使う。人口ソ連五二九万九〇〇〇(九八%)、中国五三万、モンゴル四万。

(14) カラカルパク方言　中央アジアのソ連カラカルパク自治共和国などでカラカルパク人が話す。人口二三万六〇〇〇(九六・六%)。この方言はカザク方言の下位方言ともみられる。

(15) ノガイ方言　ソ連コーカサスの北の地方のノガイ人が使う。人口五万二〇〇〇(八九・八%)。

(16) カラチャイ・バルカル方言　ソ連北コーカサス地方、キルギズ共和国でカラチャイ人、バルカル人が使う。人口カラチャイ人一一万三〇〇〇(九八・一%)、バルカル人六万(九七・二%)。

(17) クムク方言　コーカサス北部のソ連ダゲスタン自治共和国でクムク人が使う。人口一八万九〇〇〇(九八・四%)。

(18) カライ方言　ソ連リトアニア共和国、ウクライナ共和国南部、クリミア地方、ポーランド、ルーマニアでカライ人が使う。ソ連内人口四六〇〇(一二・八%)。

(19) クリミア・タタル方言　ソ連クリミア半島でおこなわれ、南北二つの方言群があったが、話し手は第二次大戦後は主にウズベク共和国へ移されたという。南方言はトルコ方言に属する。

(20) タタル方言　ボルガ川中流のソ連タタル自治共和国とその近隣地方、さらに西シベリアなど、また東ヨーロッパ諸国や中国新疆でタタル人が使う。人口ソ連五九三万一〇〇〇(八九・二%)、中国四〇〇〇。

(21) バシキル方言　タタル自治共和国の東に接するソ連バシキル自治共和国でバシキル人が話す。人口一二四万

（六六・二％）。

(22) トルクメン方言　中央アジアのソ連トルクメン共和国、イラン、アフガニスタン、さらにシリアなど近東諸国でトルクメン人が使う。人口ソ連一五二万五〇〇〇（九八・九％）、上記近隣諸国七九万二〇〇〇。北コーカサスには、ここへ移った人々のトルフメン方言がある。

(23) ガガウズ方言　ソ連ウクライナ、モルダヴィヤ両共和国、ルーマニア、ブルガリアでガガウズ人が使う。人口ソ連一五万七〇〇〇（九三・六％）、上記他二国約五〇〇〇。

(24) アゼルバイジャン方言　ソ連アゼルバイジャン共和国でアゼルバイジャン人が使う。人口四三八万（九八・二％）。さらにイランなどでおこなわれる。

(25) トルコ方言（オスマン・トルコ語、オスマンリ語ともいう）　トルコ共和国、近隣の東ヨーロッパ、近東諸国などでトルコ人が使う。トルコ共和国の人口は三九一八万（一九七五年）。

(26) チュワシ方言　ボルガ川中流のソ連チュワシ自治共和国でチュワシ人が使う。人口一六九万四〇〇〇（八六・九％）。

チュワシ方言とその他の方言の間にとくに著しい差異があり、それにくらべれば、大多数の諸方言の間の差異は小さいと言えよう。

過去にさかのぼってみると、中国の史書に載る北狄、東夷のなかのいくつかは、アルタイ民族とみられているが、以下に記す二、三を除き、その言語についてはあきらかでない。またアルタイ三言語と関係がある言語であってすでに死滅したものもあろう。古代のフン人の言語についてもあきらかでない。その後のブルガール人の言語には、ダニューブ・ブルガール語とボルガ・ブルガール語がある。前者がどんな言語かまだ明確でないが、後者は明白に今日のチュワシ語と密接な関係にあるとみられる（ベンツィング、Benzing, 1959 b, pp. 687, 691, 697）。

古チュルク語は、突厥字による遺文にのこり、八世紀に記された北蒙古のオルホン川地方のクルテギン、ビルゲカガンの二人の紀功の碑文とトラ川上流のトニュククの功を刻んだ碑文、さらにエニセイ川上流の碑文などがあり、これらは突厥語ともよばれる。一部は七世紀のものともみられている。そのほか、ブラーフミー字、マニ字、ソグド字で書かれた八世紀ないし九世紀以来の古チュルク語の文書が、中国新疆、甘粛省の吐魯番や敦煌などで発見されている。さらにソグド字に由来するウイグル字で書かれた古いウイグル語の文献も同地方で発見されている。以上の遺文の中心的年代は西暦七五〇年から一三〇〇年である(ガバイン、Gabain, 1950, p. 2)。これらのチュルク語がイスラム文化の影響を受けなかったものであるのに対し、つぎのチュルク語はそれを受けた言語である。(3)

東トルキスタンのカラハン王国(九四〇—一二一二年)のチュルク語は、一一世紀にマフムード・アルカーシュガリー(Maḥmūd al-Kāšyarī)が著わした『チュルク語総覧(Dīvān Luyāt at-Turk)』や同じく一一世紀の『クタドグ・ビリグ(Kutadgu Bilig)』という教訓書などの文献をのこしている。これらはアラビア字で記されているが、後者の一本はウイグル字で書かれている。中央アジアには、ホラズム・チュルク語の文語が一三世紀に、チャガタイ文語が一五世紀に生じた。また南ロシヤには、キプチャク語(コマン語)があった。一三世紀末(おそくとも一四世紀なかごろ)の『コーデクス・クマニクス(Codex Cumanicus)』というチュルク語摘録(ラテン・ペルシア・チュルク語語彙をふくむ)がおもな文献としてのこっている。キプチャク語は、のちの遺文もあるが、すでに一一世紀の『チュルク語総覧』に記録されている。やはりオグズ語の記録が同書にあり、また一三世紀の遺文にのこるセルジュク語があり、トルコ方言はこれらにさかのぼる。

その後、多くの地方でチュルク語はアラビア字で書かれた。しかしトルコ語は一九二八年ローマ字を採用した。ソ連領内では、上記の(1)(2)(4)(7)、(10)—(17)、(19)—(24)、(26)の方言が一九三〇、四〇年代からロシヤ字を使う新しい文語をもった。なおそのまま一時ローマ字を使った。中国内の新ウイグル方言、カザク方言は近年ローマ字を使うという。

チュルク語方言の分類については、ベンツィング(Benzing, 1959 a, pp. 1–5)による分類だけをあげておく。この分類は、ベンツィングが音韻史、とくに文法史的見地から関係深い方言をまとめたものである。

a　ブルガール群
チュワシ方言、ボルガ・ブルガール語。ただしダニューブ・ブルガール語の位置は不明。

b　南チュルク語(オグズ群)
1　トルコ方言、ガガウズ方言、クリミア・タタル方言の南方言。
2　アゼルバイジャン方言。
3　トルクメン方言、トルフメン方言。

c　西チュルク語
1　ポント・カスピ群　αカライ方言、βカラチャイ方言、バルカル方言、γクムク方言。
2　ウラル群　αタタル方言、クリミア・タタル方言、βバシキル方言。
3　アラル・カスピ群　αカザク方言、カラカルパク方言、ノガイ方言、βキルギズ方言。
むかしのコマン語、キプチャク語。

d　東チュルク語(ウイグル群)
1　ウズベク方言
2　新ウイグル方言、黄ウイグル方言。
むかしの古ウイグル語、チャガタイ語、カラハン語、ホラズム・チュルク語。

e　北チュルク語
1　アラル・サヤン群　αアルタイ方言、βショル方言、ハカス方言、γトゥワ方言、カラガス方言。

2　北シベリア群　ヤクート方言、ドルガン語。
古チュルク語、またあるいは拓跋(タブガチ)(北魏)の言語もこの群に入る。
西チュルク語の分類は試論としている。なおベンツィングもキルギズ方言とアルタイ方言との関係を問題としているが、バスカーコフ(Баскаков, 1969, pp. 350–354)の方言分類では、キルギズ方言を、カザク方言と同類とせず、アルタイ方言の南方言と近い関係においている点が著しく異なる。
現代の蒙古語にはつぎの方言がある。
(1)　モゴール方言　アフガニスタン。この方言は死滅に瀕している。
(2)　カルマク方言　ボルガ川下流のソ連カルムイク自治共和国。これを使うカルマク人の人口は一三万七〇〇〇(九一・七％)。カルマク人は一七世紀に東方からここへ移動した。古くは(3)と同じ方言であるが、語彙が今日かなり異なるという(ポッペ、Poppe, 1955 a, p. 9)。
(3)　オイラト方言　モンゴル人民共和国の北西部、中国新疆の巴音郭楞(バインゴル)蒙古自治州、和布克賽爾(フブクサル)蒙古自治県など。
(4)　ブリヤート方言　バイカル湖地方のソ連ブリヤート自治共和国とその付近。これを使うブリヤート人の人口は三一万五〇〇〇(九二・六％)。
(5)　新バルガ方言(バルグ・ブリヤート方言)　中国黒竜江省の呼倫貝爾(ホロンバイル)地方。
(6)　ハルハ方言(モンゴル語)　モンゴル人民共和国。
(7)　南蒙古諸方言(チャハル方言、オルドス方言、熱河の本ハラチン方言・ハラチン中旗方言の両方言(野村・一九四一)、その他)　中国内蒙古自治区など。この項の諸方言は、新しい研究によって、あるいは項をわけてあげられることになろう。
(8)　ダウル(ダグール)方言　中国黒竜江省莫力達瓦(モリ(ン)ダワ)旗、その他布特哈(ブトハ)旗、索倫(ソロン)旗、新疆の伊寧地方。これを使う

達斡爾(ダウル)族の人口は五万。

(9) モングォル方言　中国青海省互助土族自治県および甘粛省。これを話す土族の人口は六万。

(10) 東郷(ドゥンシャン)方言　中国甘粛省東郷族自治県。これを使う東郷族の人口は一五万。

(11) 保安(バオアン)方言　中国甘粛省臨夏県、青海省保安・同仁地方。これを使う保安族の人口は約八〇〇〇(一九五三年)。

(12) シラ・ユグル方言　中国甘粛省粛南裕固族自治県、酒泉県に居住する裕固(ユグ)族の一部(シラ(＝黄)・ユグル(＝ウイグル)人)が使う。その数は約一五〇〇(Тенишев, 1976 a, p. 4)[4]。

蒙古人は中国雲南省(トダエーワ、Тодаева, 1960, p. 9)、チベットなどにもいるが、その蒙古語は知られていない。

モンゴル人民共和国の人口は一九七四年に一四二万二〇〇〇で、そのうち蒙古人は九二％である。(8)から(12)までの方言の話し手を除く中国の蒙古族の人口は一六四万。

話し手の数が圧倒的に多い(2)—(7)の方言に対して、少数部族である(1)、(8)—(12)の方言は、周辺的位置にあって、その蒙古語も著しく異なる。これにくらべると、(2)—(7)の方言間の差異は小さい。

蒙古語方言の分類については、ポッペ(Poppe, 1955 a, p. 23)の分類をあげる。

1　東蒙古語族

A　ダグール語

B　モングォル語

C　東蒙古語(または蒙古語)

D　ブリヤート語

2　西蒙古語族

A　モゴール語

B　オイラト語

C　カルマク語

ウラジーミルツォフ(Владимирцов, 1929, pp. 8, 18)、服部(一九四〇)は、新バルガ方言、ハルハ方言と同列におく。また服部(一九四一)は、東西二派に大別する説には賛成すべき根拠が見出されないとしてとらない。

歴史的にみると、一三・四世紀の蒙古語は、漢字で蒙古語音を書き表わした『元朝秘史』や『華夷訳語』(甲種本、一三八二(洪武一五年))、パスパ字で書かれた文献、アラビア字で書かれた文献などにのこる。(5)蒙古文語はウイグル字に由来する蒙古字で書かれるが、これは『元朝秘史』などで表記されていない母音間のgを書き表わし、もっと古い蒙古語を反映するとみられる点がある。やはり一三・四世紀の遺文(その一つには「チンギス汗碑石」がある)からあり、今日でも内蒙古で行われる。また一七世紀には、蒙古字を改良したトド字で書き表わすオイラト文語が生れたが、これはオイラト方言にもとづく。上記(2)(4)(6)の方言は、今日ロシヤ字で書く文語をもつ。なお、遼(一〇世紀—一三世紀はじめ)を建国した契丹族の契丹語は、契丹字で書かれた碑文などにのこり、その文字は突厥字と関係があることが、村山(一九五一)によって指摘されたが、まだ十分解読されないため、契丹語もあきらかでない。しかし漢字で記された単語によってそれが蒙古語ではないかとみられている。

現代のツングース語にはつぎの方言がある。

(1)　ラムート方言(エウェン方言)　ソ連レナ川より東、オホーツク海の北の地方、またカムチャツカの一部でエウェン人が使う。人口一万二〇〇〇(五六%)。さらに小方言にわかれるが、そのうちアルマニ方言は他方言と著しくことなる。

(2)　エウェンキー方言(狭義のツングース語)　ソ連エニセイ川とその東、ヤクート自治共和国西部、さらにその

南部から東はカラフト北部、南は中国興安嶺までの地方でエウェンキー人が使う。人口ソ連領二万五〇〇〇(五一・三%)。中国領は約三〇〇〇とみる。

(3) ソロン方言　中国興安嶺、呼倫貝爾地方、新疆伊寧地方でソロン人が使う。人口は約六〇〇〇とみる。

(4) ネギダル方言　ソ連アムール下流や支流のアムグン川地方でネギダル人が使う。人口五〇〇(五三・三%)。

(5) ウデヘ方言　ソ連ウスリ川右岸地方でウデヘ人が使う。人口一五〇〇(五五・一%)。

(6) オロチ方言　ソ連アムール川のコムソモリスクとその東の地方でオロチ人が使う。人口一一〇〇(四八・六%)。

(7) ゴルジ方言(ナーナイ方言)　ソ連から中国にかけ、アムール川中流、松花江下流、ウスリ川地方でナーナイ人が話す。人口ソ連一万(六九・一%)、中国五〇〇。

(8) オルチャ方言　ソ連アムール川下流でオルチャ人が使う。人口二四〇〇(六〇・八%)。

(9) オロッコ方言(ウイルタ方言)　ソ連カラフト中部、北部でウイルタ人が使う。人口第二次大戦前約四〇〇、現在は不詳。

(10) 満州語　今日中国黒竜江省のわずかな村落の満州人のほか、新疆伊寧地方の錫伯(シベ)族(人口二万)が使う。

このうち、満州語は他の方言に対してかなりことなっている。

歴史的にみると、金を建国した女真族の女真語があり、一二・三世紀の女真字碑文や明代の『華夷訳語』(乙・丙種本)などに残る。満州語は、清を建国した満州族の言語であって、一七世紀前半以来、蒙古字に由来する満州字で書く文語をもち、『旧満州檔』(清朝初期の記録)をはじめ豊富な文献がある。

(1)(2)(5)(7)の方言は、一九三〇年代からロシャ字(ただしはじめはローマ字)による文語をもったが、(5)の方言では消滅した。

ツングース語の方言分類は、方言分化によるとみられる相違にもとづく筆者(Ikegami, 1974)の分類を示す。[6]

第1群　ラムート方言、エウェンキー方言、ソロン方言、ネギダル方言。

第2群　ウデヘ方言、オロチ方言。

第3群　ゴルジ方言、オルチャ方言、オロッコ方言。

第4群　満州語、ここに女真語も入る。

二　アルタイ語の構造

アルタイ諸語には、その構造のいくつかの基本的な点で一致がある。

まず、文についてみると、三言語いずれにおいても、文がいくつかの成分に分けられる場合、その成分の配列順序は、主部がさき、述部があと、また修飾部がさき、被修飾部があとであるのが基本的とみられる。なお目的語も通常、動詞のまえに立つ。したがって、述部は文末に来る。文が一つの成分からなる場合は、その成分は述部である。[7]　(例)

トルコ語　Bu oda temizdir.（このへやは　きれいだ。）Pazarda güzel bir halı aldım.（市場で　美しい　(ある一枚の)　じゅうたんを　わたくしは買った。）

しかし、『元朝秘史』の蒙古語では、主語の人称代名詞が述部よりあとに来て文末に立つことがしばしばある。またツングース語オロッコ方言の口碑では主語の名詞が文末に立つことがある。

また、『元朝秘史』の蒙古語では、人称代名詞の属格形が所属するものを表わす名詞のあとにもよくおかれる。(例)

eme minu（妻　我が）「我が妻」。

なお、ツングース語エウェンキー方言、ラムート方言では、修飾語が被修飾語と数や格の呼応をする。(例)　エウ

エンキー語(のトゥラ地方の方言)　bū（わたくしたちは）　lūsadiljǐ（ロシヤ人の）　xajakārjǐ（人形で）　əŋkiwun（なかった）　əwire.（遊ば）「わたくしたちはロシヤ人形で遊ば

なかった。」　xaɲakār「人形(複数)」に -ǰï(道具格語尾)がついているのに呼応し、lūsadi「ロシャ人の、ロシャの」にも -ɪ(複数接尾辞)と -ǰï(上記語尾)がつく。『元朝秘史』の蒙古語では数と性の呼応がある(小沢・一九七一、二五六・二五七頁)。

またツングース語では、動詞を否定するのに、一定の語尾をとった否定される動詞のまえに、否定を表わす動詞をならべ、これが文脈に応じて種々の動詞語尾をとる構造がある。右の例で ə-ŋkiwun は否定動詞で ə- がその動詞語幹。əwi-rə は否定される動詞で əwi- が「遊ぶ」の動詞語幹、-rə がこの構造でつかわれるきまった動詞語尾。この種の否定構造はウラル語族のフィンランド語などにもある。

つぎに、アルタイ諸語における単語(自立語)については、それが部分に分けられる場合、主要部分とそのあとに来る付属部分とに分けられる。単語が部分に分けられない場合は、主要部分だけからなっている。すなわち、語は語幹だけからなるか、または語幹と(一つまたはそれ以上の)語尾からなり、語幹はそのなかに(一つまたはそれ以上の)接尾辞をふくむことがある。また語のあとに助詞(別の用語を使えば後置詞、付属語)がつくことがある。(例)　トルコ語　geldik「われわれが行った」　gel-「行く」が動詞語幹、-di「…した」、-k「われわれが」は語尾。　動詞語幹 öldürül-「殺される」　öldür- が「殺す」という語幹、-ül が受身の接尾辞、さらに öldür- は、öl- が「死ぬ」という語幹、-dür が使役の接尾辞。　kar gibi「雪のように」　kar「雪」が名詞、gibi「のように、のような」が付属語。

名詞語幹のあとにつくことのできる語尾は、格語尾、人称(または再帰)語尾その他で、この順につく。ただしトルコ語では逆で、人称語尾、格語尾の順である。動詞語幹のあとにつくことのできる語尾は、動詞変化語尾、人称(または再帰)語尾その他で、この順につく。(例)　エウェンキー語　akinŋunmi「わたくしの(または自分の)兄と」　akin「兄」は名詞語幹、-ŋun「と」は格語尾、-mi「わたくしの、自分の」は人称語尾。　wārən「かれが殺した」　wā-「殺す」が動詞語幹、-rə は動詞語尾、-n「かれが」は人称語尾。ただし、トルコ語 evimde「わたくしの家で」

では ev「家」が名詞語幹、-im「わたくしの」が人称語尾、-de「に、で」が格語尾。しかし『元朝秘史』の蒙古語、蒙古文語、満州語には、（人称代名詞属格はあるが、）人称語尾がなく、チュルク語で黄ウイグル方言、現代サラル方言が、蒙古語でブリヤート、オイラト、カルマク三方言を除く現代諸方言が、動詞につく人称語尾を欠く。[8] なおツングース語エウェンキー方言、ラムート方言では形容詞語幹にも格語尾がつく（上の lüsadi の例参照）。

なお、同じ語尾または接尾辞が、音形の異なる交替形をもつことがあり、どんな音的環境に立つか、またはどんな語幹につくかにより、そのいずれかがあらわれる。（例）トルコ語 odada「へやに」、yatakta「ベッドに」の oda「へや」、yatak「ベッド」は名詞語幹、-da～-ta「に、で」は同じ格語尾の交替形。-ta は無声子音のあとに、-da はその他の音のあとに立つ。語幹も、同様に交替形をもつことがある。

また、子音におわる語幹のあとに、子音ではじまる語尾がつく場合、その間にある音がつなぎ音として入ることがある。（例）蒙古文語　abumui「とる」　語幹 ab-「とる」と動詞語尾 -mui「…する」の間の u がつなぎ音。

語のなかの上述の各部分は、いわば接着しているが、境が明瞭でたやすく識別でき、いわゆる膠着的構造を示している。

ただし、たとえばツングース語オロッコ方言では、さらに融合的構造もあり、その場合二部分が融合していて区別がむずかしい。（例）dakseeh「はりつく」は、動詞語幹 daksa-「はりつく」と動詞語尾-ri「…する」が融合している。

なおチュルク語、蒙古語の形容詞の強調形には、形容詞語幹のまえに、その語幹のはじめの子音と母音に p などの子音をつけた音節を重ねる一種の重複（reduplication）といえる特異な構造がある。（例）トルコ語 kapkara「まっくろい」。kara が「黒い」の形容詞。

また、満州語文語には、まれに、sain「よい」に対する saiǰūn「よいか」、tašan「誤り」に対する tašūn「誤りか」のような形容詞疑問形があり、これらの語形は sain, tašan と疑問を表わす接尾辞とからなっているものであろうが、

語幹に疑問の接尾辞がはめこまれているようにもみえ、あるいは語幹の母音が交替するようにもみえ、その特異な様相が注意される。

人称代名詞語幹の母音交替については後述する。

アルタイ諸語は、基本的に、文の各成分の上述の順序、語における付属部分の後置的位置および膠着性を、文法構造に関する共通の特性としてもっているといえよう。

なお、グリーンバーグ(Greenberg, 1966, pp. 78, 79, 92, 93)は、文法要素の順序に関して、諸言語に普遍的なこととして、四五の点をあげているが、そのなかにつぎの二点がある。

(4) 主語・目的語・動詞(SOV)を正常の順序とする言語が、後置詞的である頻度は偶然よりはるかに大きい。

(27) 一言語がもっぱら接尾辞をつかうならば、その言語はつねに後置詞的である。(後略)

つまり、SOVの順序と後置詞をとることとの二事項は、相関関係をもち、また接尾辞をとることと後置詞をとることとも相関関係にあるという。この二つの関係が正しいならば、これらの事項はあわせて考えるべきであり、アルタイ諸語の構造を考える上でも考慮すべきだろう。

つぎに、アルタイ諸言語は、音韻構造においても、基本的には大体一致するといえよう。語形に相当する音韻構造は、子音か母音ではじまり、母音か子音でおわる。かしらには、子音が連続して立つことはないし、rも立たない。中間は子音(または子音二つの連続)と母音(または母音二つの連続)の交互の連続からなる。末尾には、蒙古語、ツングース語で、子音が連続して立つことが普通ないが、チュルク語では、子音二つの連続も来ることがある。(例)トルコ語 dost「友人」、dört「四」。

しかし、蒙古語モングォル方言、保安方言では、子音二つやrが頭音としてある。(例) モングォル、保安両方言 re-「来る」　モングォル方言 ndur「高い」　保安方言 nde-「食べる」。なおこれはのちの変化によるもので、そ

れに対して蒙古文語では ire-, öndür, ide- である。

さらに、アルタイ諸語では、単語(または語幹)の音形のなかの母音に関して、母音調和というきまりがあり、その音形を統一するはたらきをなしている。

共時論における母音調和とは、ある時期の一言語(の一方言)における母音のあらわれ方についての一種の制限のことである。アルタイ語では、母音が分類され、同じ語ないし語幹のなかには、ある類の母音とある類の母音とが共存しないというきまりである。

現代のアルタイ諸語にはひろく母音調和がみられる。チュルク語は、トルコ語を例にとると、母音は、

(1) ı a o u　(2) i e ö ü

の二類があり、両類の母音が一語のなかに通常は共存しない。そのため同じ接尾辞や語尾でも、(1)の母音をふくむ語幹につく形と(2)の母音をふくむ語幹につく形では、それにふくまれる母音がかわり、同じ接尾辞、語尾でも母音が a~e または ı~u~i~ü のように交替する(ただし ı~u, i~ü の両交替は後述のような母音の円唇性に関する制限による)。(例) odada「へやに」、evde「家に」の -da~-de は交替する同じ格語尾「に」。atın「馬の」、yolun「道の」、evin「家の」、gözün「目の」の -ın~-un~-in~-ün は交替する同じ格語尾「の」。

蒙古語はハルハ方言を例にとると、二重母音をいま別にして、母音は、

(1) a ā o ō u ū　(2) e ē ö ȫ ü ǖ　(3) i ī

の三類にわけられる。ツングース語はエウェンキー文語をあげると、母音は、

(1) a ā o ō ē　(2) ə ə̄　(3) i ī u ū

の三類がある。両言語とも一語中に(1)と(2)の母音は共存しないが、ただし(3)の母音はどの類の母音とも共存できる。なおエウェンキー文語では ā のつぎには a がつづかず、ə がつづく。

なお、ヤーコブソン(Jakobson et al., 1952, p.41, 1962, p. 635)は、アルタイ諸語の母音調和には二つの種類があるとし、一つはたとえばトルコ語におけるように、一語中の母音はすべて後舌(grave)か、すべて前舌(acute)かという母音調和であり、チュルク語や蒙古語の種々の方言にある。またもう一つは、たとえばゴルジ語におけるように、一語中の母音はすべてせまい(diffuse)か、すべてひろい(compact)かという母音調和であり、ツングース・満州諸語にあるとのべている。なお、服部(一九七五)は蒙古語の母音調和が、カルマク方言では第一の型であり、ハルハ方言などでは第二の型であるとする。

ほかに、母音の円唇性に関する制限がある言語があり、蒙古語ハルハ方言では、a ā ai u ū ui (をふくむ音節)のつぎにā a (をふくむ音節)はつづくが、ō o はつづかない。o ō oi のつぎにō o はつづくが、ā a はつづかない。e ē ü ṻ üi のつぎにē e はつづくが、ō̈ ö はつづかない。ö ō̈ のつぎにō̈ ö はつづくが、ē e はつづかない。また i ī のつぎにō o ō̈ ö はつづかない。(Poppe, 1951, pp. 21, 22) エウェンキー文語でも、a のつぎにa はつづくが、o はつづかない。o のつぎにo はつづくが、a はつづかないようである。

ただし、チュルク語ウズベク方言の一部の下位方言におけるように、母音調和が乱されていることがある。この方言の場合は、イラン系言語の影響によるものである(Gabain, 1945, p. 19)。

三　アルタイ語の系統論

アルタイ語の系統について、研究史をのべることはしないが、アルタイ語が、フィン・ウゴル諸言語(フィンランド語、ハンガリー語など)とサモエード語、すなわちこれらウラル諸言語とともに、ウラル・アルタイ語族をなすとの系統説が、以前おこなわれた。しかし個々の言語の研究が詳細になるにつれ、ウラル諸言語を切りはなすことによ

って、アルタイ諸語をアルタイ語族という一つの語族とみる説が生れた。一方、ウラル諸言語はウラル語族をなすとみられている。なお、アルタイ語族にはさらに朝鮮語を加える見方が生じた。しかし、またこのアルタイ語族を、やはりウラル語族と同系とみる説、あるいはさらにこれらがインド・ヨーロッパ語族やインドのドラビダ語族などと親縁関係をもつとみる説もある(メンゲス、Menges, 1975, pp. 124—129)が、ここではアルタイ三言語間の関係だけに限って扱う。なお日本語との系統関係の問題はのちにふれたい。

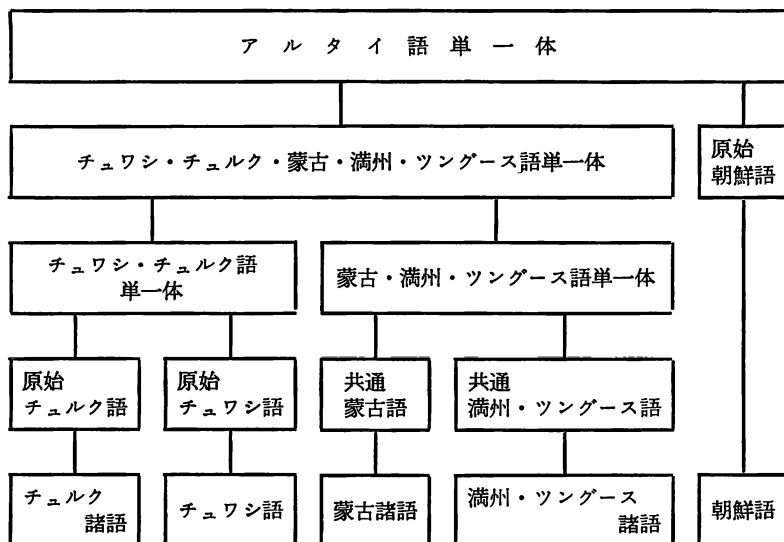
アルタイ諸語が親縁関係にあってアルタイ祖語に由来するとする説は、有力な説である。事実、アルタイ諸語は文法構造、音韻構造に上述のような共通点をもつ。またその語彙においても同じとみられる単語を多く有し、語の付属部分にも同じものがあり、三言語間に音韻対応が発見されている。アルタイ語族説は、とくにラムステッド(Ramstedt, G. J.)の論究により、学問的討議の対象に値するものとなったと言えよう。さらに、ポッペはアルタイ語族説を一段と入念なものにして提出している。

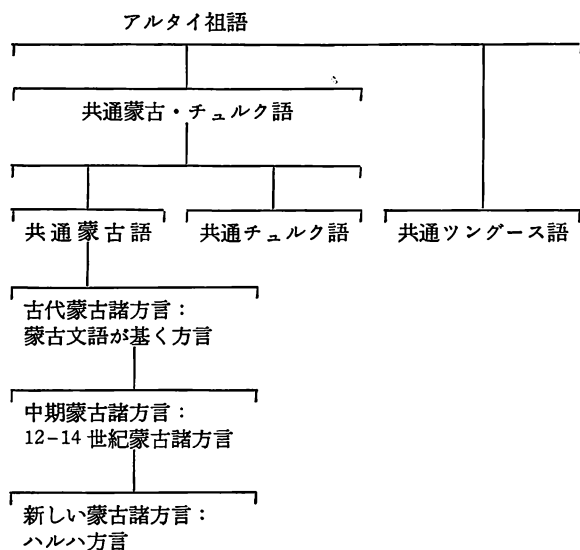
アルタイ語族説において、さらに、アルタイ諸語の系統的相互関係をどのようにみるかについては、ポッペ(1960, p. 8)は図1のように示している。

なお、ウラジーミルツォフ(1929, p. 47)は、蒙古語と他の二言語の関係を、すでにはやくに図2で表わした。その系統的相互関係はポッペとことなる。

また、ラムステッド(Ramstedt, 1957, pp. 15, 16)は、アルタイ諸民族の原住地を興安嶺とすると(ただしラムステッドは原郷をまた熱河ともする)、約四〇〇〇年前、ツングース人と朝鮮人の祖先はその東、蒙古人とチュルク人の祖先はその西にいたとして、空間的位置の関係を図3の(1)のように示すが、さらに(2)の方が一層適切であるとする。そして今日存在する種々の等語線は、チュルク語と朝鮮語を、蒙古語とツングース語を、また蒙古語とチュルク語、朝鮮語とツングース語をそれぞれ緊密に結びつけるが、それらの言語の間に介在していてすでに消滅したいくつもの

図 1

図 2

言語があったろうとみている。

しかし一方、アルタイ語族説に対して、やはり以前から今日まで、それを否定する反論(たとえばクローソン(Clauson, G.)、シチェルバク(Щербак, A. M.)、デルフェル(Doerfer, G.)などの)もあり、また少なくとも現在の研究段階ではそれを受け入れられないとする懐疑的な

見方もある。これらの見方では、アルタイ諸語の共通する単語は、共通祖語から継承するものでなく、借用によるものとみるか、ないしはそのような疑いをもっている。

古来、内陸アジア一帯には、アルタイ諸語をはじめ、多くの民族による種々の言語が、互いに隣接しておこなわれてきたとみられる。そのためアルタイ諸語においては、相互間で、あるいは他の言語から、文化の移入にともない、あるいは政治経済の影響により、またはさらにその他の要因により、多くの単語の借用がおこなわれたと考えられる。アルタイ諸語が周囲の文明民族の言語から借用したとみられる単語の例も古くからある。たとえば、蒙古文語 aluχa, 一四世紀アラビア字文献蒙古語 hulya(ペリオ、Pelliot, 1925, p. 245. ただしこれを haluya とよむべきだとする。その後ポッペ (1938–1939, p. 437) もそうよむ。)、満州語 folho, ゴルジ文語 paloa「(打つ)つち」は、アッカド語の pilaqqu「おの」から来ていることが指摘されている(Menges, 1953, pp. 301, 302, Poppe, 1958, p. 97)(9)。

(1)

蒙古人	北	ツングース人
	西　東	
チュルク人	南	朝鮮人

(2)

	ツングース人	
蒙古人		朝鮮人
	チュルク人	

図 3

アルタイ語のうちでも、蒙古語は、歴史上大きな勢力をもった蒙古族の言語であり、この言語から周囲の言語へ、単語が借用された。満州族の満州語からも、まわりの少なくとも一部の言語へは単語借用がおこなわれた。ヤクート語や南シベリアのトゥワ語、ハカス語、アルタイ・チュルク語などには蒙古語からの多くの借用語が入っている(クローソン、Clauson, 1956 b, pp. 183, 184, カウジンスキ、Kałużyński, 1962)。一方、満州語も蒙古語から多くの借用語を入れている。また満州語からの借用語は隣接のツングース語方言にある。

さらに一層古い時代においては、チュルク族が優位にあって、チュルク語が他言語へ多くの借用語を与えたと思われ、一三・四世紀の蒙古語にはチュルク語からの

借用語がみられる(Poppe, 1955 b)。

クローソン(Clauson, 1959, pp. 184–187, 1960, p. 301)は、蒙古語がチュルク語から借用語をとり入れた古い時期を三つにわけ、最初の時期は、八世紀前、おそらく(契丹が拓跋から借用語を入れた)五、六世紀、第二期が八―一二世紀、おそらくそのあとのころ、第三期が一三・四世紀とする。なおクローソン(1959, p. 182)は、諸言語が生れた形成期におけるアルタイ三言語を話す各民族の揺籃の地は互いに離れていたと考える。そしてチュルク語民族は中国の西の大平原に、蒙古語民族はバイカル湖と太平洋の間の森林地帯に、ツングース語民族はバイカル湖の西と北の森林にいたとし、もとのチュルク語は草原本来の動物や移入された動物の名称をふくむ草原住民の用語に富むが、森林動物名、狩猟用語は貧弱であったろうし、蒙古語、ツングース語は前者の用語が貧弱で、後者の語が豊富であったろうとみる。

しかし、単語借用はもっと古く史前時代からおこなわれて、アルタイ三言語のそれぞれの祖語の時代、またそれ以前にも、多くの単語の借用が、アジア内陸部における文化の伝播、社会的経済的事情などにともなっておきたとみることもできよう。シロコゴーロフ(Shirokogoroff, 1930, p. 263)は、アルタイ三言語の単語借用は西暦紀元前におきたろうとする。

アルタイ諸語に非常に古い時代に単語の大量の借用があったとみるとき、それがアルタイ三言語間でおこなわれたのか、あるいはまたこれらの言語へ他の言語から、いわゆる加層言語(Adstratsprache)からなされたかが問題となる(デルフェル、Doerfer, 1963, p. 55)。この加層言語は、すでに死滅しているかもしれず、それが具体的に何という言語かわからなくても、他の言語からの加層作用ということも考えてみなければならないことである。アルタイ諸語の単語借用の問題は、これらの言語の系統論の問題を非常に複雑にしている。

アルタイ語族説でも、アルタイ諸語間で借用された単語もあることは認めているのである(Poppe, 1958)が、反対論ではそれら言語に共通するすべての単語を親縁関係によるものではないとみるのである。しかし反対論においても、

比較言語学の方法をみとめるかぎり、音韻対応の事実は否定しないだろう。それが親縁関係によるとみるか、借用によるとみるかの点に両説の根本的な対立がある。

この二つの見方を考慮に入れて、従来の諸説にふれつつ、アルタイ諸語の音韻、語彙についてみて行きたい。

四 アルタイ語の音韻対応

アルタイ諸語間の顕著な音韻対応をとくにとりあげてみて行きたい。

まず、チュルク語・蒙古語の大部分の方言では無声唇音の頭音が、借用語、音象徴による語以外まれにしかないが、ツングース語諸方言にはこれがある。すなわち、満州語にはf-、ゴルジ、オルチャ、オロッコ各方言にはp-があり、これらが互いに対応する。ただし、その他のエウェンキー方言などではx-またはゼロがこれに対応している。

ラムステッド(1916)は、ツングース語方言間のこの音韻対応がp>f, Φ>h, x>ø(ゼロ)の変化過程の諸段階を示すものであるとし、これにもとづいてツングース・蒙古・チュルク祖語に無声唇音の頭音*p-が存在したと推定した。[10] そしてツングース語の上記の諸音はこの音に由来するものであり、蒙古語、チュルク語ではその音が*p>*f, *Φ>*h>øの過程をへて消滅したと考えた。

ついで、ペリオ(Pelliot, 1925)は、一三・四世紀の蒙古語において多くの語に今日の蒙古語で消滅した頭音h-があることを指摘した。そしてこのh-がラムステッドの推定した古い無声唇音の頭音(したがってまた満州語のf-、ゴルジ語などのp-)に対応することをのべた。

ただし、蒙古語においてはいくつかの語例でその無声唇音が、つぎに来る母音に応じて、モングォル・互助方言でx-, f-, ş-(同・民和方言ではx-, ş-)、東郷、保安両方言でh-, x-, f-, ş-に対応し(Тодаева, 1973, pp. 35–41, 1961, pp.

12–14, 1964, pp. 12–14)，一方，シラ・ユグル方言でh-に(Тенишев, Тодаева, 1966, p. 51)，ダウル・ブトハ方言でx-に対応する(Тодаева, 1960, pp. 56, 57)。つまり，蒙古語のこれらの方言ではその音が消滅せず残っているとみられよう。

すなわち，アルタイ諸語の間につぎの音韻対応が見出された。

(1) 満州 f-，ゴルジ，オルチャ，オロッコ p-，その他のツングース x-, ∅‖蒙古 13, 14 世紀 h-，モングォル x-, f-, š-，ハルハなどの大部分の方言 ∅‖チュルク ∅

音韻対応についての挙例は，一般に，ラムステッドよりポッペの方が念入りになっているが，対応例の検討はなお必要だろう。以下に若干の対応例をあげる。ポッペ(1960, pp. 11, 12)があげるこの対応についての三二例中，デルフェル(Doerfer, 1963, pp. 92–94)は，正しくない例を除くと，残るのは一二例だとしている。

オロッコ puutaa，エウェンキー文語 xutakān‖蒙古文語 uγuta,『華夷訳語』huhuta(呼呼塔)，モングォル fūda, '袋'.

満州 fulənggi，オロッコ punəktə，エウェンキー文語 xuləptēn‖蒙古文語 ünesün,『元朝秘史』hunesu，モングォル funise，'灰'.

満州 fulgijan，エウェンキー文語 xulama‖蒙古文語 ulaγan,『元朝秘史』hulaan，モングォル fulān，'赤い'.

エウェンキー ukur, xukur '牛'‖蒙古文語 üker,『華夷訳語』huger，モングォル fuguor '牛'‖チュルク『クタドグ・ビリグ』öküz '雄牛'.（インド・ヨーロッパ語，たとえばラテン語の pecus, pecoris '家畜' と同源とする説(ラムステッド，Ramstedt, 1957, p. 104, Poppe, 1958, p. 97)があるが，一方に亀茲語(トカラ語B方言)okso '牛' の借用とする説(Clauson, 1956 b, p. 186)がある．なお，ツングース語のその語は蒙古語からの借用語だろう.）

なおペリオ(1925, p. 262)は，*p-または*φ-がチュルク語において，ある単語でbへ移行したとみるが，アールト(Aalto,

1955, p. 12)は、そのb-が本来の*p-を表わすとみられる語はすべて、p-が上記の変化をとげたのちに(pをbで写して)とり入れられた借用語か、またはp-が規則的にb-に変化した他の言語を通してとり入れた借用語とみる。[11]

また、レセネン(Räsänen, 1949, pp. 21, 22, 1961)は、チュルク語の南東、南西の方言で、たとえばトルクメン方言でhökiz「雄牛」のような若干の語例にあらわれるh-が、アルタイ祖語の*p-にさかのぼるものであるとみるが、シチェルバク(Щербак, 1959, pp. 59, 60)はその音を新しく生じたものとみている。

なおまた、トルコ語のpek「非常に」などの語のp-を、クローソン(1961, pp. 301–304)は、再構しうる最古のチュルク語に*p-があってこれがそのまま残ったものであるとみるのに対して、デルフェル(1968, pp. 9–14)は、それは*b-が同じ語のなかの離れた位置にある無声子音(上例ではk)に同化したものであるとみている。

ラムステッドやまたポッペらは、上記の音韻対応を示す音が無声唇音に由来すると考えたのであるが、これについては反対する説もある。すなわち、シロコゴーロフ(1930, 1931)は、ツングース語において、多音節語の語頭母音のまえに、「気音化」によりhが生じ、さらにxとなり、一方「両唇音化」によりwが生じ、さらにv、b、f、pとなったとする。そして語頭の母音が、もしあとの母音と長さが同じで、またアクセントをもたないと、語頭母音のまえにhが予想されうるとしている(シロコゴーロフ、Shirokogoroff, 1930, p. 243)。クローソン(1956 a, p. 153, 1961, pp. 304–306)も、蒙古語、ツングース語でやはりゼロから気音化によりhが生じ、そしてf、pになった変化があったとする。ツングース語で語頭母音のまえにときに気音が生ずることはあるとみられるが、上記の音韻対応を示す単語においてこのようにして新しい音が生じたとみるならば、蒙古語、ツングース語間で音韻対応を示すことの説明がむずかしくなるだろう。またp>f, ɸ>hの方向の変化は多くの他の言語におきている(Ramstedt, 1916, p. 10, アールト、Aalto, 1955, pp. 14, 15)。シロコゴーロフ、クローソンの見方はとりがたいと言えよう。

しかし、上記の音韻対応が、アルタイ祖語の原音を反映するものか、または古い借用語間のものかがなお問題であ

ろう。ポッペ(1960, pp. 11, 12)があげるこの対応の語例のうち、チュルク語をふくむ例が、単にツングース語、蒙古語だけの対応例にくらべて著しく少ないことは、とくにこの対応の性質を考える上で注意に値する。対応語例が一例しかなくても、それが有力であれば、同系語間の一つの音韻法則を成り立たせるだろう。しかし上記の対応が、はたしてチュルク語と他の二言語との親縁関係をも示すものかどうかは一つの問題だろう。

つぎに、チュルク語の語中、語末の位置で、チュワシ方言のrに対し、そのほかのチュルク語方言では、ある単語でr、またある単語でzが対応し、チュワシ方言のlに、他の方言では、ある単語でl、しかしある単語でšが対応する。チュルク語から古代にハンガリー語へ入った借用語においては、チュワシ方言と同様、チュルク語他方言のそれらの単語のr、zに対してrが対応する(ゴンボツ、Gombocz, 1912 a, pp. 178, 184, 185)。なおまた、蒙古語、ツングース語においても、チュルク語のそれらの単語のr、zに対してrが、l、šに対してlが対応することが指摘されている。すなわち、

(2) チュワシr, 他のチュルクr‖蒙古r‖ツングースr

(3) チュワシr, 他のチュルクz‖蒙古r‖ツングースr

(4) チュワシl, 他のチュルクl‖蒙古l‖ツングースl

(5) チュワシl, 他のチュルクš‖蒙古l‖ツングースl

(3), (5)の例

チュルク『チュルク語総覧』ikkiz ‘ふたご’, チュワシ jĕkĕr ‘二重の, 対をなす’‖蒙古文語 ikire, ikere ‘ふたご’, 13-14世紀アラビア字文献蒙古語 ikir ‘id.’‖満州 ikiri ‘ふたご, 一つながり’.

チュルク 突厥 boz‖蒙古文語,『華夷訳語』boro, ‘灰色の’.

チュルク『クタドグ・ビリグ』öküz, チュワシ văkăr ‘雄牛’‖蒙古文語 üker ‘牛’‖ツングース エウェンキー

ukur, xukur '牛'.
チュルク　『チュルク語総覧』šiš 'やきぐし' ‖ ツングース　エヴェンキー文語 sila- 'くしでやく'.
チュルク　突厥 tabïšγan ‖ 蒙古文語,『華夷訳語』taulai, 'うさぎ'.
チュルク　突厥 taš, チュワシ čul ‖ 蒙古文語 čilaγun,『華夷訳語』cilaun, '石'.

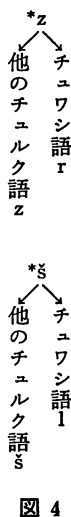
ただし、ツングース語の(5)の対応が成立するかはなお問題であろう。

チュルク語において、(3)(5)の音韻対応は大きな問題であり、もとのどんな音から変化してきたかについては、互いに反する二つの説が提出されてきた。

ゴンボツ(Gombocz, 1912b, pp. 2–22)は、これらの音が、チュルク語で本来、*z、*šであり、チュワシ方言で*zがrに、*šがlに変化したと考えた。ベンツィング(1940, pp. 397, 398)は、ギリシア語 βύσσος に由来するウイグル語 böz「ぬの」にチュワシ語 pir が対応することが、zがrより古いことの強い証拠とみている。このような推定による音韻変化をそれぞれロー化(rhotacism)、ラムダ化(lambdacism)とよんでいる。図4を参照。

*z → チュワシ語r
*z → 他のチュルク語z

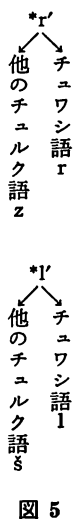
*š → チュワシ語l
*š → 他のチュルク語š

図 4

シチェルバクは、原始チュルク語の音素*sの異音の一つであるよわいs(一音節語の長母音のあとや、二つまたはそれ以上の音節からなる語の各種母音のあとの位置にあらわれる)が、チュルク語のある一群の方言でsとして保たれ、別の一群の方言ではz(δ)に変化し、チュワシ方言ではz(δ)からさらにrとなったとみる(シチェルバク、Щербак, 1966, pp. 30–32)。また共通チュルク語の音素šが、チュワシ方言のような方言で長母音のあとや各種の多音節語の末尾で、弱く、有声で、lとなっているとみる(Щербак, 1966, p. 32, 1970, p. 163)。

しかし、ラムステッド(1922, pp. 26–32)は、(2)(4)の対応を示すr、lは*r、*lにさかのぼるのに対し、(3)(5)の対応

を示す音はそれぞれチュルク語で*r′、*l′(口蓋化音)にさかのぼると考えるに至った。この推定による*r′→z、*l′→šの音韻変化は、その後それぞれゼータ化(zetacism)、シグマ化(sigmatism)とよばれている。図5を参照。

*r′ → チュワシ語r / 他のチュルク語z　　*l′ → チュワシ語l / 他のチュルク語š

図 5

ポッペ(1960, pp. 73–82)も、ラムステッドに類する変化を考えるが、ただしチュルク語で(2)(4)のもとの音はそれぞれ*r、*lであるとし(これを*r¹、*l¹と記す)、(3)(5)のもとの音はそれぞれ*r²(口蓋化音かチェック語のřのような音)、*l²(無声摩擦音)とした。

(3)(5)の音韻対応における原音の音価はなお問題である。この対応を示す音の由来について、プリツァク(Pritsak, 1964)は、z、šが語や接尾辞の末尾か、または語幹末音と接尾辞頭音の融合の際にあらわれるとのべ、そしてそのz、šはそれぞれr、lと(別の形態素の)ある音Xとの(すなわちr+X, l+Xの)融合の結果であると考え、このある音とは*tiであるとした。すべての例を、連続する音の融合によって説明することができるかどうかは、その後テキン(Tekin, 1969, pp. 53, 54)も批判しているように、疑問であるが、融合という見方をこれらの音の由来の問題に入れたことは一つの見方であろう。なお、この見方によると、そのz、šはr、lより新しいものである。

テキン(1969, 1975)は、前チュルク語の末期(または原始チュルク語の初期)にゼータ化、シグマ化が末尾の位置にだけおきて原始チュルク語と原始チュワシ語が分かれ、この二方言ができたとした。しかしその変化はそれで完了せず、単語によっては古チュルク語にその変化がおきたとしている。

(3)(5)の音韻対応がアルタイ語系統論でどう扱われるかについてみると、アルタイ諸語が共通祖語にさかのぼるとする見方に立って、ゴンボツ(1912b, pp. 13, 21, 22)は、アルタイ祖語にも上記の*z、*š(あるいは*ž)を立てたが、ラムステッド(1922, p. 29, 1957, p. 103)は上記の*r′、*l′を、ポッペ(1960, pp. 73–82)は上記の*r²、*l²をやはりアルタ

イ祖語に立てている。アルタイ諸語を同系とみない見方にとって、ロー化・ラムダ化説では、チュワシ方言のようなこの変化のおきたチュルク語方言から蒙古語などが、その変化した単語を借用したか、ないし蒙古語などにもその変化がおきたとみるだろう(Щербак, 1966, pp. 30–32 参照)。ゼータ化、シグマ化説からは、この変化のおきなかったチュワシ語か、さらに古くチュルク・チュワシ祖語ないし前チュルク・チュワシ語から蒙古語などへ単語が借用されたとの見方がとられよう。デルフェルも、原始チュルク語(=チュルク・チュワシ祖語)から蒙古語への単語借用説をとるが、しかし(3)(5)の音韻対応に対する原始チュルク語音は、それぞれ*z (ř?)、*š (l̑?)とし、その音価はあきらかでないとする(Doerfer, 1963, pp. 98, 99)。

この音韻対応の問題も十分解明されたとは言えず、今後の問題である。ツングース語の対応が親縁関係によるものかはとくに検討を要する。

チュルク語の多くの語においては、古チュルク語の語頭のjに対して、トルコ方言などでj、トゥワ方言でč、ヤクート方言でs、チュワシ方言でśが対応し、方言によってはǰなどが対応する。

古チュルク語のそのj-に対して、蒙古語、ツングース語(満州語)ではd-、ǰ-、n-、j-が対応する。すなわち、

(6) 古チュルク j- ‖ 蒙古, 満州 d-, ǰ-, n-, j-

例

チュルク 突厥 jaγï '敵' ‖ 蒙古文語 dajin '戦い, 敵', 『元朝秘史』 dain '敵' ‖ 満州 dain '軍隊'.

チュルク 突厥 jalbar- ‖ 蒙古文語 ǰalbari- ‖ 満州 ǰalbari-, '祈る'.

チュルク 『チュルク語総覧』 juδruq ‖ 蒙古文語 niduγa, 『華夷訳語』 nudurha ‖ 満州 nuǰan, 'こぶし'.

チュルク 『クタドゥグ・ビリグ』 josun 'きまり, 慣習' ‖ 蒙古文語 josun 'id.', 『元朝秘史』 josun 'わけ' ‖ 満州 joso '道理'.

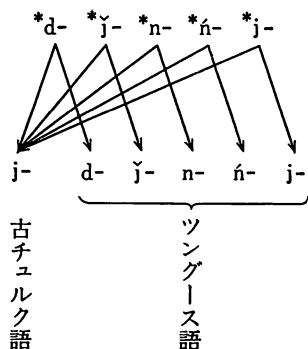



図 6

またラムステッド(1957, p. 80)、ポッペ(1960, pp. 36, 37)は古チュルク語 j- にツングース語で ń- が対応することもあるとみる。

チュルク語の語頭のそれらの音に対して、ラムステッド(1922, p. 33)はチュルク・チュワシ祖語に *j- を立てる。ポッペも(図1の)原始チュルク語に *j- を考える(1960, pp. 22, 27, 31, 32, 36, 37)。そして二人は、アルタイ祖語の *d、*ǰ、*n、*ń、*j が、それぞれ語中では三言語において保たれ、語頭でもツングース語ではその区別を保ったし、蒙古語もツングース語と同様であるが、ただし *n- と *ń- は合同して n- となったとする。しかし、チュルク・チュワシ語の語頭では、それらの音が古くに合同したため、すでにその祖語で *j- となり(ポッペによれば、原始チュルク語で *j- となり)、チュワシ語で ś- となり)、それが種々の方言で種々の子音に変化したとする。図6を参照。

これに対し、すでに古くネーメト(Németh, 1912, pp. 553, 554)は、ある一つの言語の種々の子音が別の言語で一つの子音に対応するような二言語を同系とみることを問題であるとし、二言語間にあるのは、これらの言語の種々の時期の種々の方言間の単語の借用関係だろうとみる。クローソン(1959, pp. 184, 185)は、蒙古語がチュルク語から借用語を入れた上述の第一期には ð-、ɲ- をもつチュルク語からそれを d-、n- として入れ、第二期には j- を、第三期にはウイグル語の j- をそのまま入れたとし、これらのチュルク語音は標準的チュルク語の j- に対応するとのべる。シチェルバク(1966, pp. 32, 33)も同じ考え方に立ち、チュルク・チュワシ祖語には諸方言の上記(六三頁)の音に対応する音素 *θ があって、これが語頭において種々の段階をへて変化して来たとし、蒙古語、ツングース語における借用語はチュルク語のその個々の変化段階を反映しており、d、n(後続鼻音の同化作用があった場合に n となったとみる)をふ

くむ語はもっとも古い借用語、ǰをふくむ語はそれよりのちの借用語、jをふくむ語はさらにのちの借用語であるとする。図示すれば図7のように表わせよう。点線は借用を示す。

やはり借用の見方をとるデルフェル(1963, p. 97)も、原始チュルク語に頭音として*d (δ?)があって、のちに*ǰとなったとし、その*d-が蒙古語に入ってd-となり、またその*ǰ-が古チュルク語でj-となり、一方その*ǰ-が蒙古語に入ってǰ-となったとする。なおデルフェル(1963, p. 62)は、n-との対応については、ラムステッドの挙げる例のうちnudurγa が唯一の明白な例証であるとみるが、これも *dudurqa からの異化でありうるとする。

上に(6)の音韻対応の語例をあげたが、この対応がそれらの言語の親縁関係を支えるものであるためには、対応語例をあらためて検討し、適切な例を求めることが必要である。

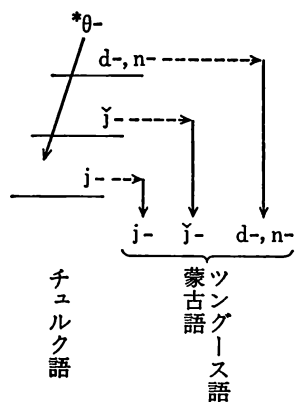
ラムステッド(1957)、ポッペ(1960; 1965, pp. 197–203)は、アルタイ三言語間にさらに他の子音および各母音について音韻対応を認め、それに対するアルタイ祖語の音を推定した。しかし対応語例については、なお一層厳密な検討が必要だろう。親縁関係を支えるものとして比較的確かではないかとみられる三言語の対応語例は案外多くなく、まずそれらだけによって音韻対応を立ててみるべきだろう。デルフェル(1963, pp. 58–62, 1966, p. 101)は、蒙古語の(鼻音があとに来ない)m-、γ-、(*i または*ï がつぎにつづかない)-ǰ-、さらにn-(上述参照)、g-に対して、蒙古語とチュルク語間で音韻対応を認めるにたるチュルク語の対応語例があるか疑問としている。そしてなおデルフェル(1963, pp. 62, 63, 1966, pp. 101–103)は、蒙古語のそれらの音が、ある加層言語に由来し、一方、チュルク語にはその加層作用がはたらかなかったという仮説を示している。

*θ-
d-, n-
ǰ-
j-
j-　ǰ-　d-, n-
ツングース語
蒙古語
チュルク語

図 7

つぎに、アルタイ諸語の母音については、長短の区別が、チュルク語にはヤクート方言、トルクメン方言などにあり、ツングース語でも種々の方言に認められ、蒙古語ではかつてあったと考えられる証拠も認められる(服部・一九五九b)ほか、現にモングォル方言にある。その長短の区別は、それぞれチュルク祖語、蒙古祖語、ツングース祖語にさかのぼり、これら三言語はともに本来、長母音をもっていたことがあきらかにされている。

ポッペ(1960, pp. 91–137)はさらにアルタイ祖語に、短母音とともにこれに対立する長母音を再構した。祖語に長母音を仮定する見方をとっても、アルタイ諸語の長母音の問題は、古くさかのぼれば、あるいはアクセントと関係してくる問題のようにみえる。[12] かつてラムステッドは、蒙古語において古くアクセントの区別があったと考えた。[13] ポッペ(1960, pp. 40, 41, 143–147)は、アルタイ祖語のアクセントに関してかなり大胆と言える説を立てたが、高さアクセントを推定する点が注目される。その説は明確でない点もあるが、大体つぎのようにまとめられよう。アルタイ祖語では、強さアクセントの強めが第一音節にあり、第二音節以下では長母音音節も強めをもたなかった。本来、母音の長さは強さアクセントとは互いに独立したものであった。ほかに高さアクセントがあり、高い音節が一定の位置の音節とはきまらない。ポッペは二音節語、三音節語についてつぎのような型をあげている。

―̋ ―(第1音節が強く高い)　例 *ắba '狩猟', *ńắpā- 'はりつける'.

―̀ ―́(ˋは強め, ˊは高い音を示す, 以下同様)　例 *ákà '兄'.

―̀ ―̀ ―　例 *dápà-kan '二歳駒'.

―̀ ― ―́　例 *bĭ́ragù '二歳の牛', *kápĭ̃tì 'はさみ'.

なお、蒙古祖語ではアルタイ祖語からの長母音があるほかに、高い音節の母音は長母音になったとし、また、ツングース祖語でも高い音節の母音は長母音となったが、高くない長母音は短母音になったとしている。

五 アルタイ語の形態素の比較

つぎに、アルタイ諸語の個々の形態素、すなわち単語および語尾、接尾辞についてみたいが、まず、第一人称、第二人称代名詞をあげる。

チュルク語トルコ方言

ben「わたくし」　biz「わたくしたち」

sen「君」　siz「君たち」

蒙古文語（[　]内は「…の」を意味する属格）(Poppe, 1954, pp. 50, 85)

bi[minu]「わたくし」　ba[manu]「わたくしたち」(話相手をふくまない。話相手をふくむ第二人称複数形は bida)

či[činu]「君」　ta[tanu]「君たち」

či は *ti から変化したものとみられ、ba は古い文献にみられる。

ツングース語エウェンキー方言（ゼーヤ川地方の方言）（[　]内は斜格の語幹）

bī[min-]「わたくし」　bū[mun-]「わたくしたち」(ほかに mit がある)

sī[sin-]「君」　sū[sun-]「君たち」

これらの代名詞の音形は、アルタイ三言語の間で著しく類似し、同じ語か、ないし同じ要素をふくむとみられよう。この点はアルタイ語族説の有力な材料となっている。

しかし、このような人称代名詞の類似は、アルタイ諸語とインド・ヨーロッパ語やウラル語との間にもみられる。たとえば、ラテン語人称代名詞対格の単数の第一人称は mē, 第二人称は tē であり、フィンランド語人称代名詞主格

	チュルク語 (トルコ方言)	蒙古語 (蒙古文語)	ツングース語 (エウェンキー文語)
1	bir	nigen	umūn
2	iki	qojar	ǰūr
3	üç	γurban	ilan
4	dört	dörben	digin
5	beş	tabun	tunŋa
6	altı	ǰirγuγan	ɲuŋun
7	yedi	doluγan	nadan
8	sekiz	naiman	ǰapkun
9	dokuz	jisün	jəgin
10	on	arban	ǰān

の単数、複数はそれぞれ第一人称minä, me, 第二人称sinä, teである。したがってアルタイ三言語間のその類似も偶然であり、言語の親縁関係の根拠にならないとする見方があり、一方ではそれらの言語すべてをふくむ語族をたてようとする考えへもつながる。

つぎに、一から一〇までの数詞を表にあげる。

数詞は比較研究上重視されて来たが、ここにみられる三言語間の類似は、意外に少なく、「4」の数詞、すなわちツングース語digin(祖形は*dugin, 第一母音は短いuであり、ө(=ö)でない)、蒙古語dörben(モングォル方言dēran, Smedt, Mostaert, 1933, p. 52の表記はᴅiēran)、古チュルク語tört(トルコ語dört, トルクメン語dȫrt)の類似ぐらいにとどまるであろう。この点がアルタイ語同系説への反対論の有力な根拠の一つとなって来た。しかも、ツングース語の「4」の祖形の第一母音は異る。またネーメト(1912, p. 561)が、蒙古語、チュルク語の「4」の数詞が借用でないかという疑念をすでにのべているが、デルフェル(1963, pp. 82, 103)も蒙古語のこの数詞をチュルク語からの借用とする。一方、ラムステッド(1907, p. 9, 1952, p. 62)ものちにはこの数詞のチュルク語t-と蒙古語d-の対応は借用語にだけみられるものであるとのべ、ポッペ(1960, p. 110)もチュルク語のその数詞は古い借用とみる。ただし、服部(一九五九b、五一・五二頁)は、その数詞の類似が借用による蓋然性の方が、親縁関係による蓋然性より小さいとみる。

なお、20、30、40の数詞である満州語のorin, gūsin, dehi(およびこれらに対応する女真語の数詞)と蒙古語xorin,

γučin, döčin の一致は借用によるとみるとしても、『華夷訳語』(乙種本)の女真語の10代の数詞のうち、gorhuan '13', durhuan '14', tobuhuan(満州語 tofohon) '15', darhuan '17' の各語幹(-huan, -hon を除いた部分)[14]が蒙古語の3、4、5、7の数詞と一致することをどうみるべきかは、今後の考察にまつ問題である(ラウフェル、Laufer, 1921, 服部・一九三九、四八二—四八四頁)。

アルタイ諸語の語尾、接尾辞については、たとえばつぎのものが、互いに比較される。

名詞の格語尾の例。

チュルク語トルコ方言　-da「に」　(例)odada「へやに」(oda は「へや」)。

蒙古語ハルハ方言　-da「に」　(例)galda「火に」(gal は「火」)。

満州語　-də「に」　(例)boodə「家に」(boo は「家」)。

しかし、この語尾はツングース語のほかの方言になく、満州語の -də は、あるいは蒙古語からの借用かもしれない。

動詞連体・終止形語尾の一つにつぎのものがある。

チュルク語トルコ方言　-r「…する」　(例)okur「読む」(oku- は「読む」の動詞語幹)。

満州語　-ra「…する」　(例)arara「書く」(ara- は「書く」の動詞語幹)。

蒙古文語の yabur-a「行くために」、ügüler-ün「言うには」(yabu-「行く」、ügüle-「言う」は動詞語幹)の語尾のなかの r も、それらに比較されるが、蒙古語のなかで単独でたとえば連体形語尾のような語尾としてはないので、比較することには反対もある(Doerfer, 1966, p. 105)。

名詞語幹に接尾して動詞語幹を形成する接尾辞の一つにつぎのものがある。

チュルク語トルコ方言　-la-　(例)başla-「はじめる」(baş は「頭」)、ヤクート方言　-lā-　(例)arïlā-「バターをぬる」(arï「バター」)。

蒙古語ハルハ方言　-la-　　(例)dūla-「うたう」(dū(n)は「歌」)。
ツングース語エウェンキー方言　-lā-　　(例)gidalā-「やりでさす」(gidaは「やり」)。

この例では、ヤクート語、エウェンキー語で、ともに長母音が対応する点が、それらが同源であるとする見方をつよめる。

語彙に関して、二つの論文の紹介を通して、さらにみて行きたい(音形は原文のまま引用する)。

アルタイ三言語の基礎語彙については、クローソン(Клоусон, 1969)がハイムズ(Hymes, D. H.)の言語年代学調査語彙の二〇〇項目に対する基礎単語を三言語から選んで示している。ただし、かれは二〇〇項目のうち「切れない」「つば(つばき)」「雨」「やり」「で」「に」の六項目を除き、かわりにアルタイ民族の生活を代表するとする「弓」「矢」「住居」「馬」「馬に乗る」と、ほかに「泣く」の六項目を入れている。三言語ともできるだけ古い時代をとり、チュルク語は古チュルク語遺文(古ウイグル語文献をふくむ)と補足的に『チュルク語総覧』によっている。蒙古語は『元朝秘史』『華夷訳語』などにより、ツングース語は満州語をとり、一八世紀の『御製五体清文鑑』によっている。

さて、三言語の基礎語彙の相互の一致の程度について、クローソンはつぎのようにのべる。

(1)　チュルク語と満州語をくらべると、一致する語例はつぎの二例で、これにあるいは最後の一例が加わる。

	チュルク	満州
‘わたくし’	ben	bi
‘わたくしたち’	biz	be(話し相手をふくまない)
‘たべる’	yé:-	ǰe-

(2)　チュルク語と蒙古語の間には、同じか、関係のあるとされるものは一六語例より多くない。

	チュルク	蒙古
‘わたくし’	ben	bi (属格 minö)
‘わたくしたち’	biz	ba (話し相手をふくまない)
‘みんな’	kamağ	qamuγ
‘海’	taluy	dalay
‘空’	teŋri:	teŋgegi
‘心臓’	yürek	ǰirüge, ǰürüge
‘み(実)’	yémiş	ǰimiš
‘とし(年)’	yïl	ǰil
‘はな(花)’	çéçek	čečeg
‘いし(石)’	taş	čila’un
‘まるい’	tegirmi:	tögörigey,
	(degermi:)	tö’erig
‘ほこり(埃)’	to:ğ	to’osun
+‘おとこ’‘夫’	er	ere
+‘くろい’	kara:	qara
+‘くらい’	karaŋğu	qaraŋγuy
+‘きいろい’	sarïğ	sira (šira)

(3) 蒙古語と満州語の間には、一五語が同じか、関係があるとしている。

	蒙古	満州
‘わたくし’	bi(属格 minö)	bi
‘わたくしたち’	ba	be(いずれも話し相手をふくまない)
‘たまご’	ömdegen	umhan
‘馬’	mori(n)	morin
‘ちち(乳汁)’	sün	sun(動物の)
‘しお’	dabusun	dabsun
‘あのひと，かれ’	*i(属格 inö)	i
‘それ’	tere	tere
+‘おなか，はら’	ke’eli	hefeli
+‘いい’	sayin	sain
+‘熱い’	qala’un	halhôn
+‘赤い’	(h)ula’an	fulgiyan
+‘歩く’	yabu-	yabu-
+‘ひっぱる，ひく’	tata-	tata-
+‘吸う’	šimi-(*simi-)	simi-

以上、クローソンが作成した基礎語彙においてかれが認めた三言語間の一致する語についてみたが、これによって三言語の基礎語彙の一致する程度をうかがうことができよう。

なお、クローソンは、さらにかれの見方に立ってそれらの単語の一致を検討し、上記(1)の三語は同源語ではないと

し、チュルク語と満州語に共通する語はないとする。(2)はその一六語のうち+印の四語だけがこの二言語の同系論の基礎をなしうるものとしてのこる。(3)では一五語のうち、+印の七語だけがのこるとする。したがって蒙古語とチュルク語・満州語との間で、わずかな語が同系論の基礎となりうるものとしてあっても、チュルク語と満州語との間で一致する語がないので、蒙古語を系統上他の両言語と結びつけることはできないと結論している。しかし、それはチュルク語・満州語を一緒に蒙古語に結びつけることはできないということだろう。また、互いに意味がちがっても同源の単語もあり、比較言語学ではそれも比較すべきである。

また、クローソン(1960, p. 312)は、一四世紀の『華夷訳語』の八四六項目の蒙古語単語は、その約二〇%(比較的のちのチュルク語借用語を入れればもっと多く)がチュルク語と共通するものであることを指摘しているが、つぎに、種々の意味領域に関するそれぞれの単語群を、アルタイ三言語間でくらべてみることについて、シチェルバク(1966)の論文をみたい。かれはつぎの三つのテーマの単語群を扱っている。

A群　天体と天体現象の名称、語例一六。

B群　年・季節・日夜などの名称、語例九。

C群　家畜(馬・らば・ろば・牛・らくだ・羊・やぎ)の名称、語例二七。

A群・B群の名称の大部分は、アルタイ三言語間で異なり、一方各言語内では方言によるちがいはない。ただし、チュルク語 *qïrayu と蒙古語 *qïrayu(ともに「霜」)、蒙古語 *ǰun とツングース語 *ǰuga-(ともに「夏」)の二例は一致するが、明確な起源は言えないとしている。

しかし、三言語で形は類似ないし一致するが、意味がずれている語例は多数あるとし、A群、B群に関係する一四の語例をあげている。ただし、比較言語学では、上にふれたように、これらも考慮に入れなくてはならない。

C群は上の二群と異なり、三言語間でほとんど完全に一致する語例が多数あるとのべる。しかし上述(五六頁)のク

ローソンと同様に、古くチュルク族は草原に住んでいたが、蒙古人、ツングース人、満州人は森林に住み、生業は狩猟であったと考え、C群の共通単語は、アルタイ三言語が同系であるとすることでは説明できないとする。チュルク語、蒙古語の対応語は多くチュルク語起源であり、また蒙古語、ツングース語の対応語は蒙古語起源であり、このようにその対応語はチュルク語から蒙古語へ、蒙古語からツングース語への単語の借用によるとする。そして、中央アジアや極東の文化発達が西から東へ向いていたためとの見方をとり、牧畜ばかりでなく、農耕の用語も大部分は同じ方向へひろまったし、金属名についてもほとんど同様であるとみている。ただし、単語借用は、西から東へとともに、南から北への方向もとったとみられるだろう。

この論文でのべられているように、アルタイ三言語間に多くの単語の借用がおこなわれたことは否定しがたいことだろう。そしてそれが非常に古い時代、すなわち文献以前の時代からおこなわれたとみられるので問題が生じる。すなわち、文献にのこる時代のような比較的新しい時代の借用によるとみられる単語は除いて、非常に古い時代に由来し、かつ上にのべた音韻対応を示す単語が、はたしてアルタイ祖語にさかのぼるものか、もしくは、チュルク・チュワシ祖語、蒙古祖語、ツングース・満州祖語の借用関係、または前チュルク・チュワシ語のような祖語の前段階にもわたる三言語の借用関係によるものかということが問題になる。

六 アルタイ語比較研究の問題点

上述の音韻対応を示すアルタイ三言語の単語が、親縁関係によるものか、借用関係によるものか、したがってアルタイ諸語が祖語にさかのぼるものであって、一つの語族をなすのか、もしくはその三言語はただ単語の借用関係をもつだけのものかということは、すでにみてきたように、アルタイ語比較研究上の根本的な問題である。しかしそれはい

まだ解決されない問題と言わざるをえない。なお、アルタイ三言語の各祖語が一緒になって一つの言語連合(Sprachbund)をなしていたのではないかという見方も考慮しなければならない。

この点について、ポッペ(1958, pp. 96, 97)は、チュルク語の üzäŋi「あぶみ」、arïš「車のながえ」の二単語を、それぞれ同義の蒙古語の dürige, aral と比較することによって、チュルク祖語よりさらに古い前チュルク語の *düräŋä, *paral にさかのぼるとする。もしここに例とするこれらの単語が前チュルク語から借用されたとしても、前チュルク語からの大量の借用が、前チュルク語のおこなわれた言語地域のある部分で蒙古語を生じ、他の部分でチュルク語を生じたのなら、蒙古語とチュルク語の関係は親縁関係というものである。チュルク祖語もまた前チュルク語からの大量の借用により生じたものにほかならないとしている。

ポッペ(1960, pp. 4, 5)は、またつぎのように論じている。蒙古語の aǰirga「雄馬、種馬」は前蒙古語の *adirga にさかのぼり、これは古チュルク語の adyir と同じ語であって、これらはさらに古い *adgïrya にさかのぼる。蒙古語とチュルク語のこの二単語が借用関係にあるとしても、この二言語間でどちらか一方から他方への借用というより、むしろそれはわれわれにとって未知の第三のある源、すなわち蒙古祖語、チュルク祖語よりもっと古いある仮定的な言語からその二言語へ借用されたものであり、その場合この一層古い言語とは共通アルタイ語(=アルタイ祖語)のことであるとする。

このように、ポッペは、蒙古語、チュルク語に対応単語が大量にあり、それらが規則的音韻対応を示し、新しい時代の借用関係によるものでないとすれば、それらの単語は蒙古祖語、チュルク祖語より古い段階で分化してきたものであり、別の一層古い言語からの借用と言おうと、その二言語の共通の祖語に由来するものにほかならないと考えているようである。すなわち、蒙古語、チュルク語の間で音韻対応を示す大量の単語について、それがさかのぼる各祖語より以前の段階では親縁関係と借用関係を区別しないとするもののようである。なるほど、親縁関係と借用関係を

区別できるかという論はあるが、しかし、言語の単一の系統をもとめるとすれば、その区別は必須である。実際には区別がむずかしくとも、その二言語の前段階において親縁関係とことなる借用関係もありうることを考えなくてはならないだろう。すなわち、二つの言語に多くの同じ語があり、それが両言語の古い時代にさかのぼるとみられるとき、(1)それが共通祖語に由来する場合のほかに、(2)両言語のそれぞれの古い段階で二者間に大量の借用があった場合もありうる。後者も一つの重要な可能性であろう。(図8参照。なおデルフェル(1966, p. 87)もこの種の図を示している。)

(1)

(2)

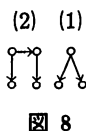



図 8 (○はある時代の一言語、上から下への線は同じ言語の時代的変化を、水平点線は借用関係を示す。)

一方、デルフェル(1963, pp. 52, 53)は、チュルク語、蒙古語の間にある

(A) チュルク語 boz「灰色の」=蒙古語 bora.
チュルク語 är「男」=蒙古語 ere.

(B) チュルク語 örmäk「外套」=蒙古語 örmege.
チュルク語 ekiz, ikiz「ふたご」=蒙古語 ikire.

のような共通する単語のうち、接尾辞をもつ(B)は、その接尾辞も、語根もチュルク語特有であり、あきらかに借用関係にあるものであるが、接尾辞のない(A)は借用語とも、親縁関係にあるものともとれる語であるとみる。これを、接尾辞をもつ(B)は蒙古語における借用語であり、接尾辞のない(A)は親縁関係による語とすることは、あまりに偶然によっているとする。また(A)のあるものは借用、あるものは親縁関係によるとすると、どちらであるかをきめる基準が見出されねばならないが、それがない。したがってどちらであるかを確実に言うことができない。そこでデルフェルはもう一つの見方として、(A)は(B)のようなあきらかに借用語とみられる語と同じ層に属して、(B)と同様に借用語すなわち蒙古語に入った非常に古い借用語とみている(さし当ってチュルク祖語からの借用語といっている)。

しかし、それらの語例について、単語間の関係が親縁関係によるか、借用によるかをきめる基準がいまないからといってすべて借用によるとみることは適切でない。そのいずれによるかを、今日なお言えないとすれば、さらに今後の研究にまたねばならないだろう。ポッペもデルフェルも、[15] 少なくとも考え方としてその相異なる二つの見方をなお認めねばならぬところを、ともに一方だけ認めているといえよう。

七 アルタイ語比較研究上の諸問題

アルタイ諸語に共通する単語があるのは、親縁関係によるのか、借用によるのかという点について、これらの各言語のほかの面からあきらかにすることはできないだろうか。

この点に関して、言語の親縁関係の証明には、文法における不規則性が重要な手がかりであるというメイエ (Meillet, 1937, p. 32) の指摘は重要である。メイエはつぎのようにのべる。

一つの言語がある一つの語族に属することのもっともいい証拠は、その言語が、初期社会の時代には正則的だった形式を変則なものとして保持していることを示すことにある。変則なものは、それがおこる言語のどんな規則によっても説明されえず、それが正則的であった前段階の状態を想定することを必要とする。ラテン語内で説明できないest, ēst, fertのような第三人称形がインド・ヨーロッパ語で説明され、したがってラテン語はインド・ヨーロッパ語がとった一つの形態であることを想定させる。インド・ヨーロッパ諸語の比較文法を組立てることを許したのは、これらの言語のすべてが変則なものを負っているからである。逆に、チュルク語のような全く規則的な形態論をもつ言語は、比較には適せず、チュルク語がどんな言語と親縁関係をもつかを認知する方法はほとんど知られていない。

アルタイ諸語には、文法上の不規則性がなるほど比較的少ないといえようが、しかし見出されないことはない。たとえば、満州語のつぎの事実も、不規則性に関する一つの例と言えよう。満州語の動詞命令形は、動詞語幹にゼロの語尾がついて、つまり語幹そのままの形をとってできている。(例) gene「行け」(この「行く」の動詞の語幹は gene-)。この点は、蒙古語、チュルク語の動詞命令形と等しい。しかし満州語のいくつかの動詞には不規則命令形があり、それらのうち、たとえば bi-「ある」、jə-「たべる」の命令形 bisu, jəfu は、ツングース語ゴルジ方言の動詞命令形 bisu, jəpu に対応する。ゴルジ方言(およびオルチャ方言、オロッコ方言)の動詞命令形は、基本的には語幹+語尾 -ru からなるが、bi-「ある」、jəp-「たべる」の命令形は、上記の形をとる(前者には biru もある)。また満州語の waburu「くたばれ」などののしりのことばは、かつて wabu-「殺される」のような動詞語幹に -ru という語尾がついた命令形であったとも考えられる。こうしたことから、満州語が古くもっていた命令形体系は、いまのものとことなって、ゴルジ方言(およびオルチャ方言、オロッコ方言)の命令形体系に対応するものであり、上述の不規則形は古い体系に属す命令形にさかのぼるものであると考えられる。このことは満州語がゴルジ方言などと近い親縁関係をもつ証拠の一つとなるが、なおまた、満州語は、蒙古語、チュルク語と異なり、古くは動詞命令形に有形の語尾をもっていて、命令形が語幹と等しい形をとることは新しいことが知られる(Ikegami, 1957)。

これはツングース語内のことであるが、アルタイ三言語間で不規則性にふれる問題を扱えれば、アルタイ語系統論に有利であろう。

しかしアルタイ諸語の単語の文法構造は、上述のように、語幹に接尾辞、語尾がいわば接着して結合している、いわゆる膠着的な構造であり、その結びつきには、結びつく二者の区別がはっきり認められる。ドゥニ(Deny, 1952, p. 327)はモザイクにたとえている。言語のこのような型の構造においては、この言語の話し手にとっても、構造内の個個の要素の区別が認めやすいだろう。そのため、逆に各要素の遊離性がつよく、新しい要素もその構造中に入りやす

いのではないだろうか。そして他言語(とくに同じような構造をもつ言語)から借用する要素も入りやすいであろう。また一方では、類推作用がはたらきやすく、不規則性が失われがちになるのではなかろうか。アルタイ諸語がこうした文法構造をもつところに、インド・ヨーロッパ語族の比較研究とことなるこれら言語の比較研究の困難さがあり、アルタイ語系統論のむずかしさの重要な要因があるといえよう。しかし一面には、融合的構造がときにみられ、この点、そこにかくれている事実が比較研究に有力な手がかりを与えることがあろう。

インド・ヨーロッパ諸語の親縁関係を確固としたものとして認めうるのは、一つにはアプラウト(同一形態素内の文法的母音交替)があるためであり、またそこにおける不規則性のためであろうが、アルタイ諸語にはそれにあたるような母音交替はないだろうか。ただし、それはアルタイ祖語において文法的機能をもつ母音交替へさかのぼるとみるべきものであって、語幹の母音と接尾辞の母音がのちに縮約して生じたような母音に関するものではない。

すでにあげた第一、第二人称代名詞語幹(および蒙古語の第三人称代名詞語幹——Ramstedt, 1906, p. 5)には、単数と複数を区別する母音交替がみられる。メンゲス(Menges, 1966, p. 1)は、アルタイ諸語では真のアプラウトが散発的でまれであるとし、いままでに知られている唯一の例として人称代名詞のそれをあげ、共通アルタイ語にさかのぼるとみている。しかし一方、服部(一九四三、二二七・二二八頁)は、これらの複数形も本来は、*bi, *ti という第一人称、第二人称代名詞に複数接尾辞 *-en がついて生じたものとみる。

バゼン(Bazin, 1961)は、チュルク語に a~ı および a~u の交替や後母音と前母音の交替があるが、それは表現性(expressivité)の型の語に限られているとする。(例) トルコ方言 par「強く輝く光」、pir「弱く輝く光」、har hur「喧騒混乱」、ana「母」、anne「おかあさん」。このような語は、一つの言語が同系語と分裂してからも、その言語に新たにそのような語形をとって生ずることも考えられ、比較研究のための材料にはなりにくい。

ただし、メンゲス(1966, p. 2, 1975, p. 8)は、バゼンのあげた例のなかのウイグル方言の jar-t-, 'fendre'(裂く、断

ち割る)、jyr-t- 'déchirer'(裂く)、およびツングース語エウェンキー方言の gē「ほかのもの」、gīl「ほかのものたち」の母音の関係も、アプラウトとみている。

また、満州語には、a〜ə の母音交替によって男性(陽)と女性(陰)などの対立を表わすいくつかの語例がある。

(例) ama「父」、əmə「母」、haha「男」、həhə「女」。しかしツングース語のほかの方言にはこの母音交替はあまりみられず、エウェンキー文語で逆に a〜ə の交替が atirkān「老婆」、ətirkə̄n「老人(男)」の対立をなしていることからみて、満州語の a(男性)〜ə(女性)の交替は、そのままツングース祖語にまでさかのぼるものではないだろう。

インド・ヨーロッパ諸語のアプラウトに匹敵するようなものは、アルタイ諸語には見出せないと言えよう。しかし、同系証明の裏づけのためには、アプラウトに限られることはなく、ひろく形態素の文法的交替形とその不規則性に関して、比較する言語間に対応がみられても、重要な材料となろう。この点についてアルタイ各言語をあらためて検討することが必要である。

アルタイ三言語の構造については、前述のように共通する点が多いが、構造が似た言語も系統がことなる場合もあり、とくに文成分のならべ方は、その種類が少なく、系統関係が考えられない言語間でも一致する頻度は高い。しかし言語構造について多くの事項、またその細部に関する事項に二言語間で一致がみられれば、やはりその二言語が同系であることへの少なくとも強い見込みにはなろう。ただし、それらの事項のあるものは、グリーンバーグ(1966)によれば、互いに相関関係をもつとみられ、かかる相関関係をもたぬ多くの事項についての二言語間の一致が、有力な材料となろう。

しかし、共時態における言語の構造も、通時態においては変化する。二言語の今日の構造が等しいという事実も、過去においてそれがちがっていたかもしれないから、同系とみることにとって有利であっても、直接的な論拠にはならない。逆に、二言語の構造がちがっていても、同じ構造にさかのぼることが説明されれば、有利な材料になる。言

語構造についても通時論的変化を考慮に入れることが必要である。しかし反面、構造のある点が、長い間変化しなかったこともありうることも考えねばならない。

母音調和についても、通時論的にみればどうであろうか。アルタイ諸語は、古い時代にさかのぼってもなお母音調和があったろうか。または、それはある音韻変化の結果生じたことであろうか。もしそうならばその音韻変化(すなわち通時論的母音調和)とはどんなものであったろうか。それは、普通考えられているように、強めのある第一音節母音への後続母音の前進的同化か。またその音韻変化はいつおきたか。このような問題が、通時論的にみた一般的問題として提出されよう。

ただし、アルタイ語系統論では、アルタイ祖語を仮定するとき、この祖語に関係づけられて母音調和が問題となる。しかし上記のようにアルタイ三言語に共通して母音調和があっても、それゆえにアルタイ祖語が仮定されるとか、アルタイ祖語にも母音調和があったとは、ただちに推論できない。母音調和は各言語にのちに別々に、発音の一つの傾向として発達したこともありえよう。したがって、単にのちの諸言語に母音調和があっても、すでにウラジーミルツォフ(1929, p. 46)が指摘するように、そのことは比較研究の有力な材料とはならないといえよう。

蒙古語の母音の円唇性に関する制限のきまりは、少くとも部分的には、o、öのつぎの母音の円唇化という前進的同化によって生じたとみられるが、『元朝秘史』の蒙古語においては、oのつぎにaがつづき、öのつぎにeがつづくことができたのであり、円唇化がまだ全般的にはおこなわれていなかったとみられている(服部・一九四三、二一七・二七五―二七七頁)。たとえば、『元朝秘史』でtorqan「絹」、orgen「寛い」(このoはöを表わすとみられる)の例がある。現代のハルハ方言ではtorgoŋ「絹」、örgöŋ「ひろい」である。

母音調和も、『元朝秘史』の蒙古語では、語幹内だけで、語尾にまでおよんでいない例がときにあること(服部・一九四三、二一八―二二一頁)は、母音調和が発達の経過をへてきたものでないか、もしそうならば、それがいつ、ど

のように発達してきたかを考える上に重要である。(例) gureged-lua「駙馬(公主の女婿)たちと」(gureged が語幹、-lua が格語尾)。

また、服部(一九七五)は、前述(五二頁)のせまい・ひろいの母音調和が、後舌・前舌の母音調和より時代的に新しいとみる。

なお、アルタイ三言語は、前述のように、文法構造、音韻構造に類似点を有し、また共通に母音調和があるが、少なくともそのある点は、これら隣接言語間の影響によって生じたこともありえよう。アルタイ三言語が地理的に互いに接しておこなわれてきたことは、相互間で、単語などの借用はもちろん、さらに構造の同化をおこしたかもしれず、やはり系統の解明をむずかしくする一つの要因をなしている。

以上みてきたように、アルタイ諸語の間に音韻対応が発見されても、同一祖語に由来する語の間のものか、借用語に関するものか、いまだ決定できない。しかし音韻対応があることは認められるところである。したがって、音韻対応を示す単語をもっていたもとの言語はあったろう。今日確実にあきらかにしうることは、これだけのことであるが、またこれだけのことはあきらかであるといえるだろう。しかし、そのもとの言語は、アルタイ三言語のすべてがさかのぼる共通祖語か、またはその二つまたは一つだけがさかのぼる言語で、アルタイ語中の他の言語とは親縁関係がなく、これにただ借用語を与えただけかもしれず、あるいはまたそれはアルタイ三言語以外の言語であって、これがその三言語に大量の借用語を与えて影響をおよぼしたということもありえよう。しかし、その言語が単一の言語か、方言的にまたはことなる言語として一つ以上あったのかはなお問題である。年代的には、それが祖語であれば、アルタイ三言語の各祖語より古いが、借用語を与えた言語であるならば、これらと共存したとみられよう。

アルタイ語の系統論はさらに今後にまたねばならない。その解明のためには、研究は新しい手がかりを求めねばならない。このことは、また新しい研究方法を求めることでもあろう。しかし一面、従来の研究を再検討するとともに、

アルタイ各言語の具体的事実についてさらに精密なそして広汎な調査と研究が必要であることはいうまでもない。

一方、今後の研究では、類型論的にも、さらに実質的に形態素についても、アルタイ諸語が互いにことなる点をあきらかにすることも必要であろう。アルタイ三言語のうちの二言語だけが親縁関係を認められるかもしれないし、三言語のうちのある言語が、ほかのものと離れて、アルタイ語以外の言語と親縁関係が認められるということもないとはいえないだろう。蒙古語においては、古く『元朝秘史』で動詞の多くの語尾が、男性の動作主か、女性の動作主かに応じて形をことにするという特異な事実があきらかにされた(小沢・一九五九、同・一九七一、二五五・二五六頁)。また、満州語、(従来の記述から知られる)ソロン方言を除いてツングース語では、ものの所属関係を表わす構造に、その所属関係が恒久的関係ないし他に譲渡できない関係であるか否かによって区別がある(スーニク、Суник, 1947)。(例) オロッコ方言 isalbi「おれの目」(isal が「目」、-bi が第一人称単数接尾辞「おれの」)、sundattaŋubi「おれのさかな」(sundatta が「さかな」、-bi は同上)。このように、まえの場合には、-ŋu という特別の接尾辞が間に入ってあとの場合と区別される。このような文法上の区別は他のアルタイ諸語には知られていない。しかし単にこの種の文法的区別の有無についていえば、メラネシア語、北アメリカの一部のインディアン語、たとえばアパチ語、またコーカサスのアディゲ語にあり、アイヌ語にもあるとみられる(Суник, 1947, 池上・一九六九、七六九頁)。

八 アルタイ語、とくにツングース語と日本語との比較

さきにのべたアルタイ諸語の文法構造、音韻構造は、日本語のそれにくらべると、多くの点で一致する。ただし日本語には接頭辞がある。また、日本語には、語中の子音連続がQ(促音)またはN(ン)プラス子音の連続以外にない。語末にはN(および古い時代において入声音のt)以外の子音が立たない(方言についてはふれない)。なお、Nma「馬」

のように語頭に二つの子音が立つことがまれにある。

また上代(八世紀)の日本語において、同一語根内でö(乙類のオ列音)が、o(甲類のオ列音)と共存せず、またu(ウ列音)またはa(ア列音)と共存することの少ないことが、有坂(一九三四)によって(また池上禎造によっても)発見されていて、このことは母音調和と関係があると考えられ、古い母音調和のなごりではないかとみられている。

系統論の材料としての文法構造および音韻構造、とくに母音調和については、すでに上にふれたが、日本語とアルタイ諸語のその点の類似が、やはり、両者が系統を同じくするのではないかという見方をつよめているといえよう。日本語とアルタイ諸語の同系論はすでに前世紀からある。しかしすでにみてきたように、アルタイ諸語を共通祖語にさかのぼる一つの語族ときめてかかることはできないだろう。しかし、同系であるかどうか、なおあきらかでなくても、そのことに留意しつつ、アルタイ語と日本語との比較研究をおこなうことはできよう。また、むしろアルタイ三言語を個々に日本語と比較することもなされるべきであろう。

いま、とくにツングース語をとってみると、ツングース語と日本語の間で対応する単語を見出す試みは、これまで研究者によってなされてきた。[16] しかし形と意味がともに一致するか、もしくは人を十分納得させうるほどに関係づけられる対応単語は、いまのところ案外少ないと言えるのではないだろうか。したがって、各音についての音韻対応の確立は今後にまたねばならない。

以下に、助詞・活用語尾についてみると、まず、日本語の助詞ヲはツングース語の対格語尾 -ba と比較されている。上代において、ヲは格助詞、間投助詞、接続助詞としての用法がある。『万葉集』『古事記』から例をとると、

(1) 吾宅乎見者(ワギヘヲミレバ)(『万葉集』巻六、九四二)
(2) 居名野乎来者(キナヌヲクレバ)(同巻七、一一四〇)
(3) 雨零夜乎霍公鳥鳴而去成(アメノフルヨヲホトトギスナキテユクナリ)(同巻九、一七五六)

(4) 松影宿而往奈夜毛深往乎（同巻九、一六八七）　曾能夜弊賀岐袁（『古事記』上巻）

(5) 伊勢能国爾母有益乎奈何可来計武君毛不有爾（『万葉集』巻二、一六三）

ツングース語の -ba は、たとえばオロッコ方言で、その子音が、どんな音またはどんな語幹のあとに来るかにより b~w~p と交替し、その母音が母音調和と円唇性の制限により a~ə~o~ɵ と交替する。この -ba は、用法上日本語のヲと類似する点が多い。ヲの上記例(1)から(3)の用法にあたるオロッコ方言の例をあげる。

(1) geeda ulaaba itəxəmbi.（一頭の となかいを わたくしは見た）

(2) tawweepa giččini.（むこうを かれは歩いている）

(3) jəə ananee (anani '年'+-wa 'を' の融合形) ŋənneewi.（今 年 わたくしは行く）

ただし、日本語の『万葉集』の例は、時間の名詞に修飾句がついている点で、ツングース語とことなることを留意しなくてはならない。

またオロッコ方言のつぎのような感情表現の語尾もやはり同じものかもしれない。

(4) namauli iŋəjiwəə.（あたたかい 日だな―）

日本語のヲとツングース語 -ba のこれらの類似点は、すでに指摘されている（ミラー、Miller, 1971, pp. 25–27, 村山・大林・一九七三、一五三―一五五頁）が、オロッコ方言にはさらに、やや特殊な用法であるがつぎのような接続的用法もある。

(5) čadu oppilaxamba isuxambi.（そこに いればよかったものを わたくしは帰って来た）

これらの用法は両言語でそれぞれ発達したこともありえよう。また日本語の助詞ヲは、起源的に、感情表現に由来するとみられている（松尾・一九四四、村山・大林・一九七三、一五六―一五八頁）。しかし、もし日本語とツングー

ス語が共通祖語にさかのぼるとしたとき、両言語が分裂するまえに、その共通祖語の段階で、日本語のヲとツングース語の -ba の祖形が、すでに対格用法をもっていたと考えることもできるのではないだろうか。なお、東北アジアのチュクチ語などのような、能格構造をもつ言語には対格がない。アイヌ語にも対格の語尾や助詞はみられない。日本語、ツングース語間で比較されるこのヲ、-ba が対格を表わすものであることは、この二言語について考える上に重要であろう。

つぎに、ツングース語の動詞語尾 -ra は、エウェンキー文語では現在を表わす語尾である。満州語では未完了の連体形語尾であり、オロッコ方言では未完了語尾で、現在形、未来形にもふくまれる。この -ra は、ツングース祖語の *-ra にさかのぼるが、上述のようにチュルク語の動詞語尾 -r とも比較されている。一方、このツングース語の -ra と日本語の動詞語尾の -r-(ないし -r-+母音)とが比較され(新村・一九三五、二五頁、服部・一九五九a、三八七頁)、それについてその後さらに考察がすすめられている(村山・大林・一九七三、一六二頁以下)。原始日本語の動詞活用形の内的再構とあいまって、その点の精密な比較を今後一層なすべきであろう。

ツングース語には、たとえばエウェンキー方言で -raki「…すると、…すれば」(確定、仮定)という動詞条件形語尾があり、これはツングース語で古く *-ra+*-ki であったとみられ、その *-ra は上述の *-ra と同じものとみられる。オロッコ方言では *k が消失して -rai となった。*-ki は条件を表わすものと言えようが、さらに古くどういうものであったかはまだあきらかでない(池上・一九五三)[17]。上代日本語の二段活用動詞の已然形語尾 -re も、あるいは本来それだけで確定条件を表わすものであり、この語尾はツングース語 *-ra に対応する語尾 *-ra とおそらく条件を表わしただろうもう一つの語尾 *-i(またはある子音+i)との連結であったものが、その二つの母音が(子音が間にあったならばそれが脱落してそのあとで)縮約して生じたのではないかと思われる。一段および変格活用動詞の已然形語尾 -re も同じものではないだろうか。また四段動詞の已然形語尾の母音 e (ケヘメは乙類)も本来同じものかもしれない。そ

の連結した語尾の後者は、ツングース語の *-ki とあるいは同源のものかもしれないが、後究を要する。

なお、日本語で已然形に助詞ドがつくと逆接条件が表わされるが、オロッコ方言ではその語尾 -rai＋人称語尾のあとに語尾 -ddaa「も」(ドより用法が広い)がつくと逆接条件を表わす。(例) waarainiddaa「かれがとっても」(waa- は「(たとえばさかなを)とる」、-ni は第三人称語尾)。この -ddaa は -da「も」と他の要素が融合したものと考えられる(トルコ語にも da「も」があるが、このdが対応するかの問題がある)。-da の母音は a～o～ə～ɵ のように交替する。この -da と日本語の逆接の助詞ド(乙類)の比較も考えてみるべきであろう。

また、ツングース語では、たとえばエウェンキー文語に継続動作の形動詞ともよばれる動詞形をつくる語尾 -ri があり、オロッコ方言にも未完了の連体・終止形語尾(また未来形にもふくまれる語尾である) -ri があってそれに対応する。母音が短くなったとみられる。その -ri は、おそらく上記の *-ra と他の要素の融合したものであり(池上・一九七一、二九六頁)、メンゲス(1943, p. 243)は *-ra-ki(-ki は分詞形成接尾辞)>*-ra-gi>*-ra-i から生じたとし、ベンツィング(1956, p. 128)はツングース祖語の名詞的アオリスト *-ra-gi に由来するとみる。上代日本語の二段活用動詞の連体形語尾 -ru も、あるいはツングース語のその *-ra に対応する *-ra と連体形をつくる一つの語尾 *-u(または子音＋u)との連結に由来し、その二つの母音が(もし子音が間にあったならば消失してそのあとで)縮約して生じたのではないかと思われる。アラウミ→アルミ「荒海」などの母音縮約参照。一段および変格活用動詞の連体形語尾 -ru も同じものではないだろうか。もしそうならば、また四段活用動詞の連体形語尾の母音 u も本来同じものかもしれない。

なお、告グラクのクのまえの -a は、村山がすでに指摘するように(村山・大林・一九七三、一六七頁)、上述の *-ra とあるいは同じものかもしれない。そして連体形のもとの二つの語尾の連結とは、この -raku, -aku ともしかすると本来同じものでないかということも考えられるが、今後の研究にまたねばならない。

しかし活用語尾のル・レが、本来、動詞の語尾であるとすれば、そのまえにあるものは動詞語幹のはずである。しかし各動詞の語幹の末尾音がすべて同じ音であったとは思えない。以下、二段活用動詞についてみるが、そのル・レのまえのuが各動詞語幹の本来の末尾音とは考えられない。この点、大野(一九五三、五四・五五頁)の説くように、動詞終止形、連体形が連用形とウ「居」という動詞の融合したものとすれば、已然形もやはりそのような融合形かもしれない。もしそうならば、そのル・レは本来このウという動詞の語尾ということになる。そしてル・レのまえのuは、各動詞連用形の末尾母音と動詞ウの語幹が縮約したものである。ただし、終止形、連体形が由来するとするそのような構造は、沖縄方言にもみられる(服部・一九五九a、三三四―三五七頁)が、已然形について同方言に平行性をもとめることはできない。なお、活用形の間では、類推が作用しやすいと思われるところから、別の見方をとれば、已然形において、あるいはまた連体形においても、レ・ルは各動詞の語幹に直接につく語尾であって、その各語幹の本来の末尾母音が、終止形の末尾母音uへの類推作用によってuとなったものかもしれない。もしそうならば、これらの二段活用動詞の活用形は、歴史上のちに一段活用動詞へかわったときに類推作用をうけたばかりでなく、史前にもその作用を同様に大きくうけたことになろう。

なお、カ・サ・ナ変格活用動詞のル・レがつく語幹も、二段活用動詞について上述したと同様の二つの見方ができよう。上一段活用動詞の連体形、已然形も連用形と動詞ウの融合したものか、あるいはル・レの前のiが本来の語幹末母音かもしれない。四段、ラ変活用動詞の連体形は、大野(一九五三、五五頁)が説くように子音に終る語幹に*-ruが、已然形はそれに*-reがついたものかもしれない。

また、ツングース語には、特異な動詞語尾がある。オロッコ方言を例にとると、その語尾は-siという形をもつ。多くの動詞語幹には-raも-riもつくが、ある動詞語幹には-siがつき、これが-ra, -riの文法機能を兼ねる。ただしある語幹には-ra, -riもつき、-siもつき、それに応じてある異なった意味となる(つぎの第一例はその例である)。-si

をとる動詞をさらに二つに分類して示す。

(1) ilisi '立っている' (ilii '立つ' = 語幹 ili- + -ri の融合形) garpanasi 'くりかえし射ている' (garpa- '射る', -na 反復の接尾辞) uisi '音がしている'

(2) munəlisi 'おしむ' ŋənəmusi '行きたい' (ŋənə- '行く', -mu 願望の接尾辞) nuŋǰisi '寒い(と感じる)' (nuŋǰuli '寒い') xudəsi '重い(と感じる)' (xudəli '重い')

オロッコ方言の動詞は、その未完了形が -ra, -ri をとっている類と -si をとっている特別な類に大別することもできよう。

ツングース語のうち、ほかにラムート方言、ウデヘ方言などに、これに対応する動詞類がある。

その -si は、ツングース祖語の接尾辞 *-s + 動詞語尾 *-i、または接尾辞 *-s (または *-t) + 動詞語尾 *-si (もしあとの場合ならば *-s または *-t はその後消失したとみる) という二つの要素の連続にさかのぼるのではないかと考えられる。動詞語尾 *-i または *-si は、上記の *-ra の交替形の一つだろう。その接尾辞は、今日 -si をとっている動詞の意味から考えて、(1)においては、運動、状態の継続を表わし、(2)では感情、欲求を表わしたり、または感覚を単なるその表象としてでなく、知覚作用そのものとして表わすものではないかとみられる(池上・一九七二)。

ところで、上代日本語のシク活用形容詞は、情意的な意味を示すものが多く、そのシがこの情意的意味をもつという指摘も山本(一九五五)によってされている。ツングース語の上記の(2)の *-s は日本語のこのシ(の少くとも子音)と比較できるかもしれないと考えられるのである。しかし日本語においてこのシがどんな音にさかのぼるかの問題があり、またシク活用形容詞とツングース語との対応例もまだ見出されていない。

以上に、同じではないかとみられる語尾ないし接尾辞の比較を試みてきたが、上述のツングース語の動詞語尾、日本語の動詞、形容詞語尾は、それぞれの語形変化(活用)の体系においてかなめのような役割をもつ基本的要素である。

しかし、日本語とツングース語の間に確固とした音韻対応が見出され、全般的に比較研究が成功しないうちは、両言語の部分的な比較研究は一つの試論にすぎないと言えよう。

もしも、音韻対応を示すことができるような単語が両言語間にどうしても十分に見出せないならば、比較方法による親縁関係の証明ができないことになるが、一方、禁忌によりある単語をさけて別の単語を使うという言語慣習が古い単語を消滅させたことはなかったかということも考慮に入れねばならないし、[18] また日本語は混合語かという問題も考えねばならないだろう。[19]

なおツングース語の姉妹語、日本語の姉妹語が両言語間に介在していたのに、すでに死滅したということもあろう。そうした言語が今日なければないだけ両言語の比較研究が困難になる。この点、高句麗の言語は、『三国史記』の「雑志」の地理の条に記載された地名のなかに、その単語とみられるものがあり、ツングース語や日本語と似た語もみとめられている(新村・一九二七、李・一九六八、村山・一九六二)。また朝鮮語が今日あることは重要である。朝鮮語は、アルタイ語と同系ともみられ、また日本語と類似点があり、日本語との親縁関係も問題になっている。アルタイ諸語と日本語の比較研究においても、これらの言語を考慮に入れることが必要であることは言うまでもない。

(1) Räsänen(1949), Дмитриев(1955–1962), Щербак(1970); Владимирцов(1929), Poppe(1955a); Цинциус(1949), Benzing(1956), 池上(一九七一)参照。アルタイ語研究については Benzing(1953), Poppe(1965)参照。江(一九七五)は両書の紹介をしている。

(2) Баскаков(1969), Poppe(1965), Deny et al.(1959), その他による。

(3) 以下、一三世紀以前のチュルク語は Наделяев и др.(1969)から引用する。

(4) とくにことわらぬかぎり、蒙古語(6)の方言は Poppe(1951)により、(8)—(12)の方言は Тодаева(1960, 1973, 1961, 1964), Тенишев, Тодаева(1966)による。

(5)　以下、『元朝秘史』は四部叢刊本から、『華夷訳語』は涵芬楼秘笈本から引用する。その蒙古語表記漢字のローマ字翻字は服部(一九四六、一三九—一四四頁)の表の第三種転写による。なお「呼」はhuで写す。アラビア字資料はПоппе(1938–1939)による。

(6)　ツングース語各方言間の差異についてはDoerfer(1971, pp. 3–5, 11–14)も参照。

(7)　しかし、たとえば、ロシヤ語を話す若いエウェンキー人のエウェンキー語のように、ロシヤ語の影響をうけて、その配列順がロシヤ語の語順になっていることがある。

(8)　マロフ(Малов, 1957, pp. 6, 7)は、黄ウイグル語のこのことが古い現象と考える。ただし、サラル語では、口承資料や古い写本に、命令法の人称を表わす語尾のあるものが認められるという(Тенишев, 1976 b, p. 159)。

(9)　この語源説には反対もある(Clauson, 1961, p. 305)。なおアラビア字による hulγa の語形は満州語 folho に近い点がある。

(10)　もっと正確に言えば、ラムステッドは推定音を *p- ないし *φ-, *f- と記している。＊の記号は推定音を示す。以下同様。

(11)　ただし、アールトはチュルク語 beg, 蒙古語 bagsi にそれぞれ sk.(=朝鮮漢字音) paik, paksa をあげて例示しているが、無気音はpがあってもbでとり入れたろう。

(12)　ツングース語エウェンキー方言については池上(一九七六)参照。

(13)　ハルハ方言 χā-「とじる」、вagʿa「小さい」は、それぞれ *qaγà-, *bágʿa に由来し、母音間のその子音が前者で消え、後者でのこったのは、アクセントのちがいによるとする(Poppe, 1962, p. 3)。

(14)　-huan と翻字した漢字「歓」は -hun と翻字すべきかもしれない。数詞16についてはふれない。

(15)　さらにその後の Doerfer(1966, pp. 121–123)は、元来借用関係にあったアルタイ諸語が、借用の度が進んで親縁関係に非常に近づいた関係にあるとみているようである。

(16)　日本語ミ「巳」、ヤチ「湿地」とオロッコ語 muigi「へび」、datu「沼地」などとの比較は池上(一九七五、二六〇—二六二頁)参照。しかしこれらは、共通祖語から互いに直接継承したというように単純に考えてはならないかもしれない。なお二六〇頁でウデヘ語 miki をあげたが、これをとり、かわりに東部エウェンキー語にあるという miki「へび」(Цинциус, 1949, p. 313)を(一応これが借用語でないとして)引用したい。したがって二六二頁の「ウデヘ語」も「エウェンキー語」にかえる。

(17)　Menges(1943, p. 243)は、-k をおそらくもとは移動(lative)または方向(directive)の接尾辞であるとみている。

(18) Лигети(1971, pp. 31, 32)、江(一九七四、四〇—四二頁)参照。

(19) Поливанов(1927, p. 1203)、村山・大林(一九七三)参照。

(補注) 他論文からの引用以外、ヤクート語は Слепцов, 1972, トルクメン方言は Баскаков и др., 1968, チュワシ語は Сироткин, 1961, エウェンキー文語は Горцевская и др. 1958 の各辞典からその単語を引用する。また、エウェンキー語方言、オロッコ語は筆者の採集資料による。ただし、前者の x' をもつ「牛」の方言形は Василевич, 1958 による。蒙古文語の単語は Ковалевскій(1844—1849)による。満州語は一八世紀の『御製増訂清文鑑』などによる。トルコ語は現代のローマ字正書法によるトルコ語である。

引用文献

有坂秀世 (一九三四)「古代日本語に於ける音節結合の法則」(『国語と国文学』一一七号)。

池上二良 (一九五三)「満州語の動詞語尾 -ci 及び -cibe について」(『言語民俗論叢』三省堂)。

池上二良 (一九六九)「アイヌ語の輪郭」(『アイヌ民族誌』第一法規出版)。

池上二良 (一九七一)「ツングース語の変遷」(『言語の系統と歴史』岩波書店)。

池上二良 (一九七二)「ツングース祖語の一つの動詞語尾について」(『現代言語学』三省堂)。

池上二良 (一九七五)「ツングース語学入門」(『古代の東アジア世界』読売新聞社)。

池上二良 (一九七六)「エウェンキー語方言語彙(承前)」(『北方文化研究』一〇号)。

大野 晋 (一九五三)「日本語の動詞の活用形の起源について」(『国語と国文学』三五〇号)。

小沢重男 (一九五九)「中期蒙古語に於ける女性形動詞語尾の一系列」(『東京外国語大学論集』別冊四)。

小沢重男 (一九七一)「蒙古語の歴史と系統」(『言語の系統と歴史』岩波書店)。

江 実 (一九七四)「日本語はどこから来たか」(『日本文化の源流』新人物往来社)。

江 実 (一九七五)「アルタイ比較言語学入門」(『古代の東アジア世界』読売新聞社)。

新村 出 (一九二七)「国語及び朝鮮語の数詞について」(『東方言語史叢考』岩波書店)。

新村 出 (一九三五)「国語系統論」(『国語科学講座 四』明治書院)。

野村正良　(一九四一)「蒙古語喀喇沁中旗方言に関する若干の覚書」(『言語研究』九号)。
服部四郎　(一九三九)「蒙古語」(『アジア問題講座 八』創元社)。
服部四郎　(一九四〇)「ブリャート方言の分類」(『蒙古学報』一号)。
服部四郎　(一九四一)「蒙古語の口語と文語」(『蒙古学報』二号)。
服部四郎　(一九四三)『蒙古とその言語』湯川弘文社。
服部四郎　(一九四六)『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』竜文書局。
服部四郎　(一九五九ａ)『日本語の系統』岩波書店。
服部四郎　(一九五九ｂ)「蒙古祖語の母音の長さ」(『言語研究』三六号)。
服部四郎　(一九七五)「母音調和と中期朝鮮語の母音体系」(『言語の科学』六号)。
松尾　拾　(一九四四)「客語表示の助詞「を」に就いて」(『国語学論集』岩波書店)。
村山七郎　(一九五一)「契丹字解読の方法」(『言語研究』一七・一八号)。
村山七郎　(一九六二)「日本語および高句麗語の数詞」(『国語学』四八集)。
村山七郎・大林太良　(一九七三)『日本語の起源』弘文堂。
山本俊英　(一九五五)「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」(『国語学』二三輯)。
李 基 文　(一九六八)「高句麗의言語와ユ特徴」(『白山学報』四号)(李基文、中村完訳(一九七二)「高句麗の言語とその特徴」『韓』一〇号)。

Aalto, P. (1955), "On the Altaic initial p-", CAJ, 1.
Aalto, P. (1965), "Verwandtschaft, Entlehnung, Zufall", Kratylos, 10.
Bazin, L. (1961), "Y a-t-il en turc des alternances vocaliques?", UAJ, 33.
Benzing, J. (1940), "Tschuwaschische Forschungen (II)", ZDMG, 94.
Benzing, J. (1953), Einführung in das Studium der altaischen Philologie und der Turkologie, Wiesbaden.
Benzing, J. (1956), Die tungusischen Sprachen, Versuch einer vergleichenden Grammatik, Wiesbaden.

Benzing, J. (1959 a), "Classification of the Turkic languages", Philologiae Turcicae Fundamenta, Wiesbaden.

Benzing, J. (1959 b), "Die bolgarische Gruppe", Philologiae Turcicae Fundamenta, Wiesbaden.

Clauson, G. (1956 a), "(Review of the) Introduction to Mongolian Comparative Studies by N. Poppe", Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland.

Clauson, G. (1956 b), "The case against the Altaic theory", CAJ, 2.

Clauson, G. (1959), "The Earliest Turkish loan words in Mongolian", CAJ, 4.

Clauson, G. (1960), "The Turkish elements in 14th Century Mongolian", CAJ, 5.

Clauson, G. (1961), "The initial labial sounds in the Turkish languages", Bulletin of the School of Oriental and African Studies, 24.

Deny, J. (1952), "Langues turques, langues mongoles et langues toungouzes, Généralités", Les langues du monde, Paris.

Deny, J. et al. (ed.) (1959), Philologiae Turcicae Fundamenta, 1, Wiesbaden.

Doerfer, G. (1963), Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen, 1, Wiesbaden, 51–105 (Bemerkungen zur Verwandtschaft der sog. altaischen Sprachen).

Doerfer, G. (1966), "Zur Verwandtschaft der altaischen Sprachen", IF, 71.

Doerfer, G. (1968), "Zwei wichtige Probleme der Altaistik", JSFOu, 69.

Doerfer, G. (1971), "Bemerkungen zur linguistischen Klassifikation", IF, 76.

Gabain, A. von (1945), Özbekische Grammatik, Leipzig und Wien.

Gabain, A. von (1950), Alttürkische Grammatik², Leipzig.

Gombocz, Z. (1912 a), Die bulgarisch-türkischen Lehnwörter in der ungarischen Sprache, Helsinki.

Gombocz, Z. (1912 b), "Zur Lautgeschichte der altaischen Sprachen", Keleti Szemle, 13.

Greenberg, J. H. (1966), "Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements", Universals of Language², Cambridge, Mass. and London.

Ikegami, J. (1957), "Über die Herkunft einiger unregelmäßiger Imperativformen der mandschurischen Verben", Studia

Altaica, Wiesbaden.
Ikegami, J. (1974), "Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen", Sprache, Geschichte und Kultur der altaischen Völker, Berlin.
Jakobson, R. (1962), Selected Writings, 1, Phonological Studies, The Hague.
Jakobson, R., Fant, C. G. M., Halle, M. (1952), Preliminaries to speech analysis, Cambridge, Mass.
Kałużyński, S. (1962), Mongolische Elemente in der jakutischen Sprache, Warszawa.
Laufer, B. (1921), "Jurči and Mongol numerals", Kőrösi Csoma-Archivum, 1.
Meillet, A. (1937), Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes[8], Paris.
Menges, K. H. (1943), "The function and origin of the Tungus tense in *-ra* and some related questions of Tungus grammar", Language, 19.
Menges, K. H. (1953), "Zwei alt-mesopotamische Lehnwörter im Altajischen", UAJ, 25.
Menges, K. H. (1966), "Ablaut in Altajic?", UAJ, 38.
Menges, K. H. (1975), Altajische Studien, 2, Japanisch und Altajisch, Wiesbaden.
Miller, R. A. (1971), Japanese and the Other Altaic Languages, Chicago and London.
Németh, J. (1912), "Die türkisch-mongolische Hypothese", ZDMG, 66.
Pelliot, P. (1925), "Les mots à *h* initiale, aujourd'hui amuie, dans le mongol des XIII[e] et XIV[e] siècles", Journal Asiatique.
Poppe, N. (1951), Khalkha-mongolische Grammatik, Wiesbaden.
Poppe, N. (1954), Grammar of Written Mongolian, Wiesbaden.
Poppe, N. (1955 a), Introduction to Mongolian Comparative Studies, Helsinki.
Poppe, N. (1955 b), "The Turkic loan words in Middle Mongolian", CAJ, 1.
Poppe, N. (1958), "Einige Lautgesetze und ihre Bedeutung zur Frage der mongolisch-türkischen Sprachbeziehungen", UAJ, 30.

Poppe, N. (1960), Vergleichende Grammatik der altaischen Sprachen, 1, Vergleichende Lautlehlre, Wiesbaden.
Poppe, N. (1962), "The primary long vowels in Mongolian", JSFOu, 63.
Poppe, N. (1965), Introduction to Altaic Linguistics, Wiesbaden.
Pritsak, O. (1964), "Der,, Rhotazismus" und,, Lambdazismus" ",UAJ, 35.
Ramstedt, G. J. (1906), "Über mongolische Pronomina", JSFOu, 23.
Ramstedt, G. J. (1907), "Über die Zahlwörter der altaischen Sprachen", JSFOu, 24.
Ramstedt, G. J. (1916), "Ein anlautender stimmloser Labial in der mongolisch-türkischen Ursprache", JSFOu, 32.
Ramstedt, G. J. (1922), "Zur Frage nach der Stellung des tschuwassischen", JSFOu, 38.
Ramstedt, G. J. (1952, 1957, 1966), Einführung in die altaische Sprachwissenschaft, I (1957), II (1952), III (1966), Helsinki.
Räsänen, M. (1949), Materialien zur Lautgeschichte der türkischen Sprachen, Helsinki.
Räsänen, M. (1961),"Tü. anl. *h*- als Überbleibsel des alt. *p*-", UAJ, 33.
Shirokogoroff, S. M. (1930), "Notes on the bilabialization and aspiration of the vowels in the Tungus languages", Rocznik Orjentalistyczny, 7.
Shirokogoroff, S. M. (1931), "Ethnological and Linguistical Aspects of the Ural-Altaic Hypothesis", 『清華学報』 6, pp. 89–193 (Part 2, The Ural-Altaic hypothesis).
Smedt, A. de, Mostaert, A. (1933), Le dialecte monguor parlé par les mongols du Kansou occidental, III^e partie, Dictionnaire monguor-français, Pei-p'ing.
Tekin, T. (1969), "Zetacism and sigmatism in proto-Turkic", Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae, 22.
Tekin, T. (1975), "Further evidence for 《zetacism》 and 《sigmatism》", Researches in Altaic Languages, Budapest.

Баскаков, Н. А. (1969), Введение в изучение тюркских языков[2], Москва.
Баскаков, Н. А. и др. (1968), Туркменско-русский словарь, Москва.
Василевич, Г. М. (1958), Эвенкийско-русский словарь, Москва.

Владимирцов, Б. Я. (1929), Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия, Введение и фонетика, Ленинград.

Горцевская, В. А. и др. (1958), Эвенкийско-русский словарь, Ленинград.

Дмитриев, Н. К. (1955, 1956, 1961, 1962), Исследования по сравнительной грамматике тюркских языков, 1–4, Москва.

Клоусон, Дж. (1969), "Лексикостатистическая оценка алтайской теории", ВЯ.

Ковалевскій, О. (1844, 1846, 1849), Монгольско-русско-французскій словарь, Казань.

Лигети, Л. (1971), "Алтайская теория и лексикостатистика", ВЯ(リゲティ，ルイ，橋本勝訳注(1975)「アルタイ語族論と語彙統計学」『大阪外国語大学学報』33), Ligeti, L. (1975), "La théorie altaïque et la lexico-statistique", Researches in Altaic Languages, Budapest.)

Малов, С. Е. (1957), Язык желтых уйгуров, Словарь и грамматика, Алма-Ата.

Наделяев, В. М. и др. (1969), Древнетюркский словарь, Ленинград.

Поливанов, Е. Д. (1927), "К вопросу о родственных отношениях корейского и «алтайских» языков", Известия АН СССР, серия 6(ポリワーノフ，E. D., 村山七郎編訳(1976)「朝鮮語と「アルタイ」諸語との親縁関係の問題について」『日本語研究』弘文堂).

Поппе, Н. Н. (1938, 1939), "Монгольский словарь Мукаддимат ал-Адаб", Труды Института Востоковедения, 14(頁数は 1971 の Gregg International Publishers Ltd. 版の複製本により示す).

Сироткин, М. Я. (1961), Чувашско-русский словарь, Москва.

Слепцов, П. А. (1972), Якутско-русский словарь, Москва.

Суник, О. П. (1947), "О категории отчуждаемой и неотчуждаемой принадлежности в тунгусо-манчжурских языках", Известия АН СССР, отделение литературы и языка, 6, 5.

Тенишев, Э. Р. (1976 a), Строй сарыг-югурского языка, Москва.

Тенишев, Э. Р. (1976 b), Строй саларского языка, Москва.

Тенишев, Э. Р., Тодаева, Б. Х. (1966), Язык желтых уйгуров, Москва, Часть I. Язык сарыг югуров, Часть II. Язык шира

югуров.
Тодаева, Б. Х. (1960), Монгольские языки и диалекты Китая, Москва.
Тодаева, Б. Х. (1961), Дунсянский язык, Москва.
Тодаева, Б. Х. (1964), Баоаньский язык, Москва.
Тодаева, Б. Х. (1973), Монгорский язык, Москва.
Цинциус, В. И. (1949), Сравнительная фонетика тунгусо-маньчжурских языков, Ленинград.
Щербак, А. М. (1959), "Об алтайской гипотезе в языкознании", ВЯ.
Щербак, А. М. (1966), "О характере лексических взаимосвязей тюркских, монгольских и тунгусо-маньчжурских языков", ВЯ.
Щербак, А. М. (1970), Сравнительная фонетика тюркских языков, Ленинград.

雑誌略号

CAJ=Central Asiatic Journal
IF=Indogermanische Forschungen
JSFOu=Journal de la Société Finno-ougrienne
UAJ=Ural-Altaische Jahrbücher
ZDMG=Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft
ВЯ=Вопросы Языкознания

3　南方諸語との系統的関係

崎山　理

はじめに

わが国では、普通、南の方、大体において日本の緯度よりも南に位置する諸島の言語を漠然と指して南方語(南方諸語)といわれることが多いようだ。また、南方の大陸部の言語に対しては東南アジア諸語などといわれる。しかし、言語学的に見れば、そのような統一体は認められないのであって、まず南方諸語そのものの言語的性質を明らかにしておく必要がある。

いくつかの言語の間に血縁関係が存在するとき、それらの言語は語族をなすとされる。語族をなすかどうかの証明は比較言語学的手段によらなければならないが、その際、インド・ヨーロッパ語比較言語学ですでに一世紀以上にわたって開発されてきた方法、すなわち、言語間に音韻対応の規則を見つけるという基本的原則に基づきながら、さらに往々にしてこの点だけが強調されたり、また逆に、軽視されてしまうことが日本語の系統論には多く見られるのだが、各言語の語構成法、文法的形式また統辞法の一致を、また不一致ならばその理由を見出してゆくのである。親族関係の証明には音韻対応、語構成法、文法形式があたかも三つ巴をなすように考慮されていなければならず、このうちのどれを欠いても、ことに音韻対応を欠けば、証明力が極めて弱くなる。このような方法論は、インド・ヨーロッパ語の比較の中から確立されてきたとはいえ、その他の言語の系統論にも適用されて大きな成功を収めた。フィン・ウゴール語族、バントゥー語族などその典型的なものであるし、次に述べるマライ・ポリネシア(南島)語族の場合もそうである。ただし、ニューギニア(イリアン・ジャヤ)の諸言語のように、その間に音韻対応を見出し難いくらい差異の激しい言語に対してはその間の関係を計量的に処理しようとする基礎語彙統計学的方法も用いられてきたが、この方法が系統関係の証明に役立たないのは当然であって、一方で比較言語学的な努力も続けられ、例えば、ビー(D)

Bee)によって東部ニューギニア高地諸語に対して再構形を立てることが試みられている。[1] 親族関係を証明するための音韻対応の重要性は今後も変わることはないであろう。

一 フンボルトのマライ・ポリネシア語研究

マライ・ポリネシア語族という統一体は、南方にあってもっとも安定した語族であり、この名称の創始とともにその比較言語学的な証明を行ったのは、ドイツの政治家・哲学者としても著名なフンボルト(W. von Humboldt)である。一八三六年から三九年にかけて出版された『ジャワ島のカウィ語について』三巻は、その第一巻のみが、現在、単行本として再刊され、有名な「人間言語の構造的種々性とその精神的発展に及ぼす影響について」を序説として載せているが、二・三巻は現在では希覯本である。まず彼は、この書物の主タイトルからも分かるように、ジャワの古語であるカウィ語に対して従来抱かれていた誤った考え方、すなわち、その接辞にまで及ぶサンスクリットからの借用語の多さに眩惑されてサンスクリットの崩壊した言語であるとする見方を退け、その文法的構造においてはむしろマライ語と関連を持つ言語であることを明らかにし、[2] 一方で、ポリネシア諸語(タヒティ語、トンガ語、ニュージーランド語=マオリ語、ハワイ語)が文法、語彙においてマライ諸語(マライ語、インドネシアのスラウェシ島のブギス語、フィリピンのタガログ語、ジャワ語、マダガスカル語=マラガシ語)と親縁関係にあるとし、それらを統べる名称として「南海諸語」(Südsee-Sprachen)とも呼んでいる。

フンボルトのサンスクリットに対する並々ならぬ研究は、南海諸語からサンスクリット要素を除き去るに際しても、マライ語 tuan「貴方」をサンスクリット tvam「汝」の借用語とみなすような少しの誤りはあるとはいえ(これは借用語ではなく、原マライ・ポリネシア語 *tuwan にさかのぼる。[3] *は再構成された形、または実在しない形を表わす)、

資料 1　カウィ語(古ジャワ語)の例

Nahan	de	sang	nāthā	kĕmita	irikang	bhūmi	subhaga,
このように	によって	(敬称)	王(サ)	世話する	その・の	国土(サ)	幸いな(サ)
				kĕmit-a			
				(非現実の -a)			

Parārthāsih	yāgöng	sakalara	nikang	rāt	winulatan,
利他・慈愛	それ・大きい	あらゆる苦情	その・の	国民	注視される
parārtha(サ)＋asih	ya-a-göng	saka-lara			w-in-ulat-an
	(形容詞化の -a)				(受動の -in-, 名詞化の-an)

Tuminghal	yatnā	sing	sawu	wusikanang	çāsana	tinūt,
見る	努力	何でも	あらゆる	教え その・の	聖教(サ)	従われる
t-um-inghal	yatna(サ)-asing					t-in-ūt
(能動の -um-)						

Tĕpĕt	māsih	tar	wruh	kuṭila	milaging	bañcana	dumeh.
正しく	慈悲深い	ない	知る	不徳の(サ)	回避する・を	ごまかし(サ)	起こる
	ma-asih				-um-ilag-ing		
	(自動詞化の ma-)						

(訳)　その国土が安泰であるために，王によって心せらるべきは以下のようなことである．大きい利他心と慈愛心とでその国民のあらゆる苦情を心に掛け，その努力を積みつつ聖教の教えるところすべてに従うのである．正しく慈悲深く有徳であることが欺瞞(的行為)を妨ぐことにもなるのである．

(サはサンスクリット借用語)

(H. Kern, Rāmāyaṇa kakawin, Rāmāyaṇa, Oud-Javaansch heldendicht, 's Gravenhage, 1900, III: 84.)

比較言語学的にも正しい方法を取らせているが(ボップ(F. Bopp)の『マライ・ポリネシア諸語とインド・ヨーロッパ諸語との親縁関係について』が一八四〇年に出版されたことを思い合わされたい)、彼の比較方法は必ずしも現代的な意味でのそれではなく、対照研究を含む場合もあり、当時としてはやむを得ないこととはいえ、古典語的な文法概念を駆使してその対応形式を南海諸語間にも求めてゆく。例えば、「動詞的小辞」(Verbal-Partikeln)としてマライ語juga, タヒティ語・ハワイ語ua、トンガ語gua(現在ではkuoと表記する)、ラロトンガ語kuaなどを比較し、過去ないし完了を表わす機能を示そうとしているのであるが、実際にはこれらの語はマライ語と音韻対応しないのみならず、またその機能も違っている。jugaは動詞を強調するために用いられ、その際完了を意味することもあるが、そもそもは副詞的に「もまた」を意味した語。一方、ポリネシア諸語の各語はすべて「完了」の小辞でその原ポリネシア語の再構形は*kuaとなるが、jugaとは音韻的にも関係がない。また、現在を表わすものとしてマライ語lagi、ポリネシア諸語のneiを比べているが、この場合も同じような問題点を宿す。

フンボルトの比較は、一般に比較言語学が試みるような祖語の再構成をもくろまない。そして彼にとっては、むしろその時代の風潮とは異なって言語の歴史的研究よりも共時的側面における考察の方がより大きな関心事(4)であり、個個の具体的言語から導かれる祖語形よりも統一的理念としての彼のいわく「一つの言語」(Eine Sprache)を考えることこそが、彼の基本的なテーマであったからである。しかし、その当時に見られた価値観と結びついた言語変転説からは、フンボルトも自由であることができず、最高の尺度にあるインド・ヨーロッパ古典語のような屈折語に対して、孤立語的状態にあるポリネシア語は、より不完全な言語構造を持ち、またインド・ヨーロッパ語よりも未発達であると考えた。予言と洞察に富むフンボルトにしては惜しむべき難点(5)である、ということができる。

ところで、言語一般に見られる傾向として、その語構成法を問題にした時、その分析はなかなか容易ではないけれども、その語根は単音節をなすのではないか、という前提は比較言語学における作業仮設として、とくにインド・ヨ

ーロッパ語における場合を引き合いに出すまでもなく、認められてよいであろう。フンボルトもとくに第三巻の最終章「語構成」においてそれを取り扱っている。この章ではマライ・ポリネシア諸語を考えるに当たって大変重要な文法的要素としての接辞(接頭辞・接尾辞)にも触れられているが、フンボルトの実証的研究としてはもっとも不十分な点を宿す章というべきであろう、また述べ方にも一貫性を欠く。

共時的に各言語の接辞を網羅することは出来るけれども、語構成に接辞がどのように関与したかを明らかにし、そして単音節の語根を抽出することは、マライ・ポリネシア比較言語学においてフンボルト以降も多くの人が試みているとはいえ、現在もまだ首尾一貫して徹底的に行うことができない。その再構形はほとんどの場合 *CVCVC(*CVC-CVC)(Cは子音、Vは母音)のような二音節で与えられ、これをさらにすべての場合にわたって単音節に分解して説明することが必ずしもできないのである。この点で、例えば、原インド・ヨーロッパ語の *pl̥tə$_2$ú-「広い」(ヒッタイト語 pal-ḫi(-i-iš)、サンスクリット pr̥thú-、ギリシア語 platús)は語根が *pl̥-、また、*-t-, *-ə$_2$-, *-u- もそれぞれ特定の機能を持った接尾辞であることを明確に示し得るのとは事情が違っている。そしてマライ・ポリネシア語族と他の言語との系統を問題にする際にはこの点に十分注意が払われなければならない。フンボルトは、例えばハワイ語 pa「囲い、塀」と papa「板」(現在の表記では pā と papa で前者は長母音)とは、後者は前者に接頭辞 pa- がついたものとみるのだが、現在、この解釈は認められず、音韻変化的には前者は *pagə[i](マライ語 pagar「垣」)、後者は *papan または *papak(マライ語 papan「板」、papak「平らな」)の前鼻音化形 *mpampan または *mpampak から導かれ、したがって、この二語の間の関係はないことになる。また別のところでは[6]、タガログ語 paypày「肩甲、扇、日傘」から pay が広がりを表わす概念を持つとして、sampày「干し物」、cápay(現在の表記では kapáy)「身振り」のような語にその要素が認められるとする。あるいはそうかも知れない。マライ語の sampai「到る」、capai「遂げる」にもその要素は存在するであろう。しかし、sa(m)-、ca- は一体何かという問題になると現在もよく分からない。語根的要

素は多くの場合、末尾に来、語幹形成素的要素(formatives)はその前に置かれる。そして語根についてもさることながら、ことに形成素の起源、原初的意味・機能についてまだほとんど何も分かっていないのである。[7]

また要素同士が結合する際に、その間に鼻音が現われたり現われなかったりする。これについてはフンボルトは問題にしていない。先のタガログ語 kapáy は現われていない場合であるが、kampáy という鼻音を持った語も同じ意味を持って存在する。しかし、タガログ語 lapáy「脾臓」、lampáy「大碗」になると、先の語根 pay をここにも認めてよいかどうかが問題となるのみならず、また、この両者の語根を仮に pay と仮定しても、それでは一体、形成素 la- と語根からの前鼻音を含む la-m- とがどのような原則によってこのような意味の違いを引き起こしたのかは、現在も使用されている一部の接頭辞を除いて、まったく明らかでない。そしてこの点も他の言語との系統を論じる際に、常に考えなければならない問題である。

フンボルトの書物は、これがすでに約一世紀半も前のものだということを慮ると、当時の十分の資料もないところでよくここまでの明察に到ったものだという感慨を禁じ得ないし、また、彼の考えようとした問題には現在もまだ解決していないことが多くあるのである。フンボルトの研究ではマライ諸語とポリネシア諸語との中間にあるメラネシア諸語が当時の資料的不備のために抜けていたが、その後、数多くの人によってメラネシア諸語もマライ・ポリネシア語族に属することが比較言語学的に証明されるにいたった。[8] 現在、ポリネシア・メラネシアの諸言語をあわせてオセアニア諸語ということも多い。そしてマライ・ポリネシア語族という名称はもはや不適当であるとして、それに代えて「南島語族」(austronesisch)という名称を与えたのは、ドイツの人類学者シュミット(W. Schmidt)である。[9] しかし、現在、この二つの名称は同じ内容を指すために、ともに用いられる。

二　南島語族の古里

今世紀にはいって南島語族に属する個々の言語研究も大いに進展した。南島語族は東経五〇度のマダガスカル島から地球を半周以上して西経一一〇度のイースター島まで、また北は台湾、ハワイ諸島から南はニュージーランドまでの間で囲まれる地域に分布する大語族である。ただし、大陸部ではマライ半島のマライ語のみが純粋な南島語族のメンバーであり、ニューギニア(イリアン・ジャヤ)内陸部およびその周辺の島々に分布するパプア諸語(いわゆるNAN語＝非南島語)やオーストラリアの原住民の諸言語はこれから除かれる。いずれにせよ悠久の昔にアジア大陸のどこかからこの広大な地域に広がった海洋民族である。そしてこのような山地民族には見られないバイタリティーは、アフリカやアメリカ大陸にまで南島民族が到達していたという仮説[10]をまつまでもなく、日本列島にもさらにおそらくは朝鮮半島にも渡来していたという可能性を排除するものではないであろう。

南島語族の最初の古里としてオランダの碩学ケルン(H. Kern)はインドシナ半島の海岸地方を考えた[11]。彼は、一一二の南島語について、風土を決定できるような三〇の語を求め、例えば、熱帯にしか生育しない「甘蔗」(マライ語 təbu、タガログ語 tubó、フィジ語 ndovu、ハワイ語 kō (<*tō<*təbu'))、「椰子」(それぞれ、niyur, niyóg, niu, niu)、「瑇瑁(たいまい)」(それぞれ、pənyu, (タガログ語に対応例なし、ミンダナオ島のビラアン語 fnu), vonu, honu)、「鱝(えい)」(それぞれ、pari, pagi, vai, (ハワイ語に対応例なし、タヒティ語 fai))のような語が基礎語(grondtaal)として広い地域にわたり保持されていることは、これらの語が出発時点においてすでに存在していたとみなし、また、「帆」(それぞれ、layar, layag, laða, lā)、「小舟」(それぞれ、waŋkaŋ, baŋkáʔ, waŋga, waʔa)などによってすでに海洋民族として必須の語も知っていたことから、その出発地を先のように決めたのである。もっともこの考え方の裏には、インドシナ半島に現

在は点在するかつての占城(チャンパ)王国の言語、チャム語を完全な南島語族に属する言語とみなしていたという点がある。[12]

また、このような語彙の比べ合わせも、その後の厳密な比較によって、waŋkaŋ, waŋa, waʔa は *waŋkaŋ に、baŋkáʔ は *baŋka[h] にさかのぼる別の語であることが分かってきた。原南島語族は少なくともその語彙で見る限り、すでにある程度の高い文化の持ち主であったようである。例えば、「米」(マライ語 bəras、タガログ語 bigás)、「稲」(それぞれ、padi, palay)のような区別を知っていた。これらの語がオセアニア諸語でまったく見られないのは、そこへ移住した南島語族がその地でその作物に出会う機会を失ったので、すっかりその語を忘れてしまったか、あるいは稲作の習得以前にその一派が古里を離れたからだとケルンは説明する。ただし、後に述べるようにオセアニア諸語にはサンスクリットからの借用語がまったく見られないことによって後者の可能性は強い。また、フィリピンのセブ語 humáy「稲、米」、インドネシアのスマトラ島のトバ・バタック語 eme「米穀」、台湾のプユマ語 rumai「稲」・パゼー語 sumái「飯」・アミ語 həmái「飯」・クヴァラン語 ʔmai, ʔəmái「飯」、ミクロネシアのヤップ語 komëi「米」、さらにポリネシアのマオリ語 kome「食物」につながるもう一つの系列の語があり(これらに対して安定した再構を行い得るのは *-may という部分のみである)、ケルンもいうように、米はすでに重要な食物として栽培されていたのであろう。

なお、マライ語 bəsi、トバ・バタック語 bosi「鉄」、ヤップ語 wasëi「鉄」、フィジ語 vesi「鉄木、この木から作った槍」などによって(アメリカのダイエン(I. Dyen)はもとの意味は「ある種の木」だといっているが[13])、原南島人は鉄も知っていたと仮定することができる。ただし、この語もフィジ語などわずかの言語を除いてオセアニア諸語には広がっていない。原南島語の古里の仮説としてこのケルン説はもっとも有力であるが、その地はあくまでも出発地点であって、原南島人がさらにその奥から出てきたことをケルンも否定してはいない。

奥地との関係の可能性については、アメリカのベネディクト(P. K. Benedict)は、南島語族とアジア大陸内部のカダイ諸語(中国の雲南地方・ヴェトナムのトンキン地方のラクア語、ラティ語、ケラオ語、および海南島の黎(リー)語を含む

が、一般的にはシナ・チベット語系と考えられ、また、ラティ語は孤立語とされている[14]およびタイ語をたがいに系統関係を持つ言語共同体であると考える。[15] カダイ諸語は形態的・音韻的には孤立的な単音節の声調言語でタイ語に近いが、語彙的には南島語の要素が多く認められるとして、カダイ諸語を南島語とタイ語との間の過渡的(transitional)言語とみなすのである。「過渡的」という用語自体あいまいであるが(一体何から何への過渡なのか)、その比較方法にも問題点が多い。確かに、「眼」(原南島語 *mata'、ラクァ語 te、原タイ語 *ta)、「鳥」(原南島語 *manuk、ラクァ語 nuk、原タイ語 *nŏk)などを見ればその間の相似した関係について興味をそそられるが、それでは南島語の *ma- (*mata', *manuk の語構成は *ma-ta', *ma-nuk であったと仮定して)は何なのか、あるいは、ベネディクトはそのように考えているが(「眼」*mapra、「鳥」*manluk のような原形を再構する)、タイ語でももとは二音節の語を単音節にしたという説明が語史的に成り立つのか、現状ではそのいずれをもまだ十分に説明することができない段階にある。[16] ダイエンが、南島語の一音節を無視することによっていくらでもそのような対応例を増やしてゆくことができる、と批評しているのは、けだし当然である。

また、ベネディクトの例の中で原タイ語 *blüăn「月」は原南島語 *bulan「月」と良く似ているが、南島語はさらに *bu-lan と分析でき、*bu- は *bu'ah「果実」、*bulat「丸い」、*bulut「包む」などから、フンボルトもすでに気付いていたように、[17] 丸いもの、丸い状態を意味したと考えられるが、このような分析にまで立ち入った考察を進めていないのである。彼はこのような南島・タイ語族(Austro-Thai)とモン・クメール語およびヴェトナム語、それにミャオ語・ヤオ語を一括して「南方語族」(Austric)をなすと考えるが、この南方語族は後に述べるシュミットの「南方語族」とは一致しないのみならず、シュミットのそれと同じくまだ学問的な承認を受ける段階に到っていない。ベネディクトの場合は、原南島語族の出発地を南シナ海岸とし、そこから海南島を通って北は台湾、東はフィリピン、南はインドシナ(チャム語を指す)・カリマンタン島・ジャワ島・スマトラ島・マライ半島へ向かったとする。ケルンより

出発の位置は少し北になる。ただし、オーストリアのハイネ・ゲルデルンの調査した有肩石斧の分布に基づく考古学的結果からは南島語族がマライ半島を南下したと考えられるから[18]、いずれにせよ、アジア大陸の東南部奥地に一層古いその古里が存在していた可能性が強いことになる。

原南島語族がそれぞれの地へ散らばってゆくには、もちろん、相当に長い期間がかかっている。各地域ごとに、南島語としての下位の特徴を発生させるゆえんでもあるが、十分に確認できないことながら、そのような地域的特徴は、出発地においてすでに出来上がっていたとも考えられる。現在、一般に行われる下位分類は、語派としてインドネシア(ヘスペロネシア)、メラネシア、ポリネシアの三つを立てる。その区分の根拠は、ことに音韻面について、ドイツのデムプウォルフ(O. Dempwolff)が与えた。

三　デムプウォルフの南島語研究

デムプウォルフの『南島語語彙比較音韻論』三巻は一九三四年から三八年にかけて出版されたが[19]、南島語比較言語学の創始者フンボルトの書物から一世紀たってそれは一応の大成を見たことになる。この書物の出版年代にもかかわらず、また、比較の材料として台湾、ミクロネシアの諸言語が取り扱われていないにもかかわらず、この書物が現在においても南島語比較言語学に占める基本的重要性は変わらない。それはデムプウォルフの方法論が音韻対応規則を重視した伝統的な比較言語学の手法に基づいているからであり(この書物は彼の師でもあったバントゥー語族の樹立者マインホフ(C. Meinhof)に捧げられている)、さらに、原南島語に対する総合的でかつ穏健な見通しである。その後の南島語研究は、デンプウォルフを巡りつつ、足りないところを補足し、いたらないところを修正して進んできたといっても言い過ぎではない。

資料 2

	a	i	u	ə -aw	-ay	-uy	w	y	'	h	m	n n'	ŋ	b p
原南島語	a	i	u	ə -aw	-ay	-uy	w	y	'	h	m	n n'	ŋ	b p
原メラネシア語	a	i	u	o	e	?	w	y	'	k	m	n	ŋ	b
原ポリネシア語	a	i	u	o	e	i	w	'	'	'	m	n	ŋ	f

	d ḍ	t ṭ	d' t' g' k'	g k	l	ḷ	γ	mb mp	nd ṇd	nt ṇt	n'd' n't' ŋ'g' ŋ'k'	ŋg ŋk
原南島語	d ḍ	t ṭ	d' t' g' k'	g k	l	ḷ	γ	mb mp	nd ṇd	nt ṇt	n'd' n't' ŋ'g' ŋ'k'	ŋg ŋk
原メラネシア語	d	t	d'	g	l	ḷ	γ	mb	nd	nt	n'd'	ŋg
原ポリネシア語	l	t	s	k	l	l	'	p	'	t	h	k

(?は実例が見当らず不明とされているもの)

彼はその第一巻においてインドネシア諸語(タガログ語、トバ・バタック語、ジャワ語)から帰納的に原音を再構してゆき、第二巻ではその原音を演繹的に適用しつつ、同じくインドネシア諸語のマライ語、ンガジュ・ダヤック語、ホヴァ語(=マラガシ語)を検討し、そしてまたメラネシア諸語(フィジ語、サア語)・ポリネシア諸語(トンガ語、フトゥナ語、サモア語)への変化を説明するという方法を取っている。

第三巻はそのような方法によって得られた原南島語の再構形語彙集である。その再構音の種類と原メラネシア語音、原ポリネシア語音への変化の仕方は表に示したようになるが(資料2)、その考え方の特色として、インドネシア諸語から導かれた原インドネシア語音が即原南島語音になるとみなしたことである。オセアニア諸語はインドネシア諸語から変化した言語であるという見方はシュミットにもすでに見られたが、現在この考え方を必ずしも取る必要はない。むしろ、各地域ごとの諸言語間で原インドネシア語にまでさかのぼらない再構形が立てられる場合も多いことが、研究が精密化するにつれて明らかになってきている。例えば、原ポリネシア語専有の、あるいは、台湾の原ツォウ語専有のといった具合に[20]。

資料 3

母　　音	a　i　u　ə
半母音	w　y
両唇音	p　b　m
歯　　音	t　d　n　l
そり舌音	ṭ　ḍ　ṇ　ḷ
歯茎音	t′　d′　n′
硬口蓋音	k′　g′　ŋ′
軟口蓋音	k　g　ŋ　ɣ
喉頭音	‘　h

デムプウォルフの再構形集には二二一三項目が掲げられ、そのうち前後参照用の六項目を除いた二二〇七項目に示されている具体例として、無論、インドネシア諸語から例が出ていないものはないわけだけれども、メラネシア諸語の例のあるのは六一三項目、ポリネシア諸語は四一三項目となって次第にその数は減ってゆく。[21] ということは、再構された語形を支持する具体例には多寡があり、それは再構形の質そのものを左右していることになる。例えば、さきほど掲げた「眼」*mata'、「鳥」*manuk、「椰子」*niyuɣ などはほとんど全南島語によって支持されるが、「非常に」*t′aŋət、「焼く」*baka[ḷ] などはわずか二語(これらの場合、マライ語とジャワ語)によって再構されていて、このような場合、借用語ではないかということも十分に考慮しなければならないとすると(実際 *t′aŋət は疑わしい。マライ語 saŋat はジャワ語 saŋət の借用語であることがほぼ間違いない)、これらの再構形をすべて全南島語的な同じ資格を持ったものとして取り扱うことはできなくなる。要するに、このことは、南島語族という概念に対して厚くて広い時間的・空間的層と幅とを認めなければならないことを意味し、他の言語との比接に際しても——例えば、日本語の系統論において他言語との対応に適合させるべく現代語のみならず古語から、またあちこちの方言から寄せ集めて作られた資料としての日本語そのものの妥当性が問題とされるべきように——基本的に重要な問題を提供する。厳密な意味での比較は、原則としてある特定の時代のある特定の言語(または方言)間の構造全体の比較でなければならないからである。

次に、デムプウォルフは実際にその再構形が原南島語族によって話されていたという意味で再構を行ったのでなく、あくまで「関係の体系」(Bezugssystem)を示そうとしたのであり、[22] 語源的に同じと認定できる形態素の「辞式」(Formeln)を再構形によって表わそうとしたのだという指摘もなされているように、演繹的体系として非常に整合的な形

式で表示されるような音韻の構造を設定し(資料3)(無論それは諸言語の比較によって帰納的に導かれるわけだが)、また、その再構形としては *CVCVC(*CVCCVC)という形を、ごくわずかの擬声語を除いてすべてに対して与えているのである。したがって、再構形は母音で始まったり、終わったりすることはなく、すべてその前あるいは後に弱い声門音 *'(weicher Stimmritzen-Verschluß)がつけられる。そして強い声門音 '[ʔ] は再構形には反映されない。これについては後で検討するが、ある意味では機械的である。このような二音節形をまず考えてその語構成法までは立ち入ろうとはしなかったのは、すでに述べた理由によって安全で賢明であったともいえる。あえてそれ以上には挑戦しなかったのである。この二音節語の中には同じ音節の重複形も多く含まれている(村山七郎の計算では二二一三項目のうち、借用語を除いた二一五二項目の六・五%)[23]。例えば、*CVCCVC になる *gəŋgəm「握り拳」(マライ語・ジャワ語 gəŋgam「拳」、ジャワ語 gəgəm「丸めた」、サモア語 ʔoʔom(i)「握りつぶす」)、*gigit「噛む」(マライ語・ジャワ語 gigit)などは、前者が *gəm の完全重複、後者が *git の不完全重複をした形をしていると考えてもよいくらいであるが(実際上、*gəm, *git のような語根のみを掲げておく方が、ある場合には完全重複形、ある場合には不完全重複形というように項目としての首尾一貫性を欠かなくてすむであろう)、やはりこの場合も重複という多様な機能を帯びる現象へ深入りすることを避けたのである。この点についてはその後のダイエンの再構方法も同じである。

同じようなことが *CV(C)CVC 形または *CVC 形によって説明した「前鼻音化現象」(Pränasalierung)を伴う形についてもいえる。その現象は次頁の表に示すように(資料4)原南島語の一二の子音(破裂音と摩擦音あるいは破擦音)を頭に持つ形態素(共時的には語幹、語基(=二次的語根、歴史的には語根の集まりであるが共時的意識のもとではそれ以上に分析を許さないもの)であり、通時的には語根となる)に他の形態素(共時的には接頭辞であり、通時的には語幹形成素また接頭辞のこともあった)が結合し合う時、結合個所に同じ器官で調音される鼻音が現われるのであり、その現われ方には二種類、すなわち「前出」(Zuwachs)と「代償」(Ersatz)とがある。

資料 4

（鼻音前出）			（鼻音代償）		
	b～mb	ḍ～ṇḍ		b～m	ḍ～ṇ
	p～mp	ṭ～ṇṭ		p～m	ṭ～ṇ
	d～nd	d'～n'd'		d～n	d'～n'
	t～nt	t'～n't'		t～n	t'～n'
	g～ŋg	g'～ŋ'g'		g～ŋ	g'～ŋ'
	k～ŋk	k'～ŋ'k'		k～ŋ	k'～ŋ'

この表はデムプウォルフが考えたあくまで理想的な体系を示したもので、現在、この体系の維持の仕方は言語によって異なる。例えば、現在のインドネシア諸語は接辞法にこの現象を残すことが多いが、タガログ語では前出として、

g-～ŋg-, h-～ŋh-, V-～ŋV-, w-～ŋw-, y-～ŋy-, d-～nd-, r-～nr-, l-～nl-, b-～mb-, m-～ŋm-, n-～ŋn-, ŋ-～ŋ(a)ŋ-(例えば接頭辞 ma- は maganyák「誘われる」: manga-nyák「勧誘する」、接頭辞 pa- は paŋalan「名」: paŋŋalan「名詞」のように)、

代償として、

k-～ŋ-, t-～n-, s-～n-, p-～m-, b-～m-(makalás「ほどける」: maŋalás「ほどく」、mabahay「家のある、住宅地の」: mamahay「居住する」のように。ただし b- には語によって前出となることもある mabasáʔ「濡れる」: mambasáʔ「濡らす」)、

のように原則としてすべての音にこの現象が起こり、また起こさない時とは接頭辞に文法的な機能の違いを生ぜしめる。南島語一般としていえば、起こさない場合(*ma-)は語基の状態になること、起こす場合(*maN-)は他動詞的な働きを持つわけだが、タガログ語の場合、起こした形は習慣的・反復的行為をも表わす。

このようにすべての音にこの現象が現われることができなければ、そこに文法性を認めることはできないわけであるが、デムプウォルフの示した体系とタガログ語(またカウィ語も鼻音を除いて大体これに準じる)のような場合とは、どちらが原初的かを決めることは難しい。デムプウォルフの場合は、全鼻音化現象を単に「強調」(Intensivierung)とみなす考えに従い、また、接辞法にまで深入りしないから、単に対応の事実のみによって *ə̆(m)pat「四」(マライ語 ʔəmpat、タガログ語 ʔapat)のようにその両方の可能性を示すために括弧でくくる場合のほか、*tandúk「角(つの)」(マライ語 tanduk、タガログ語 tandók)では鼻音を含めた形で掲げている。しかし、インドネシアのハルマヘラ島南部のブ

リ語では tadu であって前鼻音化を起こしていないから、*taduk も原形となるべきであり、またある場合には、*laku、「行為」(マライ語 laku、タガログ語 lako?) のように前鼻音化のない再構形もブリ語では (ka)laŋku(an) となることによって *laŋku という可能性もあったことになり、語構成法が十分明らかでないとはいえ、デムプウォルフによる前鼻音化現象の再構形への適用は、はなはだ不徹底であったともいえるのである。

要するに、前鼻音化現象というのは、現在のインドネシア諸語の接辞法からも明らかなように、音韻的現象のみならずある機能的働きがそこに伴う文法的現象でもあり、単なる音韻現象だけの比較を越えて、このような現象が言語間に認められれば、より一層強固に親族関係の証明をすることになる。オセアニア諸語にもこの現象は痕跡としてであるが残る。フィジ語の正書法 b, d, q は、それぞれ[mb, nd, ŋg]と発音され、語頭・語中に現われるが、この現象を起こした語と起こさない語とはしばしば意義の分化を行って共存することがある。mbulu (kovu)「結んだ髪」: vulu (a)「髪」、nduva「毒流し漁用樹木」: tuva (kei)「樹木の一種」、ŋgari「引っかく」: kari「削る」のように。これに対してデムプウォルフは *bulu、*tuva、*galit がそれぞれに変化したと単純に考えるが、やはり前鼻音化への深入りを避けたのである。しかし、この場合、何か接頭辞が付いていたその名残であるかも分からない。このようなフィジ語の現象からその反映を日本語にも見出そうとしたのはロシアのポリワーノフ (E. D. Polivanov) であり[24]、その後、前鼻音化現象の考えを日本語系統論の中で押し進めているのが村山七郎である。

四 ダイエンの南島語研究

デムプウォルフの再構音の修正にもっとも精力的な活躍をしているのはダイエンである。その説の中でも有名な「喉頭音説[25]」(以下に見られるように、原インド・ヨーロッパ語で問題となっているアプラウトと関係した現象とは違

う)で、デムプウォルフの再構した喉頭音には明らかに不備があるとし、デムプウォルフの *ħ, *ʻ をそれぞれ *q, *ħ と書き改める一方で、デムプウォルフがマライ語に語頭では(ここでは語頭のみを取り上げる)アラビア語からの借用語以外に ħ- を認めず、喉頭音の ʔ- と ʻ- とがそれぞれ、*ʻ-, *ħ- に由来したと考えるのに対し、ダイエンはマライ語の ħ- を認め(ʔ-, ʻ- は認めず V- を認める)、タガログ語の語頭音 ħ- と ʔ-(タガログ語の語頭母音にはドイツ語のように必ず ʔ- がつく)とそれがどのような対応をするかによって、マライ語 V-：タガログ語 ʔ- は *V- に、ħ-：ʔ- は *q- に、ħ-：ħ- は *ħ- に由来するという新たな対応系列を設定するのである。したがって、デムプウォルフの *ʻə(m)pat「四」＞マライ語 ʔəmpat：タガログ語 ʔapat, *ʻu(ŋ)ḍaŋ「甲殻類」＞ʔudaŋ：ʔuláŋ, *hampil「近い」＞ʻampir：hampíl という対立は、それぞれ、*epat＞əmpat：ʔá:pat, *quDaN＞(h)udaN：ʔuláN, *hapir＞(h)amper：hampíl のように解釈しなおされる。要するに、デムプウォルフの *ʻ-, *ħ- を *V-, *q-, *ħ- のように三つに分割しようとするのである。

そしてなぜこのようなことが起こったのかといえば、そのもとになった資料(辞書)の表記・インフォーマントの発音のゆれである。マライ語は広い範囲で話されるためリングア・フランカ的性格があり、実際このような困難なことが起こるのであろう[26]というけれども、すでにユーレンベック(E. M. Uhlenbeck)も批評したように[27]、マライ語において h 音の出現を決めることは決して簡単ではない。hutaŋ～utaŋ「借金」、hitam～itam「黒」(ダイエン *qutaN, *qitam)は、明らかに同一人からも両方耳にするし、ことにここでは取り上げなかった語末のゆれは、sila～silah「招く」、kasi～kasih「与える」、Eropa～Eropah「ヨーロッパ」のように非常に激しい。そしてマライ語史的にもそうであったことはユーレンベックが述べているとおりである。この批評に反論して、ダイエンはあまりゆれのない見本だとしてカリマンタン島のマライ語バンジャルマシン方言を示しそれに従うべきだとする[28]。しかしこれでは水掛け論になるであろう。どこかにまた別の仕方でゆれのない方言が存在するかも知れない。とにかくマライ語全体としてみればゆれのある事実は変

わらないのだから。[29] いずれにせよ喉頭音問題はまだ安定した結論には達していない。

ところで、ダイエンの音韻対応系列が異なるごとにデムプウォルフによる再構音の変種を際限なく増やしてゆくといった方法論上の傾向は、台湾の諸言語の比較によってその極に達したかの観がある。台湾はその面積の小ささにもかかわらず、そこで行われる一二箇の南島諸語[30]は互いにその差が非常に激しい。そしてそれら言語間で音韻対応を求めると多様な系列が生まれる。例えば、多くの言語で *batu「石」(マライ語 batu、タガログ語 bató)、*mata「眼」(マライ語 mata、タガログ語matá) の *t が区別されている。サイシアット語では bato?, masa?、タオ語では fá:tu?, má:θa? のように。したがって、原南島語には *t が二種類あったと考え、*batu?, *maCa? のように再構するのである。このような音韻発現の多様性によって原南島語の再構音を再考しようとしたのは、すでに一八九七(明治三〇)年頃から台湾で現地語研究に従っていた小川尚義であり、一九三七年からその跡を継いだ浅井恵倫であった。ダイエンの厳しい対応系列の設定は、同種の再構音をいくら増やしても構わないかに見える。この点ではデムプウォルフの方針とまったく対照的である。

しかし、五ないし六の *S を立てる次のような場合はどうであろうか。語中ではアタヤル語 -s-：セディック語 -s- によって *qaS_1elu「杵」(デムプウォルフの形 *halu'、アタヤル語 qseyu：セディック語 se:ru)、-h-：-h- によって *kaS_2iw「木」(*kayu'、それぞれ、kəhu-niq：qahu-ni)、-s-：-h- によって *DewS_3a (*duwa'、それぞれ、rusa：daha) のように再構する (*S_4〜*S_6 については省略する)。

ただし、この場合、s, h という緊張性(tense)の摩擦音は一般的に見て相通性があるという事実に注意を払うならば、このような峻別化が適当かどうかが改めて問題となろう。東京方言と大阪方言との間には「お嫁さん」：「嫁はん」、「…ません」：「…まへん」のような -s-：-h- という関係と、「富士山(ふじさん)」：「富士山(ふじさん)」、「飲ませろ」：「飲ませ(え)」のような -s-：-s- という関係とが認められる。それに対して *sa_1〜*sa_2, *se_1〜*se_2 などのような音を原音として区別する必要が

一体あるだろうか。問題はこれと同じかも知れない。あるいはまた、日本語と沖縄語(首里方言)との間には日本語の ri に関して「歩く」: ʔaQcun、「鳥」: tui、「硯」: sizirí、「退く」: sizicuN のような関係があるからといって、例えば $*ri_1$ ~ $*ri_4$ という区別された音を再構することは、空しいことであろう。台湾諸語の中でもこれと同じようなことをしているのかも知れない。その実体が明らかにされるのは南島語比較言語学におけるさらに将来の課題であるとしても。[32]

台湾の諸言語は、一般には、インドネシア語族の中に含めて考えられることが多いが、無論、それは実体が十分に把握されていなかったということにもよる。台湾の諸語を独立させて一つの語派とし(北語派)、それを除いたインドネシア諸語(西語派)とポリネシア・メラネシア諸語およびパラウ語・チャモロ語を除いたミクロネシアの諸言語(東語派)とを対立させるのはフランスのオドリクール(A. G. Haudricourt)である。[33] またダイエンは言語年代学的および基礎語彙統計学的方法によって台湾に南島語族が渡来したのは紀元前三〇〇〇年頃であるとし、[34] また、ダール(O. C. Dahl)も台湾諸語の音韻的・文法的構造が古風であるとみなして南島語族からの最初の分岐者であると述べ、ダイエンを支持するかである。[35] しかし、いうまでもなく統計学的研究にはそれ自身の限界もある。またことに、その言語的資料の質が均整でない場合、その結果について完全な信頼を置くことができない[36]とする人が出ても別段不思議ではない。台湾の諸言語から導かれる再構音はすべて原南島語のそれとしなければならない決定的理由は何も存在しない。台湾の諸言語の多くの音が二次的(後次的)に発生した、すなわち一つの音から分裂(splitting)してできた可能性も依然として打ち消すことはできない。

ただし、次のような文化史的な事実には注目しておきたい。ヒンドゥー教を携えたインド人は南海諸国にすでに紀元前後に渡来し、また、王国を築いた。そしてその影響力は一〇世紀以上におよぶ。南島語族の中でもインドネシア諸語にはその時から借用が始まったと思われる多くのサンスクリット語彙が見られる。その借用の古さは、ほかの固有の語がこうむったと同じ音韻変化の規則に従って現在の形を留めることからも分かる。例えば、

サンスクリット vṛtta-「事件」→マライ語 bərita「消息」、ンガジュ・ダヤック語 barita、タガログ語 balíta?、セブ語 balíta?

サンスクリット cukra-「酢」→マライ語 cuka、タガログ語 súka?、セブ語 súka?

サンスクリット jāla-「網」→マライ語 jala、ンガジュ・ダヤック語 jala、タガログ語 dala

など、仮にこれがサンスクリットの借用語であることが分からなかったとしても、*bəlita', *ḱuka', *d́ala' のような形を立てることが可能である。ちなみに、このようにして得られた再構形は、その音の性質をサンスクリット音によってある程度検証することができる。そして、マライ語 sutəra「絹」、タガログ語 sutlá?「絹」からも、それがサンスクリット sūtra-「糸」の借用語であるにもかかわらず、*t́utəla' のように再構ができることから、デムプウォルフの音声学的説明のややあいまいな *ḱ(硬口蓋破裂音)、*t́(前部硬口蓋破裂音)(カペル、ダイエンは、それを *c, *s と書き換える)は、*t́ は[s]、*ḱ はむしろ硬口蓋歯茎破擦音の[tʃ]のような音ではなかったかと思われるのである。このようなサンスクリットからの借用語はオセアニア諸語、それに台湾の諸言語にはまったく見られない、ということはこれら諸言語が紀元前後にすでに原南島語から分裂を終えていたということを推定させる。しかしこの場合でもフィリピン・インドネシア諸語が分出した後(そしてこれらの諸言語がサンスクリットの影響下にはいった)、おくれて、あるいは、オセアニア諸語と台湾の諸言語とはインドネシア諸語をはさんで別々の時期に、出発したとも考えられないことはないから、いずれにせよ決定的な古さの決め手にすることができないのはいうまでもない。

五 南島語の接辞法

南島語族の比較研究は、デムプウォルフがそうであったように、音韻面を中心にして進められてきたが、形態面で

は十分な研究がまだほとんど行われていない。それはすでに述べたような研究上の困難さにもよる。各地域の言語ごとに原形態(proto-morphologies)を導き、さらにそれを比べ合わせて原南島語の状態へと進む[37]という原則論も、諸言語間のアンバランスが目立つため実現はそう容易ではない。

例えば、接辞法について見ると、もっとも豊かにそれを現在も機能させているのは台湾の諸言語を含めたインドネシア語派の言語であり、それら言語によっていくつかの接辞を再構することは十分に可能である。例えば、一部の接頭辞についてはインドネシア諸語から *ma-: *maN-: *maγ-, *pa-: *paN-: *paγ-, *ba-: *baN-: *baγ- それに *ta-: *taN-: *taγ- のように体系的な再構ができ、それぞれの機能は大ざっぱにいえば、その部分 *-a- が「語根(語基)の性質・状態になること」、前鼻音化を行った *-aN- が「語根(語基)の性質・状態に向かうこと、行うこと」、*-aγ- が「語根(語基)の性質・状態を所持すること」のような意味を表わし(また、アクセントのない状態で *-a-, *-aN-, *-aγ- は *-e-, *-eN-, *-eγ- となる)、一方、それぞれに対して *m- が他動詞的、*p- が名詞的、*b- が自動詞的・形容詞的、*t- が偶発的機能を与えるのである。

先の前鼻音化現象の体系と同じように、このすべてを継承する言語は存在しないが、トバ・バタック語は、

*ma-: *maN-: *maγ-(marara「赤い」、madabu「落ちる」: mandabu「落とす」: marrara「(沢山の果物が)赤く熟れた」、語基はそれぞれ rara, dabu)、

*pa-: *paN-: *paγ-(padao「遠ざける(こと)」: pamalut「包装具」: parmodom「眠る人」、語基はそれぞれ dao, balut, podom)、

を保つ点で、また、*b- 系列がまったく存在しない点でもタガログ語と同じである。マライ語は *ma-: maN-, *pa-: *paN- の区別を現在もはや維持せず(鼻音・流音(l, r)・半母音を除いて、必ず鼻音化しなければいけない)、*maN-> maN- は他動詞化に用いられ、一方、*pa-: *paN- は petaruh「賭物」: penaruh「賭人」(taruh「置く」)のようなわずか

の語にその対立を残すのみであり、また、*paN-：*paɣ- の関係も pəmburu「狩人(趣味)」：pərburu「狩人(職業)」のような少数の例を別にして解消しかかっている。*maɣ->mər- は古語にしかないが、現代語では *baɣ->bər- が盛んに活用される。bərburu「狩りをする」：məmburu「狩る」。*ba-：*baN-：*baɣ- を持つ言語にはスラウェシ島のバレエ語があり、basono「答える」：bancono「答える(強調的)」：barancono「答える(繰り返し的)」のように区別される。

*t- 系列について機能的にこれを完全に保つ言語はない。マライ語の *taɣ->tər-(tərburu「狩り立てられた、追われた」)のほか、タガログ語の tag- は時、季節を表わす名詞を作るのみで、tagʔulán「雨期」(ʔulán「雨」)のようになるが、不随意性の原機能はまだ認められる。なお、Tagalog は *tag-*ʼaluɣ「水辺に居を占めた」に由来する。タガログ語 talusoŋ「跳び下り」、tambuboŋ「穀倉」などは現在すでに語基であるが、lusoŋ「降下」、bubóŋ「屋根」などかつての接頭辞(*ta-, *taN-)の残存を思わせる。台湾のセディック語の ta-(tahúdaʔ「雪を被った」、húdaʔ「雪」)、また、ミクロネシア地域のインドネシア語派のチャモロ語の「方向指示辞」(directional prefix) tak-(tákkiloʔ「うんと高くなって」、huloʔ「上」、u~i はウムラウト現象による)にも原機能は残る。

*pi-, *mi- も再構できるが(*bi- も措定できるかもしれない)、これはカウィ語で使役化の名詞または動詞を作るために使用されていたほかは(pitutur「忠告」、mitutur(i)「忠告する」、tutur「思う」)、中央部にはもはやなく、マラガシ語の道具を表わす名詞を作る fi-、動詞化の mi-(fihogo「櫛」、mihogo「髪を梳る」、hogo「梳る」)、台湾のヤミ語の名詞を作る pi-、動詞化の mi-(pikusuŋən「夫婦にさせられた人=結婚した人」、mikosuŋ「夫婦になる」、kosuŋ「夫婦」)のように、いずれも古形が周辺に残るという方言周圏論的な現象が見られる。

その他、ほとんどの言語によって支持されるものに *ka-(抽象・集合名詞のほか、被害性を表わす受動形も作る)がある。

接中辞では *-um- が広い支持を受ける。カウィ語では -um- と先の *maN->(m)aN- とは、いずれも語基を動詞化

する点で等しく、その差も明確でなくなっていたが[38](現代ジャワ語で文語的とはいえ *-um-, *maN- の両方が残るのは、必ずしも文献によって知られる古ジャワ語の直系ではないからであろう。そのことは他の現象からもいえる)、その理由は、接中辞でありながら、語基の語頭音が p, b, m, w, V(母音)で始まる時は接頭されるという変則性があったため、*-um-paŋguh=umaŋguh「出合う」に対する *maN-paŋguh=maŋguh とは、前者が語頭音脱落(aphaeresis)によって u- を落とす時、後者とまったく同形となって区別がつかなくなり、それによって同一化が一層激しく進んだからである。トバ・バタック語、タガログ語、台湾の諸言語、チャモロ語などではその区別が現在も厳しく保たれる。タガログ語では *maŋ->mag- と共に -um- は「行為者重点文」(actor-focus)(いわゆる能動文に部分的に相当するもの。ただし、自動詞的にも使われる。dumatíŋ「来る」、語基 datíŋ)を作り、mag- が繰り返し的行為を表わすのに対し、-um- は単なる行為を表わす(masúlat「書ける」: manúlat「著作する=職業として書く」: magsulát「幾度も書く、書き続ける」: sumúlat「(単に)書く」)。

*-um- と対比的なのが *-in- で、これも分布は広い。タガログ語では「目的語重点文」(object-focus)(いわゆる受動文)を作る(sinúlat「書かれた(完了形)」)。マライ語では先の -um- とともにこの使用がまったく見られず、七世紀末のスマトラ島南部で発見された碑文に現われる受動化の接頭辞 ni- との関係もまだ良く分からない。マライ語では *-um- に由来する -em- が gilaŋ-gəmilaŋ「きらきら光る」のような半ば固定した語に残るが、量の多さを表わすのでもとの機能との間には乖離が見られる。カウィ語で -in- は語基が母音で始まる場合接頭される(inusi「訪問される」、usi「追う」)。カウィ語では先に触れた *ka->ka- によっても受身を表わすことができるが、この方は不随意的にある状態が降りかかる場合に用いる(kosi=ka-usi「追われる」)。マラガシ語では *-um->-om- が忘れられた結果、新たに mi- を接頭して homéhy=mihoméhy「笑う」(語基 héhy)が生まれ、一方、-in- はもはや廃れかかっている(vaky「砕かれた」=vinaky)。

その他の接中辞として *-al-, *-ah-, *-aŋ- などが立つが現実的にそれを活用する言語はほとんどない。その機能は十分に分からないが、固定化したマライ語の tapak～təlapak「掌」、gətar～gələtar「震える」、baru～baharu「新しい」、dulu～dahulu「以前」などには *-al-, *-ah-, が、また、カウィ語 *pöh「産出」によってマライ語 pərah「搾る」、タガログ語 pigáʔ「搾る」、および、カウィ語 böh(bəh)「眠れる」によってマライ語 barah「腫瘍」、タガログ語 bagáʔ「腫瘍」には *-aŋ- が含まれていると推定される。

接尾辞は接頭辞に比べて種類が少ない。この点では、接尾辞(助詞、助動詞の類)に主として依存する日本語の構造と大きく違っている。インドネシア諸語の比較によって再構されるものに方向性を示す *-i, *-(a)kən がある。しかしこれらはもともと半独立的な前置詞(マライ語 akan)、指示詞(チャモロ語 i「定冠詞」)に由来すると考えられる。マライ語では tanami「…に植える」: tanamkan「…を植える」のように目的語として動的なもの、不動的なもののどちらを取るかによって接尾辞が使い分けられるが、トバ・バタック語の -i, -hon、ミナンカバウ語の -i, -kan などわずかな中央部の言語に残るのみで多くの言語でその区別を失う。一般的に *-i を生産的に残す場合の方が多い。チャモロ語では「関係者重点文」(referential focus)を作り、saŋani「に告げる」(saŋan「言う」)のようになる。*-kən の分布は狭いが、それでもミクロネシアにあってインドネシア語派に属するパラウ語には *-akən＞-ákl, -ókl が痕跡として残る(oltiràkl「追跡する」、oltóir「狩る」)。

さらに、*-an は主として場所を表わす具象名詞を作る。タガログ語では aklatan「図書館」(aklát「書物」)のように、また、動詞的にも「場所(間接目的語)重点文」(locative-focus)に用いられるが(Súsulatan mo akó.「私は君の書くだろう(未来形)＝君に書かれるだろう」)、発生的には名詞文(「私は、君の書くべき対象としての場所」)に由来するであろう。*-an の分布は広いが、チャモロ語でも fanoʔmakan「水泳場」(oʔmak「泳ぐ」)のように接頭辞 fan-＜*paN- と組になって、またパラウ語では oŋelídəl「釜」((mə)keáld「暖かい」に名詞化の接頭辞 *paN-＞o- と *-an＞-əl が伴った

資料 5　タガログ語の例(正書法による)

Untí-untíng naparam ang tinig; humintô ang pagkantá, napipi ang alpá,
少しずつ・の　消えた　(定冠詞)　声　止んだ　(定冠詞)　歌　黙った　(定冠詞)　ハープ
ma-param　h-um-intô　pag-kantá　ma-pipi
(AF, p)　(AF, p)　(名詞化)　(AF, p)

at silá'y patuloy pang nakíkiníg: ni isá ma'y waláng pumalakpák.
そして　それらは…ある　続けて　(名詞化)　聞こえる　そして　一人として…ない・の　拍手する
pa-tuloy　ma-ki-kiníg　p-um-alakpák
(副詞化)　(AF, im)　(AF, p)

Náramdamán ng mga binibining nangingilíd ang luhà sa kaniláng mga matá.
感じられた　の　(複数)　娘・の　こぼれそうになる　(定冠詞)　涙　に　彼女たち・の　(複数)　眼
ma-damdám-an　mang-gi-gilid
(LF, p)　(AF, im)

Si Ibarra ay parang natutubigan at ang binatang nagpa-
(主格)　…ある　あたかも…のよう　泣き出さんばかり　そして　(定冠詞)　男・の　仕事をする
ma-tu-tubig-an　mag-pa-
(LF, im)

palakad ng bangkâ ay waláng katinag-tinag sa pagtanáw sa malayò.
の　舟　…ある　…なく・の　身動き　に　眺めること　に　遠く
pa-lakad　ka-tinag　pag-tanáw　ma-layò
(AF, im)　(名詞化)　(名詞化)　(形容詞化)

(訳)　だんだんと声は消えていって，歌声は止み，ハープも静かになった．しかしそれらはまだずっと聞こえているようだ．そして唯一人として拍手しようとしなかった．涙が眼からあふれそうになるのが娘たちに感じられた．イバルラももう泣き出さんばかり．そして舟仕事をしている男は身じろぎもせずに遠くを眺めやっていた．

(AF は「行為者重点文」，LF は「場所重点文」，p は「完了」，im は「不完了」を表わす)

(Noli Me Tangere ni Dr. José Rizal. Tinagalog niná Guzmán-Laksamana-Guzmán, Manila, 1950, p. 100.)

もの、原意は「暖めるための道具」)のように用いられている。

語基の不確定さを表わす接尾辞もある。カウィ語で -a として現われるものは(muliha「やがて戻るだろう、戻るに違いない」、接中辞 -um- と ulih-a)、現在、周辺の言語、マラガシ語の命令形の -a(miverén「戻れ」=mivérina「戻る」+-a、アクセントの移動、母音変異に注意)、また、台湾のアタヤル語・プユマ語などの未来を表わす -a に残るが(プユマ語 ʔə́mkan-a「食べよう」)、これらによって *-a を立てることができる。

このような接辞は、ことに接頭辞は複合接頭辞となり、また、複数の接辞が語頭、語中、語尾で同時に用いられて[39]、その働き方の全体的様子は実際上なかなか複雑である。

インドネシア諸語から得られたもっとも基本的なこれら接辞の反映をオセアニア諸語に求めると、それは不完全な形でしか見出せない。もっともインドネシア諸語の接辞の体系が原南島語の接辞を総合的・一元的に表わすものだと考えることができないのは、先の語彙の場合と同じであり、長い分裂の間には接辞法についても色々な変遷があったに違いない。

接中辞(ことに基本的な *-um-, *-in-)の継承はオセアニア諸語に見当たらないが、接尾辞についてはサモア語で sōloi「(顔を)ぬぐう」(solo「ふく」+-i)のようにある特定の場所を強調して用いられる -i に *-i の原機能を留め、また、フィジ語にも(Au(私) ā(過去) raiðī(見る) Jone.「私はジョンを見た」、rai「見る」+-ðī)残る。多くの言語でチャモロ語の定冠詞がそうであったように、半独立的に目的語の指示辞として用いられ(サモア語 ʔi、ハワイ語 i)、場所を表わす前置詞(サモア語 iʻ、ハワイ語 i)となり、また、行為の到着点・所有・所属を示す指示辞(フィジ語 i-vola「手紙、本」(vola「書く」)、na(冠詞) ke(食物) i Jone「ジョンの(=に属する)食物」)ともなる。おそらく起源的には指示・方向性を表わす小辞であって、それが冠詞・前置詞・接尾辞などのような機能へと変化したのである。

*-(a)ken についてはポリネシア諸語の、例えば、サモア語の強調的接尾辞 -aʔi(tanumaʔi「覆う」、tanu「埋め

る」、maʔi の m はかつての語基 *taŋəm の語末子音に由来する。同じように taŋisaʔi「淋しがる」<*taŋit「泣く」+*-akən)、ハワイ語・マオリ語の ai(動詞句と名詞句を結ぶ小辞。ハワイ語 Ka(冠詞) lā(日) i(過去) hele mai(来る) ai ʔoe(君).「君が来た日」)などへのつながりが考えられる。

原南島語の *ma- はサモア語で状態・可能を表わすが(maliŋi「降った、注がれた」: liŋi「注ぐ」、mafai「できる」: fai「する」)、後者の用法はタガログ語にもあてはまる(masúlat「書ける」参照)。一方、原ポリネシア語から *ma～*me と再構できる所有の前置詞があるが(サモア語 ma「…を持って・帯びて」、ハワイ語・マオリ語 me)、この機能もタガログ語の *pa->pa- に見られる「…を備えて」(supplied with)(pabáhay「家付きで」、bahay「家」)という副詞的用法と等しい。しかし *ma～*me が前置詞として用いられるのは、原南島語の *ma- も初期には半ば語根のように自立していたからだとも考えられる。

*ta- それに *ka- の受動形接頭辞としての反映はフィジ語に見られ、それぞれ、偶発性を表わすが(kambasu「壊れた」: mbasu「壊す」、tasova「こぼした」: sova「こぼす」)、現在、ta- はその使用が減りつつある。サモア語の ta- は語基の複数・頻繁を表わすが偶発性の機能はない。また、それと音韻対応するのはハワイ語の kā-(<*tā-)であるが、これは使役化の機能をもつ。オセアニア諸語で動詞の使役化はそのほかにも原南島語の *pa- による場合が少しはあるが、一般的には複合接頭辞 *paka- を用い、祖語のある段階で特にこの形が使用されたからであろう。インドネシア諸語でもカウィ語の他動詞化の能動接頭辞 makā- に対する受動接頭辞としての pinaka-(=p-in-aka)があり(pinakamantu「養子にされる」)、また、タガログ語にも形容詞化の maka-(makatao「人道的な」、tao「人」)があり、さらに行為の過度を表わす動詞を作る paka—an(pakátaasán「高くし過ぎる」、taás「高さ」)があるが、オセアニア諸語ではフィジ語 vaka-、サモア語 faʔa-、マオリ語 waka-、ハワイ語 haʔa- のように一斉に規則的な音韻変化をして保たれ、それは、ミクロネシアのポリネシア語派、カピンガマランギ語・ヌクオロ語の haga- にまで及んでいる。

インドネシア諸語から得られた接辞によってオセアニア諸語の接辞の大部分は説明がつくが、オセアニア諸語のみから出てくる形もある。ただしその場合、接辞は全然問題とならないが、原ポリネシア語では文法的小辞として*kua(過去・完了の指標、先にも述べたようにフンボルトのマライ語 juga との音韻的対比は当たらない)、不定冠詞*ha(サモア語 se、ハワイ語 he)、また、原中核ポリネシア語[40](原サモイック語：サモア語・フトゥナ語・エリス語などと原東部ポリネシア語：マンガレヴァ語・マオリ語・ハワイ語などの総称で、原トンギック語：トンガ語・ニウエ語と対立する)では定冠詞 *te(単数)：*ŋaa, *na(複数)(サモア語 le：nai「いくつかの」、ハワイ語 ke, ka：na、なお、トンガ語 e, he：ŋaahi「いくつかの」)が立つ。オセアニア諸語共通の文法的要素として主格、呼格または文の主語(主題)であることを表わす小辞 *ko[41](フィジ語 ko, o, koi、サモア語 ʔo、ハワイ語 ʔo)があり、それが用いられるのは、主として人名・人称代名詞の前である点でフィジ語(Koi au(私) ko Jone.「私だ、ジョンは」)とハワイ語(ʔo Keoni au.「同」)とは共通する。このような事象は、その一部を紹介したものにしか過ぎないが、南島語族という言語共同体を強固に成立させ、また、全体との関連を保ちつつもその内にあって下位の地域的単位を構成する原因となっているのである。

六　南島語の統辞法

なお、語順およびそれと関連して連結小辞(ligative particle)の問題に触れておこう。語順というのは比較的不定的な要素であり、また、動詞と目的語、修飾語と被修飾語のような関係は二者択一であってどちらが前に来ようが後に来ようが偶然によることも考えられ、系統論の基本的原則として用いることはできない。後者のような連体修飾語は、マライ語で rumah besar「大(きい)家」、フィジ語で na(冠) vale(家) levu(大きい)、ハワイ語で he(不冠) hale(家) nui(大きい) のように被修飾語＋修飾語であって、日本語とは逆であるかに見えながら、ラバウル島のメラネシア語派、クアヌア語(トゥナ語とも)では

資料 6　ハワイ語の例

Lele　a'e　la　ka　hauli　'o Laenihi, i nānā　a'e　ka　hana i luna, e
(方向詞)(強調詞)(定冠詞) ショックをうける は　時 見る (方向詞)(定冠詞) 動き に 上

noho ana　ka　uhane o Halemano i　ke　aoūli; hā'ule　iho　la　kona
座る ている (定冠詞) 魂 の　に (定冠詞) 天 落ちる (方向詞)(強調詞) 彼女の

waimaka i lalo e kahe ana, nō　ke　aloha i　kona kaikunāne iā Halemano;　'ī
涙 に 下 流れる た 故に (定冠詞) 愛 を 彼女の 弟 を 言う

aku　'o Laenihi iā Pulee: "Ua make 'o Halemano".
(方向詞) は に た 死ぬ は

(訳)　ラエニヒは胸騒ぎを感じて，上方に注意を払うと，ハレマノの霊魂が天空にあった。彼女は弟であるハレマノを愛していたので，彼女の涙が落ちて流れた．ラエニヒは(姉の)プレエに言った，「ハレマノは死んだ」．

(S. H. Elbert, Selections from Fornander's Hawaiian Antiquities and Folk-lore, Honolulu, 1971, p. 271.)

a (冠) ŋala (大きい) na pal (家), a pal a ŋala のように、また、タガログ語でも aŋ (冠) malakíŋ (大きい) bahay (家), aŋ bahay na malakí がともに可能であり(連結小辞 ŋ, na に注意)、パラウ語でも a (冠) blai (家) əl klou (大きい), a klou əl blai のように、その間には流動性がある。この関係が名詞類同士になるとフィジ語 na vale (家) ni taŋane (男)、クアヌア語 a pal (家) kai ra tutana (男)、タガログ語 aŋ bahay (家) naŋ lalaki (男)「その男の家」のように語順は固定するが、ハワイ語では ka (定冠) hale (家) o ke kanaka (男) のほかに、kō ke kanaka hale (kō=ka, ke+o) という日本語と同じ順序も可能であって、前者は hale、後者は kanaka が強調されている。

語順とは別に、ここに見られた連結小辞(属格小辞)の存在がまた南島語族を特色づける。マライ語には見られないが、カウィ語では冠詞としての働きをも兼ねた主格 aŋ のほかに属格 ni, ŋ があり、これはタガログ語の冠詞 aŋ と連結小辞の na～(na)ŋ(その異形態)へとつながるものと考えられる。連結要素として *ŋ が再構できるが(先のパラウ語の (ə)l も *ŋ から規則的に音韻変化してできたもの)、この *ŋ はハワイ語の主題導入辞 nō, nā「…について・よって」(マオリ語でも no, na)に反映する。なお、先の kō に対して kā (=ka, ke+a) があるが、ポリネシア諸語全般にわたって(無論、ミクロネシアのカピンガマランギ語・ヌクオロ語においても)自然界を二つ

の範疇に分けており、それぞれ、O類(先天的に所有するもの、神・酋長・身体の部分・家…)とA類(後天的に所有するもの、妻・子・食物…)と文法的に呼び習わされているように、人称代名詞やその他の小辞を使用するに際してそこに現われる母音o, aを使い分けるのである[42](例えば、ハワイ語で「その男の仕事」はkā ke kanaka hana となる)。

ところで、統辞面でポリネシア諸語が動詞—目的語—主語または動詞—主語—目的語という構文を持つことがよく指摘される。しかしこれとても絶対的にというわけではない。主語—動詞—目的語がインドネシア諸語で一般的というわけでもない。ハワイ語で Ua(過去) kākau(書く) ʔo(主) Keoni(ジョン) i(目的) ka(冠) leka(手紙).「ジョンは手紙を書いた」が能動文としては確かに、マライ語の John mənulis(書く(ma-tulis)) surat(手紙) itu(その). とは語順が異なるが、タガログ語では普通に見られる Sumúlat(書いた(s-um-ulat)) si(主) John naŋ sulat(手紙). とは語順が等しい。フィジ語では E(述語) ā(過去) vola(書く) na(冠) i-vola(手紙) ko(主) Jone. となってハワイ語と同じであるが、人称代名詞が主語として立てば Au(私) ā volā ~. となって文頭に来る。タガログ語では主語を文頭に置くこともできるが、Si John (ay) aŋ sumúlat naŋ sulat. (ay はコピュラの類、aŋ がはいることに注意)は「ジョンこそその手紙を書いたもの」と訳せるような強調文となる。マライ語では Surat itu John tulis.「その手紙はジョンが書いた」という、日本語の表現様式と語順が同じで文法的には受動文と説明される文もむしろ多く用いられる。再びハワイ語に戻ると、先に述べた導入辞 nā を用いて Nā Keoni i kākau ka leka. (ua「完了」から i「過去」への変更に注意)としても良く、この形式は受動文ともいわれるが、より一層一般には好まれる文型である。このように見てくると一体何が「愛用文型」(favorite sentence type) かを決めるのはなかなか容易ではないことになる。そして原南島語における統辞の面を考えることは、現段階でもまだ容易ではない。

七　南アジア語

南方諸語の中にはいってくるものに、「南アジア語族」(austroasiatisch)がある。この名称そのものはシュミットが一九〇六年に出した『中央アジア族、南島族間の一連鎖、モン・クメール族』[43]で用いて以降、現在にまで及んでいる。その書物の中で彼が指摘したのは、インド北東部のムンダー諸語・カシ語、インド洋上のニコバル島語、現在のビルマ・タイ山地のワ語・パラウン語・リアン語、マライ半島山地のセノイ語(セマイ語・テミアル語)・セマング語など、それにビルマ南部のモン語、カンボジアのクメール語と、彼のいわくマライ語から多くの借用語を含む混合語(Mischgruppe)であるチャム語など、現在はあたかも島のようになって点在する言語間の親族性である。この大きな統一体の中にはその後ヴェトナム語が入れられたり(プシルスキー(J. Przyluski)、セビョック(T. Seboek)、現在、ヴェトナム語は南アジア語族としての地位を得つつある)[44]、また、マライ半島山地諸語をこの語族から外して独立させたり(ザルツナー(R. Salzner))するような試みがあるが、南アジア語族は比較言語学的な証明にはまだ成功していない。それはモン・クメール諸語のようなもっとも親しい関係にあると考えられる言語間においてすらそうである。例えば、その問題点の一つとして、このモン・クメール語間においても母音推移の激しさが規則的に音韻変化を説明することを妨げている。[45]

したがって、現在の研究は、個々の言語の資料の収集とともに下位の語群をなす可能性の強いモン・クメール、パラウンギック、ムンダー、山地系(アスリアン)のような各グループごとの比較研究を行い、そこにおける再構形をまず求めようとする段階にあることが、最近の成果によっても伺える。[46]そのような過程を煮詰めてゆけば、概念として描かれた南アジア語族に到達できるかも知れないが、それはまだ先のことであろう。

シュミットはその書物の中で南アジア語族と南島語族とがさらに大きな大語族、南方語族(austrisch)をなすと考え、次のような理由を挙げた。一、音声体系の完全な相同、二、語構造の完全で本源的な一致、三、種々の重要で目立つ文法箇所、四、その語彙面での広域にわたる一致。理由の一は系統関係の根拠にならないが(タガログ語と沖縄語では三母音体系a, i, uが原則であるからといって、これによって系統関係を問題にする人はいないであろう)、二については接辞が問題にされており、両語族とも語根CVCに接頭・接中・接尾辞が加わって語が構成されていると考える。しかし、南アジア諸語(ことに現代クメール語)において機能する接辞法は存在しない。したがって、現在、文献的にその存在を証明しようとする努力が続けられてはいる。[47] 導き出された古クメール語の -m-, -n-, -l-, -r- のような接中辞はその間の機能的差異が明らかでないながらも、南島語の *-um-, *-in-, *-al-, *-aγ- などとの関係を思わせないでもない。しかし -mn-, -rn- のような複合接中辞との関係、またその他の数多くの接辞との関係になると、問題は簡単ではない。また、南アジア諸語の側でどのような再構形が立つのかも重要である。例えば、原モン・クメール語で「血」*jha:m、さらにその派生形 *j-n-ha:m, *j-m-ha:m が得られるという。[48] しかし語中の *-n-, *-m- はその機能が分からないままである。原南島語にも見られた語構成解明の難しさと合わさって容易に「南方語族」成立がしそうもないのは、先のベネディクトの場合と同じである。

三では現象面の一致、例えば、所有表示に人称代名詞を名詞に後置すること、ポリネシア諸語で人称代名詞の複数に双数・三数があること、一人称複数に包括形(inklusive)「われわれ」、排除形(exklusive)「手前ども」があることなどが示されているが、南島語族の全般的現象としてそのようにいうことはできないのみならず、また、系統論の決め手ともならない。四の語彙の面についてもその比較方法に数々の問題を残しつつ(彼は再構形を立てない)、現在にまで南方語族の研究は持ち越されている。

ともあれ、このような南方語族と他の言語との比較を進めるにしても、南方語族そのものの信頼性がまだ確立して

いない点を留意すべきであり、それは日本語との関係を論じる場合でも勿論のことである。[49]

八　非南島語(パプア語)

南方諸語の中でも、もっとも古い先住民の言語はパプア諸語である。オーストラリアのカペルはこれをNAN語(非南島語)と言い替えるが、その実体は、名称はともかくとして、統一した語族としての概念に到達するにははるかに困難な相互に違いの激しい多くの言語をその中に含む集合体である。その言語の数は七五〇くらいと推定されている。[50]主としてニューギニア(イリアン・ジャヤ)の原住民の諸言語を指すが、従来から孤立語とされるインド洋上のアンダマン諸語を含めることもある。オーストラリアのワーム(A. Wurm)は、基礎語彙統計学的に言語間に一二%以下(普通は七%から三%に落ち着く)の同系とみなされる単語がある中央ニューギニア大語族というのを立て、これと対立する一〇の言語族を考えたが、[51]この考えは後にマッケルヘイノン(K. McElhanon)らの語彙統計学的でなく比較言語学的研究によって修正され、[52]それによって現在、大語族としてトランス・ニューギニア語族というのを立て直す一方で、その他の語族も再編成をして、西パプア語族、セピック・ラム語族、トッリチェッリ語族、東パプア語族のほか、いくつかの小語族が考えられている。また、インドネシアのティモール島・アロール島などのパプア語はトランス・ニューギニア語族に、ハルマヘラ島北部のパプア語は西パプア語族に含まれ、また、メラネシア地方のビスマルク諸島のブーゲンビル諸語、ソロモン諸島のリーフ・サンタクルーズ諸語などが東パプア語族を構成するとする。そしてワームもこの新分類に従おうとしているが、[53]音韻変化が明らかにされ再構成が試みられたのはわずかの語についてであり、今後また、新たな資料の追加や整理によってこれらの語族が再編成される可能性もある。

パプア諸語の分類はまだ学問的になされているとはいえず、主として地理的分布に頼っている、というカペルは、

パプア諸語の文は「主語—目的語—動詞」という基本的構造を持つほかに次のような共通的現象に基づく分類を、決してそこに含まれる言語間の系統的関係の証明に寄与するものではない、と断わりながら掲げている。[54]

一　文のどの要素も簡単で、名詞には性・格がなく、また、数の表示もほとんどしない。動詞は時制・法に対して変化するが、人称に対しては変化しない。現代英語よりもまだ一層簡単である。

二　述語(動詞)が主語・目的語(名詞)よりも色々の程度において複雑である。

a　動詞は、フランス語やスペイン語のように、人称・数・時制・法で区別され、手がこんでいる。

b　一つの主動詞が「私は彼に会いに来た」「私は彼に会いに来ている」などを表わす。時制・法を表わすための細かい区分を持った小辞の体系がおそろしく複雑な一つの動詞を作り出す。

c　目的語が動詞に抱合されている。

三　名詞句が複雑で、細かい性・名詞類の体系が現われる。例えば、ブーゲンビル島のナシオイ語では、五〇もの名詞類があり、名詞類が異なるごとに接尾辞としての数詞・所有代名詞・形容詞が使い分けられる。しかし、ラバウル島のバイニン語では八類で単数・双数・複数の区別を行うだけである。

この一に属するトアリピ語(トランス・ニューギニア語族エレマン亜語群)を例にとると、

わに　が　殺した　豚　私　父　の
Sapea sa paeaita ita aráve oa ve.「鰐が殺した豚は私の父の(だ)」[55]

のようにカペルも指摘したとうり日本語の語順とまったく一致している。

小辞として sa のほかには la があり、それぞれ、主語と目的語を強調する機能がある。動詞は単純現在・継続的現在、未来、不定過去・最近過去・即時過去・遠過去、また、命令法、条件法、目的形「…するために」があり、それぞれ、接尾辞を用いて表わされるがそれは人称によって変化しない。ただし、継続的現在の場合は、接頭辞が現われることに注意したい(la paea (i)「殺している」)。最近過去の -ta、即時過去 -tala は偶然にも日本語の「た、たり」と

音形の似寄りを示すが、遠過去は -pe を用い、他の語彙においても日本語と対応するものが見出せない。このような小辞・接尾辞が日本語の助詞・助動詞に相当するものだとすれば、その膠着語的特徴によってトアリピ語は、日本語に対して朝鮮語、ウラル・アルタイ系諸言語、チベット語、ビルマ語などと同じ関係に立つ言語だということになる。そして、それらいずれの言語とも系統的関係の証明に成功していないという点でも、また共通することにならざるをえない。[56]

なお、語順がほとんどパプア語のようになった南島語がニューギニアにいくつか存在する。その中でモトゥ語(ニューギニア東南部のポートモレスビー附近で行われるメラネシア語派の一言語)の例を挙げると、

Tau ese au-na imea bogaragi-na-i vada e hado. 「人はその木をその庭の真中に植えた」
(人 は 木その 庭 真中そのに (完了)(動詞指示) 植える)

のようになる。[57] 語順のみによってこの言語をパプア語だとしない点に注意すべきであろう。この中の語を見ると tau<*tawu', au<*kayu' は明白な原南島語起源であるが、一方で文法的要素として -na-<*-n'a<*n-ia「それ・の」、-i<*-i「指示・方向性の小辞」のほか、e(動詞の前に置かれてその動詞が三人称であることを表わす指標)もまた、先のフィジ語の例文(一二九頁)の述語の指標 e と同じ小辞に由来するものである。また完了を表わす vada が動詞に前置されるのに対し、未完了は -mu が後置されるという違いがあり(この -mu は、確認できないが、原南島語接中辞 *-um- と関係があるかも知れない)、動詞句を中心に原南島語に見られた旺盛な接辞法、ことに接頭辞の働きは、消えてはいないのである。原南島語 *pa- も he- となって使役化を行う(he-diba「知らせる」)。また、he- にはホモニムとなって *bay- に由来する機能もあり、相互性を表わすこともできる(he-diba-heheni「通報し合う」)。言語における ほかからまねの出来る随意的要素と、まねの出来ない不随意的要素とを区別することは言語の系統を論じる場合にも重要であることはいうまでもない。そしてモトゥ語でも、接辞法は原南島語の特徴を原則的に留めるが、仮に語順がパプア語の影響だとするならば、連体修飾関係を表わすために lau e-gu ruma「私の家」、lau a-gu biku「私のバナナ」のよう

な表現が、すでに述べたように南島語において別に珍しくないとはいえ、行われるのである(e-, a- は名詞の類別詞で先のポリネシア諸語のO類、A類に相当するもの。モトゥ語はメラネシア語派に属するけれどもこの二類の区別しか持たない)。

以上で南方の諸言語、すなわち、南島語族・南アジア語族・南方語族・NAN語の特徴の概観と問題点の指摘を終わる。南島語族についてはやや詳しく紹介したのも、それがもっとも安定した語族としての姿を見せるからであり、また、日本語との関係が論じられることのもっとも多かった言語を含む語族であるからである。以下で南島語との関係がどのように考えられてきたのかについて見てゆくことにしよう。

九　日本語と南島語との関係

記録によれば、『日本書紀』巻二五に見える吐火羅人(タガログ(?))・舎衛人(ビサヤ(?))の日向への(六五四(白雉五)年)、『日本後紀』巻三一に見える崑崙人(天竺人)の三河への(七九九(延暦一八)年)漂着などによって、すでに古くから南方からの渡来民があったことが分かるが、これら漂着民が何族であったのかが正確には分からないのみならず、この程度の微々たる漂着民によって日本語が大きく影響されるはずもないであろう。明らかなことであるが、もし南からの要素が日本語に認められるとするならば、そのような作用が行われたのは、日本語の記録よりはるか以前のことであり、そしてその頃に南方からの相当大規模な長期にわたる民族移動があったと推定しなければならなくなる。問題となってくるのはその頃の南方の言語であり、日本語の場合、まとまった資料は八世紀からあるが、南方の側では古形に代わるものとしてそのような言語共同体によって用いられていたと仮定される再構成された形(祖語形)を用いざるを得ない。したがって、いろいろの南方からの言語の影響があったように考える人がいるとすれば、自ら方法論上の精密

さを放棄していることになる。そして再構成された形が比較的安定していて、そして再構形の語彙目録があるくらい研究が進んでいるのは、南島語族をおいてほかにない。このような原則を、とかく人は忘れがちであり、おうおうにして現代のある特定の言語からの思い付き的な、あるいは、現代の複数の言語・方言からの寄せ集め的な資料によっていわゆる比較が行われ系統が論じられてきた場合が多い。日本語と南方語との単語同士の形がたまたま似ていても偶然である可能性を排除できない。大野晋が「偶然の類似でないことを証明するためには、各島々の方言から祖形を構成し、それと日本語との間に音韻対応の法則がそこに成立しなければならぬ」といったのは[58]、けだし至言である。この点において、南島語族のあちこちの言語から似た単語例を寄せ集め（ただし古代インドネシア語は外来語であるアラビア語、ペルシア語などを除き去ったものであるという）そして原則のない語根（?）抽出によって（例えば、マライ語 badan を ba-da-n と切り、その -da- と「裸」「体」「肌」などの -da- とを比べる）その同系性を見ようとする堀岡文吉[59]、現代タガログ語から散発的に語を拾い集めて日本の『古事記』を解こうとする（タガログ語は接辞法の非常に発達した言語であって、さすがにそれを無視はしないけれども、「太占」に buto magningas を当てるのは、文法的にも無理である。そのような結びつきは許されないし何をも意味しない）北里闌[60]などは、まったく説得力を持つことができない。

ところで、それよりはるか前に、新村出は、膠着語的な日本語の文法はマライ・ポリネシア系の文法とその構成法を根本的に異にするが、音韻組成法の点から見ると、日本の単純な音韻法は、マライ語も元来はそうであったといわれるポリネシア語のような極めて単純な音韻組織に留まっていて、それは南洋民族との混和の結果であるが、それを証明する南洋系の語彙が日本語の中に少ないのは、消滅した結果ではないか[61]、と述べた。要するに、主位にある大陸的要素と従位にある南方的要素とが渾一して日本の言語・民族が構成されているが[62]、そのような日本語を南洋系ということはできず、外来語としての南洋語が混和されていないかと疑うのみである[63]、という。

しかし、ポリネシアの音韻組織を古風だとするのは南島語比較言語学の事実にそぐわないのみならず（デムプウォ

ルフの書物はすでに現われていたから、それを知らなかったはずはない）、南方、南洋という用語の使い方も不正確である。また、南方語を従位という新村は、南方語に対してすでにある種の偏見を抱いていたのではあるまいか。南方語（南島語）の文法的事象まで十分に調べた上での発言とは思えないのである。[64]例えば、マライ語の durian「ドリアン（果実名）」は durio という樹に英語系の語尾 -an がついたというくらいだから（*ḍuɣi'「刺」に一二三頁でも触れたもっとも基礎的な接尾辞 *-an がついたもの、「刺あるもの」が原意）。

このような南の言語を論じる際の文法軽視の傾向は、その後の比較研究にもある種の影響を与えたかも知れない。もっとも全体として見れば、わが国の南方語研究は実用本位のマライ語にほとんど限られ、それすら微々として振るわず、すくなくとも南方の学術研究に関しては、日本はあまりにも「帝国主義」的でなかったと、馬淵東一は、一九四七年一一月に亡くなった台湾諸語研究の先駆者、小川尚義の不遇をその追悼文に書いている。[65]対象を良く知らずして良い比較研究が生まれるはずもなかろう。しかし、そのような状態はまだしばらく続くのである。

新村は、地理上からいっても、まず台湾・フィリピンあたりの言語と対照してみるのが順序だとして、台湾アミ（ス）語パラ「腹」、パラ「原」、アバラ「肩」、プラツ・ブラチ「粳」、チラル「日（琉球語のテーダ）」など若干の語が日本語と一致し、また、一部はアイヌ語にまで及ぶ（アミ語チバル「小舟（アイヌ語チプ）」）こと、を指摘する。[66]しかし、たとえ借用語であってもそれが近年のものでないかぎり、やはり古形に基づいて議論しなければならない。アミ語だけが古来無変化というわけではないのだから。なお、チラルは原南島語 *t'inaɣ「光」に由来するが、琉球語ではむしろそれが『おもろそうし』などに見える「しな」「しの」（原注では「月」のこと）として現われることを手堅く説いたのは村山七郎である。[67]

新村の借用説に従ってさらに語彙を増していったのは奥里将建であり、[68]アミ語・マライ語を引き合いに出し、沖縄方言にはインドネシア語の影響が大きいという仮定を否定する一方で、「米」をヤップ語などの komëi に直ちに当て

る速断(一〇八頁参照)、マライ語 makanan「食物」(makan-an と切れ、makan はさらに *ma-*ka'an に由来する)と「賄(まかなひ)」とを語構成を無視して比べるなど問題点は多い。そして、日本語とアミ語のみとの間に見られる先のパラ「原」のほか、イソ「鯨」、チチ「肉」などのような語は、むしろアミ語圏にまで進出した大和民族が残したものだという考えも、現代の南島語比較言語学によって支持されない。つまり台湾の諸言語は、それのみによる語彙面での再構成も行われ始めているように、南島語族の中にあって特異な地位を占めることがますます明らかになってきている。今後は、日本語と南島語との関係を追究するにしても、原南島語という大きい広がりを持ったものでなく、狭く絞られた下位の地域的言語単位から進めてゆくべきかも知れない。比べられるべきものは、できるだけ緻密で構造的にも安定した言語同士である事が望ましいのだから。以上のような南島語との借用関係説の背景には、日本語と南島語とは文法が根本的に異なるという認識があったわけである。

大野は、日本語と南島語との共通点、相違点として次のような現象を挙げた(69)。共通点は、一、音節が原則的に開音節、二、高低のアクセント、三、語頭に子音が二つ以上重ならない、四、性・人称・数・格の変化がない、五、冠詞がない、六、動詞変化が膠着法による、七、疑問文は陳述の終りに疑問詞をつけて表わす。このような特徴はその後も南島語全般の説明のために引用されているが(70)、一般論としていうには、このどれも当たらない。それは先に行った南島語族の概観からも明らかであろう。しいていえば六がその程度はさまざまだけれど、共通するといえようか、ただし、接頭辞が中心的に働くので、日本語の接尾辞中心とは大いに違うともいえる。大野はその後、一、の特徴を示し、また、rとlの区別を持たないポリネシア語は古代日本語の音韻の特徴と類似し、これは日本語と無関係の事柄であろうか、と述べ、ラテン語が転化してフランス語になったとき、それ以前の先住民の言語、ケルト語の発音がフランス語に果たしたと同じ役割を、ポリネシア語が日本語の成立に際して果たしたのか(71)、と推定する。これは結果として新村と同じ考え方になろう。ただし、説明に用いられたフランス語の場合、ラテン語という性格の明確なもう一方の言

語との関連においてケルト語的な音韻変化もとらえることができるのだが、日本語の場合、その構成要素はすべて仮説のままである。したがって、ポリネシア語的基層の存在は、にわかには断言することができない。ポリネシア語を話す民族が日本へ来たのは文献時代よりはるか以前でなければならないとすると、すでに述べたような(一一九頁参照)サンスクリット借用語を根拠に、原南島語族からオセアニア諸語が紀元前には分かれ出ていた可能性があるから、その考えを支持するかに見える。ただし、インドネシア諸語が先に分出してサンスクリットの影響を受け始めた後に、原南島語からオセアニア諸語が出発したかも知れないという点にも留保が必要である。

大野は、日本語と類似するとしてサモア語の「目」mata、「口」gutu [ŋutu]、「背」tua を挙げるかと思えば、またマライ語の「腹」perut、「頬」pipi などを示す。ここにはいろいろのレベルの単語が含まれている。原南島語レベルでは *mata「目」、*ŋut'u「唇」しかなく、原ポリネシア語の *tuʔa「後」、原インドネシア語(台湾諸語を含む)の *pipi「頬」、そして perut はマライ語、カリマンタン島の海ダヤック語などのわずかの言語に現われる語で、狭い範囲でしか使われていなかったに違いなく、日本にまでおよんだかどうかは疑問である。そして初期の大野の厳しい建て前を自らの手で崩してしまったかに見えるのは、大変残念なことである。

次に、大野によって日本語と南島語との相違点として挙げられたものには、一、修飾語が被修飾語の後に来るものが多い、二、目的語および補語は述語の後に来る、三、助詞は前置詞のようにつく語に先行するものが多い、四、助動詞も動詞に先行する、五、数詞の対応を見出すことがほとんどできない、があるが、これとてすでに説明したように、必ずしも一般的な相違点とならないことが明らかであり、ニューギニアのメラネシア語派モトゥ語の場合にも見られたようにそれらは決して固定して動きの取れない現象ではない。そしてモトゥ語でもそうであったように南島語の基本的に重要で比較の際に無視できないのは接辞法である。五は音韻対応が明らかにされることによって解決のつく事柄であるが、川本崇雄は日本語の数詞はすべて南島語で解けると見て、例えば、fitö, futa「一」「二」の fi-, fu- は

*bu'ah「果実」に由来し(fi- は fu- の弱形)、-tö, -ta は *at'a'「一」に由来して、全体として「(この)木の実一つ」、「(その)木の実一つ」が「ひと」「ふた」の起源[72]だというが、音韻変化・意味変化の上からの検討がまだ必要であろう。

一〇　最近の系統論

原南島語と古代日本語との間の音韻対応関係を始めて示したのは泉井久之助である[73]。泉井は、日本語は系統的には一つでやはり北方的・大陸的なものであるとし、南島語的な要素がもしあるとしても、その北方的な構図(音韻法・造語法・形態法・統辞法の体系)の下に潜む異系の要素の一つとみる。その一例として、南島語で活発に働く前鼻音化現象が日本語に生きて働いた形跡もないし、また、南島語の接辞法が日本語の文法や語彙的派生に関与的に働いたこともなく(傍点は崎山)、南島語的要素とおぼしきものも、日本語ではすでに固定化した形でしか現われない、と説く。結局、泉井は、日本語を、インドシナ半島の南アジア語を基層とし南島語を表層とするチャム語と同じように、「重層語」(langue à double couche)とみる。日本語と南島語とは明らかに「属」(=語族)を異にする言語であること、そして泉井の出した音韻対応の規則性もすべて語彙的事実のみによって出てきたことを断っている。つまり、それは日本語における文証以前の古い借用要素ともいえる、というのだ。

泉井は、すでに存在を始めた日本語に対する、従来の真の意味での借用語の可能性は認めるが、古い借用要素というのは、形成過程の日本語の中に取り込まれた基層的要素のことであり、このような基層問題と系統問題とは別の範疇のことだ、というのである。したがって、泉井による音韻対応関係の提示も、比較言語学のためというより「対応の規則性らしいもの」[74]を示すためであったのである。音韻対応規則を示した泉井の先駆的業績を高く評価するのは村山七郎であるが[75]、村山は泉井の対応法則によりつつ、しかし時にはさらに修正を施して、現在、もっとも精力的にこ

の分野に取り組んでいる。村山自身の考え方は、ロシアのポリワーノフに大きく示唆され、また、影響されているかに見える。ポリワーノフによれば、日本語はマライ・ポリネシア諸語と同系であり、言語諸事実の一部はマライ・ポリネシア諸語（オーストロネシア諸語）と共通の源泉から受け継いだものであることを証明できると思う、といい、しかし、純粋のマライ・ポリネシア語とは大きな違いもあるとして、日本語は起源上、雑種（ハイブリド）であって、南方的——南島的、オーストロネシア的要素と、西の大陸的な、朝鮮語（および他の東アジアの大陸の「アルタイ的」諸言語）と共通の要素との混合物であるから[76]、とする。

ここで「混合言語」という概念を少し検討してみよう。フランスのメイエ（A. Meillet）によると、一個の与えられた言語の形態論的体系が二種の異なる言語の形態の混合に由来すると仮定しなければならないような場合に出会ったことがない[77]、ということである。ただし、そのような混合がかつてなかったと断言することはできない、と付け加えている。村山は混合言語の例としてベーリング島のアレウト語が動詞の語幹はアレウト語で活用形式はロシア語の例[78]、ドイツ語 Haus「家」がフランス語の動詞語尾 -ier によって hausieren「住む」という動詞不定法を作る例[79]などを挙げているが、そのような例ならば、日本語のサ変動詞の多くが漢語の語幹をもって活用する例でも十分なのではないか。ただし、村山の考えによれば、「南島語を用いる先住族とツングース満州語に近い言語を話す進入民族との間（で混合が起ったけれども、そ—崎山）のコミュニケイションが支障なく行われるようになった時の言語を、原始日本語[80]と思う」ということになる。

しかし、異種の言語間に混合の過程があってほぼ統一的な体系を持った新たな言語が確立された時にそれを混合言語と呼ぶようにしないと、先の例のように現代ドイツ語も現代日本語もおよそあらゆる言語[81]はそのような様相を呈するであろうから、言語は何もかも混合言語ということになって収拾がつかなくなる。混合語と混合言語[82]とは区別するべきである。先のニューギニアのモトゥ語は典型的な混合言語の見本である。ドイツのケーラー（H. Kähler）も「南

島パプア語」のような混合言語があることによって、単なる借用から一層深い影響(deep-going influences)を区別する必要を説いている。[83]

さて、ポリワーノフの考え方は、泉井説とは大分異なり、村山のいうようにほぼ同じ結論[84]というわけにはいかないと思われる。村山は、日本語がオーストロネシア系の言語とアルタイ・ツングース系の言語を主な構成要素とする混合言語(雑種言語)と見るが、村山にとっては、南島語要素は単なる借用語(新村説)でもなく、また、その姿が顕在的でない基層言語(substratum)(泉井説)でもない。なぜならば、南島語は語彙的に日本語の基礎語彙の極めて大きな部分を占めるのみならず、日本語の重要な特徴である「連濁」、動詞語幹を作る際の接頭辞の働きといった文法面にまで、南島語からの要素が見られるから、[85]というのである。先に傍点を打った、泉井の日本語における南島語的要素は生きて働いたという証拠はないという見方とは、根本的に異なっている。同じ対象である日本語を巡ってどうしてこのような解釈の相違が起こるのであろうか。

泉井の場合、語構成法を考える場合にも、その構成成分の意味・機能が十分に明らかであるべきであり、古日本語の資料中でも、もし南島語由来であるとすれば、南島語の側からそれが完全に実証できるべきだと主張するのに対し、村山は、再構形を中心に、そしてまた、前鼻音化現象形を活用してある語を分析し、さらに、その同族語を強力に直感的に認めてゆこうとするその態度の違いの表われともいえよう。例えば、「抱く」を*dakəp「抱く」と対応させるのは、泉井だが、一連の古語「むだく、いだく、うだく」に対してそこに見られる「む、い、う」という接頭要素は一応疑問のままで泉井は保留しておくのに対し、村山は、「むだく」を*maN-dak(əp)のように原南島語の接頭辞*ma-(一二〇頁参照)の前鼻音化形*maN-が付いたものから派生したと見るのである。そして「うだく」は*(m)əNdak-、「いだく」は*(m)iNdak-、「だく」は*(mə)Ndak-に由来すると解釈する。原南島語の接頭辞*maN-は、カウィ語においてN-として現われることもでき、その機能は語基を他動詞化することであるが、このような機能面への考慮

はともかくとして、「だく」を *Ndak- に由来すると見るのは、音韻対応面で原南島語の *ɗ は古日本語の t に当たる規則があるからである（*dadi「成る」: tati「立ち」）。また、接頭辞 *mi-（一二一頁参照）に対する *miN- はまだ措定できないが、村山は、*(m)iN- を立てそれは *(m)əN- の異形と見る。つまりこれは南島語からはまだ実証できないまったく日本語側の問題である。

もう一例、先の理由によって泉井は取り上げなかったと思われるものに *kat'ih「愛」があり、村山は、その前鼻音化形から *məNkat'ih=*məŋkat'ih>məŋgasi>「むがし（心にかなう、喜ばしい）」を導く。そして *kat'ih に由来するkasi に -an- という接中辞がはいって現代語の「愛し」、沖縄語の「kanasjaN（いとしい、可愛い）」がそれぞれ派生してきたとする。原南島語に接中辞 *-an- を立てるには、まだ躊躇がいるが、村山はそれを促すかのようである。しかし、「むだく」「かなし」の解釈については、国語学者の側からの意見もあり[86]、決して問題はまだ解決していない。そしてこのような「むだく」「むがし」の「む」は形の上では一応分析可能な接頭要素に見えるけれども、文証時代に実際にそれが働いていたかどうか、ということを泉井は問題にしているわけであろう。南島語における前鼻音化現象は、その機能が全面的に明らかであるとはまだいえないまでも、半ば文法的（形態音韻論的）な現象であり、語彙の単なる音韻的比較以上に言語間の親族関係の強力な証拠となることは事実であり、すでに述べたように、原南島語という言語的統一体が強力に考えられるのも、この現象が現に存在し、かつて存在したからにほかならないからである。しかし、日本語にどの程度までその反映が見出されるのか、それはさらにまったく文法的な現象である接辞法（接頭辞法）ともかかわり合って、その現象を欲しいままに適用するのでなく、また、単に形の上からだけでの対応ではなく、意味・機能面からも考えてゆかなければならないであろう。村山が取り上げた南島語の接辞はまだその一部にしかすぎない。村山には多くの問題意識がある。やはり形態音韻論的現象としての連濁が南島語の連結小辞（一二七頁参照）の由来だと見ること[87]、沖縄語に奈良時代の言語と一致する形が見出されるときは大体においてそれは南島系と見てよ

[88]いという考えのもとに、沖縄語と地理的にもその比べ合わせがもっとも考えられてしかるべき台湾の諸言語との間の関係をもっと詰めようとしていること[89](デムプウォルフの研究には台湾がまったく抜けて落ちていたのだから、ある意味で当然ともいえるが)、さらに、南島語族が朝鮮半島にまで達していたらしいこと[90]、このような問題について今後も一応の答えが与えられてゆくに違いない。

日本語の系統論の山場はなんといっても動詞の活用体系の組識を明らかにすることであろう。それに対して南島語はまったく無関係であったのか、なかったのか。日本語の側からネガティブな証明をしてしまえばそれで済むところが、それができないところに、日本語の系統論の根本的な困難さがある[91]。

(1) S. A. Wurm and K. McElhanon, "Papuan language classification problems", New Guinea Area Languages and Language Study Vol. 1, Papuan Languages and the New Guinea Linguistic Scene (S. A. Wurm, Ed.), Canberra, 1975, p. 148.
D. Bee, "Comparative and historical problems in East New Guinea Highland languages", The Languages of the Eastern Family of the East New Guinea Highland Stock (H. McKaughan, Ed.), Seattle and London, 1973, pp. 739–768.

(2) W. von Humboldt, Über die Kawisprache auf der Insel Java, Berlin, Vol. 1, 1836, p. LXIII; Vol. 2, 1838, pp. 188–203.

(3) W. von Humboldt, op. cit., Vol. 2, p. 33.

(4) ミルカ・イヴィッチ著、早田輝洋・井上史雄訳『言語学の流れ』みすず書房、一九七四年、三一頁。

(5) 泉井久之助『言語研究とフンボルト』弘文堂、一九七六年、三六七頁。

(6) W. von Humboldt, op. cit., Vol. 1, p. CCCCVII.

(7) J. Gonda, "Indonesian linguistics and general linguistics I", Lingua 2, 1949, p. 330.

(8) S. H. Ray, A Comparative Study of the Melanesian Island Languages, Cambridge, 1926, pp. 21–25.

(9) P. W. Schmidt, Die Mon-Khmer-Völker ein Bindeglied zwischen Völkern Zentralasiens und Austronesiens, Braun-

schweig, 1906.

(10)　いくつかの論文がある。
A. Teeuw, A Critical Survey of Studies on Malay and Bahasa Indonesia, 's-Gravenhage, 1961, pp. 53–54. 参照。
最近では、
J.-C. Roux, "Les Malayo-Polynésiens dans les Amériques", Bulletin N° 28 de la Société d'Histoire de Nouméa, 1976, pp. 5–11.

(11)　H. Kern, "Taalkundige gegevens ter bepaling van het stamland der Maleisch-polynesische volken", Verslagen en Mededeelingen der Koninklijke Akademie van Wetenschappen, afdeeling Letterkunde, 3e Reeks, dl. VI, 1889. H・ケルン著、渋沢元則訳「マライ・ポリネシア諸民族の故地について」(『耕文』八号、一九五八年)。

(12)　チャム語は重層語(基層として南アジア語、表層として南島語)であるとするのは、
泉井久之助「南ヴェトナムにおけるチャム語の系統」(『マライ＝ポリネシア諸語』弘文堂、一九七五年)。

(13)　I. Dyen, "The Austronesian languages and Proto-Austronesian", Current Trends in Linguistics Vol. 8 (T. A. Sebeok, Ed.), The Hague, 1971, pp. 8–9.

(14)　アントゥアヌ・メイエ、マルセル・コーアン監修、泉井久之助編訳『世界の言語』朝日新聞社、一九五四年、一〇八九―一〇九二頁。

(15)　P. K. Benedict, "Thai, Kadai, and Indonesian: a new alignment in Southeastern Asia", American Anthropologist 44, 1942, pp. 576–601.
P. K. Benedict, Austro-Thai: Language and Culture, New Haven, 1975.

(16)　I. Dyen, op. cit., p. 18.

(17)　W. von Humboldt, op. cit., Vol. 1, pp. CCCCVI–CCCCVII.

(18)　松本信広『印度支那の民族と文化』岩波書店、一九四二年、二六五頁。

(19)　O. Dempwolff, Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes, Berlin, Vol. 1, 1934; Vol. 2, 1937; Vol. 3, 1938.

(20) B. C. Biggs, D. S. Walsh, J. Waqa, Proto-Polynesian Reconstructions with English to Proto-Polynesian Finder List: Interim Listing January 1970(Working Papers in Linguistics), Auckland, 1970.

S. Tsuchida, Reconstruction of Proto-Tsouic Phonology (Study of Languages and Cultures of Asia and Africa Monograph Series No. 5), Tokyo, 1976.

(21) C. D. Chrétien, "Comment on A. Capell: Oceanic linguistics today", Current Anthropology 3, 1962, p. 397.

(22) H. Kähler, "Contribution to a consideration of the present state of knowledge in the field of Austronesian languages", Linguistic Comparison in South East Asia and the Pacific(H. L. Shorto, Ed.), London, 1963, pp. 156–157.

H. Kähler," Comment on A. Capell: Oceanic linguistics today",Current Anthropology 3, 1962 , pp. 412–413.

(23) 村山七郎・大林太良『日本語の起源』弘文堂、一九七三年、一七七頁。

(24) E・D・ポリワーノフ著、村山七郎編訳『日本語研究』弘文堂、一九七六年、八九・一一三頁。

(25) I. Dyen, The Proto-Malayo-Polynesian Laryngeals, Baltimore, 1953.

(26) A. Capell, "Oceanic linguistics today", Current Anthropology 3, 1962, p. 386.

(27) E. M. Uhlenbeck, "Review of Dyen: The Proto-Malayo-Polynesian Laryngeals", Lingua 5, 1955–1956, pp. 308–318.

(28) I. Dyen, op. cit., 1971, pp. 39–40.

(29) 原南島語 *ḍ についても、デムプウォルフはこの音の再構のためにタガログ語を基準言語として用いるが、それでは *ḍ の性質が不安定になることを指摘したのは、崎山理「マライ・ポリネシア諸語 *ḍ の再考察」(『南島語研究の諸問題』弘文堂、一九七四年)。

B. Nothofer, The Reconstruction of Proto-Malayo-Javanic, 's-Gravenhage, 1975, pp. 145–160. にも同様の考えがある。

(30) S. Tsuchida, op. cit., p. 3.

(31) 『沖縄語辞典』国立国語研究所、一九六三年の表記に従う。

(32) S. Tsuchida, op. cit., pp. 126–127.

(33) A. G. Haudricourt, "Problems of Austronesian comparative philology", Lingua 14, 1965, pp. 315–316.

(34) I. Dyen, op. cit., 1971, p. 11.

(35) O. C. Dahl, Proto-Austronesian (Scandinavian Institute of Asian Studies Monograph Series No. 15), Lund, 1973.

(36) C. D. Chrétien, op. cit., p. 398.

E. M. Uhlenbeck, "Indonesia and Malaysia", Current Trends in Linguistics Vol. 2, 1967, p. 877.

V. Krupa, Polynesian Languages: A Survey of Research, The Hague, 1973, p. 42.

(37) A. Capell, op. cit., p. 388.

(38) J. Gonda, "Indonesian linguistics and general linguistics II", Lingua 3, 1952, p. 29.

カウィ語の -um- は「変転動詞」(verba metastatica)に用いられているという。今後考えるべきであろう。

(39) 泉井久之助は「共辞」(confix)と呼ぶ。泉井、前掲書、一九七五年、五一頁。

(40) A. Pawley, "Polynesian languages: a subgrouping based on shared innovations in morphology", Journal of Polynesian Society 75, 1966, pp. 39–64.

(41) H. Kähler, "Untersuchungen zur Morphologie polynesischer Dialekte", Afrika und Übersee XXXVI, 1951–1952, p. 149. ではこの小辞をインドネシア諸語 *kə- と結びつけるが、機能面でいかがであろうか。

(42) ポリネシア語派の特色は *O 類、*A 類という二つの区別を持つことで、二つ以上の区別をするメラネシア語派との下位分類の根拠としたのは、泉井久之助である。泉井、前掲書、一九七五年、二八一三六頁。

(43) 注(9)参照。

(44) M. L. Barker, "Vietnamese-Muong tone correspondences", Studies in Comparative Austroasiatic Linguistics (N. H. Zide, Ed.), The Hague, 1966, pp. 9–27.

L. C. Thompson, "Proto-Viet-Muong phonology", Austroasiatic Studies Part II (P. H. Jenner, L. C. Thompson, S. Starosta, Ed.), Honolulu, 1976, pp. 1113–1203.

(45) D. D. Thomas, "A survey of Austroasiatic and Mon-Khmer comparative studies", Mon-Khmer Studies I (Publication No. 1 of the Linguistic Circle of Saigon), 1964, pp. 160–161.

(46) Austroasiatic Studies Part I, II (P. H. Jenner et al., Ed.), Honolulu, 1976.

(47) J. M. Jacob, "Prefixation and infixation in Old Mon, Old Khmer, and Modern Khmer", Linguistic Comparison in

South East Asia and the Pacific, London, 1963, pp. 62–70.

(48) G. Diffloth, An Appraisal of Benedict's Views on Austroasiatic and Austro-Thai Relations (The Center for Southeast Asian Studies, Discussion Paper No. 82), Kyoto, 1976, p. 12.

(49) N. Matsumoto, Le japonais et les langues austroasiatiques: Etude de vocabulaire comparé, Paris, 1928.
　松本信広、前掲書、二六七―二九三頁。

(50) S. A. Wurm, "Language distribution in the New Guinea Area", New Guinea Area Languages and Language Study Vol. 1, Canberra, 1975, p. 7.

(51) S. A. Wurm, "The Papuan linguistic situation", Current Trends in Linguistics Vol. 8, The Hague, 1971, pp. 545–546.

(52) K. A. McElhanon, C. L. Voorhoeve, The Trans-New Guinea Phylum: Explorations in Deep-level Genetic Relationships (Pacific Linguistics Series B Monographs No. 16), Canberra, 1970.

(53) S. A. Wurm, op. cit., 1975, pp. 14–20.

(54) Encyclopaedia of Papua and New Guinea, Melbourne, 1974. の Languages の項。

(55) A. Capell, A Survey of New Guinea Languages, Sydney, 1969, p. 68.

(56) 江実「日本語はどこから来たか――北と南から見た日本語――」(東アジアの古代文化を考える会編『日本文化の源流』新人物往来社、一九七四年)。
　江実「古代日本語の源流」(朝日ゼミナール『古代日本の権力者』朝日新聞社、一九七五年)。
　江は、共通の類型的特徴を示すという点から「アルタニポギニア言語等線」が存在すると主張する。これは言語連合(Sprachbund)のことであると考えられる。

(57) A. Capell, "The Austronesian languages of Australian New Guinea", Current Trends in Linguistics Vol. 8, The Hague, 1971, p. 243.

(58) 大野晋「日本語の黎明――成立から貴族時代(前期)まで――」(『国文学解釈と鑑賞』一九巻一〇号、一九五四年)一四頁。

(59) 堀岡文吉『日本及汎太平洋民族の研究』冨山房、一九二七年。

(60) 北里闌『日本語の根本的研究』紫苑会、一九三〇年。

(61) 新村出「国語系統の問題」(『太陽』一七巻一号、一九一一年)、後に『言葉の歴史』創元社、一九四二年に再録、八―一〇頁、または『新村出全集 一』筑摩書房、一九七一年、一二六―一二八頁。
(62) 新村出「南方と日本民族――特に言語上から――」(『南方記』明治書房、一九四三年)八八頁、または『新村出全集 二』筑摩書房、一九七二年、四四一頁。
(63) 新村出「日本人と南洋――日本語に於ける南方要素管見――」(『日本の言葉』創元社、一九四〇年)八頁、または『新村出全集 一』(前掲)九五頁。
(64) 新村出『外来語の話』新日本図書、一九四四年、一二九―一三〇頁、または『新村出全集 三』筑摩書房、一九七二年、七七頁。
(65) 馬淵東一「故小川尚義先生とインドネシア語研究」(『民族学研究』一三巻二号、一九四八年)一六一頁。
(66) 新村出、注(63)前掲書、一二一―一七頁、または『新村出全集 一』(前掲)九六―一〇〇頁。
(67) 村山七郎「しなてる・てるしの考」(『国語学』八二集、一九七〇年)。
(68) 奥里将建「日本語の南方圏的要素」(『古代語新論』三省堂、一九四三年)。
奥里将建「日本語の南方的要素」(『日本語系統論』古代文化研究会、一九五七年)。
(69) 大野晋「日本語(系統)」(『世界言語概説』研究社、一九五五年)二九七頁。
(70) 『時代別国語大辞典 上代編』三省堂、一九六七年、一七頁。
(71) 大野晋『日本語の起源』岩波書店、一九五七年、一〇〇―一〇一頁。
(72) 川本崇雄「日本語の数詞の起源」(『季刊人類学』六巻二号、一九七五年)。
(73) 泉井久之助「日本語と南島諸語」(『民族学研究』一七巻二号、一九五二年)、後に、前掲書、一九七五年に改補して再録。
(74) この言葉は注(73)の初出の論文にはないが、改補論文に見える。二三五頁。初論と改論との間には、日本語と南島語との間には消極的な関係しかないことを一層積極的に示そうとする意図が読み取れる。
(75) 村山七郎・大林太良、前掲書、一二二頁。
村山七郎『日本語の研究方法』弘文堂、一九七四年、二〇頁。
(76) ポリワーノフ著、村山七郎編訳、前掲書、八四頁。

(77) アントワヌ・メイエ著、泉井久之助訳『史的言語学における比較の方法』みすず書房、一九七七年、一三九―一四〇頁。なお、亀井孝『日本語系統論のみち』吉川弘文館、一九七三年、四一頁では混合という概念に反対する。
(78) 村山七郎・大林太良、前掲書、一一―一二頁。
(79) 村山七郎『国語学の限界』弘文堂、一九七五年、九〇―九一頁。
(80) 村山七郎、R・A・ミラー対談「原始日本語の周辺」(『どるめん』二号、一九七四年)一〇九頁。
(81) 原口悉常「マカロニ語の諸相」(『言語生活』三〇五号、一九七七年)。
(82) U・ワインライヒ著、神島武彦訳『言語間の接触――その事態と問題点――』岩波書店、一九七六年、一四〇―一四一頁。
(83) H. Kähler, op. cit., 1963, pp. 158–159.
(84) 村山七郎『日本語の研究方法』(前掲)一三頁。
(85) 村山七郎『日本語の語源』弘文堂、一九七四年、vii-viii頁。
村山七郎その他シンポジウム「南島の古代文化」(国分直一・佐々木高明編『南島の古代文化』毎日新聞社、一九七三年)一五三頁。
(86) 村山七郎『日本語の語源』(前掲)二四四―二四五頁。
吉田金彦『日本語語源学の方法』大修館書店、一九七六年、二六〇―二六二頁。
(87) 村山七郎『日本語の語源』(前掲)二三六頁。
村山七郎『日本語の研究方法』(前掲)一九八頁。
(88) 村山七郎『日本語の語源』(前掲)二九頁。
村山七郎『日本語の語源』(前掲)xxii–xxvi頁。
(89) 村山七郎「琉球方言の成立をめぐって」(『南島の古代文化』(前掲))九一―一一八頁。
(90) 村山七郎『日本語の語源』(前掲)二四七―二五一頁。
(91) 川本崇雄「日本語の動詞活用体系の成立と起源」(『季刊人類学』七巻一号、一九七六年)。
音韻面だけについていうと、音韻変化の説明に目的論的な点がないではない。

4　朝鮮語と日本語

大江孝男

はじめに

日本列島と地理的歴史的関係の深い朝鮮半島では、七世紀の新羅による半島統一によって、言語的民族的統一の基盤が確立したと考えられている。

一〇世紀に高麗が新羅のあとをつぎ、都を半島中部の開城に移したが、これによって、慶州を中心とする東南部方言に代って、中部方言が共通語として優位に立つ態勢が形づくられたと考えられる。一四世紀末に李氏朝鮮の建国によって都が現在のソウルの地に移ってもこの態勢は受けつがれ、一五世紀中葉の『訓民正音』の公布により初めてその言語を細部まで表記することが可能となった。日本では『訓民正音』の公布の時期を中心に一五、六世紀の言語を中期朝鮮語と呼び、それ以前を古代、以後を近代、現代と区分するのがふつうである。一四世紀以前の言語を正確に把握することは極めて困難であるが、断片的ながら漢字によって記録された資料によってある程度の知識を得ることができる。言語史の考え方としては、古代朝鮮語をさらにいくつかに分ける方がよいであろうが、本稿では慣用に従うこととし、必要に応じて新羅時代、高麗時代を分けることにする。

一　朝鮮語との比較研究史概観

朝鮮語が、ツングース諸語、蒙古諸語、チュルク諸語などのアルタイ諸言語と共に、言語構造の上からみて日本語と類似点の多い言語であることはよく知られている。アルタイ諸言語の構造的特徴は古くは藤岡勝二(一九〇八)の一四項目による指摘があり、戦後は服部四郎(一九五八a)による一〇項目に分けての検討、大野晋(一九五七・一三九―

一四七頁)の解説などがある。

アルタイ諸言語と対比の上で日本語と朝鮮語に見られる著しい類似点をあげるとすれば、

(1) アルタイ諸言語では形容詞が名詞の一種であって名詞と同じ曲用をするのに対し、日本語と朝鮮語では動詞の一種で活用を行う。

(2) 名詞に接合する所属人称語尾や反照語尾がみられない。

(3) 述語に接尾する人称語尾が見られない。

(4) 日本語と同じく、コノ、ソノ、アノのような指示語の体系が「近・中・遠」の三系列である。

(5) 用言の活用体系の内部に敬意表現の形態素が組み込まれている。

(6) [r]と[l]の音韻的区別がない。

(7) 一五、六世紀の朝鮮語資料にはアクセントの表記のあるものがあり、現在も一部の方言に高さアクセントが行われている。

などをあげ得るであろう。

もっとも、音節構造の点では朝鮮語では閉音節が豊富で現代朝鮮語でも母音間に子音二個の連続が許されるし、一五世紀には語頭に子音群が立ち得た。

アルタイ諸言語と朝鮮語、日本語との類似点あるいは相違点は、日本語の系統論議の初期からすべてが知られていたわけではない。とくにアルタイ諸言語の特徴として重視されていた母音調和は、朝鮮語については前間恭作(一九二四)、G・J・ラムステット(G. J. Ramstedt, 1928)、小倉進平(一九二九)の研究にまたなければならなかったし、日本語については有坂秀世(一九三二、一九三四)、池上禎造(一九三二)によってその痕跡が発見されるまで知られていなかった。また、朝鮮語現代方言の一部にアクセントがあることは、服部四郎(一九三五)の報告によって初めて確

認されたのである。

しかし、これらの特徴が全部は知られていず不正確な知識であったにしても、印欧語比較文法の成果を目にしていたヨーロッパの人々の注意をひかないわけはなく、一九世紀の中頃から朝鮮語と他の言語からの語彙を対照して示すなど、その系統問題に言及するものが現われ始める。比較された言語は多いが、日本語やアルタイ諸言語との類似は早くから注目されていたようである(小倉進平(一九四〇a・七二頁以下))。日本語についても、ほぼ同じ頃からウラル・アルタイ諸言語との系統問題が論じられるようになっており、こうしてヨーロッパで日本語と朝鮮語に対する関心が高まりつつあった。日本では、江戸時代になって語源解釈の一環として朝鮮語が利用されることはあったが、言語構造の類似や系統問題に対する科学的研究には至らなかったようである(小倉(一九四〇a・五七頁以下))。

このように日本語と朝鮮語に対する関心が高まっていく中で、一八七九年、W・G・アストン(W. G. Aston)の両言語の比較研究が発表された。この論文は全文四八頁の小論文であるが、両言語に対する知識の正確さなど、画期的なものであった。

明治維新を経て近代国家として発展しはじめた日本でも、民族意識の高まりの中で民族や言語の起源に関する論考が発表されるようになったが、朝鮮語と日本語との言語的な比較研究が現われるのは一八八九年頃からである。この時期の日本語、朝鮮語の比較研究は、歴史学や法制史の立場から、古代の史料にみられる古代朝鮮語の解釈をめぐって主に白鳥庫吉、宮崎道三郎などによって行なわれ、やがて言語全体の比較へと発展し、金沢庄三郎の『日韓両国語同系論』(一九一〇)において集大成されたといってよいであろう(小倉(一九四〇a・六二頁以下)、小沢重男(一九七六・二三三頁)、亀田次郎(一九三一)、金田一京助(一九三八・七八—八八頁))。

金沢は、アストンの試みた漢字音を手がかりにする音韻対応を前進させて固有語彙の比較へと徹底させ、文法面でも構造的な比較よりも単語や形態素の比較を主とするなど、音韻、文法の両面にわたって詳しく検討し、比較研究を

発展させたということができる。ただ、ここで用いられた音韻対応の概念はアストンの場合と同様充分な反省なく適用されており、全体的に論理的な基礎を欠いたものになってしまっている。日本語と朝鮮語との関係については、アストンが、〝アーリア語族〟(印欧語族)の中でもっとも遠い関係にある二言語の関係と同様な関係にある、と比較的遠いものと見たのに対し、金沢は、〝琉球方言〟と日本語との関係と同様である、との積極的な態度を表明した(W・アストン(一八七九・三六三頁)、金沢(一九一〇・一頁))。

金沢の業績は当時としては極めてすぐれたものであるばかりでなく、英文と同時に発表されたためもあって広く世界に知られ、その後の日本語、朝鮮語比較研究の方向をある程度決定してしまうような影響を与えた。勿論、当時から、批判がなかったわけではなく、一年後に新村出は「国語系統の問題」(一九一一)を発表してより慎重な態度を要請し、数年後にさらに「国語及び朝鮮語の数詞に就いて」(一九一六)を発表して立場を明確にすると共に、『三国史記』記載の高句麗地名にみえる数詞や、平安時代末期の『二中暦』にみえる高麗時代の数詞資料を紹介するなど、歴史的な観点の必要性を示したものとして注目される。[1]

その後、国内では橋本進吉の上代特殊仮名遣の再発見(一九一七年)を契機として日本語の歴史的研究が盛んとなりやがて池上禎造、有坂秀世による上代日本語における母音調和の痕跡の発見(前出)へとつながり、朝鮮語では前間恭作や小倉進平による母音調和の発見(前出)と小倉進平の諸研究を軸とする歴史的研究が大いに進展した反面、系統論議はやや下火となった感がある。この時期の系統問題に対する代表的な寄与としては、新村出『国語系統論』(一九三五)、小倉進平『朝鮮語の系統』(一九三五)、金田一京助『国語史 系統篇』(一九三八)などがあげられる。

国外では、Ye・D・ポリワーノフ(E. Д. Поливанов)の日本語研究や朝鮮語の系統に関する論文が現われた時期にあたり、後にアルタイ諸語比較研究に指導的役割を果すことになるG・J・ラムステットの精力的な活動の始まった時期でもある。

ラムステットはまず日本語とアルタイ諸言語との比較研究の可能性についての論文(一九二四)を発表し、朝鮮語が両者の関係をつなぐ役割を果すべきことをのべているが、日本語の歴史的変遷を明らかにする必要を強調し、その音韻構造の特徴の一つである開音節性について、閉音節の末尾子音の脱落という音韻変化の結果であり得ることを指摘している。ラムステットは朝鮮語の研究に着手し、主としてアルタイ諸言語との比較を試み、日本語との比較をも行なった。その成果は『朝鮮語文法』(一九三九)、『朝鮮語語源研究』(一九四九)にまとめられ、多くの論文や没後遺稿を整理して出版された『アルタイ諸言語比較言語学入門』(一九五二—六六)により日本語や朝鮮語の系統論議に大きな影響を与えた。(2) すでに最初の論文で朝鮮語、日本語とアルタイ諸言語との比較研究の前途に大きな困難のあるべきことを予見しており、ラムステットの努力は、精密な比較研究を行なうことよりも問題解決のためにできるだけ多くの資料を集めることと、それらの資料によって研究の枠組をつくることに集中されたようにみえる。アルタイ諸言語の比較研究は主にN・ポッペ(N. Poppe)に受けつがれ、さらに日本では村山七郎へ、韓国では李基文へと系譜を引いて第二次世界大戦以後の系統論議においてそれぞれの役割をになうことになる。

第二次世界大戦後の日本語の系統論議は国内では戦後まもなく発表された服部四郎「日本語と琉球語・朝鮮語・アルタイ語との親族関係」(一九四八b)に始まるといってよい。引続いて亀井孝(一九四九)、河野六郎(一九四九)、長田夏樹(一九四九)、柴田武(一九四九)、村山七郎(一九五〇)等の業績が発表され、泉井久之助(一九五二)、大野晋(一九五二a)等の業績が続き、一九五〇年代までの系統論議の素地が早くもでき上った。とくに、安田徳太郎の『人間の歴史 II 日本人の起源』(一九五二)、『万葉集の謎』(一九五五)が発表されるに及んで、その批判から議論は沸騰し、大野晋は「日本語の黎明」(一九五四)を経て『日本語の起源』(一九五七)に朝鮮語との同系論を展開し、村山七郎は「万葉語の語源——日本語の系統論に関連して——」(一九五六)およびその前後に発表した論文によって日本語とアルタイ諸言語、とくにツングース諸語との同系論の立場から朝鮮語を関連させる見解を発表し、この両者を軸に系統

論議が進行したといってよい。

一方、戦後独立した韓国でも、まず、李崇寧によって朝鮮語の歴史研究と関連してアルタイ諸言語との比較が試みられ、一九五〇年代末から六〇年代にかけて李基文の論考が次々に発表されたが、その『国語史概説』(初版、一九六一)には朝鮮語の歴史的研究の成果が集大成されていると共に、朝鮮語の系統に関する基本的な立場が明らかにされている。六〇年代には、金芳漢、金完鎮等の論文も現われるが、韓国の系統論議は朝鮮語とアルタイ諸言語との関係に集中され、日本語に対する関心はそれほど強くはなかったようである。

この間、韓国以外の国々で、先にふれたラムステットの業績以外にもJ・ラーデル(J. Rahder, 1951–54)やCh・アグノエル(Ch. Haguenauer, 1956)の研究などが発表され、日本語と朝鮮語の系統問題に対する関心が高まる気配をみせていた。それと共に、アルタイ諸言語として一括される各言語内部の諸方言の比較研究の成果もこのころ相次いで発表され、(V・I・ツィンツィウス(В. И. Цинциус, 1949)、J・ベンツィング(J. Benzing, 1953)、G・D・サンジェーエフ(Г. Д. Санжеев, 1953)、N・ポッペ(N. Poppe, 1955)、M・レセネン(M. Räsänen, 1949, 1957)、N・K・ドミトリエフ＝N・A・バスカコフ(Н. К. Дмитриев,и Н. А. Баскаков (ред.), 1955–62))、またアルタイ諸言語間の比較研究も進み(ラムステット(1952–66)、ポッペ(1960))、利用しやすい形になってきたことが、国内の系統論議に活気を与えることにもなっていたであろう。

韓国での業績は日本にはあまり知られていなかったが、日本での戦後の系統論議に先鞭をつけて戦前の諸研究について吟味し、方法論の厳密な適用の必要性を強調した服部四郎は、この間批判的な立場からの論考を発表し、これらをまとめて『日本語の系統』(一九五九)として公刊した。その基本的な考え方は、すでに一九四八年の論文(b)の随所に示されているが、もっとも一般的な形ではその注(43)の中で、

〔上略〕phonemes の対応が親族関係の証拠となるというのは一つの表現にすぎない。morphemes の対応を離れ

た phonemes の対応はない。morphemes の対応とは無関係の grammatical categories の「対応」が親族関係の証拠となると考えるのは正しくない。(一九五九・三九頁)

という部分に端的に示されていると見ることができる。この態度は、この時期に発表した系統論に関係ある論考の中でも、一貫して堅持されている。[3]

一九六〇年代の日本の系統論議では、高句麗地名から帰納される「高句麗語」と、言語年代学が、大きな話題となった。

『三国史記』に記載された高句麗地名の問題は、それから抽出しうる数詞をめぐって早く新村出(一九一六)によって指摘されていたが、改めて河野六郎によってとりあげられ、古代朝鮮半島の言語状況を示す資料として論ぜられていた(一九五七)。李基文は、これら高句麗地名からかなりの数の語彙を抽出し、統一的に「高句麗語」として把え、朝鮮語、日本語、ツングース諸語との系統関係について論じた(一九六一、一九六三)。李基文に刺激された村山七郎も独自の立場から論考を発表し(一九六二a、b、一九六三)、系統関係について、アルタイ共通語から分離した東部アルタイ語がまず、原始韓系言語、倭・高句麗共通語、先ツングース語の三者に分裂し、原始韓系言語が新羅語を経て朝鮮語へと、倭・高句麗共通語が分裂して原始日本語と高句麗語へと、それぞれ発達したと見ている(一九六三・一八九頁)。これに対して李基文はアルタイ祖語が夫余・韓共通語とチュルク・蒙古・ツングース共通語の二者に分離し、前者がまず原始韓語と原始夫余語とに分かれ、ついで原始夫余語から高句麗語と原始日本語とが分裂したとみており(一九六七・八九、九一頁、一九六八)、ツングース諸語の系譜関係をめぐって意見の違いをみせている(なお、ポッペ(一九六五・一三七—一五四頁)、李基文(一九七四a・訳本、二七一—二七四頁)、など参照)。

高句麗語が系統論議の話題となったのは、日本語と朝鮮語との親族関係をつなぐ、いわゆるミッシング・リンクの位置を占めるものとして位置づけることのできる言語ではないかという点にある。漢字による音表記のもつ不完全さ

と、数が多いとは言えないことから、後にのべるような厳密な方法の適用には無理があり、また高句麗語そのものは失われているため、地名表記を統一的に高句麗語とみることに対する疑問も生じうるが、解読の結果は興味深いものがあり、日本語や朝鮮語をめぐる比較研究の貴重な参考資料であることには変りはない。

言語年代学、あるいは基礎語彙統計学の方法は、服部四郎(一九五四)によって日本に紹介されており、琉球を含む日本語諸方言、アイヌ諸方言などに適用して成果をあげ、他方で、日本語との親族関係が問題となっている言語との間で、語彙項目が同一で形の類似している形式相互の中にまだ発見されていない音韻対応の規則がかくれている可能性を想定して適用し、試算して互いに比較対照してみる〃水深測量〃を試みた(一九五七)。その結果、朝鮮語との間の類似語彙の比率がもっとも高く、次いでアルタイ諸言語との間の類似語彙の比率が位置することが示されたが、日本語とアイヌ語、アイヌ語と朝鮮語とのそれぞれの間に見出される類似語彙の比率が意外に高いという、興味ある結果も発表されている。

言語年代学は、歴史の知られているいくつかの言語の調査をもとに、基礎的な語彙の中には別の語彙で置き換えられるという歴史的変化に対する抵抗力が大きく、古い意味を保持する傾向の強い語彙のグループがあり、これらの語彙については、置き換えの起った語彙の比率を単位時間に対して一定なものとして把えうる、という作業仮説の上に立っている。すなわち、親族関係にある二つの言語における共通の残存語の比率を求めれば、統計的な考え方により分離の年代を計算できることになる。こうして同じ関係にある二言語ごとに適用して相互に比較対照すれば、系譜的な親疎関係を明らかにしうることになる。

言語年代学が右のような新しい着想を基礎としていることから、言語の親族関係の証明という問題との関係をめぐってこの時期に改めて議論が行なわれた。やがて、残存語率の異常に高い言語の例が報告されるに及んで、基本的な作業仮説に対する疑問も提出されることになった。

この方法は完成されていたわけではなく、当初から問題点がいくつか指摘されていた。そこに残存語率の異常に高い言語や異常に低い言語があることも考えなければならなくなったのであるから、基本的な作業仮説にとって致命的と考えられたのも無理はない。しかし、その一方で残存語率がほぼ一定と考えてよい一群の言語があることもまた事実である。

二言語間の共通残存語の認定に音韻対応の概念が必要なことからみても、言語年代学が従来の比較方法にとって代る方法ではないことは明らかであり、多くの未解決の問題をかかえていることも事実であるが、統計的性格を考慮しつつ適正に運用すればそれなりの役割を果しうると考えてよいであろう。(4)

一九六〇年代後半にはいると、従来日本語と高句麗語、ツングース諸語との親族関係を中核として南島語の基層を主張していた村山七郎は、南島語との親族関係を中核としアルタイ諸語との関係を上位層と見る考え方へと転換し(一九六六)、その後の多くの著作を通じて現在もその考え方を展開しつつある。

同じ頃、海外ではS・E・マーティン(S. E. Martin)による日本語、朝鮮語の親族関係に関する論文(一九六六)が発表されている。この論文は、意味が一致し、かつ、音韻構造に共通要素の多い語彙相互の間に、積極的に対応関係を見出していこうとする点、比較語彙の中に対応関係に関する信頼度のランクを区別し、もっとも信頼度の高い「対応語彙」から導き出された音韻対応の規則によって他の比較語彙を説明しようとする点など、注目すべき特色をもち、比較研究を一歩前進させたものと言ってよい。ただ、音韻対応の規則の設定が機械的に過ぎ、そのため「対応語彙」や再建された共通祖語形の信憑性に疑問を生じさせる結果となっている。

マーティンの業績はR・A・ミラー(R. A. Miller)に引きつがれたとみることができる(一九六七a、b、その他)。ミラーの努力は、マーティンによって提示された日本語、朝鮮語比較研究の成果と、ラムステットやポッペによって推進されてきたアルタイ諸言語比較研究の成果とを結合させることに集中され、多くの著作を発表している(とくに

一九七一)。その比較研究の態度はラムステット以来の流れに近いようであるが、多くの点でマーティンの上代日本語に関する知識の不足を補っており、日本語の歴史および系統に関する諸問題を広く世界に知らせる結果となった点で大きな役割を果しているといってよい。

このような動きは、日本国内にも反響を呼び、さきにふれた村山七郎(一九七一、その他)の論考以外にも、多くの業績が出版されるようになった(例えば、池田次郎・大野晋編(一九七三)、江上波夫・大野晋編(一九七三)、江上波夫・松本清張編(一九七五a、b)、大野晋編(一九七五)、長田夏樹(一九七二)、金思燁(一九七四)、江実(一九七四)、村山七郎(一九七五b)、『言語』三巻一・二号(一九七四)など)。

一方、韓国でも、宋敏(一九六九)によって朝鮮語の系統論議に日本語が改めて正面からとりあげられる契機がつくられ、李基文(一九七三、一九七五)等が発表されている。これと並んで、韓国でもアルタイ諸言語や日本語との親族関係の問題のほかに、ギリヤーク語などとの類似点が問題とされるようになってきた(金芳漢(一九七六))ことは、朝鮮語自体の系統問題の深刻さを示す兆候として注目される。

最近の系統論議の特徴としてあげられることは、李基文の論考の翻訳(一九六八、一九七四a)などにみられるように、国内の論議にとどまることなく、韓国の論議にも注意を向ける姿勢が見られるようになったことであるが、国際的にも新たな関心の高まりを見せつつあるようである(B・レビン(Bruno Lewin, 1976(?))、など)。

二 比較研究の現状

日本語と朝鮮語との系統問題に対する関心が異常なまでの高まりをみせていることは以上見てきた通りであるが、その一つの原因は親族関係における日本語と朝鮮語との系譜関係を直接のものとみ、とくにツングース諸語を両者を

除いた他のアルタイ諸言語の系譜関係の中に位置させるという考え方が有力になってきたことと関係があるであろう。この考え方は高句麗語を日本語と朝鮮語との親族関係を結ぶミッシング・リンクと考える見方ともちろん関係がある。

ところで、このような流れの中で、一般に大きくとりあげられたことこそないものの、方法論の見地から系統論議に対して批判的な立場をとる考え方が当初からあったこともまた、さきにみておいた通りである。[5]最近の系統論議が、これらの批判に耐えうるものになっているかどうかを吟味してみる必要があろう。

1　言語の親族関係について

親族関係の証明ができるかできないかにかかわらず、ある二つの言語の系統が同じである、または親族関係にあるということは、問題の言語が、かつては音韻・文法・語彙といった言語構造の上で同一の言語であった時代があり、両言語に見られる構造・体系の違いは、かつての構造・体系の同一であった時代の言語(共通祖語)からの歴史的変遷の結果として説明される、ということを仮定することを意味する。したがって、親族関係にあることの証明は、現在利用できる言語の資料から、共通祖語の音韻・文法・語彙など、その構造・体系をどの程度再構成できるか、にかかってくることになる。この作業は言語の歴史研究を通じて構成されてきた方法論に基づく論理的な作業であることを忘れてはならない。

「音韻法則」、あるいは「音韻対応の規則」を確立することが、言語学における比較方法において重要な役割をもつことは現在では広く知られている。しかし、音韻対応の規則がなぜそのように重要な意味をもちうるかを理解するためには、もう一歩進んで親族関係にある言語相互の間でなぜ音韻対応の規則といわれる現象が見られることになるのかについて考えてみる必要があろう。

簡単に言えば、言語の変遷の中で見られるいろいろの変化の中に、規則的な音韻変化という現象が見られるからで

ある。言語が変化することは経験的に知られる事実であるが、規則的な音韻変化に関しては、同一の形式からの変化の結果としての諸言語の形式の形は、変化の方向が言語によって異っていても規則的な類似または差異として把えることができる。このような類似と差異の規則を整理して得られるのが音韻対応の規則といわれる現象であって、結局、規則的な音韻変化の結果をいくつかの言語について整理して示すものが音韻対応の規則であるといってよい。もちろん、言語変化は規則的な音韻変化だけではないから、形式の形はいろいろの他の原因によっても形が変化するが、このような原因によって変った形式の形、またはその一部は、音韻変化の規則からはずれ、したがって厳密な音韻対応の規則には合致しない形となる。

比較方法においてはこの関係を逆に利用し、厳密な音韻対応の規則を確立することによって、規則的な音韻変化の結果を見定め、音韻変化を逆にたどる手がかりとする。音韻対応の規則を厳密に設定することは、規則的な音韻変化を正確に把握するために必要なばかりでなく、規則的な音韻変化と言えない変化を抽出し研究対象として把握するためにも必要なことである。ロマンス諸語に対するラテン語のような幸運な場合を除いて、祖語における形式の形は知られていないのが普通であって、規則的な音韻変化を逆にたどることによって祖語の形式の形をある程度再建することができ、規則的な音韻変化からのズレを生じさせた他の言語変化について研究することができるようになる。(6) その反面、比較方法が効果を発揮しうるか否かは、規則的な音韻変化を把握できるか否かにかかってくる。

祖語において、同一の言語であったとしても、分離して長い時間が経過すれば新しい形式に置きかえられる形式が多くなり、規則的音韻変化も何段階も重なって対応する形式の把握がむずかしくなり、さらに幾重にも重なればついには音韻対応の規則の確立ができなくなることも考えられる。語根を共通にする単語家族の研究や、語幹形成、曲用、活用などにみられる化石化した不規則形が重視されるのは、このような面に古い形式の反映が何らかの形で残りやすく、音韻対応の規則を見出す手がかりにもなりうるからである。この点では、日本語も朝鮮語も形態構造が簡単で規

則的なので、比較方法にとって必ずしも有利な構造の言語とは言えないかも知れない。
このような、共通祖語に由来する語彙や形態素だけではなく、ある時期にかなりの数の借用語が受入れられた場合にも、借用された時期からの変化において借用した言語と借用された言語との間にはそれらの語彙についてある程度規則的な音韻対応が見られることになる。日本語や朝鮮語における漢字語はその例であるが、このような現象は漢字文化圏に限られるわけではない。このような場合、祖語に由来する語彙における対応規則との違いや他の条件に照らして、借用語を区別することができるはずであるが、古い時代の借用語についてはその区別が常に容易であるとは限らない。音韻対応の規則の確立は言語の親族関係の証明にとって有力な方法ではあるが、結局のところ規則的な音韻変化の結果を別の形で表現したものに過ぎないのであるから、親族関係の証明ができるか否かは、対応する語彙や文法的形態素が、言語構造の核心部といわれる基礎語彙や文法組織の中のどのような位置を占めるかによって総合的に判断する以外にないことになる。もし、語彙の改新が基礎的な語彙において著しく、少数の基礎語彙やどちらかといえば周辺的な語彙に、祖語に由来するものがわずかに残っているような状況が考えられるとすれば、親族関係にある言語であってもその証明ができないという場合もありうるかも知れない(7)。
また、規則的な音韻対応はいくつかの言語における規則的な音韻変化の結果として見られる現象であるから、祖語から分裂した諸言語の間に接触などの長い期間にわたる相互影響があった場合にはそのために規則的な音韻変化の例外となる形式が多くなり、それだけ比較方法にとって不利な現象が多くなることになる。
規則的な音韻変化といっても、その規則は特定の言語の特定の時期の変化から帰納されるものであって、普遍的な法則であるわけではない。音韻変化の規則を見出すには、音韻環境における音韻の変化に関して並行関係を示す形式をできるだけ多く見出すことが大切である。同様に音韻対応の規則を設定するにも対応する音韻とその環境について並行関係を見出すことが必要である。とくに、時間の流れに沿って変化をたどる場合と異なり、比較研究においては、

のぼろうとするわけであるから、比較語彙一つ一つの中には祖語における同一形式からの発達という仮定を保証しうるものは含まれていない。対応規則を適用しうる比較形式の中に、この仮定を支持しうるだけの意味のよく一致する対応例が含まれていなければ、帰納された対応規則に対する信頼度は低くなる。形式の形も意味も変化しうるが、形についてはそれを構成する音韻の変化として規則性を見出すことができるのに対して、意味の面の変化はそのような規則による分析的な把握ができないので、意味のズレの大きい形式ばかりを集めて形の異同を規則的に把握したのでは、祖語における同一形式からの変化という仮定を支持することにはならない。音韻対応規則の信頼性は、意味の一致する形成の対応例、対応規則の一貫性と全体としての相互関連などによって支持されるべきもので、意味のズレについても祖語の意味からの変化として説明しうるものでなければならない。このように音韻対応の規則を厳密に設定し得たとしても、借用語や互いに無関係に形成された祖語に由来しない形式が、対応規則に合致する形としてまぎれ込むのを完全に排除することはやはり困難と考えられる(8)。こういった点からも語根を共通にもつ単語家族の研究とそれに基づく比較研究の必要性が重視されるが、それと共に、親族関係の証明は、厳密な音韻対応の規則によって、比較される言語の基礎語彙や文法的形態素をどの程度同一の言語構造からの変化として説明しうるかによって、総合的に判断する外はないことになるのである。

親族関係にあることの証明ができた場合、それらの言語の歴史は飛躍的に古い時代までさかのぼり得ることになる。このことは、日本語や朝鮮語についても同じであり、系統論のもつ学問的意義はここにあるというべきであろう。親族関係の証明ができない限り、歴史をそれほど古くまでさかのぼることはできないが、比較研究により、問題の言語を形成してきたいろいろの言語の要素をある程度見分けることは可能であるかも知れない。

2　日本語と朝鮮語の比較

類似語彙としてあげられる例は、人によって違いはあるが、おおよそ二〇〇ないし三〇〇前後の語彙のようである。以下、代表的な比較語彙について簡単にみることにする。形式の表記は、日本語のハ行子音をpで、上代特殊仮名遣で甲乙の区別の見られる音節には母音に小数字1、2をつけて区別する。朝鮮語は原則として中期朝鮮語の基本形を示すこととし、有気音をp t k čで、無気音をb d g ǯで、母音をa ə o u ɐ ɯ iで、ヤ行子音に相当する子音をy

	日本語			朝鮮語	
①	*pata*-ru	《徴》	:	bad-	《受》
	pata	《畑》	:	bat	《畑》
	pata	《端》	:	bas(g)	《外》
	*pat*o	《鳩》	:	biduri	《鳩》
②	*pot*aru	《螢》	:	bandoi	《螢》
	pota	《榾》	:	bədɯr	《柳》
③	*tat*-	《立》	:	dod-	《昇》
	*tat*a-ku	《叩》	:	dudɯri-	《叩》
④	*kat*a-	《堅》	:	gud-	《堅》
	*kat*a	《肩》	:	gasɐm	《胸》
	*kat*a	《方》	:	gyət	《傍》
⑤	k*o*$_2$*to*$_2$	《事》	:	gəs	《事》
	g*o*$_2$*to*$_2$	《如》	:	gɐd-hɐ-	《如》
	m*o*$_2$*to*$_2$	《本》	:	mit	《底(本)》
⑥	pu*ti*	《淵》	:	mos	《池》
	ka*ti*	《徒歩》	:	gəd/r-	《歩》
	pa*ti*	《蜂》	:	bər	《蜂》
	ta*ti*	《達(pl.)》	:	dɯr	《達(pl.)》
⑦	sa*tu*	《矢》	:	sar	《矢,(戸,障子の)骨》
	na*tu*	《夏》	:	nyərɯm	《夏》
⑧	mo*si*	《苧》	:	mosi	《苧》
	pu*si*	《節》	:	mɐdəi	《節》
	ku*si*	《串》	:	goǯ	《串》
	po*si*	《星》	:	byər	《星》
	ko$_2$*si*	《腰》	:	həri	《腰》
	ka*si*	《枷》	:	gar	《枷》
⑨	m*i*$_1$du	《水》	:	mɯr	《水》
	p*i*$_1$di	《臂》	:	bɐr(h)	《腕》
	p*i*$_1$ru	《蒜》	:	pɯr	《草》
	p*i*$_2$(〜po)	《火》	:	bɯr	《火》

で、母音結合は母音記号の連続で、位置による異音[r][l]を共にrで、それぞれ示す。現代語を引用する場合は右の原則に合わせて転写して示すこととする。なお、単独の形式では現われない子音は( )に入れて示す。

引用されることの多い類似語彙をいくつか右に示す。ここでは日本語例のイタリックで示した部分によって整理して示してある。

このような例をみると、一部の音素についてはある程度規則らしいものを考えうるようであるが、対応語彙と認めるためには、規則的音韻変化以外の変化による不一致の部分を除いて、形式の主要部分について音韻対応の規則で説明できなくてはならない。歴史的変遷を通じて受けつがれてきたのは、バラバラの音韻ではなく形式全体なのであるから。

	日本語			朝鮮語	
⑩	kusi	《串》	:	goǯ	《串》
	kupa-	《美》	:	gob/w-	《美》
	kura-	《谷(?)》	:	gor	《谷》
	kuma	《熊》	:	gom	《熊》
⑪	kusa	《草》	:	goǯ(現:ggoč)	《花》
⑫	kuro	《畔》	:	goraŋ	《畎》
⑬	mu(〜mi_2)	《身》	:	mom	《体》
	nu(〜numa)	《沼》	:	non	《水田》

このような観点からみると右に示した比較語彙は、個々別々にみれば類似していると言えるものが多いが、それらの類似は全体として規則的に捉えられているわけではないことが明らかである。類似を全体として規則的に把握するためには、「対応」の違いを祖語における音素あるいは音韻環境の違いとして説明できるかどうかを検討しながら、規則的な現象を一貫して守り得る語彙を選び出さなければならない。

このような観点からみると、比較語彙は当面少なくならざるを得ないが、意味と形の両面で類似する形式の比較から何らかの規則性を見出すことができないかどうか、まず検討してみるのがふつうであろう。

上の例には借用語と考え得る例も含まれてはいるが、例⑩の母音の違いを基礎として考えると、例⑩⑪、および例⑫⑬のそれぞれの間の比較語彙の間の音節構

造の違いに規則性らしいものがみられる。ただし、第二音節に現われる母音や例⑫における第二子音についてはなお検討の要がある(例⑭参照)。

次の例⑭⑮はよくあげられる比較語例であるが、対応のちがいを音韻環境のちがいとして説明できるかどうか検討が必要である。

	日本語			朝鮮語	
⑭	uri	《瓜》	:	oi	《瓜》
	tuti	《土》	:	dor(h)	《石》
	kudira	《鯨》	:	gorai	《鯨》
⑮	mori	《森》		moi(h)	《山》
	mura	《群，叢》		mur	《群》
	turu	《鶴》		durumi	《鶴》
⑯	pata	《畑》	:	bat	《畑》
	nata	《鉈》	:	nad	《鎌》
	kasa	《笠》	:	gad	《帽》
⑰	asa	《朝》	:	ačəm	《朝》
	wata	《海?》	:	bada(h)	《海》

上の⑯⑰のような例も、例⑩、および例⑫などから見て注意する必要のある比較語彙である。

ただし、例⑯には借用語と考え得る形が含まれており、とくに第三例は、中期朝鮮語では語末の-dと-sとの対立があったので注意しなければならない。[9] また、例⑰の第一例は、朝鮮語の有気音の発達がやや新しいと考えられている点を考慮して示してあるが、なお検討を要する形である。

次の例⑱に示す比較語彙は、個別に見れば極めて類似しているが、規則的な把握という観点からみた場合、第一例、第二例については日本語のより古い形が *Co_2Co_2 型語幹であったと仮定し、日：*Co_2Co_2 ‖ 朝：CaC という形での並行関係を考えておくのが今のところ穏当かと考えられる(例⑩⑯参照)。これとの関連から第三例をここに加えておくが、その第二子音の現われ方は、例⑯のそれとは並行的ではないことに注意しておく必要がある。

次の例⑲もよく見られる比較語彙で、疑問はあるが注意しておく必要があろう。ただし、第三例の日本語は古代にこの形であったかどうかに疑問があり、後続母音による「母音の割れ」による変化の結果としての対応を考えるのであればこの系列からは除外しておくべき形である。

	日本語		朝鮮語
⑱	omo 《母，乳母》	:	əmi 《母》
	op- 《負う》	:	əb- 《背負う》
	ko_2to_2《事》	:	gəs 《事》
⑲	sima 《島》	:	syəm《島》
	siba 《柴》	:	səb 《薪》
	titi 《乳》	:	ǯəǯ 《乳》

右のように、主に第一音節と第二音節の頭音に重点をおいてややゆるやかにみても類似と差異を規則的に把えるにはやや困難がある。このような比較語彙のリストは別の観点から説明しうるものを加えてさらに増やすことも可能であろうが、類似語彙としてあげられる例を全体として規則的に把握するにはかなりの困難があるのが実状である。それればかりでなく、その中で基礎的な語彙と考えられるものが比較的少ないことも問題である。

そこで、基礎的な語彙で意味は一致するが形が違っている形式の中に、音韻対応の規則が見出されないかどうかを調べてみることも必要となる。この場合の語彙比較は、歴史的にまったく別の形式に由来する語彙を比較する危険が一そう大きいので、形式を構成する音素とその音韻環境との並行関係によりいっそう注意しなければならない。

このような比較の一例として、日本語 isi《石》と朝鮮語 dor(h)《石》との比較をとりあげ、問題点を考えてみることとする。両者の形はかなり異るが、共通の形から変化した結果とみなし得ないわけではない。さきに朝鮮語 dor(h) に対して日本語 tuti《土》を比較する見解があることを示した(例⑭)が、いずれの見解をとるかは対応規則の背後に仮定される音韻変化の規則全体の中で、どちらの見解が問題の比較語彙の形をよく説明しうるかを考えて判断する外にない。以下の例では、朝鮮語の形だけを本稿の転写表記に直して示すこととする(アクセントの表記は省略)。「意味」の項に附したローマ数字は、比較語彙の適合度に関する分類で、形と意味の両面でよく適合するものをⅠ、意味の一致度は高いが形の適合度が部分的であるものをⅡ、形はよく適合するが意味のズレのあるものをⅢ、というふうに分類されている。この分類も個々にみれば問題はあろうが、Ⅰ類の対応規則でⅡ類とⅢ類の比較語彙を説明しようとしている点は注目すべきである。

左の例で分るように、《石》を表わす単語を日本語 *y-i-s(i)、朝鮮語 d-o-r(h) と分析して比較してあるが、構成する音素相互の比較にとどまり、日：i- ‖ 朝：do- および日：-is ‖ 朝：-or の対応関係について十分考慮されてはいないようにみえる。音韻環境が重複することがないように配慮されてはいるが、音韻変化の条件に対する配慮が十分でなく、そのため対応関係が不自然にみえる。日本語 isi と朝鮮語 dor(h) が対応しないと断定する根拠はないが、対応すると仮定するに十分な根拠があるとも言えないであろう。

	意味	祖語形	日本語	朝鮮語
⑳ *d-	《石》(Ⅰ)	*dyoš(x)(yi)	: isi(*yisi)	: dor(h)
	《板》(Ⅲ)	*dyolya	: ita(*yita)《板》	: dori《横桁》
	《入る》(Ⅰ)	*dyar-	: ir-(*yir-)	: dɯr-
	《与える》(Ⅰ)	*dar-	: yar-《やる》	: dar-《くれる》
㉑ *-yo-	《石》(Ⅰ)	*dyoš(x)(yi)	: isi(*yisi)	: dor(h)
	《体》(Ⅰ)	*myom	: mi₂(〜mu)	: mom
	《放す》(Ⅱ)	*nyoǧ-	: nig-e-《逃げる》	: noh-《放す》
	《にらむ》(Ⅱ)	*nyory-	: nir-am-《にらむ》	: nori-《ねらう》
	《こげる》(Ⅲ)	*nyoř-	: niy-as-《煮やす》	: nud/r-《焦げる》 norɐ-《黄色だ》
㉒ *-š(-)	《石》(Ⅰ)	*dyoš(x)(yi)	: isi(*yisi)	: dor(h)
	《年》(Ⅲ)	*tošyi	: tosi	: dor(s)《一周年》
	《肉》(Ⅰ)	*syɔš(x)(yi)	: sisi	: sɐr(h)

このことは次頁の比較例でも同様である。基礎的な語彙でも、意味の一致を重視しすぎて機械的に比較したのでは、本来語源的に関係のない語彙まで比較してしまう危険があり、さらに進めば、音韻対応の規則が、規則的な音韻変化の結果を示すのではなく、単なる類似点と相違点の集約的表現にすぎなくなる危険すらある。祖語の形は、規則的音韻変化と環境との関係、音韻変化の前後関係などを考えあわせて再建すべきものであるが、祖語における音韻体系をどう仮定するかについても十分考慮する必要があろう。

語彙の比較にあたって、形を重視しがちであった従来の傾向に加えて、意味の一致する語彙の形の違いから音韻対応の規則を帰納しようとする傾向が生じてきたことは高く評価すべきことであ

	意味	祖語形	日本語	朝鮮語
㉓	《唾》(I)	*cxumba	: tuba	: čum
	《カビ》(I)	*kwɔmbyi	: kabi	: gom(paŋi)
㉔	《拾う》(I)	*cump-	: tum-	: ǯub/w-
	《踏む》(I)	*pɔlmp-	: pum-	: bɐrb-
	《沼》(I)	*nɔmpxa	: numa	: nɯp
	《爪》(I)	*txumpye	: tume	: tob
㉕	《乾燥する》(I)	*kambalǧ-	: kawak-	: gɐmɐr-《日照り(動詞)》
	《酒》(I)	*swalǧye	: sake	: suɯr
	《寒い》(I)	*tsxwampu-	: samu-	: čub/w-

る。二つの態度はどちらがより正しいということではなく、両者を並用して全体として調和のとれた対応規則を見出していくよう努力すべきであろう。

最近、日本語の方言の研究から、日本語の古い時代の《足》を意味する単語が、asiではなく*pagiであった可能性が指摘されている(服部四郎(一九六八・九五頁)など)が、このような研究は、早くから行なわれてきた朝鮮語bar《足》、ツングース語*palgan《足(の裏?)[10]》と沖縄県の一部方言のpagi《足》系語彙との比較に、さらに新しい事実を加えるものであるといえる。このように、諸方言の研究を通じて、日本語や朝鮮語の古い時代の語彙の意味や形を正確に把握することも比較研究の発達に大きく貢献するであろう。

文法的形態素の比較も行なわれており、代表的なものだけで一〇数項目をあげることができるようである。しかし、いずれも接合関係が極めて規則的でしかも短い形が多く、それらの表わす意味も抽象的なものが多い。これらの形態素の類似が語彙の比較から帰納される音韻対応の規則によって支えられなければならないことはもちろんであるが、今のところ数も多いとは言えず、親族関係の証拠としてはあまり重視するわけにはいかない。用言の活用体系の中に敬意表現の形態素が位置を占めているのは、日本語、朝鮮語に共通の著しい特徴である(日本語 -su, 朝鮮語 -si-)にもかかわらず、少なくとも日本語では奈良時代より前には敬意表現ではなかった可能性が指摘されていることはその一例として考えておく必要があろう。

3 音素体系をめぐる諸問題

系統論議と関連する最近の話題の一つとして、母音調和の問題をあげることができる。

アルタイ諸言語に母音調和の現象が見られることは広く知られており、一五世紀の朝鮮語でも発見され、八世紀の日本語にもその痕跡とみられる現象が見出されたことはさきにふれた通りである（一五四頁参照）。母音調和そのものは、単語あるいは単語連結内部における母音の同化現象の一種とみられるので、他の言語にも発達しえないわけではなく、ただちに共通祖語から受けついだ特徴とみるわけにはいかない。しかし、母音の体系に関係する特徴であり、これとの関連において、語構成の体系などを把握できれば、比較研究に対する指針を得る可能性のある、注目すべき現象である。

中期朝鮮語では、強母音 a ɐ o、弱母音 ə ɯ u、中立母音 i、に分かれ、例外がないわけではないが、語幹や語尾、附属語との結合においても強弱二系列の対立関係を保っており、母音の交替による意味の分化と考えられる語彙もみられる（次の例参照）。

{gasg-《削》
{gəsg-《折》

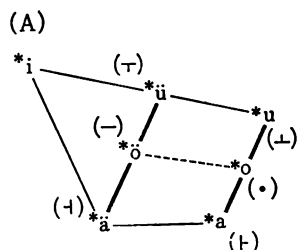
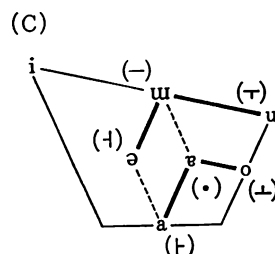
{nɐrg-《古（幣）》
{nɯrg-《老》

{dorɐ-《回》
{durɯ-《囲》

{—— bɐrg-《明》
{bɯr《火》 bɯrg-《赤》

{—— mɐrg-《澄》
{mɯr《水》 mɯrg-《軟弱》

この母音交替は、主として a と ə、ɐ と ɯ、o と u、のように母音調和の対立項をなす母音間の交替で、このような母音交替が語形成においてある役割を果したと考えられる例も指摘されている。

このような語形成の体系の研究は今後の比較研究の基礎として精密に行なう必要があろう。ただし、母音交替による対立語彙の中には、意味の類似から体系に組込まれたものもありうるので注意が必要である（例、現代語 anǯ-《坐る》/ənǯ-《載せる》、中期語 anǯ-/yənǯ-。なお、中期語には aǯ-/yəǯ- のような語

幹もあるので、この二語の歴史はかなり複雑であることが考えられる)。

母音体系については、大きな変動があったことが論ぜられている。漢字音、蒙古語からの借用語、『訓民正音』の「制字解」の解釈、外国語の転写資料など、主に外部的資料によるもので、変動の時期についても必ずしも見解が一致しているわけではない(泉井久之助・羅鐘浩(一九六八)、姜信沆(一九六四)、金完鎮(一九六三、一九六五)、金芳漢(一九六四)、河野六郎(一九六八・一八四—一八五、二〇五—二〇八頁)、服部四郎(一九七五)、兪昌均(一九六三、一九六五)、李基文(一九六四、一九七二・一二一—一二七頁、一九七四a・訳本・八五—八七、一一四—一一六、一五五—一五九頁))。この母音変動は母音o、uの音価をめぐる問題が主で、右図のように(B)の変化によって(A)から(C)へと母音調和の体系を保ちながら全体として変動があったと考えるもので、アルタイ諸言語との母音体系の関連をつけやすいことも指摘されているようである。

この母音変動が比較研究にとってどのような意味をもつか、なお今後の課題と言うべきであろう。

一方、日本語では、上代特殊仮名遣と音節結合の法則、母音交替の発見(馬淵和夫(一九七二・九一—九八頁)参照)以来、上代日本語の母音の数を八個とみる見方が広く行なわれてきたが、イ段ェ段の仮名の甲乙の区別を子音の対立とみて母音を六個とする考え方も発表されていた(服部四郎(一九五八b)、馬淵和夫(一九七二・一〇三—一〇八頁)参照)。これらの研究を通じて、イ段ェ段乙類の仮名の母音(i_2、e_2)をア段ウ段およびオ段甲乙類の仮名の母音(a、

u、o_1、o_2)と母音*iの結合から、ェ段甲類の仮名の母音(e_1)を母音*iと母音aの結合からそれぞれ生じたとみることができること、および母音aと母音o_2の交替による語形成とみうる語彙がみられることが明らかにされていた。

最近、上代日本語の母音交替について内的再建方法による吟味を加え、一方において母音交替の型を明確にし、他方においてォ段甲乙の仮名の対立を否定すると共に、アルタイ語的母音調和とは関係のない母音体系を仮定する考え方が発表されている(松本克己(一九七五))。この考え方は、母音交替の対立項としての母音*aと*o、および母音*u、*iの四母音体系から、母音i_2および母音eの発生によって上代日本語の母音体系ができ上ったとするものであって、最古の母音体系としては、*i、*a、*uによる三母音体系を推定する。上代日本語の母音交替が、母音調和とは関係のない独自の発達であることを主張するものとして注目される。

(A)	(B)
$CiCo_1$ / $CiCa$	$CiCa$ / $CiCo_2$
$CuCo_1$ / $CuCa$	——
——	$CaCa$ / Co_2Co_2
Co_1 / Ca	Ca / Co_2

この考え方に対しては、とくにォ段甲乙の母音(o_1、o_2)の音韻的区別をめぐって論議されている(大野晋(一九七六)、服部四郎(一九七六a、b、c)、松本克己(一九七六a、b))が、o_1とo_2の音韻的区別を認めた場合でも、提示された母音交替の型は興味ある問題を提出している。一音節語幹、二音節語幹を通じて特別な場合を除けば、aがo_1またはo_2の交替項である点に注目して交替の型を示すと、上のようになるが、極めて不均衡な体系であることが注意をひく。o_1は母音交替の型の中では語幹末のみに現われるようであるから、語幹末尾の母音と派生接辞との融合によっても生じ得ることを考慮しなければならないであろうが、また一方、交替項のないuが、o_2とは共存しない点を考えると、(B)に見られる並行関係に対して、(A)における二音節語幹の交替の型は必ずしも並行的ではなかったことも考えられる。いずれにせよ、これらの交替の型は個々の母音の変化のほかに二音節語幹での母音の相互影響による複雑な変化がおこった結果であることが考えられるわけである(服部四郎(一九七六a、b、c))。これらの変化を明らかにし、上代日本語の母音体系を先行する母音調和の体系からの変化として説明でき

ないかどうかを検討することは、極めて興味深い課題であるように考えられる。

これらの問題の研究を通じて、基本形としての語根の形と、母音交替による語形成の体系とを、ある程度体系的に把握することができれば、比較研究にとってより確実な基礎を提供することになることが期待される。

子音の体系については、上代日本語で語頭の清濁の対立がなく、母音間の濁音も比較的新しい発達と考えられている点が注意をひく。

朝鮮語でも、現代語の濃音(喉頭化音)が母音の弱化により生じた中期朝鮮語の子音群からの発達であることは確実であり(許雄(一九六五・三一五—三二六頁)、李基文(一九五五、一九七二・五六—六三頁、一九七四a・訳本・一四三—一四五頁、一五一—一五二頁))、有気音についてもその機能負担量の小ささや漢字音の研究から有気音と無気音との対立のなかった時期があったことが推定されている(河野六郎(一九六八・一一四—一一五頁)、李基文(一九七二・八九—九一頁、一九七四a・訳本・八〇—八二頁))。

朝鮮語の有気音の発生の時期やその当時の子音体系については、資料上の制約から確実なことは何も分らないといってよいが、日本語も朝鮮語も子音体系の簡単な時期を経てきたことが考えられるので、このような時期に借用された語彙では子音の類似を見出すことは容易であるにちがいない。母音の厳密な対応規則の研究の必要なことはこの点からも強調されなければならないし、単なる形の類似による比較だけでなく、形のかなり違う形式の間での対応規則の発見に期待がもたれる理由もこれに関係があると言ってよい。

結語

以上のべてきたことから、言語構造の著しい類似にもかかわらず、日本語と朝鮮語の比較研究には未解決の深刻な

問題が残されていることが明らかになったと思う。要約すれば、個々にみれば類似している形式が見出されるが、それらの異同を音韻対応の規則として組織的に把えることができず、したがってこれらが祖語に由来する対応する形式と認めるにはまだ問題があるということであり、両者の言語体系の根源的な部分を、かつて同一であった祖語からの発達として説明しうる状況ではないということである。アルタイ諸言語との比較研究によって間接的な系譜関係を検討することも重要ではあるが、この場合も、日本語とアルタイ諸言語、アルタイ諸言語と朝鮮語との、それぞれの間の親族関係が証明できるかどうか同様に厳密な方法で検討しなければならない。基本的には厳密な音韻対応規則の確立によって祖語に由来する形式を多く見出し、それによって諸言語の言語体系を祖語からの発達として説明できるように努力しなければならないわけである。いずれの場合でも、日本語や朝鮮語における古い語根の形をできるだけ明確に複元し、母音交替による語形成の体系をある程度把握することができれば、母音の対応規則を見出すのに有利となり、意味は一致するが形の異なる基礎的な語彙の中で対応語彙を見わける一助となることも考えられる。

音韻対応の規則を基礎とする比較方法は、印欧語族の研究から発達した方法であり、日本語や朝鮮語のような構造が単純で規則的な言語にそのまま適用するのは危険であるという意見もあるようであるが、今のところこれに代り得る方法は発見されてはいない。もちろん、この壁を破る努力もまた必要であろう。伝統的な比較方法は、規則的な音韻変化がある、という基本的な仮説の上に立っているわけであるが、新しい比較方法(?)はどのような作業仮説を基礎としうるであろうか。それが何であるにしろ、言語の変遷の中で、変化しながらも祖語における現象との関連において規則性を見出すことのできるような歴史的な現象を見出さなければならないであろう。

現在の比較方法には、さきにのべたような限界もあり、効果を期待できない場合があり得ることを考えなければならないが、言語の変遷における基本的な流れをまず把握するのでなければ、無原則な比較研究を行なうことになってしまうであろう。音韻対応の確立はこの意味でも厳密に行なわなければならないわけである。

系統論議を実りあるものとして発展させるためには、方法論上の厳密さを守りつつ研究を進めることが必要であると共に、研究成果の発表にあたって少なくとも次のような項目を区別し、将来にわたって冷静な議論を積み重ねて行けるよう配慮することも必要であろう。

（1） 発見された音韻対応の規則と、その規則を支える対応形式のリスト。

（2） 対応規則によって対応すると認めうる形式のリストと、意味のズレに対する解釈。

（3） 形の一部に規則に合わない部分を含む形式のリストと、形のズレに対する解釈。（この場合、例えば語形成の体系によるものと、その他の個別的な原因によるものとは区別しなければならない。）

（4） 借用関係による類似と認められる形式のリスト。

（1） 少し長いが、新村出の立場を示す部分を引用しておく。本稿では創元選書『言葉の歴史』（一九四二年）所収のものによる。

「第一に音韻転化の規則を厳守して言語を比較しなければ到底正確な結果は得られない。好事家や一部の学者が試みる比較の様に常に勝手気儘に音韻の通略延約を主として、言語の変化には何等の規則が無いと考へて居る様なことでは、幾許類似の語があつても、役には立たないのである。既に一応音韻転化の規律を履んで比較研究するに当つても、何等かの道筋から伝へ承けた外来語ではないかといふ掛念は棄てるわけには行かぬ。類似にも、同根から分出した結果の類似と、単に他から転来した場合の類似と、全く偶然の類似との三通りの場合が有り得る。偶然の一致も随分多いから注意を要するが、それよりも、同根から分岐した語であつて根本の一致であるか、単に一方から借用したものであるかを極めるのが極大切であるが、此種の注意は是迄殆ど欠けて居た様に思ふ。従来本邦の学者に怠たられてあつた文法上の比較の如きも、此より闡明して行く必要がある。」（「国語系統の問題」一二―一三頁、池田・大野編（一九七三）三三〇頁参照）

「一般の実辞虚辞助辞及び語尾の比較と語詞構成法及び配列法の原則の異同と音声上の特点の対照とのうちで、特別に数詞に重きを置くべき理由はない。即ち語根や語法や語序や語音を精密に比較した上で言語の系統は定むべきもので、これらの諸点の比較研究を綜合すれば、日韓両語の関係は今日の知識では意想外に疎遠であると結論するの外なく、現在の言語系統の立て

方を標準とすると、欧米の一般言語学者や欧洲の有識なウラルアルタイ系の言語学者の見解と同じく、予輩も日本語は一派特別の言語と考ふべきであると信ずる。従つて日本語を朝鮮語と厳重な意義で同系だと見做し、或はウラルアルタイ系に編入するは早計の毀りを免れないものと考へる。然しながら予輩は数詞以外にもつと沢山確かな一致点が見出されれば、数詞の相違も計算法の差別も過当に重きを置くことなく、同系論に与するものである。」(「国語及び朝鮮語の数詞に就いて」二〇—二一頁)

(2)　ラムステットの業績については、河野六郎(一九五三)、野村正良(一九五一)、李崇寧(一九五三)など参照。

(3)　『日本語の系統』(一九五九)から、もう少し引用しておく。

「要するに二つ或いはそれ以上の言語の最も確実な比較研究は、語彙の全般的比較から音韻の対応を明かにし、音韻法則を帰納し、それに基づいて文法的諸要素の対応を明かにするものでなければならない。形態素の対応を背後にもった、音韻の対応と形態の対応とが、言語間の親族関係の決定的証拠となるのである。」(一五頁、(一九五二))

「音韻法則を無視して言語の比較研究を行うことは、言語学以前に逆もどりすることを意味する。また、音韻法則が発見されない限り、二つ(以上)の言語の親族関係は証明されたとはいえない、といえるのである。

しかしながら、前にも述べたように、音韻法則という現象は、二つ(以上)の言語の全体系間に見出される類似の一部分に過ぎない。従って、音韻法則が発見されても、それらの言語の親族関係が証明されない場合もあり得ることを、注意しておきたい。」(一七〇頁、(一九五七))

「このように、二つ(以上)の言語が同系であることを証明するには、基礎的な単語のかなり多くのものが音韻法則によって対応することを明かにし、その上、音韻体系や文法体系が同一祖語のそれから変化して来たものだ、ということを明かにしなければならない。」(一七一頁、(一九五七))

なお、同書、四三—四六、六八—七七、九一—九四、一七八—一九〇、二三五—二三八頁など、また、(一九五五)四七—一〇一頁、参照。

(4)　言語年代学に関する文献は数多いが、比較的最近のものとして、服部四郎(一九七〇)、および次のものなど参照。

崎山理「文献追加」(トマ・パンシェン、崎山理訳「言語年代学」に附されたもの)、「訳者解説」(同上)(アンドレ・マルティネ編、泉井久之助監修『近代言語学大系 4 言語の構造』紀伊国屋書店、一九七二年、一三九—一四五頁)。安本美典・野崎昭弘

『言語の数理』筑摩書房、一九七六年、一四一—一八〇頁。

（5）　注(1)(3)参照。

（6）　印欧諸言語の数詞は、よく対応する語例としてあげられることが多いが、こまかく見れば必ずしも単純に解決されているわけではない。

ラテン語の数詞《五》は quīnque であるが、ギリシャ語 pente　サンスクリット語 pañca　印欧共通基語 *penk^{w}e に対して、そのままで対応する形ではない。ラテン語の期待される形は *pink^{w}e であって、語頭子音と第一母音の長さの点で、音韻対応の規則からはずれた形である。語頭子音は後続の子音 *k^w への同化作用と、数詞《四》quattuor との相互影響とにより、母音の長さは順序数詞 quīntus《第五》(←*k^{w}ink-tus ←*penk^w-tos　参考、ギリシャ語 pemp-tos) に対する類推として説明されている (K. Brugmann, Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen (1904), pp. 216, 219, 365, 371; L. Bloomfield, Language (1933), pp. 390–391, 422–423; 高津春繁『印欧語比較文法』岩波全書、一九五四年、二五八頁、など) ようであるが、ラテン語、ギリシャ語、サンスクリット語で、原則として、quo ‖ po ‖ ka,　que ‖ te ‖ ca,　qui ‖ ti ‖ ci のような対応は可能であるが、que (または qui) : pe : pa は対応しないという認識から、右のような解釈が可能となることに注意すべきであろう。

なお、ラテン語の形に由来するフランス語の形などをみると、語頭子音がここでは異化作用により唇音性を失ったことが分る。この異化作用による変化はかなり規則的におこっているようであるから、関連形式の多い語彙ではラテン語資料がなくとも *k^w を再建できるであろうが、関連形式のあまりない語彙では *k と *k^w のいずれを再建すべきか音韻対応の規則だけでは困難な

	《5》	《50》	《15》	《5番目》
ラテン語	quīnque	quīnquāgintā	quīndecim	quīntus
フランス語	cinq	cinquante	quinze	(cinquième)
スペイン語	cinco	cincuenta	quince	quinto
イタリア語	cinque	cinquanta	quindici	quinto
サルディニア語	kimbe	kimbánta	bíndighi	(su de kimbe)

ものもありそうに思える(M. Grammont, Traité de Phonétique(1950²), p. 288; H. Lausberg, Romanische Sprachwissenschaft, II. (Sammlung Göschen,1956), p. 24; *ibid.* III. (1962), pp. 163, 166, 172. など参照)。

(7) このことは、親族関係の証明ができないからと言って、親族関係にないと、考えてはならないということでもある(服部四郎(一九五五・八七頁)参照)。

(8) 印欧語比較文法で話題となったことのある「ブナの木論争」は印欧共通基語の故地をめぐっての論争であるが、同時に諸言語における特定の木の名称が、印欧共通基語に由来する単語であるか語源を異にする単語かをめぐる論争でもあった。この場合、母音階程の問題が含まれてくるのでやや複雑であるが、音韻対応の規則に合う形式でも祖語に由来しない形式であり得ることを示す例であるとも言えよう(H. Krahe, Sprache und Vorzeit (1954), 下宮忠雄訳『言語と先史時代』紀伊国屋書店、一九七〇年、三七—三八頁。風間喜代三「印欧諸語の関係とその故郷」(服部四郎編『言語の系統と歴史』岩波書店、一九七一年)八二—八三頁、等)。

(9) 中国の史書『周書』「高麗伝」に、「其冠曰骨蘇多以紫羅為之」とある(『北史』では「蘇骨」)という。文献的な問題もあるが、「骨蘇」は*golsoあるいはこれに近い形の高句麗語単語を表記した可能性があるわけで、朝鮮語、日本語共に借用語である可能性も考慮しておく必要がある。

なお、日本語では《笠》、《暈》共にkasaであるが、朝鮮語ではgad《帽》とmoro(現代語muri)《暈》との区別がある。

(10) なお、*pala-ganを再建する考え方もある。В. Д. Колесникова, "К характеристике названий частей тела человека в тунгусо-маньчжурских языкав" (В. И. Цинциус (ред.), Очерки сравнительной лексикологии алтайских языков (1972), pp. 257–336)・三二〇、三三四頁、など参照。

文献目録(一般の便宜のため、韓国人名などの漢字は日本漢字の読みにより、朝鮮語の書名、論文名は翻訳して掲げる。)

有坂秀世　(一九三二)　「古事記に於けるモの仮名の用法について」(『国語と国文学』九巻一一号、『国語音韻史の研究』(増補新版、三省堂、一九五七年)八三—一〇一頁、池田・大野編『論集　日本文化の起源　5　日本人種論・言語学』(別掲)四五五—四七〇頁所収)。

有坂秀世　(一九三四)　「古代日本語に於ける音節結合の法則」(『国語と国文学』一一巻一号、『国語音韻史の研究』(前掲)一

〇三—一一六頁所収)。
池上禎造（一九三二）「古事記に於ける仮名「毛・母」に就いて」(『国語国文』二巻一〇号)。
池田次郎・大野晋編（一九七三）『論集　日本文化の起源　5　日本人種論・言語学』平凡社。
泉井久之助（一九五二）「日本語の系統について　序説」(『国語学』九輯)。
泉井久之助（一九五三）「日本語と南島諸語——系譜関係か、寄与の関係か——」(『民族学研究』一七巻二号)。
泉井久之助（一九五五）「ママチチ・ママハハ——インドネシア語と日本語——」(『言語研究』二二・二三号)。
泉井久之助・羅鐘浩（一九六八）「中期朝鮮語の母音調和と母音交替」(『言語研究』五二号)。
江上波夫・大野晋編（一九七三）『古代日本語の謎』毎日新聞社。
江上波夫・松本清張編（一九七五a）『市民講座・日本古代文化入門　3　古代朝鮮の歴史と文化』読売新聞社。
江上波夫・松本清張編（一九七五b）『市民講座・日本古代文化入門　4　古代の東アジア世界』読売新聞社。
大　野　　晋（一九五二a）「日本語と朝鮮語との語彙の比較についての小見」(『国語と国文学』二九巻五号、池田・大野編『論集　日本文化の起源　5　日本人種論・言語学』(別掲)五三六—五五一頁所収)。
大　野　　晋（一九五二b）「日本語の系統論はどのやうに進められて来たか」(『国語学』一〇輯)。
大　野　　晋（一九五三）「日本語の動詞の活用形の起源について」(『国語と国文学』三〇巻六号)。
大　野　　晋（一九五四）「日本語の黎明——成立から貴族時代(前期)まで——」(『国文学　解釈と鑑賞』一九巻一〇号、土居忠生編『日本語の歴史』(至文堂、一九五七年)三—七一頁所収)。
大　野　　晋（一九五五）「日本語　Ⅷ系統」(市河三喜・服部四郎編『世界言語概説　下』研究社、二八七—三〇〇頁)。
大　野　　晋（一九五七）『日本語の起源』岩波新書。
大　野　　晋（一九六一）『日本語の年輪』新潮文庫。
大　野　　晋（一九七四）『日本語をさかのぼる』岩波新書。
大　野　晋編（一九七五）『日本古代語と朝鮮語』毎日新聞社。
大　野　　晋（一九七六）『日本語の探求—日本語対談集』集英社。
小　倉　進　平（一九一七）「日鮮単語比較資料」(『鶏林文壇』一巻二—五号)。

小倉進平（一九二一）『国語及朝鮮語のため』ウツボヤ書籍店（『小倉進平博士著作集㈣』（京都大学国文学会、一九七五年）一―三一三頁所収）。
小倉進平（一九二九）『郷歌及び吏読の研究』（『京城帝国大学法文学部紀要 第一』、前掲著作集㈠、一九七四年）。
小倉進平（一九三四）『朝鮮語と日本語』（『国語科学講座 Ⅳ 国語学』明治書院、前掲著作集㈣、三一五―三七七頁所収）。
小倉進平（一九三五）『朝鮮語の系統』（岩波講座『東洋思潮 七』、前掲著作集㈣、三七九―四三二頁所収）。
小倉進平（一九三四―三五）「朝鮮語に於ける外来語 上・中・下」（『季刊 外来語研究』二巻二―四・三巻一輯、前掲著作集㈣、四三三―四八八頁所収）。
小倉進平（一九三八）『朝鮮語に於ける謙譲法・尊敬法の助動詞』（『東洋文庫論叢 二六』、前掲著作集㈠、一九七五年、四四七―六八五頁所収）。
小倉進平（一九四〇ａ）『増訂朝鮮語学史』刀江書院。
小倉進平（一九四〇ｂ）「日本紀における外来語研究」（『国学院雑誌』四六巻二号、前掲著作集㈠、一二三―一三一頁所収）。
小倉進平（一九四三）『国語語源の問題』（『帝国学士院東亜諸民族調査室報告会記録 一三』帝国学士院）。
小倉進平（一九四四）『朝鮮語方言の研究 上・下』岩波書店。
長田夏樹（一九四三）「上代日本語とアルタイ語族」（『蒙古』一〇巻二号、『原始日本語研究――日本語系統論への試み――』（別掲）一―二六頁所収）。
長田夏樹（一九四九）「原始日本語研究導論――アルタイ比較言語学の前提として――」（『神戸外国語大学開学記念論文集』神戸外国語大学、『原始日本語研究』（別掲）二七―六二頁所収）。
長田夏樹（一九七二）『原始日本語研究――日本語系統論への試み――』（神戸学術叢書 2）、神戸学術出版。
長田夏樹（一九七四）「日本語北方起源説――アルタイ学の立場から――」（『言語』三巻一号、二一一〇頁）。
小沢重男（一九七六）「日本語の系統」（金田一春彦編『日本語の姿』大修館書店、二二七―二七一頁）。
金沢庄三郎（一九一〇）『日韓両国語同系論』三省堂書店。池田・大野編『論集 日本文化の起源 5 日本人種論・言語学』（別掲）三七七―四〇二頁所収。
亀井 孝（一九四九）「日本語系統論の問題」（『一橋論叢』二一巻五・六号、『亀井孝論文集 2 日本語系統論のみち』（別

掲)一—五四頁所収)。
亀井　孝（一九五四）「「ツル」と「イト」——日本語の系統の問題を考へる上の参考として——」(『国語学』一七輯、別掲論文集、六七—九〇頁所収)。
亀井　孝（一九七三）『亀井孝論文集 2 日本語系統論のみち』吉川弘文館。
亀井孝・大藤時彦・山田俊雄編（一九六三）『日本語の歴史 1 民族のことばの誕生』平凡社。
亀田次郎（一九三一）「明治時代日鮮両語比較論文表」(『青丘学叢』六号)。
許　雄（一九六五）『国語音韻学』(改訂版)正音社。
姜信沆（一九六四）「十五世紀国語の「o」に対して」(『陶南趙潤済博士回甲記念論文集』新雅社、八一—九九頁)。
金完鎮（一九六三）「国語母音体系の新考察」(『震檀学報』二四号、『国語音韻体系の研究』(一潮閣、一九七一年)二一—四四頁所収)。
金完鎮（一九六五）「原始国語母音論に関係する数三の課題」(『震檀学報』二八号、『国語音韻体系の研究』(前掲)六六—八八頁所収)。
金思燁（一九七四）『古代朝鮮語と日本語』講談社。
金芳漢（一九六四）「国語母音体系の変動に関する考察——中世国語母音体系の再構のための方法論的試図——」(『東亜文化』二輯)。
金芳漢（一九六六）「国語の系統研究における数種の問題点」(『震檀学報』二九・三〇号)。
金芳漢 (1969) Kim, Bang-han, "Relationship between Korean and the Altaic Languages——some remarks on the genealogical study of Korean" (Proceedings of the 3rd East Asian Altaistic Conference, pp. 144–153).
金芳漢（一九七六）「韓国語系統研究の問題点」(韓国言語学会『言語学』一号)。
金田一京助（一九三八）『国語史 系統篇』刀江書院(復刻版、一九六三年)。
江　実（一九七四）「日本語はどこから来たか——北と南から見た日本語——」(『日本文化の源流』新人物往来社、九一—四二頁)。
河野六郎（一九四一）「国語と朝鮮語の関係」(『緑旗』六巻一〇号)。

河野六郎（一九四九）「日本語と朝鮮語の二、三の類似」（八学会連合編『人文科学の諸問題（共同研究課題「稲」）』関書院）。
河野六郎（一九五三）「故ラムステッド教授著『朝鮮語文法』に就いて」（『東洋学報』三五巻三・四号）。
河野六郎（一九五七）「古事記に於ける漢字使用」（武田祐吉編『古事記大成 3 言語文字篇』平凡社、一五五―二〇五頁）。
河野六郎（一九六四―六五）「朝鮮漢字音の研究 Ⅰ―Ⅳ」（『朝鮮学報』三一―三三・三五輯）。
河野六郎（一九六八）『朝鮮漢字音の研究』天理時報社。
崔鶴根（一九六四）「国語数詞とアルタイ語族数詞とのある共通点に対して」（『陶南趙潤済博士回甲記念論文集』新雅社、五六九―五九九頁）。
崔鉉培（一九六一）『正音学（ハングル・カル）』（改訂版）、正音社。
柴田武（一九四九）「日本語の系統」（『日本文化の起源』野村書店）。
白鳥庫吉（一八九七）「『日本書紀』に見えたる韓語の解釈」（『史学雑誌』八編四・六・七号、『白鳥庫吉全集 三』（岩波書店、一九七〇年）一一五―一五四頁所収）。
白鳥庫吉（一八九八）「日本の古語と朝鮮語との比較」（『国学院雑誌』四巻四―一二号、前掲全集二巻、一九七〇年、一四九―二五一頁所収）。
白鳥庫吉（一九〇〇）「漢史に見えた朝鮮語」（『言語学雑誌』一巻三―五号、前掲全集三巻、一五五―一八七頁所収）。
白鳥庫吉（一九〇一）「再び朝鮮の古語に就て」（『言語学雑誌』二巻一号、前掲全集三巻、一八九―二〇三頁所収）。
白鳥庫吉（一九〇五）「国語と外国語との比較研究」（『史学雑誌』一六編二・三・五・六・八・九・一二号、前掲全集二巻、二五七―三四八頁所収）。
白鳥庫吉（一九〇六）「国語に於ける敬称語の原義に就いて」（『史学雑誌』一七編四・一一・一二号、前掲全集二巻、三七一―四一五頁所収）。
白鳥庫吉（一九〇九）「日・韓・アイヌ三国語の数詞に就いて」（『史学雑誌』二〇編一―三号、前掲全集二巻、四一七―四五七頁所収）。
白鳥庫吉（一九一四―一六）「朝鮮語とUral-Altai語との比較研究」（『東洋学報』四巻二・三・五巻一―三・六巻二・三号、前掲全集三巻、一―二八〇頁所収）。

新村　出　（一九一一）「国語系統の問題」（『太陽』一七巻一号、池田・大野編『論集　日本文化の起源　5　日本人種論・言語学』（別掲）三二五―三三三頁、『言葉の歴史』（創元社、一九四二年）三―一八頁、『新村出全集　一』（筑摩書房、一九七一年）一二四―一三二頁所収）。

新村　出　（一九一六）「国語及び朝鮮語の数詞に就いて」（『芸文』第七年二・四号、『言葉の歴史』（前掲）一九―四八頁、前掲全集一巻、九―二六頁所収）。

新村　出　（一九三五）『国語系統論』（『国語科学講座　Ⅳ国語学』明治書院、前掲全集三巻、一九七二年、三一五―三三七頁所収）。

宋　　敏　（一九六九）「韓日両国語比較研究史」（『聖心女子大学論文集』一輯）。

宋　　敏　（一九七三）「古代日本語に及ぼした韓語の影響」（韓国日本学会『日本学報』一輯）。

宋　　敏　（一九七四）「最近の日本語系統論に対して」（韓国日本学会『日本学報』二輯）。

野村正良　（一九五一）「故ラムステッド博士」（『言語研究』一九・二〇号）。

服部四郎　（一九三五）「朝鮮語動詞の使役形と受身・可能形」（『藤岡博士功績記念言語学論文集』岩波書店、四二三―四四六頁）。

服部四郎　（一九四一）「タタール語の述語人称語尾とアクセント」（『言語研究』七・八号、『日本語の系統』（別掲）三七六―三九五頁所収）。

服部四郎　（一九四七）「アルタイ語の反照動詞語幹形成接尾辞 -n-」（『民族学研究』一二巻二号、『日本語の系統』（別掲）三九六・三九七頁所収）。

服部四郎　（一九四八ａ）「アルタイ祖語の動詞語幹に接尾した *-ki(～*-gi)」（Tôyôgo Kenkyû, No. 4,『日本語の系統』（別掲）三九八―四〇〇頁所収）。

服部四郎　（一九四八ｂ）「日本語と琉球語・朝鮮語・アルタイ語との親族関係」（『民族学研究』一三巻二号、『日本語の系統』（別掲）二〇―五六頁所収）。

服部四郎　（一九五二）「日本語の系統――研究の方法――」（日本人類学会編『日本民族』岩波書店、『日本語の系統』（別掲）一―一九頁所収）。

服部四郎（一九五三）「書評 安田徳太郎著『人間の歴史』」(『思想』三四三号、『日本語の系統』(別掲)六四―七三頁所収)。
服部四郎（一九五四）「「言語年代学」即ち「語彙統計学」の方法について――日本祖語の年代――」(『言語研究』二六・二七号、『言語学の方法』(岩波書店、一九六〇年)五一五―五六六頁所収)。
服部四郎（一九五五）「総説」(市河三喜・服部四郎編『世界言語概説 下』研究社、一―一四七頁)。
服部四郎（一九五六）「日本語の系統――日本祖語の年代――」(『図説 日本文化史大系 1』小学館、『日本語の系統』(別掲)七八―九八頁所収)。
服部四郎（一九五七）「日本語の系統――音韻法則と語彙統計学的〝水深測量〟――」(武田祐吉編『古事記大成 3 言語文字篇』平凡社、『日本語の系統』(別掲)一五三―二三九頁所収)。
服部四郎（一九五八a）「アルタイ諸言語の構造」(『コトバの科学 1』中山書店、『日本語の系統』(別掲)二五五―二七四頁所収)。
服部四郎（一九五八b）「奄美群島の諸方言について――沖縄・先島諸方言との比較――」(『人類科学』IX、『日本語の系統』(別掲)二七五―二九四頁所収)。
服部四郎（一九五九）『日本語の系統』岩波書店。
服部四郎（一九六七）「日本語はどこから来たか」(『コトバの宇宙』二巻四号)。
服部四郎（一九六八）「八丈島方言について」(『コトバの宇宙』三巻一一号)。
服部四郎（一九七〇）「方言区画論・周圏論と基礎語彙統計学」(『言語の科学』二号)。
服部四郎編（一九七一）『言語の系統と歴史』岩波書店。
服部四郎（一九七二）「【附説】日本語の起源」(『東京新聞』一九七二年五月一六日夕刊、池田・大野編『論集 日本文化の起源 5 日本人種論・言語学』(別掲)五三〇―五三五頁所収)。
服部四郎（一九七五）「母音調和と中期朝鮮語の母音体系」(『言語の科学』六号)。
服部四郎（一九七六a）「琉球方言と本土方言」(伊波普猷生誕百年記念会編『沖縄学の黎明』沖縄文化協会、七―五五頁)。
服部四郎（一九七六b）「上代日本語の母音体系と母音調和」(『言語』五巻六号)。
服部四郎（一九七六c）「上代日本語の母音音素は六つであって、八つではない」(『言語』五巻一二号)。

藤岡勝二（一九〇八）「日本語の位置」（『国学院雑誌』一四巻八・一〇・一一号、池田・大野編『論集　日本文化の起源5　日本人種論・言語学』（別掲）三三四―三四九頁所収）。
前間恭作（一九二四）『龍歌古語箋』（『東洋文庫論叢　二』、『前間恭作著作集（下）』（京都大学国文学会、一九七四年）一―一六六頁所収）。
松本克己（一九七五）「古代日本語母音組織考――内的再建の試み――」（『金沢大学法文学部論集　文学編』二二巻）。
松本克己（一九七六ａ）「日本語の母音組織」（『言語』五巻六号）。
松本克己（一九七六ｂ）「万葉仮名のォ列甲乙について」（『言語』五巻一一号）。
馬渕和夫（一九六二）「古代朝鮮語と古代日本語の音韻組織の対比について」（『未定稿』一〇号）。
馬渕和夫（一九六六）「奈良時代の音韻」（『国文学　解釈と鑑賞』三一巻一二号）。
馬渕和夫（一九七一）「『三国史記』『三国遺事』にあらわれた古代朝鮮の用字法について」（東京教育大学言語学研究会『言語学論叢』一一号）。
馬渕和夫（一九七二）『上代のことば』至文堂。
馬渕和夫（一九七三）「『三国史記』『三国遺事』の地名について」（『人間の研究　原富男博士古稀記念論文集』五五一―五七四頁）。
宮崎道三郎（一九〇四）「日本法制史の研究上に於ける朝鮮語の価値」（『史学雑誌』一五編七号）。
宮崎道三郎（一九〇六―一九〇七）「日韓両国語の比較研究」（『史学雑誌』一七編七・一〇・一二号、一八編四・八・一〇・一一号）。
村山七郎（一九五〇）「古代日本語における代名詞」（『言語研究』一五号）。
村山七郎（一九五四ａ）「古代日本語の二、三の音韻現象について」（『国語学』一七輯）。
村山七郎（一九五四ｂ）「日本語とアルタイ語の音韻対応」（大会発表報告要旨）（『言語研究』二六・二七号）。
村山七郎（一九五四ｃ）「連濁について」（『言語研究』二六・二七号）。
村山七郎（一九五四ｄ）「古代日本語語彙二、三の比較的考察」（『民族学研究』一八巻四号）。
村山七郎（一九五六）「万葉語の語源――日本語の系統論に関連して――」（『国文学　解釈と鑑賞』二一巻一〇号）。

村山七郎 (1957) "Vergleichende Betrachtung der Kasus-Suffixe im Altjapanischen" (Studia Altaica, Festschrift für N. Poppe, pp. 126–131).
村山七郎 (一九六二b) 「高句麗語資料および若干の日本語・高句麗語音韻対応」(大会発表報告要旨) (『言語研究』四二号)。
村山七郎 (一九六二a) 「日本語および高句麗語の数詞——日本語系統論の問題に寄せて——」(『国語学』四八集)。
村山七郎 (一九六一) 「日本語の比較研究から」(『国語学』四七集)。
村山七郎 (一九六二c) 「日本語のツングース語的構成要素」(『民族学研究』二六巻三号)。
村山七郎 (一九六三) 「高句麗語と朝鮮語との関係に関する考察」(『朝鮮学報』二六輯)。
村山七郎 (一九六六) 「言語学的に見た日本文化の起源」(『民族学研究』三〇巻四号)。
村山七郎 (一九六七) 「古代の日本語と朝鮮語」(『コトバの宇宙』二巻四号)。
村山七郎 (一九七一) 「日本語の起源」(『民族学研究』三五巻四号)。
村山七郎 (一九七四a) 「南島語起源説について」(『言語』三巻一号)。
村山七郎 (一九七四b) 『日本語の語源』弘文堂。
村山七郎 (一九七四c) 『日本語の研究方法』弘文堂。
村山七郎 (一九七五a) 『国語学の限界』弘文堂。
村山七郎 (一九七五b) 「日本語の系統」(岩淵悦太郎・飛田良文編『新・日本語講座 4 日本語の歴史』汐文社、二五—四四頁)。
村山七郎・大林太良 (一九七三) 『日本語の起源』弘文堂。
安田徳太郎 (一九五二) 『人間の歴史 II 日本人の起源』光文社。
安田徳太郎 (一九五五) 『万葉集の謎』光文社。
兪昌均 (一九六〇a) 「古代地名表記の声母体系——主に『三国史記』の「地理志」を中心として——」(『青丘大学論文集』三集)。
兪昌均 (一九六〇b) 「古代地名表記の母音体系——『三国史記』「地理志」を中心として——」(『語文学』6)。

兪昌均（一九六一）「古代地名表記用字の韻尾に対して——主に『三国史記』「地理志」の地名例を中心として——」（『青丘大学論文集』四集）。
兪昌均（一九六三）「訓民正音中声体系構成の根拠」（『語文学』一〇号、『東國正韻研究（研究篇）』（螢雪出版社、一九六六年）四六七—四九三頁所収）。
兪昌均（一九六五）「中声字「o／u」の性格と開合に関する是非——姜教授の「o」に対する見解を中心として——」（大邱大学『東洋文化』四号、『東國正韻研究（研究篇）』（前掲）五三四—五七二頁所収）。
李基文（一九五五）「語頭子音群の生成と発達について」（『震檀学報』一七号）。
李基文（一九五八a）「国語系統論の為めの三章」（『高鳳』二巻二号）。
李基文（1958b）Lee, Ki-Moon, "A Comparative Study of Manchu and Korean" (Ural-Altaische Jahrbücher, Bd. 30. pp. 104–120).
李基文（1959）Lee, Ki-Moon, "On the Breaking of *i in Korean"（『亜細亜研究』二巻二号）。
李基文（一九六一）『国語史概説』民衆書館。
李基文（1963）Lee, Ki-Moon, "A Genetic View on Japanese"（『朝鮮学報』二七輯）。
李基文（1964）Lee, Ki-Moon, "Mongolian Loan-Words in Middle Korean" (Ural-Altaische Jahrbücher, Bd. 35. pp. 188–197).
李基文（一九六七）「韓国語形成史」（『韓国文化史大系Ⅴ言語・文学史』高麗大学校民族文化研究所、二〇—一一二頁）。
李基文（一九六八）「高句麗の言語とその特徴」（『白山学報』四号、中村完訳、『韓』一〇号（一九七二年）、池田・大野編『論集　日本文化の起源　5　日本人種論・言語学』（別掲）五九四—六二七頁所収）。
李基文（一九七二）『国語音韻史の研究』韓国文化研究所。
李基文（一九七三）「韓国語と日本語の語彙比較に対する再検討」（『語学研究』九巻二号）。
李基文（一九七四a）『国語史概説』（改訂三版）、民衆書館（藤本幸夫訳、村山七郎監修『韓国語の歴史』大修館書店、一九七五年）。
李基文（一九七四b）「日本語系統論によせて」（『言語』三巻一号）。

李 基 文 (1975) Lee, Ki-Moon, "Remarks on the Comparative Study of Korean and Altaic" (Proceedings of the International Symposium Commemorating the 30th Anniversary of Korean Liberation, National Academy of Sciences, Republic of Korea, pp. 3–35).
李 崇 寧 （一九四七） 「母音調和研究」（『震檀学報』一六号、『音韻論研究』（民衆書館、一九五五年）一―一六四頁所収）。
李 崇 寧 （一九五三） 「ラムステット博士とその業績」（『思想界』一九五三年九月号、『音韻論研究』（前掲）五一九―五七二頁所収）。
李 崇 寧 （一九五四a） 「唇音攷――特に唇軽音「β」を中心として――」（『ソウル大学校論文集 一』、『音韻論研究』（前掲）一六五―二五二頁所収）。
李 崇 寧 （一九五四b） 「所有格と処格の比較試図――吏読の研究から――」（『音韻論研究』（前掲）二五三―三一九頁）。
李 崇 寧 （一九五四c） 『国語学概説（上）』進文社。
李 崇 寧 （一九五六a） 「韓・日両語の語彙比較攷――糞尿語を中心として――」（『学術院会報 一』、『国語学研究』（螢雪出版社、一九七二年）五五―六四頁所収）。
李 崇 寧 （一九五六b） 「「伊伐飡・舒發翰」音韻考――語頭母音形と語頭子音形の対立を中心として――」（『斗渓李丙燾博士華甲記念論叢』一七七―二〇三頁、『国語学研究』（前掲）六五―七七頁所収）。
『言語』三巻一・二号「特集・日本語の起源をもとめて(一)、(二)」一九七四年。

Aston, W. G. (1879), "A Comparative Study of the Japanese and Korean Languages" (The Journal of Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, New Ser. Vol. XI. pp. 317–364). (池田・大野編『論集 日本文化の起源 5 日本人種論・言語学』（別掲）三五三―三七六頁（大野晋抄訳）所収。)
Benzing, J. (1953), Einführung in das Studium der altaischen Philologie und der Turkologie (otto Harrassowitz).
Benzing, J. (1955), Die tungusischen Sprachen, Versuch einer vergleichenden Grammatik (Akademie der Wissenschaften und der Literatur, Abhandlungen der Geistes- und Socialwissenschaftlichen Klasse, Jahrgang 1955, Nr. 11).
Haguenauer, Ch. (1956), Origines de la civilization japonaise, introduction à l'étude de la préhistoire du Japon (Imprimerie

Nationale, Paris).

Lewin, Bruno (1973), "Japanese and the Language of Koguryŏ" (Papers of the C. I. C. Far Eastern Language Institute 4. pp. 19–33).

Lewin, Bruno (1976 (?)), "Japanese and Korean: The Problems and History of a Linguistic Comparison" (Journal of Japanese Studies, vol. ?. pp. 389–412).

Martin, Samuel E. (1966), "Lexical Evidence Relating Korean to Japanese" (Language, vol. 42. pp. 185–251).

Martin, Samuel E. (1972), A Voiced Velar Stop for Proto-Korean-Japanese (Mimeographed).

Miller, R. A. (1967 a), The Japanese Language (The History and Structure of Languages, The University of Chicago Press). (小黒昌一訳『日本語——歴史と構造』三省堂、一九七二年。)

Miller, R. A. (1967 b), "Old Japanese Phonology and the Korean-Japanese Relationship" (Language, Vol. 43. pp. 278–302).

Miller, R. A. (1968), "The Japanese Reflexes of Proto-Altaic *đ-, *ǯ- and *č-" (Journal of American Oriental Society, vol. 88. pp. 753–765).

Miller, R. A. (1969), "The Altaic Numerals and Japanese" (Journal-Newsletter of Association of Teachers of Japanese, vol. 6: 2. pp. 14–29).

Miller, R. A. (1970), "The Old Japanese Reflexes of Proto-Altaic $*l_2$" (Ural-Altaische Jahrbücher, Bd. 42. pp. 127–147).

Miller, R. A. (1971), Japanese and the Other Altaic Languages (The University of Chicago Press).

Poppe, N. (1950), (Review) "G. J. Ramstedt, 'Studies in Korean Etymology'" (Harvard Journal of Asiatic Studies, vol. 13. pp. 568–581).

Poppe, N. (1954), "Remarks on Some Roots and Stems in Mongolian" (Silver Jubilee Volume of the Zimbun Kagaku Kenkyusho, Kyoto University).

Poppe, N. (1955), Introduction to Mongolian Comparative Studies (Mémoires de la Société Finno-Ougrienne, 110).

Poppe, N. (1960), Vergleichende Grammatik der altaischen Sprachen, Teil 1. Vergleichende Lautlehre (Porta Linguarum

Orientalium, Otto Harrassowitz).
Poppe, N.(1965), Introduction to Altaic Linguistics (Ural-Altaische Bibliothek, Otto Harrassowitz).
Rahder, J.(1951–54), "Comparative Treatment of the Japanese Language"(Monumenta Nipponica Vol. VII–X).
Ramstedt, G. J.(1924), "A Comparison of the Altaic Languages with Japanese"(Transactions of the Asiatic Society of Japan, Ser. II., vol. 1, pp. 41–54).(池田・大野編『論集 日本文化の起源 5 日本人種論・言語学』(別掲)四三七―四五四頁(大野晋訳)所収。)
Ramstedt, G. J.(1928), "Remarks on Korean Language"(Mémoires de la Société Finno-Ougrienne, 58, pp. 441–453).
Ramstedt, G. J.(1939), A Korean Grammar (Mémoires de la Société Finno-Ougrienne, 82).
Ramstedt, G. J.(1949), Studies in Korean Etymology (Mémoires de la Société Finno-Ougrienne, 95).
Ramstedt, G. J.(1952, 57, 66), Einführung in die altaischen Sprachwissenschaft, I, II, III. (Mémoires de la Société Finno-Ougrienne, 104).
Räsänen, M.(1949), Materialien zur Lautgeschichte der türkischen Sprachen (Studia Orientalia XV, Helsinki).
Räsänen, M.(1957), Materialien zur Morphologie der türkischen Sprachen (Studia Orientalia XXI, Helsinki).
Street, J. and Miller, R. A.(1975), Altaic Elements in Old Japanese, Part I. (Draft version).

Дмитриев, Н. К., и Баскаков, Н. А. (ред.) (1955–62), Исследования по сравнительной грамматике тюркских языков, I–IV. (Москва).
Поливанов, Е. Д.(1914), "Сравнительно-фонетический очерк японского и рюкюского языков".(村山七郎訳『日本語研究』弘文堂、一九七六年、一二六―一四七頁。)
Поливанов, Е. Д.(1918), "Одна из японо-малайских параллелей" (『日本語研究』(前掲)一五三―一五五頁。)
Поливанов, Е. Д.(1924), "К работе о музыкальной акцентуации в японском языке".(『日本語研究』(前掲)七四―七八頁。)
Поливанов, Е. Д.(1927), "К вопросу о родственных отношениях корейского и «алтайских» языков".(『日本語研究』(前掲)一七四―一八四頁。)

Поливанов, Е. Д. (1960), "Предварительное сообщение этимологическом словаре японского языка" (Проблемы Востоковедения, 1960, Ном. 3, стр. 174–184). (『日本語研究』(前掲) 一五六一一七三頁。)

Санжеев, Г. Д. (1953), Сравнительная грамматика монгольских языков, I. (Москва).

Цинциус, В. И. (1949), Сравнительная фонетика тунгусо-маньчжурских языков (Ленинград).

Цинциус, В. И. (ред.) (1972), Очерки сравнительной лексикологии алтайских языков (Ленинград).

Цинциус, В. И. (ред.) (1975), Сравнительный словарь тунгусо-маньчжурских языков, I. (Ленинград).

Щербак, А. М. (1970), Сравнительная фонетика тюркских языков (Ленинград).

5　アイヌ語と日本語

田村すゞ子

一　アイヌ語概観

アイヌ語は日本国内の一つの言語として日本語と並ぶものである。日本語の一方言かと誤解している向きもあるが、そうではなく、まったく独立の一つの言語である。

古くは東北地方から北海道、カラフト、千島にわたって話されていたことがわかっている。しかし話し手は年々減少し、今では北海道内にほんの数名の古老が子供のころ聞き覚えたアイヌ語を記憶しているにすぎない。

主として北海道南部のアイヌ語を中心に日本語東京方言（以下単に「日本語」という）と対比させながら概観してみよう。

1　音韻

(1)　音素

	アイヌ語	日本語
母音	a i u e o	a i u e o
子音	k t p c s r n m y w h '	k g t d p b c s z r n m ŋ y w h '

右に見られるように、母音は日本語と同じ五個である。音価も日本語の母音と似ている。ただアイヌ語のuは東京方言のウのように唇のゆるんだ音ではなく、ヨーロッパ語のようにまるめのある点が多少違うくらいである。

子音に関してみると、アイヌ語は子音の少ない言語だと言える。とくに注目すべきは、アイヌ語にはb・d・g・zという有声音(日本語の濁音に当たる)がない、という点である。これはしかし、バ・ダ・……のような発音が全然聞かれないというわけではなく、パとバ、キとギなどが音韻的区別がないということである。

破裂音はp・t・kの三つだけ。語頭では日本語のパ・タ・カの子音と同じだが、母音間では日本語の清音と濁音の中間のような発音、そして鼻音のあとではバ・ダ・ガの子音に近い。たとえばkonpu(昆布)はコンブのような発音である。

破擦音はcだけ。大体チの子音と思えばよく、ca(柴木)はツァとチャの間の音、cup(太陽、月)はツㇷ゚よりはチュㇷ゚に近い。cip(舟)はチㇷ゚。

摩擦音はsだけ。sは大体シの子音だが、口蓋化の程度は人によりだいぶちがう。sa(姉)はサ〜シャ、su(鍋)はス〜シュ、si(糞)はシ。

流音は日本語と同様r一つだけで、日本語のラ行子音と同じだが、日本人にもラ行をlで発音する人もいるように、アイヌ語でも以前北見の美幌でこれをlと発音するおじいさんがいた。

鼻音はm・nの二つだけで日本語のマ行・ナ行の子音と同じ。

w・yも日本語と似ているが、wは母音uと平行して唇のまるめがある。

hは日本語とほぼ同じだが、母音間でしばしば弱まって有声化する。'は基本的には喉頭破裂音、つまり母音の前にせきばらいのような音を伴うもので、ドイツ語のそれに似ている。te'eta(昔)は[teʔeta]、つまりテータではなく、テエタとエをはっきり発音する。これも母音間で、とくに低く発音される音節では、しばしば弱まる。

北海道アイヌ語	カラフトアイヌ語	
kap	kah	《皮》
set	seh	《寝台》
yuk	yuh	《鹿》
'utar	'utah, 'utara	《人々》
sik	sis	《目》

北海道アイヌ語	CV		CVC
カラフトアイヌ語	CV	CVV	CVC

C：子音
V：母音

(2) 音節

上右の表でわかるように、アイヌ語は音節構造が極度に簡単な言語である。日本語も子音群がない、閉音節がほとんどないなど、簡単な音節構造を持っているけれど、アイヌ語はさらに子音・半母音の連続もなく(つまり拗音がない)また北海道アイヌ語には同一母音の連続もない(長い音節がない)。しかし一方閉音節は日本語とちがって一般的で、音節末にかなりの子音が立つことができる。ただしどの音でもというわけではない。北海道アイヌ語ではp・t・k・s・r・m・n・w・yの九つの子音だけが音節末に立ち得る。音節末のp・t・kは破裂がなく、なれない人は聞き落としやすい。sはシの子音、rははじき音で、kar《作る》はカㇻ、kor《持つ》はコㇿと聞こえる。しかしrの後に母音があるかないかははっきり区別される。たとえば'etor《鼻汁》エトㇿと'etoro《いびきをかく》エトロ。nはkの前では[ŋ]、たとえばhanku《へそ》はハンク。w・yは二重母音の副母音。たとえばhaw《声》はハゥ、puy《孔》はプィ。c・h・'は音声末に立ち得ない。カラフトアイヌ語では同一母音の連続がある(カー、フーのような長い音節がある)かわり、音節末に立ち得る子音の制限が北海道アイヌ語より強い。すなわち北海道アイヌ語で音節末に立ち得る九つの子音のうちp・t・k・rはカラフトでは立ち得ず、そのかわりhが立ち得る。つまりカラフトアイヌ語で音節末に立ち得る子音はs・m・n・w・y・hの六子音。これは音節末のp・t・kがカラフトアイヌ語ではhに、rがhまたはrプラス母音に変化したためである。このhはiの後でさらにsに変化している(上左の表参照)。カラフトの音節末のhは息のようなやわらかい音である。kah《皮》はカㇵ。

(3) アクセント

アイヌ語	日本語
北海道南部　高低アクセント	高低アクセント
昇りアクセント核が弁別的	下りアクセント核が弁別的
北海道東部 カラフト　} アクセントの対立がない	

北海道の多くのアイヌ語でアクセントの対立があるが、日本語で高から低への下降が弁別的であるのに対し、アイヌ語では低から高への上昇が弁別的である。この上昇点すなわちアクセント核より前の音節はすべて低く、アクセント核から後ろの音節は一定の規則性をもってだんだんに下がっていく。北海道の東部にはアクセントの対立のない方言もある。カラフトアイヌ語にはアクセントの対立がないかわり、母音の長短の区別がある。カラフトアイヌ語の長い音節は多くの場合北海道アイヌ語のアクセント核のある音節に対応する。

北海道	カラフト	
mína	miina	《笑う》
húre	huure	《赤い》

これはアイヌ祖語にあった母音の長短の対立をカラフトアイヌ語だけが保存しており、北海道アイヌ語ではこれが多くの場合アクセント核の対立に変化したものと考えられる。

(4) 音素配列の制限と音素交替

アイヌ語でも日本語と同様、特定の音素どうしの結合配列の制限がある。

①　子音－母音の結合の制限と音素交替

アイヌ語で許されない（またはふつう現れない）結合	日本語で許されない（またはふつう現れない）結合
ti	ti　tu
	ca　ce　co
wi　wu	wi　wu　we　wo
yi	yi　ye

すなわちアイヌ語では tu・ca・ce・co・we・wo・ye は可能である。また wu・yi も形態素と形態素の接点では起こる。ti・wi が起こらないことは日本語と同じで、中でも ti は音素交替規制で ci になるところも日本語と同じである。

mat《女》
'ikor《宝物》 ＞→mat-ikor → macikor《女の宝物》

②　子音－子音の連続の制限と音素交替

アイヌ語では子音と子音の連続にも制限があり、そのため音節末の子音と次の音節の初頭の子音との接点でもしばしば交替がおこる。

許されない連続・交替の例

—rt—　kor tenonkoy → /kottenonkoy/
　　　彼が持つ　手拭い

—rc—　kor cise → /kotcise/
　　　彼が持つ　家　＝　彼の家

—rr—　kor rusuy → /konrusuy/
　　　彼が持ち　たい

—rn—　kor nankor → /konnankor/
　　　彼が持つ　だろう

——ns—— pon seta → poyseta/
　　　　小さい 犬

——ny—— pon yuk → /poyyuk/
　　　　小さい 鹿

p・mの前では鼻音は[m]しか起こらない。

——mp—— 'isam pe ['isampe] 《ないもの》

——np—— 'an pe ['ampe] 《あるもの》

この[m]は音素的にはm・nの中和した一つの音素であるが、形態音素表記でそれぞれm・nと書く。mともnとも決められないものはn̄と表記する(例 kon̄pu)。カラフトのある方言ではp・t・k・cの前に立つ鼻音はこれと同位置のものに限られている。

北海道南部の一部ではwが鼻音のあとでmになる。

——mw—— 'isam wa ['isamma] 《なくて》

——nw—— 'an wa ['amma] 《あって》

北海道東部のある方言では、rがsの前でsになるのをはじめ、いろいろな音の後続子音への同化が多くみられる。

2 語順

語順の基本は次の二点である。

① 主語は述語の前、目的語・補語はそれが結びつく動詞句の前に置かれる。

hapo 'ek.
母(が) 来た

huci kunukar. 《(私は)おばあさんを見た》
おばあさん(を) 私・見た

'okkayo 'ene. 《(お前は)男だ》
男 お前・だ

②　修飾語は被修飾語の前に置かれる。

poro cise
大きい 家

tunas hopuni.
早く 起きた

前置詞はなく、後置詞、後置の助詞を用いる。

'apa kari 'ahun.
戸口 から 入る

tan kotan ta 'an.
この 村 に ある

このように語順は日本語とほとんど変わりなくアイヌ語の一語一語を日本語に置き換えてそのままの順でつないでいくと、日本文になるといってもよいほどである。ただ一点現代日本語と逆なのは、否定辞と禁止辞が動詞句に先行することである。

somo 'arpa　《行かない》
ない 行く

'iteki 'e!　《食べるな》
な 食べろ

3　語形成

日本語にも合成語や派生語は多いが、アイヌ語では合成や派生はもっと盛んで、しかもかなり自由に臨時に合成や派生が行われる。そのうえ後述のように主語・目的語の人称を表す指標(人称接辞)が動詞などに接合するので、かなり長い単語ができることもあり、アイヌ語の一つの単語(とくに動詞の場合)を日本語や欧米の言語に訳すとかなり長い文になるようなことも、稀ではない。この特徴からアイヌ語は複総合的言語(poly-synthetic language)だと言われることがある。

sak-'ay-'e-'ekimne-'an　《夏の狩猟すなわち弓矢を持ってする狩猟をしに山へ行く》
夏・矢・で・山へ行く・我々が

k——e——yay—somo—mokor—e 《眠らずにする》

私が・(そのこと)で・自らを・ない・眠ら・せ

さらに 'ekimne は 'e《その頭が》kim《山》ne《である》という構成、すなわち《頭を山の方に向ける、山に向かっていく》、mokor は mo《静かさ》kor《を持つ》に語源分析できる。

次に動詞の形成を概観しよう。

動詞は単一の語根だけのものもあるが(例 kik《打つ》)大多数はいくつかの部分から成り、それらが合成・重複・派生などによって形成されたものである。

(1) 合　成

(a) 完全動詞の形成

名詞(主語)+自動詞(述語)

mean《寒い》　me《寒さ》 'an《ある》

(b) 合成自動詞の形成

自動詞+助動詞

'ipekasu《食べすぎる》　'ipe《ものを食べる》 kasu《すぎる》

修飾語+自動詞

yayka'okuyma《寝小便する》　yayka《自分の上》(yay《自分》ka《の上》) 'okuyma《小便する》

否定辞+自動詞

somoytak《唖者である》　somo《しない》 'itak《しゃべる》

名詞所属形(主語)+自動詞(述語)

keweri《背が高い》　kewe《（彼）の体》　ri《高い》

名詞（目的語）＋他動詞

'ape'ari《火をたく》　'ape《火》　'ari《をたく》

擬音／擬態＋-se/-ke

hose《答える》　ho《ホー（返事の声）》　se《と言う》

名詞（補語）＋ne

sapane《人の上に立つ、首長である》　sapa《頭》　ne《である》

名詞＋他動詞

reraparu《風でとばされる》　rera《風》　paru《あおぐ》

(c) 合成他動詞の形成

修飾語＋他動詞

wenresu《孤児をひきとって育てる》　wen《悪い》　resu《育てる》

自動詞＋kar

'ahupkar《もらう》　'ahup《入る》　kar《する、作る》

名詞（目的語）＋複他動詞

he'usi《かぶる》　he《頭》　'usi《…を…につける》

(2) 重　複

「ポカポカなぐる」「ソヨソヨ風が吹く」といったオノマトペの重複は日本語によく見られる。また「汗をフキフ

キやってきた」「鉛筆をナメナメ書く」のような言い方もある。

アイヌ語でもいろいろなときに重複が起こるが、動詞の語形成法の一つとしても、重複が重要な役割を果たしている。

(a)　語幹・語根の重複――反復を表す。

suyesuye《ぶらぶらゆらす、ふる》　suye《ゆらす、ふる》

karkarse《ころころころがる》　kar は擬態の語根　se《という》

(b)　CVC の頭子音を除いた VC の部分の重複――小きざみな、あるいは少しずつの動作、状態の継続的反復

cirir《したたる》　cir—ir

(c)　開音節で終わる動詞の最後の音節の重複――動作の行われた結果の状態がそのまま持続することを大げさに表す。

hepokiki《頭を下げている》　he《頭》　poki《下げる》

cf. hepokipoki, hepokpoki《頭を上げ下げする》

(3)　接辞を伴った動詞の構造

語根など＋形成接尾辞 → 自動詞・他動詞

kom-ke《折れ曲がる》　kom は語根《折れ曲がった状態》

kom-o《折り曲げる》(単)

語根など＋複数接尾辞 → 複数形

kom-pa《折り曲げる》(複)

格接頭辞＋自動詞 → 他動詞

'emina《…のことを笑う》　'e-《について》 mina《笑う》

名詞的接頭辞＋他動詞 → 自動詞

'u-kasay《助け合う》　'u-《互い》 kasuy《助ける》

自動詞 ｝＋使役語尾 → 使役
他動詞 ｝
コピュラ ｝＋不定使役語尾 → 不定使役

nure《…を…に聞かせる》　nu《を聞く》 -re(使役語尾)

nuyar《…を人に聞かせる》　nu《を聞く》 -yar(不定使役語尾)

これらの接辞の接合や合成、重複が順次あるいは同時に起こって、より大きい動詞が造られることも少なくない。

'uyayukte(自)《恋愛結婚する》　'u-《互いに》 yay-《自分》 'uk(他)《を取る》 -te《させる(使役語尾)》

'ewkoramkor(他)《…について相談する》　'e-《について》 u-《互い》 ko-《に対して》 ram《心》 kor(他)《を持つ》

tapewkocupupu(自)《首をひっこめて肩をすぼめている》　tap は語根《肩》 e-《で》 u-《互い》 ko-《に対して》 cup は擬態の語根 cup-up(重複) -u(他動詞形成接尾辞)

4　構　文　法

完結文には日本語と同様次の三種類がある。

① 動詞句を述語として持つ文

'acapo 'ek wa.
おじ(が) 来た よ

② 名詞句、副詞句に特定の助詞がついた文

poro cise 'un.
大きい 家 に

③ 間投詞など独立語だけの文

hay!!
ああ痛いなあ

文のもっとも基本的な骨組みは動詞句を述語としてもつ節(主語—動詞句、主語—目的語—動詞句、主語—補語—動詞句、あるいはこれらに修飾語がついたものなど)である。これが様々の付加や変形を受けて文や文の一部になり、より大きい文を構成する。たとえば、

(a) 必要に応じて主語や目的語などを落としたり、助詞その他を伴ったりして、最後にイントネーションをつけて完結文となる。

'acapo 'ek → 'acapo 'ek wa.
おじさん(が) 来た → おじさん(が) 来た よ

'acapo 'ek ya?
おじさん(が) 来た かい

'ek!
来い

(b) この骨組みはまた「も」「は」などに相当する副助詞を伴ってから、さらにその後にki《する》'e'askay《できる》などの他動詞を伴って一つのより大きい節を作る。

'acapo 'ek ka ki.
おじさん(が) 来 も した

(c) 接続詞、接続助詞によって他の文と結合される。

'acapo 'ek hine te ta rewsi wa 'an.
おじさん(が) 来 て ここ に 泊まっ て いる

(d) 「こと」「の」などに相当する名詞化辞がついて全体が一つの名詞句となる。

'acapo 'ek kuni kuramu 《おじさんが来ると思う》
おじさん(が) 来 るということ(を) 私が・思う

(e) 節の中の一つの名詞を最後に置いて、残りの部分がその名詞の修飾語となる。

cise poro → poro cise
家が 大きい 大きい 家

(tan) su patek ku-kor → patek ku-kor su 《私のたった一つしかない鍋》
この 鍋 だけ 私が・持っている これだけ 私が・持っている 鍋

5 品 詞

文法機能により語を種類分け(品詞分類)すると、日本語とあまり変わらず、西洋語のそれとはずい分違った分類となる。次の七品詞を認めることができる。①動詞、②名詞、③連体詞、④副詞、⑤接続詞、⑥助詞、⑦間投詞。

諸外国語で形容詞で表す概念の大部分をアイヌ語では動詞で表す。たとえばporoは《大きい、大きくなる》。

poro cise
大きい 家

cise poro
家が 大きい

wakka poro kor 'an. 《水かさがふえつつある》
水が 大きくなり つつ ある

(1) 動 詞

動詞は文の述語の中心となるもっとも主要な語である。次の四種がある。

(a) 完全動詞——それ自身の中に主語・述語を内蔵し、他に主語も目的語も補語もとらない動詞。一切の語形変化をしない。

me'an《寒い、it's cold》(merayke《寒い(he) is cold》は自動詞)

(b) 自動詞——主語をとるが、目的語も補語もとらない動詞。主格人称変化をする（主格人称接辞をとる——表1参照）。

mina《笑う》　ku-mina　《私が・笑う》
　　　　　　　'e-mina　《お前が・笑う》

(c) 他動詞——主語と目的語をとる動詞。主格目的格人称変化をする。

nukar《…を見る》　'a-nukar　《あなたが(それを)・見る》
　　　　　　　　　'en-nukar　《(彼が)私を・見る》
　　　　　　　　　'a-'en-nukar　《あなたが・私を・見る》

他動詞の中には目的語を二つとる「複他動詞」がある。

poyson	'icen	ku-kore.
子供に	お金を	私が(彼に)・与えた

(d) コピュラ——主語と補語をとる動詞。

コピュラは ne《だ・である》一語だけで、これは主格の人称変化をする。

menoko	ci-ne	《私たちは女だ》
女	私たちが・だ	

(2) 名　詞

名詞は主語・目的語・補語になる。主なものは(a)普通名詞、(b)位置名詞、(c)人称代名詞である。

(a)普通名詞のうち一部は「概念形」と「所属形」の二つの形をもつ。概念形は単にそのものをさし、所属形はそれが特定のだれかまたは何かに密接に所属していることを表す。たとえば概念形 rus《毛皮》は毛皮一般をさし、所属形 rus-ihi《(それ)の毛皮》は特定のものの毛皮をさす。所属形はそれが所属するものを表す名詞のあとに置かれて、たと

表 1　北海道南部の人称代名詞と人称接辞

		人称代名詞	人称接辞	
			主格	目的格
1人称単数	《私》	kani	ku-	'en-
除外的1人称複数	《私たち》(相手を含まない)	coka	ci-, -'as	'un-
包括的1人称複数	《私たち》(相手を含む)	'a'oka	'a-, -'an	'i-
引用の1人称単数	《私》(引用文中)	'asinuma	'a-, -'an	'i-
引用の1人称複数	《私たち》(引用文中)	'a'oka	'a-, -'an	'i-
2人称単数	《おまえ》	'e'ani	'e-	
2人称複数	《おまえたち》	'eci'oka	'eci-	
2人称敬称	《あなた，あなたがた》	'a'oka	'a-, -'an	'i-
3人称単数	《彼》	sinuma	ø-	
3人称複数	《彼ら》	'oka	ø-	
不定人称	《不定のひと》		'a-,('an)	('i-)

えば kamuy rusihi《クマ・の毛皮》のように用いられる。これは「きのうわれわれが殺したクマ」あるいは「けさ罠にかかっていたクマ」などの、特定のクマの毛皮を意味する。所属形をつくる名詞とつくらない名詞は、北海道各地の方言でだいたい対応しており、アイヌ祖語における両者の区別を保っているものと思われるが、カラフトのある方言ではこの区別を失っており、すべての名詞が所属形をつくる。所属形は語基に VhV(二つのVは同じ母音)が接合してつくられる。

それが所属している特定のものが、三人称以外の人称である場合、人称接辞をとる。

sik《目》(概念形)

sik-ihi《の目》(所属形)

'a-sikihi《われわれ(相手を含む)・の目》

'unu《母親》(概念形)

'unu-hu《の母親》(所属形)

c-unuhu《われわれ(相手を含まない)・の母》

(b) 位置名詞は、前後左右などの時間的空間的位置

表 2　数詞(北海道南部)

数え方		…人	数連体詞(pa《年》をつけて示す)
1	sinep	sinen	sine pa
2	tup	tun	tu pa
3	rep	ren	re pa
4	’inep	’inen	’ine pa
5	’asik	’asiknen	’asikne pa
6	’iwan	’iwaniw	’iwan pa
7	’arwan	’arwaniw	’arwan pa
8	’tupes	tupesaniw	tupesan pa
9	sinepes	sinepesaiw	sinepesan pa
10	to	waniw	wan pa
11	sinep ’ikasma wanpe	sinen ’ikasma waniw	sine pa ’ikasma wan pa
20	hot	hotnen	hotne pa

関係を表す。

　’ipe(食事)　’oka(の後)　ta(に)

　citarpe(ござ)　corpok(の下)　wa(から)

位置関係の対象が三人称以外の人称である場合には目的格の人称接辞をとる。

　’en-(私)　corpok(の下)

(c) 人称代名詞には表1の一〇個がある。それぞれに呼応して、動詞や名詞が人称接辞を伴って語形変化をする。

(3) 連体詞

主なものは数連体詞と指示連体詞である。

(a) 数詞は連体的に用いられる数連体詞のほかに、数え唱える形と人数を表す形がある。

五は語源的には手であり、六から九まではあといくつで一〇という構成だと金田一京助以来言われて来たが、最近それに対し疑問も出されている。一〇は両方、すなわち両手であろう。二〇以上の数は二〇進法になっている。

(b) 指示詞には自分が持っている、あるいは自分がいるところ(これ・ここ等)、自分のすぐそば(これ・ここ等)、離れたところ

30 wanpe 'e-tu-hot
10 で・2の・20
40 tu-hot
2の・20
50 wanpe 'e-re-hot
10 で・3の・20
60 re-hot
3の・20

（それ・あれ・そこ・あそこ等）の三つの系列がある。《ここ》《そこ・あそこ》を意味する形態素と《ある》を意味する動詞とからなる語が、連体詞として用いられ、またこれに《もの》《人》《ところ》その他を表す接尾辞や助詞などがついて、名詞句や副詞句が造られる。

(4) 副詞

副詞にはいろいろあるが、この中の一種、後置副詞は、英語などの前置詞に相当する関係概念を表す。

makiri 'ani tuye.
ナイフ で 切る

cise 'okari roski.
家 のまわりに 立つ

後置副詞の中には主格人称接辞をとるものがほんの少数あり、目的格の人称接辞をとるものがかなりある。

'en-neno 'an. 《私に似ている》
私・のように ある

(5) 接続詞

接続詞は語形変化をしない。二つの文を接続する働きを持つ。接続詞と後述の接続助詞との間は連続的で、境界線を引くことはできない。

'ek hine 'ahun.
来た そして 入った

'ek korka nani 'arpa wa 'isam.
来た けれど すぐ 行っ て しまった

'ek yakun 'eraman nankor.
来 れば わかる だろう

(6) 助　詞

独立性の弱い種類の語をまとめて「助詞」と呼ぶが、その中には文法機能から言えば、実に様々なものが含まれる。主なものを数例ずつ拾うと、

(a) 助動詞——動詞につく。

ku-nukar rusuy.
私が・見 たい

'en-koyki ranke.《しょっちゅう私をいじめる》
(彼が)私を・いじめる 何回もする

(b) 名助詞——名詞の現れるべき位置に代わって現れる。また節(文)を名詞化する。

ku-supa p 'e.
私が・煮た もの(を) 食べろ

'an-an hi ye.《私がいるということを彼が話した》
いる・私が こと (彼)言った

(c) 接続助詞——動詞句の後につき節と節(文と文)を接続する。

'arpa wa 'inkar wa 'ek.
行っ て 見 て 来い

kuni ku-ramu kor k-ek《私はそう思いながら来た》
そう 私が・思い ながら 私が・来た

(d) 格助詞——位置名詞あるいは場所を表す普通名詞につく。

tan kotan ta 'an.
この 村 に ある

Toya 'un k-arpa.
洞爺 へ 私が・行く

(e) 副助詞——名詞・動詞・副詞につく。

pekanpe 'anakne mosma p ne.
ヒシノ実 は 別の もの だ

tan kotan ta ka 'an.
この 村 に も ある

(f) 終助詞——文末につく。

pirka wa.
いい よ

'ipe-'an ro. 《食べよう》
食べ・私たちが よう

6 語彙

抽象的概念や文明的所産を表す語は少ないが、日常生活に密接した動植物や、狩猟・漁撈・採集活動に関した語彙は豊富である。たとえば主要な川の幸であったサケは単に cep《魚》あるいは kamuy-cep《神・魚》とも呼ばれるが、性別によって ca《雄のサケ》'os《雌のサケ》と呼び分けられ、また秋のサケは sipe という別の名称をもつ。産卵後の年とったサケは尾がバサバサになっているとして、'oysiru ('o《その尻》-i《ものを》siru《こする》)という。

普通の名詞が時期や場所によってタブーとされるために、それを避けてほかの表現をしたり、魔よけのためにわざと魔物が嫌いそうな表現をしたりすることがある。たとえば、マスをふつうは 'ican-iw《産卵穴を掘る・者》というが、知里真志保によれば、サケのとれる季節になると、この名称でマスを呼ぶのは、同じく産卵穴を掘る者であり、しかもマスよりも大切な魚であるサケの機嫌を損じて不漁になるおそれがあるため、そのころだけマスを sak-ipe《夏・魚》と呼ぶという。[1] 山でも海でも、ある種の語がタブーとされて、特殊語が用いられる。また祈りの言葉の中で使われる特殊な語もある。また年齢層による特殊語もある。

二 日本語との関係

長年にわたり日本語と接触していたのであるから、相互に影響し合ったことは当然である。

1 借用語

語彙の面では明らかに日本語からの借用語と見られるものが、アイヌ語の中に数多くある。tañpaku《たばこ》・tenonkoy《手拭》・'uñma《馬》・puta《ぶた》・tuki《杯》などは物と一緒に持ち込まれた名称である。名詞のみならず、'a-maketa《負ける》: 'a-'en-maketa《私が負ける》のような動詞や、kawarine《…の代わりに》: 'en-kawarine 'arpa!《私の代わりに行け》のような後置副詞まである。

人数を数える言い方で、六人、七人…十人、二〇人はアイヌ語本来の言い方では上のように言うが、語尾に日本語の「人」を当てて下のように言う人もいる。

六人	'iwan-iw	'iwanin
七人	'arwan-iw	'arwanin〜'arwannin
八人	tupesan-iw	tupesanin〜tupesannin
九人	sinepesan-iw	sinepesanin〜sinepesannin
一〇人	wan-iw	wanin
二〇人	hotne-n	hotnin

日本語の中に外国語の単語が臨時に入ることがあるように、アイヌ語の中にも日本語の単語が臨時に入ることが少なくない。物の名称などだけでなく、動詞などでもどんどんこの種の臨時借用は起こる。日本語で「オーダーする」「リザーブする」などと言うようなものである。それには日本語動詞の語尾に過去推量形をとり入れ——taro という形にする。

moketaro《もうける》

yorokontaro《喜ぶ》

これがそのままアイヌ語の文法の枠の中に入り、

sino yorokontaro-'an.
まことに　うれしい　・私が

'e-'e-moketaro na.
お前・それで・もうける　ぞ

のように人称接辞やその他の接辞までつく。yorokontaro-'an はアイヌ語では yaykopuntek-'an と言い、'e-'e-moketaro は 'e-'e-pirka と言うところである。

しかし昔、数多くの話し手を持っていたころのアイヌ語は、新しく物が入ってもその名称はそのまま取り入れずにアイヌ語で訳出することも少なくなかった。

'a-'o-p《汽車・バス・乗用車などの乗り物、（直訳）人が・乗る・もの》(kisa, pasu などとも言う)

'a-'o-'osor-usi-p《腰掛、（直訳）人が・そこに・尻・をつける・もの》

'isa-cise《病院、（直訳）医者・家》

yay-kur-nukar-kane《鏡、（直訳）自分（の）・影・を見る・金》(kankami ともいう)

'isa-cise の 'isa は「医者」をそのまま借用したものだが「病院」という語はそのまま借用せず半分アイヌ語本来の語を使って訳出した。また yay-kur-nukar-kane の kane《金属》は日本語からの借用であるが「鏡」は右のように訳出した。

アイヌ語から日本語への借用は逆のものに比べるとはるかに少ないが、それでもかなりある。

ラッコ　rakko
トナカイ　tunakkay
シシャモ　susam

ルイベ（凍った鮭）　ruype (ru《とける》-ipe《食料》)

などはものと一緒に入った名称である。

'aynu は人間を意味するアイヌ語。menoko《(アイヌの)女》は日本語東北方言からアイヌ語に借用された語が、再び日本語に逆輸入されたもの。日本史にあらわれるエミシ、エゾはカラフトアイヌ語に 'enciw という形で残っている古いアイヌ語の「人」を意味する語 'emciw および 'enciw から来た語であろうという金田一京助の推測が当たっているだろう。

2 地名

北海道・カラフト・千島および東北地方の北の方にはアイヌ語起源と見られる地名がたくさんあり、その多くが知里真志保その他の研究で解明された(2)。

稚内（わっかない）　yam-wakka-nay　《冷たい・水・沢》
襟裳（えりも）　'enrum　《岬》
幌別（ほろべつ）　poro-pet　《大きい・川》
惣内（そうない）　so-nay　《滝・川》

この最後の例は秋田県阿仁（あに）の地名に関し、山田秀三が実地検証してアイヌ語地名であることを確かめたものだが、東北地方にソーナイまたはショーナイという地名はいくつもある。その中には日本語起源であることのわかっているものもある。

3 音韻面の影響

音韻面におけるアイヌ語と日本語の相互影響についてはこれという確かなことは言えない。ただごく最近の、日本語で生活しているアイヌの発音には、日本語の発音の影響が見られる。たとえば語末のnを[n]と発音せず日本語のンを発音したり、/'/の声門破裂が弱く、日本語のアイウエオのような発音になったり、uやwの唇のまるめが弱くなったりなど。

さらに近年ガ行鼻音[ŋ]や長母音など、本来アイヌ語(北海道)になかった音を、アイヌ語式に変えずに発音する傾向が出てきた。しかしこれは日本語の単語の発音においてだけ見られることで、アイヌ語の語彙の発音にまではこういった影響は及んでいない。

アイヌ語から日本語への音韻面の影響にはとくに目立ったものは見られない。音韻体系全体としてアイヌ語と日本語があまりかけ離れていない(見方によっては「似ている」ともいえる)のは、あるいはチェンバレンが言ったように長年にわたる接触による影響の結果かもしれない。

日本語北海道方言と、アイヌ語(北海道・カラフト)とに共通のイントネーションの特徴がある。すなわち質問文の一部で、下降調、叙述文の一部で上昇調が見られることである。アイヌ語から日本語への影響関係に起因するものかもしれない。

4 文法面の影響

文法構造の面でのアイヌ語・日本語間の影響は当然深いものと考えられる。チェンバレンは音韻体系の類似とともに、文構造の一致も両種族の性向の類似かあるいは何千年にわたる交渉の結果ではなかろうかと言っている。

まずあまり古くないと思われるものに、「で」「に」などの表現のしかたの変化がある。すなわち古いアイヌ語では動詞の格接頭辞を使う表現(a)が多く用いられ、ユーカラなどにはこれがふつうだが、より新しい言い方として名詞に

格助詞を後置させる表現(b)が多く用いられるようになった。

(a) cise 'or 'e-'o-'ahun. 《お前が家の中に入る》
　　家 の中 お前・に・入る

(b) cise 'or ta 'e-'ahun. 《同右》
　　家 の中 に お前・入る

また前述のように両言語の助詞の使い方に実によく似ている面が多いのも、あるいは接触による影響の結果ではないかと思われる。

次にいわゆる「補助用言」の表現がアイヌ語にもあり、その使い方にまったく日本語とそっくりと言ってよいくらい、似ているところがある。

kore 《与える》

puni wa kore. 《彼のために持ち上げる》
持ち上げ て やる

nukar wa 'en-kore. 《私のために見る》
見 て 私に・くれる

'anu 《置く》

ye wa 'anu. 《前もって言う》
言っ て おく

ku-kar wa k-anu. 《前もって作る》
私が・作っ て 私が・おく

これらもあるいは日本語からの影響であろうか。

このほか全体として両言語は構造上よく似ており、どの特徴が起源的なもので、どれが影響によるものかを判定することは困難である。

5 系統関係

アイヌ語は日本語と同系なのか否か、という問題については、いろいろなことが言われてきた。主な説を紹介して

みよう。

(1) ジョン・バチラー

イギリス人宣教師で、長く北海道に住み、布教する間に、アイヌ語の文法や辞書その他を出した。彼は「アイヌ語は文法からも語彙からもアーリア語(=印欧語)から出たものらしい[3]」とか「アーリア語の特徴を見せている[4]」とか言っている。

(2) B・H・チェンバレン

東京帝国大学博言学科教授として、いわば日本に西洋の比較言語学を導入した人であるが、その"The Language, Mythology, and Geographical Nomenclature of Japan Viewed in the Light of Aino Studies"[5]の中で、アイヌ語の音韻体系も文の構造も日本語のそれとほとんど同じだが、この二言語が同一の語族に属するかとなると、「あるいはそうかもしれないが、それはたとえば印欧語族とセム語族が構造上似ているから同じ語族だろうとするように、語族という語を特に広義にとればの話である」と言う。次にアイヌ語と日本語の間の顕著な相違点として、種々の構造上の特徴や、アイヌ語では語頭にrが立ち得ることや、数のシステムなど、一五の項目をあげ、このアイヌ語との相違点の大部分は日本語のみならず朝鮮語や他のアルタイ諸言語にも当てはまることを重視して、結局、「アジアの小民族の言語の徹底的な研究をまつが、現在のところは、既知のすべての事柄から、アイヌ語は全く孤立した言語と見られる」としている。

(3) 金田一京助

アイヌ民族の持つ偉大な叙事詩としてユーカラを世に紹介した金田一京助は、ユーカラの語法が日本語やその他の言語と違う点に驚嘆し、「アイヌ語と日本語との間に系統関係はまったくない」ことを、終始情熱をこめて主張した。これをとくにくわしく論じたのが「語法上から見たアイヌ」(一九二七年)[6]と「数詞から見たアイヌ民族」(一九三五年)[7]で、アイヌ語の包合語的(一つの動詞語幹に主語と目的語の両方が接合する)および輯合語的(複総合的ともいう。副詞や名詞など、いろいろな要素が語幹について一つの動詞をなす)性質と数詞の体系とから、「アイヌ語は日本語、朝鮮語、ウラル・アルタイ諸言語とは全く別種のもので、世界言語の飛島をなしている」と断定した。同時にエスキモー語やアメリカ・インディアンの諸言語およびバスク語との、語法上ならびに数体系上の類似に注目し、そちらのほうへ結びつけようとする姿勢を言外に匂わしている。

(4) 知里真志保

『アイヌ語法概説』[8](一九三六年)をはじめ数多い著作の中で、系統問題にはほとんど触れておらず、わずかに『世界大百科事典』[9](一九六四年)の記事の中で七行ほど書いている。

アイヌ語と親近関係に立つと考えられるような言語はまだ発見されていない。音韻組織や文法の上で若干の重要な特徴を共有する言語はあっても、基本的な語類において全然結びつくものがないからである。研究の現状もまだ系統をかれこれ言いうるところまではいっていない。今のところ系統は不明というよりほかはないのである。

(5) 服部四郎

アイヌ語: √kur: kur《影》, niskur《雲》(nis《空》+kur《黒》), kunne《黒い》(←kur+ne), 'ekurok《暗い》
日本語: √kur: kurasi(暗し), kuru(暮る), kuro(黒), ? kumo(雲?←kurmo)
朝鮮語: kurɯm《雲》, kɯrim《煤》, kərim《煤》, kɯrimca《影》, ? kəm《黒い》
トゥングース語: kurunyuk《煤》, ? komnomō《黒い》
蒙古語: ? kara《黒い》, ? küräng《褐色の》
チュルク語: kurim《煤》, ? kara《黒い》
ハンガリー語: korom《煤》(? <チュルク語)

『アイヌ語方言辞典』(岩波書店)

一九五五年、基礎語彙の比較に基づいて、「アイヌ語と日本語とが同系である蓋然性があると考えられてきた」ことを表明した。その後あちこちでこれを敷衍して説き、上のような、アイヌ語と日本語その他との基礎語彙の語根の形と意味の類似をあげている。

一九五六年に、

基礎語彙のこのような類似は、偶然の一致だとか借用関係によるとか言って簡単に片づけて了うわけには行かない。……アイヌ語の文法構造が、日本語とは親族関係が無いと断定し得るほど、日本語のそれと異なるかというに、そうではない。……そういう断定は、作業仮説としても非生産的である。日本人のアイヌ語研究熱を殺ぐ点でも好ましくない。[10]

一九五七年に、

日本語との間の親族関係の証明された言語はなく、朝鮮語・アルタイ諸言語・アイヌ語などが、他より近い関係に立つのではないかという推定が、最も有力である……[11]

と述べている。

(6) 結論

「アイヌ語は、その包合語的性質、複総合語的性質、という構造上の特徴、および数詞の体系とから、日本語とはまったく系統関係がない」と金田一京助が強調し

て以来、これが一般に受け入れられて定説化した観があった。しかし第一、アイヌ語の構造は、チェンバレンが認めているように、日本語とそうひどく違わないのである。印欧語族、ハム・セム語族、シナ・チベット語族等々に属する諸言語の日本語との構造上の相違と比べるならば、アイヌ語はむしろ日本語とよく似ていると言える。たしかに数詞の体系は異なる。しかしこういったことは時代とともに変わり得るものである。[12] 動詞に主語と目的語に呼応した人称指標がつく点(金田一の言う包合語的性質)も、たしかに日本語とは異なり、エスキモー語その他と共通した特徴である。しかし、それではこのエスキモー語が、日本語とはまったく似ても似つかぬ言語かと言えば、決してそうではなく、かえって、日本語と非常によく似た構造を見せているのである。たとえば形容詞が動詞の一種である点、上・下・前・後等の位置関係が、名詞の一種たる「位置名詞」ともいうべき語で表され「…の上」「…の前」という表現をする点、「で」「へ」「から」等の関係概念が助詞で示される点、追加される成分は次々に後ろへ後ろへ置かれ、しかも不連続な統合がほとんどない点、使役も受け身も態(アスペクト)も時制も否定も、すべて動詞の後に付加されて表される点、既定条件、仮定条件の表し方、形動詞(連体形)・副動詞(連用形)の用法、等々、挙げればきりがないほどの類似点が、エスキモー語と日本語の間に認められる。そしてこの大部分が、アイヌ語にも認められるのである。

さらに、複総合語的特徴、すなわちたくさんの形態素が結合して一つの動詞を形成する特徴は、アイヌ語やエスキモー語だけでなく、日本語にも認められるのである。

つまり、構造上の特徴から言えば、日本語はアイヌ語やエスキモー語とよく「似ている」と言わざるを得ないのである。

しかし、もちろん、こういった構造上の特徴の比較だけで、系統関係に結論を出すわけにはいかない。形態素の比較が重要であることは言うまでもない。

ただ、日本語もアイヌ語も(そしてエスキモー語も)音韻体系や形態素の音韻構造の非常に簡単な言語である。した

がって、偶然の一致の起こる確率が当然高い。それにまた基礎語彙といえども借用を免れ得るものではない。だから、一致が親族関係によるものか、偶然または借用によるものかを判断することは困難である。逆に、共通基語から受けつがれている語でも、音変化の結果、二言語でまったく違った形を持ち、そのため「共通残存語」として数えられなくなってしまうこともある。服部が挙げたアイヌ語と日本語その他との語彙の一致の例を、「共通基語からの残存語である」と解し、「同系である蓋然性がある」という表現を「同系である」あるいは「同系であるだろう」と解して、これらの言語の語形と意味の少しでも似た語をたくさん集めてただちに音韻法則を立て共通基語を再構しようとすることなどは、意味のないことと言わなければならない。

服部が言ったように、アイヌ語と日本語の間には「遠い親族関係のある蓋然性がある」(言い換えれば、親族関係がないと断定することはできない)にすぎず、かつてチェンバレンが言ったように「他の言語の徹底的研究」と「新しい事実の発見」が待たれるのであり、知里が言ったように、「アイヌ語と親近関係に立つと考えられるような言語はまだ発見されていない」ので、アイヌ語は「今のところ系統は不明というよりほかはない」のである。

(1)　知里真志保「アイヌ語の特殊語について」(『北方文化研究所報告』一二輯、一九五七年)。
(2)　知里真志保『アイヌ語入門』楡書房、一九五六年、同『地名アイヌ語小辞典』楡書房、一九五六年、山田秀三『東北と北海道のアイヌ語地名考』楡書房、一九五七年、北海道内各地の「市誌」や「町誌」など。
(3)　John Batchelor, Ainu Life and Lore 教文館、一九二七年。
(4)　John Batchelor, An Ainu-English-Japanese Dictionary(『アイヌ・英・和辞典』)第四版、岩波書店、一九三八年。
(5)　B. H. Chamberlain, "The Language, Mythology, and Geographical Nomenclature of Japan Viewed in the Light of Aino Studies"(『東京帝国大学文科大学紀要　一』一八八七年)。
(6)　金田一京助「語法上から見たアイヌ」(『アイヌ語研究』三省堂、一九六〇年)。

(7) 金田一京助「数詞から見たアイヌ民族」(同右)。
(8) 金田一京助・知里真志保『アイヌ語法概説』岩波書店、一九三六年。
(9)『世界大百科事典』一巻、「アイヌ」の項の〔言語〕(知里真志保執筆)、平凡社、一九六四年。
(10) 服部四郎「アイヌ語の研究について」(『日本語の系統』岩波書店、一九五九年)。
(11) 服部四郎「日本語の系統(3)――音韻法則と語彙統計学的〝水深測量〟――」(同右)。
(12) 田村すゞ子「アイヌ語について」(『言語』一九七四年一月号)。

参考文献

(1) アイヌ語の入門書を紹介したもの

田村すゞ子「アイヌ語の入門書と辞書」(小林英夫編『私の辞書』丸善、一九七三年)。

(2) アイヌ語の概説書

『ブリタニカ国際大百科事典』一巻、「アイヌ」の項の〔言語〕(田村すゞ子執筆)、TBSブリタニカ、一九七二年、その他。

(3) アイヌ語と日本語との関係を論じたもの

金田一京助「国語とアイヌ語との関係」(『アイヌ語研究』三省堂、一九六〇年)。
服部四郎『日本語の系統』岩波書店、一九五九年。
服部四郎『アイヌ語方言辞典』岩波書店、一九六四年。
他に注(5)(7)(8)(12)。

6　チベット・ビルマ語と日本語

西田龍雄

一 日本語系統論

いまわれわれが日本語とよんでいる言葉が、八世紀の上代日本語に到達するまでに、日本列島内部で、あるいはその近隣で話された幾種類かの言葉から、多かれ少なかれ何らかの影響を受けて来たであろうことは、想像に難くはない。そして、それらの言語との接触を通じて、特定の語彙分野において、外部の単語を借り入れ、本来の語彙を放棄するような入れ替えが頻繁に起ったにしても、決して不自然ではない。それにもかかわらず、日本語の中核を占める部分は、チベット・ビルマ語系の言語と同じ祖形から来源しているという仮定に、私はたっている。しかし、この考えを正当づけるために、そのほかのいくつかの日本語系統説、たとえばアルタイ説とかマライ・ポリネシア説を取り出して批判したり、両者の優劣を比較して示す意図は、ここではまったくもってはいない。ただ、私が考えている日本語系統論、つまりチベット・ビルマ語系の言語と日本語が同系統であるという構想を、具体的に、やや詳細に述べてみた。もちろん、これは、一つの研究段階における意見であって、最終的な結論ではない。今後、なお多くの修正、補足が必要である。(1)

私は、日本語の系統は、日本語を除いて成立しているある語族に、実際には多くの場合、その語族の専門家が試みた比較研究の成果に基いて設定した祖形に、日本語をつき合わせ、その枠を通じて、対応関係を探っていくような形では、解明されることはないであろうと、考えている。つまり、日本語を既成立の祖語に結びつけ、日本語とその祖語の間に、さらに上位の祖形を仮定するといったような形態では、解明はむつかしく、日本語がある語族の有力な成員として働きかけ、そこに一つの語族が成立するような形態のもとで解明されることを、私はかねがね考えている。

日本語が、チベット・ビルマ諸語の中の古典語の一つとして、チベット語と並ぶ位置を占め、日本語形が、チベット・ビルマ(蔵緬)語族[2]の成立にある役割を果すような形を期待する。

何故、ここでチベット語とかビルマ語が登場するのかといぶかられる読者があるかも知れない。この言語群は、日本語の系統論にとって、一つの盲点であった。

明治以来、日本語アルタイ説が提唱され、諸先学による研究が受け継がれて来たが、この説を一般に承服させる決め手に欠けていた。その弱点を補う一つの方向は、とくに語彙の対応形を、他の言語群に求めた。その結果、系統論の実質は、次第に形成論に変貌していった。たとえば日本語はアルタイ語を基盤として、マライ・ポリネシア語の語彙を混合して出来上ったという議論まで提出され、それがもっとも信頼できる系統論であるかのように扱われた。系統論と形成論は、互いに関連はするけれども、等しいものではない。日本語の中核部分がどの系統に属するかを実証するところに系統論は存在し得る。

チベット・ビルマ語系の言語は、アルタイ語に似た構文をとり、日本語と類似する単語が多いといわれて来た。そのような印象を、果して言語学的な証明に置き換え得るか否か、これまでにも、よく知られているパーカーをはじめとして[3]、その試みはあったが、日本語の系統研究に残されているこの一つの可能性をさらに詳しく検討すべきであろう。チベット・ビルマ諸語は、日本語系統論の研究にとって、当然重視されるべきはずの言語群なのである。

日本語チベット・ビルマ語同系論を証明するためには、古代日本語形、換言すると、『紀』『記』『万葉』によって代表される上代語に到達するまでの過程を無理なく説明するための形式を、チベット・ビルマ語的な観点から推測していかねばならない[4]。この古代日本語形は、具体的な形をもってあげることは少ないにしても、蔵緬語祖形あるいはチベット語形やビルマ語形などと結び付く、あくまでも仮定された世界の形式なのである。そして、一方でチベット・ビルマ語系の言語にも、日本語からの視点をあてて、語族の成立を検討してみる必要がある。

チベット・ビルマ諸語と日本語を一定の祖形の設定によって結び付ける操作がまったく無理なものなのか、あるいは明らかに誤ったものかは、全体の研究が進展した段階でないと判断を下し難いと思う。

チベット語と日本語は、一見、音節構造がかなりかけ離れているように思える。そのような印象にもかかわらず、私は、チベット語やビルマ語が伝統的に単音節言語と呼ばれるように、日本語も、基本的には単音節言語であったと考える。

その日本語が上代語に到達したときには、すでに多音節言語の形態に発展していた。その発展には、主に二つの大きい変化の流れがあった。その一つは、複子音の拡張である。子音間に母音を挿入して多音節に変えていく。そして、挿入母音と語幹母音の間には、原則として、母音の調和がはたらき、アクセントは、もとの一音節を反映して、平板型を保持した。このような動きが、どのような原因によって生れて来たのかわからないが、日本語を大きく性格づけたことは確かである。たとえば、ɸana〈鼻〉は、上代語で上上(=高平型)のアクセントをもっていたと推測できるが、この形はチベット語の *sna* に対応する。いま簡単にこの日本語形の成立を説明すると、つぎのようになる。古代日本語にあった上述の発展原則が、共通祖形 *sna にはたらき、複子音 sn- の s- と -n- の間に語幹母音と調和する a 母音が挿入された。つぎに s が ɸ に変化し sna の高平型アクセントが二音節にも保持されて、ɸana が出現する。チベット口語では、na-khuu(*sna-khug*)のように別の形態素をともなった複合形式の単語になるが、日本語では、本来の一音節形式から変化した hana が現在に至るまで受け継がれている。

〈言葉〉kötö(言)(平平=低平型)も、同じような機構によって、祖形 *gdang〈言葉の調子〉(チベット文語 WrT *gdang*)から変化した。その過程を示すと、(1)初頭音が無声音化する、*gdang>ktang。(2)-ang が -ö に変る。(3)語幹母音と調和する母音が挿入される、kötö。(4)もとのアクセント低平型が二音節にも保持される。(5)

いま一つの変化の流れは、単純形態素を複合して単語を構成していく方向であった。換言すると、二形態素以上の

結合からなる単語が多く構成されていった。たとえば、musi〈虫〉が、mu〈虫〉とsi〈虫〉の複合形式であったことは、この形が対応するチベット語形*hbu-sriṅ*（あるいは、*sriṅ-hbu*）が、*hbu*〈虫〉と*sriṅ*〈虫〉の複合からなる事実から推測できる。もちろん複合化の中には、複合動詞も含まれる。(6) この方向は、どの単音節言語も進んでいく自然の道筋であったといえるかも知れない。

この二つの変化の流れが、とくに前者の流れが、古代日本語（後期）の成立を大きく特徴づけ、上代語の形式をもたらしたものと考える。そのほかに、多音節化は、一部の末尾子音に見られる母音添接によっても実現した。隠された機構の秘密は、言葉の比較研究によってのみ明らかにできるのである。

二　チベット・ビルマ諸語の分布

はじめに、チベット・ビルマ諸語の概観を示しておきたい（二四二〜三頁の地図参照）。アジア大陸の西南部に分布するチベット・ビルマ諸語と呼ばれている大きい言語群は、一般には、漢語を含めて成立するいわゆるシナ・チベット（漢蔵）語族と呼ばれる大言語族の一支派として扱われている。(7) しかし、漢語との関係はもとより未証明であり、その言語支派に属すると考えられる各語系の関係ないしは各言語群内部の諸言語相互の対応関係も、まだ十分には研究されていない。しかしながら、そのような状況は、日本語の系統が未証明であるというのとはやや事情が違って、それらの言語の分布地域が近接している事実によって、もしくは語彙の一致あるいは媒介言語の存在によって、言語間の類似が漠然と認定され、おそらく近い将来にその親族関係が証明され得るであろうという強い予測に支えられている。

ここでは、具体的にそれらの言語群の比較研究と取り組むわけにはいかないために、若干の語彙の対照を通じて、言語間の親近性を例示するにとどめて、主な言語の分布と分類をごく大雑把に述べてみた。以下の日本語との比較は、

この中、二大古典語と考え得るチベット語とビルマ語を主な対象とする。

シナ・チベット語族全体を、モン・クメール諸語やムンダ語と、あるいはマライ・ポリネシア諸語と関係づけようとする試みや、[8] シベリアに分布するエニセイ・オスチャック語との親族関係を指摘する研究者もいる。[9] もちろんそれらの試論はすでに明晰に親族関係の存在を証明しているわけではないが、チベット・ビルマ諸語がモン・クメール諸語やマライ・ポリネシア諸語と、特定の語彙の広域分布あるいは借用による類似以外に、親族関係をもつか否かは、日本語の系統論にも大きい掛り合いをもってくる。しかし、そのような広範囲の比較研究は、ベネディクトの提唱するオーストロ・タイ語族成立の可能性とともに、[10] 東アジアの言語系統論の一環として、将来の検討をまたねばならない。

チベット・ビルマ諸語の分類は、まだ定説がないが、私はこれを大きく四つの言語系に分けている。Aチベット語系、Bロロ・ビルマ語系、Cチン語系、Dボド・ナガ語系。

この四つの言語系のどれに所属するのかをはっきりと決定し難い独立した重要な言語がいくつかある。たとえば、ビルマの北部カチン州に分布するカチン語のように、ビルマ語に近い語彙をもちながら、一方で、チン語系やボド・ナガ語系の言語とも共通した語彙を含み、同時に動詞に人称接辞をつける形態構造でもそれらと類似を示す言語がある。この言語はまた接頭辞の使い方で、チベット語と近似している。カチン語はまさに、右にあげた四つの言語系をつなぐ媒介言語（link language）の代表とできよう。インドのマニプル州に分布し、普通はCのチン語系に所属させ、独特の構造を保存するといわれているメイテイ語も、やはり重要な媒介言語の一つである。

これら四つの言語系には、理論的には、それぞれの祖形を推定できるわけであるが、祖形再構へのいくつかの試みは、いずれもまだ定着してはいない。したがって、各言語系相互の関係は、必ずしも明瞭になっているとは言い難い。チベット語系も、この祖形の設定に関しては、大へん遅れている。いまの段階では、多くの場合、古典語であるチベット文語形をその祖形替りに用いざるを得ないが、この言語系には、おそらく古形態を保存していると考えられるギ

ャロン語とチィヤン語があって、この二言語が祖形の再構成に重要な役割を果すものと予想できる。[11] 共に中国四川省に分布し、両者に共通した現象を若干発見できるが、体系全体を直接に結び付けることはむつかしい上に、中核となるチベット語的層とそれを覆っている別の層があるように考えられる。あるいはその別の層がDの言語系ボド・ナガ語系の言語と関連をもつかも知れない。

この四つの言語系の比較研究を困難な状態においている理由の一つは、所属する各言語の歴史がわからないところにある。チベット・ビルマ諸語の中で、書き言葉の伝統をもつ言語は、九世紀以後の文献を多量にもつチベット語と、一二世紀以来、碑文をはじめ豊富な資料があるビルマ語のほかに、いまは死語となったミ語(西夏語、一一世紀から一四世紀までの文献が残っている)[12]と、上述のメイテイ語、それに特徴ある象形文字で書かれる雲南省のモソ語、ロロ語、ずっと後代、一八世紀になって文字が考案されたレプチャ語などに限られていて、大部分の言葉は、前世紀末あるいは今世紀初頭に、はじめて記録されたものである。中には、タイ国北部で話されるビス語のように、[13] ごく最近登場した言語も含まれている。チベット語、ビルマ語の書写語を、ここで文語とよんでおく。

もし、一つの言語系内部に限って、各言語の対応関係を考察すると、言語間にかなり顕著な一致が見られる。とくに、Bのロロ・ビルマ語系は、それぞれ明確な特徴をもった三つの中心語群と周辺言語に分けられる。[14] 中心グループの一つビルマ語群には、ビルマ語の諸方言のほかに、雲南省からカチン州にかけて分布するマル語、ラシ語、アチ語が入る。いま一つのグループ、ロロ語群は、雲南・四川・貴州省に分布する彝(イ)語のグループであって、方言相互の関係は明瞭である。この両者の中間を占めるのが第三の言語群であり、同じく雲南省からカチン州・シャン州・タイ国北部・ラオスの諸地域に分布し、多くの方言があるが、相互の関係はごく近い。つぎの〔1〕～〔3〕の語彙対照表を見られたい。その中でリス語はやや独特な性格を示していて、語彙の面ではチベット語形に近い形式を含んでいる。この第三の言語群では、声調の体系が変貌して、単語高アクセントへ移動する現象が観察される。[15]

〔1〕

	Tavoy	Mergui	Rangoon	WrB
〈馬〉	byîn	mîn	myîn	*mrang*^{2}
〈見る〉	byin-he	myin-he	myin-de	*mrang-sañ*
〈高い〉	byín-he	myín-he	myìn-de	*mrang*^{3}*-sañ*

ビルマ語方言語彙比較例．ビルマ語の方言差は大きくない．

〔2〕

	Maru	Lashi	Maru-Lashi 共通形[16]
〈馬〉	myóng	myáng	*myang^{H}
〈見る〉	myong	myang	*myang^{L}
〈高い〉	myộng	myậng	*myang^{F}
〈言葉〉	dóng	dang têi	*dang^{H}
〈太陽〉	bá	bwêi	*buᵊy^{H}

マル語・ラシ語語彙比較例．〈言葉〉〈太陽〉はビルマ語に対応形がない．

〔3〕

	Nyi-Lolo	Ahi-Lolo	Akha	Bisu	Lahu-Na	Lisu	Moso	Mi
〈家〉	γɤ 22	o 44	ǹḿ	júm	γêh	ĥih	dẓi 11	¯yïeɴ
〈眠る〉	ji 22	ji 44	ju-ɦɯ	jù-ngɛ	zɯ̂-lɯ	jìh-tá	ji 33	¯˙ɨ
〈火〉	ṃ 11	ṃ 44 tɤ 55	mì-dzà	bì-thɔ	ˀa-mìh	máh-ma	mi 33	_mʉɴ
〈人〉	tsho 33	tshu 22	tshó-hà	tshang	tshɔ̀h	làh tshóh	tsho 11	¯ⁿdzïɔɦ
〈盗む〉	khɯ 11	khɤ 21	xɔ̀e-ɦɯ	khàw-ngɛ	khɔ̀-lɯ	khùh-ah	khɯ 31	_khịr

ロロ語群とモソ語・西夏語語彙比較例[17]

周辺グループに入る言語は上述のモソ語とミ語(西夏語)であって、かなり特色のある言語形態を示してはいるが、中心語群の言語と同源の単語を多数保持していて、基本的には、ロロ・ビルマ語群であると言って間違いはないであろう。

モソ語には二つの言語層がある。口語と宗教語(文語)であって、語彙の面で、両者が一致するとは限らない〔4〕〔5〕。かけ離れた語形をもつ場合、それぞれの語形が他の言語とどのような関係をもつのかを今後検討しなければならないであろう。

ビルマのカチン州の北方にプタオという町がある。そこを中心として、カチン州北部一帯にヌン語が分布する。この言語も、チベット語系とビルマ語系を媒介する性格をもつものと考えてよい[18]。ラワン方言、ガヌン方言など種々の方言があるが全体で約六万人ぐらいの話手がいる。この言語は、動詞に人称接辞がつくなど複雑な構造をもつが、雲南省の西北部に残る少数部族トゥルン語(Trung、中国では怒語と呼ぶ)と極めて近い[19]。

〔4〕

	口語(維西方言)	文語
〈虎〉	la 51	la 33
〈熊〉	gu 21	gv 11
〈象〉	tsho 21	tsho 11

口語と文語形が一致する(声調は違っている)場合.

〔5〕

	口語	文語
〈樹〉	ntsʌ 21	ndzʌ 11
〈人間〉	ɕi 55	dzi 33 tsho 11
〈太陽〉	ňi 33 mɛ 33	ňi 44-mɛ 44 bi 44

口語と文語形が一致しない場合.

ndzʌ>ntsʌ, dzi>ɕi の変化が起った. tsho〈人〉は BL *dzang と対応し, 〈太陽〉bi は BL *bui(?)に対応する. cf. OJ ɸi-tö, ɸi.

西暦七六〇年に雲南府からビルマへ南詔が侵入し、その頃ビルマ北部を領有していたピュー(驃)族を征服する。以後しばらくしてピュー族はビルマの地から姿を消すことになるが、数千人の捕虜がビルマから雲南府に移住させられたという史実がある。[20] もし、この移住させられた民族の末裔がトゥルン族であり、北ビルマに残った民族がヌン族であるとすると、今日考察できるこの言語上の一致は、重要な意味をもつことになる〔6〕。

チン族は、ビルマ地域にもっとも早く移住した民族であると想定できるが、現在の分布は、ビルマの西北部とチン特別区からバングラディシュにかけての地域に限られている。この言語もビルマ語系とチベット語系の中間的な位置をよく保存し、チベット・ビルマ語比較研究に重要な役割を果している。この言語系は、つぎの四つの言語群に細分類される。

(1) 中央チン語群　ルシャイ語、ハカ(=ライ)語、ラケル語。
(2) 北部チン語群　タド語、シイン(シザン)語、ティディム語。
(3) 南部チン語群　ショー語、カミ語、キミ語、クミ語など。
(4) 古代クキ語群　ファラム語、コム語、チル語など。

チン語は、たとえばティディム(=カムハウ語)のように文語体と口語体の対立があり、人称接辞をもつなど、言葉としてやや複雑な構造を具えている〔7〕。

四つの語群の中では、古代クキ語群がもっとも古い形態を保ち、中央、北部、南部の各語群は、それからの変化形

として考えられている〔8〕。

　とくに歴史文献をもつメイテイ語は、かつて、マニプル王国の国語であり、上記の四言語群には属さないが、カチン語やつぎに述べるナガ語との関連も深く、資料の豊富なルシャイ語とともに、今後この語群の比較研究の中心となるであろう。

　チン系言語相互の間では、たとえば〔9〕の例が示すように、単語構成はやや広範囲に一致しているのではないかと考えられる。

〔6〕

	Trung	Nung	WrB	WrT[21]
〈盗む〉	khə^{1}	hkü	*kho^{2}-*	*rku-ba*
〈泣く〉	ngə^{4}	ngü	*ngo-*	*ngu-ba*
〈犬〉	də̆^{5}gəi^{1}	tăgi	*khwei^{2}*	*khyi*
〈樹〉	shing^{1}	shing	*sac*	*shing*
〈年〉	ňing^{1}	ning	*hnac*	×
〈葉〉	shing^{1} lap^{1}	shălap	×	*lo-ma*
〈道〉	tlam^{1}	tăra	*lam^{2}*	*lam*
〈問う〉	khri^{2}	rit	×	*h̲dri-ba*

トゥルン語〈道〉は，チベット・ビルマ(TB)形がもともと *tlam であったことを示し，一般に語彙形式では，トゥルン語の方が古い形態を保っている．1 は高平調，2 は下降調，3 は高昇調，4 は低昇調．

kai^{2}	〈食べる〉	nă^{2} kai^{2}	〈あなたは食べる〉
gə^{1}	〈話す〉	nə^{1} gə^{1}	〈あなたは話す〉
et^{1}	〈笑う〉	nĕ^{2} et^{1}	〈あなたは笑う〉
wa^{1}	〈する〉	nwa^{1}	〈あなたはする〉

トゥルン語 2 人称接頭辞 nV- は，語幹母音と母音調和を示す．

〔7〕　ティディム・チン語

文語体	kă¯pai/hi	〈われ行けり〉	kă- 動詞
	nă¯pai/hi	〈汝行けり〉	nă- 動詞
口語体	¯pai/ing	〈私は行った〉	動詞 -/ing
	¯pai_tɛʔ	〈あなたは行った〉	動詞 -_tɛʔ

これをトゥルン語に比べると，

gə^{1}〈言う〉	gəng^{1}〈私は言う〉	動詞 -ng
	nə̆^{1} gə^{1}〈あなたは言う〉	nə̆^{1}- 動詞

のように，一人称はティディム・チン語の口語体に，二人称は文語体に該当することになる．

　〈乳房・乳首〉と〈乳を吸う〉を関連させ、〈牛乳〉を別の形であらわすチベット語のタイプに対して、ビルマ系とチン系言語は、いずれも〈乳房・乳首〉を有契的に表現し、〈吸う〉には別の語幹を使う点で一致を示している。

　バングラディシュのチッタゴン丘陵に住むムル族の言語を、この

〔8〕

	Lushai (中央)	Thado (北部)	Sho (南部)	Meithei	WrB	WrT
〈熊〉	sà-vóm	sāwōm	khawm	sawom	*wam*	*dom*
〈にがい〉	khàa	akhā	kha	khá-ba	*khaa*^{2}	*kha-ba*
〈骨〉	rùˀ	ghū	guh	saru	*a-ro*^{2}	*rus*
〈落ちる〉	tlàa	hlā	hlät	ta-ba	*kya*^{3}	×
〈髪〉	săm	sam	×	sam	*cham-*	*-tshom*
〈新しい〉	thár	athat	thai	ahal-ba	*a-sac*	*gsar-ba*
〈風〉	thlíi	hui	lei	nungsit	*lei*	*rlung*

〈風〉ルシャイ語とショー語はビルマ語幹と同じい．メイテイ語は，おそらくカチン語 Npùng と共に，チベット語形と同語幹であろう．TB *thlii, *plung

〔9〕

	Lushai (中央)	Lai (中央)	Thado (北部)	Tiddim (北部)	Meithei
〈乳房・乳首〉	hnù-tĕe	a-núk	noi	nawi	khom
〈牛乳〉	bôong hnù-tĕe (牛・乳)	núk-hāng (乳・汁)	noi-tui (乳・水)	bawng nawi (牛・乳)	sang-gom (sal 雌牛)
〈吸う〉	dùut	dawp	chep	tawp-hi	chup-pa

	WrB	WrT
〈乳房〉	*no*^{3}	*nu-ba*
〈牛乳〉	*nwa*^{2}*-no*^{3}	*o-ma*
〈吸う〉	*co*^{3}	*nu-ba*〈乳を吸う〉

地域の言語を最初に分類したステン・コノフは、ビルマ語系に属させたが、シェーファーは、のちにこの分類法を再検討して南方チン語群に入れた。しかし、シェーファーは慎重に、ムル族は南方チン族とくにカミ族とよく接触したために、語彙面での類似は、あるいは借用によるものであるかも知れないと示唆している。(22)

二万人ほどの話手をもつムル語は、〔10〕のような簡単な語彙対照からでも、ルシャイ語・メイテイ語それにチベット語の語幹形式と一致を示すことは見逃し難く、やはりチン語の一つとして扱うのが妥当であろうと思う。

シェーファーが修正した分類でいま一つ重要であるのは、ステン・コノフがナガ語系に所属させていた言語群のなかで、北東部に分布する言語を除いて、ビルマよりに住む一群をすべて、チン語系に帰属させた点である。

この分類にしたがうと(1)北ナガ語群(アオ語、ロタ語、テンサ語)、(2)東ナガ語群(レンマ語、セ

マ語、アンガミ語)、(3)西ナガ語群(エンペオ語、マラム語、カブイ語)、(4)ルフパ語群(タンクル語、クポメ語)とよばれていたナガ語はすべて、チン語系に包括される。今では、これらの言語は、ナガ・チン諸語と呼ばれている。

〔10〕	**Mru**	**Lushai**	**Meithei**	**WrB**	**WrT**
〈夢〉	mang	mang	mang	*mak*	*rmang lam*
〈樹〉	ching	thing	×	*sac*	*shing*
〈名前〉	ming	hming	ming	*maň*	*ming*
〈熟する〉	min	hmin	mul-ba	*hmaň*^{3}	*smin*
〈目〉	mik	mit	mit	*myak*	*mig*
〈嗅ぐ〉	nam	nam	nam-ba	*nam*^{2}*-*	*snom-pa*
〈盲目〉	pang	pang	nápangba	×	×
〈村落〉	kua	khua	khúl	×	×
〈穴〉	kua	kua	ma-khúl	×	×

〔11〕	**Lhota**(北)	**Angami**(東)	**Sema**(東)	**Tankhur**(ル)	**Thado**(北チン)
〈家〉	oki	kí	aki	śim	in, chen
〈魚〉	ongo	khuǒ	akha	kháy	ngā
〈肉〉	?	chə̂	ashi	sa	sā
〈樹〉	otang	səìbó	asü	thing	thing
〈葉〉	owo	puòňə	anika	khənəy, ana	nā
〈髪〉	ocan	(úcé) thá	asa	səm	sam
〈火〉	omi	mí	ami	məy	mē
〈骨〉	orə	úrù	aghü	tə́rɯ	ghū

〔11〕に、簡単な語彙対照例をあげた。ロタ語は名詞にo接頭辞をもつ点で特徴づけられ、このoは、おそらくあとで述べるミキル語のang-と関連をもち、また、ロロ・ビルマ語系のビス語のang-、ビルマ語のa-とも同源であろう。たとえば〈骨〉**Lhota orə: Bisu ang-gàw: WrB a-ro**^{2}。

ナガ語は一般に、声調言語として知られ、セマ語は三声、アンガミ語は五声をもっている[23]。それらの声調の弁別が、他言語の形とどのように対応するのか、まだ明らかではない。

インドのアッサム州を中心とするいわゆるNE-FA地域は、中国の雲南省からビルマ北部に及ぶ地域と並んで、チベット・ビルマ諸言語の宝庫である。前者にはボド・ナガ語系の言語がひしめき、後者はロロ・ビルマ語系の言語に満ちている。

そのアッサム州の中央北部に分布するミキル語は、もとはボド・ナガ語系として記録されたが、基本的にはチン語に近い性格をもっていて、やはり、チン

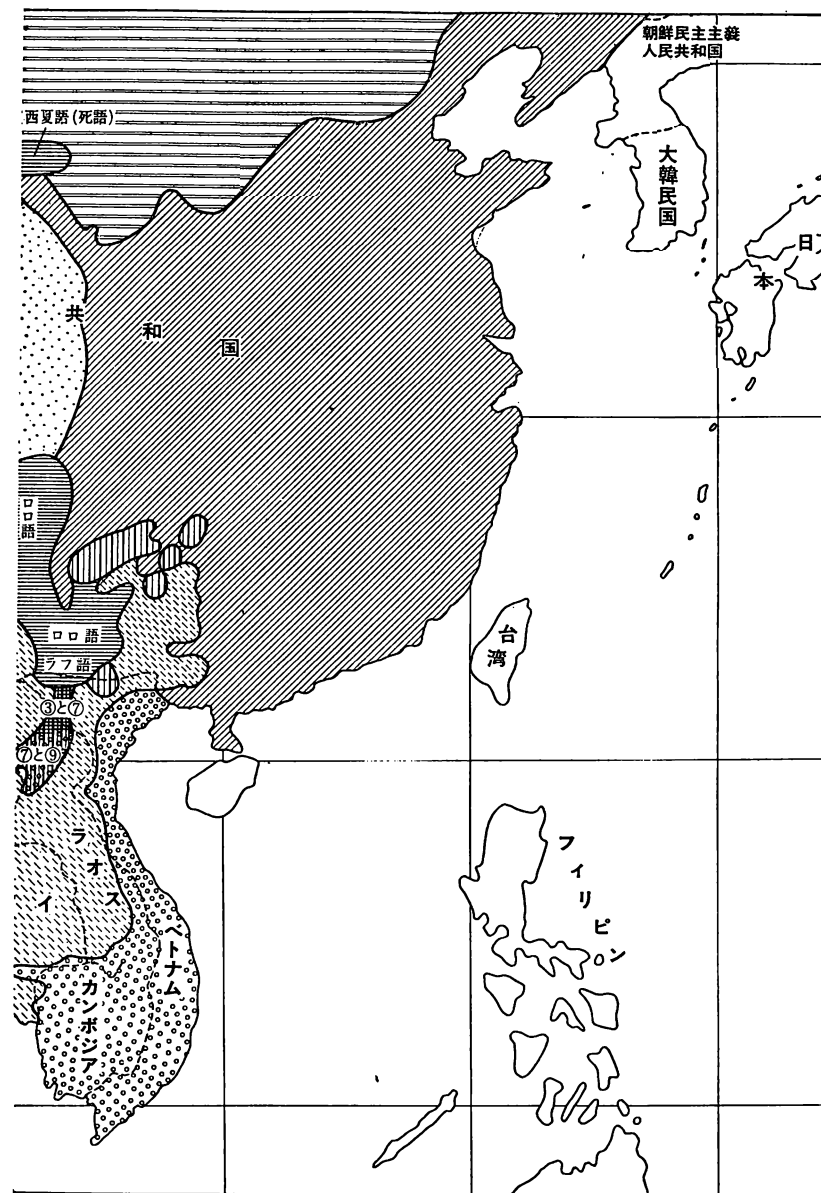
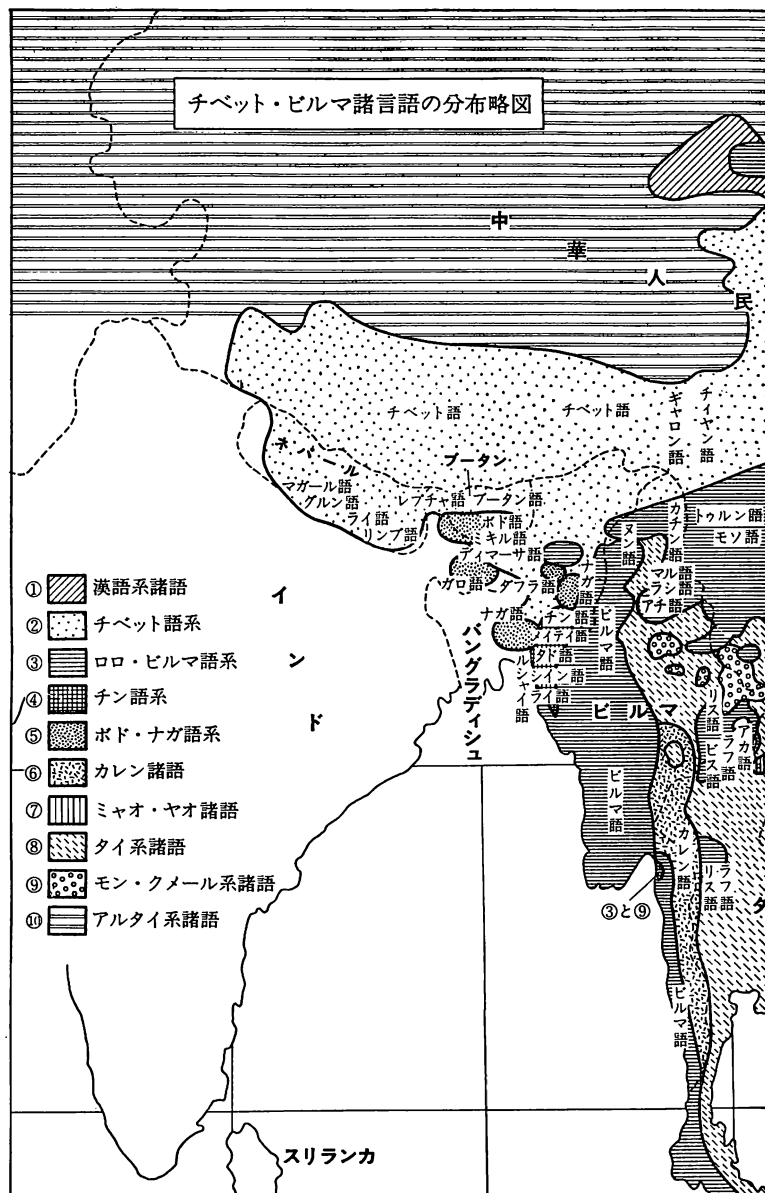
語・ナガ語と、ボド語系を媒介する言語と見做すべきであろう。
同じくアッサム州で話されるボド語系の言語は、西部のボド語と中央北部のガロ語に大別される。[24] 前者は約二〇万人、後者は三〇万人ぐらいの話手がいるが、言葉全体から見れば両者はやや異った言語タイプに属している〔12〕。
カチャリ丘陵に分布するディマーサ語は、一万五千人ぐらいの話手をもつ言語であり、ボド語と同系とされるが、よく古形態を保っている。ガロ語・ボド語に比べ、語幹末尾の子音 -n, -ng を保存するとか、mV- gV- の音節的接頭辞をもち、その母音が語幹母音と調和するなどの特徴がある。たとえば、ma-gaing〈寒い〉、ma-thi～mi-thi〈知る〉、mo-lô〈のみ込む〉、ga-khâ〈にがい〉、gi-bim〈厚い〉、gu-sum〈黒い〉など。
そのほかボド語系には、さきに述べた狭義のナガ語群が属する。モシャン語、ナムサンギャ語、コイナック語がその代表とされる。
北アッサムの中核をなす言語群もボド語系であり、アボル・ミリ語群とよばれる。実際には、アボル語は、ミリ語の一つの方言と理解してよい。[25] またアッサムのダランとラキムプルに分布するダフラ語が、西の大きい方言ヤノ方言と東のタゲン方言をもって、その地域に分布する。この二方言は、タゲン方言の方が変形していて、違った言葉に聞えるが、書き表わすと、その親近性がはっきりする。[26]〔13〕にあげた簡単な語彙対照を見られたい。
そのほか、ネパール地域に重要な言語群が分布する。いずれもチベット語系の言語と考えてよいが、チベット語群、グルン語群、カム語群、マガール語群、ライ語群などの諸語群が知られていて、ごく最近積極的に調査され、多くの資料が公表されている。[27] しかしなお詳細が不明なところも多く残っている。
チベット・ビルマ系言語は、いま述べて来たように、北はチベット、東は中国の四川省・雲南省、南はビルマ、西はインドのアッサム州からネパールにかけて、広大な地域にわたって分布する。ごく大雑把にいうと、それぞれ北にはAのチベット語系、東にはBのロロ・ビルマ語系、南にはCのチン語系、西にはDのボド・ナガ語系の諸言語が配

〔12〕	Bodo	Garo	Mikir	Thado	Meithei
〈血〉	təiˀ	aˀn-ci	avi	thī	i
〈水〉	dəi	ci	lang	tui	i-sing
〈死ぬ〉	təi	si	thi	tī	si-ba
〈骨〉	be-geˀng	greng	re-pi	ghū	saru
〈角〉	gong	grong	nu	kī	saji
〈家〉	noˀ	nok	hem, don	in, chen	yum
〈魚〉	naˀ	naˀ-tok	ok	ngā	ngá
〈口〉	ko-gaˀ	ku-sik	ingho	khā(あご)	chil khadang(あご)
〈目〉	moˀ-gon	mik-gir[e]	mek	mit	mit
〈火〉	oˀr	waˀ-ar	me	mē	mae
〈花〉	biˀ-bar	bi-bar	mir	pābeng	lai
〈名前〉	mung	bi-mung	men	min	ming
〈道〉	la-ma	ra-ma	ali	lambī	lambi

ボド語系言語とチン語系言語

〔13〕	Dafla(Yano)	Tagen	Miri	Abor
〈血〉	oi	oi	i-yi	i-yi
〈水〉	ishi	ishi	a-shi	a-shi
〈死ぬ〉	sito	sito	shi	shi
〈骨〉	solâ	allo	a-long	a-long
〈角〉	reng	eringè	â-reng	a-reng
〈家〉	ogu	nam	é-kum	
〈魚〉	ngai	ngui	o-ngo	e-ngo
〈口〉	gam	agöm	nâp-pa(ng)	âg
〈目〉	nyek	enyiˀ	a-mik	a-mik
〈夢〉	nyemâ	mâna	mâ-nyi(ng)	im-ma(ng)
〈火〉	umè	umè	í-mí	e-me
〈花〉	pung	opo	pop-tíng	
〈名〉	mungmin	èmin	a-min	a-muin
〈熟す〉	minpa	mindo	min	
〈道〉	laong	lamta	lambe～lamte	
〈子供〉	kao	ko	ko	kó

ダフラ語とアボル・ミリ語

置されていることになる。そして東部と南部の地域では、単語形式は簡略化し、とくに接頭辞・接尾辞の大部分は機能を失ったのに対して、北と西の地域では、多音節言語として、今なお活発に音節的接頭辞が使われ、また南部と西部の地域では、人称接辞が動詞の活用形として、機能しているといえる。媒介言語として認められるギャロン語やカチン語は、共通した語彙をもつと共に、それらの接頭辞や人称接辞をも所有する複雑な言語である。[28] たとえば、カチン語の接頭辞は、ディマーサ語やミキル語に対応形をもっている〔14〕。

〔14〕

	Kachin	Dimasa	Mikir
〈にがい〉	a-kha	ga-khâ	keho
〈長い〉	ga-lu	ga-lâo	keding
〈寒い〉	ka-šung	ga-saing	kechung

以上、チベット・ビルマ諸語の分布と分類をごく簡単に述べたが、そのような言語系を背景として、Aの言語系とBの言語系をそれぞれ代表する古典語すなわちチベット文語およびビルマ文語と日本語の系統関係を考察していきたい。

各言語の形態素や単語構成を知るために、まず語幹形式の構成法から言語間の対応を求めていきたい。

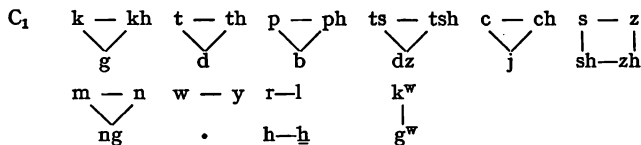
三　蔵緬語の語幹構成法

1　基本的語幹構成と日本語

まず、チベット・ビルマ語(蔵緬語)の形態素の語幹構成について、一つの仮説を示してみたい。意味の最小単位は、語根 C_1V に拡張辞をつけて作られた $C_1V\ C_2$(C_1C_2 は共に複子音でもあり得た)の形式をとったと仮定する。この語幹形式には接頭辞と接尾辞が添接され得た。接頭辞・接尾辞は、いずれも母音を伴わない単純子

〔15〕　語根　C_1V ⟶ 基本語幹 $C_1V\,C_2$

C_1　k — kh　t — th　p — ph　ts — tsh　c — ch　s — z
　　　　g　　　d　　　b　　　dz　　　　j　　sh—zh

　　m — n　w — y　r—l　　k^w
　　　ng　　　・　　h—h̲　　g^w

-C_2(拡張辞)　-m　-n　-ng　-b　-d　-g　-r　-l

複子音第２要素　-r-　-y-　-l-　-s-　-w-

接頭辞(pref.)　*g-　d-　b-　m-　n-　ng-　h̲-　s-　r-
　　　　　　gV-　dV-　bV-　mV-　nV-　　h̲V-　sV-　rV-

接尾辞(suff.)　*-ng　-n　-m　-as　-s　-ed
　　　　　　-g　-d　-b　-ar　-ad

母音　a　i　u　e　o

語根⟶語幹例

TB √g^{w}o　〈戸〉　pref. C_1V＝WrT *sgo*: OJ to

TB √gu　〈曲がる〉　pref. C_1V＝Kachin măgaw: OJ *magu-ɸu＞mag-ɸu

TB √du　〈厚い〉　pref. $C_1V\,C_2$＝WrT *h̲thug.*: OJ atu(-si)

TB √da　〈抱く〉　C_1V suff.＝OJ dak(-ɸu): Nasu ta 22

TB √mra　〈見る〉　C_1V 拡張辞＝WrB *mra-ng*
　　　　　　　C_1V＝OJ *miru-ɸu＞mir-ɸu

TB √bu　〈降る〉　pref. C_1V 拡張辞＝WrT *h̲bud-pa*: OJ ɸur-ɸu

音から成っていたが、中には一音節の形をとるのも少数あったと考えられる。いまの段階では、それらの接頭辞・接尾辞のすべてについて、具体的な機能をはっきり指定することは、到底不可能ではあるけれども、音形式と種類は、かりに〔15〕のように設定できる。

末尾子音が拡張辞なのか接尾辞なのかの弁別はむつかしい時があるが、チベット語の〔16〕の例のように、末尾子音の対立が、はっきりとした機能を示す場合には、これらの *-b -m, -d -n, -g -ng* にあたる単位を接尾辞と呼んでよいであろう。

つぎに、チベット語と日本語の語幹構成について述べてみよう。暫定的な語根をいくつかあげるが、はじめに〈集まる〉√du を立ててみる。まず、初頭子音の対立、この語根では、d-: th- の対立があった。後者は他動詞的な意味をもたらした。そして接頭辞 h̲- と s- が添接される。この二つの接頭辞は、〈状態〉と〈行為〉の対立をあらわしたものと考えている。その組合せから、h̲du-, h̲thu-, sdu-

〔16〕WrT
- *zab-pa*〈深い〉 / *zam*〈橋〉
- *gcid-pa*〈小便〉 / *gcin-pa*〈放尿する〉
- *btsog*〈汚い〉 / *gtsang*〈きれい〉

〔17〕WrT
i) *ḫdu-ba*〈集まっている〉
ii) *ḫthu-ba*〈集める〉
iii) *sdud-pa*〈集める〉

〔18〕

	pref. CV#[29]	pref. CVm
u 語幹	WrT *ḫdu-*	OJ atum-
o 語幹	OJ tudo-	WrT *ḫdom-*

が作られる。最後の語幹には、さらに拡張辞 -d が添接され、動詞基本形の助詞 -pa がついて、〔17〕(i)(ii)(iii)の単語が構成される。

語幹形式 ḫdu- にもっとも近い上代語形は tudo-ɸu〈集ふ〉であると考える（助詞 -ɸu については、二六三頁を見られたい）。しかし、その対応形が o 母音をとる語幹 do であることと、先行する tu は、あとで述べる重複形式なのか接頭辞にあたるものかはっきりしない点で、TB *ḫdu を直接反映する形式であるか否かは疑問が残る。

つぎに o 母音をとり、接尾辞 -m をともなう形式 *ḫdom-pa*〈集まる〉と *sdom-pa*〈結び付ける〉が派生する。前者の語幹には、上代語 a-tum-ɸu（他下二）〈集める〉と（それからの派生形 a-tum-ar-ɸu〈集まる〉）があたる。両者の対応関係を、WrT *-om* : OJ -um とすべきか、あるいは、日本語形は u 母音を、チベット語形は o 母音をもつ別の語幹形式と解釈すべきかは、音韻対応を考える上で重要な事柄である。また後者の見方からすると、a-tum-ɸu は、u 母音をもつチベット語形、*ḫthum-pa*〈重ねる〉に対応する可能性がある。いまは、〔18〕のように対照させておく。

日本語形 a- が、チベット語 *ḫ-* に対応する例は少なくない。したがって、日本語の動詞に接頭される a- も〈状態〉を示す接頭辞であった可能性を考えることができる。

チベット語には、接尾辞 -n がつく形、*ḫthun*〈集めるもの〉（この *-n* は古い完了態の接尾辞であって、名詞を構成する）のほかに、〔19〕の諸形式があって、いずれも同一の単語族に属する。[30]

〈摘む〉TB *da にも、〈集む〉と同じように、接尾辞 -m をとる形がある。あるいは、TB *du と TB *da には同じ語根 √da をたてた方がよいのかも知れない。この -m 接尾辞をもつ形式 TB *pref. dam には、チベット語も日本語もはっきりと

〔19〕 TB *dom→tham WrT *h̲tham-pa*〈結ぶ〉 TB*dum→dzum WrT *h̲dzum-pa*〈閉じる〉
TB *dom→dzom WrT *h̲dzoms-pa*〈集まる，会う〉TB*dzom→tshom WrT *tshom-pa*〈束〉
TB *do→tsho-g WrT *h̲tshogs-pa*〈集める，出会う〉
TB *dzum→dzlum WrT *zlum-pa*〈まぜる〉 TB *da→dzab WrT *gzab-ma*〈束〉
TB *dzum WrB *cum-*〈重なる〉 WrB *chum-*〈会う，集まる〉
TB *dom→khom Thado khōm〈集める〉 Meithei khom-síl-ba〈集める〉

チン系言語では TB *sd-: kh- の対応が認められる.

〔20〕 TB *pref. da_2m (-pa)
WrT *h̲dam-pa*〈摘む〉: OJ tum-ɸu〈摘む〉
TB *a_2→WrT *-a*: OJ -u

〔21〕 TB *pref. thum (-pa)
WrT *h̲thum-pa*〈包む，つみ上げる〉: OJ tutum-ɸu
WrT *thums*〈包み〉(完了形): tutumi〈包み〉(連用形)

〔22〕 OJ tidim-ɸu〈縮む〉: WrT *h̲dzem-pa*〈縮む〉
OJ kagam-ɸu〈曲る〉: WrT *h̲gum-pa*〈曲げる〉
OJ sosok-ɸu〈注ぐ〉: WrT *gsho-ba*〈注ぐ〉
OJ susum-ɸu〈進む〉: WrT *song*〈行くの完了，命令形〉
OJ tatam-ɸu〈たたむ〉: WrT *ltab-pa*〈たたむ〉

対応する形をもっている。その共通語幹は、日本語の対応形から見て TB *da_2m としたい〔20〕。
〈包む〉TB *thum も同様に、チベット語と日本語の間で、語幹形式はよく対応する〔21〕。*btum-pa, gtum-pa*〈包む〉は、*h̲thum-pa* の第二完了形および未来形式である。それに対して、*thums* は第一完了形が名詞化された形で、日本語の連用形 tutumi のはたらきと相応じている。

日本語には〈包む〉tutum-ɸu に代表されるような重複形式があった。この重複形は、祖形の形態法を伝承したものか、日本語で独自に発達したものか、あるいは重複のはじめの形式が何らかの接頭辞を反映したものであったか、それともたとえば〈包む〉は、上述の〈摘む〉と弁別するために、語幹の一部を重複させたのか、いまは明らかではない。ほかの重複形式に関しても、対応すると考えられるチベット語形には、そのような重複形は認められない。
〔22〕の重複形 CV CV C-pa (*XY XY* C-pa) は、あとの三形式(そのほか)で suzum- などとならないために、tidim- はもともと *didim- であり、ka-

〔23〕 TB *kha-b/m(-pa)→WrB *khap*〈汲む〉: OJ kum-φu＜*khum-

TB *Cra-b/m(-pa) →WrB *rap*〈止む〉: OJ yam-φu＜*Cram-

〔24〕 WrT *ḫgam-pa*〈口に入れる〉: OJ kam-φu〈かむ〉

〔25〕 WrT *ltams*〈満ちる〉: OJ tom-φu〈富む〉

tam-φu〈たまる？〉

WrT *gtams-pa, gtoms*〈満ちた〉(形): OJ tomi〈富み(人)〉(形)

〔26〕 TB *do-d→WrT *sdod-pa*〈宿る，滞る〉: OJ ya-dör-φu〈宿る〉

TB *do-m→WrT *sdom-pa*〈留める，止める〉: OJ töm-φu〈留める〉

cf. WrT 完了形 *bsdoms*＜*bsdom-as: OJ 連用形 tömë〈留め〉

WrT *-od*: OJ -or, WrT *-om*: OJ -öm, WrT *-oms*: OJ -ömë

の音韻対応には並行する例がある.

gam- は *gagam-φu であったのではないかと推定できる。いずれにしても、この重複形は、上代語において重要な形態手順であったのであろう。日本語には、〔22〕にあげた〈たたむ〉に見られるように、動詞接尾辞 -m がよく使われたらしい。たとえば、〔23〕。

もちろん、チベット語も日本語も共に接尾辞 -m をもつ語幹も少なくはない。

TB *kha〈口〉の派生形として、-m をとる語幹 TB *pref. kham は、〔24〕のように、対応形式がよく保存され、TB *pref. tam〈満ちる〉の語幹から、〔25〕などの単語が派生している。[31]

また、WrT *ḫchom-pa*〈終る、済む〉には、J sum-φu＜*tsum-φu〈済む、決着する〉（この意味は、上代語には確認されていない？）が、対応するように考える。このWrT *-om* と J -um の対応も、上掲〈集める〉と並行する例である。

TB √do〈坐る〉からの派生語幹は、拡張辞 -d と接尾辞 -m で作られ、チベット語形と日本語形は、〔26〕のように両形式ともよく対応する。上代語形〈宿る〉は、ya-〈家〉との複合形式において、語幹初頭の有声初頭音を保存した。日本語では、初頭音は原則として無声音化する。

〈染める〉を意味する単語は、大陸からの技術の導入と関連づけられて外来語のように扱われることがある。しかし、染める行為は、原初的な形態として存在し、som-φu は固有の日本語であると見てよい。

TB *tsho〈染める〉にも、〈坐る〉と同じように拡張辞 -d と接尾辞 -m がついて、語幹形式がつくられた。しかしこの形態素の場合、チベット語では *tshod* の方が採用され、日本語では som-＜tshom- が使われている〔27〕。〈染める〉と同じ語根から派生したと考えられる日本語の〈初む〉〈…し初める〉は、〈染める〉と同じく接尾辞 -m をつけた語幹形式をもっている。TB *tshom。しかし、この形態素では、〈染める〉とは違って対応するチベット語形も、日本語と同じく -m 語幹形式になっている。したがって、〈染める〉と〈初む〉は、チベット語では、*tshod と *tshom のように末尾音が対立することになる〔28〕。

これに対応するビルマ文語形 *ca*³- は、a# の形を示しているが、その声調から見て、古くは末尾に拡張辞をもっていた可能性が大きい。同じ語根から派生したと思われる〈浸む〉は、日本語では、〈染む〉と〈初む〉がö母音をとるのに対して、i 母音を語幹にもつが、それに対応する形式がビルマ語にある〔29〕。

以上見て来たように、各語幹は、いろいろの機能をもって添接される拡張辞や接尾辞によって特徴づけられた。したがって、そのような拡張辞や接尾辞のあらわれ方が、古代日本語形を性格づけたといえる。しかし、たとえば、〔30〕の例に関して考えられるような問題、すなわち日本語には末尾の -ŋ がはじめからなかったのか、あるいはある段階でそれが消失したかの決定は、保留せざるを得ない。

各言語の形式を性格づけているいま一つの大きい特徴は語幹母音である。

〔27〕　TB *tsho-d (-pa)　　*tsho-m (-pa)
　　WrT *ẖtshod-pa* (pf *btsos*) : OJ som-ɸu＜*tshom-ɸu
　　TB *tsho-n (古い完了形)→WrT *ẖja-tshon*〈虹〉(染まった ẖja の意)
　　TB *tsho (-pa)→WrB *cho*²-＜chɯ²-〈染める〉

〔28〕　TB *tshom
　　WrT *rtsom-pa*　＜*r-tshom-pa :　OJ söm-ɸu (下二)〈初む〉
　　完了形　*rtsams*＜*r-tsham-as :　連用形 sömë〈初め〉＜*tshöm-ai

〔29〕　TB *-im　→ OJ -im　: WrB *-im*
　　TB *tshim～tsim (?)→ OJ sim-ɸu〈浸む〉: WrB *cim*-〈浸みる〉
　　TB *tshom (-pa)　→ OJ söm-ɸu〈染む〉: WrB *cho*²-〈染める〉
　　TB *tshom (-pa)　→ OJ söm-ɸu〈初む〉: WrB *ca*³-＜*caC〈始まる〉

〔30〕 OJ wa : WrB *wong*[2]〈輪〉

OJ ut-ɸu<*utu-ɸu : WrT *rdung-ba*〈打つ〉

〔31〕 〈血〉 TB *i) tshal ii) tshuy iii) tshiy

i) *tshal : WrT *mtshal*

ii) *tshul : WrB *swei*<suy<tshuy Kanauri shui

iii) *thiy : Dimasa thi Lushai thi Thado thī

Garo an-chi Nyi-Lolo sẓ 55 Meithei i

〔32〕 〈足〉 TB *i)kha-ng ii)khuy iii)khriy

i) TB *kha-ng: WrT *rkhang-pa* Meithei khong Thado keng<*kang

Garo ja•a Tamang kāng

ii) TB *khriy : WrB *khrei*<khriy Nyi-Lolo tshẑ 11 be 44 : OJ a-si

iii) TB *khuy : ?

語幹母音の性格については、単にチベット文語とビルマ文語のみではなく、もう少し広い範囲でチベット・ビルマ系言語を取り上げ、説明する必要がある。

たとえば〈血〉は、チベット語では *khrag*/ṭshaa/ である。この対応形式の分布は、チベット方言に限られる。たとえばカーガテ方言 /ṭhaa/、ロミ語 /ṭhák/、チベット語には、そのほかに *khrag* の敬語として使われる *mtshal* がある。これは〈朱〉の意味をもっているが、もともとは〈血〉であったらしい。チベット語では敬語体系が発達しているが、語彙敬語はなお検討する必要があって、他言語との語彙比較で意味をもってくる場合がある(あとであげる〈衣〉もその一例である)。

この *mtshal* を含めて、蔵緬語の〈血〉には、〔31〕の三つの代表的な形式があった。日本語の ti〈血〉は、最後の TB *thiy に対応する形である。TB *th-: OJ t-, TB *-iy: OJ -i この例に見られるような *-ay<*-al, *-uy, *-iy の三形式が、音韻対応関係を示すのか、それとも、蔵緬語にあった一種の母音組織の三階程を代表するのかは、今は結論を得ないが、同種の例を二、三あげてみたい。

日本語形 a-si<*a-tshi は TB ii) *khriy に対応する。上代語 a が単独で〈足〉の意味をもつのは、のちの変化であろうと考える。この日本語形 a-si の存在は、日本語でもビルマ・ロロ語と同様に *khr->ch->s- の変

〔33〕 〈汗〉 TB *khruy : WrB *khywei*<khuy Nyi-Lolo tçæ 55 : OJ a-se<*a-tshwe
〈十〉 TB *i) chay ii) chu iii) chiy
i) TB *chay : WrB *chay*
ii) TB *chu : WrT *bcu*, bcwo>*bco* Thado sō-m ke chyu Thakali cyu
iii) TB *chiy : Dimasa dźi Nyi-Lolo tshɪ 33
Kachin tśi〜śi Tamang ici

〔34〕 OJ so <tso 〈麻〉 : WrT *so-ma*
OJ so <tso 〈十〉 : WrT *bcu*
OJ sö <tsö 〈衣〉 : WrT *na-bzah̲* (*gos* の敬語形)

化をたどったことを示している〔32〕。〈汗〉にも同じ変化が認められる〔33〕。

日本語形 töwo あるいは so がこの chu に対応すると考えられるが、もう少し詳しく説明しておきたい。チベット語形 *bcu* は、〈十五〉と〈十八〉に限って形を変え、*bco-lnga*〈十五〉、*bco-brgyad*〈十八〉のように、*bco-* となる。さらに古いテキストでは、*bco-* に替って、bcwo- と記録されている[32]。したがって、bcwo が、上代語 töwo<*tö-wö に対応する可能性が十分にでてくる。WrT *c-* と OJ *t-* が対応し、cw- の間に母音が挿入され、そこに母音調和がおこり、アクセントは低低型(?)をとった。ところが、一方で *bcu* は、上代語の複合形式 miso〈三十〉、yöso〈四十〉に出てくる -so<-tso と対応し得る。後者には、〔34〕の近似する対応例がある。

〔34〕の例は、かつて弁別されたいくつかの形式を、上代語が大幅に統一した一例として、その対応関係は否定し難い。この二つの事実をつぎのように解釈してみたい。チベット語とは逆に、日本語では、複合形に *bcu* にあたる so があらわれ、単独形として、bcwo にあたる töwo がひろまった。つまり、〈十〉に関しては、日本語はチベット語と極めて近似した変化をたどったことになる〔35〕。

蔵緬語における母音組織、母音の交替関係はまだはっきりとはわからない。しかし、上述のように、各言語が特徴のある母音をとり、しかもその母音の性格が語幹ごとに違っていて、規則的な音韻対応を示さない場合には、それぞれの形式が異った母音をもった語幹に対応していると考えた方が解決しやすい。いま一つ別の例を出して見よう。

〔35〕 TB *pref. chu→WrT *bcu* 単独形：OJ *-tsho＞-so 複合形
TB *pref. chwo→-bcwo- 複合形：OJ *töwö＞töwo 単独形

〔36〕 TB *grog(-ma)→WrT *grog-ma*, WrB *pa-rwak* Sharpa
ṭomok＜*grog-mog, ṭong-ma Maru păryup
Dafla torûb＝tarup〈赤蟻〉 Akha a-ho Lahu pú-ɣɔʔ
TB *greg(-ma)→WrT *gre-mog*：OJ ari

〔37〕 TB *gro(-pa)→WrT *ẖgro-ba*〈歩く，行く〉：OJ aru-k-ɸu〈歩く〉
TB *gtso(-ma)→WrT *gtso-ma*：OJ asa＜atsa〈麻〉
TB *gtong(-pa)→WrT *gtong-ba*：OJ ata-ɸu
(pf. *btang*)

〔38〕

	Mikir	Dafla	Sema
〈黒蟻〉	miso-rong-po	mha cho	ashukhu
〈白蟻〉	arlo, karlo	mekrö	alhakhu
〈赤蟻〉	arti, cherat	chohā	atisü
〈羽蟻〉	pho-long	shülhe	alhu
(総称)	miso	mhacho	alhache

〈蟻〉を意味するチベット語形は *grog-ma* である。これに対して *gre-mog ẖbu* という形もある（*ẖbu* は〈虫〉の意）。ベネディクトは、後者の形とビルマ語 *khrip*〈ラック〉、カチン語 krep～səkrep〈昆虫〉、キランティ語 *khrep を根拠として、〈蟻〉TB *krep を立てたが[33]、もう少し〈蟻〉の分布をしらべると、〔36〕のように表示できる。

この語幹形式は、それぞれ o 母音、e 母音をとっていて、日本語の ari は、後者の方の語幹に対応するのではないかと推定できる。

チベット語 *g*-：日本語 *a*- の対応には、〔37〕などの例がある。

上例の中、ビルマ語形、マル語形の pa- は、ラフ語の pú と同じく、〈虫〉を意味すると考えられるが、確かではない。ニー・ロロ語 ka 55 u 44 ma 33、アヒ・ロロ語 ka 55 va 22 は、まったく別の語幹の単語であり、ボド語系、チン語系の方言には、蟻の種類によって、数種類の形式がある。たとえば、〔38〕。

これらの形式は、上述の蔵緬語形式のどれとも対応しない。諸形式分布の詳しい調査は、チベット・ビルマ系言語の中、とくに西の地域に分布する諸言語の複雑さを次第に明瞭にすることになる。

2　単音節言語から複音節言語への発展

さきに筆者は、上代日本語を形成し、その形態を特徴づけた二つの大きい変化の流れとして、単音節を複音節化する方向と、類似の意味をもつ二つ以上の形態素を組み合わせて、単語を構成する方向を指摘した。そして、はじめにあげた流れの主体は、具体的には複子音の子音間に母音を挿入していく変化であったことを述べた。

つぎに、この母音挿入をはじめとする日本語の多音節化について検討していきたい。

母音挿入は、(1)語幹内部の初頭の位置にある子音結合の間、または、(2)単純子音の接頭辞と語幹初頭音がつづく子音連続の間に、あらわれた。もちろん、すべての形式に、この現象が起ったわけではない。

複子音の発展には、左の表が示すように、四つの可能性がある。第一は、あとの子音が脱落する。第二は、はじめの子音が脱落する。第三は、第一と第二の子音が融合する。第四は、第一と第二の子音の間に母音が挿入される。その四つである[34]。日本語の発展過程で、このいずれもが、一定の条件に支配されて起ったと考えられるが、とくに第四の形式に変化する場合が多くあった。そして、挿入される母音の性格は、語幹母音と調和して決定されるのが原則であった。そこにいわゆる母音調和が起った。日本語の母音調和が、語尾にまで及ばないのは、このような発生の理由から了解することができるであろう。

複子音の発展

	C_1		C_2	V-
1.	C_1			V-
2.			C_2	V-
3.		C_{12}		V-
4.	C_1	V	C_2	V-

たとえば、〔39〕の語幹がそれである。*dr-, gr-, mr-* のような結合をもつ動詞・形容詞では、挿入される母音が i であることがまれではない。この i 母音は、似非母音と呼んでおきたい〔40〕。

接頭辞と語幹初頭音の間に起った母音挿入には、〔39〕にあげた〈袋〉の例がそれに該当するが、そのほかに〔41〕の諸例がある。これらの例からみて、蔵緬語の接頭辞に対する上代語形

〔39〕 TB *kru～tru 〈鶴〉 : OJ turu : WrB *kro*^{2}*-kra*
TB *kru～tru 〈弦〉 : OJ turu : WrB *lei*^{2}*-kro*^{2}
TB *dri 〈塵〉 : OJ tiri : WrT *dri-ma*
TB *gro～dro 〈芋〉 : OJ tororo : WrT *gro*
TB *gral 〈座〉 : OJ kura : WrT *gral*
TB *mro 〈種々〉 : OJ mörö : WrB *a-mro*^{2}
TB *bra 〈藁〉 : OJ wara : WrB *phya*<*phra*
TB *sgro 〈袋〉 : OJ φukuro : WrT *sgro*

〔40〕 TB *dr-～gr- →WrT *dr-～gr-* : OJ kir-
*pr- →WrB *pr-* φir-
TB *dra～gra(-pa)〈切る〉→WrT *dra-ba* : OJ kiru-φu
TB *drag(-pa)〈高貴な〉 →WrT *drag-pa* : OJ kiragira-si[35]
TB *ẖgra(-pa)〈嫌う〉 →WrT *ẖgra-s-pa* : OJ kira-φu
TB *pra(-pa)〈平たい〉 →WrB *pra*^{2}- : OJ φira-

〔41〕 WrT *sna*〈鼻〉 : OJ φana <TB *sna : sVna
WrT *skum-pa*〈すくむ〉 : OJ sukum-φu <TB *s-kum- : sVkum
WrT *stor-ba*〈失われる〉 : OJ sutur-φu <TB *s-tor : sVtur
WrT *dgar-ba*〈分かれる〉 : OJ wakar-φu <TB *d-gar- : wVkar
WrT *gsag-pa*〈縫い合わす〉 : OJ φusag-φu <TB *g-sag- : sVsag-
WrT *gdang*〈言葉の調子〉 : OJ kötö〈言〉 <TB *g-dang : kVtang
WrT *mchod-pa*〈祭る〉 : OJ matur-φu <TB *mchod : mVchur

〔42〕 Dimasa gabang 〈多量の〉 gosong 〈絶壁〉 gusum 〈青い〉
gepher 〈平たい〉 gimin 〈熟す〉 bala 〈弓〉
bugur 〈皮〉 buru 〈ひっ掻く〉[36]

式が、必ずしも統一された対応形を示していないのは、単語によって、古代日本語形式と、チベット語形式が一致した祖語の形式をもっていなかったためであろうと考えられる。たとえば φusag-φu の φu が *gsag-pa* の g と一致しないのは、TB *pref.→WrT *g-*: OJ φu- の対応規則が成立しない限り、それそれが独自の接頭辞をとっていたこと、そしてまた φu と sag が母音調和を示していないのは、この φu が音節的接頭辞であったことをも示唆しているのかも知れない。

いずれにしても、このような母音調和は、さきに述べたアッサム地域に分布するボド語群のディマーサ語に、はっきりと認められる(42)。したがって、これと極めて類似した現象が、東の地域の日本語において、上代語に到達する以前に、起ったと仮定しても無理ではない。

一方、チベット語に認められる接頭辞に、日本語が全く対応する形をもたない場合がある。この関係は、日本語が

蔵緬語の接頭辞をもたない基本語幹形を伝承したのに対して、チベット語の方は独自に接頭辞を添接した形式を反映しているのか、それとも日本語がかつてもっていた接頭辞をのちのある段階で脱落させたのかは、この対応関係のみからは決定し難い〔43〕。

チベット語の m- の一部は、身体部分の名詞につく接頭辞として知られているが、[37] 接頭辞 g- がどのような機能をもっていたのかは、まだすっかり解明されてはいない。

〔43〕 TB *CVC→WrT pref. CVC : OJ CVCV
WrT *gzhi-ma*〈地面〉 : OJ si-ma〈島〉
WrT *mche-so*〈牙〉 : OJ ki-φa>kiba〈牙〉
WrT *mchin-po*〈肝〉 : OJ ki-mo〈肝〉
WrT *gnas-po*〈主人〉 : OJ nusi〈主〉

〔44〕 TB *h̲drub〈縫う〉→WrT *h̲drub-* : OJ nu-φu<*nuφ-φu
TB *h̲drud〈塗る〉→WrT *h̲drud-* : OJ nur-φu
TB *h̲dre〈悪霊〉→WrT *h̲dre* : OJ oni〈鬼〉
TB *h̲dra-ba〈似る〉→WrT *h̲dra-ba* : OJ nirφu<*niru-φu

〔45〕 〈縫う〉 *h̲drub-> ndrub> nrub> nuφ-
〈似る〉 *h̲dra-> ndra-> nra> niru-

第三の融合の方法は、つぎのいくつかの形態素をもとに考察してみよう。

上代語 nu-φu〈縫う〉は、チベット語の *h̲drub-pa* に対応する。さらにこのチベット語形には、ビルマ語 *khyup-* が対応する。WrT *dr-* : WrB *khy-*∧khr- の対応は規則的な関係であって(たとえば〈六〉WrT *drug* : WrB *khrok.*)、TB *dr-～gr- の自由交替を想定させる。事実、敦煌やトルケスタンからもたらされた文献には、gr- と dr- の交替を示す例は多く見られる(たとえば WrT *h̲dril-ba*=*sgril-ba*〈包む、くるむ〉)。[38]

さて、第三の融合の一つの例として、チベット語の *h* をともなう *h̲dr-* に、上代語 n- が対応する事実を指摘しよう。この対応があり得ることは、つぎの数語の並行した例の存在から考えられる〔44〕。

最後の例は少し条件が異っていて、この変化を仮りに〈縫う〉と対照して推定すると、〔45〕のようになる。〈似る〉の例では、nr->n- の変化が起るまえに、さきに述べた母音挿入という現象が生じたのであろう。〔32〕にあげた〈足〉の例のように TB *khr- に OJ *tsh->s- が対応するのも、この第三の融

合への流れに該当する。

第一の段階はビルマ文語、第二段階はビルマロ語とロロ系言語、第三段階は上代日本語がそれぞれを代表している〔46〕。〈犬〉のニー・ロロ語とアヒ・ロロ語共通形は、〈足〉と同じ形をもった TB *kh-riy であったと考えざるを得ない〔47〕。

そのほかロロ系言語では、ビス語 khɯ、アカ語 ʔa-khɯ、ハニ語 khə 21 のように、いずれも TB *khiy にあたる。もし大胆な推定が許されるならば、TB *khiy *khriy に対して TB *ḫdra の形があって、ḫdra→ndra>nra>na が成立し、リス語 a-nah と日本語 i-nu がその形式を反映していると考えることも、まったく無理な推定ではなくなる。リス語には、*khiy に対応する形とこの *ḫdra を反映する形の両形式があって、前者はもっぱら、十二支の戌を表現するのに限定され、後者が一般の犬にあてられた[39]。また、日本語形の i-nu の i は、TB *ḫhyi の初頭子音が脱落した形式であった可能性もあり得る(たとえば〈家〉などと同じく。二五七頁参照)。もしそうであれば、i-nu も、犬を意味する類義語の複合から成る単語であったこと

〔46〕

	第一段階	第二段階	第三段階
TB	khr-→khr-	tsh-(tšh-tɕh-)	s-

〔47〕 TB *khriy〈足〉→

AncBur	WrB	ModBur	Nyi-Lolo	Ahi-Lolo	OJ
khriy :	*khrei* :	tšhei :	tshẑ 11 be 44 :	tɕhi 22 bie 22 :	a-si

TB *khruy〈汗〉→

AncBur	WrB	ModBur	Nyi-Lolo	Ahi-Lolo	OJ
khruy :	*khywei* :	tšhwei :	tɕæ 55		a-se

TB *khiy *khriy〈犬〉→

AncBur	WrB	ModBur	Nyi-Lolo	Ahi-Lolo	OJ
khyiy :		: tšhei :	tshẑ 11	: tɕhi 21	: (i-nu)

〔48〕 WrT *gru-wa*〈角〉→*ru-wa*～*ru*〈角〉
WrT *bgres*〈年寄った〉→*res*〈年寄った〉
WrT *grogs*〈友〉→*rogs*〈友〉
WrT *sgrig-pa*〈整頓する〉→*rig-pa*〈整頓する〉

になる。

第二の方向、すなわち、第一子音が脱落する現象は、たとえば〔48〕のように、チベット語自体にも顕著にあらわれ、また同じような関係は、チベット文語とビルマ文語との間にも認められる〔49〕。

〔49〕 〈胸〉 WrT *brang* : WrB *rang*
〈家〉 WrT *khyim* : WrB ·*im*＜**yim*
〈陰〉 WrT *grib-ma* : WrB *a-rip*
〈戦う〉 WrT *h̲gran-pa* : WrB *ran-*

〔50〕 TB *myo-ba : WrT *myo-ba*〈酔う〉 : OJ yo-ϕu
TB *pref. phyo-ba : WrT *h̲phyo-ba*〈泳ぐ〉 : OJ oyok-ϕu
TB *khyim : WrT *khyim*〈家〉 : OJ iϕe＜*yipe
TB *pref. gyug(-pa) : WrT {*h̲khyug-pa* / *rgyug-pa*}〈去る，行く〉 : OJ yuk-ϕu
TB *sdrag(-pa) : WrT *sreg-pa*〈焼く〉 : OJ yak-ϕu
TB *brgyad : WrT *brgyad*〈八〉 : OJ ya-tu
TB *prud(-pa) : WrB *prut-*〈ゆでる，沸かす〉 : OJ yud-ϕu

〔51〕 i) TB *dra〈切る〉→WrT *dra-ba*: OJ *kiru-ϕu(i 母音挿入)
ii) TB *dra＋拡張辞 l→TB *pref. dral-ba→WrT *h̲dral-ba*〈切り裂く〉
iii) TB *dral＋gri〈刀〉→〈切り裂く刀＝剣〉→WrT *ral-gri*

〔52〕 TB *pref. khris→ WrT *h̲khris*〈岸〉 : OJ kïsi〈岸〉
TB *khram → WrB *khram*〈かこい〉 : OJ kabe〈壁〉
TB *bra → WrB *pya-tu*〈蜂〉 : OJ ϕa-ti〈蜂〉

日本語とチベット語・ビルマ語の間にも、同じ現象が認められ〔50〕、これらの例から、蔵緬語の子音結合の第二子音 r- には、日本語の y- が主として対応したと推定できる。

第二の方向を示す単語、つまり $C_1C_2V \to C_2V$ となる単語には、まず〈剣〉の例があるが、その派生関係から見ていこう〔51〕。

〔51〕(i)(ii)の例はチベット語自体で $C_1C_2V \to C_2V$ の変化を示していて、*h̲dral-ba*〈切り裂く〉は *ral-ba* および *hral-ba* と並存する。

上代語 turu-gi は、〔51〕(iii)のチベット語 *ral-gri* に対応し、剣は、二つの形態素を組み合わせて複合形式の一単語を構成する古代日本語の方向にそって生れたものであったと推定できる。そして、あとの形態素 -gi は、TB *gri の -r- が脱落した形であって、上にあげた第二のタイプに属する。TB *gri→OJ gi。同じタイプに属する形態素には、〔52〕などがある。*khris* は母音挿入によって、OJ *kiris にもなり得た。実際には kïsi となって、kiris にも kirisi にもならなかったのには、それらを決定する何らかの条件、たとえば音節形式制限といった法則が働いたためであろうと思われるが、いまは、それについては未解決

であるとしかいえない(二九二頁参照)。

さて、つぎに語幹末尾子音の扱いに移りたい。

蔵緬語語幹の末尾子音は、拡張辞か接尾辞かを問わず、日本語形式では、いまは不明のある規則にしたがって、特定の母音が添加されて一音節を構成するか、もしくは消失した。消失した例も多い(53)。

もちろん、これらの末尾音はすべて、蔵緬語の拡張辞であって、日本語の語幹には、もともとからなかったと想定することも可能である。たとえば、〔54〕のように、拡張辞 -l はチベット語形のみを特徴づけたと言えるかも知れない。

末尾にあらわれる添加母音も、原則として母音調和の法則にしたがったものであったと推定でき(55)、それ以外の母音は、別の何らかの条件で出現しているのではないだろうか。たとえば、〔56〕などの例では、末尾の -i 母音は、-u の変化形であり得る。また、〔57〕の場合には、日本語形の末尾母音は、接尾辞 -ma, -mo から来源していると考えてよい。

〔58〕のような母音添加による末尾音の拡張は、ほかのチベット・ビルマ系言語にも認められることがある。たとえば、

〔53〕 i) TB XC→OJ X♯

TB *myag〈目〉 : WrB *myak* : OJ më
TB *sder-〈皿〉 : WrT *sder-ma* : OJ ɸira-de〈ひらたい皿〉
TB *wal〈環〉 : WrB *wong*[2] : OJ wa〈輪〉
TB *bal〈綿〉 : WrT *bal* : OJ wa-ta〈綿〉

〔54〕 TB *bal〈綿〉→WrT *bal*
TB *ba〈綿〉→WrB *wa*〈綿〉: OJ wa-ta〈綿〉(複合節化)

〔55〕 ii) TB XC→OJ XCV

TB *h̲khris〈岸〉 : WrT *h̲khris* : OJ kïsi〈岸〉
TB *pan〈花〉 : WrB *pan* : OJ ɸana〈花〉
TB *h̲gram〈岸, 浜〉 : WrT *h̲gram* : OJ ɸama〈浜〉
TB *ag〈あご〉 : WrT *ag*〈あご〉: OJ ago〈あご〉
TB *og〈奥〉 : WrT *og*〈奥〉 : OJ oku, oki〈沖〉

〔56〕 TB *kugs〈鉤〉 : WrT *kug*〈鉤〉 : OJ kugi ＜*kugs
TB *mdzub〈指〉 : WrT *mdzub*〈指〉 : OJ yubi ＜*yubs

〔57〕 TB *dom〈熊〉 →WrT *dom* : OJ kuma
TB *sdom〈蜘蛛〉→WrT *sdom* : OJ kumo
TB *dum〈雲〉[40] →WrB *tim* : OJ kumo

〔58〕 dom-ma＞kuma, sdom-mo＞kumo

TB *lam〈道〉はガロ語で ra-ma、カチャリ語で la-ma のように、これらの言語では a 母音の添接による二音節化が起っている。

いま一つ、日本語で単音節を多音節に変える手順があった。それは、末尾の鼻音を閉鎖音にかえて、母音を添加する方法である。添加される母音は、ここでも原則として、語幹母音と調和していたと考えられる〔59〕。

これに類似する対応関係が、ほかにも成立することは、十分に予測できる。たとえば、〔60〕のように。

〔59〕 WrT *-aC*(鼻音)：OJ -aC(閉鎖音)a(～ë)

TB *nang〈中〉	→WrT *nang*〈中〉	：OJ naka
TB *chang〈酒〉	→WrT *chang*〈酒〉	：OJ saka～sakë
TB *pref. chang〈賢い〉	→WrT *gcang-po*〈賢い〉	：OJ saka-si
TB *bang〈塚〉	→WrT *bang-so*〈墓塚〉	：OJ ɸaka
TB *pref. sang(-ba)〈秘密〉	→WrT *g-sang-ba*〈密か〉	：OJ ɸisoka
TB *srang〈みち〉	→WrT *srang*〈通り〉	：OJ saka〈坂〉
TB *pref. kyang〈床〉	→WrT *skyang*〈床〉	：OJ yuka

〔60〕 TB *-iC, -aC(鼻音)：OJ -iC, -aC(閉鎖音)e

TB *khyim〈家〉	→WrB *'im*〈家〉	：OJ iɸe〈家〉＜*yipe
TB *khram〈囲い〉	→WrB *khram*〈囲い〉	：OJ kabe〈壁〉

〔61〕

OJ kasa＜katsa	〈笠〉	：WrT *tshags*	〈笠〉
OJ kasa＜katsa	〈量〉	：WrT *tshad*	〈量〉
OJ kaze＜kadze	〈風〉	：WrT *rdzi*	〈風〉
OJ kata-si	〈硬い〉	：WrT *tha-ba*(古語)	〈硬い〉
OJ kusa＜kutsa	〈草〉	：WrT *rtswa*＜*rtsa-ba	〈草〉
OJ kusabi＜kutsabi	〈くさび〉	：WrT *rtsabs*	〈杭，くさび〉

3　複合語の構成

一般に、チベット・ビルマ語的な視点から見ると、たとえば、matu〈松〉、makura〈枕〉、kusa〈草〉、kusuri〈薬〉などにあらわれる第一音節 ma-, ku- は接頭辞に見える。さきに述べたボド・ナガ語系の言語やカチン語が、そのような接頭辞をもっている。カチン語 mărau〈松〉、măku〈芽〉、măgap〈被い、蓋〉、măkhrai〈橋〉などである。

これは、一つの直観に過ぎないであろう。しかし、広くチベット・ビルマ系言語を対象として扱った場合、このような直観的な見方が当っているかも知れない。日本語をチベット語に比べると、そのような要素が日本語の

〔62〕〈くさび〉 WrT *rtsabs* : OJ kusabi<kutsabi
〈錆〉 WrT *btsa*<*btsabs : OJ sabi<tsabi

〔63〕〈痒い〉 WrT *g-yaḫ-ba* : WrB *ya^{2}-sañ*[41]
OJ kayu-si : Kachin kă-ya-'ay

みに認められる単語が若干ある〔61〕。

〈くさび〉のチベット語形には、rtsa-ba〈根〉から派生した動詞*rtsab-pa〈くさびを打つ〉の存在が推定され、その完了形が*rtsabs*〈根を打ちつけたもの＝くさび〉であったと考えられる。〈くさび〉と関連して、日本語sabi<tsabi〈錆〉に、チベット語*btsa*〈さび〉が対応するから、このチベット語形はもともとは完了形であって、古くは*btsabsであったろうと推定することが許される〔62〕。

これらのka-, ku-, ɸa-は、やはり日本語に残った接頭辞の痕跡と見てよいように思える。事実、**OJ** ɸata〈織〉: **WrT** *ḫthag-pa*〈織る〉の対応に認められるɸa-も同じように扱えるかも知れない。日本語kayu-si〈痒い〉とビルマ語*ya^{2}-sañ*〈痒い〉の対応から予測できる接頭辞ka-には、チベット語*g-yaḫ-ba*〈痒い〉のg-、カチン語kă-ya-'ay〈痒い〉のkă-が対応する〔63〕。

これまでにもいくつかの例で見て来たように、AB両言語を比較して、A語のみに余分な単位がある場合、その事実の解釈には、つねに二つの可能性があった。第一は、A語の形が古形式の痕跡を残し、B語はそれを消失した。第二は、B語の形の方が古形式であって、A語の形は独自の発展形である。いまあげた〈痒い〉のビルマ語形は、まさに第一の場合に該当する。また、つぎの例もあげておきたい。

かりに、日本語kuru-ɸu〈狂う〉とビルマ語*ru^{2}*〈狂う〉を比較すると、日本語形のはじめのku-とあとの-ɸuは何かと問われるであろう。あとの-ɸuは動詞につく助詞であることがわかっても、ビルマ語の形態にはそれがない。ボド・ナガ語系のダフラ語にもビルマ語形に対応する形がある。〈狂う〉のヤノ方言形rupa、タゲン方言形rupaには、-ɸuにあたる助詞-paがあるけれども、この単語の比較は、日本語形の一部のみを任意に切り落していると批難する人があるかも知れない。しかしながら、そのように簡単に批難するのが当を得ていないことは、これに対応するチベット

語形を見れば、すぐに納得できる。ku- および -φu に相当する形を保存するチベット語形 *ḫkhrul-ba*〈狂う〉の存在は、この対応関係を明瞭にする。この場合、ku- は接頭辞ではなくて、初頭子音であったことも同時にわかる。同じように、日本語形 φukuram-φu〈ふくらむ〉とビルマ語 *rɔng-*〈ふくらむ〉を結びつけるのは、チベット語 *skrang-ba*〈ふくらむ〉がなければむつかしいであろう〔64〕。

これらの日本語形は、いずれも $C_1C_2V\text{-}\rightarrow C_1VC_2V\text{-}$ の法則にしたがって出来ている。

〔64〕　WrT *ḫkhrul-ba*〈狂う〉　：WrB *ru²-*　：OJ kuru-φu
　　　WrT *skrang-ba*〈ふくらむ〉：WrB *rɔng-*　：OJ φukuram-φu

ところが、つねに右にあげたチベット語形のような形式の存在を必ずしも発見できるとは限らないために、言語比較は厄介である。

二形態素以上の複合からなる単語の場合も同様である。さきに日本語の musi〈虫〉は、mu と si の結合であるとした。この二つの形は、おそらくもともとは、種類の違った虫を意味していたのであろう。

ヒマラヤの中央部で話されるチェパン語で〈ねずみ〉を rok-yu という。この rok は、ビルマ語 *krwak* に対応し、yu は、チベット語 *byi* の古形 byu にあたる。この二つの形式 *krwak* と byu は、もともと種類の違った〈ねずみ〉を意味していたが、チェパン語で、その二つを組み合わせて複合語を形成した。もしチベット語の古形 byu の存在がわからないか、あるいは -yu と byu が同源語であることが決定できないとすると、チェパン語の〈ねずみ〉は、rok と不明の形式 yu からなっているといわざるを得ないであろう。

ビルマ語系のマル語、ラシ語の〈薬〉を意味する形、マル語 mu tšhei'、ラシ語 ma tšhei も、mu-, ma- を、チベット語形 sman〈薬〉と結び付けられないとすると、ビルマ語 chiy²>*chei²* にあたる tšhei と不明形式の複合形ということになる。日本語形についても、今はわからなくとも、将来において明瞭になる可能性をもった形式が若干あるものと思われる。たとえば kuti〈口〉は、TB *kha にあたる ku と ti に分析でき、あとの -ti はある役割をもった一つの形態素であったと証明できる日が来るかも知れない。ここではもう少

〔65〕 OJ φitö〈人〉 : WrT *mi*〈人〉＋Lolo *dzang〈人〉[42]
WrB *lu*〈人〉 : WrT *lus*〈身体〉
OJ karada〈身体〉 : WrT *sku*＜*rGyarong tə-skru〈身体〉
(təは名詞接頭辞)
OJ φada〈肌〉 : WrT *lpags*〈皮〉
OJ kaφa〈皮〉 : WrT *ko-lpags*〈皮〉

〔66〕 OJ i-〈ねむり〉 : TB *ip-(-pa)→WrB *˙ip-saň*〈ねむる〉
OJ nu＜*nu-φu〈ねむる〉 : TB *nyal-(-pa)→WrT *nyal-ba*

〔67〕 OJ i-〈ねむり〉 : TB *ip-(-pa)→WrB *˙ip-saň*〈ねむる〉
OJ i-më〈夢〉 : TB *mak/ng→WrB *mak*, WrT *rmang*

し確実性があると思われる複合形式を、二、三あげてみよう。

上代語の φitö は、φi と tö の複合形であると考える。φi はチベット語 *mi* に、tö は、ロロ語群の共通形 *dzang に対応する (cf.〈火〉OJ φï: WrT *me*,〈…と〉OJ tö: WrT *dang*)。これらは共に蔵緬語の語彙ストックにあった〈人間〉を意味する形であった。ビルマ語では〈人間〉は *lu* という。これはチベット語の *lus*〈身体〉に対応する。日本語の karada は、kara が、チベット語 *sku* の古形態 skru (ギャロン語 tə-skru) に対応し ($C_1C_2V \rightarrow C_1VC_2V$)、-da は、またその意味がはっきりしないが、φada〈肌〉の -da と同語幹ではないかと推定できる。この φa は、おそらく〈皮〉kaφa の φa と同じく、チベット語 *lpags*〈皮〉に対応する (二八七頁参照)。この関係をわかり易く書き表わすと〔65〕のようになる。

上代語 inu-φu〈ねる〉は、i- と nu- の複合形である。それぞれ〔66〕のように、蔵緬語と対応する。

〈夢〉i-më も同様に、i- と më の複合形であり、〔67〕にあげた蔵緬語形にあたる。

〈姿〉sugata は su と kata の複合形であり、前者は、チベット語形 *gzugs*〈形、身体〉に、後者は、*hgod-pa* (pf. *bgod*)〈形づける〉に対応すると考える。*gzugs* は、接頭辞および末尾子音結合を消失し (CVC→CV#)、*hgod* にあたる TB pref. god から、$C_1VC_2 \rightarrow C_1VC_2V$ の法則にしたがって、kata が成立したと推定する。

この種の複合形式は、なおそのほかの単語についても指摘できるが、いずれも古代日本語の複音節化への方向を形作ったものと見たい。チベット語自体も、近代語は、有契的な構成法をとって、複合単語化を示している。

チベット語の *sna* には、〈鼻〉と〈端〉の両方の意味があり、上述のように上代語 ɸana とよく一致する。しかしこれからの派生形 *snabs*〈鼻涕〉には、期待できる上代語形 *ɸanabi は存在しておらず、実際には〈水〉と有契的に表現された ɸana-midu〈鼻水〉があらわれる。チベット語においても *snabs* に対して、近代語では新しい構成形である有契語 *sna-chu*〈鼻水〉が使われている[43]〔68〕。

〔68〕 TB *sna〈鼻〉 : WrT *sna* : OJ ɸana
TB *snabs〈鼻涕〉 : WrT *snabs* : OJ ×(旧派生形)
: *sna-chu* : ɸana-midu(新構成)

〔69〕 TB *-pa〈動詞助詞〉→WrT *-pa～-ba* : OJ -ɸu

〔70〕 TB *h̲ba- 拡張辞 -b(-pa)→WrT *h̲bab-pa* : OJ ×
TB *h̲bu- 拡張辞 -d(-pa)→WrT *h̲bud-pa* : OJ ɸur-ɸu

四 動詞の比較

1 動詞の形態

私は、いままであげてきた諸例で、古代日本語の動詞の基本形に、すべて助詞 -ɸu を付けた。語幹末尾音が母音であっても、子音であっても、その条件にかかわりなく、-ɸu が付けられていたと仮定する。これは、いわゆる内的再構成の結果導き出される再構形であるといえる。そして、この -ɸu は、動詞には語幹形式に助詞 -pa をつけるという蔵緬語の単語構成法を受け継いだものであって、チベット語に見られる助詞 *-pa～-ba* に対応する形式であると考える〔69〕。

そして i) TB *-a→WrT *-a*: OJ -a, ii) TB *-u→WrT *-u*: OJ -u と並んで、日本語形を特徴づける iii) TB *-a_2→WrT *-a*: OJ -u の対応関係の存在が、この仮定をよく支持してくれる。

たとえば、上代日本語 ɸuru〈降る〉は、より遡った段階では、ɸur-ɸu の形をとっていた。これと同一の語根から派生した形式として、チベット語形 *h̲bab-pa*〈降る(雨雪など)〉と

〔71〕　TB *h̲-khru-(-pa)→WrT *h̲khrul-ba*〈狂う〉: *kru-φu>OJ kuru-φu
TB *s-khrang(-pa)→WrT *skrang-ba*〈ふくらむ〉: *φkram-φu>OJ φukuram-φu

〔72〕　TB *h̲bru(-pa)→WrT *h̲bru-ba*〈掘る，彫る〉: OJ *φoru-φu>φor-φu
TB *h̲bor(-pa)→WrT *h̲bor-ba*〈放る〉: OJ φabur-φu
TB *shud(-pa)→WrT *shud-pa*〈擦る〉: OJ sur-φu
TB *sgam(-pa)→WrT *sgam-pa*〈深む〉: OJ φukam-φu

h̲bud-pa〈落ちる(木の葉や太陽が)〉の二形式を指摘できる。日本語 φur-φu は、後者の形式と同一の語幹をもつ単語である〔70〕(TB *-d→WrT *-d*: OJ -r)。

古代日本語では、チベット語と同じように、たとえば語幹が母音に終る〈狂う〉も、語幹が子音で終る〈ふくらむ〉も共に -φu をともなっていたと考える〔71〕。-m-φu の連続は、やがて -mu になったが、kuru-φu のように母音に接続する -φu はそのまま保存された。これは、khru- を kuru- とし、kra- を kura- とする方向(上述の $C_1C_2V- \to C_1VC_2V-$)とともに、上代日本語の音形式を性格づける大きい制約であった。

つぎに代表的な動詞語幹の対応例を数例あげてみたい〔72〕。

日本語の系統を考察するにあたって、もっとも重要な対象は、動詞の活用形式にあることは言うまでもない。もし、上代日本語の活用形式とはっきりとした対応関係を示すような言語群が存在していたならば、その言語群はまさに日本語の系統の証明に対して、決定的な役割を果すことになる。

蔵緬語が果して、どのような動詞形態をもっていたのか。そして、チベット・ビルマ諸語における動詞構造の変遷はどのようであったのかは、それ自体重要な研究課題であって、ここで簡単に議論することが出来ないが、私は、つぎにチベット・ビルマ諸語の代表言語として、やはり一種の動詞活用形式を具えたチベット語を取り上げ、日本語の活用形と比較してみる。

チベット語と日本語は、この動詞の活用形に関しても、この言語群の中の二大古典語といえるほど近似している。

〔73〕

		基本形	完了形	未来形	命令形
自動詞	〈裂ける〉	*h̲chag-pa*	*chags*	×	×
他動詞	〈裂く〉	*h̲cheg-pa*	*bshags*	*bshag*	*shog*

〔74〕

	基本形式	完了形式	未来形式	命令形式
TB	*pref. chag(-pa)	*pref. chag-s	*pref. chag	*shog
8世紀	*h̲-chag-ed-pa	*bchag-s	*gchag	*chog(-h̲o)
9世紀	*h̲cheg-pa～h̲chags-pa*	*bshag-s*	*bshag*	*shog*

いずれにしても、チベット文語の活用形が、いまわかっているチベット・ビルマ系言語のもっとも早期の形態に該当すると考えて、さほど無理はないと思われる。ここでは一つの試みとして、ごく大雑把な考察を述べてみることにする。

2　動詞活用形の比較

上代日本語の一群の動詞が、自動詞が下二段活用であるのに対して、他動詞が四段活用をとることはよく知られている。チベット文語では、これに対して、自動詞は基本形と完了形をもち、他動詞は、普通、基本形、完了形、未来形、命令形の諸語幹をもつ点で対立する。

たとえば、〈裂ける〉と〈裂く〉の自動・他動の形式を対照してあげると〔73〕のようになる。

この他動詞の形式には、接頭辞、初頭子音の交替、接尾辞の添加のほかに、母音 -e-, -a-, -o- の交替が見られる。私は以前、この母音の活用を、実際には母音の交替ではなく、挿入あるいは接尾された形態素の同化によってもたらされた音形式の変化であることを論じたことがある。[44] いまでも、この考えは変ってはいない。右の例では、他動詞の *h̲cheg-* は、*h̲chag-* にチベット語独自の接尾辞 *-ed がつけられ、接尾辞の母音 -e の影響によって、a 母音から e 母音への変化が起ったと考えている。

私の推定では、八世紀には、チベット語の他動詞〈裂く〉は、〔74〕の活用形式をもっていた。

TB *pref. chag-pa(他動詞)から、このチベット語形 *h̲-chag-ed-pa と上代日本語形

〔75〕 TB *ch- → WrT *ch-* : OJ ts- > s-
TB *-ag → WrT *-ag* : OJ -ak
TB *-pa → WrT *-pa* : OJ -φu

〔76〕

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
他動詞(四)	sak-a	sak-i	sak-u	sak-u	sak-ë	sak-e
自動詞(下二)	sak-ë	sak-ë	sak-u	sak-uru	sak-ure	sak-ë-yö

〔77〕 i) WrT *bshag-s-te* : OJ sak-i-te(他動詞)
ii) WrT *chag-s-te* : OJ sak-ë-te(自動詞)

sak-φu(四段)が作られた。それに対する自動詞形 TB *pref. chag-pa には、チベット語形 *bchag-pa*〈裂ける〉と上代日本語形 sak-φu(下二段)が対応する。

この基本形式の音韻対応は、チベット語の *-ed を除いて、〔75〕として取り上げることができ、また九世紀チベット語形式(完了形、未来形、命令形)を特徴づける ch- から sh- への変化は、日本語の ts-(*tsh-*)から s- への変化と極めてよく類似していることを指摘できる。

つぎに、各活用形の対応関係を求めてみなければならない。上代語〈裂く〉の他動詞および自動詞は、〔76〕のように活用した。

私は、上代日本語動詞の基本形は、やはり終止形であって、さきに述べた助詞 TB *-pa を受け継いだ -φu をともなっていたと考える。両言語共によく対応する終止形のほかに、重要な形式は連用形と命令形である。

連用形他動詞〈裂きて〉OJ sak-i-te には、チベット語形 *bshag-s-te* < *bchag-s-te が対応し、自動詞〈裂けて〉OJ sak-ë-te には、*chag-s-te* が対応する。両者を対照して書くと、〔77〕となる。

他動詞の形式で、チベット語の完了形につく接尾辞 -*s* が母音化して -i となり得たことは、この言語の後代の発展方向から説明できる。たとえば、WrT *gos*〈衣〉は、*gos* > goi > göö > khöö(低型 ⌐ーン)と変化し、WrT *dus* < *dugs〈時〉は、*dus* > dui > thüü(低型 ⌐ーン)と変った。同じように、日本語においても、音節末尾の子音十子音十子音の連続が、子音十母音十子音の形に変化したと考えることができる(-CsC-

↓-CiC-)。すなわち具体的には *tsak-s-te は tsak-i-te に変った。
自動詞と他動詞の機能の対立は、チベット語では、初頭子音の性格の違いがになっているが、上代日本語では、語幹形式につづく -i と -ë の対立がになうようになっていた。したがって、この -ë の来源を説明しなければならない。私はこの問題をつぎのように処理したい。

〔78〕 　　　　TB　　　　　OJ
　i)　(他動詞) *pref. chag-s-te : tsak-i-te
　ii)　(自動詞)　*chag-as-te : tsak-ë-te

〔79〕 i)　-s- > -i >　-i
　ii)　-as > -ai >　-ë

〔80〕 TB *Csk^{w}ud[45] →WrT *skud-pa*〈糸〉 : OJ ito～itö〈糸〉
　TB *Csdang (-pa) →WrT *sdang-ba*〈嫌う〉 : OJ itö-φu〈厭う〉
　TB *Csdong →WrT *sdong*〈樹の幹〉 : OJ ita〈板〉

〔81〕 他動詞　TB *chag-s-o : WrT *shog* : OJ sake
　自動詞　TB *chag-s-o-rogs : WrT *chog-rogs* : OJ sakë-yö

この -ë は蔵緬語祖形の動詞語幹についた *-as を反映する接尾辞であると想定してみた。この接尾辞 *-as は、八世紀のチベット語では、-s になり、やがて他動詞についた -s と共に消失するが、日本語では、〔78〕のような形で伝承されたと考える。
その伝承には〔79〕の変化を経たものと推定できる。
この変化も、上代日本語を特徴づける多音節化のあらわれと見てよいであろう。
s から i への変化は、若干の形態素で、語頭の位置においてもあらわれた。これは、おそらく、i-<s- の前にさらに子音が存在したことを意味するのであろう〔80〕。
チベット語の命令形は、動詞の独自の命令形式として -s をともなうほかに、命令の助詞 *-cig*～*-zhig*～*-shig* を添加して表現される。前者は、たとえば shog <*shogs〈裂け〉のように、命令語幹 *shag-s* と接尾辞 o に分析できる。*shag-s-o > shog (s) 後者の助詞には、*-cig* などのほかに願望の助詞 *shog* をともなって、たとえば *hkhol-ba*〈沸く〉の完了形 *khol* に *shog* (s) がついた *khol-shog* (s)

〔82〕 i) 他動詞　OJ saku ⎤ körömö　WrT *h̲cheg-pah̲i* ⎤ *gos*
　　 ii) 自動詞　　 sakuru ⎦　　　　　　*h̲chag-pah̲i* ⎦
　　　　　　　　　 yöki φitö　　　　　　*yag-poh̲i mi*

〔83〕 TB *pref. tang(-pa)〈与える〉

基本形	WrT *gtong-ba* <*g-o-tang-ba	:	OJ ata-φu	終止形
完了形	*btong-s-te*	:	ataφ-i-te	連用形<a-ta-i-te
基本形	*gtong-ba*(-du)	:	ata-φu-ru	連体形
命令形	*thong*<*thang-s-o			
	btang-*s-o(-rogs)	:	ata-φë-yö	

〈沸け〉が成りたつ。あるいは請求の助詞 *-rogs* がつけられ、たとえば *bskol-rogs*〈沸かしてほしい〉が成り立つ。上代日本語では、四段活用は前者の形態を反映し、下二段活用は後者の形態をとっていると考えられる〔81〕。

上代日本語の -yö（東国方言 -rö）は、TB *-rogs に対応し、上代語の語幹末尾の -e および -ë は、TB *-s-o に該当する命令接尾辞であったと推定したい。しかし、TB *-s-o がどうして、OJ -e および -ë に音形式の上で対応するのか、いまは明瞭ではない。

連体形の対応関係については、つぎのように仮定できる。チベット語では、名詞修飾としての動詞形は、本来名詞に後置された。たとえば〈裂くる衣〉は、*gos chag-pa* であった。〈よき人〉*mi yag-po* と同じように扱われた。これが前置されるようになって、連用形式が出てくる〔82〕。

上述の法則にしたがうと、チベット語形にあたる日本語形は、(i)(ii)共に sakë-körömö となる。一方、日本語形(i)(ii)をチベット語ふうに書き改めると、(i) chag-pa　gos, (ii) h̲chag-pa-du　gos があたることになる。(i)は基本形に直接連続し、〈裂ける・衣〉を、(ii)は基本形に、場所を示す助詞 -du (>ru) をともなって接続し、〈裂ける・ところ・衣〉を意味した。なお上代語形 körömö〈衣〉は、WrT *gos-so-mo*〈新しい衣服〉に対応する形であろうか。

いま一つ語幹が母音に終る下二段活用の例を上げよう。〈与える〉のチベット語と日本語の活用は、〔83〕のように対比される。

〔84〕 **OJ** 連用 終止 連体 命令
nite niru niru ni-yö

〔85〕 i) **TB** *ẖd-→**WrT** *ẖd-*: **OJ** n-
ii) **TB** *Cr-→**WrT** Cr-: **OJ** Cir-($C_1C_2V \rightarrow C_1VC_2V$)
iii) **TB** *-a_2→**WrT** *-a*: **OJ** -u
iv) **OJ** ru-ɸu→r-ɸu
TB *ẖdra(-pa)→**WrT** *ẖdra-ba*〈似る〉: *i) nra-ba> ii) nira-ba>
iii) niru-ɸu> iv) **OJ** nir-ɸu

〔86〕 **TB** *ẖdra-s(-te)→**WrT** *ẖdras-te*: *nra-s-te>niras-te>nirë-te>nite (rë の脱落)

〔87〕 **TB** *ẖdra-pa-ẖi→**WrT** *ẖdra-baẖi*
TB *ẖdra(-du)→**OJ** nra-du>nira-du>niruru>niru(ru の脱落)

日本語の連体形は、上に述べたように、もとの形として、*atang-pa-du の存在が考えられ、連用形は本来 *ata-i-te であって、おそらく他形式からの類推によって、語幹末尾に ɸ が付けられた ataɸ-i-te が生れたものと見做してよいであろう。

日本語動詞の活用形は、基本形式と助詞・助動詞の単なる接続関係によって成立したものではない。各活用形式自体が、本来ある特定の意味・機能を具えていたのであり、また上記 -ru のように、接続のためにある形態素が挿入された場合もあった。接続のために起った形式変化は、上記の -gs が -ki になり、-as が -ai>-ë になるといった日本語の発展を支配していく音韻構造によって導かれたものであり、どの助詞・助動詞がどの活用形に接続したかは、その活用形が本来もっている意味によって決定された。その活用形の意味・機能をチベット語形と関連して考えてみると、以上の比較対照の結果から、連用形は本来完了形式であり、連体形は基本形式、命令形は命令形式に、それぞれ該当するものと推定できる。

つぎに上一段活用を考察してみたい。上一段活用の特徴は、すべての活用形式を通じて語幹母音 i を示す点にある。しかし、この i 母音は、蔵緬語から見れば、初頭複子音 Cr- の子音間に挿入された似非母音であることが明らかになる。

上代日本語で、たとえば〈似る〉は〔84〕のように活用した。

これに対応するチベット語形は、*hdra-ba*〈似る〉であって、両言語形の成立には、〔85〕の法則が支配していると考えられる。

連用形（蔵緬語の完了形式）は、〔86〕のように、連体形（蔵緬語の基本形に du 助詞がついた形）は、〔87〕のようになって、それぞれの日本語形は、rë, ru の脱落によって成立した、と推定できる〔88〕。

同じく上一段活用をもつ動詞 miru〈見る〉は、チベット語形よりも、ビルマ語、ヒマラヤ諸言語形から設定できる形式によく対応する。

終止形（蔵緬語基本形式）は、〔89〕のように対応する。

連用形（蔵緬語完了形式）は、〔90〕のように成立したと考える。

〔88〕 連用形 **WrT** *de-dang h̲dra-ste*〈それと似て〉
OJ sore tö ni(rë)te
連体形 **WrT** *kho-dang h̲dra-bah̲i mi*〈彼と似る人〉
OJ kare tö niruru φitö＜*h̲dra-du

〔89〕 **TB** *mtha～mra *(-pa)→**WrB** *mra-ng-*〈見る〉
TB *mra-ba→mira-ba＞miru-φu＞**OJ** mir-φu

〔90〕 **TB** *mra-s-te→**WrB** *mra-ng-*:
TB *mra-s-te＞miras-te＞mirë-te＞**OJ** mite(rë の脱落)

〔91〕 **TB** *mra(-du)→**WrB** *mra-ng-*:
TB *mra-du＞mira-du＞miru-ru＞**OJ** miru(ru の脱落)

〔92〕 **TB** *ltu(-pa)→**WrT** *ltu-ng-ba*〈落ちる〉 : **OJ** *otu-φu＞ot-φu(46)
cf. **OJ** otör-φu
TB *lda(-pa)→**WrT** *lda-ng-ba*〈起きる〉 : **OJ** *oku-φu＞ok-φu
cf. **OJ** okös-φu
TB *pref. tug(-pa)→**WrT** *gtug-pa*〈尽きる〉: **OJ** tuk-φu

〔93〕 **TB** *ltu-s-te→**WrT** *ltu-ng-s-te*: **OJ** *otus-te＞*otui-te＞otī-te
TB *lda-s-te→**WrT** *lda-ng-s-te*: **OJ** *okus-te＞*okui-te＞okī-te
TB *pref. tug-s-te→**WrT** *gtug-s-te*: **OJ** tuk-ī-te＜*tukui-te(?)

連体形（蔵緬語基本形式と du 助詞の連続）は、〔91〕のように変化した。

上二段活用には、u 母音語幹と o 母音語幹の二系統がある。otu〈落つ〉oku〈起く〉tuku〈尽く〉には、〔92〕の対応を考え

得る。

それらの上二段活用動詞の連用形（蔵緬語の完了形）は、〔93〕に示したように対応する。

連体形（蔵緬語基本形と助詞 -du の連続）は、〔94〕のごとく変化し、子音で終る語幹の場合には、Cru→Curu の調和母音を挿入する法則がはたらいたものと推定したい。

つぎにラ行変格、ナ行変格およびサ行変格活用の動詞を取り上げてみる。まずラ行変格活用の〈有り〉の終止、連用、連体の各形式は、〔95〕の形をもっていたとされる。

この上代語形 ari は、TB *srid(-pa) を反映し、WrT *srid-pa*〈ある、なる〉、WrB *hri-* に対応すると考える。蔵緬語形からみて、語幹母音は i であり（上一段活用のように古代日本語における挿入母音ではなく）、上代語終止形の特徴は、助詞 -pa を接尾しない点にあったといえる。もし -pa をともなっていたとすれば、ari-φu となっていたであろう。

連用形（蔵緬語の完了形）は、〔96〕のような対応を示す。

〔94〕　TB *ltu-pa-h̲i→WrT *ltu-ng-pah̲i*
　　*ltu-du→OJ oturu
　TB *lda-pa-h̲i→WrT *lda-ng-pah̲i*
　　*lda-du→OJ okuru
　TB *pref. tug-pa-h̲i→WrT *gtug-pah̲i*
　　*tug-du→tukru＞OJ tukuru (Cru→Curu)

〔95〕　OJ 終止　ari　　連用　ari(-te)　　連体　aru(-toki)

〔96〕　TB *srid-s-te→WrT *srid-te*：OJ ari-te＜*arir-i-te

〔97〕　TB *srid-pa-h̲i→WrT *srid-pahi*
　　*srid-du→arir-ru＞OJ aru
　WrT……*srid-pah̲i dus*＜*dugs〈……が有る時〉
　WrB……*hri-sɔ a-kha*
　OJ……*arir-ru toki＞…aru toki

〔98〕　TB *pref. chi(-pa)→WrT *h̲chi-ba*〜*shi-ba*：OJ　*si-φu(?)
　　*pref. chi-n(-pa)→WrT *gshin-po*〈死んだ（ところの）〉：
　　　OJ sin-φu＜*tshin-φu

〔99〕　TB *shi-s-te→WrT *shi-s-te*
　　*shin-s-te→OJ sin-i-te

連体形(蔵緬語基本形と助詞 -du の連続)は、〔97〕に示したような関係をもっている。

チベット語やビルマ語とは違って、上代日本語は、終止形以外では、本来の語幹母音 -i は -u に姿を変える点で特徴づけられる。

ナ行変格動詞〈死ぬ〉を、「字音語 死＋往ぬ」とする考え方は興味深いが、上代日本語にもともと si＜tshi(?) があって、漢語と極めて類似した音形式をもっていたために、それが字音語扱いされたと推測することも可能であろう。(47) 上代語 sin-φu は、チベット文語 *shi-ba*＜*hchi-ba* pf. *shi* と同源語である。基本語幹 shi- に状態をあらわす接尾辞 -u(古い完了形 TB *-u)をともなう形 WrT *gshin-po*〈(すでに)死んでいる者＝死人〉があり、上代語 sin-φu は、この -u をともなう形に対応するのであろう〔98〕。

連用形は、〔99〕のように近似する。

連体形は、〔100〕にあげた対応関係を示している。

たとえば〈死んだ人〉の表現を対照すると、〔101〕のようになる(このVは動詞、Nは名詞を意味する)。

サ行変格動詞〈する〉は、チベット文語形 *byed-pa*〈する〉に対応する。この *byed-pa* は bya-ed に分析できる。*byed-pa*

〔100〕 TB *chi-pa-ẖi→WrT *shi-baẖi*
*chin-pa-du→OJ shin-φu-ru→shinuru

〔101〕 TB *V-paẖi N→WrT *shi-baẖi lus*〈死んだ人〉
*V-sɔ N→WrB *sei-sɔ luu*〈死んだ人〉
*V-pa du N→OJ sin-uru φitö〈死んだ人〉

〔102〕

	現在形	完了形	未来形	命令形
文語	*byed-pa*	*byas*	*bya*	*byos*
口語	tšhee	tšhää	tšha	tšhöö

〔103〕 基本形
TB *bya-ed(-pa)→WrT *byed-pa*
*bya-d(-pa)→OJ *tsur-φu＞sur-φu
連用形
TB *bya-s-te→WrT *byas-te*: →*tsë-te＞*tsi-te＞OJ si-te
連体形
TB *bya-paẖi→WrT *bya-baẖi*
*bya-pa-du→*tsu-φu-ru＞su-uru＞OJ suru
命令形
TB *bya-s-o→WrT *byos*
*bya-s-rogs→*tsë-rö＞*së-yö＞OJ se-yö

には、その敬語形式として、*mdzad-pa* があり、WrT *mdzad-pa*: OJ tsur-ɸu>sur-ɸu はよく対応するように思えるが、*mdzad-pa* には、命令形 *mdzod* 以外の変化形式がないのと、つぎに述べる使役態構成からみて、上代語 sur-ɸu は TB *bya-ed→WrT *byed-pa* に対応すると考えたい。現代チベット語でも、〈する〉は特別な活用形式を保存している〔102〕。日本語形との対応関係を〔103〕のように示すことができる。

〔104〕

自動詞	*gab-pa*	〈隠れる〉	*ẖgul-ba*	〈動く〉
他動詞	*sgab-pa*	〈隠す〉	*sgul-ba*	〈動かす〉
自動詞	*lang-ba*	〈起る〉	*nub-pa*	〈沈む〉
他動詞	*slang-ba*	〈起す〉	*snub-pa*	〈沈める〉

〔105〕

自動詞	kakuru(四)	〈隠る〉	yöru (四)	〈寄る〉
他動詞	kakusu(四)	〈隠す〉	yösu (四)	〈寄す〉
自動詞	yadöru(四)	〈宿る〉	naɸoru(四)	〈直る〉
他動詞	yadösu(四)	〈宿す〉	naɸosu(四)	〈直す〉

〔106〕 I

WrT {#, ẖ}-CVC-{*pa*, *ba*} 自動詞　OJ XCVC-ɸu 自動詞

s-CVC-{*pa*, *ba*} 他動詞　XCVC-su 他動詞

XCVr-su→XCV-su

〔107〕 II

	TB	CVC-(pa)	自動詞	CVC-bya	他動詞
	WrT	CVC-{*pa*, *ba*}	自動詞	CVC-bya-ed>*byed*	他動詞
	OJ	XCVC-ɸu	自動詞	XCVC-tsu>-su	他動詞
例	TB	*sdo-d-(-pa)	〈宿る〉	*sdo-d-bya	〈宿す〉
	WrT	*sdod-pa*	〈宿る〉	*sdod(-par)-byed-pa*	〈宿す〉
	OJ	(ya)dör-ɸu	〈宿る〉	(ya)dö-su	〈宿す〉

チベット文語形との対照から見ると、サ行変格動詞の特徴は、連用形にあるが、今の段階では、なぜ *-ë>-i の変化が起ったのかを説明することがむつかしく、*byas-te>byë-te>tsë-te>tsi-te>si-te を推定しておくより外はない。

3 自動詞と他動詞の対立

チベット文語動詞には、自動・他動の対立を先に述べた〈裂く〉、〈裂ける〉のように活用様式の対立によってあらわすほかに、自動詞語幹に接頭辞 s- を添接して、他動詞を形成する手段があった。これは、蔵緬語の古い構成法であったと考えられる。たとえば、〔104〕の例のように。

この構成法は、いわゆる語彙化した使動形式であって、日本語の〔105〕の対立関係に該当する。

これらの例によると、チベット語では、接頭辞 s- の有無によってこの対立は成立するのに対して、日本語では、語幹末尾の子音 -r- と -s- の対立によって、自動詞と他動詞が弁別されている。その対立関係を書き改めると〔106〕のようになる。

この日本語形式を蔵緬語的に解釈すると、-su をともなう他動詞形は、自動詞語幹に直接に -bya〈する〉を接続した形式から来源していると理解できる。つまり〔107〕のようになる。

チベット文語の接頭辞 s- は、漢語の使＋動詞形と近似する単位であり、口語ではもはや機能していない。

チベット文語には、このほかに、助動詞 *byed-pa*〈する〉＜*bya-ed（現在形）と bya〈する〉（基本形）を、助詞を介して語幹に接続する接尾辞的な使動構成がある。たとえば *nub-pa*〈沈む〉に対する *nub-par-byed-pa*〈沈むようにする＝沈ませる〉は、*smub-pa*〈沈める〉に該当し、*lang-ba*〈起る〉に対して、*lang-bar-byed-pa*〈起るようにする＝起きさせる〉は、*slang-ba*〈起す〉と同じ意味で使われる。日本語の〔108〕などの対立は、後者の構成に相応じ、チベット語形との関係を〔109〕のように分析的に対照して示すことができる。

〔108〕
自動詞 ugoku 〈動く〉　teru 〈照る〉
他動詞 ugokasu 〈動かす〉　terasu 〈照らす〉

〔109〕
TB *h̲-gul-pa→ WrT *h̲gul-ba*〈動く〉
TB *h̲-gul-par-bya-ed-pa→WrT *h̲gul-bar-byed-pa*〈動かす〉

TB *r-gul-k-pa→ OJ ugok-φu〈動く〉
TB *r-gul-k-par-bya→OJ ugok-φa-tsu＞ugok-a-su〈動かす〉

TB *h̲-tsher-pa→ WrT *h̲tsher-ba*〈照る〉
TB *h̲-tsher-par-bya-ed-pa→WrT *h̲tsher-bar-byed-pa*〈照らす〉

TB *h̲-tsher-pa→ OJ ter-φu〈照る〉
TB *h̲-tsher-par-bya→OJ ter-φa-tsu＞ter-a-su〈照らす〉

〔110〕
自動詞 yuku〈行く〉　yamu〈止まる〉
他動詞（使役） yukaseru〈行かせる〉　yamesaseru〈止めさせる〉

〔111〕
TB *r-gyug-pa : *r-gyug-par-bya-ed-pa
WrT *rgyug-pa* : *rgyug-par-byed-pa*
OJ yuk-φu : *yuk-φa-tser-φu
yuk-a-ser-u
〈行く〉 〈行かせる〉

また口語の〔110〕などは、〔111〕のように、きれいに対応する。
これらの対応関係を綜合すると、〔112〕のように表示できるであろう。日本語形式の成立は、Ⅲ、Ⅳで、-ar > -ë の変化法則により ɸur-ɸë-tsu となる以前に、-rby- または、-rts- の連続が、-by- または -ts- と変っていたと推定しなければならない。

〔112〕 Ⅲ TB *CVC-par-bya

WrT CVC-$\left\{\begin{matrix}par\\bar\end{matrix}\right\}$-*bya*: OJ XCVC-asu < -ɸa-tsu

Ⅳ TB *CVC-par-bya-ed-pa

WrT CVC-$\left\{\begin{matrix}par\\bar\end{matrix}\right\}$-*byed-pa*: J XCVC-aseru < -ɸa-tser-ɸu

ex. *ẖdrog-pa*〈驚く〉: odorok-ɸu

ẖbud-pa〈降る〉: ɸur-ɸu

Ⅲの例 WrT *ẖdrog-par-bya*〈驚かす〉

OJ *odorok-ɸa-tsu > odoroka-su

WrT *ẖbud-par-bya*〈降らす〉

OJ *ɸur-ɸa-tsu > ɸurasu

Ⅳの例 WrT *ẖdrog-par-byed-pa*〈驚かせる〉

J odorok-ɸa-tser-ɸu > odoroka-ser-u

WrT *ẖbud-par-byed-pa*〈降らせる〉

J ɸur-ɸa-tser-ɸu > ɸur-a-ser-u

〔113〕 i) *krɔk-sañ*〈驚く〉 *nac-sañ*〈沈む〉

ii) *khrɔk-sañ*〈驚かす〉 *hnac-sañ*〈沈める〉

iii) *krɔk-cei³-sañ*〈驚かせる〉 *nac-cei³-sañ*〈沈ませる〉

〔114〕 WrT *ngas khas-sa kha-lag ga-gas ma-zas* (*za-ba* の完了形,

〈私は 昨日 ご飯(を)何も 食べていない〉

nga kha-lag zas ma-tshar (*ẖtshar-ba* の完了形)

〈私は ご飯(を)食べ 終っていない〉

ビルマ文語では、〔113〕に示す三つの形式の対立がこれにあたる。(ii)の無声出気音(*kh*- < *s-kh-)あるいは *hn*- < *sn- をもつ形式が語彙的使動形で、〔106〕Ⅰにあたり、(iii)の使役助動詞 *cei³* < ciy³〈…させる〉をともなう形式が、〔112〕ⅢⅣに該当する接尾辞的使動形式である。

4 否定形および禁止形

つぎに、動詞の否定形および禁止形について考察したい。上代日本語とチベット語やビルマ語との間に一定の対応関係を求めるためには、まず第一に、否定詞自体の音形式のつながりが問題

〔115〕 WrT *mi-ḫgro*（現在形）〈行かない〉
mi-ḫgengs（現在形）〈満たない〉
slar-la *mi-ḫong*（現在・未来形）〈再び来ない〉（*slar-la*: OJ sara-ni）

〔116〕 OJ kura-ɸa-nu〈食べない〉 yuk-a-ni〈行かない〉
ko-ni〈来ない〉 mit-a-ni〈満たない〉

〔117〕

	TB *ma-V	TB *mi-V[48]
WrT	*ma*-V 完了形	*mi*-V 現在・未来形
OJ	V 未然形 -nu（終止形）（もとは連用形？）	V 未然形 -ni（連用形）

〔118〕 TB *mi-ng→WrT *ming*〈名前〉
*ma-ň→WrB *a-mań*〈名前〉: OJ na
TB *mɪ-tha→Nyi-Lolo mɪ 55-tha 11〈刀〉
TB *ma-tha→OJ nata〈鉈〉

〔119〕 WrT *nga* *ma-shi*(pf.) *bar-du*
OJ ware sin-a-nu ma-ni〈私が死なない間に〉
WrT *ma* *gtugs*(pf.) *bar-du*
OJ mada tuk-a-nu ma-ni〈未だ着かない間に〉

となるであろう。そして、第三に統辞的な観点から、否定詞と否定される動詞の配列関係および否定される動詞の活用形式の種類が問題となる。

チベット語の場合、否定詞には、*ma-* と *mi-* の二形式があって、否定される動詞の前におかれた。もし動詞が助動詞を伴うならば、主動詞のあと助動詞の前に否定詞は置かれた。そして、原則として、*ma-* には、動詞の完了形式が、*mi-* にはそれ以外の形式が接続した。この原則に例外となる使い方もあるにはあるが、本来は、上述の形態をとっていたものと考えられる。たとえば〔114〕のように *ma-* は完了形式に先行した。これに対して、たとえば、〔115〕のように *mi-* はそれ以外の形式に先行する。この WrT *ma-*, *mi-* には、上代語のナ行系の否定詞 -nu（終止形）、-ni（連用形）が対応するのではないかと考える〔116〕。語順を対照すると、〔117〕に示した関係になる。

TB *m-→WrT *m-*: OJ n- の子音対応を示す並行例として、〔118〕をあげることができる。チベット語と日本語の二、三の零細な対応例をひろってみよう〔119〕。

動詞に先行するチベット語の位置から、日本語のような位置への否定詞の移動は、あとで述べる禁止の形が参考になるが、つぎにあげるビルマ語の形も起り得る根拠とできる。ビルマ語では、古くはチベット語のように、否定詞ma-を動詞に先行させる形態であったが、次第に動詞を挟んで、ma-動詞-phu² のように、二つの否定詞が使われるようになった〔120〕。

ビルマ・ロロ系言語では、ほとんどがma-系の否定詞を使い、mi-はない。たとえばハニ語では、mɔ 31 が動詞に先行する〔121〕。リス語ではma 31 が否定詞にあたり〔122〕、ラフ・シ語では、mah が使われる(49)〔123〕。

また、〈有る〉と〈無し〉が、ビルマ語と日本語の間で、〔124〕のような対応を示しているのは興味がある。

日本語のnasiは*na-hri<TB *ma-sridから来源し、このnaは古い否定詞の位置を保存しているのではないかと推測できる(50)。

チベット語では、禁止をあらわす助詞には、否定の場合と同じく、*ma*-が使われ、動詞に先行して置かれる。口語では、否定と禁止は声調の対立で区別されている(51)〔125〕。

この*ma*動詞現在形(禁止)は、上代語の終止形-na(禁止)に対応する〔126〕。

チベット語では、少数の場合、*ma*動詞命令形

〔120〕 WrB *ma-rap-phu²*〈止まない〉
OJ yam-a-zu
WrB *ma-khap-phu²*〈汲まない〉
OJ kum-a-zu

〔121〕 mɔ 31 lɔ 55 〈来ない〉 mɔ 31 ku 21 〈しない〉

〔122〕 ma 31 dza 31〈食べない〉 ma 31 la 33 〈来ない〉

〔123〕 mah tsáh 〈食べない〉 mah kài 〈行かない〉

〔124〕 〈有り〉 WrB *hri³*/ši³/ : OJ ari
〈無し〉 WrB *ma-hri³*/maši³/: OJ nasi<*na-hri(?)

〔125〕 WrT *ma-ḫgro*〔ma：低昇調〕 〈否定，行かない〉
ma-ḫgro〔ma：高昇調〕 〈禁止，行くな〉

〔126〕 yuku-na〈行くな〉， idu-na〈出るな〉

〔127〕 WrT *skad-cha ma-shod*〈言葉を言うな〉

〔128〕 OJ na-se-sö〈するな〉： WrT *ma-byed-shog*
OJ na-yak-i-sö〈焼くな〉： WrT *ma-sreg-shog*

〔129〕 WrB *ma prɔ*^{2} *hnang*^{3}/ma pjɔ^{2} nɛ^{3}/〈言うな〉: OJ iɸu-na
ma ip hnang^{3}/ma eiʔ nɛ^{3}/〈寝るな〉

〔130〕
Nyi-LoLo thɑ 11 be 44〈言うな〉 thɑ 11 ji 22〈寝るな〉
Ahi-LoLo tha 21 bie 44〈言うな〉 tha 21 ji 22〈寝るな〉
Lisu tha 31 bɛ 44〈言うな〉 tha 31〈寝るな〉
Lahu-Shi tàh ko〈言うな〉 tàh kɔ́h〈怕れるな〉

〔131〕 WrT *h̲thug-po*〈厚い〉 : OJ atu-si
WrT *stug(s)-po*〈太い〉: OJ ɸuto-si

〔132〕 WrT *h̲thug-po*〈厚い〉 : OJ atu-si(終止)
WrT *h̲thug-pa-ste*〈厚くて〉 : OJ atuku-si-te(連用)
WrT *h̲thug-poh̲i sdong*〈厚い幹〉: OJ atuki-ita(連体)〈厚い板〉

〔331〕 WrB *thu-sɔ*〈厚い〉, *thu-sañ*〈厚く〉
WrB *thu-sɔ pang-cañ*〈厚い幹〉

の使い方がある。たとえば、〔127〕がその例であって、この *shod* は、*bshad-pa*(言う)の命令形にあたる。

上代日本語の禁止をあらわす副詞 na- 動詞連用形 -sö には、チベット語の *ma-* 動詞現在形 *-shog* が対応すると考えられる。この *shog* は、本来 *h̲ong-ba*〈来る〉の命令形である〔128〕。

ビルマ語では、禁止は、*ma—hmang*^{3}[nɛ^{3}] で表現され、たとえば〔129〕のようになる。

一方、ロロ系言語には、チベット語にもビルマ語にもない禁止の助詞 tha が広く分布している〔130〕。

右に考察したごとく、否定詞については、配列順序に位置の移動が起ったが[52]、禁止形とともに、チベット語、ビルマ語と上代語形はよく対応していると考えられる。各言語の形式は、やはり同じ共通祖形の異った反映形であろう。

五 形容詞の比較

形容詞の活用の対応関係には、なお明瞭ではない部分を多く含んではいるが、基本的な関係と若干の単語の対応例を〔131〕にあげておきたい[53]。

〈厚い〉と〈太い〉の二語は、もともと同じ語幹 TB *pref.thug が違った接頭辞をもって派生した形式であると推定でき、さきにあげた〈集む〉TB *√du と同じ語根の単語であろう。たとえば、この中、〈厚い〉の活用を、チベット語と日本語の間で〔132〕のように対照させ得る。

最後の連体形を、属格の助辞 -gi を使って *h̲thug-gi sdong* とすれば、日本語形とよく一致する。

これに対応するビルマ語形は〔133〕のようになる。

蔵緬語の形容詞語尾がどのような形式をもっていたかは決定し難いが、いまは *-po または *-sa をたてておきたい。

チベット語では、形容詞は語幹末尾に -ga をとることが多い。この -ga は一つの接尾辞であったと考えてよいであろう。日本語の -k-u, -k-i はあるいは、この接尾辞に対応するのかも知れない〔134〕。

つぎに、一対をなす形容詞の対応例をあげておきたい。それらの単語の中には、対応関係があまり明瞭ではない形式も含まれているが、双方が一対をなす形容詞である点で、この対応例は意義があると思われる〔135〕。

ボド語系の言語であるボド語やディマーサ語では、形容詞は、上代語に残る形態とは全く違って、接頭辞によって示されている〔136〕。

ディマーサ語では、さきに掲げた例〔42〕と同じように、

〔134〕　WrT *yag-po*〈良い〉　: OJ yö-si
　　　　WrT *sdug-po*〈美しい〉: OJ utuku-si

〔135〕
{薄い　WrT *srab-po*: OJ usu-si <TB *rtsab-
{厚い　WrT *h̲thug-po*: OJ atu-si <TB *h̲thug-
{うすい(液体)　WrT *sla-po*: OJ usu-si <TB *ltsa-
{濃い(液体)　WrT *ska-po*: OJ ko-si <TB *ska-
{易しい　WrT *sla-ba*: OJ yasu-si <TB *Csa-
{難しい　WrT *tha-ba*: OJ kata-si <TB pref.tha(-pa)
{良い　WrT *yag-po*: OJ yö-si <TB *yag-
{悪い　WrT *ngan-po*: OJ a-si <TB *ngan-

〔136〕
	Bodo		Dimasa
〈白い〉	ga-fût	:	gŭ-phû
〈大きい〉	ga-det	:	gĕ-dê-bâ
〈長い〉	ga-lau	:	ga-lâo
〈高い〉	ga-zau	:	gŭ-ĵû
〈黒い〉	ga-sam	:	gĭ-sim
〈赤い〉	ga-zâ	:	ga-ĵâo

接頭辞の母音と語幹母音の間に調和があって、前者が挿入母音であることを示している。この接頭辞は、チベット語の *gnag-po*～*nag-po*〈黒い〉、*ser-po* (*gser-po*)〈黄い〉、*dkar-po*〈白い〉に保存される *g-*～*d-* に対応する古い接頭辞なのであろう。古くは形容詞は、接頭辞 *gə- と接尾辞 *-po または *-sə をもって構成されていたのか、あるいはこの二つの形態が前後して入れ替りに現われたものなのかは、今後、検討しなければならない蔵緬語の問題である。

六　基礎的語彙の比較

さて、つぎに語彙について考察してみたい。すでに見て来たように、上代日本語が、チベット文語やビルマ文語とおそらく同源であると考えられる単語を多く含んでおり、両者共に共通の祖形から伝承されたと考えざるを得ない語彙があった。それと同じ意味で古代日本語語彙のごくわずかな部分に対応する単語形式が、チベット・ビルマ諸語の特定の言語にのみ含まれている場合もあり得る。たとえば、上代日本語の重要な単語であったと認めてよい kuɸa〈鍬〉と近似する形式は、チベット語には対応形がないが、チベット語の古形態を保存すると考えられるギャロン語に kwa〈鍬〉として見出せる。

この事実は、決して偶然ではなく、蔵緬語の語彙ストックの中から、特定の条件で、特定の形式が特定の言語に分布したと考えざるを得ない。その条件は、将来においても明らかにし得ないかもわからないが、どのような形式がどのような言語に分布しているかは、示すことができる。

たとえば、〈歯〉と〈刃〉と〈葉〉の三つの単語をとらえてみよう。上代語ではアクセントの相違はあったにせよ、この三単語の音形式はすべて ɸa であったことは確かである。この三つの単語が一致する組み合せは、理論的には、1、A〈歯〉＝B〈刃〉＝C〈葉〉、2、A＝B×C、3、A×B＝C、4、A×B×C、5、B×A＝C ($2+{}_3C_1=5$) の五通り

があり得るが、いま知られているチベット・ビルマ語系の言語の中では、この三単語が同じ形式をもつタイプ、すなわち上述の1のタイプの言語は、現在わかっている限りでは、全く存在しないように見える。そして、5のタイプの言語も、いまのところ発見できないから、実際には、日本語を別にすると、チベット・ビルマ語系の言語は、つぎにあげる三種のタイプのどれかに属することになる。

タイプ2　〈歯〉と〈刃〉が同じで、〈葉〉が異る言語。ビルマ語、チベット語、ミキル語、ライ語、ルシャイ語など。

タイプ3　〈刃〉と〈葉〉が同じで、〈歯〉は異る言語。ニー・ロロ語。

タイプ4　〈歯〉と〈刃〉と〈葉〉が、それぞれ別の形式をもつ言語。マル語、ダフラ語、ミリ語、メイテイ語、アカ語など。

最後のタイプの言語は、少ない数ではない。具体的な形式を対照させると、〔137〕のようになる。

〔137〕

	歯	刃	葉	
タイプ1	ɸa	ɸa	ɸa	OJ
タイプ2	*swa²*	*swa²*	*phak*	WrB
	so	*so*	*lo-ma*	WrT
	so	(ang-)so	lo	Mikir
	ha	ha	hna	Lai
	ha	ha	hnah	Lushai
タイプ3	tʂʐ̩ 33	mɪ 55 tha 11 ɬa 44	sʐ̩ 44 ɬa 11	Nyi-Lolo
タイプ4	tsoe	su	pa	Maru
	fi	gambi	naborr	Dafla(Yano)
	ehi	lyôâra	ennü	Dafla
	a-yé	ââr	an-ne	Miri
	yá	tháng mayá	lá, maná	Meithei
	sɤ	mè dzà	ʔa-pha	Akha

蔵緬祖語は、タイプ2であったと考えられ、タイプ1の言語は、〈葉〉が変化して、〈歯〉および〈刃〉と合一したために、偶然的に起った形態であったといえる。タイプ3も同じように、〈刃〉と〈葉〉が共に変化する過程で、たまたま一致した形式をとったところに生れた。したがって、ニー・ロロ語は、日本語のように、タイプ1に属する可能性が十分にあった。しかし、タイプ4の言語が多く出現したのと同じ理由から、ニー・ロロ語で三単語形の一致が拒否されたと考えられる。タイプ4の言語が、単に三単語の形式が一致しないのみならず、各単

〔138〕 Mikir ang-pang〈まだ樹についている葉＝昨年の葉〉
loban〈落ちた葉〉
lo〈大きい葉〉
Dafla ok～okr〈大きい葉〉
nanü〈小さい葉〉
Sema amka, akügh〈葉一般〉
atsunimuku〈地面に落ちた葉〉

〔139〕 Miri 総称 an-ne
ot-ku, ne-ku(アボル方言)〈古い葉〉
ot-shûr〈新しい葉〉
ne-shûr(アボル方言), nyo-kuk〈古い，枯れた，落ちた葉，皿や包みとして使う葉〉
ne-shup〈枯れて落ちた葉〉
ék-kam〈大きい葉(皿，包みに使う)〉

〔140〕

1. TB *phak	2. TB *hna	3. TB *lo
〈樹についている葉〉		〈樹から離れた葉〉
ビルマ・ロロ系言語	チン系，ボド・ナガ系言語	チベット系言語
Bisu ang-pha	Lai, Lushai hnah	WrT *lo-ma*
Akha ˀa-pha	Dafla nanü	Lhomi šómak
Hani xa 55 pha 21-	Meithei mana	
Lisu phiE 31	Miri an-ne	

語がまちまちの形式をもっている。それには、つぎのような状況を想定できる。〈歯〉にしても、〈葉〉にしても、蔵緬祖語の形式は一つではなかった。〈歯〉の場合には、たとえば、〈歯〉と〈牙〉あるいは〈奥歯〉と〈前歯〉といった相違が、一つ以上の形式を作った。たとえば TB *so〈歯〉, TB *cway〈とがった歯＝牙〉(cf. WrB *swa*² 〈歯〉: *cway*〈牙〉)がある。ミリ語では、a-ye〈歯〉, i-pa(ng)〈牙〉, i-ti(ng)〈前歯〉, i-bui(ng)〈奥歯〉などの形が記録されている。

〈葉〉には、樹についている葉、地面に落ちた葉を区別する言語、あるいは、大きさによって、違った単語形式をつかう言語がある。各々の言語はその中のどれかを採用して、葉一般を代表する総称として認めていったことになる。たとえば、〔138〕。ミリ語については、〔139〕のように詳しい区別がわかっている。この部族にとって、いろいろの利用価値のある木の葉は重要な対象である。

〔141〕 TB *s^{w}a〈歯〉→*swa*^{2}(WrB) > *ɸ^{w}a > ɸa(OJ) > ha(Lai, Lushai)
　　→*so*(WrT)　　↘ ɸ̶a 44(Nyi-Lolo)

TB *phak〈葉〉→*phak*(WrB) > *ɸ^{w}ak > ɸa(OJ)
　　↓　　↘
　　→pha(Hani) pa(Maru)　ɸ̶a(Nyi-Lolo)

TB *hna〈葉〉> hnah(Lai, Lushai) > na(Meithei, Dafla)

TB *lo〈葉〉> *lo-ma*(WrT)
　　> lo(Mikir)

〔142〕

OJ		: WrT		
OJ ti, midi	〈釣針〉	: WrT *mchil-ba*	〈釣針〉	<TB *mchil-
OJ tur-ɸu	〈釣る〉	: WrT *h̲chor-ba*	〈釣る〉	<TB *pref.chor(-pa)
OJ na	〈魚〉	: WrT *nya*	〈魚〉	<TB *nya-, nga-
OJ na tur-ɸu	〈魚を釣る〉	: WrT {*nya h̲chor-ba* / *nya gshor-ba*	〈魚を釣る〉	
OJ ito～itö	〈糸〉	: WrT *skud-pa*	〈糸〉	<TB *Csk^{w}ud

〔143〕 TB *ch-→ WrT *ch-*: OJ t-
TB *ny-→ WrT *ny-*: OJ n-
TB *Csk^w-→WrT *sk-*: OJ it-
TB *-il→ WrT *-il*: OJ -i
TB *-or→ WrT *-or*: OJ -ur
TB *-ud→ WrT *ud*: OJ -o～-ö

西の地域の言語の対応関係には、なお不明瞭なところが多いけれども、蔵緬語の〈葉〉には、少くとも〔140〕にあげた三つの語幹があったと考えられる。

上代日本語の形態は、このphakがΦaに変化した結果成立したものであり、Φa〈葉〉は、アクセントの面からみると、本来いわゆる入声に属するものであった。この変化過程をモデル化すると、〔141〕のようになる。

日本語は、この単語群に関しては、ビルマ・ロロ・チン系言語に近く、音形式の上では、とくにチン系言語と類似していることがわかる。

このように、日本語とチベット・ビルマ語系の代表的な言語との間に、単語形式の分配関係を探求する手続は、語彙の比較研究にとって、有効な方法であるに違いない。

つぎに、基本的な語彙、とくに一つの意味の分野を構成する中心的な単語の対応関係をさぐってみたい。

第一に、上代日本人にとって、生活と密接に結びついている重要な単語と考えて誤りない〈釣針、

〔144〕 OJ tor-φu〈捕える〉: WrT *ḫchor-ba*〈わな，槍などでとる〉＜TB *pref.chor-
OJ kar-φu〈狩る〉: Tamang sikāri ＜TB *skar(-pa)

〔145〕 Gurung sikā:req Thakali sikāri Magar sikāri
Jirel syikāriq Sharpa sikā:ri Kagate sikāri

〔146〕 TB *kha〈口〉→
WrT *kha*: OJ ku-ti〈口〉
WrT × : OJ ku-φu, kura-φu(cf. 上掲〈かむ〉)
TB *dza(-pa)〈食べる，食べ物〉→
WrT *dza-pa*〈食べる〉: OJ ×
WrT *bzaḫ*〈食物〉: OJ sa-ti〈幸〉(?)

〔147〕 OJ asar-φu: WrT *ḫtshal-ba* TB *pref.dza-l(-pa)

釣る、魚、糸〉の対応関係をあげよう〔142〕。
各単語形式は、両言語の間で、並行した特徴を示していて、よく対応する。その対応関係を、〔143〕によってあらわしておきたい。
上代語で、海の幸を得る方法が、釣るであったのに対して、陸と空には〈捕える〉〈狩る〉が使われた。それぞれにあたる蔵緬形は、〔144〕の形を示している。
〈捕える〉は、チベット語では〈釣る〉と弁別されない形式であった。つまり〈魚〉も〈獣〉も捕える点では同じ行為であるためにチベット語ではとくに弁別されないが、日本語では tur-φu と tor-φu に分割された。これに対して、日本語〈狩る〉kar-φu は、チベット文語に、対応形をもたない。しかしヒマラヤ地域のチベット系言語の中に、それにあたる形がある[54]〔145〕。これらの言語形を根拠として、TB *skar-pa を設定できる。日本語の tur-φu, tor-φu, kar-φu の初頭音および母音の相違は、単なる偶然にあらわれたものでないかも知れない。
海幸・山幸の sati＜*tsa-ti は、蔵緬語から見ると、〈食べ物〉の意味であろうと解釈でき、チベット語 *bzaḫ-btung* との対応が考えられる。WrT *bzaḫ-btung* は、くわしく言うと *bza-ba dang btung-ba* で〈食べ物と飲み物〉を意味する。これには、WrB *a-ca a-sɔk* があたる。
上代語〈食べる〉は、ku-φu または ku-ra-φu の形をとり、いずれも TB

*kha〈口〉からの派生形であったと考えられるが、蔵緬語一般に広く分布する〈食べる〉**TB** *dza(-pa)→**WrT** *dza-ba*, **WrB** *ca-* 語幹を反映する形式はない。〈幸〉sa-ti のはじめの形態素が、その **TB** *dza- に対応する形式ではないかと推定できる。しかしあとの -ti は、**TB** *btung に対応するのか、それとも ku-ti〈口〉、tu-ti〈槌〉などの -ti と同種の形態素なのかは、いまのところ決定する根拠をもたない〔146〕。また〈(食物を)あさる〉も **TB** *dza-〈食べる、食物〉の派生形である可能性がある〔147〕。

つぎに、獲物を得る道具として、若干の単語が、同源語として認められる〔148〕。たとえば〈刀〉と〈剣〉の関係は、蔵緬語の構成から考察すると、〔149〕のように解明できる。

つまり、大刀は、〈断つもの〉の意味であり、剣は〈切り裂く・刀〉から構成されていることがわかる。〔148〕にあげた名詞は、いずれも同源語であったと理解でき、上代語〈矢〉ya は、チベット語形よりも、ビルマ語形に近い（**TB** C_1C_2V→**OJ** C_2V）。

食物を処理する方法として、〈炊く〉〈焼く〉〈焙る〉〈煮る〉〈茹でる〉があるが、それらも日本語とチベット語・ビルマ語で、同源語が保存されている〔150〕。

最初の例 **WrT** *dugs-pa*〈温める〉は、ほかの上代語形に対応する可能性が考えられるのと母音の対応関係に疑問が残るが、〈焼く〉の対応関係は、はっきりとしている〔151〕。

チベット口語では、me la tšak-pa のようにa母音をとるこ

〔148〕 **OJ** tati　刀(tat-ɸu の連用形)：**WrT** *sta-ri*＜sta-gri
　OJ turugi　剣：**WrT** *ral-gri*
　OJ yu(-mi)　弓：**WrT** *gzhu(-ma)*
　OJ ya　矢：**WrB** *mra*：**WrT** *mda*

〔149〕 **TB** *pref.ta(-pa)〈断つ〉→*sta-pa→**WrT** *sta-gri*〈断つ刀〉
　TB *tad(-pa)〈断つ〉→**OJ** tat-ɸu,（連用）tati＜**TB** *tads
　TB *dral-ba〈切り裂く〉＋gri→**WrT** *ral-gri*：**OJ** turu-gi

〔150〕 〈炊く〉　**WrT** *dugs-pa*〈温める〉：**OJ** tak-ɸu
　〈焼く〉　**WrT** *sreg-pa*＜*sdrag-pa：**OJ** yak-ɸu
　〈焙る〉　**WrT** *sbar-ba*(他)〈燃やす〉：**OJ** abur-ɸu
　　ḫbar-ba(自)〈燃える〉：**OJ** abur-ɸu
　〈煮る〉　**WrT** *nyer-ba*〈皮をなめす〉：**OJ** nir-ɸu
　〈茹でる〉　**WrB** *phrut-*〈ゆでる〉：**OJ** yud-ɸu

〔151〕 **WrT** *me la sreg-po*　火に焼く
　OJ ɸï ni yak-ɸu　火に焼く

と[55]、またチベット語の内的再構成によって、*sreg-* は、*sdreg より変化したことがわかるから、その蔵緬語形はさらに、対応するビルマ語形 *khyak*〈焼く〉を根拠として、*sdrag(-pa) であったと推定できる。日本語 yak-φu はこの語幹から $C_1C_2V \rightarrow C_2V$ の扱いを受けて出てきた形である。

〈焙る〉をめぐっては、〔152〕のような対応例をあげることができる。

〈焙る〉と〈煽る〉の関係は〔153〕のように極めて明瞭である。また、WrT *sbar-ba*, *hbar-ba* と *mar*〈油〉は、同根であり、これには上代語 abura が対応するものと思われる〔154〕。

〔154〕の形と並行して、〔155〕と上代語 aφur-φu〈あふれる〉もおそらく右の単語のいずれかと同源語であろう。

〈茹でる〉は〈湯〉と関連する。チベット・ビルマ系言語、とくにチン語系の言語では、水と湯は、〈水〉対〈熱い水〉の対比をもって表現される〔156〕。

このsaは、TB *tsha〈熱〉に対応し、チベット語の〈水〉*chu* に対する〈湯〉*chu-tshan* のあとの形態素は、この *tsha に、接尾辞 -a がついた形である。ビルマ語では、〈水〉の *rei* に対して *rei pu*〈水・熱い＝湯〉があるが、*rei prut*〈水を沸か

〔152〕 WrT *sbar-ba*〈燃やす〉 *me sbar-ba*〈火を燃やす〉
hbar-ba〈燃える〉 *me hbar-ba*〈火が燃える〉
OJ abur-φu φï abur-φu〈火に焙る〉
WrT *me sbard*〈完了形〉
OJ φï aburi〈火あぶり(連用形)〉
WrT *spar-ba*〈あぶる〉 *me spar-ba*〈火を煽る〉
OJ aφur-φu φï aφur-φu

〔153〕 WrT *sbar-*: OJ abur, WrT *spar-*: OJ aφur-

〔154〕 WrT *mar*〈油〉 *mar-me*〈灯火〉
OJ abura〈油〉 abura-φï〈灯火〉

〔155〕 WrT *hbur-ba*〈出てくる，突出する〉 *hphyur-ba*〈昇る，あふれ出る〉
hphyar-ba〈昇る，上げる〉 *spor-ba*〈上げる〉

〔156〕 Lushai〈水〉tui Thado〈水〉thi
〈湯〉tui-sa 〈湯〉thi-sa

〔157〕 WrT *ko-lpags*〈皮〉: OJ ka-φa
WrT *sha* 〈肉〉: OJ sisi

〔158〕 TB *pref.*gro-ng*(-pa)→WrT *h̲grong*(*s*)-*ba*: OJ körö-su
($C_1C_2V \rightarrow C_1VC_2V$)

〔159〕 OJ wodör-φu: WrT *gar*(-ba)<*h̲gar(-ba): WrB *ka*³-<TB *pref.g^war(-pa)

す＝湯を沸かす〉の *prut* が日本語 yud-φu そして yu に対応する形であったと私は考えている。これらのチベット・ビルマ系言語の形態から類推すると、古代日本語の〈湯〉は、おそらく midu yu に近い形であったと推定できるのである。

つぎに、〈皮〉と〈肉〉の対応例をあげてみよう〔157〕。

チベット語では、皮を、その状態から二種類に区別している。毛のついた皮、つまり動物の毛をはいでいない状態の皮を *lpags*~*pags-pa*<*bags-pa* といい、毛をとった皮を *ko-ba* という。日本語の ka-φa は、TB *ko-ba をもって、皮の総称にあてたと見るよりも、この φa は、*lpags*~*pags-pa* にあたると考えたい（二六二頁参照）。〈皮を剝ぐ〉には、チベット語形 *shu-ba* があるが、これに対する上代語形は見当らず、〈皮を剝ぐ〉は、ka-φa と φag-φu の連結で表現された。この φag-φu は、WrT *h̲bag-pa*〈はぎ取る〉に対応するのであろう(56)（TB *pref.bag(-pa)）。

〈肉〉sisi には、そのほかに獣、とくに鹿と猪を指したといわれる。チベット語にも *sha* は、肉のほかに、〈筋〉とか〈鹿〉(*sha-ba*)を意味した。〈鹿〉はいく種類もあるらしい。たとえば、*kha-sha*〈雪鹿〉もその一つである(57)。この WrT *-a*: OJ -i: の母音対応は、いままであげた対応例とは合わないが、全く例外的なものではない。

〈死ぬ〉と〈殺す〉——WrT *h̲chi-ba*〈死ぬ〉が OJ sin-φu に対応することはすでにあげたが、körö-su〈殺す〉の方は、チベット・ビルマ系言語にかなり広く分布する TB *pref.sad-pa→WrT *gsod-pa*(pf. *bsad*): WrB *sat-* には対応しない。しかし OJ körö-su〈殺す〉は、さほど広い分布範囲をもたない WrT *h̲grong*(s)-*ba*〈殺害されて死ぬ〉にあたるのではないかと考える〔158〕。

ミリ語の ka, ké〈殺す〉にあたる形は、ダフラ語などアボル・ミリ語群に分布する。

〈祭る〉と〈踊る〉——OJ matur-φu : WrT *mchod-pa* の例はさきにあげたが、〈踊る〉も、チベット語、日本語、ビルマ語で同源語が保存されている〔159〕。チベット語には、そのほか *skrab-pa*〈足踏みする〉、*blo-skrab-pa*〈踊る〉、*lkhrab*〈踊る〉もある。

WrT *g-* : OJ d- < TB *gʷ- は、WrT *k-* : OJ t- < TB *kʷ- とともに一つの対応関係を示していると考えられ、その並行例はすでにあげた（上掲〈糸〉〈戸〉などに見られる[58]）。

基礎的な語彙と言えば、人称代名詞と、身体部分をあらわす語彙を除いておくことができない。最後にその対応例をあげよう。人称代名詞は、〔160〕にあげるように、蔵緬語と上代日本語はよく一致しているといえる。WrT *-rang*〈自身〉には、OJ -re が対応しているが、たとえば wa-rö（東国形）の方が、WrT *-ang* : OJ -ö の規則によく合う。

身体部分を示す単語は、すでに〈口〉、〈目〉、〈鼻〉、〈足〉、〈歯〉、〈指〉、〈肝〉、〈血〉、〈髪〉、〈皮〉などについて、対応例をあげたが、〔161〕に数語を補っておきたい。対応関係を明示するために、比較する単語形を上下に並べて書く。そのほか、〔162〕に対して、OJ tubaki が対応すると考え得る。おそらく、tubaki は、tu-φak-φu より来源し、はじめの tu- が TB *thu- の反映形であろう。あとの φak-φu は、TB *pak(-pa) の WrB *pak-*〈水をかい出す〉に対応する。

〔160〕 一人称 TB *nga WrT *nga(-rang)* : OJ wa-re
二人称 TB *na WrB *nang* : OJ na-re
三人称 TB *kho WrT *kho(-rang)* : OJ ka-re

〔161〕 〈腹〉 WrT *grod-pa* $C_1C_2V \rightarrow C_2V$ OJ φara
〈臍〉 WrT *dbus*〈真中〉 $C_1C_2V \rightarrow C_2V$ φoso
〈女陰〉 WrT *stu* $C_1C_2V \rightarrow C_1VC_2V$ OJ φotö
〈手〉 WrT *tal-mo*〈掌〉 OJ te < *të
〈舌〉 WrT *lce* $C_1C_2V \rightarrow C_2V$ OJ si-ta
〈頬〉 Akha baba OJ φoφo

〔162〕 〈つば〉 WrT *thu(-ba)*〈つばを吐く〉
WrB *(tam)twei²* < tuy²〈つば〉< TB *thu-

七 今後の課題

日本語と蔵緬語との間には、以上述べてきたように、かなり多くの形態素あるいは単語構成の一致を指摘できるけれども、言語体系全般の対応関係については、なおわからないところが多く残っている。そして、また両言語間に認められる音韻対応関係は、かりに、数多く発見出来たにしても、対応法則の設定という極めてやっかいな、手数のかかる仕事は、なお未解決のままである。

たとえば、A言語のsが、B言語のsにあたるとする。たとえ、この関係を示す多くの対応例を見付け出したにしても、それは一つの対応関係の指定にすぎない。

そのような音韻対応関係とは違って、音韻対応法則は、原則として、対象とする言語にあらわれる音形式をすべて説明する能力を具えなければならない。その法則は、ここでいう拡張辞、接尾辞、形態素、単語、いずれの形式であるかは問わず、その音素が構成員となる音形式のあらわれ方を、すべて支配する指令でなければならない。まさにその意味では、AB言語の比較研究の結論を導き出し得るべき性格のものであるといえる。音韻対応法則が設定されるならば、その指令にしたがった音形式の出現を期待し、その期待が実証され得ることになるであろう。たとえば、蔵緬語の*sが、チベット語と日本語において、どのように働くかの法則をかりに設定してみよう〔163〕。

蔵緬語において、*sは接頭辞として、また接尾辞として種々の重要な役割を果していた。とくに完了態の接尾辞として、名詞構成にあずかった役割は大きかった。日本語における連用形

〔163〕	TB *s	WrT	*s-*	*-Vs#*	*-Cs#*	*-CsC*
		OJ	s-～#-	-V#～-VsV	-Ci#～-#	-CiC
	TB *s(pref.)	WrT	*s-*	(非音節的接頭辞)		
		OJ	sV-～ΦV-～#-			
	TB *sV(pref.)	WrT	*s-*	(音節的接頭辞)		
		OJ	Φu-～#-			

〔164〕 WrT *h̲chag-pa*〈裂く〉: OJ saku<tsak-Φu〈裂く〉

の働きは、まさにそれと一致し、蔵緬語の形態法をよく伝承したものといえる。

いまsについて示したような音韻法則が、のちの日本語の形態を、チベット語とは大きくかけ離れた姿に変化させたのである。本論稿において提出した例の中で、この法則にはずれるものは再検討しなければならないと思う。(59) 各音単位について、このようなはたらきを指定でき、蔵緬語共通体系の音組織を決定することができるならば、日本語の系統論は明るい見通しを得ることになるであろう。

ここで、強調しておかなければならないのは、その指令が、比較の対象となった言語の同源形式に限って適用され、その範囲を越えた場合、その指令が果して真か否かは実証されない点である。つまり、その法則は、同源語と考えられる形式(もちろん文法形式も含んでいる)をもとに帰納されて、設定されるから、その確実な適用範囲は、同源語に限られることになる。これに対する疑問には、言語の比較研究が、某言語と某言語の間の同系性を説明するための研究であり、また、たとえば、『万葉集』に出てくるすべての単語について、他言語の語彙との対応関係がわからなければ、日本語の系統は決定できないという考え方が誤りであることを指摘するだけにしておきたい。言葉の発展とはそのようなものであろう。Aの言語もBの言語も独自の発展をたどって行き、極めて原初的な形態を取り上げたにしても、AB言語は、中核的な部分の一致という形でしかとらえられないのではないだろうか。その両言語の同系性の証明は、音韻対応法則の働きの設定と、同源語、同語幹構成、活用形の合致などの指摘によって、満足しなければならない。その点、さきにあげたアブルとアフルのような対照例は、極めて強力な証明力を持つものと考えられる。

本論文において、音韻対応関係をいくつか示したが、音韻対応法則をまとめた形で提出しなかったのは、さらに十分な検討を加える必要があったからである。

一般的に見て、日本語とチベット語の母音の対応関係には、つぎの例に代表されるような重要な事実がある。

たとえば、〔164〕では、チベット語の -ag に、日本語の -ak が対応する。この対応関係には、かなりの並行例があって、両者共に TB *-ag から来源しているといえる。ところが〔165〕の対応例では、チベット語の -ag に、日本語の -uk が対応する。これも明確な対応のセットである。かりにさきの TB *-ag と区別して、この共通形を TB *-a_2g としておこう。これら二種の対応例には、何か別の要因を想定しない限り、共通形として、異った形式 TB *-ag と *-a_2g をたてざるを得ない。この *-a と *-a_2 の相違は、広い範囲にあらわれ、何か未知の重要なメカニズムがあって、それが両言語の対応関係の基本機構をにぎっているのではないかと思わせる。母音の対応関係について、さらにこまかい事実の発見が必要である。蔵緬語と日本語の比較において重要な決め手になるアクセントの対応法則についても、時間をかけて考察しなければならない。ここで、現段階までに得た結果を述べてみたかったが、紙面の都合で省略せざるを得なかった[60]。

〔165〕 WrT *ẖtshag-pa*〈漉く〉：OJ suku <tsuk-φu〈漉く〉
　　　 WrT *chags-pa*〈愛する〉：OJ suku <tsuk-φu〈好く〉

〔166〕 WrT *na*〈野原，草原〉：OJ no〈野〉 <TB *na
　　　 WrT *bzhi*〈四〉：OJ yö〈四〉 <TB *bdli
　　　 WrT *nya*〈魚〉：OJ na〈魚〉 <TB *nya～nga

　実際に起った各形態素の音形式の変化は、少くとも部分的には場合場合に応じた変化がかなり含まれていたのであろう。どれが規則変化であり、どれが不規則なのかを、まず見きわめていかねばならない。規則に合わないものには別の規則を考える必要がある。たとえば、さきにあげた〈皮〉、〈量る〉の例のように、日本語の k- は、チベット語の k- に対応した(cf. 上掲〈皮〉OJ kaφa: WrT *ko-lpags*)。一方で、日本語の kï〈木〉とチベット語の *shing*〈木〉、TB *shi-ng も、同源である可能性は大いにある[61]。ただ、それと同じ対応関係を示す単語が発見出来ないだけである。

　最後に、残された問題の一つを、少し検討しておきたい。さきにもふれたが、上代語の一形態素の音節数を決定した要因は何であったのか、これはなかなかやっかいな問題である。たとえば、チベット語の一音節単語に、日本語の一音節単語があたる場合、これは祖形の一音節を

両言語が伝承していると考えられるから、ほぼ問題はない〔166〕。そして、チベット語の二音節単語と日本語の二音節単語が、両音節共に対応する場合も、ほぼ問題なく理解できる〔167〕。

そして、さきに述べた法則によって、もともとの複子音をもった形態素が拡大され、日本語で二音節になる場合もうなずける（WrT *shar-ba*〈量る〉、OJ Φakar-Φu など）。

さらに、日本語が特定の接頭辞をもっていると考えられるときも、二音節形態をとる理由はわかる。上掲〈草〉、〈風〉など(二五九頁参照)。

ところが、つぎのような場合、チベット語の一音節に対して日本語の二音節が何故生れるのか、了解するのに苦しむ〔168〕。

〔167〕 WrT *rdo-ma*〈石〉 : OJ ta-ma〈玉〉 <TB *rdo-ma
WrT *h̲chor-ba*〈釣る〉 : OJ tur-Φu〈釣る〉 <TB *pref.chor-ba
WrT *khog-ma*〈土なべ〉 : OJ ka-ma〈釜〉 <TB *khog-ma

〔168〕 WrT *mdzub*〈指〉 OJ yubi

さきに、yubi には、*dzubs の来源を設定したが、実際には、何故この単語に -s がつき得たのかわからない。同じように、チベット語 *dom*〈熊〉一音節に日本語 kuma 二音節が対応するのは、日本語の祖形が *dom-ma であったと推定することによって、一応説明はできるが、日本語形がある法則に支配され、kum-a から来源している可能性もあり得る。

さきにあげた〈岸〉WrT *khris* と OJ kisi は、祖形 TB *khris に対する $C_1C_2VC>C_1VC$ の法則がはたらき、khris>khis が出来、さらに -i が添加されて khis-i が出来たと説明できるが、なぜ別の法則が働き、kiri とならなかったのかわからない。同じように、*dbus*〈真中〉が doΦo とならずに、Φoso〈臍〉となったのは何故か[62]、つまり、上に考えた、たとえば s の働きのような音韻対応法則に、さらに働きかける、いわば音節調整法則といった規則があったと理解する必要があるであろう。

日本語とチベット・ビルマ系言語の比較研究は、なお多くの難関を突破しなければならない。

（1）日本語の系統についての筆者の意見は、つぎの拙文を見ていただきたい。「中国江南地域の非漢語民族とその言語」（国分直一編『倭と倭人の世界』毎日新聞社、一九七五年）、「日本語の系統を求めて（上・中・下）」（『言語』五巻六・七・八号、一九七六年）、「日本語の系統を求めて（続）」（『言語』六巻三号、一九七七年）。これらの拙文には、いくつかの訂正を要するところがある。「日本語の起源」（『中央公論』一九七七年三月）、「続・日本語の系統を求めて（上・中・下）」（『言語』六巻一〇・一一・一二号、一九七七年）。

（2）以下、チベット・ビルマ語族と蔵緬語族は、同じ意味で使っている。しかし、蔵緬語と呼んでいるのは、その語族に仮定する祖語を指している。TB は、その祖形の略称である。そして、チベット・ビルマ諸語またはチベット・ビルマ系言語と言う場合は、具体的な言語集団を意味している。

（3）パーカーの研究には、Cognates of Native Japanese Words (The Transactions of The Asiatic Society of Japan, second series, vol. V, 1928, pp.5–71) などがあるが、チベット・ビルマ諸語と日本語の比較研究は、C. K. Parker, A Dictionary of Japanese Compound Verbs, Tokyo, 1939, Maruzen の Introduction part 2. A Comparison of Japanese and the Tibeto-Burman Languages に代表される。その日本語訳『日本語・西蔵＝緬甸同系論』（原一郎訳、東亜同文書院、一九四一年）は、よく知られている。

（4）ここで言う古代日本語とは、漠然と、上代日本語（＝上代語すなわち七・八世紀奈良時代の言語）に到達するまでの日本語を指している。筆者は、古代日本語に、前期と後期の大まかな二つの段階を設定してみた。前期古代日本語は、筆者の考えている単語高アクセントをもった段階を呼び、後期古代日本語は、単語高アクセントから音節高アクセントに変貌した時期以降を呼ぶ。あるいは前者を原初日本語、後者を古代日本語と呼んでも分類の主旨は変らない（注1『言語』六巻一二号所収の拙文参照）。

（5）以下、つぎの略号を使う。

TB（＝Tibeto-Burman）蔵緬語（注2参照）、BL（＝Burmese-Lolo）ロロ・ビルマ語、WrT（＝Written Tibetan）チベット文語、WrB（＝Written Burmese）ビルマ文語、OJ（＝Old Japanese）上代日本語（上代語、古代日本語形を含む）、AncBur（＝Ancient Burmese）中古ビルマ語、ModBur（Modern Burmese）現代ビルマ語、pref.（＝Prefix）接頭辞、suff.（＝Suffix）接尾辞、pf.（＝

Perfect)完了形、Fut.(=Futur)未来形、imp.(=Imperative)命令形。

なお、声調の具体的な型を示すときには、数字によって、最低1から最高5までの段階を分け、たとえば33は、中平型、13は低昇型、53は高降型のように、表記した。なお、ビルマ語形につく2、3の数字はそれぞれ第二声調、第三声調を示している。

(6) 複合動詞の研究は、たしかに重要な課題ではあるが、本稿ではまったくふれていない。

(7) チベット・ビルマ諸語の比較研究は、ロロ・ビルマ系言語に関しては最近かなりの成果が刊行されているけれども、全体として体系づけられたとは、まだ言い難い。つぎのような代表的な文献がある。

Stuart N. Wolfenden, Outlines of Tibeto-Burman Linguistic Morphology, London, 1929.

Robert Shafer, Introduction to Sino-Tibetan (Otto Harrassowitz) Wiesbaden, 1966〜1975 pts. 1〜5.

Paul K. Benedict, Sino-Tibetan, A Conspectus (James Matisoff 補遺), Cambridge, 1972.

なおチベット語、ビルマ語の歴史などについては、西田『西番館訳語の研究—チベット言語学序説』松香堂、一九七〇年(誤植が多く訂正を要する)、『緬甸館訳語の研究—ビルマ言語学序説』松香堂、一九七二年、『多続訳語の研究—新言語トス語の構造と系統』松香堂、一九七二年、を見られたい。

(8) モン・クメール諸語を含めたオーストロ諸語と漢蔵語の系譜関係は、コンラディによって主張された。A. Conrady, Eine merkwürdige Beziechung zwischen den austrischen und den indochinesischen Sprachen, Kuhn Festschrift (München, 1916), Neue austrisch-indochinesische Parallelen, Hirth Anniversary Volume, London, 1923.

ムンダ語との関係を主張したのは、マスペロである。

Henri Maspéro, Notes sur la Morphologie du Tibéto-Birman et du Munda, BSLP 43, 1946.

マライ・ポリネシア諸語との関係は、ヴルフの遺稿によって代表される。

K. Wulff, Über das Verhältnis des Malayo-Polynesischen zum Indochinesischen, Copenhagen, 1942.

(9) この主張は、K・ボウダの論文が中心である。

Karl Bouda, Jenisseisch-tibetische Wortgleichungen ZDMG 90, 1936, Die Sprache der Jenisser, Anthropos vol. 52, 1957.

(10) ベネディクトのオーストロ・タイ説は、つぎの著書にまとめられている。

Paul K. Benedict, Austro-Thai, Language and Culture with a Glossary of Roots, HRAF Press, 1975.

(11)　チベット語の歴史は、西田『西番館訳語の研究』(前掲)およびローリッヒの論著を見られたい。
Рерих, Тибетскии Язык, Москва, 1961, Основные Проблемы Тибетского Языкознания, Советское Востоковедение No. 4, 1958.

(12)　西夏語については、簡単には、西田『西夏語の研究 I、II』座右宝刊行会、一九六四―六六年、および『西夏文字』紀伊国屋書店、一九六七年、を見られたい。

(13)　ビス語については、西田「ビス語の研究」(『東南アジア研究』四巻一号、一九六六年)、「ビス語の系統」(『東南アジア研究』四巻三号、一九六六年)、「ビス語の系統(続)」(『東南アジア研究』四巻五号、一九六七年)を参照。

(14)　ロロ・ビルマ語については、西田『緬甸館訳語の研究』(前掲)を参照されたい。

(15)　声調体系の変貌に関しては、『言語』六巻一二号所載の拙文を参照していただきたい。

(16)　マル・ラシ語の比較研究は、西田『多続訳語の研究』(前掲)で試みている。このH、L、Fはそれぞれ共通語の高型、低型、下降型声調を示している。

(17)　単語形式を引用した文献を簡単にあげておきたい。ニー・ロロ語は、馬学良『撒尼彝語研究』語言学専刊第二種、中国科学院、一九五一年、アヒ・ロロ語は、袁家驊『阿細民歌及其語言』語言学専刊第五種、中国科学院、一九五三年、アカ語は、西田「アカ語の音素体系」(『音声科学研究 IV』一九六五―六六年)、ビス語は前掲拙稿、ラフ・ナ語は筆者の資料より、リス語は西田「リス語の研究」(『東南アジア研究』五巻二号、一九六七年)、モソロ語は、傅懋勣「維西麼些語彙」(『中国文化研究彙刊』第三巻、一九四三年)に、モソ文語は、李霖燦編、張琨標音、和才読字『麼些象形文字字典』説文社、一九五三年、にそれぞれよっている。なお西夏語の系統論は、T. Nishida, Hsi-hsia, Tosu and Lolo-Burmese Languages (『音声科学研究 X』一九七六年、を見られたい。

そのほか、各言語形式は、E. J. A. Henderson, Tiddim Chin, Oxford Univ. Press. 1965; T. C. Hodson, Thādo Grammar, Shillong, 1905; J. H. Lorrain, Dictionary of the Lushai Language, Calcutta, 1940; A. G. E. Newland, A Practical Handbook of the Language of the Lais, Rangoon, 1897; G. D. Walker, A Dictionary of the Mikir Language, Shillong, 1925; D. N. Shankara Bhat, Tankhur Naga Vocabulary, Poona, 1969; O. Hanson, A Dictionary of the Kachin Language, Ran-

goon, 1954 (Reprint)などによっている。

(18) ヌン語は J. T. O. Barnard, A Handbook of the Rawang Dialect of the Nung Language, Rangoon, 1934 による。ヌン語、トゥルン語とビルマ語の簡単な比較語彙表は、西田『緬甸館訳語の研究』(前掲)二三七頁にある。

(19) トゥルン語は、Lo Ch'ang-P'ei, A Preliminary Study on the Trung Language of Kung Shan. HJAS 8, 1945 および Kun Chang, Lo Ch'ang-p'ei's Description of the Trung Dialect. Mimeo. 110 pp. によっている。そのまえがきで張琨はつぎのように言っている。

(大意) 一九三九年に私は、雲南省大理の中央政治学院(Central Political Academy)の学生であった貢山方言の話手をインフォーマントとしてトゥルン語を調査した。その時の調査資料は、中国に残したままになっている。私の師、故羅常培は、一九四二年に大理を訪れ、同じインフォーマントについて調査した。その報告は、羅常培の『貢山求語初探』(油印本)となって、戦時中、ごく少部数配布された。それはトゥルン語のいまある唯一の資料なので、もっとちゃんとした形で再現しておく価値がある。羅常培の音韻体系を修正し、もともと意味範疇にしたがって配列されていた語彙を並べかえた。

これはチベット・ビルマ諸語の比較研究にとって貴重な資料である。

(20) ピュー族の移住については、西田『緬甸館訳語の研究』(前掲)二四二頁以下を参照。

(21) 表中、×印は、該当する同源語の替りに、別の形が使われていることを意味する。

(22) ムル語については、Von Lorenz G. Löffler, The Contribution of Mru to Sino-Tibetan Linguistics, ZDMG 116, 1966 を参照されたい。

(23) セマ語の三声は、高型・中型・低型の対立であって、ビルマ語の対応形をあげると、つぎのようになる。

a¯zhi(高型)〈酒〉: WrB *sei*〈酒〉

a-zhi(中型)〈血〉: WrB *swei*^{2}〈血〉

a_zhi(低型)〈ねずみ〉: WrB *krwak*/cwe?/〈ねずみ〉

¯chu(高型)〈食べる〉: WrB *ca*^{2}-〈食べる〉

_chu(低型)〈掘る〉: WrB *tu*^{2}-〈掘る〉

N. L. Bor, J. H. Hutton, The Use of Tones in Sema Naga, JRAS, 1927 参照。アンガミ・ナガ語の声調は、Robbins Bur-

ling, Angami Naga Phonemics and Word List, Indian Linguistics, vol. 21, 1960.

(24)　ボド語およびガロ語形は、Robbins Burling, Proto-Bodo, Language, vol. 35, 1959 によった。

(25)　J. H. Lorrain, A Dictionary of the Abor-Miri Language, Shillong, 1907.

(26)　ダフラ語には、つぎの資料がよい。
N. L. Bor, Yano Dafla Grammar and Vocabulary, JRASB, Letters, vol. IV, 1938.

(27)　最近のＳＩＬ(The Summar Institute of Linguistics)の調査については、鳥羽季義「ネパールにおける諸言語の研究状況——とくに The Summer Institute of Linguistics の活動について」(『東洋学報』五五巻一号、一九七二年)に詳しい。またその調査資料の一部は、Austin Hale, Clause, Sentence, and Discourse Patterns in selected languages of Nepal, Parts I～IV, 1973 の形でまとめられている。

(28)　この人称接辞をとる動詞の形態は、チベット文語に代表される形態とは別の層に属すると考えている。その一つの例として、表〔7〕を見られたい。この形態は、おそらく他の語族の影響によるものではないであろう。

(29)　CV# の # は、たとえば CVm に対して、-m の位置に音単位(音素)がないことを示す。

(30)　単語族については、ここでは詳しく述べない。西田「続・日本語の系統を求めて(上・中)」(『言語』六巻一〇・一一号、一九七七年)を見られたい。また表〔19〕にあげた諸単語相互間に働いている派生手順については、なお未整理である。たとえば、これらの例から、dom→tham(d→th, o→a)や、dom→dum(o→u)→dzum(d→dz)→dzlum(dz→dzl)というような派生が想定でき、ほかのいくつかの例でも、音形式の派生と意味の面での派生に並行関係を認め得るとすると、その方法がかつて派生手順として存在したと考えてよいであろう。

(31)　WrT *lching-ba*〈結ぶ〉(ex. *shed-rags lching-ba*〈腰帯をしめる〉): OJ *sim-ɸu〈締める〉の対応で、*-ng>OJ -m を推定できるような環境による変化も考慮しなければならない。

(32)　チベット語の古形式 bcwo については、W. Simon, Tibetan 'fifteen' and 'eighteen', Études tibétaines dédiées à la mémoire de Marcelle Lalou, Paris, 1971 および、Tor Ulving, Tibetan Vowel Harmony Reexamined, TP 58, 1972 を参照。

(33)　P. Benedict, Sino-Tibetan, A Conspectus,(前掲)p. 74.

(34)　リス語の場合は、ここであげる4. C_1 V C_2V に替って、そのまま複子音を保存する形、C_1 C_2V があり得る。〈臍〉Lisu khja-

dùh: WrB *khyak*, 〈沸かす〉Lisu kjah-ah: WrB *khyak-saň*。西田「リス語の比較研究 I」(『東南アジア研究』六巻一号、一九六八年)三五頁参照。

(35) この形も重複形であろう。kiragira-si＜*giragirasi＜*gragra-si.

(36) これらのディマーサ語は、Benedict, Sino-Tibetan(前掲)から引いた。

(37) 接頭辞 m- の多くは、mi〈人間〉からの転化と考えられている。Wolfenden, The Prefix m-with certain Substantives in Tibetan, Language, 1928; R. Shafer, Prefixed m- in Tibetan, Sino-Tibetica 3, Mimeo. Berkeley, 1938.

(38) F. W. Thomas, Tibetan Literary Texts and Documents concerning Chinese Turkestan, vol. 3, London, 1953.

(39) 西田「リス語の研究」(前掲)七三頁以下、「リス語の比較研究 I」(前掲)二二頁。

(40) 雲と蜘蛛・熊の関係については、西田「続・日本語の系統を求めて(中)」(前掲)の中で述べた。

(41) カチン語 -ay は、ビルマ文語 *-saň* にあたる助詞であって、両者の間でつぎのような関係を考え得る。

WrB *-saň*＞*say＞seh＞he(タボイ・マグイ方言形)

seh＞de(現代中央方言形)

*say＞hay＞ay(カチン語形)

(42) スタンは、チベット語にも、ロロ語 *dzang にあたる形の存在を考えている。R. A. Stein, Notes d'étymologie Tibétaine, BEFEO, XLI, 1942, p. 222. 敦煌文献で mtsho, mtsho-ma, mtsho-mo が女性の名前の中によく出て来るところから、一般名詞であったに違いないとし、mtsho を m-(＝ma, mo)〈女性〉＋tsho に分析して、この tsho を〈人間〉の意味にとっている。また WrT *lang-tsho*〈若者〉、*lang-tsho-ma*〈娘〉にも tsho が見られ、西夏語、ロロ語、モソ語にもあると言う。ロロ系言語の形は、表〔3〕(一二三五頁)および表〔5〕(一二三六頁)を見られたい。

(43) たとえば〈鼻をかむ〉/na-tšhu töön/*sna-chu ḫdon*。この *snabs* が口語形では、まったく使われないのではなく、複合形として残っている。

snabs phyis /naptšii/〈手拭〉

snabs lud /naplüü/〈つばや鼻水〉

snabs stug /naptuu/〈鼻水〉

M. Goldstein, Tibetan-English Dictionary of Modern Tibetan, Kathmandu, 1975 による。

(44) 西田「チベット語動詞構造の研究」(『言語研究』三三号、一九五八年)。なお最近の研究として、W. South Coblin, Notes on Tibetan Verbal Morphology, TP, LXII, 1976 を参照されたい。

(45) **TB** $*k^w$-$*g^w$- の設定については、西田「続・日本語の系統を求めて(中)」を見られたい。

(46) これらの例では、**WrT** *l*- が **OJ** o- にあたる可能性を考えている。**WrT** *r*-: **OJ** u- は、西田「続・日本語の系統を求めて(中)」(前掲)を見られたい。

(47) 桜井茂治「ナ行変格活用動詞成立論」(『国学院雑誌』七三巻一〇号、一九七二年)。これと類似する現象は、ほかの単語にもあり得たと考えられる。たとえば **TB** *rma〈馬〉と **OJ** uma。

(48) このVは、動詞の代表形である。

(49) ハニ語は、高華年「揚武哈尼語初探」(『中山大学学報』一九五五年)により、リス語は、西田「リス語の研究」(前掲)、ラフ・シ語は西田「ラフ・シ語の研究」(『東南アジア研究』七巻一号、一九六九年)による。

(50) いまは、日本語では、**TB** *srid が hri になり、na- を先行する場合に hri>si の変化が起り、単独では hri が ari となったと解釈しているが、再考してみたい。

(51) 金鵬『蔵語拉薩日喀則昌都話的比較研究』語言学専刊、科学出版社、一九五八年、二〇〇頁、参照。

(52) ここでは、ほかのチベット・ビルマ系言語の否定詞については述べないが、たとえば、ダフラ語(ヤノ方言)では、否定詞 -mâ は動詞のあとに置かれる。

ngo kâ*pa*〈私は見る〉　kâ*mâ*〈私は見ない〉
ngo do*pa*〈私は食べる〉　do*mâ*〈私は食べない〉
ngo dung*donna*〈私は坐っている〉　dung*mâ*〈私は坐っていない〉

上掲 N. L. Bor, Yano Dafla Grammar and Vocabulary による。

(53) 日本語とチベット語の形容詞の対応については、西田「続・日本語の系統を求めて(中)」(前掲)を見られたい。

(54) 注(27)にあげた Austin Hale の資料による。

(55) Gold and Richardson, Tibetan Word Book, Oxford Univ. Press, 1943.

(56) 西部バルティ方言の〈皮〉baxs-pa は、*lbag-pa*〈はぎ取る〉の完了形式であったかも知れない。

(57) 学名は、Capreolus capreolus Linnaeus で、中国では狍または狍子と呼ばれている。青海省生物研究所・同仁県隆務衛生所編『青蔵高原薬物図鑑』第三冊、青海人民出版社、一九七五年、西寧。

(58) 注(45)を見られたい。

(59) これは、ごく粗い表示にすぎず、さらに細かい環境の設定が必要なことは言うまでもない。なお、自動詞につく -as のあつかいはこの表には含まれていない。

(60) 日本語のアクセントの成立について、筆者の基本的な考え方は、「続・日本語の系統を求めて(下)」(前掲)に述べた。

(61) 甘粛省で話されるチョネ方言では、末尾の -ng が脱落する現象がある。〈木〉は /shi(低型)/〈なか、家〉は /na(低型)/ WrT *nang* である。注(60)にあげた拙文を見られたい。

(62) WrT *lkhris* や *dbus* の -*s* が WrT *sa*〈土地、場所〉から来源していると考えることは十分根拠がある。たとえば *dbus* は、〈真中のところ〉の意味と考えられる。

7　日本語の系統論史

佐佐木　隆

一　導　言

日本語の系統いかんという問題は、一九世紀中葉にいたり、外国人研究者によって提起された。その当初から現今にいたるまでの一世紀余の研究史を俯瞰するのが、本稿の直接の目的である。

同様の主題をとりあげた論考は、すでにいくつかでている。比較的まとまったものを若干あげるならば、まず、戦前のものには、単行本として、

A　金田一京助『国語史　系統篇』[1]（一九三八年）

があり、また、戦後のものには、

B　大野晋「日本語の系統論はどのやうに進められて来たか」[2]（一九五二年）

C　村山七郎「国語系統論・比較研究の歴史」[3]（一九六一年）

D　亀井孝ほか「日本語の系統」[4]（一九六三年）

E　村山七郎・大林太良「日本語比較研究の歩み」[5]（一九七三年）

F　小沢重男「日本語の系統」[6]（一九七六年）

などの数編がある（Bの大野には、ほかに、池田次郎・大野晋編『論集　日本文化の起源　5』[7]における「言語学編」の解説がある。Bよりも全体的に記述が詳細であり、また、それ以後に発表された諸論についても、簡単にではあるが、言及されている）。いずれも独自の概観であり、なかには、従来の諸説およびその方法論にするどい批判をくわえながら自説を提示しているものや、言語学上の諸概念および方法を周到な配慮のもとに解説しつつ諸説を批判的に

紹介しているものもあって、おしえられるところがすくなくない。
本稿は、みぎの諸論考ならびに、泉井久之助・亀井孝・服部四郎・村山七郎その他の多数の研究者による多数の論文からおおくの示唆をえつつ、記述をすすめていくこととする。(8)

二 日本語系統論の現状とその環境

日本語の系統の究明ということが学的営為の対象とされるようになってから、すでに一〇〇年有余の歳月が経過している。その間に提示された説は、その歳月のながさに応じてまことに多岐にわたり、世界中のさまざまな言語が日本語の同系言語としてあげられた。亀井孝らの編集になる『日本語の歴史 1』(これには、前掲のDがふくまれる)では、それらの諸説を、

(1) 北方アジアの諸言語に系統をたどろうとこころみるもの
a. 日本語をアルタイ諸語、またはウラル・アルタイ諸語の一つに数える説
b. 朝鮮語とむすびつける説
(2) 南方アジアの諸言語に系統を求めようとこころみるもの
a. 日本語をマライ・ポリネシア語(またはオーストロ・アジア語族)に属するとする説
b. チベット・ビルマ語にむすびつける説
(3) 日本語を印欧語へもってゆくもの
(4) その他

のように分類・整理している(（4）には、アイヌ語系説など、種々の説がふくまれる)が、論者らの熱心な主張にもか

かわらず、これまでその証明に成功しえたものは皆無である。したがって、日本語の系統は、現在のところ不明であるといわざるをえない。一〇〇年あまりのあいだにえられた積極的成果といえば、琉球語は日本語の一方言と目すべき言語であるという事実が確証されたことだけである。朝鮮語および、ツングース語・チュルク語・蒙古語などのいわゆる〝アルタイ語〟と日本語とのあいだにみられる文法的諸てつづきの類似は、当初からこの領域におけるおおくの研究者によって注目ないし重視されてきており、それだけに、それらの諸言語の同系性がとなえられることもおおかった。現今においても、そのような見解はもっとも有力ではあるが、それらの諸言語の系譜関係がいまだに立証されていないために、近時もなお、専門の研究者によって、かつて系統論史に登場したチベット－ビルマ語系説が再三提唱され、あるいはまた、学史上その存在の可能性が疑問視されてきたところの、〝アルタイ語〟系言語と南島語との〝混合語〟説(さきの分類でいえば、(1)のaと(2)のaとの二方向に日本語の起源をもとめる説ということになる)が熱心に唱導され、定説をみない(現在におけるこれらの系統論については、後述)。極度に厳密にいうならば、一世紀余のながきにわたる、内外の多数の研究者による多大の努力をもってしても、なお、学界の承認がえられるようなかたちで日本語と同系であることがあきらかにされた言語は――日本語の一方言と目すべき琉球語をのぞいて――ないというのが、日本語系統論の現状なのである。

そもそも、複数の言語間の同系性を闡明する学としての比較言語学は、不規則であるために組織的に借用することの極度に困難な――それゆえにこそ、系譜関係存在の明証となりうるところの――複雑な形態法と、質量ともにすぐれた資料とをあわせもつインド－ヨーロッパ語族のうえに成立し発達したものである。比較言語学は、言語の内部と外部との両面におけるこれらの利点のゆえに、恣意性を払拭しつつ言語の同系性を客観的に証明し、さらに、諸言語間の系譜上の距離までも鮮明にあきらかにしえたのである。

日本語系統論は、この点においてまことに不利な環境におかれており、そのことがこの問題の解明を困難きわまり

ないものにしている。日本語と同系である蓋然性がもっともおおきいとされる朝鮮語も、それにつぐとされる〝アルタイ語〟も、そして、当該の日本語自体も、インド－ヨーロッパ諸語のように不規則で複雑な形態でつづきをとらず、その機能を主として接辞——ないし、その連結形式——の接尾によってはたす。接辞およびそれに準ずる要素は、一般的にいって、単に借用されやすいのみならず、たとえば日本語における助動詞などのばあいのように、長期のあいだには摩滅やいれかえがおこなわれやすい。インド－ヨーロッパ語族における比較研究が〝比較文法学〟たりえたのとは、おおいに事情がことなっている。

資料の面においても、日本語の輪郭をうかがいしることのできる『古事記』『日本書紀』『万葉集』などの文献は八世紀の成立にかかるものであり、また、まとまった最古のチュルク語資料「オルホン碑文」も、おなじく八世紀中葉のものであって、比較研究にとってまことに不利な条件のもとにおかれている。朝鮮語にいたっては、まとまったものとしては、一五世紀中葉におけるハングル制定以後の文献しかない。西暦紀元前一〇世紀をはるかとおくさかのぼる資料を豊富にもつインド－ヨーロッパ語族とは、もとより比較にならない。

昭和二〇（一九四五）年代以降、多方面からのアプローチによって、この領域の研究を精力的に推進してきた服部四郎は、日本語系統論の方法を具体的に解説した論文「日本語の系統——研究の方法——」（一九五二年）[9]において、日本語の系統の「証明困難の根本原因は日本語などの言語構造にある」として、「言語構造」を「日本語の系統を明かにすることが困難な一大原因」とみなしているが、古資料の欠如と「言語構造」のうちのいずれか一方を系統究明困難の「一大原因」であると断ずることはできない。日本語・朝鮮語・〝アルタイ語〟のそれぞれに、インド－ヨーロッパ語族のばあいほどにふるい資料が残存していたら、あるいは、それらのあいだの同系性の有無はすでに証明しえていたかもしれないのである。

三　日本語系統論のあゆみ

1　日本語系統論史のあらまし

日本語系統論のあゆみを具体的にたどってゆくにさきだって、その当初から現在にいたるまでの研究史のあらましを簡単に展望しておくこととする。

まず、日本語の系統を学問的な意味で最初に問題にしたのは、一九世紀のヨーロッパにおける近代言語学の発達の影響をうけた外国人研究者たちであった。概略的にいって、かれらのほとんどは、日本語を〝ウラル－アルタイ語〟――もしくは、〝アルタイ語〟――や朝鮮語と同系とみるところの、いわゆる〝北方〟起源説をとっていた。しかし、明治二〇(一八八七)年代以降、この問題について積極的に発言するようになった日本人研究者らのすべてに、それらの外国人研究者による従来の研究結果が学的遺産として相続されえなかったために、日本人による研究は、まったくのふりだしからはじめられることになってしまった。一部の研究者が、わずか二、三の単語の類似をもって日本語と〝南方〟語の同系性の証左と断定したり、あるいは、単なる語順の一致を日本語とインド－ヨーロッパ語族の一と同系であることの証徴と論断したりしたのは、従前の外国人研究者らの研究結果が、そのおおすじにおいてすらその論者らに理解されえなかった事実をものがたる。とはいえ、少数のすぐれた研究者の着実な研究によって、やがて、日本人研究者のあいだでも、〝北方〟起源説が有力となった。

大正時代(一九一二―二六)になると、明治時代(一八六八―一九一二)における日本語系統論の盛行とは逆に、若干のみるべき研究はあったものの、全体的にみれば、この問題の研究の発表はいちじるしく沈滞した。他の諸言語に比

して、日本語ともっとも顕著な類似をしめす〃北方〃諸語においてさえ、日本語とのあいだに明確な対応関係をみいだすことができなかったことから、この問題がいかに解明困難なものであるかということが、研究者らに認識されるにいたったものであろう(前掲論文D)。

昭和(一九二六—)にはいると、まもなく、それ以前の〃北方〃起源説の不成功に対する反動として、〃南方〃起源説がさまざまなかたちで登場し展開されたが、その結果、日本語と類似する単語が〃南方〃諸語にすくなからずみいだされることがあきらかにされた。ついで、おおくの〃北方〃諸語に共通してみられる母音調和の、その痕跡と解しうる現象が奈良時代の日本語にも存在したことが報告されるにいたり、従来の〃北方〃起源説におけるひとつの難点が除去されることになった。

こうして、従来の〃北方〃的要素のみならず、〃南方〃的とみなしうる要素が日本語にみいだされることがあきらかになると、その両者を日本語の起源・成立とどのようにむすびつけるかということが問題とされるようになり、種々の言語的事実を調和的に解釈したいくつかの論が、昭和一〇(一九三五)年前後からあらわれた。〃南方〃語を日本語の基層言語とかんがえるもの、日本語を〃北方〃系言語と南島語との〃混合語〃とみなすもの、そのほかである。

しかし、それらの起源論が提出されて三〇年ほどをへた昭和四〇(一九六五)年代の後半には、従来のいずれの論にも満足せず、南洋のニューギニア島中の一言語を日本語の成立と関係ありとみなす説や、チベット-ビルマ語と日本語とのあいだに音韻の対応をみいだそうとするこころみなどがおこなわれるようになり、現在にいたっているが、一方、日本語の系統研究が開始された当初からその主流をしめてきたところの、もっぱら朝鮮語や〃アルタイ語〃などの〃北方〃語に日本語の系統をもとめるたちばも、依然としてねづよい。

以上が、一〇〇年余にわたる日本語系統論史のあらすじである。以下、このような展望にもとづいて、現在までに提示された諸説を具体的にみていく。

2　外国人による研究への着手 ── 明治一〇(一八七七)年代まで ──

一九世紀前葉において、ボップ(F. Bopp)・ラスク(R. Rask)・グリム(J. Grimm)らによってその方向を明確に決定づけられたヨーロッパの言語学は、同一の系譜にある言語の諸要素のあいだに規則的な対応関係が存することを立証することによって、きわめて短期間のうちに、比較方法を確立し、みずからを他にほこりうる科学として定位させた。そして、その途上において、ヨーロッパとインドにおける古今の諸言語が同一の起源にさかのぼる──すなわち、同系である──という事実を確証するとともに、それらの諸言語の系譜上の距離を鮮明にあきらかにすることに成功した。

比較言語学が、東洋のインドにおけるサンスクリット語と古今のヨーロッパの諸言語との同系性を、厳密な方法によって間然するところなきまでに完璧に証明したことは、東洋そのものを当時のひとびとにつよく印象づけるに充分であり、それをおもな契機として、研究者らの注意は、インドよりさらに東方にもそそがれることになった。

東洋における諸民族の言語の系統研究は、このような背景のもとに、ヨーロッパのいわゆる東洋学者らによって開始されることになる。それは、日本語のばあいも、例外ではなかった(このような歴史的背景については、第一章にあげたB・Dの論考にくわしい)。

まず、東洋語学者・旅行家であったドイツ人クラプロート(H. J. Klaproth)は、アジア諸地域をひろく旅行し、おおくの言語の語彙を採集して、一八二三(文政六)年にパリで『アジア辞彙』("Asia Polyglotta")を公刊したが、そのなかで、日本語を朝鮮語とともに〝ウラル－アルタイ語〟の一とみ、また、日本語と琉球語の若干の単語を比較している。日本語を〝ウラル－アルタイ語〟とむすびつけたのは、かれが最初であるという。それからおよそ三〇年ののち、ウィーン大学のボラー(A. Boller)は、「日本語がウラル－アルタイ系に属することの証明」[10]をかき、数箇条をあげて日

本語が〝ウラル－アルタイ語〟に属すべきことの「証明」とした(もちろん、その「証明」は、現今におけると同様のレヴェルのそれではない)。同様の見解や主張は、その後も、ライデン大学の教授をつとめた日本語学者ホフマン(J. J. Hoffmann)の有名な『日本語文典』[11](一八六七年)や、〝ウラル－アルタイ語〟の研究者ウィンクラー(H. Winkler)の『日本人とアルタイ人』[12](一八九四年)・『ウラル－アルタイ語族、フィン語と日本語』[13](一九〇九年)その他の論考においても、たびたびのべられた。しかし、いずれも、その論証には成功していない。

ところで、この期における諸研究のうち、注目すべきものがふたつある。ひとつは、イギリス人外交官アストン(W. G. Aston)による「日本語と朝鮮語との比較研究」[14](一八七九年)である。かれは、そこにおいて、両言語の比較においては、音韻体系・文法機能・文法的てつづきの特質、の三点からの考証が必要であるとして、それを具体的かつ詳細に論じている。とくに音韻体系の項では、両言語間に対応をみいだそうとこころみ、それを支持する若干の語彙をあげている。その考察は、今日の研究水準からみても、まことに犀利なものであり、示唆をうけるところがすくなくない。日本語系統論史上、もっともすぐれた論考といってよい。

もうひとつは、明治初年に来日し、のちに東京帝国大学で教鞭をとったチェンバレン(B. H. Chamberlain)の「琉球語の文典および辞典のための試論」[15](一八九五年)である。これによって、日本語と琉球語とが同系言語であることが実証された(両言語の同系性は、のちに伊波普猷・服部四郎らによって、より精密に論証された。後述)。これもまた、日本語系統論史上、もっともすぐれた論考である。

このように、日本語系統論は、東洋学者・外交官などの外国人研究者によって着手され推進されたのであるが、なかでも、明治時代の初頭に創設された「日本アジア協会」のメンバーらの活躍がめだっている(その機関誌が、Transactions of the Asiatic Society of Japan である)。日本人研究者がこの問題に関して積極的に発言するようになるのは、明治二〇(一八八七)年代の初頭からである。

3　日本人による模索 ── 明治時代末期まで ──

日本人による研究のうち、この問題をもっともはやくとりあげたのは、国語学者大矢透の、一八八九(明治二二)年における「日本語ト朝鮮語トノ類似」[16]である。そこで大矢は、両言語の「類似」を、

第一　言葉ツヾキ同シ様ナル事
第二　言葉ノ形ト義ト相似タルモノ多カル事
第三　ラリルレロノ音ヲ語首ニ置カザル事
第四　濁音稀レナル事

の四箇条を挙示して、日本語と朝鮮語の例を具体的に対照しながら解説している(第二条については、八〇語前後の単語が列挙されている。第四条には、まったく説明がない)が、大矢の論ずるところは、やはり、「日本語ト朝鮮語トノ類似」以上のものではない。

明治三〇(一八九七)年代になると、日本語の系統帰属の問題は、活発に議論されるようになる。その先頭をきってあらわれたのが、哲学者井上哲次郎の「人種、言語、及び宗教等の比較に依り、日本人の位置を論ず」[17](一八九七年)である。日本語の「ワガ」「アガ」《我》および「ヒ」《火》と、マライ語の aku, uku および habi, ahi その他を比当して、日本語が南洋起源であることを力説したものであるが、これには、東洋史学者白鳥庫吉が「『日本書紀』に見えたる韓語の解釈」[18](一八九七年)において、日本語の「ワガ」「アガ」は代名詞と助詞とが結合したものであり、語分割をあやまってはならないこと、「火を波行加行の音にて言ふは殆ど世界語とも称すべきものなれば、此言を以て人種の異同を説くは甚だ薄弱なる」ことなどの根拠をあげて、反論をくわえた。

一九〇一(明治三四)年には、経済学者田口卯吉の有名な「言語上より観察したる人類の初代」という、史学会の大

会における講演があった[19]。語順その他の二、三の点について日本語と諸言語とを比較し、サンスクリット語・ギリシア語・ラテン語などの語順は、英語・ドイツ語などのそれよりも日本語にちかく、したがって、日本人の方がヨーロッパ人よりも「本家筋に近きものと云はざるべからず」というインドーヨーロッパ語系説であった。これに対しては、今度は、言語学者新村出が「田口博士の言語に関する所論を読む」[20](一九〇一年)において、また、おなじく言語学者藤岡勝二が「言語を以て直に人種の異同を判ずること」[21](同上)において、それぞれ、言語学に対する田口の無理解を指摘しつつ反論をおこなったが、田口はそれらの指摘の正当性を理解することなく、ただちに「人種の初代の根拠地を決するは国語に如くなし」[22](同上)という駁論を発表した。これに対し、新村はふたたび「田口博士に答へて言語学の立脚地を明にす」[23](同上)において、さらに詳細に田口の所論を論破した。

インドーヨーロッパ語と日本語とを同系とみる研究者は、田口のほかにもいた。平井金三がそれで、「日本の言葉はアリアン言葉なり」[24](一九〇四—五年)や「日本語アリアン語比較表」[25](一九〇五年)などにおいて、アーリア語起源説を熱心に主張した。井上哲次郎の立言に対する白鳥庫吉、田口卯吉のそれに対する新村出・藤岡勝二らの反論と同様、平井の所説に対しては、国語学者亀田次郎の駁論が発表され、のち両者間で論争がくりかえされた(なお、後述の藤岡の講演「日本語の位置」は、この平井の所説に対する反論の意味でおこなわれたものであるという)。

井上哲次郎の所論に反駁をくわえた東洋史学者白鳥庫吉は、日本語の系統を精力的に研究し、明治三〇(一八九七)年から同四〇(一九〇七)年代までに、つぎのようなかずおおくの論文を発表した。

「漢史に見えた朝鮮語」[26](一八九七年)

「『日本書紀』に見えたる韓語の解釈」[27](同年)

「日本の古語と朝鮮語との比較」[28](一八九八年)

「再び朝鮮の古語に就て」[29](同年)

「国語と外国語との比較研究」[30]（一九〇四―五年）
「日・韓・アイヌ三国語の数詞に就いて」[31]（一九〇九年）

また、白鳥は一九一四―六（大正三―五）年にかけて、「朝鮮語とUral-Altai語との比較研究」[32]という論考を発表した。それらのおおくは、単行本として刊行しうるほどに長大なものであり、単なる単語の対照にとどまっているとはいえ、そこに列挙された単語は二〇〇余語のおおきにのぼる。白鳥は、研究を開始した当初は、日本語と朝鮮語とを同系とかんがえていたが、一九三六（昭和一一）年の「日本語の系統――特に数詞に就いて――」[33]では、それらを同系とみることに躊躇している。

さて、一九〇八（明治四一）年には、日本語系統論史上注目すべき「日本語の位置」[34]という講演が、藤岡勝二（前出）によっておこなわれた。これは、〝ウラル‐アルタイ語〟に通有の類型学的特徴を一四箇条にわたって列挙し、それらを逐一日本語にてらしたうえで、そのうちの一項（第三条の母音調和の現象）だけは日本語に欠如していることを指摘し、最後に、「どうも日本語は直接インドゲルマンとの関係を立論するよりは、どうしてもまずウラルアルタイ語族へ付けなければならぬかと思います」と結論したものであった。その一四条は、およそつぎのようなものである（摘要）。

①語頭に重子音が位置することがない。
②固有の単語においては、語頭にr音が位置することがない。
③母音調和がある。
④冠詞をもちいることがない。
⑤文法上の性の区別がない。
⑥動詞の変化は、語幹に接尾要素が膠着することによっておこなわれる。
⑦動詞の語尾の種類がおおい。

⑧代名詞の変化は、助詞の付着によっておこなわれる。
⑨前置詞をもちいず、後置詞(助詞)をもちいる。
⑩have(……をもつ)という語をもちいず、(……がある)と表現する。
⑪形容詞の比較をあらわすのに than をもちいず、奪格をあらわす要素(日本語では「より」)をもちいる。
⑫疑問をあらわすのに、文末に疑問の助詞をつける。
⑬接続詞をもちいることがすくない。
⑭修飾語は被修飾語のまえに位置し、目的語は動詞のまえに位置する。

みぎにのべたとおり、この一四条は、いずれも類型学的特徴であり、系統研究をすすめるさいの、いわばさぐりにすぎないものであるが、言語の系統を究明するには、単に類似語を列挙するのみではなく、言語全体の特徴をも問題にしなければならないことを明示的にのべたという点において、この講演がのちの研究者らにあたえた影響には、きわめておおきいものがある(前述のとおり、この講演は、平井金三のアーリア語系説に対する反駁の意味でおこなわれたものといわれるが、そのことは、みぎに引用したところの、この講演における藤岡の結論によってもあきらかである)。なお、〝ウラル-アルタイ語〟ないし〝アルタイ語〟に通有の類型学的特徴については、その後もたびたびとりあげられ検討がくわえられたが、〝アルタイ語〟と日本語のあいだにみられるそれについて詳説した服部四郎の「アルタイ諸言語の構造」[35](一九五八年)が、視野もひろく、すぐれている。

藤岡の「日本語の位置」の翌年に発表されて注目をあびたのが、金沢庄三郎の学位論文「日韓語同系論」[36](一九〇九年)である。そこで金沢は、日本語と朝鮮語との類似語百数十を列挙したうえ、「体言」「用言」「助辞」などについて詳説するとともに、両言語間に若干の音韻対応をたてようとこころみている。これによって、一部の研究者は、両言語の同系性が証明されたとかんがえたといわれるが、今日の研究水準からみれば、証明というにはほどとおいといわ

ざるをえない。金沢は、この論考の末尾において、

本論文起草の趣旨は、(中略)特殊の専門家よりは、むしろ世上一般の人士に対して、わが保護国なる韓国が、その言語においても、またわが国語の一方言たる実を有し、明かに同文同語の国なりといふ事実の一斑を示し、一には、実際上韓国の施政教導の任に当れる人々の参考に資し、また一には東洋比較言語学研究の学術的興味を普及して、内にはわが国語学の発達を促す一助ともせむの微意にほかならざるなり。

とのべ、その執筆意図をあきらかにしているが、この発言が、当時の日本政府が朝鮮に対してとっていた政策を背景としたものであることは、あらためてとくまでもない。たとえ、両言語の同系性が立証されたとしても、それをもって、朝鮮語が日本語の「一方言」であり、両国が「明かに同文同語の国」であるというのは、はなはだしい短絡であるといわざるをえない。政治的動機が、研究の方向をあやまたしめた、教訓的な例である。

この金沢の論考が発表されてから二年間ほどは、系統論にかかわる積極的な論は提示されなかったが、一九一一(明治四四)年には、従来の諸研究に対する総評ともいうべき、新村出の「国語系統の問題」[37]が発表された。系統研究の方法を略説したうえで、「稍消極的に傾くかも知れぬが、日本語が所謂ウラルアルタイ系に縁を引くことは争はれないが、其関係は甚だ疎遠であると云ふに帰する」と結論しつつ、この問題に性急に結論をもたらそうとする、当時の一部の研究者に反省をうながしたものである。

系統論に関する明治時代の研究は、事実上、新村のこの論文をもっておわる。

このように、外国人による数十年の研究ののちに、明治二〇(一八八七)年代から開始されたところの日本人による日本語の系統研究は、この問題に関心をもつひとびとに非言語学者がすくなくなかったこともあって、従前の外国人による研究結果がそのおおすじにおいてすらかれらにうけつがれず、当初から、比較方法をわきまえない性急な立言をすくなからず生むことになってしまった。そのために、すでにみてきたとおり、言語学者および、諸言語に造詣の

ふかい研究者らは、それらの放胆な立言の誤謬をつき、系統論の軌道をたえず修正しなければならなかった。とはいえ、それらの誤謬があきらかにされると、日本人研究者のおおくは、従来の外国人研究者らとおなじように、日本語は〝ウラル－アルタイ語〟や朝鮮語――とくに、朝鮮語――などともっとも親密な関係にあるとかんがえるようになった。

4 〝南方〟起源説の盛行と〝北方〟起源説の深化 ――昭和一〇(一九三五)年代まで――

大正時代にはいってからの数年間は、この問題は、明治時代におけるほどに活発には議論されなかった。わずかに、白鳥庫吉の長大な論文「朝鮮語とUral-Altai語との比較研究」[38](前出)や、明治時代において、「日本法制史の研究上に於ける朝鮮語の価値」[39](一九〇四年)、「日韓両国語の比較研究」[40](一九〇六―七年)などの着実な研究を発表していた法学者宮崎道三郎の「朝鮮語と日本法制史」[41](一九一五年)などの発表がめだつ程度である。

一九一六(大正五)年になると、日本語系統論史上きわめて重要な、新村出の論文「国語及び朝鮮語の数詞に就いて」[42]が公表された。朝鮮における史書『三国史記』(一二世紀中葉に成立)の「地理志」に出現するところの、扶余族の一支族であった高句麗の地名に、《三》《五》《七》《十》を意味する形態素をふくむ、

(三)　三峴県　一云、密波兮
(五)　五谷郡　一云、于次呑忽
(七)　七重県　一云、難隠別
(十)　十谷県　一云、徳頓忽

のような表記例(原文には、誤写とかんがえられる表記が若干あるが、現在では、村山七郎その他によって、みぎのように校訂されている)がみいだされるのであるが、その「密」「于次」「難隠」「徳」が日本語の数詞「み」「いつ」「な

な」「とを」に対応するのみならず、「難隠別」における「別」が日本語の「へ」《重》に対応し、「徳頓忽」における「頓」がおなじく「たに」《谷》に対応するという事実を指摘したものである。新村によるこの比当・考証が正鵠を射たものであるとすれば、日本語と高句麗語とのかつての親密な関係が想定されることになり、そのことが、日本語系統論を推進していくうえでひとつの重要な指針となることはうたがいない。

新村のこの指摘から四〇数年ののち、村山七郎は、『三国史記』をあらたに調査しなおし、「日本語及び高句麗語の数詞——日本語系統の問題に寄せて——」[43]（一九六二年）において、みぎ以外にも日本語と対応をしめす形態素が二〇余例存することをあきらかにするとともに、両言語のあいだにみられる音韻上の異同に考察をくわえたうえで、「日本語と高句麗語との密接な関係は次の諸点に現われている」として、

①数詞《三》《五》《七》《十》の合致
②親族名称「巴派」（原文「也派」を村山が訂正したもの）papa と日本語「はは」fafa との合致
③身体部位名称《口》《足》の合致
④接頭辞 sa の用法と、日本語の接頭辞のそれとの一致
⑤語の合成形式の一致

の五点（摘要）を列挙して、「高句麗語は系統上、日本語に非常に近い言語である」と結論してもおおきなあやまりはないであろう、と論定した（最近の村山の説については、後述）。

なお、村山と同様の主題については、のちに、韓国の言語学者李基文が、「高句麗の言語とその特徴[44]」（一九七二年）において、〝アルタイ語〟および朝鮮語に関する該博な知識を動員しつつ、周到な考証をおこなった。村山よりも視野のひろい、説得力ある論考となっている（ちなみに、李は、村山よりもはやくその著『国語史概説』（一九六一年）において、古代の朝鮮半島におこなわれていた諸言語や日本語などの相互関係を、具体的に論じている。この著書には、

日本語訳『韓国語の歴史』[45]がある)。

ところで、大正時代の諸研究のうち、ふたりの外国人研究者による犀利な研究をわすれることはできない。そのひとりは、フィンランド駐日公使ラムステット(G. J. Ramstedt)である。ラムステットは、「アルタイ諸語と日本語との比較研究」[46](一九二四年)において、〃ウラル－アルタイ語〃からウラル諸語をきりはなしたうえで、〃アルタイ語〃と日本語とのあいだに音韻対応を抽出しようとこころみ、また、「朝鮮及日本の二単語に就いて」[47](一九二六年)において、朝鮮語の syöm, pai と日本語の「しま」(島)・「へ」(舳)とをとりあげ、それらの関係に犀利な考証をくわえた。ラムステットの比較にあげられている語例はおおくないが、〃アルタイ語〃および日本語に関する該博な知識とふかい洞察には、前々節においてとりあげたアストンの論考を想起させるものがある。

もうひとりの外国人研究者は、ロシアの言語学者で、一九一四―一五(大正三―四)年にかけて二度日本をおとずれたポリワーノフ(E. D. Polivanov)である(最近、日本語に関するかれの論考をおさめた邦訳論文集『日本語研究』[48]が出版された。以下、引用はすべてこれによる)。ポリワーノフは、「日本語、琉球語音声比較概観」(一九一四年)において、日本語と琉球語に関する精密な比較研究をおこない、また、「東京方言における音楽的アクセント」(一九一五年)・「二音節形容詞のアクセント」(一九一七年)・「日本語の音楽的アクセントに関する研究について」(一九二四年)その他の一連の論文において、日本語のアクセントの本質についての独創的な見解を展開したが、日本語の系統については、これを、単一の系統をひくものではなく、〃アルタイ語〃系言語と南島語(マライ－ポリネシア語)からなる雑種的(ハイブリッド)なものと主張した。その見解は、みぎにあげた「日本語の音楽的アクセントに関する研究について」のなかのつぎの記述にもっとも明瞭にあらわれている。

私が(自分の集めた日本語の方言学的諸事実を史的音声学的に研究した後で)なしうる歴史的結論は、「日本語はマライ諸語のひとつである」というのではないが、それに近い。日本語はマライ・ポリネシア諸語と同系であり、

言語諸事実の一部はマライ・ポリネシア諸語(オーストロネシア諸語)と共通の源泉からうけついだものであることを証明できるとおもう。しかし、大きなちがいもある。というのは日本語は起源上、雑種(ヘイブリッド)であり、南方的——南島的、オーストロネシア的要素と西の、大陸的な、朝鮮語(および他の東アジア大陸の「アルタイ的」諸言語)と共通の要素との混合物(アマルガム)であるから。

つまり、かれは、日本語の成立は〝アルタイ語〟的要素とマライ－ポリネシア語の要素との混合にかかるものであり、その〝アルタイ語〟的要素は朝鮮語と共通のものである、とかんがえる。そして、日本語とマライ－ポリネシア語(オーストロネシア語)とのあいだにみられる「外部的類似点」として、つぎの諸点をあげている。

①語彙形態素の典型は2音節であり(kata, naka など)、形式的形態素は一音節である。

②日本語にいくつかの接頭辞があること(アルタイ諸語は接尾辞のみあって、この点、日本語はアルタイ諸語とちがう)。これはオーストロネシア語の遺産である。他方、その他すべての接尾辞形態は大陸起源のようだ。

③日本語の形態の最も古い層における(完全および不完全)重複の形態論的働き。

④母音体系が簡単で、母音調和がないこと。

⑤音楽的語アクセント。

⑥開音節が典型的である。

⑦先日本語の単純な子音体系と典型的にポリネシア語的なそれがほとんど完全に同一であること(対(ツイ)をなす有声子音がないこと。一般に「対(ツイ)をなす」音素カテゴリーがないこと)。三つの鼻音 m, n, ŋ があること。

⑧唇の働きの減退のプロセス。*p: p>f(φ)>h: cf. 日本語 pi>fi>hi(çi)とポリネシア語 *apui>api>afi>ahi「火」

⑨対をなす有声半鼻音(^{m}b, ^{n}d。そこから東京方言の b, d)が派生的であること。これらの有声半鼻音は共通日本

語とメラネシア語において発達した。

いずれも、無視できない類型学的特徴であるが、ポリワーノフのかんがえるような、純粋な意味における〝混合語〟は、学史上これまでその存在の可能性が疑問視されてきており、慎重な検討がのぞまれる。ただし、日本語に〝北方〟的要素と〝南方〟的要素との双方をみとめ、その二要素の存在を調和的に解釈しようとした研究者は、かれが最初であろう(なお、ポリワーノフの見解は、のちに、村山七郎がそのおおすじをうけいれ、〝混合語〟説を熱心に主張している。後述)。

ラムステットの「朝鮮及日本の二単語に就いて」という論文が発表されたときは、大正もすでに末年となっていた。

さて、すでにのべたとおり、大正時代にはいってからの数年間は、系統論に関する積極的立言はすくなかった。また、みぎでとりあげたところの新村出・ラムステット・ポリワーノフらの論考はあったとはいえ、それは、大正時代を通じてみられる傾向でもあった。おそらく、明治時代のはなやかな議論によっても、日本語と同系である蓋然性がもっともおおきいとかんがえられる朝鮮語や〝アルタイ語〟においてさえ、日本語とのあいだに同系性の有力な証徴をみいだすことができなかったことによって、日本語の系統帰属の解明がいかに困難な問題であるかということが、研究者らにつよく認識されるようになったためであろう。

しかし、それと同時に、そのゆきづまりをなんとかして打開しようとする気運がたえず底流していたことも事実であろう、この時期に多様なかたちをとってあらわれたのが、それまでの〝北方〟起源説(朝鮮語同系説および、〝ウラル-アルタイ語〟ないし〝アルタイ語〟同系説)に対する反動としての〝南方〟起源説であった(あるいは、それらの諸説は、日本語の形成要素として南島語を重視した、大正時代におけるポリワーノフの一連の研究にうながされたものかもしれない)。

〃南方〃起源説の第一は、ラベルトン(V. H. Labberton)の論文「日本－マライ－ポリネシア語族の一分派としてのオセアニア諸語と日本語」[49](一九二五年)である。ラベルトンは、そのなかで、〃日本－マライ－ポリネシア語族〃の定立をこころみ、その根拠として、日本語とマライ－ポリネシア諸語にみられる共通の特徴二〇箇条を列挙した。しかし、かれは、日本語そのものにも、また、その歴史にも通じていないところがおおく、そのこころみは、一般に承認されるにはいたらなかった。

その翌年には、ワイマント(A. N. J. Whymant)の、日本語と〃南方〃諸語の単語を対照した「日本語とその民族のオセアニア起源説」[50](一九二六年)が発表された。これは、ラベルトンほども日本語や〃南方〃諸語に関する知識がなく、日本語と〃南方〃諸語の単語をただ単に無定見につきあてただけのものである。日本語系統論に対して直接に寄与するところは、なんらなかったといってよい。

さらにその翌年には、マライ－ポリネシア諸語・朝鮮語さらにアイヌ語までも包含する〃汎太平洋民族〃を定立しようとする、堀岡文吉の大著『日本及汎太平洋民族の研究』[51](一九二七年)が刊行された。明治時代末期における藤岡勝二の講演「日本語の位置」(前出)を〃ウラル－アルタイ語〃系説の代表にえらび、藤岡の列挙した一四箇条を逐一検討したうえで、それらの大半はマライ－ポリネシア諸語にもあてはまるとして、日本語が〃南方〃起源であることを力説したものであったが、その内容は、やはり、比較研究にはほどとおいものでしかなかった。

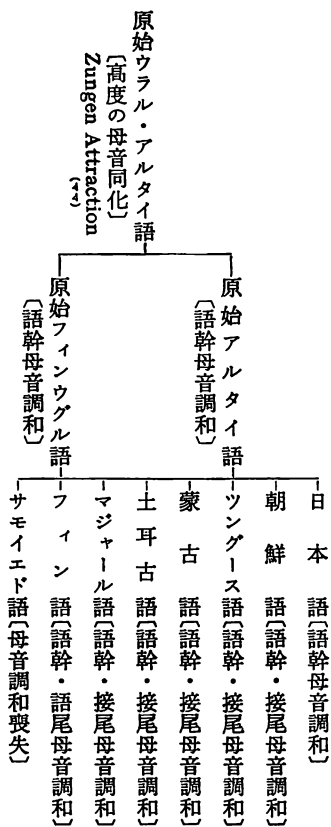
さて、ついで、その翌年の一九二八(昭和三)年には、以上の〃南方〃起源説に比すればいちじるしく着実な、松本信広の『日本語とオーストロアジア諸語』[52]が、パリで公刊された。広汎な地域にわたる〃南方〃諸語と日本語における一〇〇余の類似語を比較したものである。厳密な音韻対応を考慮にいれたものではないが、一〇〇をこえる類似語を提示した点において、のちの研究にあたえた影響はおおきい。すくなからぬかずの類似語の存在をただちに両者の系譜関係の証左と断ずることなく、ただ単に、〃南方〃語から日本語への語彙上の影響関係を示唆するのにとどめて

いるのは、正当というべきである(なお、松本は、その後、「オーストロアジア語に関する諸問題」[53](一九三一年)において、対照語彙を九七語あげている)。

松本のこの論考ののち、三年間ほどは、この領域に属する積極的発言はみられなかった。〃北方〃起源説を主流とする、明治時代における種々のこころみの不成功によって、日本語の系統研究の困難さが認識されるようになった結果、この問題の研究そのものが——すくなくとも表面的には——衰微した大正時代、そしてそのゆきづまりを打開しようという気運を背景に提出されたところの、昭和時代初期におけるいくつかの〃南方〃起源説、そして、〃南方〃に起源をもとめようとするそのこころみにさえ成功しえなかった日本語系統論のなみなみならぬ困難さが、この期に再認識されるようになったものとかんがえられる。

ところで、一九三二(昭和七)年には、系統帰属の研究をすすめていくうえで、ひとつの道標となりうる言語事実の発見が、ふたりのわかい研究者によって報告された。すなわち、奈良時代に成立した『古事記』『日本書紀』『万葉集』その他の文献において、今日の「キ」「ヒ」「ミ」「ケ」「ヘ」「メ」「コ」「ソ」「ト」「ノ」「ヨ」「ロ」(『古事記』では、「モ」も)などに相当する音節が二類に弁別されて表記されている、という事実は、すでに、一九一七(大正六)年における橋本進吉の「国語仮名遣研究史上の一発見——石塚龍麿の仮名遣奥山路について——」[54]において論証され、それら二類の識別が母音の相違にもとづくものであったらしいことも推定されていたのであるが、それをもとに、池上禎造・有坂秀世のふたりが、それぞれ「古事記に於ける仮名「毛・母」に就いて」[55]および「古事記に於けるモの仮名の用法について」[56]において、当時の日本語に、おおくの〃ウラル-アルタイ語〃にみられるところの母音調和の痕跡と解しうる現象が存するという事実をあきらかにしたのである。かつて、藤岡勝二が一四箇条をあげて日本語と〃ウラル-アルタイ語〃との類縁性を強調的に指摘したとき、母音調和の現象のみが日本語にみられないことがそのひとつの障害となっていた(前出)のであるが、池上・有坂の発見によって、その難点が除去されたわけである。のみならず、

ふるくは朝鮮語にもこの現象があったことは、すでに、前間恭作の『龍歌故語箋』[57](一九一四年)や、小倉進平の『郷歌及吏読の研究』[58](一九二九年)などによってあきらかにされ、それによって、朝鮮語と〃ウラル－アルタイ語〃が同系性を有するとする見解が以前よりも有力になっていた時期であったから、日本語にもふるくは母音調和の現象が存在したとかんがえうる事実の発見は、日本語とそれらの言語との関係の解釈にとって、ひとつの有力な道標となったのであった。

母音調和の現象が〃ウラル－アルタイ語〃のみにみられるものではなく、また、かりに日本語・朝鮮語・〃ウラル－アルタイ語〃などが同系性を有するとしても、その現象はそれらの分裂以後に別個に生じたものである蓋然性もあるということは、これまでもたびたび指摘されている(たとえば、服部四郎の一連の論文)が、金田一京助は、池上・有坂の研究から数年をへたのちの著書『国語史 系統篇』(前出)において、この現象の存在を重視し、つぎのような「母音調和から観たウラル・アルタイ語族の略系」を提示している。

池上・有坂によるこの研究から第二次大戦の開戦までの数年間は、小倉進平による深切な朝鮮語研究のほかには、

さしたる研究の発表もなく、また、あらたな起源説の提示もみられなかった(ちなみに、有坂は、みぎの論文を発表したのちも研究を続行し、その調査および考証を他の文献にも拡大して、二年後に「古代日本語に於ける音節結合の法則」[59]を発表した)。〃南方〃語系説・朝鮮語同系説・〃ウラル－アルタイ語〃系説のそれぞれについて解説・批判をくわえた新村出の「国語系統論」[60](一九三五年)や、言語と民族との二面から考察して日本語とチベット－ビルマ語とを同系と論断したパーカー(C. K. Parker)の『日本語・西蔵＝緬甸語同系論』[61](一九四一年)などがめだつ程度である。前者は、当時までの諸研究・諸説を批判的に紹介するとともに、〃南方〃語・朝鮮語・〃ウラル－アルタイ語〃と日本語との関係を、若干の比較例をあらたに提示しながら考察したうえで、「国語の根本関係はおのづから南方よりむしろ北方に傾いてゐるやうに思はれる」とのべたものである。また、後者は、今日においても示唆をうけるところがすくなくないが、語彙の比較に音韻の対応が充分に顧慮されておらず、やはり、一般には承認されなかった。

パーカーのみぎの論から第二次大戦終結までの数年間は、戦況の緊迫化の影響もあって、すくなくとも表面的には、研究成果の発表はきわめてすくない。したがって、パーカーのチベット－ビルマ語系説は、事実上、戦前の系統論の最後とみてよい(日本語のチベット－ビルマ語系説は、最近、西田龍雄によってとなえられた。後述)。

5　系統論から成立論・起源論へ――戦後における種々のこころみ――

戦後の二年間ほどは、この問題はほとんどとりあげられなかった。みるべき最初のものは、一九四八(昭和二三)年における服部四郎の「日本語と琉球語・朝鮮語・アルタイ語との親族関係」[62]であろう。チェンバレン(前出)や伊波普猷によっておこなわれた日本語と琉球語との同系性の証明を、両言語間におけるアクセントの対応を明示することによってさらに緻密で完璧なものとする一方、朝鮮語・〃アルタイ語〃と日本語との系譜関係についての従来の諸研究に厳正な批判をくわえつつ以後の研究の方向をさぐった着実な論考である。そこにみられる服部のきびしい姿勢は、

以後に執筆された「日本語の系統――研究の方法――」[63](一九五二年)その他の一連の論文にもうかがわれる。系統研究にたえず方法的反省をくわえつつ、性急な論断を回避しようとする禁欲的ともいえる態度は、明治時代末期における新村出の「国語系統論」(前出)の姿勢に通じるものがあるようにおもわれる。

翌年の一九四九(昭和二四)年には、日本語と他言語とのあいだに音韻法則を措定しようとこころみた三論考が発表された。日本語・朝鮮語・満州語・蒙古語・チュワシ語・チュルク語などの諸言語にわたってそれを措定しようとした柴田武の「日本語の系統」[64]、日本語と朝鮮語とのあいだにそれをみいだそうとした長田夏樹の「原始日本語研究導論――アルタイ比較言語学の前提として――」[65]、そして、日本語と朝鮮語の母音の対応を明示的に論じた河野六郎の「日本語と朝鮮語の二三の類似」[66]がそれである。柴田・長田の論文のそれぞれにさらにおおくの比較語例があげられていたならば、その説得力はかなりつよいものとなっていたであろう。なお、長田は、のちに、みぎの論考に他のそれをくわえて、単行本『原始日本語研究――日本語系統論への試み――』[67](一九七二年)を刊行した。

さて、戦後も数年たったころには、日本語の系統に関する一般のひとびとの関心は、次第にたかまりつつあった。一九五〇(昭和二五)年には、それまでの系統論を総括して、そこに存在する種々の問題性を再確認するとともに、将来の系統研究はいかにあるべきかをさぐろうとした「日本語の系統について」[68]という座談会がもうけられた(金田一京助・松本信広・泉井久之助・服部四郎・亀井孝・河野六郎ら出席、金田一春彦司会)。単に、戦前までの諸研究のあゆみを通観し批判するだけでなく、言語の系統とはなにか、そして、日本民族の成立と日本語の成立とはどのようにかかわっているか、などの根底的な諸問題をとりあげて、多方面から検討をくわえたこの座談会は、この領域における当時の研究水準をしめす、きわめて有意義なものであった。以後にも、この問題をとりあげた座談会はないではないが、その視野のひろさと学的水準のたかさにおいて、この座談会をこえるものはまずないといってよい。

ところで、この座談会における発言者のひとりであった泉井久之助は、同年に「日本語の系譜について」[69]という講

演をおこない、また、一九五二(昭和二七)年に「日本語の系統について(序説)——日本語とフィノ・ウグール諸語——[70]」という論文を公表した。ともに、フィン－ウグール諸語(サモエード諸語とともにウラル語族を形成する)に日本の系統をさぐろうとするこころみであった。それ以前に、ウラル諸語に日本語の系統をもとめようとした研究者には、ハンガリー人プローレ(W. Pröhle)がいるが、その研究が比較に厳密をかいていたのに対し、泉井の論考では、比較されている形態素はおおくないが、考究は精密である。泉井のこれらの研究では、日本語とフィン－ウグール諸語とのあいだにおける母音の具体的対応の処理に苦慮し、事実また、両者間にその法則をみいだしえないでいるが、それが今後の研究によってあきらかにされるならば、両言語の母音の有意的な転換が活発であるだけに、日本語の系統研究にとって重要な指針となりうるであろう。

泉井のこれらの研究とほぼ同時期に発表された大野晋の「日本語と朝鮮語との語彙の比較についての小見[71]」(一九五二年)は、日本語と朝鮮語に共通してみられるところの陽母音と陰母音との転換による造語法をあきらかにしたという点において、逸することができない。それは、類型学的な通有性の指摘ではあるが、音韻体系・語順などといった漠然たる類似に比すれば、系統の究明にとってはるかに有益な憑証となりうる(ただし、そこに列挙された日本語の語彙・形態素には充分な考察がくわえられておらず、例証として不適切なものがすくなくない)。

戦後における以上の諸研究は、いずれも日本語と朝鮮語および〝ウラル－アルタイ語〟との関係を検討・考察したものであったが、一九五三(昭和二八)年には、日本語と南島諸語との関係を具体的に考究した、泉井の「日本語と南島諸語——系譜関係か、寄与の関係か——[72]」という画期的な研究がでた。泉井は、この論文のまえがきにおいて、日本語と南島諸語とのあいだの「並行要素のあるもの」を「古い借用要素であ」ると断じたうえ、それらのあいだに、

MP.	日本語	MP.	日本語
a	*a*	~*η*	*n*(?)
i	*i,e*	~*ηk*	*k,g*(?)
u	*u,o*	*d*	*t*(*d*)
ə	*u*	~*n*	*n*
m	*m*	~*nd*	*s*(?)
n	*n*	*b*	(**p*), *b*
η	*n*	~*m*	(*m*?)
p	(**p, F*)*h*	~*mb*	(*b*?)
~*m*	*m*	*g*	*k, g*
~*mp*	*p, b*	~*η*	(*n*?)
t	*t*	~*ηg*	*g, k*
~*n*	*n*	*h*	*O*
~*nt*	*s*	*ḷ*	(語頭)*t*
l	(語頭)*t*		(語中)*r*
	(語中)*r*	*γ*	(語頭)*s* 及 *O*
t'	*s*		(語中)*r*
~*n'*	*y*(?)	*g'*	*s*
~*n't'*	*t*	~*η'*	?
k	*k*	~*η'g'*	*t*(*d*)
d'	*s*(*z*)	~*η'*	?
~*n'*	*y*(?)	~*η'k'*	*t*(?)
~*n'd'*	*t*(*d*)	*ṭ*	?
j(*y*)	*y*	~*ṇ*, *ṇṭ*	?
w	?	*ḍ*	*t, d*
n'	*y*	~*ṇ*	?
k'	*s*	~*ṇḍ*	*s*(?)

MP.: マライ-ポリネシア語

のような音韻対応を措定して、日本語の成立における両言語の関係につぎのような時間的秩序をあたえた。

日本語と南島語は、同系の言語ではない。日本語を構成すべく、その文法形態を携えてこの島々にきた言語は、もともと大陸にあったものと思われる。むしろ、将来いわゆるこの日本語たるべくあった言語、日本語のはじめは、むしろ大陸の、しかも相当奥地において形成せられたにちがいない。それがこの島々にきたとき、そこには主として西南日本より、そしておそらくは朝鮮南部にわたって、南島系の言語が行われていたものと思われる。(中略)古い南島系の言語要素は、新しく大陸からきた言語によって、おきかえられたけれども、古い語彙要素のいくつかは、新しいものの中に吸収せられたであろう。(中略)南島語が、日本語に対して同系的ではないにせよ、語彙要素的に、この種の関係をもつことは、必ずしも不可能ではない。日本語彙における語原的な複雑さは、や

は り、以上のような種類の事情を反映するものかと思われる。

つまり、泉井は、南島語(マライ−ポリネシア語)を日本語の基層言語とかんがえ、それによって、日本語と南島諸語とのあいだの「並行要素のあるもの」を解釈しようとする一方、「日本語を構成すべく、その文法形態を携えてこの島々にきた言語」をフィン−ウグール系の言語とかんがえている——すなわち、日本語の系統そのものはウラル諸語系とみる——。すでにとりあげた、おなじ研究者による「日本語の系譜について」および「日本語の系統について(序説)——日本語とフィノ・ウグール諸語——」において、日本語とフィン−ウグール諸語とのあいだに形態素の対応をみいだそうとしているのは、そのような日本語成立観にもとづく。日本語と南島語との関係をとりあつかった従来の研究のほとんどが、単なる語彙の対照にとどまっていたのに対し、両言語間に厳密な音韻対応を措定しようとところみるとともに、日本語の成立におけるそれらのかかわりあいに時間的秩序をあたえたことは、たかく評価さるべきである。

翌一九五四(昭和二九)年には、アメリカインディアン語を研究した言語学者スウォディッシュ(M. Swadesh)の創案にかかるいわゆる〝言語年代学(Glottochronology)〟を日本語に適用したところの、服部四郎の「「言語年代学」即ち「語彙統計学」の方法について——日本祖語の年代——」(73)が発表された。特定の基礎語彙のなかには、長期のあいだに他の単語にとってかわられ使用されなくなるものがあるが、他の単語にとってかわられる単語の比率は、どの言語でもほぼ一定しており、一〇〇〇年につき一九%——すなわち、残存率は八一%——であるという調査結果を、同系であることのすでに証明されている複数の言語に可逆的(?)に適用し、それらが共通の祖語からわかれた年代を算定するというのが、〝言語年代学〟ないし〝語彙統計学〟といわれるものである。服部のこの論文は、スオディッシュらの算定方式に若干の修正をほどこしたうえで、それを、奈良時代の日本語と現代東京語、現代京都方言と沖縄の首里方言などに適用し、それらの言語における〝残存語(共通の祖語から相続した、同一起源の単語というのが本来の

意味)〟を抽出して、それぞれの言語間の〝分離年代〟を算出した長大な論考であった。以後、服部は、「日本語の系統——日本祖語の年代——」(74)(一九五六年)・「日本語の系統——音韻法則と語彙統計学的〝水深測量〟——」(75)(一九五七年)などの一連の論文において、それを、日本語と同系である蓋然性を有する諸言語と日本語にも適用し、それらの言語間の〝分離年代〟をわりだすという、〝水深測量〟をこころみた。しかし、これについては、泉井久之助・亀井孝その他の研究者によって疑問や批判があいついで提出された(服部自身、それらに対してたびたび反駁をおこなった)。

いうまでもなく、〝言語年代学〟は、同系性が立証された言語における〝残存語〟の抽出を前提とする。それゆえ、当該の言語間の系譜関係の存在が確証されていなければ、それらの言語に、類似の単語がどれほどおおくみいだされたところで、それらが共通の起源からうけつがれたところの〝残存語〟であるということは保証されえないのであるから、それの操作・処理にもとづいて算定された〝分離年代〟は、論のすじみちからいって、まったく信憑性のないものということになるのである。

服部は、前出の「日本語の系統——研究の方法——」(76)において、言語の同系性の証明には音韻の対応をみいだすことが不可欠の要件であることを強調し、「しかしそれは積極的な類似である必要はない。そうでない方が却って親族関係の一層有力な証拠となることが多い」としてその実例を挙示したあとで、つぎのようにのべている。

同系ではあるが遠い親族関係にある二つの言語間に、単語の著しい類似が見出される時には、それらが互に対応する単語である蓋然性即ちそれらが祖語における同一の単語に遡る(これを「語源が同じである」という)蓋然性は、むしろ少ない。たとえば、ドイツ語とフランス語は遠い親族関係にある同系語(印欧語族に属する)であるが、両言語間に見られる

ドイツ語	Feuer《火》	fallen《落ちる 倒れる》	gross《大きい》
フランス語	feu《火》	faillir《あやまつ》	gros《大きい》

というような類似は偶然のもので、語源が同じであるためではない。ドイツ語の fünf とフランス語の cinq は形が著しく異なるけれども、却っていずれも印欧祖語の *penk^{w}e から来たものであることが証せられている。

〝言語年代学〟を同系性の証明されていない日本語と他の諸言語とのあいだに適用するにあたって、両言語から「形の著しく類似しているもの」[77]を〝残存語〟としてえらびだす一方で、顕著な単語の類似はかえってそれらが「祖語における同一の単語に遡る蓋然性」が「むしろ少ない」ことをものがたる、と説明しているのは、理解にくるしむ。要するに、同系性の証明されていない言語における〝残存語〟の抽出は、服部みずからが例示しているドイツ語の Feuer とフランス語の feu のような、「語源がおなじであるためではない」ところの「偶然」の類似による単語をこのんでえらびだす作業にすぎないという可能性さえある。したがって、そのような〝残存語〟の抽出にもとづく〝分離年代〟の算定は論理の一貫性をかいており、まったく無効なのである。服部がいうところの〝水深測量〟は、なにものをもみきわめることのできない「測量」であるといわざるをえない。〝言語年代学〟以前の服部の系統研究が厳正で着実なものであっただけに、それの日本語への、不充分な反省にもとづく適用がおしまれる。

さて、第二次大戦の終結から一〇年をへた一九五五(昭和三〇)年以降は、日本語の系統に関心をもつ層が、研究者・一般知識人の別をとわず、ますます拡大しつつあった。一九五〇年代の初頭に、戦後の系統論のうちでもっともおおくの話題を提供した二著があらわれたのも、そうした背景をもとにしてのことであった。

その第一は、医師安田徳太郎の『万葉集の謎』[78](一九五五年)である。チベット－ビルマ語系に属するレプチャ語と日本語とが同系であることを力説したものであるが、これが軽便な小冊であったことと、著者が自説を熱心に唱導したことによって、おおくの読者をえた。日本語(安田によれば、「万葉時代の日本語」)の単語にレプチャ語のそれをちかづけるために、後者におおくの音韻変化を無定見に想定し、両者が同系であることを主張した。これに対しては、多数の研究者が、言語学についての安田の無理解を指摘して、その所説を論破したが、安田はそれらの批判の趣旨を

理解しえず、その後も類書を公刊した。近時もまた、自説をまとめて、大著『日本語の祖先』[79]（一九七六年）を出版し、自説の正当性を熱心にといている。

第二は、安田の所説をもっともきびしく批判した国語学者大野晋の『日本語の起源』[80]（一九五七年）である。かつての「日本語と朝鮮語との語彙の比較についての小見」[81]（一九五二年）（前出）や「日本語の黎明——成立から貴族時代（前期）まで——」[82]（一九五四年）などの自身の研究を総括し、橋本進吉以降にあきらかにされたいわゆる〃上代特殊かなづかい〃にかかわる諸事実と、考古学・人類学などの関連諸学の成果を調和的に統合して、日本語の「起源」をつぎのように論定したものであった。

日本には縄文式時代に、ポリネシア語族のような音韻組織を持った南方系の言語が行われていた。弥生式文化の伝来とともに、アルタイ語的な文法体系と母音調和とを持った朝鮮南部の言語が行われるようになり、それは北九州から、南へ、東へと広まり、第一次的には近畿地方までをその言語区域としたであろう。やがてそれは、弥生式文化の東方への拡大にともなってアヅマの地域にも広まって行き、九州・四国・本州に、奈良時代の言語に見られるものに似た、原始日本語が成立したであろう。おそらく琉球の諸言語が日本語的な性格を持つに至ったのも、弥生式文化の伝播と同時であると見ることができるだろう。

ただ、朝鮮からの言語の伝来は、圧倒的多数の人間の渡来を伴ってはいなかったために、それまでの言語の文法体系を変えることはできたけれども、語彙のいくつかは、変えずに残した。そこに、われわれが、南方系の人体語を見出す原因がある。従って、もし、日本語の系統は何かと問われるならば、日本語はアルタイ語系に属するというべきである。しかし、それ以前に行われていた文化・言語の影響によって、日本語の語彙には、アルタイ語との親近性が少ししか見出されない。また、アルタイ語の語彙との親近性が少ないことの原因の一つは、日本に広がって来た言語が、南朝鮮を経て来たものであり、南朝鮮でアルタイ系ならぬ、南方的要素を多くふくんだ

民族の単語を多く取り入れた言語であったことにある。その結果、蒙古語・ツングース語などのアルタイ語の語彙との相違が、いっそう大きくなったということも考えられる。日本語と朝鮮語とが同系であるとしても、その語彙の対応は、必ずしも北方的な要素についてだけでなく、南方的な起源を持つものがあることを見逃してはならないのである。

この大野の「起源」論にもまた、おおくの研究者からさまざまの批判が提示された。その批判の主旨は、言語の問題をかんがえるにあたり、それ以外の諸学の知見に左右されてはならない、そこに列挙された日本語と朝鮮語の「音則」は厳密なそれではなく、単なる語形の類似にすぎない、さらに、日本語と「朝鮮南部の言語」との分離時期が、所説のように「弥生式文化の伝来」のころ(現在から二三〇〇年ほど以前)だとしたら、両言語が現在みられるほどの差異をしめすことはありえない、その他の点にあった。大野が、みぎの引用文にみられるように、自説を断定的に展開したのは、自身が提示したところの日本語と古代朝鮮語とのあいだにおける二四の「音則」によって、両言語の同系性をおおすじにおいて証しえたとかんがえたからであるとおもわれるが、それは、この著書に対する諸批判のなかでたびたび指摘されたとおり、両言語の単語中の一音素をつきあてたにすぎず、真の意味における音韻対応ではなかった。とはいえ、大野が、従来のさまざまな研究結果を、日本語に関する、自身の深切で該博な知識によって再検討し、それらを有機的にむすびつけて日本語の成立を推定しようとしたことは、ひとつのこころみとして評価してよい。

すでにあきらかなとおり、この大野のかんがえは、日本語の系統を〝北方〟の言語にもとめ、〝南方〟語をその基層言語とみなすという点において、前出の、泉井久之助の「日本語と南島諸語――系譜関係か、寄与の関係か――」[83]における所説と共通している(ただ、前者がその〝北方〟系言語を〝アルタイ語〟系のそれであるとみ、後者がそれをフィン–ウグール語系のそれとみる点が、相違している)。泉井の論考の方が大野の著書よりはやく発表されはしたが、『日本語の起源』によると大野は、自著と同趣旨のことを一九五一(昭和二六)年における「日韓両国語の語彙の比較

について」[84]という講演(京都大学)で発表したことがあるというから、両者は、別個にそのような結論に到達したものであろう。〝北方〟系説が主流であったところへ、日本語と類似の単語がすくなからず〝南方〟諸語にみいだされるという事実が、昭和時代にはいってからあきらかにされ、ついで、おおくの〝北方〟諸語に通有の母音調和の痕跡と解しうる現象が奈良時代の日本語にも存したことが報告されて、〝北方〟諸語と日本語とが同系である蓋然性が増大していた、という研究史上の動向をかんがえるならば、〝北方〟と〝南方〟の両要素を調和的に結合させた日本語起源論ないし成立論の登場は、いわば時間の問題であったとみることができる(たとえば、日本語の系統について活発に論議がおこなわれた明治時代に、具体的言語材の提示をともなったこの種の論が登場するなどということは、不可能であったとかんがえられるし、事実、そのような説の提示もなされなかった)。このような意味において、泉井・大野の日本語起源論は、学史のながれからみて、登場すべくして登場したものといえなくはないのである(この点からいえば、前述のポリワーノフの日本語起源論は、泉井・大野のそれとはまったくことなるが、学史上、一歩さきんじていたとみられる)。

記述は前後するが、一九五五(昭和三〇)年には、逸することのできない発言があった。日本語とアイヌ語との関係についての、服部四郎の「アイヌ語と日本語との関係」[85](一九五五年)がそれである。両言語の系統的関係については、すでに、チェンバレンの「アイヌ研究からみた日本の言語・神話・地名」[86](一八八七年)や、金田一京助の「国語とアイヌ語との関係――チェンバリン説の再検討――」[87](一九三七年)などの否定説があったが、服部は、一九五五(昭和三〇)年にアイヌ諸方言を実地調査した結果、みぎの新聞記事において、「アイヌ語と日本語とが同系である蓋然性があると考えられてきた」として、

私は今まで、アイヌ語は系統的に日本語と関係がなさそうだとばかり思っていたので、多少の類似に気づいても、それを両言語の親族関係と関連づけて考えることをしなかった。ところが頭を切りかえて両言語を比較してみる

と、親族関係に起因すると考え得る類似点がかなり目に映ってくる。そればかりでなく、アイヌ語と朝鮮語との間にもかなり類似点が見出される。

とのべ、その後、「アイヌ語の研究について」[88](一九五七年)という論文で、それをつぎのように具体的に敷衍している。

たとえば、アイヌ語に kur《影》、niskur《雲》、kunne(←kur+ne)《黒い》、ekurok《暗い》などの単語があり、いずれも語根 √kur を含むが、日本語の kurosi(黒)、kurasi(暗)、kuru(暮)などに含まれる語根 √kur に、形も意味も似ている。更に、朝鮮語の kurum《雲》と比較するならば、日本語の kumo(雲)は kur+mo から来たとも考え得る。そのほか、スワデシュ(Swadesh)の(言語年代学)語彙を比較しただけでも次のような類似が直ちに目にうつる(形態素の類似はここに挙げただけにとどまらない)。

アイヌ語	kap	se-	mat	tek	an	ne-～na-	poye
(意　味)	《皮》	《背》	《女》	《手》	《我》	《何》	《掘る》
日 本 語	kapa	se	me	*tei	a	na-	poru

基礎語彙のこのような類似は、偶然の一致だとか借用関係によるとか言って簡単に片づけて了うわけには行かない。大いに研究を要するのである。

そして、そのあとで、「アイヌ語の文法構造が、日本語とは親族関係が無いと断定し得るほど、日本語のそれと異なるかというに、そうではない」と断じている。服部のこの指摘をうけて、両言語の系譜関係の有無を総合的にあきらかにしようとするこころみは、管見に入るかぎり、いまだなされていない。

昭和三〇(一九五五)年代にはいると、系統論に関する研究結果の発表は、加速度的にふえていく。一九五九(昭和三四)年には、日本語系統論にかかわるそれまでの諸論文を集成した服部四郎の『日本語の系統』[89]が刊行され、一九六〇(同三五)年には、長田夏樹の独自の論「日朝共通基語音韻体系比定のための二、三の仮説」[90]がでた。また、一九六三

(同三八)年には、小沢重男の「日本語のサ行頭音の源流について――アルタイ諸語特にモンゴル語との比較を通して――」[91]および「原始日本語における語頭濁音存在の可能性について――アルタイ語特にモンゴル語との比較を通して――」[92]が発表され、ついで、一九六六(同四一)年には、日本語‐朝鮮語の祖形を再構したマーチン(S. E. Martin)の「日朝語親族関係の語彙証拠」[93]が発表されたが、その翌年には、その論考に対するミラー(R. A. Miller)の修正論文「古代日本語の音韻と日朝語の関係」[94]がでた。さらに、一九六九(同四四)年には、日本語と蒙古語との比較をこころみた小沢重男の『古代日本語と中世モンゴル語――その若干の単語の比較研究――』[95]という著書が公刊され、一九七一(同四六)年には、日本語を〝アルタイ語〟の視野から比較研究したミラーの『日本語と他のアルタイ諸語』[96]が出版された。以上の諸研究によっても、日本語の系統は、決定的にはあきらかにされていない。ために、現在もなお、それを究明するための努力は、たえずつづけられている。

以上においてみたとおり、戦後の系統研究には、日本語は朝鮮語や〝アルタイ語〟と同系である蓋然性がもっともおおきいとみなし、もっぱらその線で日本語の系統をさぐっていこうとする従来からのたちばと、日本語に、〝北方〟要素のほかに〝南方〟要素をもみいだし、それらの二要素の共存を調和的に解釈して、その成立や起源を説明しようとするたちばとがある(『論集 日本文化の起源[97] 5』(前出)における大野晋の解説)。

6　現在の日本語系統論

現在における日本語系統論の第一としてあげらるべきは、ポリワーノフの研究に関連してすでに簡単に言及した(第4節)ところの、村山七郎による〝アルタイ語〟とマライ‐ポリネシア語との〝混合語〟説であろう。

村山は、昭和二〇(一九四五)年代から日本語の系統研究に精力的にとりくみ、現在までかずおおくの論考を発表してきた。一九五〇(昭和二五)年の「古代日本語における代名詞[98]」、一九五四(同二九)年の「古代日本語の二、三の音韻

現象について」[99]や「日本語とアルタイ語の音韻対応」[100]、一九五六(同三一)年の「万葉語の語源——日本語の系統論に関連して——」[101]、一九六一(同三六)年の「日本語の比較研究から」[102]などの一連の研究において、もっぱら〃アルタイ語〃に日本語の系統をさぐろうとし、また、昭和三〇(一九五五)年代の後半からは、その方向をツングース語に限定して、「日本語及び高句麗語の数詞——日本語系統の問題に寄せて——」[103](一九六二年)・「日本語のツングース語的構成要素」[104](同年)、「高句麗語資料および若干の日本語・高句麗語音韻対応」[105](同年)などの論文を発表した。しかし、昭和四〇(一九六五)年代初頭の「言語学的に見た日本文化の起源」[106](一九六六年)においては、従来の自説におおはばな修正をくわえ、日本語に〃南方〃的要素をみいだして、それを日本語の成立そのものと関連させようとし、また、一九七一(昭和四六)年の「日本語系統論」[107]では、日本語を〃アルタイ語〃系言語とマライ－ポリネシア語からなる雑種(ハイブリッド)的言語とみなす「ポリワーノフのきりひらいた路線上に、系統論を進めてみようとしたひとつの試み」として、日本語にみいだされる〃アルタイ語〃的要素と南島語的要素に検討をくわえたうえ、その結論としてつぎのようにのべた。

(1) 日本語の系統の問題はウラルアルタイ系か、南島語系か、というように二者択一的に提出することは妥当でない。

(2) 日本語は「ウラルアルタイ的要素」と「南島語的要素」を主な成分として成立したと見られる。この「ウラルアルタイ的要素」は南島語要素とおなじく語頭にrをもたない言語であった。この点からみて、フィンノ・ウグル系言語と見るべきでなかろう。

(3) 日本列島にはまず南島系言語が到来し、一定の音韻変化(*b→*p)が完了した後でアルタイ系言語が到来したと見られる。

そして、のちに、この「ひとつの試み」を、文化人類学者大林太良との対談をまとめた『日本語の起源』[108](一九七三年)において総合的に展開して自説となし、ポリワーノフの説に若干の修正をくわえるとともに、それを実質的言語材

を提示することによって具体化した。さらに、村山は、その後も、南島語と日本語とを比較した『日本語の語源』[109]（一九七四年）。『国語学の限界』[110]（一九七五年）および、従来の諸説と自身によるポリワーノフ修正説との相違点を具体的に明示した『日本語の研究方法』[111]（一九七四年）などをあいついで刊行している。

もともと、真の、純粋な意味における〝混合語〟の存在の可能性は、言語学的には、これまで疑問視されてきた。にもかかわらず、日本語をそのような言語とみなすポリワーノフ説を村山がおおすじにおいて是認したのは、おそらく、自身をもふくめた従来の研究者が〝アルタイ語〟や朝鮮語に充分な対応語彙および対応形態素をみいだしえなかったことから、日本語における非〝アルタイ語〟的要素に注目した結果、そこに、マライ－ポリネシア語起源とかんがえうる要素をすくなからずみとめたためであろう。あるいは、みずからが『日本語の起源』のなかでのべているように、ソ連の言語学者メノフシチコフが、カムチャッカ半島の東方にある銅島でエスキモー系のアレウト語とロシア語とからなる一種の〝混合語〟を発見して報告した（一九六四（昭和三九）年）ということが関係しているかもしれない。村山による論証の完遂および、ポリワーノフ＝村山説に対する積極的な検証がのぞまれる。

現在の系統論として逸することのできないものに、一九七六（昭和五一）年の六月から八月にかけて『言語』誌に掲載された西田龍雄の「日本語の系統を求めて――日本語とチベット・ビルマ語――」[112]がある。副題にしめされているように、日本語をチベット－ビルマ語と同系とみなし、両言語を具体的に比較して、おおくの音韻対応項を措定したものである。そこで展開された両言語の比較は、広汎にわたるとともに精緻をきわめており、それだけにまた、従来のチベット－ビルマ語系説に比して、つよい説得力をもつ。しかしながら、そこに引用された「古代日本語」には、語形の認定をあやまったとかんがえられるものがすくなくない。たとえば、

上代日本語 midu は、mi-du に分解でき、あとの -du が、TB *thuy と対応し、一方、wi-do, wi-kë〈池〉（wrB *rei-kan*〈池〉にあたる）の wi- も〈水〉の意味で、TB*riy と同源であり、-do は TB*-doŋ に対応する。mi- の来源はわ

からないが、〈泉〉wi-du-miは、おそらくwi-du-miё〈水の目〉であったと推定できる。wrT *chu-mig*〈水の目=泉〉という解説部分(七月号第九節)では、《池》がwi-kё、《泉》がwi-du-miとしてあげられているが、周知のとおり、これはikё, idumiであって、wikё, widumiという語形は誤認にもとづくものである(おそらく、wido《井戸》からのあやまった類推にもとづくものであろう)。また、《顔》をkawo、《明》をakïraka、《仰》をawoguとする(六月号)のはあやまりで、西田の表記法ではkaфo, akiraka, aфuguとするのがただしく、woku《起》、woru《織》(以上、七月号)、mono《物》(八月号)も、oku, oru, monö(<mönö)としなければならない。音韻対応項三六を措定した、論文の末尾にそえられている「チベット・ビルマ語と日本語比較語彙」には、この種の誤謬が一〇例以上もみいだされる(それとも、それらの語形は、西田の推定した古形式で、それについての解説をこの稿の筆者がよみおとしたということなのであろうか)。精密な考証だけに、このような誤謬は余計にめだつのである。このこころみにもまた、他の研究者による厳正な批判が——正の評価と負のそれとをふくめて——よせられなければならない。

従来の系統研究と方法をことにする現在のこころみに、安本美典・本田正久による「日本語の誕生」[113](一九七二年)その他の論考[114]がある。語頭音韻の類似という点から日本語とチベット・ビルマ語とが同系性を有する可能性のおおきいことを指摘したものである。安本・本田は、現在もまた、同主旨の長大な論文「日本語の起源を追って」[115](一九七七年)を『言語』誌に連載中であるが、かりに日本語とチベット・ビルマ語とが同系であったとしても、同一の音韻がそれぞれの言語においてまったくことなった——すなわち、類似をみとめえないほどにことなった——音韻に変化してしまっている蓋然性は、語頭音韻といえども、否定できないのであるから、その類似のみで同系性の有無を論断することはできないであろう。やはり、音韻の対応から比較研究をすすめるべきではあるまいか。

最後に、ニューギニア島のNAN(Non-austronesian)語のなかの純トアリピ語の「諸特徴は、日本語或はアルタイ語のそれらと顕著な一致を示している」が、この純トアリピ語に相当する言語が「日本語の最基層」をなしているの

ではないか、という江実の「アルタイ言語学とオセアニア言語学との接触――日本語の起源を中心として――」(一九七四年)その他の論文における日本語起源論にふれなければならないが、これに関する江の論文はきわめてすくない。[116] また、現在までに発表された論文で論じられているのは、両言語にみられるところの、統辞論の面における類型学的特徴の類似がほとんどであり、具体的な言語材の対応はなんらあきらかにされていない。仄聞するところによれば、江は、近時、両言語の対応語彙表を作製したという。その公表をまちたい。

四　結　語

このように、日本語の系統・起源を究明するためのこころみは、現在もさまざまなかたちでおこなわれている。今後もまた、この問題が完全に解明されないかぎり、あらたな言説が従来にもまして多様なかたちで展開されていくにちがいない。日本語の系統についての議論が活発におこなわれること自体は、それが言語学のただしい理解にもとづくものであるかぎり、わるいことではないが、必要な論拠を具備せずに提出された説を軽率に重視・鼓吹したり、あらたな立言に充分な検討をくわえることなく否定したりすることは、充分につつしまなければならない。と同時にまた、日本語の歴史に対する充分な理解にもとづいて、方法論そのものにもたえず反省をくわえていかなければならない。

〔付　記〕
本稿では、論文の引用にあたって、それらが最初に発表された雑誌・著書をあげたが、なかには、のちに全集や論文集に再録されたものがすくなくない。たとえば、白鳥庫吉・新村出のふたりの論考は、それぞれ全集(岩波書店・筑摩書房)に収録さ

れており、また、本稿においてたびたび言及・引用した服部四郎の論文は、『日本語の系統』におさめられている(ただし、「「言語年代学」即ち「語彙統計学」の方法について――日本祖語の年代――」は、『言語学の方法』(岩波書店、一九六〇年に再録されている)。本稿も、大半はそれによった。

なお、本稿の第一章でとりあげた池田次郎・大野晋編『論集 日本文化の起源 5』には、明治時代から第二次大戦後までに発表された、日本語系統論史上代表的な論考一四編が収録されており、この問題をかんがえるうえで有益である。本稿でも、それによったものが二、三編ある。

(1) 金田一京助『国語史 系統篇』刀江書院、一九三八年。

(2) 大野晋「日本語の系統論はどのやうに進められて来たか」(『国語学』一〇輯、一九五二年)。

(3) 村山七郎「国語系統論・比較研究の歴史」(国語国文学研究史大成 15『国語学』三省堂、一九六一年)。

(4) 亀井孝ほか「日本語の系統」(『日本語の歴史 1』〔第三章〕、平凡社、一九六三年)。

(5) 村山七郎・大林太良「日本語比較研究の歩み」(『日本語の起源』〔第四章〕弘文堂、一九七三年)。

(6) 小沢重男「日本語の系統」(日本語講座第一巻『日本語の姿』大修館書店、一九七六年)。

(7) 池田次郎・大野晋編『論集 日本文化の起源 5』平凡社、一九七三年。

(8) 本稿の筆者は、昭和五〇年度の、学習院大学における江実氏の国語学特殊研究講義「日本語の系統」を聴講し、そのさいに、外国人研究者によるおおくの開拓的著作を直接に披見することができた。いずれも、すでに稀覯書となっているものばかりであったが、それらを直接に手にしえたことは、本稿の記述にとって、おおいに有益であった。

(9) 服部四郎「日本語の系統――研究の方法――」(日本人類学会編『日本民族』岩波書店、一九五二年)。

(10) A. Boller, "Nachweis, dass das Japanische zum ural-altaischen Stamme gehört", Sitzungsberichte der Wiener Akademie der Wissenschaft. Phil.-hist. Kl. XXIII, 1857.

(11) J. J. Hoffmann, Japanishe Spraakleer, Leiden, 1867. 英訳本は、一年後の刊。三沢光博訳『日本語文典』明治書院、一九六八年。

(12) H. Winkler, Japaner und Altaier, Berlin, 1894.

(13) H. Winkler, Der ural-altaische Sprachstamm, das Finnische und das Japanische, Berlin, 1909.
(14) W. G. Aston, "A comparative study of Japanese and Korean languages", Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Irland. New Series XI, 1879.
(15) B. H. Chamberlain, "Essay in Aid of a Grammer and Dictionary of the Luchuan Language", Transactions of the Asiatic Society of Japan, XXIII, Supplement, 1895.
(16) 大矢透「日本語ト朝鮮語トノ類似」(『東京人類学会雑誌』四巻三七号、一八八九年)。
(17) 井上哲次郎「人種、言語、及び宗教等の比較に依り、日本人の位置を論ず」(『東邦協会報告』二〇号、一八九七年)。
(18) 白鳥庫吉「『日本書紀』に見えたる韓語の解釈」(『史学雑誌』八編四・六・七号のうちの七号、一八九七年)。
(19) のちに、「国語上より観察したる人種の初代」と改題して、『史学雑誌』一二編六号に掲載。
(20) 新村出「田口博士の言語に関する所論を読む」(『言語学雑誌』二巻四号、一九〇一年)。
(21) 藤岡勝二「言語を以て直に人種の異同を判ずること」(『史学雑誌』一二編九号、一九〇一年)。
(22) 田口卯吉「人種の初代の根拠地を決するは国語に如くなし」(『史学雑誌』一二編一〇号、一九〇一年)。
(23) 新村出「田口博士に答へて言語学の立脚地を明にす」(『史学雑誌』一二編一一号、一九〇一年)。
(24) 平井金三「日本の言葉はアリアン言葉なり」(『新公論』第一九年八—一〇号・第二〇年一号、一九〇四—五年)。
(25) 平井金三「日本語アリアン語比較表」(『新公論』第二〇年二—四号、一九〇五年)。
(26) 白鳥庫吉「漢史に見えた朝鮮語」(『言語学雑誌』一巻三—五号、一九〇〇年)。
(27) 注(18)に同じ。
(28) 白鳥庫吉「日本の古語と朝鮮語との比較」(『国学院雑誌』四巻四—一二号、一八九八年)。
(29) 白鳥庫吉「再び朝鮮の古語に就て」(『言語学雑誌』二巻一号、一九〇一年)。
(30) 白鳥庫吉「国語と外国語との比較研究」(『史学雑誌』一六編二・三・五・六・八・九・一二号、一九〇五年)。
(31) 白鳥庫吉「日・韓・アイヌ三国語の数詞に就いて」(『史学雑誌』二〇編一—三号、一九〇九年)。
(32) 白鳥庫吉「朝鮮語とUral-Altai語との比較研究」(『東洋学報』四巻二・三号、五巻一—三号、六巻二・三号、一九一四—一六年)。

(33) 白鳥庫吉「日本語の系統――特に数詞に就いて――」(岩波講座『東洋思潮』一八回、岩波書店、一九三六年)。

(34) 藤岡勝二「日本語の位置」(『国学院雑誌』一四巻八・一〇・一一号、一九〇八年)。

(35) 服部四郎「アルタイ諸言語の構造」(『コトバの科学 1』一九五八年)。

(36) 金沢庄三郎「日韓語同系論」(『東洋協会調査部学術報告』第一冊、一九〇九年)。翌年『日韓両国語同系論』と題して、英文"The Common Origin of the Japanese and Korean Languages"を付して、三省堂から刊行。

(37) 新村出「国語系統の問題」(『太陽』一七巻一号、一九一一年)。

(38) 注(32)に同じ。

(39) 宮崎道三郎「日本法制史の研究上に於ける朝鮮語の価値」(『史学雑誌』一五編七号、一九〇四年)。

(40) 宮崎道三郎「日韓両国語の比較研究」(『史学雑誌』一七編七―一〇・一二号・一八編四・八・一〇・一一号、一九〇六―七年)。

(41) 宮崎道三郎「朝鮮語と日本法制史」(『国家学会雑誌』二九巻九号、一九一五年)。

(42) 新村出「国語及び朝鮮語の数詞に就いて」(『芸文』第七年二・四号、一九一六年)。

(43) 村山七郎「日本語及び高句麗語の数詞――日本語系統の問題に寄せて――」(『国語学』四八集、一九六二年)。

(44) 李基文「高句麗の言語とその特徴」(『韓』一巻一〇号、一九七二年)。

(45) 李基文、藤本幸夫訳『韓国語の歴史』大修館書店、一九七五年。

(46) G. J. Ramstedt, "A Comparison of the Altaic Languages with Japanese", Transactions of the Asiatic Society of Japan, 2nd Series I, 1924.

(47) ラムステット著、金田一京助訳「朝鮮及日本の二単語に就いて」(『民族』一巻六号、一九二六年)。

(48) ポリワーノフ著、村山七郎編訳『日本語研究』弘文堂、一九七六年。

(49) V. H. Labberton, "The Oceanic Languages and the Nipponese as Branches of the Nippon-Malay-Polynesian Family of Speech", Transactions of the Asiatic Society of Japan, 2nd Series II, 1925.

(50) A. N. J. Whymant, "The Oceanic Theory of the Origin of the Japanese Language and People", Transactions of the Asiatic Society of Japan, 2nd Series III, 1926.

(51)　堀岡文吉『日本及汎太平洋民族の研究』冨山房、一九二七年。
(52)　Matsumoto, Le Japonais et les langues austro-asiatiques, Paris, 1928.
(53)　松本信広「オーストロアジア語に関する諸問題」(『川合教授還暦記念論文集』一九三一年)。
(54)　橋本進吉「国語仮名遣研究史上の一発見――石塚龍麿の仮名遣奥山路について――」(『帝国文学』二三巻一一号、一九一七年。橋本進吉博士著作集第三冊『文字及び仮名遣の研究』岩波書店、一九四九年、所収)。
(55)　池上禎造「古事記に於ける仮名「毛・母」に就いて」(『国語国文』二巻一〇号、一九三二年)。
(56)　有坂秀世「古事記に於けるモの仮名の用法について」(『国語と国文学』九巻一一号、一九三二年)。
(57)　前間恭作『龍歌故語箋』東洋文庫、一九一四年。
(58)　小倉進平『郷歌及吏読の研究』京城帝国大学、一九二九年。
(59)　有坂秀世「古代日本語に於ける音節結合の法則」(『国語と国文学』一一巻一号、一九三四年)。
(60)　新村出『国語系統論』(国語科学講座 Ⅳ『国語学』明治書院、一九三五年)。
(61)　パーカー、原一郎訳『日本語・西蔵＝緬甸語同系論』東亜同文館、一九四一年。
(62)　服部四郎「日本語と琉球語・朝鮮語・アルタイ語との親族関係」(『民族学研究』一三巻二号、一九四八年)。
(63)　注(9)に同じ。
(64)　柴田武「日本語の系統」(『日本文化の起源』野村書店、一九四九年)。
(65)　長田夏樹「原始日本語研究導論――アルタイ比較言語学の前提として――」(『神戸外国語大学開学記念論文集』一九四九年)。
(66)　河野六郎「日本語と朝鮮語の二三の類似」(八学会連合編『人文科学の諸問題』関書院、一九四九年)。
(67)　長田夏樹『原始日本語研究――日本語系統論への試み――』(『神戸学術叢書 2』神戸学術出版、一九七二年)。
(68)　座談会「日本語の系統について」(『国語学』五輯、一九五一年)。
(69)　泉井久之助「日本語の系譜について」(『国語学』五輯、一九五一年)。
(70)　泉井久之助「日本語の系統について(序説)――日本語とフィノ・ウグール諸語――」(『国語学』九輯、一九五二年)。
(71)　大野晋「日本語と朝鮮語との語彙の比較についての小見」(『国語と国文学』二九巻五号、一九五二年)。

(72) 泉井久之助「日本語と南島諸語――系譜関係か、寄与の関係か――」(『民族学研究』一七巻二号、一九五三年)。
(73) 服部四郎「「言語年代学」即ち「語彙統計学」の方法について――日本祖語の年代――」(『言語研究』二六・二七号、一九五四年)。
(74) 服部四郎「日本語の系統――日本祖語の年代――」(『図説 日本文化史大系 1』小学館、一九五六年)。
(75) 服部四郎「日本語の系統――音韻法則と語彙統計学的〝水深測量〟――」(『古事記大成 3』「言語・文字篇」平凡社、一九五七年)。
(76) 注(9)に同じ。
(77) 注(75)第七節その他。
(78) 安田徳太郎『万葉集の謎』光文社、一九五五年。
(79) 安田徳太郎『日本語の祖先』大陸書房、一九七六年。
(80) 大野晋『日本語の起源』岩波書店、一九五七年。
(81) 注(71)に同じ。
(82) 大野晋「日本語の黎明――成立から貴族時代(前期)まで――」(『国文学 解釈と鑑賞』一九巻一〇号、一九五四年)。
(83) 注(72)に同じ。
(84) 注(80)二二〇頁。
(85) 服部四郎「アイヌ語と日本語との関係」(『朝日新聞』一九五五年七月二八日)。
(86) B. H. Chamberlain, "Language, Mythology and geographical nomenclature of Japan viewed in the light of Aino Studies"(東京帝国大学『文科大学紀要 I』一八八七年)。
(87) 金田一京助「国語とアイヌ語との関係――チェンバリン説の再検討――」(『日本文化史論叢』中文館書店、一九三七年)。
(88) 服部四郎「アイヌ語の研究について」(『心の花』七〇〇号、一九五七年)。
(89) 服部四郎『日本語の系統』岩波書店、一九五九年。
(90) 長田夏樹「日朝共通基語音韻体系比定のための二、三の仮説」(研究発表の要旨)(『言語研究』三七号、一九六〇年)。
(91) 小沢重男「日本語のサ行頭音の源流について――アルタイ諸語特にモンゴル語との比較を通して――」(『国語研究』一六

号、一九六三年)。

(92) 小沢重男「原始日本語における語頭濁音存在の可能性について——アルタイ語特にモンゴル語との比較を通して——」(『東京外国語大学論集』一〇号、一九六三年)。

(93) S. E. Martin, "Lexical evidence relating korean to Japanese", Language 42-2, 1966.

(94) R. A. Miller, "Old Japanese phonology and the Korean-Japanese relationship", Language 43-1, 1967.

(95) 小沢重男『古代日本語と中世モンゴル語——その若干の単語の比較研究——』風間書房、一九六九年。

(96) R. A. Miller, Japanese and Other Altaic Languages, Chicago, 1971.

(97) 注(7)に同じ。

(98) 村山七郎「古代日本語における代名詞」(『言語研究』一五号、一九五〇年)。

(99) 村山七郎「古代日本語の二、三の音韻現象について」(『国語学』一七輯、一九五四年)。

(100) 村山七郎「日本語とアルタイ語の音韻対応」(研究発表の要旨)(『言語研究』二六・二七号、一九五四年)。

(101) 村山七郎「万葉語の語源——日本語の系統論に関連して——」(『国文学　解釈と鑑賞』二一巻一〇号、一九五六年)。

(102) 村山七郎「日本語の比較研究から」(『国語学』四七集、一九六一年)。

(103) 村山七郎「日本語及び高句麗語の数詞——日本語系統の問題に寄せて——」(『国語学』四八集、一九六二年)。

(104) 村山七郎「日本語のツングース語的構成要素」(『民族学研究』二六巻三号、一九六二年)。

(105) 村山七郎「高句麗語資料および若干の日本語・高句麗語音韻対応」(『言語研究』四二号、一九六二年)。

(106) 村山七郎「言語学的に見た日本文化の起源」(『民族学研究』三〇巻四号、一九六六年)。

(107) 村山七郎「日本語系統論」(『言語生活』二三七号、一九七一年)。

(108) 村山七郎・大林太良共著『日本語の起源』弘文堂、一九七三年。

(109) 村山七郎『日本語の語源』弘文堂、一九七四年。

(110) 村山七郎『国語学の限界』弘文堂、一九七五年。

(111) 村山七郎『日本語の研究方法』弘文堂、一九七四年。

(112) 西田龍雄「日本語の系統を求めて——日本語とチベット・ビルマ語——」(『言語』五巻六—八号、一九七六年)。

(113) 安本美典・本田正久「日本語の誕生」(『数理科学』一一二―一一四号、一九七二年)。

(114) 安本美典・野崎昭弘「計量言語学 比較言語学の新しい方法」(『数理科学シリーズ13 言語の数理』筑摩書房、一九七六年)。

(115) 安本美典・本田正久「日本語の起源を追って」(『言語』六巻一号―、一九七七年)。

(116) 江実「アルタイ言語学とオセアニア言語学との接触――日本語の起源を中心として――」(『言語』三巻一号、一九七四年)。

8 日本語の語源

阪倉篤義

一　「語源」は一つではない

薄く切ったパンの間に肉や野菜をはさみこんだ食品に対して、サンドウィッチという外来語の呼び名が用いられている。もとこれは、一八世紀の中頃、英国のジョン・モンタギュー・サンドウィッチ(John Montagu Sandwich)伯なる人物が、大変な賭けごと好きで、食事の時間を惜しんでもっぱらこの食品を愛用したのに由来するという。この話は、いわゆる語源を説く書物の好んで引用するところである。個々の言語記号において、指示される対象概念と、これを指示する音韻形式との間に既に存在している、一対一の相互喚起的な関係が、そもそもいかにして成立したか、その由来を明らかにすることが、その言語記号(語、あるいは慣用的連語)のいわゆる「語源」を説くことであるとするならば、右は、まさに一つの語源解説であると言うことができる。こういうかたちの簡便な食品そのものは、むろん、イギリスにもフランスにもそれ以前からあって、何らかの呼称を持っていたに相違ないのだけれども、それがサンドウィッチという名称に固定するにいたった由来は、右のようなところにあったからである。この話がよく物語っているように、両者の結合は、本来から言えば全く偶然的なものであった。記号の恣意性ということばでよく言われるように、たとえばGreenwichでもNorwichでも、その他何と呼ばれてもよかったはずのこの食品が、事実は、他のいずれでもなくて、特にsandwichと呼ばれるにいたったのには、右のような一つの「いきさつ」がなければならなかった。そういう「いきさつ」を、この場合の命名の理由づけとして、——つまり、命名における一つの有意的な契機として説くことが、いわゆる語源を説明することになるのである。

ところでこの場合、右のような偶然が現に起り得たということのためには、遡ってまず、この命名のもとになった

賭けごと好きの伯爵の名前が、たまたまサンドウィッチでなければならなかった。すると、彼がサンドウィッチと呼ばれるのには、もと、何かの理由があったのかどうかということが、当然、次に考えるべき問題になる。このジョンは、サンドウィッチ伯爵家の四代目であったが、この Earl of Sandwich という称号は、もと、イングランドのケント州東部にある町の名に基いている。彼自身この町とは直接に関係がなかったにしても、この称号は、元来その先祖の領地をもって名づけられたものであるという点では、やはり、そこに命名の理由(有縁性 motivation)を考え得るものであった。命名の由来の説明という意味で、これまた、この人物の名についての「語源」であると言い得る。そして、このようにしてこの人物がサンドウィッチ伯と呼ばれなければならなかったという歴史的事情が、やがて、あの食品がこの名で呼ばれるという事態を準備することになったという意味において、これは、食品名サンドウィッチの語源にとっても決して無縁ではない。

そうなると、では、そもそもこの町が Sandwich という名で呼ばれたのは何故であったのかが、遡って問題になる。この語は中世英語の Sandwic に遡り、sand は砂、wic はラテン語の vicus(町・村)などと同源で、したがってこれは、もと「砂地に立てられた市場町」を意味した名称らしい(ちなみに言えば、その発音は、前掲の Greenwich がグリニジ、Norwich がノリジと写されるように、サンウィジとかサンウィッチとか写されるべきものであったようだ)。サンドウィッチという語そのものの語源を問題にするならば、まず少くともここまで遡らなければならない。そして、さらには、sand が何故に砂を意味し、wich が何故に町や村を意味したかの由来をも問わなければならないことになる。語源探究が、その語の成立した始源的な事情をたどることを意図するものであるならば、ここまでたどらなければ、その目的は果たされないわけである。

しかしながら、食品に対する名としてのサンドウィッチという語にとって、右の事情は、やはり間接的なものであるに過ぎない。先にも述べたように、語源というのは、本来恣意的な記号でしかないはずの一つの音韻形式が、命名

に際して、その概念に対してある種の有縁性をもって結合するようになった、その事情を問題にするのである。食品名のサンドウィッチなる語は、伯爵名に由来し、伯爵名は地名に由来し、地名はそれを構成する二語に由来するのであるから、サンドウィッチが食品名として有縁的であり得たことの背景に、これだけの事情が必要であったことは、事実として認められる。しかし、食品名サンドウィッチにとって、sand が砂を、wich が村を意味する語であったということは、何らの有縁性を、直接には持たない。

それぞれの語の語源を考えるに当って、いちいちその始源的な事情を考慮していては、問題はすべて言語の発生というところにまで遡ることになって、ついに明らかにし得ない点があまりにも多いことになる。われわれが語源を論じる場合には、当面の問題として、まず、ある時点における語をとって、そこにおける、対象概念とそれを指示する形式との結合の、直接の有縁性を考察すべきものである。そして、これをまず、たとえば「食品名としてのサンドウィッチの語源」として想定し、ついで遡って、たとえば「伯爵名としてのサンドウィッチの語源」あるいは「地名としてのサンドウィッチの語源」というべきものを、それぞれについて説くというように、同一の語形についても数次の語源を想定することにならざるを得ない。もちろん、さらにそれら数次の語源相互の関係を遡源的に考察して行くことは必要であるが、しかし、それも、「歴史的に遡り得るかぎり」という限定つきのことであって、語のそもそもの由来――たとえば、犬をなぜ「イヌ」と言い、川をなぜ「カハ」と言うか、などということは、容易に明らかにし得べきものではない。こうした考察のための条件のかなり整っている印欧語の場合には、なお、相当の客観性をもってそれが言えるが、比較言語学的方法を適用する上ではなはだ不利な状況におかれている日本語の場合、その困難さは特別に大きいことを覚悟しなければならないからである。

いま、ある一つの概念に対して新しく命名が行われるに際しては、次の四つないし五つの方法が考えられるであろう。すなわち、

(1) その概念に応じる全く新しい音韻結合の形式を創造して、これに当てる場合。(いわゆる語根創造)

(2) 他の言語体系における既存の形式を借用して、これに当てる場合。(いわゆる借用語または外来語。この場合、多少の変形を加えることが多い。)

(3) 同じ言語体系内の既存の形式を基として、これに多少の工夫(派生、複合、その他の手段)を加えて新概念に応用する場合。

(4) 同じ言語体系内の既存の語形式を、ほぼそのままで新概念に利用する場合。

(イ) この際、その語形式が従来対応していた概念との結合を廃して、新概念にのみ対応するように転用する場合と、

(ロ) 従来からの概念との対応をそのままに保ちながら、これを拡張して、新しい概念にも通用する場合とがある。

このうち、(1)(2)(3)の三つは、(4)と異って、いずれも、何らかの意味においてその言語体系中に従来存在しなかった新しい形式の成立を結果する、という点で、共通性を持っている。しかしまた、(3)は、その過程において既存の形式を利用するという点で、むしろ(4)と共通し、(2)もまた、他言語中のものではあるが既存の形式を利用するという点でこれに準ずるから、結局(1)だけが、純粋な意味において新規に造語が行われる場合ということになる。ある概念に対応して、ある一つの形式がそもそもいかにして発生してくるかという、語の起源論的な問題は、まさにこの(1)においてこそ論じられるべきものであろう。しかしながら、右にも言ったように、確かにこの段階のものであると決定し得る具体例を実際に発見することは、なかなかにむつかしい。一見この語根創造の例と見えるものでも、実は、そこにいたるまでに、既になにほどかの過程を経ているのではないか、あるいはまた、少くともその成立に当って、モデルになった語が既に存在していて、純粋な意味での創造とは言えないのではないか、というような疑念を容易に捨てき

ることができないものが大部分である。したがって、厳密に言って、われわれが直接に取扱い得る問題の多くは、⑵⑶⑷の場合ということにならざるを得ない。語源論といえば、語の起源的な構造や意義を論じるもので、したがって、それぞれの語が無から成立してきた、その発生事情を明らかにするものであるかのように考える一般の通念は、この点においてまず修正されなければならない。

これに対して、⑷の(ロ)あるいは(イ)のように、「通用」あるいは「転用」による命名であるという場合においては、当該の語と、それが基いているもとの語との、構造、意義、用法などを比較して、いかにして新しい概念と形式との結合が成立したかという語源的な事情を論じることが、比較的容易であると思われる。同じことは、⑶における「応用」の場合や、⑵における「借用」の場合についても言えそうである。ところが、当該の語について、そのような「もとになった語」なるものを限定して考えることの、そもそも容易でない場合が、事実としては、相当に多いのである。

たとえば、「新し」を意味するアタラシという語の発生は平安時代以後のことであって、奈良時代以前においてこの意味を表わす語はアラタシであり、そしてアラタシからアタラシへの変化は、いわゆるmetathesis（音位転倒）の結果であるというように、ふつう説かれている。ところが、ここに問題なのは、この新出形アタラシと同じ形式を持った語が既に奈良時代以前から存在していて、「惜し」の意味をもって広く用いられていたという事実である。その結果として、平安時代においては、もとの「惜し」を意味するアタラシと、新出の「新し」を意味するアタラシとが、並び行われることになってしまった。もっとも、アクセントには区別があったらしく（『名義抄』その他によれば、前者は●●●◓、後者は○○○◓）、それによって、同音衝突を起すことは一往避けられたであろう。しかし、なお多少ともその危険をはらむ同一の音韻結合形式を生むことになる音位転倒が、ここで、どうして起ることになったのか、という点に、やはり疑問が残る。もしこの新形アタラシが、偶然の、意図せざる誤ちによって生じた形であるならば、当然、これと並んで、それまでのアラタシという形も文献上に表われつづけてよいはずであるが、事実は、平安時代

以後、一、二の例外(たとえば、古語を保存すると思われる、「催馬楽(さいばら)」のような歌謡や、『地蔵十輪経』元慶七年点のような訓点資料)を除いて、この語は、むしろ規範意識の濃厚なはずの和歌・和文中からは一斉に姿を消して、すべてアタラシが代って用いられるようになる。そして、以後、この方が、「新し」の意味を表わす形容詞として基礎語彙中に定着して、今日にいたっているのである。一般に、極めて一時的な存在であり、俗語的であることを例とする音位転倒形として、これは極めて珍しい例としなければならないことになる。さらに、いま一つ、次のような事実も考慮されなければならない。すなわち、純粋な音位転倒の確実な例と考えられている、

チヤマガ(茶釜)　ツモゴリ(月籠)　スモゴリ(巣籠)　タガモ(卵)　ヨゴミ(蓬)　マルガメ(丸甾)
コガモメ(駒込)　ツムギ(鶫)　カダラ(体)　トナダ(戸棚)　サザンクワ(山茶花)　ハラヅツミ(腹鼓)

などにおいて、音位の転倒は、いずれも濁音音節において起っている。(1) 特に、gとmとの音素転換がいちじるしいほか、d・zとr・n・tとの交替が、現に見られるのである。例外が絶対にあり得ない、などと言える性質のものではないけれども、少くとも実例によって見るかぎり、日本語における音位転倒の現象は、特に右のような音韻結合の条件において起りやすいものである、とは言えそうである。しかるに、問題のアタラシという語形には、この条件が備わってはいなかった。しいて言えば、raとtaとの発音部位の似寄り、という点くらいが考慮されるに過ぎない。アタラシを、単にアラタシの音位転倒によって生じた形とするのは、この面からも躊躇される。

考えられるのは、むしろ、平安時代以後に「新し」を意味したアタラシという語は、「惜し」を意味したアタラシが、意義的に拡張使用されるようになったものではあるまいか、ということである。アタラシという形容詞は、本来、あるものが「その本質にかなう(アタル)状態にある、または、そうした属性を持つ」ことを意味した。特に、それは、「しかも、せっかくのその属性が十分に発揮され得ない状況にある」ことを嘆く気持を表わす場合に用いられて、「惜しい」とか「勿体ない」とかいう語に相当する意味が、強調されるようになった。たとえば『万葉集』などにこ

のアタラあるいはアタラシという語が用いられている場合は、いずれも、現に最盛の状態にあるものが、「老い」「過ぎ」「絶え」「荒れ」て衰滅に向うことを、嘆き痛む気持を表明しているものばかりである。が、それはすなわち、そのような恐れを言うことによって、逆に今の盛りの状態の、時に遇った新鮮さを、称えているのでもある。アタラシという語の意義の本質が先のようなところにあったとすれば、時代と共にそれが、フルシ(古りたるさま)に対する反対概念としての「新しきさま」「新鮮さを保つさま」を表わす方向へも進んで行ったことが、推定されよう。したがって、もとアタラシの意味した「新」の概念と、このアタラシの意味するようになった「新」の概念とは、既に同じではなかったわけで、

阿良多之支年のはじめにかくしこそ千年をかねて楽しきをへめ(『琴歌譜』)

にお ける アタラシキ年が、つぎつぎと改新されるものとしての新生の年を意味した(アラタのアラは、アラハルのアラとともに、恐らくは、出生、出現を意味する動詞「アル」の情態言であった)に対して、

あたらしき年のはじめにかくしこそ千歳をかねて楽しきをつめ(『古今集』巻二〇)

におけるアタラシキ年は、今全盛の、新鮮さにあふれた年という意味であった。当然ここには、来るべき衰退への予感と、「今」を惜しむ気持とが籠められているわけで、そのことは、前の歌に、「千年をかねて楽しきを経め(千年にわたって楽しみを重ねよう)」と、将来への展望的な希望が述べられていたものが、後の歌では、「千年を兼ねて楽しきを集め(千年分の楽しみを今に集中するのだ)」という、現実謳歌の思想に歌い変えられている事実と、まさに相応じているのである。こうして、アタラシという語形は、平安時代以後、本来の「惜し」「勿体なし」の意味に対応する一方、また、そこから分化した「新し」の意味にも対応するようになった。この二つの意味は、つながっているのではあるが、しかし分別を要するので、特に「新し」の意味を表わす場合には、もとその意味を表わし、そして今やアタラシによってその地位を奪われたアラタシという語の、アクセント形式○○○◐を踏襲することとなり、それに

よって、本来の「惜し」を意味するアタラシ（●●●◐）との、使用上における衝突が避けられたのであると解釈される。

このようにして、たとえばこの「新し」を意味するアタラシという語の語源の探究は、発生の事情を、先のように単なる音韻論的な問題（先の分類で言えば(3)の一つの場合）として処理し得べきものか、あるいは、後のように意味論的な問題（先の(4)の(ロ)の場合）として考えるべきものか、さらには、この両者のからみ合った問題とすべきものであるのか、などと、その可能性を慎重に検討するところから始めなければならない。しかも、それはまた、結論につながるのである。その決定のためには、そもそも、このアタラシの意味する「新し」という概念と、もとのアタラシの意味した「新し」という概念とでは、その間に、すでに「新しさ」に対する価値観の、時代的な変化に基く差異があって、右は、このことを反映する事実だったのではないかという精神史的な問題をも、基本的に考慮に入れなければならないことになるであろう。

二　語史研究と文化史的語源

一般に語は、極めて自由に、ときには、「気まぐれに」と言いたくなるような仕方で、その意味や形を変えることがある。当該の語について見るかぎり、その意義と形式とが、もといかなる有縁性をもって結合し得たのか、全く想像のつかないものが少くない。遊女を意味する「女郎」と、「お嬢さん」とが双生語(doublets)であり、共に高貴の女性を意味した「上臈」という語に由来するとは[2]、その過程を詳しく聴かないかぎり、誰しも思いよらないであろう。そこには、しばしば、もはや通常の論理では処理しきれない、聯想や誤解に基く創造力が作用する。したがって、たとえば、ある語の造語の仕方が、先のような四種類のどれに当てはまるかを言い得るのは、実は、すでにその語源的事情がある程度判明している場合のことである。つまり、当該の語と、そのもとになった語との、構造や意義・用法に

おける関係が、ある程度説明し得るものであるからこそ、これを「通用」だの「転用」だのの例と認めることもできるのである。先に、「通用あるいは転用による命名であるという場合においては、当該の語と、それが基いているもとの語との、構造、意義、用法などを比較して……語源的な事情を論じることが比較的容易である」と言ったのは、したがって、全くの同語反覆(トートロジィ)であり、極めて当然のことを言っているに過ぎないのであった。語源論をなすに当って、われわれは、ともすれば、こういう、予定される結論を無意識のうちに前提の中に繰り込んでしまう論議を展開する誤りに陥りがちであることを、はじめにまず十分警戒しておかなければならない。

語源の探究は、決して一筋縄では行かない複雑さを含んでいる。しかし、考えてみれば、このようにして、語における概念と形式との関係が、その結合の当初からすれば全く思いもかけないような変化を遂げてしまって、現に有るかたちからは、そのもとの事情(特にその有縁性)が推定不可能になってしまいがちだからこそ、語源というものが、特別に「解釈」されなければならなくなるのでもある。擬声語や擬態語のように、その結合が極めて直線的であり、自明であるものについて、その語源をことごとしく論じる必要を認めないのは、当然である。ただし、この種の語においてすら、すでに、例えば、

御盥にみづから水を入させ給て、たまはせければ、うちうつぶきて、よによげにすはすはと皆飲みてけり(『古今著聞集』五九六話)

に見える「すはすはと」という形容のしかたなどは、もう、すぐにはその有縁性の納得しにくいものになっている。「すぱすぱ」は、現在もっぱら煙草の吸い方に限定して用いられるからである。動詞「すふ」を、これと関係づけて理解するためには、多少の時間を必要とするであろう。

語源論と言えば、人々は、現在既に不明にはなっているがしかし当初には確かに存在したはずの、概念と形式との結合に際しての有縁性について、論理的に納得できる説明が、必ず聴き得るであろうと期待しがちである。残念なが

ら、その期待は、十中七八まで、十分には充たされない。そこに到るまでに、あまりにも錯雑した変化の過程が予想されるからである。われわれのなすべきことは、その変化の段階に添うて、数次にわたる語源の一つ一つを、まず忠実に跡づけてみることである。遡り得るかぎり遡ってその始源的な事情の究明に到ることを、理想としては目指すけれども、しかし、そこに到るまでの各段階の究明こそが必要であり、そしてまた、そのそれぞれが十分に独立の意義を担い得るものであることを、銘記すべきであろう。新村出の言うように[3]、われわれの意図する語源研究は、むしろ語誌あるいは語史の研究と呼ぶにふさわしい性質を帯びたものにならざるを得ないと思われる。すなわち、それはまず、それぞれの語について、知り得るかぎり成立時に近い状態から始まって、以後、時代とともに、その語形および意義がいかに変化し、各時代の語彙体系中に占めるその語の位置がいかに推移し、場合によっては消滅するにいたったかというような、語の経歴ないしは歴史を明らかにすることである。

そして一般に語源研究が、史的言語学の重要な課題である以上、日本語の語源研究のためには、何よりもまず国語史研究の成果が、挙げて綜合的に利用されなければならない。そこにおいて明らかにされている、日本語の音韻史的事実や意味変化の類型、さらに語法史的事実や文字史的事実というようなものに支えられるのでなければ、個々の語の語史(語源)研究の結果は、絶対に説得力を発揮し得るものではない。当面の問題とする語の時代をまず定め、それにしたがって、右のような音韻史的、語法史的あるいは語彙史的な諸条件が定立されることによって、語源論は、ともすれば陥りがちな堂々巡りに、一つの結着をつけることもできようし、また、その解釈に都合のよい主観的推定を交える危険を、避けることもできるはずである。

語源研究が、直接には、まずこのような言語史的諸事実を考慮し、それに基いて行われるべきことは当然であるが、同時にまた、現代の諸方言に見られる事実も、そのための有益な参考になり得る場合がある。それは、単に、既に共通語的な世界では失われてしまった語形や語義の、方言中になお保存されているものをもって、過去の事実の考察の

参考とし得るというだけではない。むしろその背後にあって、そのような語を生みそして今なお保持しつづけている方言社会の、しきたりや、そこに住む人々のものの考え方が、われわれに比較的身近に理解し得る点で有用なのである。民俗学的研究は、その意味において、語源・語史の研究と深くかかわりあうものを持っている。

たとえば、「お茶うけ」という語がある。お茶を飲むときに食べる菓子――茶菓子を指して用いられているが、「茶請け」「茶受け」などの文字によって、その語源は漠然と想像されていることが多いであろう。しかし、多分これは一宛字である。都会に住む人たちにとって、現在、食事は朝・昼・晩の三回と決まっており、お茶を飲むということは、もっと大切な意味を持っていた。耕耘機や自家用車によって機動力の大幅に増加した現在では、農家の事情も多少は変化しているかもしれないが、少くとも少し前までは、早朝野良に出て、終日をそこでの労働に過すことを生活の基本形態とした農村では、朝・夕の二回の食事の外に、朝食前に一回、朝食から夕食までの間に、昼食に当るものを含めて三回、夕食後一回と、少くとも計五回のお茶を飲むことになっていた。これを、朝茶・四つ茶・小昼・八つ茶・晩茶と呼んだり、ハシマ(間食)・コバサマ(小間食)・コヂュウハン(小昼飯)――それぞれが、上のどれを指すかは、地方によって異る――等々と呼んだりした。激しい労働に耐えるためのものであるから、いずれも簡単な食事に相当するもので、お茶とともに、必ず腹の足しになる物を摂ることになる。この事情を、柳田国男は次のように述べている。

茶は農民の最も愛用したものと見えて、ハシマ・コバサマ・コヂウハンのことを、御茶と呼んで居る地方も甚だ多く、食事と食事との間の時間を、ヒトコマンチャなど丶薩摩では謂つて居り、単にチャドキといへば午後三時もしくは午前十時頃を意味して居た。茶とはいふけれども必ず固形物を伴なひ、それも漬物の塩気ぐらゐでは、働く人々は承知しなかつた。オケヂャもしくはウケヂャといふ食物は、日本海側では越後や出雲、太平洋側では

紀州の熊野、備中あたりにも分布して居る。或は炒米と甘藷とを合せ炊き、又は豆飯であつたりするが、兎に角にどこでも味附の飯のことをさう謂つて居る。斯ういふ一種の食物が発明せられ又弘く行はれたのである。早天の所謂お茶の子を除いて、其他の間食は皆御茶と謂つて居る。東京でも職人には必ずこの御茶が給与せられる。それが更に拡張して簡単なる客招びをも、御茶と謂つて居る処は方々にある。東日本では主として仏事の小宴が御茶だが、九州では誕生婚姻の如き、吉事にも人をこの御茶に招いて居る。(4)

すなわち、お茶には、もと必ず豆・炒米・梅干の類が添えられており、それを茶の中に浮けて(=浮かべて)飲んだのである。今でもそうしている所はある。こうして、茶に浮けて食べるものだから、これを「お茶浮け」と呼んだものと思われる。そう考えられるならば、右の文中に言うウケヂャは、もと「浮け茶」すなわち具(ぐ)を浮べた茶を意味し、やがて、それをいっしょに炊き込んだかたちの飯をも、そう呼んだものであろう。お茶の際の副食物には、甘藷や団子や餅も用いられるようになり、茶に浮けることなど、とうていできないものになってしまったけれども、それらを「お茶浮け」の名で呼ぶことは引続き行われ、そして現在のように茶菓子一般を指すことになってしまった。

「お茶うけ」が「お茶受け」などと書かれ、その語源がわからなくなってしまったのは、一つには、もと下二段活用した他動詞「浮く」が現代語ではあまり一般的でなくなったためでもあるが、しかし、より根本的には、そもそも、こうした、農村における「お茶」の習俗、特にその際茶に物を浮かべて飲んだことが、一般に忘れられてしまったことによる。しかも、その内容は変じまた失われながら、ことばだけは残って、今なお、あるいは間食を「お八つ」と言い、またあるいは、簡単にできることを「朝食(あさめし)前(のお茶の子)」などと言う。「茶の子」は、もと「茶うけ」と同じく、茶に浮かす具を言った語であるが、転じて朝食前のいわゆる朝茶(特に焼餅)、あるいは朝食を言うようになった。そこから、これを極めて手軽なことの比喩に用いはじめたのであるが、一方、京都・大阪では、現在でも、法事の際の配り物や香奠返しを「茶の子」と言っている。法事の際に客に出す簡単な食事を、正式の食事に対して「お茶」

と謙称し、そのお茶に添えて出す菓子の意味で「茶の子」と称したのである。しかし、「茶の子」と言えば、菓子類よりはむしろ陶器や風呂敷が多くなった現在では、もはや誰も、そのもとの意味を知ってこの語を用いてはいない。

右のような語の場合、これを単に言語の問題として考察する限りにおいては、ついにその語源を明らかにすることはできないであろう。方言の語彙が直接の示唆になっているのは事実であり、また、ウケを「浮け」と解することは国語史的知識によるけれども、しかしその根柢にあって、このような解釈を可能ならしめるものは、農村の習俗という、言語学外的な事実に関する知識である。逆に言えば、そのような文化史的事実による決め手がなくては、この語源説は、成立の可能性についての保証を得にくいであろう。

ひとり方言に関聯づけ得る場合に、限らない。このような保証が比較的得やすいという意味において、語源研究がまず実効を挙げ得るのは、新しい事物の発生や伝来に伴ってなされた命名に関して、その命名の時代や動機などが、周辺の文化史的事実からある程度限定して考え得る場合である。したがってまた、こういう文化史的語源説というべきものは、一般的に言って、その発生の時代の新しい語ほど、周辺を固める材料が豊富に得やすく、確実度が高くなる。中世以後に移入された外来語の場合などは、その著しい例で、ことにそれが新来の「物の名」である場合に、これまでも最も多く、確実度の高い語源説が発表されて来ているのは、理由のないことではない。ただし、むろんこの場合にも、一筋縄に行かぬものがあるのは当然で、オットセイは、もとアイヌ語 onnew を膃肭と音訳した獣の臍(ほぞ)が中国で強精剤とされ、本草書などに膃肭臍の名で記載されていたものを移入して、やがてこの海獣自体の呼び名にしてしまったものであることは、よく知られている。外来語の移入には、そういう誤解がつきものである。セビロという語のごときは、civil clothes の転じたものであるという、以前からの説に対して、ロンドンの高級服店街 Savile Row に基くとの説が出されたが、セビロという語は既に一八七〇年刊の古川正雄『ちゑの環』に見えているのに、その頃まだ Savile Row は仕立屋の街ではなかったという文化史的事実によって、その可能性もまた否定されることになっ

て、今なお帰着するところを知らない。(5) 案外、あるいはこの語は、外来語ではなくて、大幅の布地でゆったり作ったsack coatを「背広」と呼んだのだ(『大言海』)というのが実情なのかもしれない。いずれにせよ、この場合もまた、そもそも外来語か否かということを決定することと、その語源をどう解釈するかということは、互いに循環せざるを得ないことになる。したがって、ある一つの語をとって、これを外来語だと確定すること自体が、すでにその「語源」を説いたことになるのである。その際、もちろん、それが日本語の体系の中に組入れられた事情は、原語の意味用法をも考慮して、十分の説明が施されなければならない。漢語の仏語の由来を、そのもとになった梵語にまで遡って説くことは必要であろう。しかし、進んでさらに、その借用された原語の本来の語源を明らかにしなければ語源を説いたことにならないと言うのは、――すなわち、食品としてのサンドイッチの語源を、sandやwichという語の語源にまで遡って求めようとするのは、単に過大な要求であるというばかりでなく、むしろ、ここに言う「語源」というものの考え方からすれば、的外れであると言うことができる。

外国語からの借用の場合を代表的なものとするが、また、右のような文化史的語源説明は、たとえば女房詞、武士詞、遊女詞あるいは職業上の専門語などの、位相による特殊語についても、施し得る場合が多い。やはり、一般語彙からの転用であるものが多く、そして何よりも、その命名の背景になっている時代的事実を比較的明らかに知り得るからである。しかしながら、要するにこの種の語源論は、純粋に言語学的ではない、という点を否定することはできない。その性質上、とりあげられる語は名詞が大きな部分を占め、考証は、その名詞の指す「もの」自体の内容に関することに多く費される。したがって、事情は、各語ごとにそれぞれ個別的に異っており、その処理に統一的な方法を用いることができないのである。言語を、体系として把えることを目指し、個々の語をも語彙体系中のものとして関係的に考えようとする今の言語学の行き方からすれば、これは、ことに言語学的ではない。より言語学的な語源論と言うべきものが、なお、この外に存在すべきはずのものであり、そして、むしろそれが語源論の中心をなすべきも

のであろうと思われる。

三　日本語の語源研究、その意義

言語学的に語源を考える方法は、まず、その語の属している言語について客観的に認められている構成法に則って、問題の語の構成を明らかにし、つぎに、その各構成要素の形式と意義とを、可能なかぎり遡って究明することである。周知のごとく、古い文献に恵まれて、所属する諸言語間の系統的関係が確立しており、それに基く比較研究の方法が模範的に適用し得る印欧諸語においては、こうした方法による語源研究に十分の成果を期待することができる。すなわち、その結論は、相当な客観性を持つと認めてよいものが得られることになる。具体的に言えば、まず、正しい比較の方法によって、問題の語と同語根(cognate)の関係にある語を、同系統語の中に見出し、これを、さらにその祖形にまで遡る、という手順がとられるのである。たとえば、英語の fire について言うと、これはまず、古代英語の fȳr から来ている。この fȳr は、古スカンジナビア語の fȳrr、古代サクソン語・古代高地ドイツ語などの fiur、また、現代ドイツ語の Feuer などとも関係づけ得る語で、ギリシャ語の pūr や、ウンブリア語の pir、アルメニア語の hur なども、これと cognate であるが、これらの基くところのものとして、印欧語の *pewōr, *pūwer が考えられる。その語根は peu で、これには、元来「浄める」の意義があったという。だとすれば、その語源は、もと火を清浄なものとした思考法にまで遡って、説くことができることになろう。この最後の解釈には問題があるにしても、少くとも右のような語根の設定までは、客観性をもって明らかにすることができるとされている。

しかるに、こうした方法をそのまま日本語の語源研究に適用しようとした場合、われわれのたちまち逢着する困難が、いくつかある。それを、泉井久之助は、三項にまとめて大略次のように述べている。[6] すなわち、

一、この言語は、その内部においてもその音韻史が十分に明瞭ではない。(中略)従って日本語と他の言語との比較または対照を試みて日本語の古音を扱うとき、その各語の音形態は、著しい動揺をまぬかれないのである。いわゆる上代母音の一部についてそこに二種の区別があったことはおおむね明らかになっている。(中略)(コレガ)窮極的な日本語の語原研究の遂行にはきわめて大きい意義をもつことは否定できない。しかしそれは区別それ自体の存在が明らかにされたのであって、区別された一々の母音の具体的な音価は十分な明瞭さと各研究者の一致の下に客観性をもって確立されたわけではない。

二、語の構成様式(造語法の原則)がいまだ明らかではない。たとえば「切ル」は「切ラ、切リ、切ル……」の活用形を示すがゆえに、その語幹(語根?)は *kir- とすべきであろうか。反対に「来ル」の「く」(来)は「コ、キ、ク……」の活用のゆえをもって、その語幹(語根?)を単に *k-、あるいは不確定の母音(V_x)を伴なって *kV_x- とすべきであろうか。(中略)構成形式が不明なところに「語原」はない。これらの形態法上の問題は、日本語の内部からだけで解決のつく問題ではない。その解決は同系の他の言語――それも能うかぎり多くの――の存在とそれらとの体系的な比較の遂行と、その成果の確定を前提としている。しかし日本語にはそうした言語がない。日本語も朝鮮語も厳密には系統上、依然として孤立の言語である。

三、一貫して細部にわたる体系的な比較に堪える同系の言語、または諸言語があれば、音韻の面では規則的な音韻対応の関係を詳細に設定して、史前に遡る音韻史を設定することができる、同時にまた、語の構成様式を史前に遡って推定し、延いて史後のそれを通時的に分析し、その遷移のあとを明らかにすることができる。日本語の史的研究はこうして客観性を獲得し、語原研究はこうして恣意性を払拭することができる。しかし日本語にはこうした条件が欠けている。(下略)

結論は、要するに右の第三に述べられているようなところに落着くのであって、こうした条件に欠けている日本語

における語源研究は、ついに大きな成果を期待し得ない、ということにならざるを得ない。たしかに、これまでに行われて来た語源論には、こうした条件の不備に便乗したかたちで、かなり恣意的な結論を導き出している場合も少くはなかった。これを救うべき方法は極めてはっきりしている。右に言うように、「一貫して細部にわたる体系的な比較に堪える同系の言語、または諸言語」が得られれば、ことはすむ。しかし、問題は、このように語の構成様式も客観的に明らかでなく、音韻史の設定も不十分で、したがって、「語根」の立てかたも一定しないような言語(日本語)について、そういう同系統の言語が、(よし存在するとしても)確かに設定できるだろうか、ということである。同系統語が見つからないから、比較研究ができず、したがって語形成や語根の究明も進まない、と同時にまた、語形成や語根の究明が進まないから同系統の言語の設定が、はかどらない。――これでは全くの堂々巡りであるが、こういう悪循環にあまり拘泥していては、事態は進展しないであろう。本格的な語源探究は、日本語については、所詮無理なのだ、と言って投出してしまう前に、われわれは、なお、何らかの突破口をこの悪循環の中に見出すための努力を重ねるべきである。

一つの道は、その困難を承知の上で、日本語と同系統の言語と言い得るようなものを、北方に、あるいは南方に、執拗に求めつづけることである。現に、その努力は絶えずつづけられている。ただ現状では、たとえば朝鮮語の中に日本語のある語と関係づけ得るような語を見出した場合、そこに認められる共通性が、果して両者が同系統であることによって生じたものであるのか、あるいは単なる借用関係によるものであるのか、という点について、――裏づけとして挙げられるべき音韻対応例が不足ないし不安定なこともあって――、決定しかねる場合が少くない。そして、もしそれが朝鮮語からの借用語であるならば、前述したごとく(三六二頁)それはそれで一つの語源説明になっていると考えられる。しかし、仮りにそれが同系統であることを示す現象であるとするならば、単にその語の朝鮮語における形態と意義とを説いただけでは、それと cognate の関係にある(とする)日本語の単語の語源の説明としては、極め

て不十分であろう。両者が共通に基いている語根の成立の事情と、それの日本語への、そして同時に朝鮮語への適用の事情とが、当然説明されなければならない。そうしなければ、ここに言う意味での語源を説いたことにはならないであろう。

右のような同系語の発見に努力し、また期待しつつ、しかしまた一方においては、必ずしもそれをまたないで、日本語における語源研究は、日本語内部の材料を活用して、可能なかぎり進めておかなければならない。それが、やがて同系統語の設定にも役立つことは当然であって、右に述べたような堂々巡りを避けるためには、むしろ、ある程度の独自性をもってその探究を進めることが、結局は有意義な結果を生むであろうと思われる。もちろん、こうした方法による語源探究は、豊富な材料に恵まれ、比較言語学的方法を十分に活用し得る印欧語の語源研究に比して、著しく不利な条件を負わされていることを、覚悟してかからなければならない。そのためには、この場合の語源というものの考え方に、多少右などとは違った立場を、はじめからとる必要があると思われる。印欧語の場合、その目標とするところは、文献的に証明される歴史時代の限界をも超えた、原型の再構であり、その存在の客観性が学問的に証明可能な、語の本来のかたちである。それに対して、いま、われわれの遡及可能なものは、せいぜいが文献時代を上限とする範囲に止まらざるを得ず、したがって、そこに認証されるものは、右の場合の原型に比べれば、すでに、かなり後次の段階のものかもしれない。すなわち、それは、すでに「本来のかたち」に対して変形の加えられたものである可能性が強いことになる。

ところで、ここに、「語の本来のかたちとして客観的に証明されるもの」というのは、一体何であろうか。たとえば「語根」というものがある。分解をそれ以上にすすめ得ない、単語の基体をなす最小の意義的単位であり、意義および形のうえで類似した一類の語に共通する要素として、理論的に設定されたものである。「理論的に設定された」ということは、それが、歴史的な観点に立って分析・抽出された、一種の抽象的存在であるということである。こう

いう要素(形態素)が、まずはじめに独立に創造されて実在し、それを基幹として次々に、さらに複雑な構造や意義を持つ語が、ある決った手続きを踏んで構成されて行ったということでは、決してない。ありようは、かつて人々が、既存のある語をモデルにして、これと意義的にも形態的にも関聯ある語を類推的に形成して行った、その結果として生れ来った一類の語をとって、これにできるかぎり客観的な観点からの分析を加えて、抽出・設定したものに外ならない。すなわち、ここに、語を本来の構造において明らかにするというのは、言い換えれば、遡れるかぎり過去に遡った時点において、語を類推によって新しく形成した際の、人々の造語意識を、その時代に即して、現代から忠実になぞろうとすることである。ところで、これこそまず最初に創造された語である、などと決めてかかれるものは、およそ存在しないのだから、したがって、右の造語意識というのは、要するに、その造語者が類推の材料とした既存の語(群)に対して加えた主観的な分析意識の反映と考えざるを得ない。だとすれば、われわれの認識が到達し得たと考える本来の語構造なるものの背後に、実はこの語の、さらに本来的な構造が存在した、という可能性は、十分に予想される。比較言語学の方法を尽くして設定された「語根」が、「より本来の語根」とは別のものである可能性をも、誰も否定することはできない。いかに資料を駆使し、いかに遡って考えてみても、われわれが真に客観的な本来の語構造だと称し得るものを見出すことはできないし、これこそ間違いなくこの語の本来の語源であると見なし得るものを、ただ一つに決定することは、われわれにとっては不可能なのである。右のような事態は、語源探究に際して、常に予想されるところのものである。いわば、それは、語源研究の負うている宿命とも言うべきものであろう。

語は、その構成に関する意識が、その時代々々の言語主体において生きていたればこそ、生産的でもあり得たのであるし、また、そうして生産(造語)されて来た語類が備わっていればこそ、われわれは、これを材料にして、その語源を探究することができるのである。こうした意味での語源解釈は、したがって、いつの時代にも、人々によって新たに加えられている。言語を理解・習得して脳裡に貯蔵し、それぞれの場に応じて使用することと、このこととは、ほ

とんど一体であると言ってもよいであろう。個々の語に対する自分なりの理解に基いて、人々はその言語生活を営んでいる。その中の一つの場合――その語の本来の構成からすれば明らかに誤解ではあるが、しかし、それなりに一往のこじつけ的解釈が成り立っている場合が、いわゆる民衆語源と呼ばれるものである。「呼ばひ」を「夜這ひ」と解釈するのも、「目だうな」(「だうな」は「だくな」の変化した形で、無駄に費すことを意味する接尾語。もと、見るも無駄な、の意から、見苦しいことを言う)を、メンダウナと発音することも手伝って、「馬道な」あるいは「面倒な」と理解したり、「勝事(しょうし)」(大変な事)に「笑止」の字を宛てたりするのも、本質的には共通の現象であって、いずれも、本来の語の使用が稀になって、その意味が忘れられたり語形(発音)が変化したりしたものを、当代の言語意識から納得できるように、新しく解釈し直したものである。この場合は、本来の、いわば学者語源とも称すべきものが客観的に判明している(とされている)から、こういう主観的解釈は、民衆語源だの語源俗解だのと貶められる。けれども、もと、意地を張り通すさまを言ったと思われる「意地らし」という語が、

サアサア嚊(かか)様切つていの。未練にござんす母様と、泣ぬ顔するいぢらしさ(『妹背山婦女庭訓』三)

のように用いられて、むしろ、幼い者が一かど意地を通そうとするさまを、「けなげで、あわれである」と感じる話者の気持を、もっぱら表わすようになると、もはや「意地」とのつながりは薄れて、「いじらしい」は、もともとこういう賞賛的な意味を表わす語であったごとくに用いられて、誰もあやしまない。しかし、語源的意味が忘れられて、やや偏した意味が新たに付与されたという点では、先のものと事情は同じなのである。一般に意味や語形の変化が、しばしばこういう語源の忘却と表裏をなしていることは、広く認められるところであろう。民衆語源は、たしかに、その本来のかたちから見れば、主観的な、誤った語源解釈である。しかし、たとえば、「はきもの」を言うアシタという語は、『和名抄』に、

屐　阿師太　一名足下　(装束部)

とあるのを見ると、もと、足の下にはくものの意でア(足)シタ(下)と命名した、と考えられる。同様な構成になる語は、『和名抄』だけでも、アカガリ(皹=足坼裂)・アグラ(胡床=足座)・アゴエ(距=足蹴)・アブミ(鐙=足踏)など多数に見える。しかるに、このような、足を意味するアという語の用法が一般的でなくなってしまうと、この語は、アシ+タという構成を持つものと分析(異分析)され、タに駄を宛てて、「足駄」と表記されるようになる。この表記は鎌倉末期成立の『古老口実伝』に見えている。[7] これをモデルにして、さらに、下駄・雪駄(席駄)などの漢語めかした造語がなされた(共に、『日葡辞書』には見えている)ものと思われる。この場合、ア・シタをアシ・タと理解したことは、まさに民衆語源的解釈であるが、しかし、そういう生きた語源解釈が加えられたからこそ、新しい造語が可能になったのである。少くとも、下駄や雪駄の語源は、この足駄という、民衆語源に基く形なしに説くことができないし、また、これらの語の語源は、直接には、一往ここまで遡って説けばそれでよいのである。

語源を考えるにあたって、あとうかぎりその語の出発点に近く立戻って、そのそもそもの由来をたずねようとすることには、もちろん十分の意味がある。文献を渉猟し、比較言語学の方法に従い、音韻や意義や語構成上の法則を厳密に適用して、客観的に認められる、ただ一つの正しい語源を発見しようと努力するのは、すべて、そうした志向に基いている。ただこの際、常に忘れてならないのは、言うまでもなく、言語は人間の営為の産物である、ということである。先にも述べたように、単語成立の事情としてわれわれが追求を試みているものは、結局は、その語を造語した人(々)の造語意識であるということになる。ただし、それを今日において正確に跡づけることは、むろん、なかなかに困難であって、方法としては、残された語群の形態や意義にそれが反映していると見て、これらを材料に、綜合的に推定を加えるほかはない。「法則」というかたちに纏められたものは、すなわち、そのようにして推定される過去の人々の意識のはたらきを、結果的なかたちで示すものに外ならない。個々の語源を追求する場合に、そのような法則の適用の厳密さを期するのは、われわれの主観による独断的な推定を過去の人々の造語意識に加えることを、回避

せんがためである。したがってまた、こうした厳密な操作を経て発見された語源は、(自然)科学的であることを志向した一九世紀言語学的立場からすれば、まさに客観性を持つものであり、理論的に唯一絶対のものとしたいところであろう。しかし、事実において、語源説は必ずしも一つにはしぼれない。探究の不十分さがそういう結果を生むというのではなくて、たとえばヴァンドリエスが交叉語源(L'etymologie croissé)と呼んだもののように、むしろ一語に二つの語源の存在を認めるべきものもあり得る[8]のが、本当なのである。造語が人々の自由な意識に基いてなされることを考えれば、これは当然予想されることで、それを不可とするのでは、語源研究をもって語に表われたetymon(真理)の探究であるとした、ストア学派の考え方と、あまり逕庭がないことになってしまう。

民衆語源的解釈は、当然、はるかな古代から存在し、それによって造語が次々に行われてきたに違いないのである。現在知り得るかぎりの材料を用いて最も遡って考えられた語源が、すでにそうしたものでないとは、誰も保証できない。しかし、繰り返し言って来たように、それはそれで語源説としての価値を持っている。要は、印欧諸語の場合のごとくに、比較言語学的方法を駆使して推定される語源も、日本語の場合のごとくに内部的材料のみによって推定される語源も、その手続きにぬかりがないかぎり、価値において絶対的に隔絶するものではなくて、段階的な差異に応ずるものとして、それぞれに相対的な価値を担い得るものである、ということである。むろん、一次的語源を求める立場からすれば、この段階的差異の持つ意味は大きいとも言える。したがって、将来、印欧語的語源を探究する段階へ迫ることをも期待しつつ、それへの準備の意味をもこめて、さし当り、日本語の内部からする語源研究を可能なかぎり進めることの意義を、われわれは、正しく認識しておくべきであると思われる。

四　日本語の語根をめぐって

右のような立場に立って日本語の語源探究を試みる場合には、使用する方法や術語に関しても、印欧語について用いられるものに対して、ある程度の変更ないしは限定を加えることの必要な場合も、生じてくるであろう。たとえば、先に引いた泉井の文章の二においてもとりあげられている、「語根」の問題がある。大野晋は、語根とは、「語を分析して、これ以上分析できないという所まで至ったもの」とする立場に立って、ウタタ・ウタガフ・ウタフなどからウタという語根を想定すると同時にまた、

アサ（朝）、アシタ（朝）、アシタ（明日）、アス（明日）、アサテ（明後日）は、日が明けたときという共通の意味を持つが、その共通部分は asa, asita, asu, asate のうちの as- である。従ってこれらの語の語根は、as- と考えるべきである。[9] と述べた。これに対して村山七郎は、

語形が類似し、意味もつながっているいくつかのことばの、ちがう部分をとり去って共通部分を語根とする機械的なやり方では、原始日本語にさかのぼってその姿をきわめることはとうていできるものではありません。[10]

と批判している。たしかに、右のようにして析出された共通部分を、すべて直ちに「語根」の名をもって呼ぶことは、問題であろう。泉井も慎重に、「語幹（語根？）」としているように、これはむしろ語幹（ステム）の段階にあるものかもしれない。しかし、その中から、真に語根の名に値するものを設定するには、比較言語学的方法の適用をまたねばならず、そのための確かな同系語が決めにくいのが現状であるとすれば、さし当り日本語内部での問題として取扱う上で、こういうものに「語基」の名を宛てておいてはいかがであろうか。

膠着語という名で呼ばれることがあるように、日本語は、基（ベース）に対して接辞の類が、ある独立性を保ちつつ接着する言語である（接尾語のあるものが、副助詞や準体助詞のように「単語」と見なされているものと、性格において共通したりするのも、その表われである）。すなわち、接辞がつくことによって、基の部分が形態（アクセントを含む）や意義において影響ないし変形を蒙る度合が、極めて軽い（「海人処女らがうなげる領布も照る・かに」「中流家庭の奥様・

ふう」のように、接尾語が、語よりはむしろ句に接着すると言えるのも、この場合の基「照る」や「奥様」が、本来の意味・機能を保持したままで、接尾語「か」や「ふう」をとり得ているからである。外国語にもこうした例が稀になくはないが、日本語の場合は、これが極めて一般的な接尾語の性格である)。そこで、接辞の類は、比較的とりはずしが自由である。逆に、接着しようと思えば、かなり自由に、二重、三重にこれを重ねて行くことができることを意味する。ということは、古代日本語において、より顕著であったようで、こうした方法によって、二次、三次の派生が行われてきたに相違ない。したがって、その結果としての派生語を取上げて、これから接辞要素をとりはずした場合、基として残る部分が、果して語根的な性格のものと言うべきか、あるいはなお語幹的なものと言うべきかは、限られた資料の範囲内では、はなはだ決定しにくい。もし後者であるならば、さらに分析を加えて接辞的要素をとりはずすべきであるが、そうして得られたものが、真に究極的な語根であるかどうかは、やはり決めにくい。ただ間違いなく言えることは、そのそれぞれが、派生に際しての基としてはたらいた段階が、かつて、たしかにあったということである。問題を、その段階において取上げるかぎりでは、これらをすべて等しく語基の名で呼んでおいて、一向に差支えがないはずである。(大野のように、こういうものを「語根」と呼ぶことも――そのように概念規定さえしておけば――できるわけであるが、いわゆる root との混同を避けるためには、むしろ「語基」の名称が適当であろう)。望ましいのは、その、段階への考慮である。そしてまた、将来において同系語が確定した場合には、この中から真に「語根」と称し得るものが設定されるべきであるが、前述のように、そのような要素は、日本語の場合、きわめてとり出しやすい、透明なかたちでこれらの中に保存されているはずであるから、これらを右のように語基の名で一括して処理しておくことが、将来の比較研究にとっても、障害になろうとは思えない。

さて、先にも一言したごとく、このような語基あるいは語根というのは、造語者の意識を説明せんがために、理論的に設定したものである。したがって、たとえば、仮りにこれを、*kir-, *as- のような子音終りの形式として想定す

ることも可能なわけで、これは決して、かつてこのような形態が、独立に、日本語に実在したことを意味しないことは、前述の通りである。実情は、ある一つの語がまずモデルとなり、これに類推して、意義的に類縁関係にある新しい語を、語末に多少の変更を加えることによって造語する、という操作が重ねられて来た結果である。それを、右のように、子音終りの語基に種々の母音が接着して派生語が生れた、というように説明したものであって、一般の接尾語による派生を外的派生と呼ぶならば、それに対して、こういう母音の交替による派生を、内的派生と呼ぶこともできよう。外的派生の接尾語が語基に対してかなり透明であるように、これらの内的派生語においても、交替する母音は、語基として設定される部分に対して比較的に透明度を保っているから、こういう説明法も可能になるのであるが、しかし、派生語が互いに意義的な類縁性を保つためには、それらに接着する母音相互の間には、ある関聯性がなくてはならなかった。すなわち、有坂秀世のいう「母音交替の法則[11]」にかなう範囲のものでなくてはならなかった。そして、そのような母音というのは、自然、語基部の母音と母音調和をなすものであった。ということは、この末尾母音を含む全体をもって一結合単位として、むしろこれを「語根」と認めるのを適当とする余地もまた、十分にあり得るわけである。有坂が、いわゆる被覆形と露出形との、こうした関係を説いて、「恐らくはもとの同一の母音が、語の中程にあるか或は末尾にあるかによつて、その発達を異にした結果であらうと思はれる[12]」と言っているのは、形態を中心にした言い方になっているが、右のような現象を、「根母音の交替」(Ablaut)に比して考えているのであって、すなわち、母音を含めたものをもって語根と見ているのである。

有坂は、『語根』の概念について」という論文で、こうも言っている。

之を要するに、所謂「根母音の変化」といふ観念は、我々の言語意識の中に確かに実在するものである。従つて、単に「若干の語に語源的に相互関係ありと認むる時、その諸語に共通せる要素を分析抽出する。」といふ風な学問的抽象作業だけでは、語の真実の分析は行はれ難いと思ふ。即ち、今少し深く現実の言語意識そのものについ

て観察することが必要であらう。[13]（傍点は有坂自身）

もっともな主張であるけれども、問題は、「現実の言語意識そのもの」を、――ことに過去のそれを、いかにして観察するか、ということにある。結局は、主として文献に記載された語を材料にして、そこに反映していると考えられる、当時の言語意識を探るほかはなく、また、学問的抽象作業は、現にそのことを目的として行われているはずであって、現実の言語意識と無関係に単に理論的に行われる「学問上の分析」などというものは、本来、無意味なものであろう。有坂自身は、ついに、日本語の語根について明確な見解を示すことなしに終ったが、語根を確定することの困難さの原因として、

一定の時代に於ける話手聴手の言語意識と、それより以前の或時代に於ける話手聴手の言語意識とが、論者に於て混同され易いこと。例へば、AB二つの語から共通の「語根」Wを抽出するとしても、それが何時の世の言語意識で共通と感ぜられてゐたものなのか、学者は深く考へることを怠つてゐる場合が多い。又、実際問題として、それを何時代と決定することは、余程困難な場合も多いのである。[14]

と述べているのは、傾聴すべき意見であろう。たしかに、われわれは、ことに古代に遡って語源を探究する際、当面処理し得るかぎりの材料によって問題にし得る語源が、果してどの段階にあるものかという位置づけを、忘れがちである。それによる語源解釈の限界を忘れて、ともすれば、これを究極的なものと考えがちである。たとえば、カミ(神)と上(カミ)とは、これが、それぞれ kamï, kami と発音され、表記し分けられている段階では、直接に、同一語源とは言いにくい。すなわち、神という語は上という語に由来する、などとは言えない。しかし、一段遡って *kam- という語基の設定が可能であるとすれば、その段階において、この両語が語源的に結びつき得る可能性は、なお残されている。*kam- という語基の設定は、将来の問題であるとしても、――そしてまた、それが可能になった場合にも、それに直ちに母音 ï と i とが接着してこの両語が成立した、などという単純な説明では、もちろん済まないものだけ

れども——、両語が語源的に無関係であるということは、現在のところ、少くとも断言はできないはずである。

いわゆる特殊仮名遣の事実が、日本語の語源探究上われわれに教えてくれるところのものは、多大である。これに基く知識を用いずには日本語の語源研究は一歩も進め得ない、と言っても過言でないし、また、将来における同系統語の発見および比較研究のためにも、これは不可欠のものである。ただしかし、この、数種類の母音に（限って？）二種類の区別があったという、現在知られている事実をはじめとして、われわれが文献によって知り得る最も古い日本語の状態は、すでに奈良時代をあまり遡らない時代のそれである、という事実だけは、はっきり記憶しておく必要があるだろう。つまり、それは、すでにかなりの程度の文化を持った人々の言語である、ということである。語源を探究するという以上は、たとえそれが純言語学的研究であろうと、結局は、その語の表わす事象の文化史的なありかたや、その語を生んだ人々の思考法などを問題にすることになる。それが、最も古く遡っても、すでに右に言うような新しい段階を反映する語を材料にしてしか行えない事情にある——もっとも、その中のたとえば基礎語彙的なものには、多くのより古い時代の語も残存しているはずであるが、それを選別することはなかなかにむつかしい、——ということを、われわれは常に記憶しておかなければならないはずである。

しかるに、実際に語源を考えるという段になると、考察の材料には右の程度のものを用いながら、ヨーロッパ言語学において言う語根の概念などに惹かれるためであろうか、ひどく原始的な思考法を、その背後に想定してしまう場合が少くない。たとえばツナグ（繋ぐ）というような動詞の意義と構造とを分析するに当って、これは、名詞ツナ（綱）に動詞構成の接尾語グを接して、元来は、「綱をもってある動作をする」という意味を表わしたものである、とする考えが一般にある。この分析の仕方には、こうした具体性を持った表現法がまずあった、——さらに言えば、そういう具体的思考法しか古代の人々にはできなかったはずだ、という考え方が、無意識のうちに前提になっているようである。しかるに、われわれが利用できる最古の資料では、

みつみつし　久米の子らが　粟生には　かみら一茎　そねがもと　そねめ都那藝て　撃ちてしやまむ（『古事記』中巻）

射ゆししを都那遇川辺の若草の若くありきと吾が思はなくに（『日本書紀』斉明天皇）

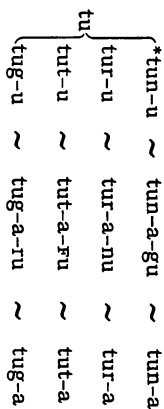
のように、ツナグという語は、むしろ、「たどる」「あとづける」というような、抽象性をもった意味に用いられている。思いあわされるのは、ツラヌ（連ぬ）という語である。これも、右と同様の構成法で考えれば、名詞ツラ（列、また蔓・弦）に接尾語ヌを接して、連繋する意味を表わしたものということになるであろうが、それはむしろ順序が逆である。ツラヌは、動詞ツル（連続・連繋する。釣る・吊るも同義）に接尾語ヌが接して直接に構成された可能性が強い。名詞ツラは、同じくこの動詞ツルから派生した母音交替形（turu—tura）で、「連繋した状態にあるもの」を意味したのである。同様な関係を動詞との間に考えられる名詞には、

ツク（築く）——ツカ（塚＝土を築いたもの）　ムル（群る）——ムラ（村＝家の群がった所）　ヲス（治す）——ヲサ（長＝治める者）　ナフ（綯ふ）——ナハ（縄＝綯って作ったもの）　ハル（晴る）——ハラ（原＝広く視界の開ける所）

等々、多数の例が認められる。ツラヌ—ツルと構成上同じ様式を持つと考えられるものには、また、ツタフ（伝ふ）がある。「思はしき言都氏やらず」（『万葉』三九六二）、「神代より言ひ伝来らく」（『万葉』八九四）のように用いられて「（ことばを）つないで行く」意味を表わす動詞ツツに、接尾語フの接したもので、「木伝ふ」のように自動詞的にも、「伝える」の意で他動詞的にも用いられる。ツタ（蔦）は、この動詞から右と同様にして派生した名詞で、長く連続するもの、つる草を意味した。いま一つ、ツガフという動詞がある。ツグ（次ぐ・継ぐ、切れ目のないようにつづける）に接尾語フが接したもので、「伝承する」意をも表わすが、「一対になる」の意を表わす「番ふ」は、最小の連続単位として、まず二つのものが一組になることを言ったのである。樹木名ツガ（樛木）は、針葉が密に対生することからの命名

で、やはりツグからの派生名詞であろう。「ツガの木のいやツギツギに」という『万葉集』の表現は、単なる同音の繰り返しといったものではなくて、どんどんと垂直に伸びて枝葉の密生するこの樹の形象をもって、内容的に形容したものと思わなくてはならない。動詞ツグから派生した動詞には、いま一つツガルがあって、やはり、「つながる」または「つなげる」の意を表わし、その名詞形「つがり」は、鎖を意味した(『和名抄』、「仁徳紀・古訓」)。

以上のような例を見てくると、先のツナグもまた、もと「連繋する」の意の動詞*ツヌが存在し、これに、ユラク(揺)・サヤグ・マグ(覓)のごとくに動詞などに接して動詞を構成する接尾語グ(ク)が接して派生されたもの、と考えることができそうである。ツナは、むしろ、このツヌからの派生名詞で、「長く連繋するもの」を意味したのであった。『万葉集』一〇四六に見える「石綱」は、三〇六七の一云「石葛」と同じもので、ツナは、この場合、ツタと同一のものを指している。こうした推定が可能だとすると、以上一連の語は、

tu {
*tun-u ～ tun-a-gu ～ tun-a
tur-u ～ tur-a-nu ～ tur-a
tut-u ～ tut-a-fu ～ tut-a
tug-u ～ tug-a-ru ～ tug-a
}

という関係にあるわけで、tun-, tur-, tut-, tug- などを語基として、それらがu母音をとって動詞形が生れ、それに接尾語グ・ヌ・フ・ルが接して新たな派生動詞が造語される一方、また末尾母音にaをとって、それぞれの名詞形が構成されたことになる。ところが、右の接尾語のうちグ・ヌ・ルは、動詞形ツグ・ツヌ・ツルに既に含まれているものであった。ツナグ・ツラヌ・ツガル・ツタフ(フは奈良時代になお生産的な接尾語である)などは、だから、実は二次的な派生形なので、ツヌ・ツル・ツツ・ツグが、既に一次的な派生形であったと考えることができる。そうすれば、自然、これらから、tu- という語基が抽出されることになろう。そしてまた、ここに挙げた諸語の意味は、以上にもし

ばしば相互に言い換えが可能であったように、共通するところがはなはだ多く、その中核的な意義は、「相互に連繋し、一続きになる」ということであった。語基 tu- は、まさに、この意義に対応するものであったとすることができる。

ところが、このような抽象的性格の形態素を、古代語において設定することをもって、全くの学問的抽象作業であるとする見方がある。それは、ツナグを「綱ぐ」、ウナグを「項ぐ」、カタグを「肩ぐ」、クビルを「首る」などと分析すべきだとするのと共通の考え方で、古代人の思考法はなお非常に具体的な段階に止まっており、分析や抽象には耐えないものであった、とする予断を無意識のうちに働かせているからである。たしかに、名詞ツナの意味には具体性があるが、それはむしろ動詞*ツヌの意義が具体的に限定されたものであって、より抽象的な意義を持つ動詞ツヌが先在し、動詞ツナグもまた、名詞ツナを介さずして、むしろこのツヌから直接に派生されたと考えられること、先に見た通りである。そのような一種の抽象的な認識のしかたを、古代の人々は、すでに十分に備えていたと思うべきである。古代人の思考法を、いわゆる未開人の思考法に類推して考えることが、よく行われる。そして、「未開人」の思考といえば、たとえばレヴィ＝ブリュル（『未開社会の思惟』）のごとく、「文明人」のそれと対立して、前論理や融即律に左右される原始的なものとする風が、なお一般的である。しかし、この偏見を打破して、レヴィ＝ストロースは、彼等の思考法を、たとえばこのように説明している。

呪術的思考や儀礼が厳格で緻密なのは、科学的現象の存在様式としての因果性の真実を無意識に把握していることのあらわれであり、したがって、因果性を認識してそれを尊重するより前に、包括的にそれに感づき、かつそれを演技しているのではないだろうか。(15)

もろもろの事象の間に、このような仕方で「因果性の真実」を無意識に把握し、あるいは感づく能力を備えた人々が、その言語に、たとえばこれを、なお未分化的にではあるが、一つの概念のかたちで表現したとしても、不思議ではない。類縁の語群の共通要素として抽出される「語根」なるものは、たとえば、こういうものとして考え得るであ

ろう。まして、われわれの考察の対象とする言語は、さらに意識化の進んだ時代のものであるはずである。そこに語根あるいは語基を設定しようとする作業は、決して学問上の抽象作業ではないし、また、そうあってはならないものであることは言うまでもない。語源研究は、結局は、その語を生み、そして使用してきた人々の、思考法や言語意識を跡づけることに究極の目的と意義とを持つものであることを、銘記すべきであろう。

（1） すでに新村出が、「音韻変化の諸原因」(『新村出全集 一』筑摩書房、一九七一年)において、音位転倒の問題を扱った際に、このことに注意している。なお、音位転倒の例として挙げられるものは、ここに掲げたものの外にもかなりあるが、たとえばツブレ→ツルベの場合は、「釣る瓶」という解釈(柳田国男『蝸牛考』参照)が、マナイタ(俎板)→ナマイタ、トサカ(肉冠)→トカサには、それぞれ「生」や「笠」への聯想が、ボクリ(木履)→コッポリの場合は、擬音語的な結びつけが、それぞれ働いているというように、いずれも純粋な音韻上の問題以外の要素が関与していると考えられるものばかりである。詳しくは、阪倉篤義「『あらたし』から『あたらし』へ」(大阪大学国文学研究室刊『語文』三二輯、一九七四年、一二頁以下)参照。

（2） 柳田国男『毎日の言葉』(『定本 柳田国男集 一九』筑摩書房、一九六三年)、亀井孝「懺悔考・女郎考」(『国語学』三六輯、一九五九年)・「女郎考追記」(同、三九輯、一九五九年)参照。

（3） たとえば、『新村出全集 四』筑摩書房、一九七一年、所収の諸論文などを参照。

（4） 柳田国男『木綿以前の事』(『定本 柳田国男集 一四』筑摩書房、一九六二年、六〇頁)。ここに引用する文章のほか、『村と学童』(同上、二一巻、一九六二年、三三六頁以下)その他にも、柳田は、このことを説いている。

（5） 楳垣実『猫も杓子も』関書院、一九六〇年、二三九頁以下。『船来語・古典語典』東峰出版、一九六二年、二二一頁以下。

（6） 『新村出全集 四』(前掲)解説。

（7） 「一 宝殿。如二月水所、并足駄類等一。不レ用二不浄処々一者也。此外採用无レ憚云々。」(『古老口実伝』―『新校群書類従 一』二七一頁)。

（8） 堀井令以知「交叉語源について」(『立命館文学』一五四号、一九五八年)。

(9) 大野晋『日本語をさかのぼる』岩波書店、一九七四年、一三九頁。
(10) 村山七郎『国語学の限界』弘文堂、一九七五年、二七五頁。
(11) 有坂秀世『国語音韻史の研究 増補新版』三省堂、一九五七年、三頁以下。
(12) 有坂秀世、前掲書、六八頁。
(13) 有坂秀世、前掲書、六四三頁以下。
(14) 有坂秀世、前掲書、六四八頁。
(15) レヴィ＝ストロース、大橋保夫訳『野生の思考』みすず書房、一九七六年、一五頁。

9 地名の起源

鏡味明克

一　地名と古語

1　古語資料としての地名

2　地名と先史日本語

二　地名と漢字

三　地名の時代型と地域型

四　アイヌ語地名と日本語地名

1　アイヌ語地名

2　北海道の日本語地名

3　アイヌ語地名と擬似アイヌ語地名
——北海道以外のアイヌ語地名とその判別——

五　これからの地名研究

日本の地名は日本語の他の面にくらべて、とくにその書き方、読み方のむずかしいものが多い。しかも、地名は各時代にさまざまのあて字によって改変されてきたので、その起源どおりの意味を表わしていないものが多い。難解であるだけに地名の語源解釈にはなぞときのおもしろさがある。邪馬台国の所在もなぞなら、富士山や江戸のような著名な地名の語源も定説がない。地名語源考がさまざまに現われるのも道理である。しかし、地名の語源解釈が真の起源に到達するためには、地名の言語的、地理的、歴史的性格を確実に把握することが必要であろう。このような観点から、地名の起源の問題を考えてみようと思う。

一　地名と古語

1　古語資料としての地名

地名は最古の日本語資料である。文字の伝来当初には、もっぱら漢文が書かれたが、漢文で書けない固有名詞が国語のまま漢字音を借りて万葉がな式に写されたから、地名は人名とともに、もっとも古くから書かれてきた日本語である。隅田八幡神社に伝わる鏡の銘(五〇三年ごろか)にみえる「意柴沙加(おしさか)」や、元興寺の露盤の銘(五九六年)にみえる「斯帰斯麻(しきしま)」などが古い例である。国外の資料では「倭(わ)」の名称は『山海経』や『漢書地理志』にすでに見える。この倭は朝鮮半島に考える見方もある。倭の内部の地名ではまず『後漢書』に「奴(な)」が「東夷倭奴国王」という形で出てくる。日本の地名を数多くしるした最初のものは『三国志』の『魏志倭人伝』で、邪馬台、末盧、投馬、伊都な

ど、三〇にのぼる地名がでてくる。『倭人伝』にみられる日本語はすべて人名、地名、官名であって、このように固有名詞は外国資料の中からもかなり掘り起し活用することができる。

古文献に見える地名例から、とくに万葉がな書きの例は確実であるが、古語が抽出され、一般語彙が補えることがある。数例を挙げる。

○きすむ(蔵)　播磨風土記に「伎須美野。右、伎須美野ト号クルハ…『縫ヘル衣ヲ櫃ノ底ニ蔵メルガ如シ』トマウシキ。故、伎須美野ト曰フ。」(賀毛郡)とある説話の中の「蔵」と、音仮名地名の「伎須美」とを対照させれば、動詞「きすむ」を取り出すことができる。これは万葉集巻三の「伎須売流玉」(四一二)の例と共に、「きすむ」という動詞の上代における存在を確めるのに役立っている。

けなし(毛無)　万葉集巻八に「毛無乃岳」(一四六六)とあり「けなしのをか」と訓むべきものである。現今の方言で「毛が少ない。毛が無い」(京都府北部、鳥取県)とは、地味が悪くて樹木が少ない、育たないの意である。万葉集の「毛無」を語源を示す正訓表記と見なすならば、このことばは上代にまで遡るものと考えられる。(井手至「古代の地名と上代語[1]」)

○此の島の隠愛妻から南毗都麻と言われたという記事(『播磨風土記』)によって、神ナビのナビで動詞隠ブが推定される。(吉田金彦『日本語語源学の方法[2]』)

地名は古語を補うだけではない。地名の文字表記から、古代の文学修辞を補い知ることができる場合もあるようである。「飛ぶ鳥の」という枕詞がアスカに用いられたことから、「飛鳥明日香」(『万葉集』七八)の書き方が、「飛鳥飛鳥壮」(『万葉集』三七九一)のように地名そのものにも「飛鳥」の字をあてるようになったり、「春の日の霞む」という連想から「春日を　春日の山」(『万葉集』三七二)とあてるようになった、枕詞の文字の地名への転化は作品の中に見えるが、「長谷」「日下」などの古代から見える用字もまた、同じ事情から成立したものらしい。「日下」をクサカと読

むことは古くからの慣用で、『古事記』の序にも「姓に於きて日下を玖沙訶と謂ひ、……本の随に改めず」とある。「日の下のくさか」という枕詞の修辞があったと考えられているが、[3] 草香乃山(『万葉集』一四二八)、草香江(『万葉集』五七五)などの地名の用字から、日ざしの下の草いきれのにおいによる修辞があったのではないかと思われる。「長谷」は、長谷寺のある初瀬の地形がたしかに長い谷である。『万葉集』にも、泊瀬の文字が多い中に、「こもりくの長谷小国」(三三一二)と「長谷」の字をあてた例がすでに見える。「ながたにのはつせ」「ひのしたのくさか」とよまれた枕詞の例は作品に残っていないが、おそらくかような修辞が秘められているであろうこれらの文字を見ると、失われた文学の片鱗を見る思いがする。

古代地名の見られる資料としては、『古事記』、『日本書紀』、各国の古風土記、平安時代の『和名類聚抄』国郡部に見られる郡郷名、『延喜式神名帳』の神社名などが主なものである。

2 地名と先史日本語

ヨーロッパ諸国では民族史の研究、とくに民族の移動の跡づけに地名がよく利用されており、また、地名の土地に対する定着性から、古代語の言語基層を示すものとしての地名の資料的価値が重視されている。たとえば、イリュリア語などのように、固有名詞の形でしか知られていない言語において、地名研究は言語研究に大きな役割を果してきた。[4] 日本においてはそのような役割ははたして期待できるであろうか。もちろん、日本の場合はヨーロッパよりも困難な事情が多い。隣接諸言語との系統関係が十分明らかにされていないため、かなり対照比較にとどまらざるを得ないこと、地方方言による文献が少なく、各時代における日本語の全国的な変遷資料に乏しいことなどはかなり決定的に不利な条件である。しかしまた、そのような困難性があるからこそ、かえって日本語の他の要素にくらべて、全国的に分布し、永続性の強い地名を資料とした日本語の歴史の研究の補完が必要とされる。

外国語との比較の場合、まず第一に、日本語固有の語義によるものか、古代の外国語につながる先史日本語にさかのぼるものかの判別が必要である。従来の外国語起源説には、変遷の脈絡や古代の語形を十分論証したものが少なく、言語学的手続きを踏まない、思いつきの地名考説も少なくない。日本語の古代語研究者と外国語の古代語研究者との十分な提携がなければ、先史日本語の地名の外国語による解釈の進展は困難であろうが、記紀などの古代資料に外国地名として、あるいは民族名としてみえる名称で、その民族の足跡と関連の深い地域に今日も多くみられる地名については、今後研究が十分行われる価値がある。そのような若干の例をあげてみよう。

まず朝鮮語との関連が考えられるものに、フリ・フル・フレがある。古代朝鮮語 pör(城邑)に由来するといわれる。[5]『日本書紀』(継体紀)の古訓に新羅の「村邑」をフレと読む。この地名型は現在も北九州から豊後水道周辺付近までに多く分布し、朝鮮半島とのつながりが濃く感ぜられる。壱岐では「〜触」という字名が大半を占めるが、〜南触、〜東触、〜仲触、〜本村触など、集落の中の方角を意味する語に転じているものが過半を占める。次にムレは『日本書紀』(神功紀)の古訓に百済の山名を辟支山、古沙山などと読む。また『播磨風土記』にも「稲牟礼丘」「城牟礼山」などの例がある。普通名詞としても「今城なる小武例が上に雲だにも著くし立たば」と『日本書紀』(斉明紀)に使われている。このムレの地名型は九州一円から山口県に多く、大分県の栂牟礼山などの山名をはじめ、集落名も数多くある。牟婁、諸などとも同源かとも言われる。

次に南方海洋民族語との関連が考えられるものにアヅミ・アドがある。長野県の南北安曇郡、滋賀県高島郡安曇川町など。『古事記』(上)に、「阿曇の連等は其の綿津見の神の子、宇都志日金拆の命の子孫なり」とある。すなわち海神である「わたつみの神」の子孫と表現しており、海洋民族の移住者とみることができる。能登半島の高浜町安津見でも海神を祭るという。愛知県の渥美半島もこのアヅミ系であろう。アコ・アゴは志摩の阿胡の浦(『万葉集』三六一〇)や三宅島の阿古、あこや貝の名の出たといわれる愛知県知多半島の阿古屋浦など、海岸に多い地名である。鏡味完二

によれば、[6] アコ・アゴの地名の分布する海岸は海女や海士の漁撈の行われる所や頭上運搬の行われる土地で、海洋民族の残した地名と考えられるという。これらの海洋民族のもたらした地名の言語が何であったかは今後の大きな課題である。アイヌ語系の地名については、第四章で述べる。

山名の語尾の「〜岳」は高くけわしい山にいうことが多い。その全国分布を見ると、図1[7]のように全国にわたるが、中国、四国に分布のはっきりした空白がある。中国、四国にも高い山がないのではなく、そうした山の多くは、中国山地では、大山、氷ノ山、人形仙のように「山」の呉音読みのセンで呼ばれている。四国山地では堂ケ森、瓶ケ森などとモリで呼ばれる山が多い。図2のように、〜センは中国の岳の空白をみたす形で分布している。一方、〜森は四国の岳の空白をみたすとともに東北地方に濃い分布があり、また奄美から沖縄の諸島に、波照間森(西表島)そのほかのいくつかの森で表わす山名がある。このような東西の分在は「森」を山そのものにいう用法が「岳」の流行よりもよほど古いものであること、そのモリも都中心にかつてひろがった周圏分布であることを示している。一方センは中国地方に集中し、他地域にほとんど分在しないから、比較的新しい用法であろうが、岳はより新しく、このすでにセン・モリの定着した中国、四国では古型が抵抗し、その他の全国に使用がひろがったが、東北では古い地名型の抵抗が強くなく、共存する形でモリとタケの使用が保たれているという考えが一応できる。一方、九州とくに西部、また、図には描かれていないが薩南・沖縄諸島も、「岳」がきわめて多く、また高山に限らないことから、あるいは九州等のタケと近畿中心のタケとは別系なのかという疑問も生ずる。その見方からは中国地方のタケの空白は異種の東西のタケの境界をなすということになる。山を意味するモリというこの古語残存分布はよほど古い用法をとどめるものと思われ、前出の朝鮮語のムレや九州などに多いムレの分布などとの関連も含めて、今後の検討が必要であろう。南奥、南紀などに「〜森山」が多いことは、山名語尾としてのモリが、都により近い地域ほど崩れていった段階を示すものといえよう。

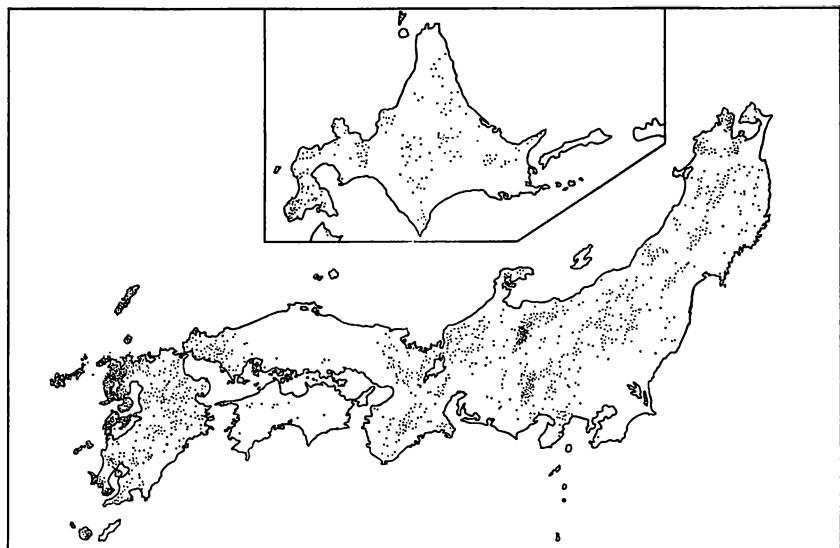



図 1　山名の語尾　～岳　（鏡味完二『日本地名学・地図篇』による）

● ～森　○ ～森山, ～森岳
～森の密集地域
～森山,～森岳の密集地域
～セン
～センの密集地域

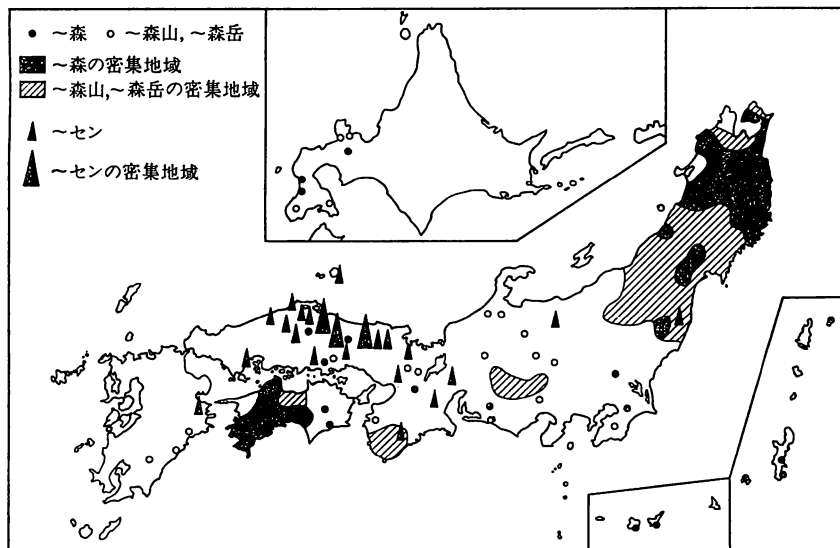



図 2　山名の語尾　～森, ～セン　（鏡味完二『日本地名学・地図篇』から訂補編集）

二 地名と漢字

日本語の地名を解釈することのむずかしさは、日本語の系統のむずかしさもさることながら、長年の漢字による変形の歴史によって、現在使われている文字でもって解釈することが困難、危険である場合が多いことによる。簡単な意味の地名でも、「南」を「皆実」とか「北」を「喜多」などと好字に書きかえることが多いものである。すなわち、語源の論議は、命名当時の語形にもどした上でなければ行えないのである。このようなあて字は、奈良時代以来、むしろ国策として行われてきたのであった。「畿内七道諸国の郡郷名に好字を著け」(『続日本紀』和銅六年五月甲子)、「凡ソ諸国部内ノ郡里等ノ名、並二字ヲ用ヒ、必ズ嘉名ヲ取レ」(『延喜式』民部式)など、好字・嘉名をつけよということは、原義を無視しても、よい字をあて字せよということであり、二字を用いよとは、短い地名も長い地名もむりに二字に整えて、中国大陸の地名が原則として二字であるのにならおうとするものであった。したがって、たとえば『出雲風土記』(意宇郡)に「拝志郷本字林」と改名の経過を報告しているように、「林」の語義に関係なく、「拝」「志」などの好字を与え、かつ二字化したのであった。また、国名に「武蔵」「和泉」のように、字と音の照応しないものが多いのは、二字化によってあるいは、もと牟邪志(『古事記』)などと書いていたのを武蔵(し)のように文字を減らし、あるいは(和)泉のように、文字を加えて二字にそろえるような操作が行われたためである。紀伊、摂津なども、紀の国とか、津の国というように、紀、津の一字地名が二字化された国名である。また、先述の枕詞と地名の文字の転換のように、連想によって文字が置換することがある。類義の別字に移る場合もあり、山陰本線に下府、徳島本線に府中の駅があるのは、ともに国府の読み方によっているのである。悪い連想を忌み避ける結果、文字が反対語にかわることまである。飛騨の吉城郡はもと荒城郡、東京葛飾区の亀有はもと亀無である。『播磨風土記』(神前郡)では死野を生野に改め

たという記事がある。同じ訓の字でも、音のちがう文字であて字されたものを音読してしまうと、まったく本来の語義のわからない地名になってしまう。六甲山は付近に武庫川や武庫荘の地名があるように「むこの山」であったのに、六甲の字をあて、それを音読する結果ロッコーになってしまった。代馬岳も元来、残雪の時期に現われる岩肌が苗代を耕す黒い馬に見たてられていたのに、白馬とあて字し、ハクバと音読する結果、黒馬転じて白馬となってしまった。山麓に白馬村、白馬駅なども最近できている。

今日の使用字が、二字地名なら二字でまとまった原義を表わしていないで、もともと意味の結びつきのない文字が合体している場合がよくある。複数の地名を合して、それぞれの地名の部分字をよせあつめ、あたかも一つのまとまった意味を持った一地名のようによそおった地名で、合成地名とよばれる。合併などに際し、従来の地名がそれぞれ存続を主張する場合によくこの現象が起こる。とくに明治以後に、郡の統廃合で全国の多くの郡名がこの形の変化をこうむっている。たとえば香川県の大川郡は「大きい川」の意ではなく、大内郡と寒川郡の合併名で、旧郡名が一字ずつ合せられたものである。東京都で大森区と蒲田区を合せて大田区と称したのもこれと同じである。とくにこのように大田、大川と訓読みされた場合は「大」と「田」や「川」が意味的に結びついている印象を与え、「大きい田」「大きい川」という語義を呼びおこしやすい。このような新しい地名はまだ合併の経過がよく知られているのであまり問題視されないが、歴史を経たものや、他地域であまり知られていない小地名でこのような改変が行われているものは、合成されたままの字面で語源を考える誤りを引きおこしやすい。とくに見かけ上類似の地名型が存在する場合は、誤ってその部類の中で論ぜられてしまう危険がある。信州には更科、仁科、埴科、蓼科など科を語尾とする地名が多いが、この地名型に同じ信州の豊科町を入れるわけにはいかない。これは鳥羽、吉野、新田、成相の四村を合せて、語頭の一音ずつを合成した現代の創作地名だからである。伊那谷にある駒ヶ根市赤穂も播州赤穂と同じに論じるわけにいかない。信州の方は赤須と上穂の二村の合成だからである。このような字面の偶然の一致を見誤らないため

には、各地名について、できるだけ変遷のあとをさかのぼり、今日の文字で一貫して使われてきた地名かどうかを見定めなければ、語源研究を開始することはできない。このように見てくると、地名にあてられた漢字というものはきわめてあてにならないということがわかる。したがって、文字の合成や置換がなかったことさえ確かめられれば、文字よりも発音の方が原形をより保っている可能性が大きいので、その文字の表わしている音に、より注目すべきである。もちろん、現代の発音ではなく、命名当時の発音にさかのぼって、各時代の音韻史にてらし、その時代の語形を復元した形を得た上で語源が考えられなければならないであろう。

文字があてにならないといっても、中には原義を伝える漢字が、その字の発音とはかけはなれながらも用いられている場合が各地の小地名にはあり、そのような文字は語源研究上注目すべきである。いわば発音と字義とが二本立てになっているのである。たとえば、水路のある低地に立地する集落は、九州ではよくツルとよばれ、大分県あたりではよく「鶴」や「釣」をあて字しているが、宮崎県では「水流（つる）」と書くことが多く、この文字は原義をよく伝えるものである。中国山地では高原の平地にナルをつけた地名が多いが、これを鏡ケ成（かがみがなる）、藤ケ鳴（ふじがなる）などと書くのはあて字で、岡山県苫田・真庭郡境の大平（おおなる）峠、兵庫県浜坂町の池ケ平（いけがなる）などの「平（なる）」は原義を伝えている。

三　地名の時代型と地域型

地名の語源解を誤らないためには、変遷資料を確実にたどることがまず先決である。しかし、史書や文学作品に各時代にわたって現われ、変遷のあとがたどれる地名はそう多くない。そのような手がかりがない場合には、多くの類似の地名にあたって、どのような型に属する地名かを知ることが必要である。地名の多くは、その時代の為政者の一定の政策、または民衆の生活の中で名づけられるものであり、地名には必ず命名の時代と地域によって類型がある。

その時代、地域の特性を反映して、平凡に名づけられる地名がもっとも多く、天下に例のない珍名がつけられることはむしろ例外的だからである。地名型の抽出ができるだけ多くの小地名から行われれば、個々の地名を多くの材料の中で検討し、多くの可能性としての地名型の中で、もっともその個々の地名の立地条件にかなったものを適用して解釈することが可能となる。

時代型の把握とは、たとえば古代豪族の名とか、帰化人の居住地名としての秦、高麗、呉などとか、「〜部」などの古代職業集落や御名代の地名、庄(荘)、保、田代、別府などの荘園関係の地名とか、土居、堀之内、根小屋などの武士集落の名とか、江戸時代の城下町関係の職人町の地名とか、新田開発の地名とか、各時代の特徴的なものをつかむことである。

地域型では局地的に特徴のあるものをつかむのであるが、とくに各地各様の国字形成や、ある文字の地方的な国訓の使用に注目したい。九州・沖縄の原、谷、鎌倉の谷など読みの地域性も注目される。ごく普通の文字が方言によって読まれている例は沖縄の城、南風、東、西、さきの宮崎県の水流などである。海岸や河岸の砂丘にあてられた洲処の意とされるスカ地名は全国的に須賀の用字が多いが、房総半島では横渚、白渚など「渚」の字がよく見られる。山口県では集落名の語尾を「〜浴」というものが多い。これは「浴」の字義ではなく、谷間に立地する集落にあてたもので、旁の「谷」に意味がある。

谷間の土地を云う。エキは防長の方言にて、浴の字を以てするは当字なり。（御園生翁甫『防長地名淵鑑』[8]）

三水を使うように湿地が多いようだが、中国地方全般に多い、同じく谷間の集落に多い峪の字とも関連すると思う。青森・岩手県には母衣と書かれる地名が多いが褒と合せて一字でも書かれる。アイヌ語の「大」の意味につながるものを多く含むと思われるが、洞などの意に説く説もある。母衣内など語形全体がアイヌ語で解けるものはアイヌ語系であろう。ただし、金沢、松江などの城下町に見られる母衣町は文字通り武具の母衣を作る職人町である。福島・茨

城県あたりでは台地の端のような高所を「塙」の字にハナワという国訓を与えて読み、低湿地に「圷」という対語とその国字が使われる。曾根と書かれることの多い砂地や石地の微高地は仙台藩地域では「埣」と書かれている。なお、ソネは九州の北・西海岸から沖縄では暗礁や魚礁の意で使われる。

国字の例は地形語に多く、青森・秋田県で湿地にあてた「萢」、丹波高原に多い、文字通り山上の平地の「岼」、高知県の湿地の「汢」など、会意の構成である。峠という字も国字であるが、この国字の形成にも地域性があり、標準字として峠の文字がもっとも生き残った。全国的に〜トーゲの呼称に統一される傾向にあるが、「撓む」と同源のタワとその系統のタオ・トーの古形を残す中国地方には峠と区別して方言形に種々の字が図3のように見られる。本図は山口恵一郎編著『地図と地名』に「近畿中四国峠名分布図」(鏡味明克作図)として初出、このたびその後の調査を加えて増補し、全国図に拡大した。地形図(近年の地図はほとんど峠字に統一されていたりルビが少ないので、古い地形図を主に使用)から峠および峠下集落名でよみのわかるもののみとり出し、また各地の地名誌によって補った。若干現地調査でよみをたしかめた部分もある。タワ系の語が失われて峠名としては〜トーゲや、〜越などになった近畿以東や九州では、峠名でなく集落名として図3のように九州では主にタオが、近畿以東では主にタワが残る。立地はほとんど例外なく峠下であった。新潟県の白根市田尾だけは平地の水田地帯で文字通り田の尾か。埼玉県坂戸町の田和目は日高町田波目と隣接しており同源の双子地名か。千葉県鶴舞町田尾はタビだから採らない。すると東日本はすべてタオでなくタワである。なお、吐噶喇諸島の平坦地をいうタオと沖縄諸島の同じくトー(桃原など)は峠のタオ・トーとつながりがあるかもしれないので参考に図に含める。峠の語源説には従来、峠の神にぬさを手向けるタムケからの転という説(本居宣長など)とタワ越ェの転の説(柳田国男など)があった。手向説では「み越路の多武気に立ちて」(『万葉集』三七三〇)が例証とされ、山形県羽黒町に手向の集落名もあるが、「山の多和より御船を引越し」(『古事記』中)、「山の多乎理」(『万葉集』四一二二、四一六九)などの古例と図3にみえるようなタワ・タオ系の残存、そ

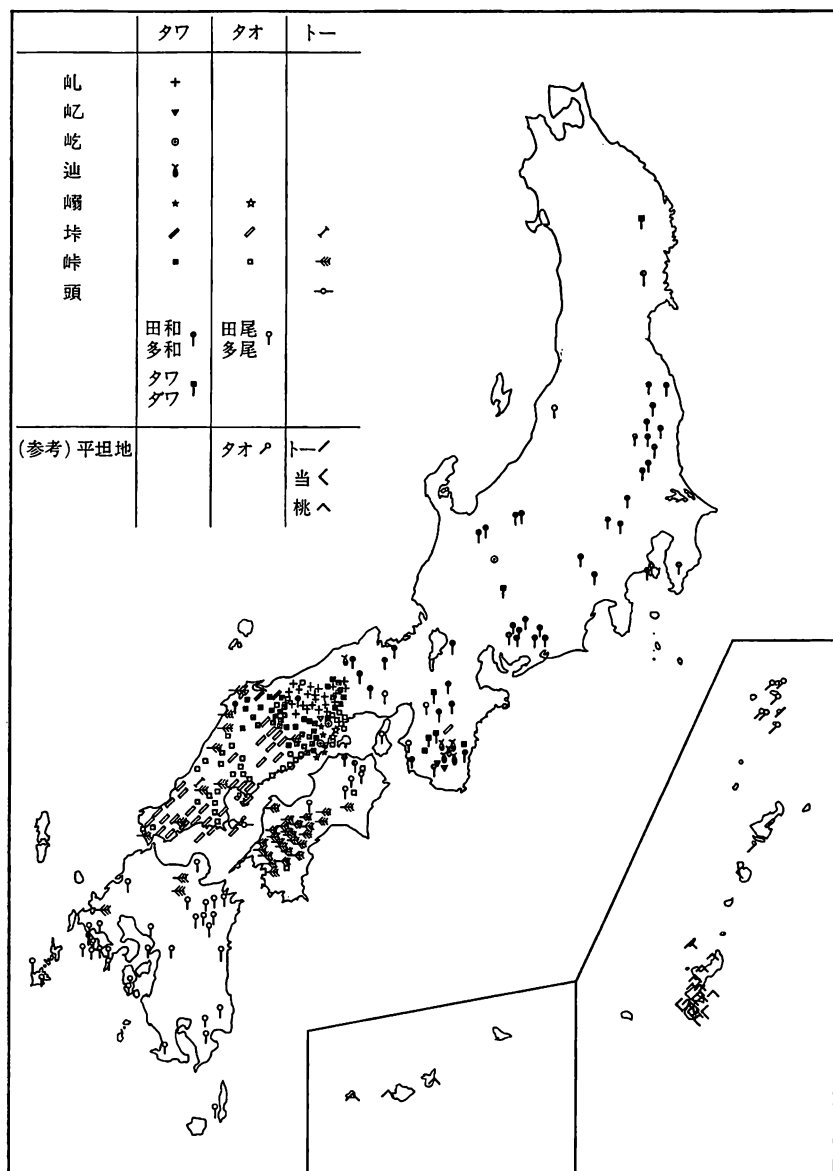



図 3　峠名(峠下集落を含む)とその読み方(〜峠[トーゲ]をのぞく)

の地域では「〜越」も多いことなどからタワ・ゴエの混交がタワ・タヲ→タウと音変化する過程で起ったとみる方がより妥当であろう。「たうげ」の語は比較的新しく、「堀河院百首」の「足柄の山のたうげ」が初出である。それ以前にタムケ→タウゲの音変化が起ったとすれば日向(ひむか)→日向(ひうが)の類の変化であるが、手向説では四国の峠を説明できない。なぜ「ゲ」が脱落したのか、ということになる。タワ→タウ→トーなら説明がつく。またタムケ→タウゲの中間過程の語形が得られないのに対してタワゴエの類は岡山市西大寺の小峠越、愛媛県の別子山村から高知県の大川村に越す大田尾越、高知県吾川村の峠越など数多く見え、兵庫県千種町の越乢のように「越」が上にきた例もある。タワ系と越が新古関係で重なり合ったことを示している。

「乢」字は図のように美作に多く、類字の𡵂、屹が岡山県と和歌山県に見える。「𡵂」字(エチ・アツ)は「山の曲」で、これがこの類のもとか。乢は𡵂の異体として、𡵂の通字圠も影響して用いられたものか。「屹」はけわしいの意だから傾斜のゆるい所を越える峠としては矛盾するが、屹の意味よりも𡵂の類字形の連想からの使用であろう。「辿」字は峠道を「たどる」連想からか、あるいはこれも単に「山」の字面から山道にあてたものかもしれない。中国西部の「垰」は「峠」の土偏による異体字である。垰、辿、𡵂などは中国のほか数は少ないが近畿にも見え、中国地方での作字とは断定できない。都からのある時期の流行字をよく受け入れ定着した地域とわずかにとどめる地域とがあるのかもしれない。しかしはっきり局地的なのは備前の「嵶」で、備前藩内での作字であろう。タワ・タオともにこの字をあてるが、元来はおそらく山偏に弱で傾斜の弱い所の意を類字形の連想であてたと思われるから、まずタオにあてられた文字ではなかろうか。この図に表わした以外にもトーと読む地名の中には「峠」のものをいくつか含むかもしれない。柳田は土佐山中の繁藤、肥後の人吉から日向に越える加久藤も峠であろうと言っている(9)。ほかに道、塔、堂等で峠名になっている〜ドー越(峠)などにはこの「峠」起源を含む可能性がある。しかし実際に峠の「道」を意味するもの、堂、塔によるものなども含むかもしれないので、ここでは分布図には加えていない。

四　アイヌ語地名と日本語地名

1　アイヌ語地名

北海道の地名の多くはアイヌ語起源である。アイヌ語地名の語源解釈もなかなかむずかしい。一口にアイヌ語といっても方言差がある。川を意味するナイとペッの使い分けは、北海道の南西部ではナイを小さい川に、ペッを普通に川の意に用いるが、樺太ではナイが普通の川でペッは小さい川、北海道の北東部でも普通はナイで、ペッは山中の支流にまれにのみつけるという。日本語とは異なるアイヌ語の命名心理も知らねばならない。

川は山に発して海に入るものであるが、アイヌはそれと反対に、川は海から上って山へ行く者と考えていた。地名のoman-pet(山奥へ行っている川)、sino-oman-pet(ずっと山奥へ行っている川)、rik-oma-pet(高い所に登っていく川)等はそういう考え方を示している。また我々が川の出発点と考えて「水源」「みなもと」と名づけているものをアイヌは川の帰着点と考えてpet-etokすなわち「川の行く先」或はpet-kitayすなわち「川の頭の先」と名づけている。また我々が川の合流する所を落合と名づけているのに対して、アイヌはpet-e-ukopiすなわち「川の別れて行く所」と名づけているのも同じ考え方に出たものである。(知里真志保『地名アイヌ語小辞典』[10])

また、アイヌ語地名に漢字を無理にあてはめたために、アイヌ語の原形がひどく破壊されているものが多いことも、アイヌ語地名の考察を困難にしている。アイヌ語地名が漢字によって日本語地名化する過程をここではとくにとりあげてみよう。漢字をあてて音を写す場合、古代では多く字音を用いたが、時代が下るほど音訓をまじえて仮借するようになった。まして北海道のような新しい時代の用字では訓仮借や音訓まじりのあて方が非常に多く、これが北海道

の地名を読みにくくした最大の原因である。札幌(一八七一年までは札縨)、釧路など音訓混用である。釧路は「釧」の字だけでもクシロで、古代に用いられた腕かざり。このような古語まで使用された。同じく古語の「地震」を用いた幸震(乾いた川の意。札内とあてるところも)などもある。このようなあて字は多く幕末から明治初年に役所仕事として行われたが、この種の趣味的な文字いじりがアイヌ語をも日本語をもそこなってきたのである。漢字をあてる場合、借音の常としてアイヌ語の原義は原則として無視されたし、さらにはアイヌ語に対する認識不足からアイヌ語形をその語構成を無視して切りはなしあて字をした場合が多く、この点がアイヌ語の原形にさかのぼることをはなはだ困難にしている原因の最たるものである。オタ・ノシケ(砂浜のまん中)→大楽毛、シ・ペッ(大川)→標津など。またアイヌ語の長い地名を日本地名式に二字で表わすことが多いが、その場合語形のごく一部を残し、もとの語形にあまり近いといえない借音借訓の字をあて、その文字に従って日本語読みをする結果が、オ・ペレペレ・ケプ(川尻がいくつにもさけている所)→帯広、シュマ・オマ・プ(岩崖のある所)→島松のような変貌ぶりである。羊蹄山のごときは、もと後方羊蹄山といった。この字は元来「斉明紀」にみえる蝦夷国(ここでは東北地方)の地名にあてた後方と羊蹄の古語「し」による後方羊蹄の用字を利用したもので、シリペシにこの字をあて、コウホウヨウテイと音読し、長いので上を略したのが羊蹄山である。したがって略称音読された羊蹄山はシリペシの末尾のシしか継承していないわけである。もっとも、『北海道地名誌』[11]によれば、シリペシはこの山の近辺の名で、元来の山名はマチネシリ(女山)といったらしいという。中には純日本語地名のような熟字があてられることもあり、語源を紛らわしくすることがはなはだしい。音更町千代田はチエオタ(吾々の食べる砂浜)からという[12]。省略の結果、語義の肝心の部分が切りとられてしまうこともある。稚内はヤム・ワッカナイで、ヤム(冷たい)を略したため、この地名の個性は失われたといえよう。

アイヌ語の地名は音訳されたものばかりではない。かなり日本語に翻訳もされていて、一見日本語地名のように見

えるものもある。注目すべきは同じ語源から音訳地名と翻訳地名が作られて近くに組になった地名が存することである。オタ・シ・ナイ(砂のある川)から砂川市の訳名があるが、隣接して、音訳した歌志内市がある。滝川市はソ・ラプチ・ペッ(滝の下る川)の翻訳で、音訳が空知である。深川市はオオホ・ナイ(水の深い川)で、音訳の大鳳川が同市を流れている。北見市の旧称野付牛(ヌプ・ウン・ケシ、野の端)を翻訳したのが隣接の端野町である。大沼公園もポロ・トー(大沼)を訳したものである。誤訳もあって、旭川市は市を流れる忠別川から名がとられたが、チュウ(波のたつ)ペッ(川)をチュプ(日・東)と誤って旭川の字をあてたといわれる。一部分を音訳し、一部分を翻訳したものもある。浦河はウララ・ペッで、ウララを音訳し、ペッを河と訳している。赤平市はフレ・ピラ(赤い崖)で、フレを訳し、ピラを音訳して平の字訓をあてたものである。層雲峡の大函、小函はもとアイヌ語で大峡谷、小峡谷といったところで、「もともと岩壁で囲まれた峡谷の一部を東北地方では「はこ」と呼んだところからあてはめた名」という。[13] そうとすれば翻訳にあたっては移住者の多かった東北方言も使われたことになる。

誤解を与えるもっとも紛らわしいあて字は崖のピラにあてた「平」であろう。豊平、平岸、赤平などほとんど例外なく「平」で書いているため、平坦地の意味にとられかねない。川にシを冠した場合はシペッ(士別、標津)のように本流、大きい川をいう。ところがこのシに「支」の字を使って音訳すると次のような矛盾が起ってくる。

このシ(本当の)という音の地名に支という字をあてると、それは本流ではなくて支流のように誤解されがちである。早来町の安平川に入る支流に支安平川というのがあり、湧別川にも支湧別川というのがあって、いずれも支流のように思われているが、アイヌ語ではこっちの方が本流であるという意味である。[14]

これなどもまさに漢字の与えた害というべきであろう。

2 北海道の日本語地名

前出の砂川などもアイヌ語を基盤とした日本語地名ともいえようが、今一つのアイヌ語をもとにした日本語地名として、アイヌ語の語形がたまたま日本語で悪い意味を連想するのをきらって改名した場合がある。千歳市は支笏湖と同じくもとシコツ（大きい窪地）で、「死骨」を連想するので縁起のよい新名に改めた。豊浦町はもとペッペッ（川を重ねて小さい川の集まり）で、最初弁辺と書かれたが、音がきらわれて改称した。同じペッペッに最初から佳字をあてた千歳線の美々駅は存続している。

純日本語地名で北海道らしい性格を示すのは、開拓にあたっての道路、街区などの計画線名が定着したものである。長沼町基線一号、東一線南一号などがそうである。丁目も帯広市西一二条南三四丁目など数十丁にわたるものがある。市街地、原野、屯田兵による兵村地名なども特徴的。京都の〜条にならって一八七一年に札幌で行われた北南〜条東西〜丁目の計画都市道路名は、その後各地の都市で採用されているが、京都との相違は市街の拡大にわたって数十条にわたるものもあることと、四条を多く、ヨジョウ・ヨンジョウと読むことである。また帯広のように東八条、西一六条など南北の通りに条をいう場合もある。

移住者の出身地の地名が移植されたことも開拓地を特色づけている。札幌市白石区の名は伊達白石支藩家臣団の入植による。広島町は広島県人の、新十津川町は奈良県十津川村からの入植という具合である。仁木町のように移住団体の長の人名をつけた名もある。

地理的に近い東北から移住した人が多いので、とくに早くから開拓された道南は東北との共通性がかなりある。湯の岱、千代ケ岱などの「岱」は東北、とくに秋田県北部に多い地名字である。船澗などの「澗」も青森県などと共通して多い。澗の字は元来は谷水の意だが、船着場をいう方言「ま」にあて字をしたものである。

以上のように、北海道では日本語地名も各種の特色ある型を形成している。比較的命名の時代の新しいものが多いだけに、命名の時代を反映した命名の起源をかなり知ることができる。

アイヌ語地名と目される地名型は東北地方にはかなり分布する。しかしその解釈を拡大して、アイヌの足跡の確証されない地域にアイヌ語地名解釈を及ぼすことは危険である。明治以来チェンバレン、バチェラーなどが全国の地名をアイヌ語で解釈して見せてから、その模倣が今日もあとを絶たない。たとえばバチェラーは近江をOmi太股と解釈し、淀川の水源が人体名称で表わされたものとした[15]が、近江は淡海(あはうみ)であり、オーミという現代の語形で考えることの不当はいうまでもない。ひところ定説のように言われた富士山をアイヌ語フチによって「火の山」と説く考えについては、早く金田一京助が「北奥地名考[16]」で、意味的にこじつけであるのみならず、発音上、

若し語原が、説者のいう如くアイヌ語の huchi であったならば、国語にクヂ(またはクジ)となっていた筈で、国語にハ行音でフジとなる為には、その語頭音は必ずやpかfでなければならない。それは上代の国語の音には[h]音がなく、外国の[h]音はこれが為にみな[k]音に取り込まれる例であったからである。現今のフジであるからとて、huchiをその語原に見立てたのは、国語の音韻史を無視した失考だった。

と述べている。同論文で、

内外の諸説の中にはアイヌ語を持ち出すまでも無いものが強いてアイヌ語で解かれていることもあり、と金田一は述べているが、近年の地名考説でもなお次のような誤りがめだつ。たとえば山本直文の『日本アイヌ地名考[17]』を見ると、神戸市は元来が「かうべ」(生田神社の神戸(かんべ)による)であるのにコー・ペッと現代音で解かれて「居住地の川」にされている。

前出の「北奥地名考」では、アイヌ語系と見るべき地名の範囲を限定し、東北とくに北奥に北海道と共通して地名例の多い別(べつ)、内(ない)、部(べ)、牛(うし)などがとり上げられている。ただし「べ」地名に八戸(はちのへ)、余戸(あまるべ)などの家・集落を意味する日本

語地名を混ぜないよう注意している。

湿地の nitat による地名は北海道にも各地にあるし、東北にも「仁田」等の地名が多く、従来アイヌ語で解かれることが多かった。一方、日本語でも各地の方言で湿地をニタ・ヌタといい、味噌あえをヌタというのも湿地同様どろどろした状態の語らしい。ニタは奈良時代にも見え、『出雲風土記』に沼田の郷を説明して乾飯をやわらかくどろどろに(爾多爾)して食べたから爾多郷といい、今は努多というと記している。また仁多郡の郡名について爾多志枳小国だから仁多といったとあり、湿地の形容を「にたし」と言ったらしい。鏡味完二はこのニタ・ヌタの分布図を作り、関東・東北と四国・九州に多く、大和を中心とする周圏分布を示すことから、東北のニタ地名はアイヌ語系ではなく日本語ではないかと論じた。[18] そして、ヌタが内周に、ニタが外周に分布することから、ニタが古く、ヌタが新しいと解釈している。その地図ではニイタ(仁井田・新井田)、沼田なども同系として含めて書かれているが、ニイタは新田と同語源のものがかなり含まれるかもしれない。逆に新田の中にも湿地のニタ起源のものも含まれるかもしれない。図上で一つだけ採った新田はむしろ湿地のニタであろう。図4では新の字を使ったニイタと、ヌマタは一応外して、ニタ・ヌタに語形をしぼり、あてた文字の相違にも注目して描いてみた。汢(高知県)、垈(山梨県)、似田(長崎県)などの局地的な文字づかいも見られる。同じく記入したように、九州には主に牟田と書くムタがニタとまじって分布し、同系の語であることを示す。とくに北九州でニタが少ないのはこのムタが密であるためである。番号で示した1は莵尾、2は双田野、3は饒藪、4は芭ノ坂である。たしかに畿内を中心に中央部が空白で、ニタが外周、ヌタが内周で、ニタの方がより古い周圏分布であろう。『風土記』沼田郷のニタが古く、改名してヌタという記述とも一致するか。ヌタと同系とされる野田は東北から九州まで広く分布する。近畿にも多い。北海道には八雲町野田生ぐらいで、分布はない。ノダはヌタと同系とすればヌタからの転の新しい語形であろうが、このノダの分布からすれば、たしかに津軽海峡でヌタ・ノダと、日本語系のニタとの限界を引くことも考えられる。しかし似内(東北)、似達内(北海道)のよ

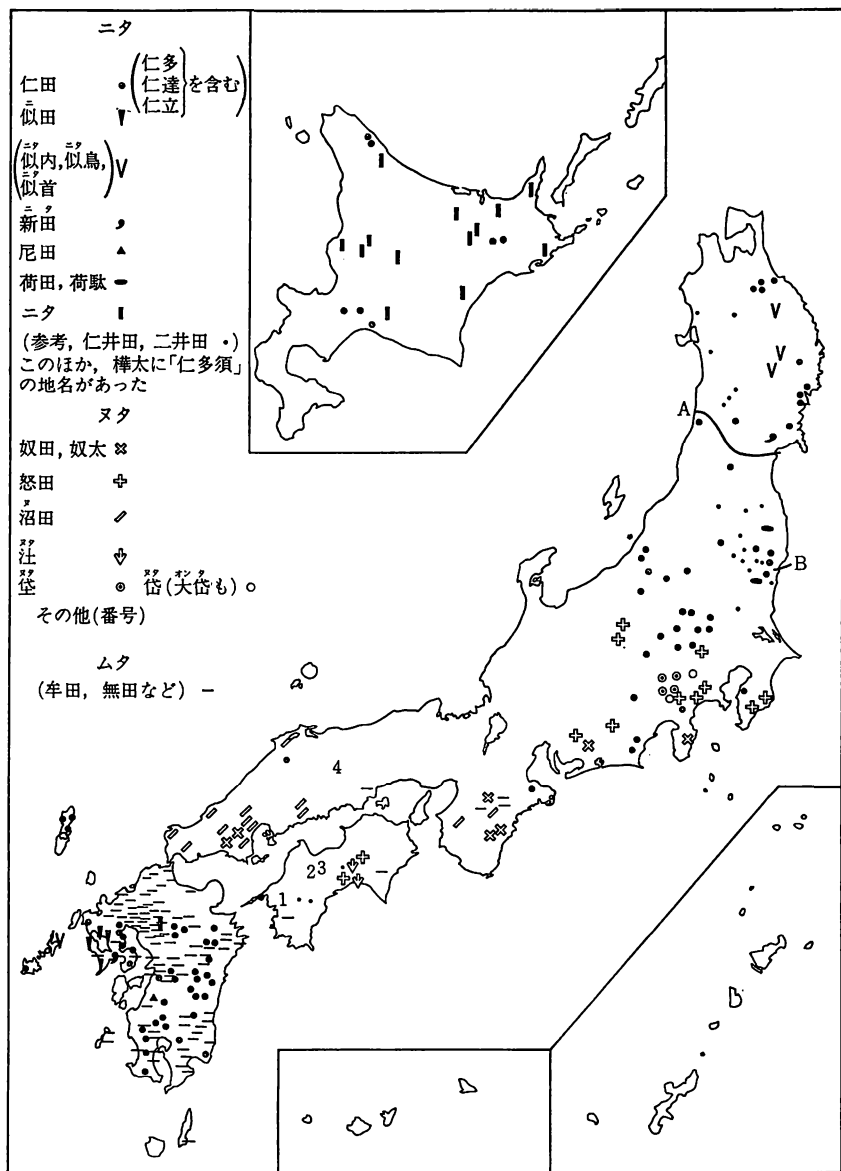



図 4　湿地地名ニタ，ヌタ，ムタ

うな共通性からは東北のニタはアイヌ語的である。東北地方のアイヌ語地名をくわしく踏査した山田秀三による、ナイ(川)地名の密な南限(A線)[19]の辺までのニタをアイヌ語系とみるのも一つの考え方である。また、B線はベツの南限とナイの粗な分布の南限にあたるが、ちょうどこの辺でニタもとぎれて関東平野の東部に見えないところから、この辺までをアイヌ語系ニタの南限と見る考えもありえよう。このような語形上も地域的にもアイヌ語、日本語両者の解釈が可能な地名型の区別はまことに困難である。しかし関東以西のニタ・ヌタのまじる分布は確実に日本語系である。

鏡味完二はまた北奥のナイ地名にも日本語系のものがまじっていることを指摘し、「内をナイとよむ院内、河内、庄内などの地名、そのほか「余納」からくると思われる米内がある」ことを指摘した[20]。東北のナイ地名であれば無条件にアイヌ語と考えられがちであったことに対する新しい再検討であった。この問題を改めて地名例を見ながら考えてみよう。院内、山内はたしかに寺内と同義に用いられるし、三内にも山内のあて字のものがあるかもしれない。庄内は庄園の中の意。河内の意のコーナイも考えられる。院、庄など音読語の関係で内をナイと音読するものはかなりありそうである。東北のナイの密集分布の中にもこの擬似アイヌ語地名とおぼしきものはとびとびに見える。ただしそれが一定の地域に集中はしないので、図4のナイの南限はこれでほぼ動かないと思われる。ナイの密集分布の中にも、山内、三内、院内などが十か所ほど見えている。それに米内の語源をもし余納(余荷、余内とも書く、余分の負担、課税)とすれば、大分県竹田市の米納などと同義のものとして、東北各地にかなり存在する米内、米内沢などが河川名のナイから区別されることになるが、ほとんど「米」の字を書くこと、米内沢、米内川のように沢や川をともなう地名が多いことから、「余納」の可能性にはかなり疑問がある。ただ、中では福島県耶麻郡熱塩加納村の与内畑などは余納の畑かもしれない。

ナイの粗分布限界以南(以西)にもナイのつく地名は全国的に散見するが、擬似アイヌ語として説明のつくものがほとんどであることは注目すべきであろう。東北地方には語形全体がアイヌ語で解け、同じ地名型が北海道にもあるも

のが少なくなく、幌内、本内、平内、比内、佐比内、糠内などは北海道にも東北にもある。しかしナイの密な分布以南ではこの種の北海道と同じ地名型は全く現われない。あるのは音読語に続くためにナイと音読している院内、山内、庄内、郷内、城内などであり、河をコーとよむことが音読語とまぎれてか、河内とよみ、それにあて字をした神内、高内、咥内などが見られるぐらいである。高知市ももと河中であった。咥内も高知県に見られるが、「咥」(キ・テツ)をコウとよむのは、口偏からの類推であろう。穴内、金内などは、あるいはアナ、カナとナで終る前接語の影響でナイとよんだものか。近くの地名を尾之内、尾内と読み分けたものもあった。以上のように関東以西のナイ地名はほとんど「内」の意味で説明のつくものであって、音読語につかず、今挙げた類型で説明のつかない地名は、鈴内、日内、井内など、ごくわずかである。すなわち関東以西にはアイヌ語系のナイは認めにくい。

なお、ここではアイヌ語系のナイを限定的に考えたが、巨視的には八重山諸島に与那国島の鬚川(現在の比川)の用字をはじめ、租納などの～納がいくつかあることと関連があるのかどうか。また、知里の、

> pet は本来のアイヌ語で、nay の方は外来らしい。川を古朝鮮語でナリ、或は現代語方言でナイといっているのと関係があるのかもしれない。(21)

という問題提起などについて検討が深められる必要がある。

五　これからの地名研究

従来の地名研究とくに語源研究によく見られた欠陥は、現代の語形からいきなり命名当時の地名の語義を考えるという、手続きの短絡が多かったことと、日本語の歴史の中で語源を十分に検討せずに、安易に外国語で解釈する語源解が多かったことである。しかも日本語に古語の認識がとかく欠けたのと同様、比較する外国語もその現代語辞典に

よって解いているものが多く、その場合は二重の短絡が行われていることになる。もちろん近隣の諸言語との幅の広い比較によってつながりの可能性をできるだけ探ることは必要である。しかし比較する二言語のそれぞれの言語史をふまえ、民族史的、文化史的な相互交渉の跡が裏づけられなければ、地名上の単なる似かよいは問題とならないであろう。また、日本語で解釈できるもの、その地名の発生年代が日本語で語源解釈できる範囲にあるものについては、あえて外国語を持ち出すまでもない。

外国語系の地名でも、それが日本語化しているものについては、日本語としての語義がその土地にどう表わされているかをまず精査すべきであろう。たとえばナラの地名は前出のナルと同様「平らにならす」という語が古くからあるように「平坦」の意であるが、朝鮮語で国土、国都を意味するという解がよく行われている。もしそうであっても、その意味は平城京にはあてはまるかもしれないが、各地の小地名にみられるナル・ナラは、すでに日本語化して平(なら)の意味になった語が各地の平地に与えられたもので、そのそれぞれがすべて朝鮮語で名づけられたもの、国土、国都の意味、と解くことはできないし、ナルの地名所在地のすべてに帰化人がいたという確証もないはずである。平城京でも「平」の字が使われているのは、すでにナラスなどの語義の連想があったからの用字であり、各地の小地名はおおむね平坦地ゆえにナル・ナラが与えられたものである。鳥取県名和町押平(おしなら)など「平」字を書いた例も各地にあり、「緩(なる)い」という形容詞もできている。ついでに付言すれば、変遷資料にあたることによって、現在ナラの語形であるものをすべて歴史的なナラ型にとりこまない弁別が必要である。たとえば、千葉県の習志野(ならしの)は、一八七三年に行われた陸軍の演習の際、演習練兵の意味で名づけられた現代地名である。

わからない地名のあて推量よりも、わかる地名の歴史的変遷の型を整理して、しだいにわからない地名に地名型を適用していくという接近が必要である。そのためにまず必要なのは、快刀乱麻を絶つような語源考ではなく、各時代、各地域の地名変遷資料が地道に整備され、地名研究に活用されることである。地名の文字、発音、合成などの変遷を

通観する場合、『和名抄』郡郷名などの大地名については、平安時代以後の変遷をかなり知りうる資料集ができているが、各地の小地名や平安時代以降に成立した地名などについては必ずしも資料がよく整理されていない。史書だけでなく、各種の文学作品や地方文献などから、もっと各時代各地域の地名用例が集成されなければならない。個々の地名の語義を考えるにあたって、検討できる地名例をできるだけ増やし、多くの類例を参照して誤りのない解釈ができるようにするためには、既成の地名資料だけでは不十分である。より細かな、小字地名、さらには通称伝承されてきて文字の与えられていない微細地名なども収集記録することがあわせて必要である。町名改正や農地の分合によって、伝承小地名が崩壊しつつある今日、そのような作業は地名の保存・記録の上からも急務である。固有名詞だけでなく、各地域について地形語の方言もくわしい採集が必要である。

多くの類例によって地名型を把握することもまた、安易には適用されるべきでない。その地名型にあてはまる地名かどうかの判定は、個々の事例について最終的には現地の観察から下されるべきものであり、地名型という類型化は第一段階としての、可能性の予察である。可能性は幾通りにも考えられる場合が多い。そのうちのどれがもっとも具体的にあてはまるかは、その地名の変遷資料があれば一番確実であるが、その手がかりがない場合には、その地名型の分布、その土地の地形や歴史の立地条件、住民のその地名に対する伝承や意識などが、その地名の言語的特徴とともに、総合的に把握されてはじめて確実なものとなる。地名の起源をたしかにつかむためには、そのような類型化による可能性の検証と、現地研究による具体性の検証の双方が要請される。地名研究が言語学、地理学、歴史学、地方史学、民俗学、民族学、考古学など関連諸学との総合研究を必要とするゆえんである。

地名はその原語形や原義が推定復元された場合でも、その成因が解明されなければ、関連諸学にとっても研究資料として役立たないし、言語学にとっても、その原形がたしかなものかどうかを真に確定することができない。V・ニコノフはそのような観点から、語源学（エチモロジー）がとかく語形のみを問題としてきたのに対して、次のように述べている。(22)

たとえばヴォルガ川の流域にGorchikha, Gorchetchnyなどの地名があるが、語源研究の結果「粘土のつぼ」を意味するgorchokという原形に共通にさかのぼることはできる。それではそこでつぼが生産されたか、というと否である。Gorchikhaではつぼが取引きされた。Gorchetchnyではそのような市はなかった。酔うと女房のつぼを毎回割ってしまう男がいたことから名がついた。二つの地名の起源がgorchokという語形であることのみを知りえても何になろうか。そのような生半可な知識では、つぼの生産や取引きの地という、関係のない誤った結論に導かれやすい。語源学はなぜ名づけられたかを説明しなかった。重要なのは語源学ではなく原因論(病原学)である。すなわち地名の形成を支配する原因の説明である。

地名の型をつかむとともに、個々の事例についての現地に即した検証を関連の歴史学その他の諸学との協力によって行わなければ、具体的な地名の起源は明らかにされない、ということがここでも示されている。たとえば、アイヌ語地名でウェン・ペッ(悪い川)という語源が得られても、なぜ悪いのか、交通の便が悪いのか、水質が悪いのか、何か悪い事件があったのか、などが具体的にその地名に即して説明されなければ、単に語源の辞書的な意味が得られても、起源の真の解明にはならないわけである。

(1) 井手至「古代の地名と上代語」(『言語』五巻七号、一九七六年)一二―一三頁。
(2) 吉田金彦『日本語語源学の方法』大修館、一九七六年、二九九頁。
(3) 「日下をクサカとよむのは「日の下の→くさか」という地理的条件による枕詞であった。」西宮一民『古事記』桜楓社、一九七三年、二四頁。初出『枚岡市史 二』一九六五年。
(4) H. Krabe, Sprach und Vorzeit, Heidelberg, 1954.(下宮忠雄訳『言語と先史時代』紀伊国屋書店、一九七〇年、四八―五〇頁。
(5) 金沢庄三郎「日鮮古代地名の研究」(『東アジアの古代文化』一号、一九七四年)二二六―二三九頁。初出『朝鮮総督府月報』

一九一二年。
(6) 鏡味完二『日本の地名』角川新書、一九六四年、五九―六一頁。
(7) 鏡味完二『日本地名学・地図篇』日本地名学研究所、一九五七年、第一図(森)、第三図(岳)、第五図(セン)による。
(8) 御園生翁甫『防長地名淵鑑』防長倶楽部、一九三一年、七六頁。
(9) 柳田国男「峠に関する二三の考察」(『柳田国男集 二』筑摩書房、一九六二年)二二六頁。初出『太陽』一九一〇年。
(10) 知里真志保『地名アイヌ語小辞典』楡書房、一九五六年、九〇―九一頁。
(11) NHK北海道本部編『北海道地名誌』北海教育評論社、一九七五年、七三〇頁(地名解説、更科源蔵)。
(12) 同上、七四四頁。
(13) 同上、三二二頁。
(14) 同上、七二八頁。
(15) ジョン・バチラー『アイヌ語より見たる日本地名研究』(改訂版)バチラー学園、一九三五年、七一頁。
(16) 金田一京助「北奥地名考」(『金田一京助選集 I』三省堂、一九六〇年)三九〇―三九一頁。初出『金沢博士還暦記念東洋語学の研究』三省堂、一九三二年。
(17) 山本直文『日本アイヌ地名考』私版、一九六五年、付録日本アイヌ地名小辞典一四頁。
(18) 鏡味完二「地名の研究――アイヌ語・非アイヌ語の識別法――」(『地理学評論』二七巻四号、一九五四年)一五〇頁以下。
(19) 新野直吉・山田秀三編『北方の古代文化』毎日新聞社、一九七四年、九六頁以下。
(20) 鏡味完二『日本の地名』(前掲)四七頁。
(21) 知里真志保、前掲書、六四頁。
(22) V. Nikonov, "L'étymologie? Non, l'étiologie!", Revue Internationale d'Onomastique 12–3, 1960, pp. 161–166.

地名語源辞典および入手しやすい地名概説書をあげておく。
山中襄太『地名語源辞典』校倉書房、一九六八年。
柳田国男『地名の研究』(一九三六年初版、古今書院)角川文庫、一九六八年。

藤岡謙二郎『日本の地名』講談社現代新書、一九七四年。
山口恵一郎編著『地図と地名』古今書院、一九七四年。
松尾俊郎『日本の地名』新人物往来社、一九七六年。
池田末則・松尾俊郎・鏡味明克・楠原佑介『地名の知識一〇〇』新人物往来社、一九七七年。
鏡味完二・鏡味明克『地名の語源』角川書店、一九七七年。

〈執筆者紹介〉

風間喜代三（かざま　きよぞう）　1928年生　東京大学文学部助教授
池上二良（いけがみ　じろう）　1920年生　北海道大学文学部教授
崎山　理（さきやま　おさむ）　1937年生　大阪外国語大学外国語学部助教授
大江孝男（おおえ　たかお）　1933年生　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
田村すゞ子（たむら　すずこ）　1934年生　早稲田大学語学教育研究所助教授
西田龍雄（にしだ　たつお）　1928年生　京都大学文学部教授
佐佐木隆（ささき　たかし）　1950年生　学習院大学大学院人文学研究科博士課程
阪倉篤義（さかくら　あつよし）　1917年生　京都大学教養部教授
鏡味明克（かがみ　あきかつ）　1936年生　岡山大学教育学部助教授

岩波講座　日本語 12　日本語の系統と歴史
第12回配本　（全12巻　別巻 1）　￥2000

1978年1月9日　第1刷発行　
発行所：〒101　東京都千代田区一ツ橋 2-5-5　株式会社 岩波書店　電話 03-265-4111　振替 東京 6-26240
印刷・精興社　製本・牧製本